

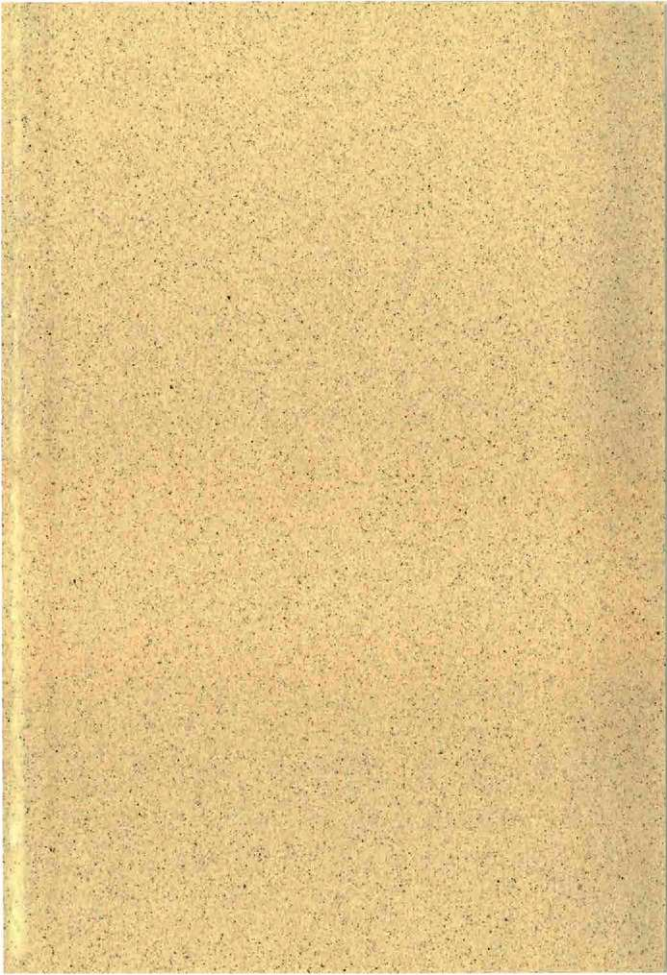
群馬県沼田市

戸神諏訪Ⅲ遺跡

沼田北部工業団地埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

沼田市教育委員会
群馬県企業局



群馬県沼田市

戸神諏訪Ⅲ遺跡

1993

沼田市教育委員会
群馬県企業局

序

古くから利根沼田地域の中核都市として繁栄してきた沼田市は、関越自動車道の開通に伴い、ますます発展しつつあります。

沼田北部工業団地は、「活力ある産業づくり」の一環として土地改良事業に伴い計画された事業で、本市初の試みでありました。

当地は、関越自動車道の建設に先立ち発掘調査された「戸神諏訪遺跡」の南に接しており、沼田市の原始・古代を考える上で特に注目すべき地域でありました。特に本地域で初の検出例となった方形周溝墓、「南院」と墨書された土器の出土をはじめ、貴重な成果を収めることができました。

本報告書が地域を知り、これからの新しい文化を創造する上で、多くの方々に寄与できることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書をまとめるにあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係者の皆様に心から厚く感謝の意を表し序文といたします。

平成5年3月

沼田市教育委員会

教育長 荻野明正

例 言

1. 本書は、群馬県沼田市町田町字土塔原における埋蔵文化財発掘調査報告書である。本遺跡は従来、公文書関係において「沼田北部工業団地遺跡」と呼称してきたが、周辺遺跡との関連を考慮し、戸神諏訪田遺跡と改称することにする。
2. 本調査は、沼田北部工業団地建設に伴うもので、群馬県企業局・沼田市教育委員会・シン航空写真株式会社（現シン技術コンサル）の3者よりなる沼田北部工業団地埋蔵文化財発掘調査団を設立し、調査を実施した。
3. 発掘調査は、平成元年5月1日より平成元年12月4日まで実施した。また、出土遺物の整理・報告書作成作業は、平成2年4月1日より平成4年10月30日まで実施した。

4. 発掘調査組織は以下の通りである。（調査時点での職名）

発掘調査団長	福島正巳（沼田市助役）
発掘調査主体	群馬県企業局
発掘調査指導	赤山容造（群馬県企業局開発課・文化財保護課課長補佐）
発掘調査担当者	小池雅典（沼田市教育委員会社会教育課主事）
主任調査員	宮塚義人（シン航空写真文化財調査室室長）
調査員（調査）	岡本範之（シン航空写真文化財調査室主任技師）
調査員（計測）	芳賀俊博（シン航空写真航測部技師）
同	阿部福治（シン航空写真文化財調査室技師）
発掘調査作業員	竹本金作 小林貞次 原文江 根岸里子 曾田 正 吉野みち子 笛田恭一 岡村美喜男 阿部久雄 青木とき 牧野せき子 牧野岡次 牧野とも枝 牧野栄次郎 田中千代 大嶋 玉 大嶋義友 生方もく 七五三木康三 七五三木でん 松井ふく 金子ハナ子 片野千之助 金子ふじ 赤井美根子 戸部富子 大島ふみ子 大竹とく 山田ヒデ 堀上友治 小野里あさ 林 誠司 斉藤睦子 渡辺房江 羽鳥みつ 小海ひさ子 松井弘子 高橋美代子 石田金蔵 竹本千代子 石井朝男 松井あさの 牧野信子 石田浪治 植栗実也 大島善司 牧野忠義 角田初代 茂木純子 小林衛位子（順不同・敬称略）

遺物整理調査員	三浦京子（シン航空写真文化財調査室主任技師）
同	長谷川徹（シン航空写真文化財調査室主任技師）
同	竹本実希子（シン航空写真文化財調査室技師）
同	石井幸子（シン航空写真文化財調査室技師）
同	木嶋裕子（シン航空写真文化財調査室主事）

遺物整理作業員 阿部あけみ・中里洋子・竹内典子・島田敏子・安達好子・若見文恵・小林加代子・竹内巳代子

5. 本報告書の遺物整理は、三浦京子が作業員を指導して実施した。全体の構成・編集は岡本範之が行い、石井幸子・木嶋裕子・竹本実希子がこれを補佐した。
6. 本報告書の執筆担当は、以下の通りである。

小池雅典 第I章第1節

岡本範之 第I章第2節・第II章第1・2節・第III章第2・3・4節・第IV章第1・2・4節

三浦京子 第III章第5節・第IV章第3・5節

長谷川徹 第III章第1節2・第3節7

早田 勉 第IV節第6節

なお、第IV章第6節は古環境研究所の早田勉氏に依頼し、執筆していただいた。記して感謝申し上げる。

石器の石材鑑定は飯島静男氏（群馬県地質学協会会員）に依頼した。

7. 本調査における図面・写真・遺物等は、沼田市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査・遺物整理では、以下の方々にご指導・ご助言を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。

佐藤明人（群馬県教育委員会文化財保護課）能登 健・坂口 一・桜岡正信・山口逸弘・原雅信（剱群馬県埋蔵文化財調査事業団）大塚昌彦・小林良光（渋川市教育委員会）鈴木敏中（静岡県三島市教育委員会）帝京大学山梨文化財研究所 小林建材工業（順不同・敬称略）

凡 例

1. 本書の遺構・遺物の指示は以下の通りである。

(1)遺構挿図の縮尺（縮尺の異なるものは明記した。）

・住居址 1/80 ・土坑 1/80 ・溝 1/160 ・周溝墓 1/80

(2)遺物挿図及び写真図版の縮尺（縮尺の異なるものは明記した。）

・弥生時代後期末～平安時代の土器 1/4 ・石器・土製品 1/2

・鉄製品 1/2

(3)目次中のA-1号住居は、A区1号住居を示す。

(4)写真図版中の住居空中ベア写真は、ステレオ写真であり、立体視できる。

(5)スクリーン・トーン

1. 図中のスクリーン・トーンは次のことを示す。



袖部粘土



灰軸



丹彩

2. 遺構断面図中の黒塗りは、“石”を示す。

(6)遺物挿図

・土器実測図中にみられる“←”はヘラケズリの方角を、実線はその範囲を示す。また波線は口クロ目を示す。

・遺物の番号は遺構毎の通し番号とし、遺構番号と遺構毎に付した番号を一つでない番号よりなる。本文・挿図・表・写真図版とも一致する。

(7)土器観察表（弥生時代後期末～平安時代）

・色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 日本色彩研究所 色票監修 1992版に基づいている。

(8)遺構観察表（第三章第5節）

・各遺構の計測値・特徴を観察表としてまとめた。なお本文中の煩瑣を避けるため、住居内ピットの計測値に関しては観察表にのみ記載してある。

(9)住居・掘立柱建物の方位は、真北を北としている。

目 次

序 例 言 凡 例 目 次

第I章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯	4
第2節 発掘調査の経過	5

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地理的・歴史的環境	7
第2節 層 序	9

第III章 遺構と遺物

第1節 縄文時代	16
第2節 弥生時代後期末～古墳時代前期	27
第3節 平安時代	90
第4節 遺物観察表	258
第5節 遺構観察表	300

第IV章 調査の成果と課題

第1節 弥生時代後期末～古墳時代前期の土器編年	314
第2節 弥生時代後期末～古墳時代前期における遺構と集落の変遷	332
第3節 平安時代の土器編年	343
第4節 平安時代における遺構と集落の変遷	354
第5節 「宮田寺」について	364
第6節 遺跡を中心とした地理学・地質学的考察	370

写真図版

本文掲載頁・写真図版目次

	頁	遺構写真	遺物写真		頁	遺構写真	遺物写真
縄文時代				C-84号住居	76	PL19	PL81
A-5号土坑	16	PL1	—	C-85号住居	79	PL19	PL81
C-11号土坑	16	—	—	C-90号住居	81	PL20	PL81
C-12号土坑	17	PL1	—	C-91号住居	83	PL21	—
C-13号土坑	17	PL1	—	A-1号円形周溝墓	84	PL21	PL82
C-14号土坑	17	PL2	—	C-1号方形周溝墓	86	PL22	PL82
D-17号土坑	16	PL2	—	A-1号土坑	88	PL22	—
D-18号土坑	17	PL2	—	A-2号土坑	88	PL23	PL82
D-19号土坑	17	PL3	—	C-15号土坑	88	PL23	—
D-20号土坑	17	PL3	—	奈良時代～平安時代			
弥生時代後期末～古墳時代前期				A-1号住居	90	PL24	PL83
C-26号住居	27	PL4	PL68	A-2号住居	92	PL25	PL83
C-34号住居	29	PL4	PL68	A-3号住居	94	PL25	PL83
C-36号住居	31	PL5	PL69	A-4号住居	97	PL26	PL84
C-44号住居	34	—	—	A-5号住居	99	PL27	PL84
C-46号住居	34	—	—	A-6号住居	101	PL27	PL85
C-48号住居	34	PL6	PL69	A-7号住居	103	PL28	PL85
C-51号住居	36	PL7	PL69	A-8号住居	104	PL28	PL86
C-52号住居	38	PL7	—	A-9号住居	106	PL29	PL86
C-53号住居	39	PL8	PL70	A-10号住居	108	PL29	PL87
C-57号住居	42	PL8	PL71	A-11号住居	109	PL30	PL87
C-58号住居	45	PL9	PL72	A-12号住居	112	PL30	PL88
C-62号住居	47	PL10	PL73	A-13号住居	114	PL31	PL88
C-64号住居	49	PL10	PL73	A-14号住居	115	PL31	PL88
C-65号住居	52	PL11	PL74	A-15号住居	116	PL32	PL88
C-66号住居	53	PL12	PL74	A-16号住居	121	PL32	PL89
C-67号住居	55	PL12	PL75	A-17号住居	119	PL33	PL90
C-68号住居	57	PL13	PL76	A-18号住居	126	PL34	PL90
C-69号住居	59	PL13	PL76	A-19号住居	128	PL34	PL91
C-72号住居	64	PL15	PL77	A-20号住居	130	PL35	—
C-73号住居	66	PL15	PL77	A-21号住居	131	PL35	PL91
C-78号住居	69	PL17	PL78	A-22号住居	133	PL36	PL91
C-79号住居	71	PL17	PL79	A-23号住居	135	PL36	PL92
C-80号住居	75	—	PL80	A-24号住居	137	PL37	PL92
C-81号住居	77	PL18	PL80	A-25号住居	138	PL37	PL92
				C-27号住居	144	PL38	PL93

C-28号住居	141	PL38	PL93	D-94号住居	228	PL56	PL112
C-29号住居	147	PL38	—	D-95号住居	230	PL57	PL112
C-30号住居	148	PL39	PL94	D-96号住居	232	PL57	PL112
C-31号住居	150	PL39	PL94	D-97号住居	233	PL58	PL112
C-32号住居	154	PL40	PL95	D-98号住居	236	PL58	—
C-33号住居	158	PL40	PL96	D-99号住居	237	PL59	—
C-35号住居	160	PL41	PL96	D-100号住居	238	PL59	PL113
C-37号住居	164	PL42	PL97	A-1号掘立柱建物	241	PL60	—
D-38号住居	166	PL42	PL97	A-2号掘立柱建物	241	PL60	—
C-39号住居	168	PL43	PL98	A-3号掘立柱建物	242	PL60	—
C-40号住居	170	PL43	PL98	C-4号掘立柱建物	242	PL61	—
C-41号住居	173	PL44	PL99	C-5号掘立柱建物	243	PL61	—
C-42号住居	168	—	—	C-6号掘立柱建物	243	PL61	—
C-43号住居	174	PL44	PL99	C-7号掘立柱建物	244	PL62	—
C-45号住居	176	PL45	PL99	C-8号掘立柱建物	244	PL62	—
C-47号住居	178	PL45	PL100	C-9号掘立柱建物	245	PL62	—
C-49号住居	184	PL46	PL101	C-10号掘立柱建物	245	PL63	—
C-50号住居	186	PL46	PL102	C-11号掘立柱建物	246	PL63	—
C-54号住居	187	PL47	PL102	C-12号掘立柱建物	247	PL63	—
C-55号住居	189	PL47	PL103	C-13号掘立柱建物	246	PL64	—
C-56号住居	191	PL48	PL103	A-3号土坑	248	PL64	—
C-59号住居	192	PL48	PL103	A-7号土坑	248	PL64	—
C-60号住居	195	PL49	PL104	A-8号土坑	248	PL65	—
C-61号住居	199	PL50	PL105	C-9号土坑	248	PL65	—
C-63号住居	202	PL50	PL105	C-10号土坑	248	PL65	—
C-70号住居	204	—	—	C-16号土坑	248	PL65	—
C-71号住居	205	PL51	PL106	A-1号溝	250	PL66	—
C-74号住居	208	PL51	PL106	A-2号溝	250	PL66	—
C-75号住居	204	PL51	—	A-3号溝	250	PL66	—
C-76号住居	210	PL52	PL107	A-1号棚列	253	—	—
C-77号住居	209	PL52	—	C-2号棚列	253	PL67	—
C-82号住居	212	PL53	PL107	C-3号棚列	253	PL67	—
C-83号住居	214	PL53	PL108	C-4号棚列	254	PL67	—
C-86号住居	217	PL54	PL109	C-5号棚列	254	PL67	—
C-87号住居	218	PL54	—	鉄製品	—	—	PL114
C-88号住居	219	PL54	PL109	遺構外出土遺物	255	—	PL116
C-89号住居	217	PL55	—				
D-92号住居	222	PL55	PL110				
D-93号住居	226	PL56	PL111				

戸^と神^{かみ}諏^す訪^わIII遺跡

第 I 章 発掘調査の経緯と経過

第 1 節 発掘調査に至るまでの経緯

第 2 節 発掘調査の経過

第 II 章 遺跡の立地と環境

第 1 節 遺跡の地理的・歴史的環境

第 2 節 層序

第 I 章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

沼田市は、地元技術労働力を有効活用できる優良企業を誘致するため、沼田北部工業団地の造成を群馬県に要請し、これを受けた群馬県企業局が造成を計画した。

用地は、関越道車道に南接した沼田市町田町字土塔原1649番地他で、約80,000㎡が予定された。当地は、縄文時代から平安時代にかけて150軒以上もの竪穴住居跡が検出された戸神諏訪遺跡(現関越道)及び、平安時代の竪穴住居跡が検出された土塔原遺跡(現市道72号線)に接しており、この地が遺跡地であることが予想された。

この取り扱いについて群馬県企業局・群馬県教育委員会・沼田市で協議した結果、沼田市教育委員会が試掘調査を実施し、遺跡の範囲を確認することとなった。試掘調査は用地全域を対象とし、昭和63年12月に実施した。20m間隔で方眼状にトレンチを設定し、遺構、遺物の確認を行ったところ約26,500㎡に、縄文時代から平安時代にかけての遺構、遺物が存在することを確認した。以上の結果から、更に協議を重ねた結果、現状保存する部分を除いた26,000㎡について発掘調査を実施することとなった。

以上の結果を経て発掘調査を実施することとなったが、沼田市教育委員会では他に県営ほ場整備事業沼田北部地区・沼田西部地区及び土地改良総合整備事業秋塚地区等に伴う発掘調査が予定されており、現体制で調査を実施することは不可能であった。このため、沼田市・群馬県教育委員会・群馬県企業局で調査体制について協議した結果、群馬県企業局・沼田市・シン航空写真株式会社により調査団を組織して発掘調査にあたることとなった。名称は「沼田北部工業団地埋蔵文化財発掘調査団」とし、平成元年4月1日付けで結成された。

(調査団組織)	団 長	沼田市助役	福島 正 巳
	副団長	群馬県企業局副局長	大 木 成 明
理 事		沼田市教育委員会教育長	佐 藤 国 利
		教育委員会社会教育課長	藤 井 章 二
		〃 文化財担当職員	小 池 雅 典
		群馬県企業局開発課長	藤 多 洋 次
		〃 文化財担当職員	赤 山 容 造
		シン航空写真(株)常務取締役	富 沢 正
監 事		〃 文化財調査室長	宮 塚 義 人
		沼田市経済部活性化対策室長	武 井 博
		企業局開発課総括課長補佐	阿 部 千 明

第2節 発掘調査の経過

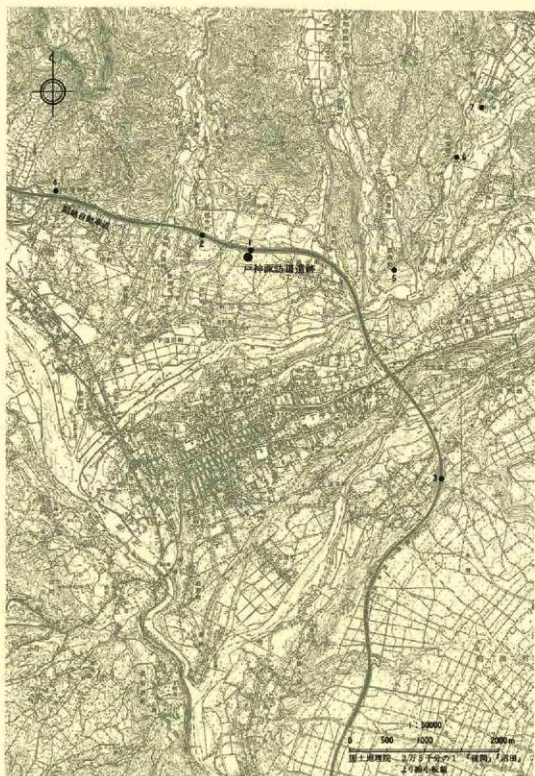
本説では、戸神諏訪Ⅲ遺跡の本調査着手、調査経過について触れておきたい。戸神諏訪Ⅲ遺跡は、沼田市町田町にあり関越自動車道に沿って存在している。調査地の形態は逆Lの字形をなし、調査面積は、約26000㎡である。調査の便宜上、調査地区を4つの地区に分割した。すなわち最も東側の地区をA地区、その西側をB地区、B地区の西側をC地区、C地区の南側をD地区とした。本調査の進行途上で、B地区が緑地として保存されるように工事計画が変更されたため、調査対象地から除外となった。(B地区は地区名としてはそのまま欠番とした。)

本調査は、平成元年5月1日より開始した。現状地形は桑畑が主であった。まずA地区より抜根と表土除去を開始する。現地表面より40cm程下に暗黄色ハードローム層があり、これに確認面を設定し表土を除去する。A地区の表土除去の進展と共に、平安時代と思われる住居群を確認した。並行して表土をB地区に運び、盛土・整地し事務所設置の準備を行う。5月10日に事務所設置完了。

調査の方法は、調査の時間短縮を図るために、写真測量を全面的に活用し、住居址・掘立柱建物址・溝の平面図及び全体図作成は、写真測量により対応した。これより小規模な遺構の土坑・任意ピットやセクション・エレベーション関係・微細図等は現地で手実測によって作成した。なお遺構のナンバーは、A・C・D地区の区別を付けることなく、通しナンバーで命名している。

5月15日より作業員を30名前後投入し、A地区の東側より平面精査を開始する。並行してA地区の検出住居を掘り下げ始める。A地区の東端には隣接の戸神諏訪遺跡より確認された寺院址の溝がわずかにかかっていたが、同時期にA地区の東隣を沼田市教育委員会が園場整備関連の埋蔵文化財調査を行っており、かつ同溝の主要部分が同教委側に存在したため、この遺構に関しては沼田市教委側に調査を委譲することとした。(戸神諏訪Ⅱ遺跡) A地区に検出された遺構は、重複関係の少ない平安時代の住居を中心としたものであった。6月21日、群馬県議会議員視察。7月3日、D地区の桑根抜根完了。引続きC地区の抜根を開始する。7月24日、C地区の平面精査を開始する。C地区は、A地区と異なり、弥生末古墳前期の住居が多く検出され、しかも平安時代の住居と多く重複関係をもつものであった。7月26日、事務所を移転する。C地区とD地区の間の谷部を盛土・整地し事務所の移転作業を完了する。7月31日、A地区調査完了。8月24日、本遺跡に関わる重機による表土除去作業をすべて終了する。

11月8日、D地区平面精査開始。遺構掘り下げ開始。D地区は、遺構のあり方が非常にまばらで、平安時代の住居址が重複関係のない状態で検出された。11月29日、C地区調査完了。11月30日、C・D地区の航空写真撮影完了。12月4日、D地区調査完了。現地作業の全てを完了する。



第1図 戸神彈防III遺跡と周辺の遺跡

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は、沼田市町田町にあり、字名では土塔原に属する。遺跡の北側には、標高765メートルの戸神山があり、西側に四釜川が深い溪谷を造っている。また南側には薄根川が東西に流れ、東側は発知川が溪谷をなしている。遺跡付近の地形は、戸神山の緩やかなスロープライン上にあり、北から南に緩やかに下っている。遺跡付近の標高は420mである。遺跡地は、関越自動車道がほぼ東西に走り、それに沿って逆Lの字形をなしている。

本遺跡は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査した戸神諏訪遺跡のすぐ南隣に位置しており、同じ台地上に位置している点で両者を一つの集落として認識することができる。

ここでは本遺跡の主体をなす時期である弥生時代後期から平安時代にかけての歴史的環境について概観してみたい。遺跡を中心とした詳しい地理的・地質的概要については、第IV章第6節の早田勉氏の考察を参照されたい。

群馬県下の弥生時代後期は、中北西部の樽式土器文化圏、東部の赤井戸式土器文化圏に大別される。沼田周辺は樽式土器の文化圏に包含される。樽式土器は、弥生中期の竜見町式土器の発展形態で、長野県の箱清水式と強い類縁関係を持つ。文様は櫛描文を多用し、器種は比較的多様である。この樽式土器をメルクマールとする樽式土器文化は、主に山岳地帯周辺に分布し、後期中葉から後半にかけて遺跡数の増大が顕著となる。

本遺跡の周辺では、隣接の沼田市戸神諏訪遺跡・戸神諏訪Ⅱ遺跡(1)、同石墨遺跡(2)、昭和村永井宮前遺跡(3)、月夜野町村主遺跡(4)などに同時期の遺構が見られる。(以下、第1図「周辺の遺跡」参照)

この樽式文化圏は、群馬県の南東部に成立した石田川文化の影響を受け、これと融合することによって古墳時代に移行する。

石田川文化は、石田川式土器をメルクマールとする文化で、東海地方西部と強い型式的類似性があり、東海地方の文化的影響のもとで成立したと考えるより、かの地からの集団植民的な移動によってもたらされたと考えたほうが合理的な面が多い。群馬県の東部地方や前橋、高崎市周辺には石田川式土器に先行する弥生集落が希薄で、いわば土地の空白地帯に石田川の文化を担った人々が入植、開拓を開始したと考えられる。この集落地形分布のあり方からして開拓の主眼は、水稻耕作ではないかと推定される。

これに対して、群馬西北部の山間地帯の樽式土器文化においては、樽式土器の伝統が強く残ると共に新しい土器形式を採用しているようであり、樽式土器文化の変容が認められる。つまり東毛や前橋・高崎周辺の新興勢力による新文化の放射・拡散が、在地の樽文化の変容を促し、古

墳文化に移行したと考えられるのである。だが、この期に墳文化がそれまで影響を受けることの少なかった赤井戸式の特徴も見出せることからするならば、この変容は単純なものではなかったらしい。

この地方では、樽式土器の集落と石田川期の集落とは連続しているが、石田川期以降の和泉期との間には断絶する集落がほとんどである。和泉期段階で相当に大規模な集落立地の変化が起こったものと考えられる。この変化の理由はおそらく、生産基盤の主体が「畑作」であった墳文化が、生産性の高い石田川文化の「水稻」生産に触発され、組織的・技術的にそれを受け入れてゆく中で、より水稻耕作に適した地に自らの集落を移動させたと考えるべきであろう。次の鬼高期においては、集落の検出例は少ないが、沼田盆地の北側においていくつかの後群集墳が存在しており（奈良古墳群(5)・秋塚古墳群(6)・天神古墳群(7)）、集落の主体はこの周辺に存在したと推定することが可能である。この鬼高期の集落立地は、その前段階である和泉期の集落の位置を示唆しているものと考えて良い。

律令期に至ってこの地に利根郡が置かれ、四郷が成立した。渭田（ぬまた）、男信（なましな）、笠科（かさしな）、呉桃（なぐるみ）である。このうち渭田は現在の沼田市付近、男信は川場村生品付近、笠科は片品村及び片品川流域地方、呉桃は月夜野町名胡桃付近に比定される。これらの地区はいずれも古墳時代後期において群集墳が存在していることから鬼高期の集落の系譜線上としてこれをとらえることができよう。だが、奈良時代以降にはこれまで見られなかった新しい様相を見せ始める。

まず奈良時代後半より開始される集落の形成現象である。これまでに調査された遺跡から、この期にはかなり広く集落が展開し、山間部に広範囲な開拓が進行したことを推定させる。この現象はおそらく、八世紀中葉に相次いで発令された三世一身法、恵田永世私財法に触発された王臣家・富豪層が開墾に乗り出したことを示唆している。

また月夜野町月夜野古窯址の開窯、昭和村森下に比定される利根郡衙の存在などの登場も新たな時代の開始を感じさせている。特に月夜野古窯址群は、7世紀末に開窯し、10世紀まで瓦・須恵器を広く利根郡・吾妻郡に供給している。瓦はいずれにしても、それまでのこの地方の土器生産が自給自足的なものであったものが何ゆえに広範囲な一元的供給を開始したのかという問題は、需給のバランスという経済現象をまったく無視した単に生産体制の質的向上という観点からのみ考察されるべきでなく、供給対象側の変化、即ち平安期以降における集落の激増化に対応したもののという観点から論じてみる必要性があるように思われる。

9世紀以降の律令の弛緩期には、戸神課訪遺跡にみられるように在地集落がイニシアチブを所有すると思われる地方寺院の建立が認められ、この現象はそれまで官衙や有力豪族が主体的に関与していた仏教思想とその施設が、9世紀の段階で民衆の中にその思想が確実に根をおろしたものとして評価できると思われる。しかしながらその思想の内容や寺院をめぐる集落の関わり等の解明は今後の課題となるであろう。

第2節 層 序

標準土層の採取地点は、A地区の北東側の調査限界地点である。

表土より確認面であるハードローム層まで4層に分層された。その詳細は以下の通りである。

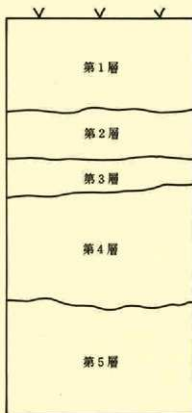
第1層 黒灰色土 耕作土である。

第2層 黒色土 5mm～30mmのF P及び小粒子を主体とする層である。粘性・しまりなし。

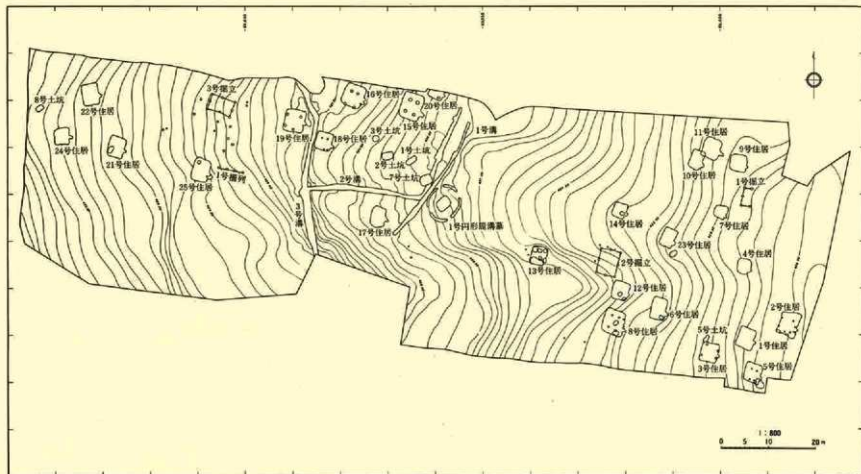
第3層 黒褐色土 きめ細かな黒褐色土が主体。上半部にF P少量含む。粘性なし・しまり強。

第4層 第3層とよく近似する。ほとんど純粋な黒褐色土である。第3層より若干明るい。粘性なし・しまり強。下層にロームとの漸位層がある。

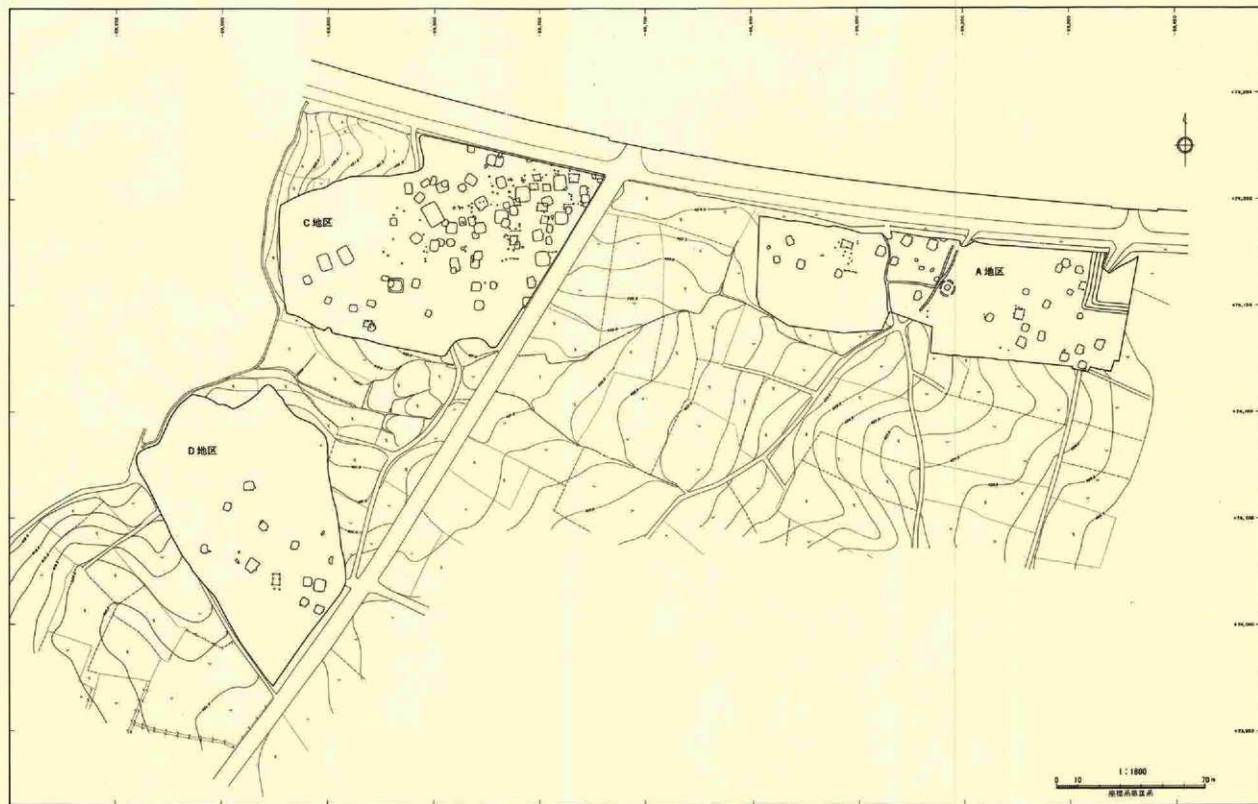
第5層 黄褐色土 ハードローム層である。明黄色をなす。粘性あり。しまり強。



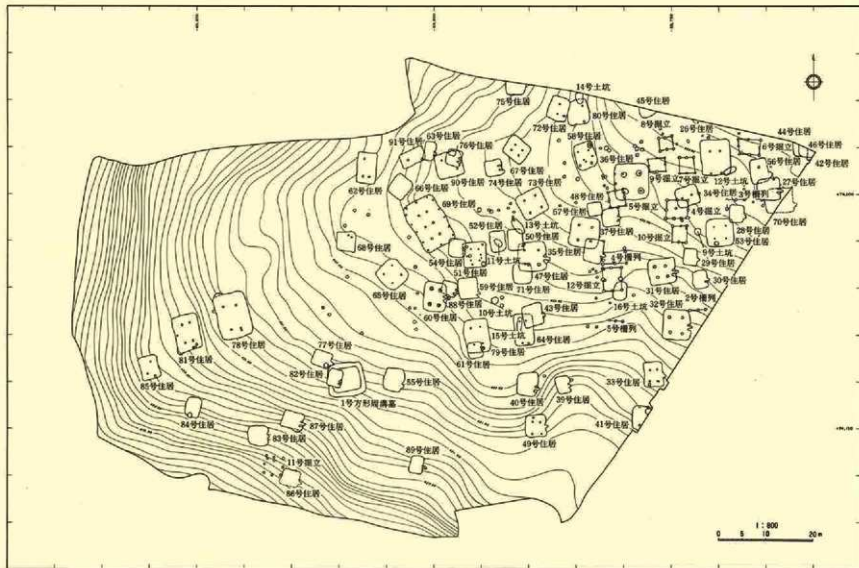
第2図 標準層序



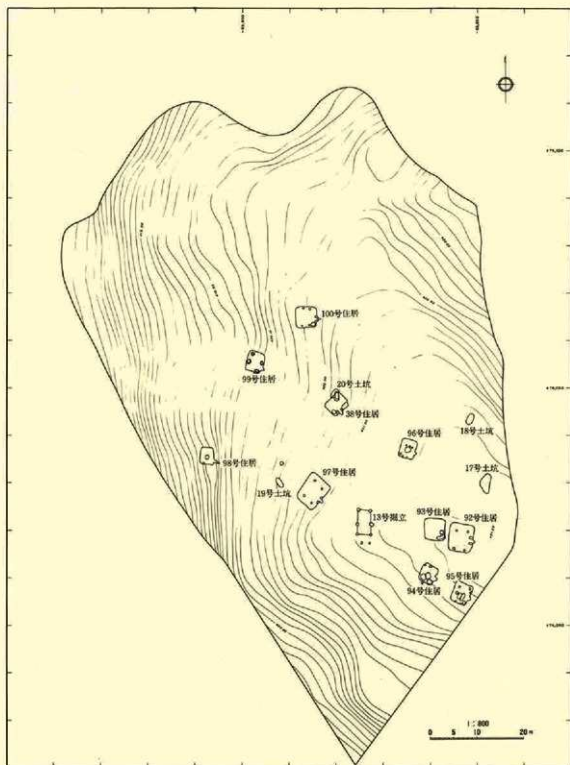
第4图 A地区全体图



第3图 道路全体图



第5图 C地区全体图



第6图 D地区全体图

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

第2節 弥生時代後期末～古墳時代前期

第3節 平安時代

第4節 遺物観察表

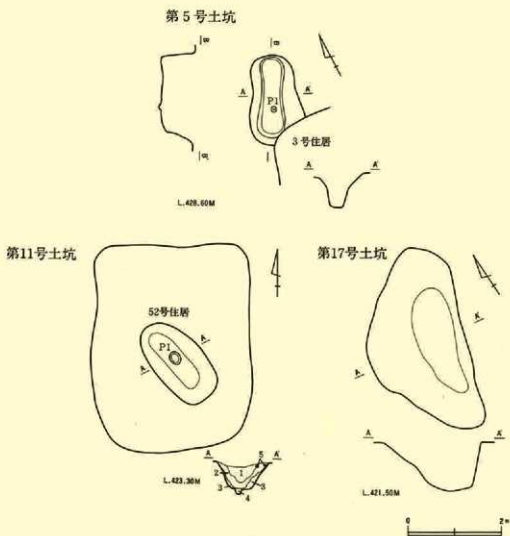
第5節 遺構観察表

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

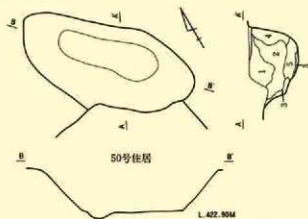
1. 遺構

縄文時代の遺構は、土坑が9基検出されたのみであった。そのほか遺構確認面上において、縄文時代前期及び中期の土器・石器を表採している。本節では、縄文関係の遺構と遺物の説明を行う。

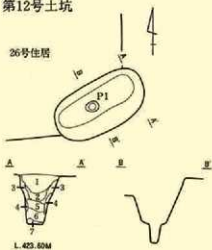


第7図 第5、11、17号土坑

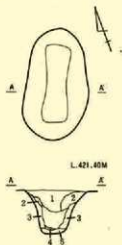
第13号土坑



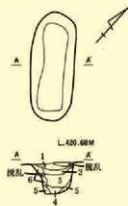
第12号土坑



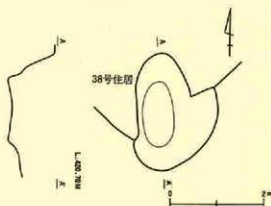
第18号土坑



第19号土坑



第20号土坑



第8图 第12、13、18、19、20号土坑

第11号土坑

- 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。明褐色粒子を含む。粘性・しまり無し。)
第2層—明黒褐色土(明黒褐色土が主体。ローム粒子、ローム分を混入。粘性・しまり無し。)
第3層—暗黄褐色土(黄褐色ローム分が主体。黒色土分を混入。粘性無し。しまりややあり。)
第4層—明黒褐色土(黄褐色ローム分と黒褐色土との混層。粘性・しまりややあり。)
第5層—黄褐色土(黄褐色ロームブロック。)

第12号土坑

- 第1層—黒色土(黒色土が主体。茶褐色の部分に斑状に含む。細かな淡褐色の粒子を含む。粘性無し。しまりあり。)
第2層—黒色土(1層と近似。淡褐色粒子は1層より多い。粘性無し。しまりあり。)
第3層—暗黄褐色土(ローム分が主体。黒色土分、白色粒子、淡褐色粒子を多く含む。粘性無し。しまりあり。)
第4層—黄褐色土(ロームブロック。硬固れか。粘性無し。しまりあり。)
第5層—暗黄褐色土(3層とほぼ同構成だが、やや明るい。粘性無し。しまりあり。)
第6層—明黒褐色土(ローム分と黒色土分との混層。白色粒子を僅かに含む。粘性無し。しまりあり。)
第7層—暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性ややあり。しまりあり。)

第13号土坑

- 第1層—茶褐色土(きめ細かい茶褐色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性無し。しまりややあり。)
第2層—明黒褐色土(黒色土が主体。1層の茶褐色土を斑状に含む。ローム小ブロックを含む。粘性無し。しまりややあり。)
第3層—暗黄褐色土(5層の黒色土とロームブロックとの混層。粘性・しまりあり。)
第4層—明茶褐色土(茶褐色土とローム分の混層。粘性無し。しまりあり。)
第5層—黒色土(きめ細かい純粋な黒色土。粘性無し。しまりあり。)

第18号土坑

- 第1層—黒色土(黒色土が主体。淡黄色粒子を含む。粘性・しまり無し。サラサラ。)
第2層—明黒褐色土(黄褐色ローム分と黒色土との混層。粘性・しまり無し。サラサラ。)
第3層—暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックが主体。黒色土を含む。粘性無し。しまりあり。)
第4層—黄褐色土(黄色ロームブロック。粘性無し。しまりあり。)
第5層—明黒褐色土(黒色土と黄褐色土との混層。粘性無し。しまりややあり。)

第19号土坑

- 第1層—黒色土(黒色土が主体。淡黄色粒子を少量含む。粘性無し。しまりややあり。)
第2層—明黒褐色土(黒色土と茶褐色土が互いに斑状をなし、淡黄色粒子を含む。粘性無し。しまりややあり。)
第3層—暗黄褐色土(ローム分・ロームブロックと黒色土との混層。淡黄色粒子を含む。粘性無し。しまりややあり。)
第4層—暗黄褐色土(3層と近似。色調は暗い。)
第5層—黄褐色土(ロームブロックが主体。黒色土分を少量含む。粘性無し。しまりややあり。)
第6層—暗黄褐色土(5層の黒色土分が多くなる。粘性無し。しまりややあり。)

第5号土坑

A地区東側に位置する。第3号住居と重複する。本土坑の方が古い。平面形は、上端で俵型をなし、下端では緩い瓢箪型をなしている。長軸長174cm、短軸長90cm、深さ75cmである。底面は凹凸が激しい。出土遺物はなし。

第11号土坑

C地区中央に位置する。第52号住居と重複する。本土坑の方が古い。平面形は、不正楕円形をなし、長軸長195cm、短軸長108cm、深さ(52号住居床面から)68cmである。底面には中央に1つのピットが空いている。出土遺物はなし。

第12号土坑

A地区北東側にある。第26号住居と重複する。本土坑の方が古い。平面形は、長い俵型をなし、長軸長203cm、短軸長109cm、深さ97cmである。底面中央には、1個のピットがある。底面は西側が下がっている。壁は垂直に立ち上がる。出土遺物はなし。

第13号土坑

C地区中央にある。第50号住居と重複する。本土坑の方が古い。平面形は、不正楕円形をなし、長軸長387cm、短軸長164cm、深さ92cmである。底面は両端が深く、壁は南側が他の壁より立ち上がり方が緩い。出土遺物はなし。

第14号土坑

C地区北端中央にある。第80号住居と重複し、本土坑の方が古い。土坑北側は調査限界にかかっている。平面形は、不正楕円形状をなし、現状で長軸長220cm、短軸長154cm、深さ96cmである。壁面・底面共に凹凸が激しい。出土遺物はなし。

第17号土坑

C地区東端にある。重複関係はなし。平面形は、三角形形状をなし、長軸長406cm、短軸長209cm、深さ108cmである。底面は軽い凹面をなし、壁は西面が緩やかで、東面が垂直である。出土遺物はない。

第18号土坑

C地区北東側にある。重複関係はなし。平面形は、不正楕円形をなし、長軸長238cm、短軸長124cm、深さ101cmである。出土遺物はなし。

第19号土坑

C地区南東側にある。重複関係はなし。平面形は、長い俵型をなし、下端は緩やかな瓢箪型をなしている。長軸長228cm、短軸長94cm、深さ65cmである。出土遺物はなし。

第20号土坑

D地区ほぼ中央にある。第38号住居と重複する。本土坑の方が古い。平面形は、楕円形状をなし、長軸長190cm、短軸長172cm、深さ100cmである。出土遺物はなし。

2. 遺物

土器

縄文時代の土器は図示したものを含め百数十点が採集されたに過ぎない。これらの土器は遺構に伴うものではなく、大部分は表採あるいはC地区表採、その他はC地区中央に位置する弥生時代末から古墳時代初頭の第51号住居址覆土と、D地区平安時代の第100号住居址覆土他から出土する。特にC地区においては中期土器が多数を占め、次いで前期さらに早期土器（1点）が発見されている。この地区では第11号土坑をはじめ7基の土坑が検出される。これらの遺構には遺物を伴う例は無く、遺構と遺物の関係を明らかにできなかったが、土坑の時期は幅広く縄文時代早期から中期の所産と考えた。しかし第5・11・12号および18・19号土坑は陥し穴に類似する遺構であるため、これらは縄文時代早期に属する可能性がある。

1は縄文時代早期の三戸式に類する土器で、細い施文具で斜格子目文と斜位沈線文が交互に施される。2は口縁部破片で口唇部は半截竹管で刻まれ、口縁部には楕円形または三角形の沈線区画内に刺突文が加わる。胎土に微量の繊維を含む。早期末の茅山式に当たる。

3～18は縄文時代前期の有尾・黒浜式の土器である。3は口縁部が直立し半截竹管による沈線施文後に同施文具による爪形文が加わる。5は半截竹管による並行沈線あるいは菱形の沈線文が施される。6は半截竹管による連続刺突文が横位・鋸歯状に施される。8～12は口縁部破片で、8・12のように口縁部がややくびれ外へ開く器形の土器と、ほぼ直立する9・10がある。なお3～18の土器は内面調整が丁寧なものとは粗雑なもの、胎土に繊維の混入が多いものと少ないものを認める。19は縄文時代前期の諸磯a式土器である。半截竹管の並行沈線をx字状につなぐ変形工字文と縦斜位の沈線に刻み目が加わる。20は同前期の諸磯b式土器である。口唇部は角張り、縄文の押捺は深く丁寧である。21は緩い山形の突起を有し、口唇部先端は平らで口縁部に三条の隆起帯を配し、それ以下には縄文が施される。諸磯a式土器に類すると思われるが、本来爪形文が施される部分が隆帯になっており、他地域の影響を持つものと考えられる。

22～33は縄文時代中期の加曾利E3式に属する。このうち22～24は縄文施文後に沈線文が加えられ、加曾利E3式土器のうちでも古いグループに属する。25は口縁部破片で、内面の整形が粗雑で輪痕を認める。横走する沈線は縄文施文後に行われているため、この土器も古いグループに属する可能性がもたれる。26は三重の沈線中央に連続する刺突文が施される。27・28は隆起帯を持つ土器で、その隆起帯の整形は丁寧で丸みを帯びる。32は口縁から胴部上半にかけて現存する。口縁部には緩やかな波状の隆起帯と、この間に楕円形の隆起帯が配される。胴部以下には縦位沈線間に蕨手状沈線が施される。縄文は楕円形の隆起帯内に横位、胴部には主に縦位に施される。33は胴部破片で、弧状あるいは渦巻状の隆起帯を認める。いわゆる「胴部隆帯文土器」と称されるタイプの土器である。

石 器

縄文時代に属するものと思われる石器を第11図～第13図—34～51に図示した。これらの石器の大部分は採得であるが、34・44・50は第83号住居址、35は第49号住居址の覆土より出土する。この両住居址は平安時代の遺構で、これらの石器を縄文時代の遺物と考え住居址出土から除外した。

34～42は打製石斧である。このうち34は分銅型、35～37は短冊型、38・39は撥型に当たる。34は刃部および挟入部と体部中央に使用痕と思われる細密な擦痕を認める。35は裏面の調整は行われず、細かな擦痕を認める。同様な擦痕は表面にも認められる。36は表・裏面に多方向からの剥離が施される。表面刃部には使用痕が認められる。37は側縁に対して頭部・刃部とも斜めに整形される。表面の刃部に使用痕を認める。38は表・裏面体部の全面に擦痕を認める。側面観は頭部が分厚く他の石斧との違いを明瞭にする。40は三角形に近い形態を有する。両側縁に敲打痕を認める。39は頭部、41・42は刃部の破片である。打製石斧は縄文時代の石器の半数を占める。石質は黒色頁岩を多用しており削器・搔器類とはほぼ同様である。

43～48は削器・搔器である。縦長剥片を用いた45・47、横長剥片を用いた43・46がある。43は表面右側縁に剥離が集中する。45は表面左側縁から下方にかけて微細な剥離を認める。46は表面下方縁に微細剥離が見られ、裏面には表面と同じ縁辺部に剥離が施される。47は右側縁に連続する微細剥離が認められ、鋭い断面を呈する。44は刃部が鋭く円形ないし方形の形態を呈する。48は縁辺の四分の三ほどが急角度の刃部となる。削器・搔器の石質は黒色頁岩が66%を占め打製石斧と同じ値を示す。

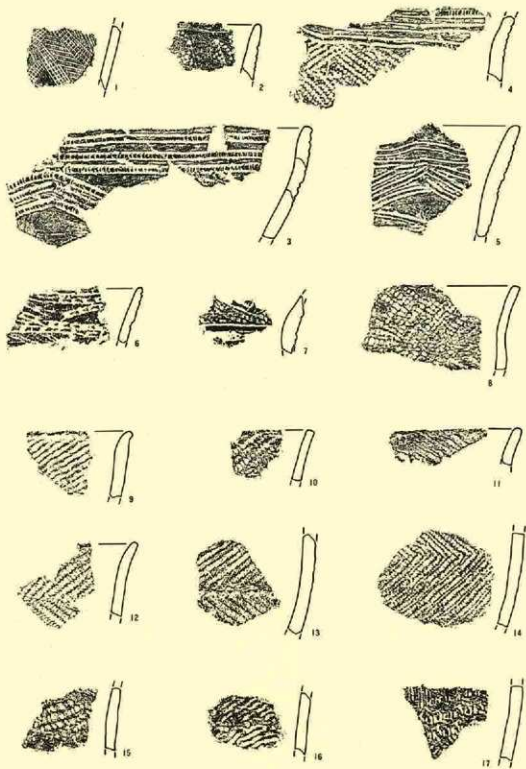
49は縦長剥片の先端がわずかに摩滅する。石錐と考える。石質は黒色頁岩である。

50は隅丸三角形の形態で両面調整される。下端が急角度を呈するため搔器とも考えられるが、形態からみて石鏃の未製品の可能性がある。

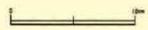
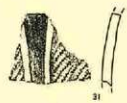
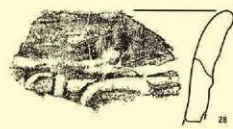
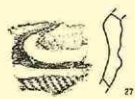
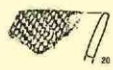
51は有柄の石鏃で、先端と柄部が欠損する。珪質頁岩で、打製石斧・削器・搔器類には認められない石材を用いる。

以上述べた石器は縄文時代に属する遺物としたが、本遺跡で出土する土器と合わせて考えると、出土量の多い前期から中期に属するのが妥当であろう。

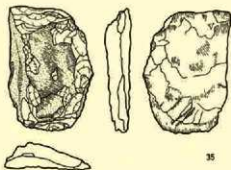
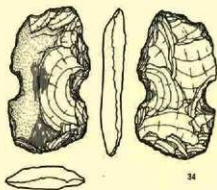
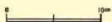
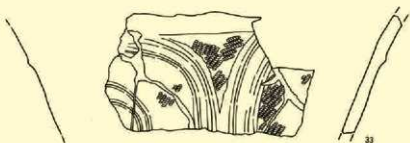
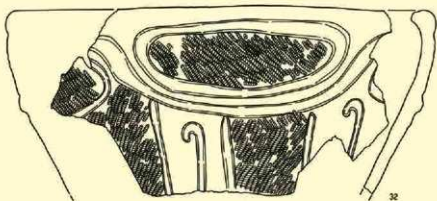
*第13図—52については第三章、第3節7、弥生時代後期末～平安時代の石器についてを参照。



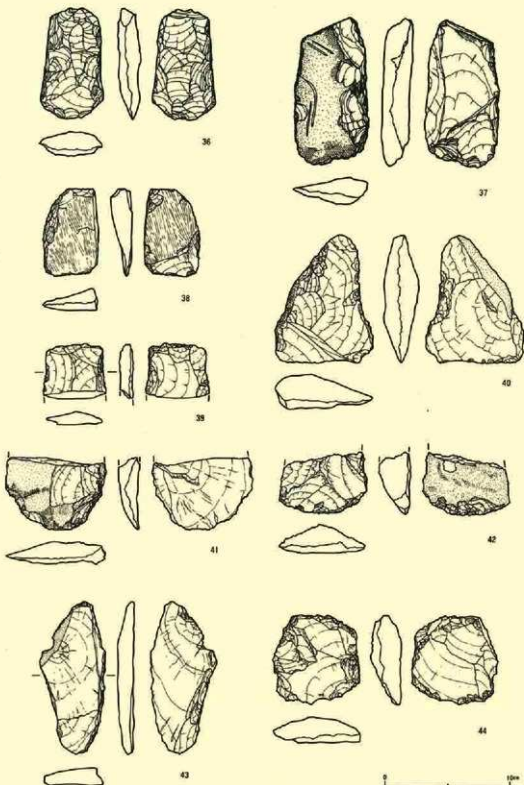
第9圖 遺構外出土遺物(1)



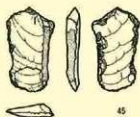
第10圖 遺構外出土遺物(2)



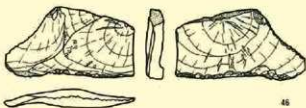
第11圖 遺構外出土遺物(3)



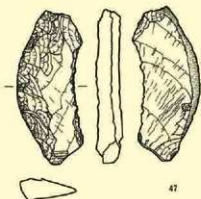
第12圖 遼構外出土遺物(4)



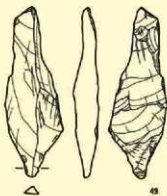
45



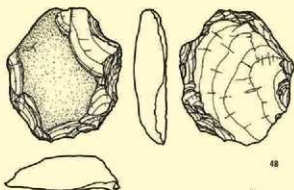
46



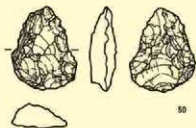
47



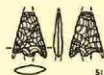
48



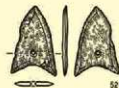
49



50



51



52

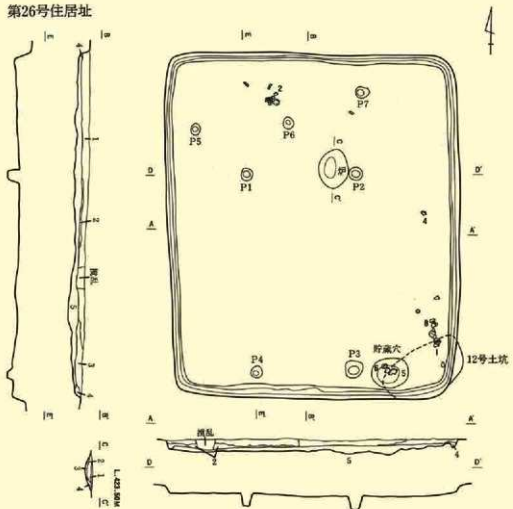


第13圖 遺構外出土遺物(5)

第2節 弥生時代後期末～古墳時代前期

1. 住居址

第26号住居址



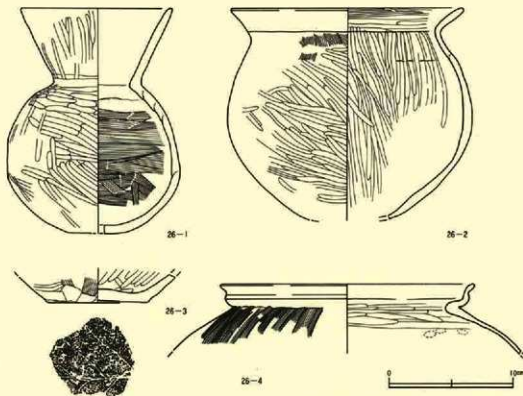
- 覆土 第1層-黒褐色土
 第2層-明黒褐色土
 第3層-明黒褐色土(ロームブロックを多く含む)
 第4層-黄褐色土(ロームブロック)
 第5層-黒褐色土・黄褐色土

- 砂 第1層-黒褐色土(きめ細かい黒色土が主体。焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト)
 第2層-赤色土(ほぼ純粋な焼土層。粘性・しまり無し)
 第3層-暗黄褐色土(最上面が焼成面。黄褐色ロームと黒色土との混層。粘性・しまり無し)
 第4層-暗黄褐色土(ローム分と黒色土分と焼土粒子との混層でソフト。粘性・しまり無し)

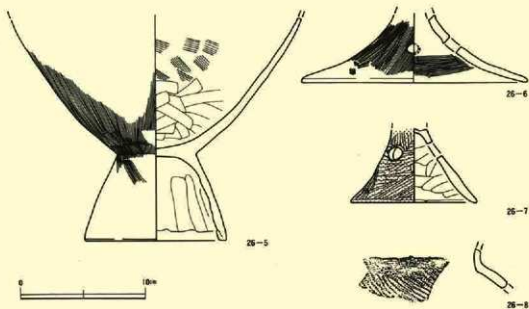
第14図 第26号住居址

C地区の東南端にある。第12号土坑と重複している。新旧関係は本住居が第12号土坑を切っている。平面形態は、長方形を呈する。南北長7.3m、東西長6.2mを測る。方位は、N-2°22'-Wを

指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。自然堆積である。壁は、北壁で高さ18cm、南壁で15cm、東壁で10cm、西壁で12cmであった。床面は、比較的軟弱であった。貼床である。凹凸も激しい。床面下には凹凸の激しい掘方面が確認された。セクションは全体に1層であり、暗黄褐色土のロームブロックと黒色土との混層であった。柱穴は、7本検出されている。床面精査時には確認できなかったが、掘方面で検出された。北側の2本はノーマルな位置で、南側は南壁沿いに検出された。貯蔵穴は、南東コーナーに存在する。平面は不正楕円形で、長軸長78cm、短軸長62cm、深さ33cmである。壁溝は、しっかりしたものが全周している。東壁北寄りで幅12cm、深さ9cm、北壁中央で幅10cm、深さ6cm、西壁中央で幅12cm、深さ7cm、南壁中央で幅18cm、深さ4cmであった。炉は住居中央北寄りに位置しており、平面形は南北に長い楕円形を呈し、長軸長84cm、短軸長66cm、深さは中央部で16cmと深く、しっかりした造りであった。第2層である焼土も大量に堆積している。焼成面のロームは焼けてぼろぼろになっていた。炉内より遺物は出土していない。遺物は、炉の北西側と住居南東コーナーより一括土器が出土している。また北壁沿いにたたき台と思われる石が2個存在している。高坏(6・7)、S字状口縁台付甕(4・5)、埴(1)、甕(2・8)、壺(3)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅱ期に所属すると思われる。

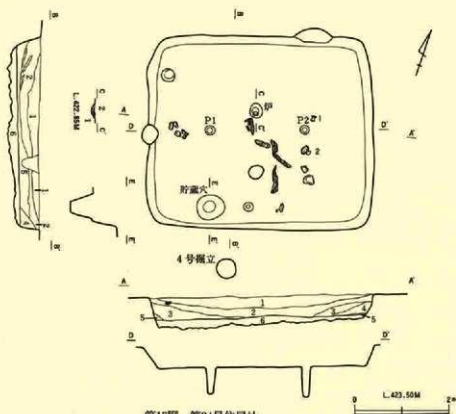


第15図 第26号住居址出土遺物(1)



第16图 第26号住居址出土遺物(2)

第34号住居址

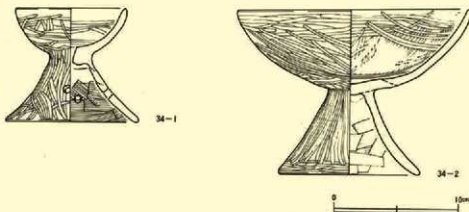


第17图 第34号住居址

第34号住居址

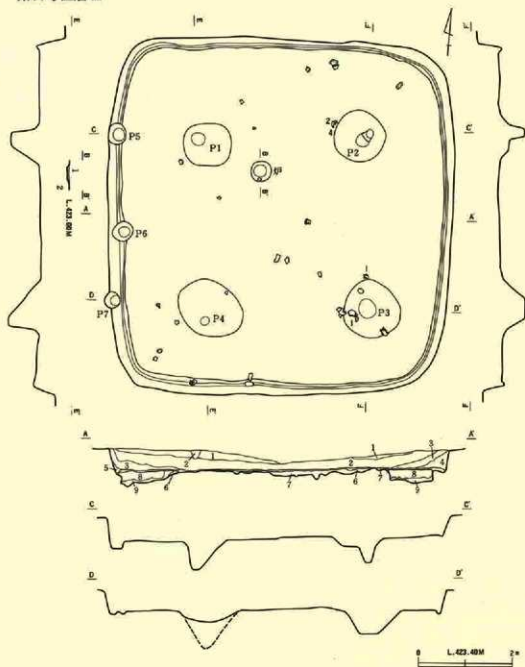
- 覆土 第1層一黒褐色土(きめの細かいサラサラした黒色土分が主体。細かいローム粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。バサバサ。)
- 第2層一黒褐色土(1層と組成が近似。中に炭化木材を多く含む。粘性・しまり無し。バサバサ。)
- 第3層一明黒褐色土(1層と組成が近似。ローム粒子をより多く含むため、色調が明るい。炭化材を含む。粘性・しまり無し。バサバサ。)
- 第4層一黒色土(きめ細かいほぼ純粋な黒色土。僅かにローム粒子混入。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第5層一明黒褐色土(きめ細かい黒褐色土分が主体。大型ロームブロックと炭化物を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第6層一暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまりややあり。)
- 伊 第1層一黒色土(きめ細かい黒色土。粘性・しまり無し。)
- 第2層一赤褐色土(純粋な焼土。粘性・しまり無し。)

C地区の北東側にある。第5号掘立柱建物跡に切られている。第26号住居の南西側に位置している。本住居の中央部付近より建築材と思われる炭化物が検出されており、このことより焼失家屋であると考えられる。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.1m、東西長5.3mを測る。方位は、N-105°44'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ46cm、南壁で36cm、東壁で37cm、西壁で50cmであった。床面は、床面と掘方面はほぼ一致しており、全体が硬質床面であった。柱穴は、計2本検出した。2本とも主柱穴と思われる。貯蔵穴は、南壁沿い西側に円形のプランをもつやや大きめのピットを検出した。南北長52cm、東西長59cm、深さ55cmであった。壁溝は、うっすらあるようでもあるが明確でない。炉は、中央やや北寄りに小さ目のものが検出されている。枕石を持ち、また焼成面が良好に検出された。平面は不正円形をなし、南北長31cm、東西長27cm、深さ7cmである。遺物は、器台(1)、高坏(2)が検出されている。また西壁沿い北側に丸石を1個検出しているが、これはたたき台としたものであろう。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第II期に所属すると思われる。



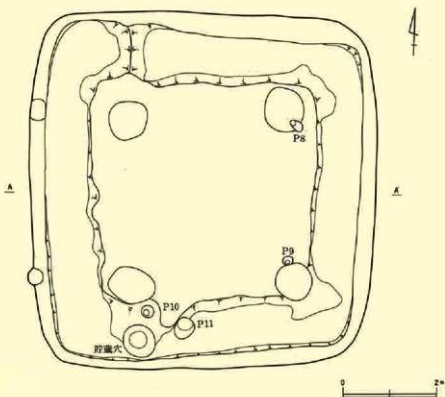
第18図 第34号住居址出土遺物

第36号住居址



- 第1層一暗赤褐色(赤褐色土、焼土、ローム粒子の混層。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第2層一暗赤褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。)

第19図 第36号住居址

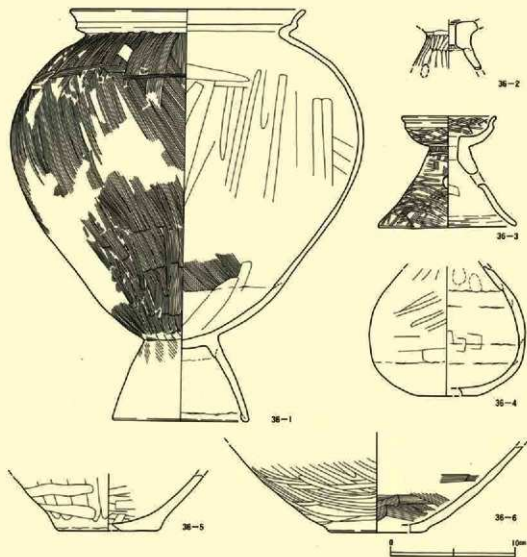


- 第1層—黒褐色土(きめ細かい黒褐色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第2層—暗黄褐色土(1層と同じ黒褐色土が主体。ロームブロック及びローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第3層—黒褐色土(1層と同様の組成をなすが、ローム粒子を多く含む。粘性・しまり無し。)
- 第4層—暗黄褐色土(黒褐色土とロームブロックとの混層。粘性・しまり無し。)
- 第5層—黄褐色土(4層とほぼ同様。壁面れみ。)
- 第6層—明黄褐色土(ロームブロックと黒色土ブロックとの混層。粘床面として認識。表面は空堀。粘性・しまりややあり。)
- 第7層—暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土ブロックとの混層。黒色土分が少なく、大半をロームが占める。掘方覆土として認識。住居中央部に主として存在。粘性・しまりややあり。)
- 第8層—黒褐色土(黒褐色土が主体。縦状にロームブロックを少量混入。住居内周縁部を方形凹溝状にあぐる溝の覆土。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第9層—暗黄褐色土(ほぼ7層と同じ。)

第20図 第36号住居址掘方

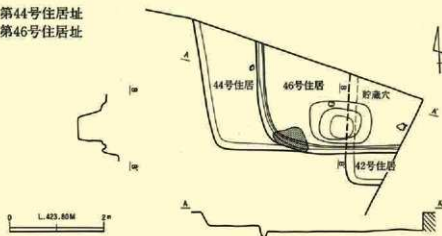
C地区の北東側にある。第5号掘立柱建物跡に切られている。第34号住居の西側に位置している。平面形態は、胴張りの隅丸正方形を呈する。南北長7.5m、東西長7.2mを測る。方位は、N-88°22'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。自然堆積である。壁は、北壁で高さ46cm、南壁で36cm、東壁で37cm、西壁で50cmであった。床面は、主柱穴に囲まれる範囲に硬質床面が広がっていた。全体に凹凸がある。柱穴は、計11本検出され、そのうち主柱穴は4本である。主柱穴は大きく深いピットである。また西壁沿いに3本、副柱穴が存在している。貯蔵穴は、南壁沿い西側に検出された。平面円形で、南北長69cm、東西長68cm、深さ52cmである。壁溝は、全周している。幅は狭いが深く、明確であった。東壁北寄りで幅13cm、深さ9cm、北壁中央で幅10cm、深さ5cm、西壁中央で幅13cm、深さ7cm、南壁中央で幅14cm、深さ4cmであった。掘方は、方形

周溝状の溝が巡るという点で特異なものであった。溝ははっきりしたもので、断面は箱型を呈し、東側のセクションが良好であった。覆土は最上層に貼床、次に黒色が強い黒褐色土、次に黄褐色土の3層に分層された。いずれも人為的埋土と判断される。規模は北側中央で幅101cm、深さ26cm、南側中央で115cm、深さ26cm、東側中央で幅100cm、深さ28cm、西側中央で幅99cm、深さ23cmである。炉は、非常に小型であった。南北42cm、東西45cmのほぼ円形をなすもので、掘り込みは3～4cm程度であった。焼成面は焼けた痕跡が認められたが、焼土の堆積はそれほどではなかった。遺物は、器台(2・3)、埴(4)、壺(5・6)、S字状口縁台付甕(1)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅱ期に所属すると思われる。



第21図 第36号住居址出土遺物

第44号住居址
第46号住居址



第22図 第44、46号住居址

第44号住居址

C地区の北東端にある。第46号住居に切られている。大半が調査限界にかかっている。南東コーナー付近のみ残存している。壁は、南壁で30cm、西壁で30cmであった。床面は、概して軟弱である。また床面に一部、良質な白色粘土塊が存在していた。壁溝は、検出されなかった。遺物は、検出されていない。本住居の時期は、不明である。

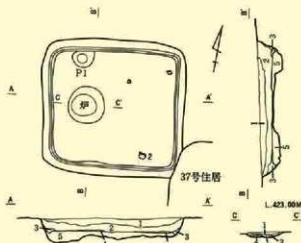
第46号住居址

C地区の北東端にある。大半が調査範囲外に位置するものである。第44号住居を切り、第42号住居に切られているが、床面がそれより深いために、良好に検出された。覆土はレンズ状堆積をなしていた。壁は、西壁で10cmであった。床面は、概して軟弱である。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南壁沿いに楕円形の一段テラスをもった掘り込みが存在している。規模は外側で、長軸長130cm、短軸長89cm、ピットが長軸長86cm、短軸長65cm、深さ60cmであった。壁溝は、現状では全周している。幅も深さも一定しており、しっかりしている。西壁中央で幅14cm、深さ13cmであった。炉は、おそらく調査範囲外にあると思われる。遺物は、検出されなかった。また南西コーナーに一塊の良質な白色粘土を検出した。本住居の時期は、弥生末古墳前期には位置づけられるが、遺物が少なく詳細は不明である。

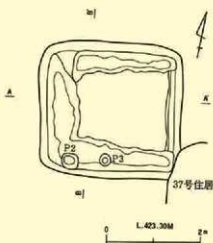
第48号住居址

C地区の北東側にある。重複はない。第37号住居の西隣に位置している。本住居は小型住居である。平面形態は、正方形である。南北長3.3m、東西長3.3mを測る。方位は、N-99°3'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ32cm、南壁で25cm、東壁で32cm、西壁で24cmであった。床面は、ほぼ全面に硬質床面（貼床）が広がっていた。掘方は、方形

第48号住居址



第23図 第48号住居址

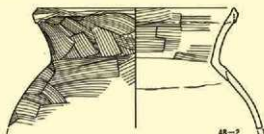


第24図 第48号住居址掘方

- 遺土 第1層—茶褐色土(黒色土中に茶褐色土が斑状に広がる。細かい黄白色の粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。)
- 第2層—黒褐色土(黒色土が主体。1層と同様の黄白色粒子を多く含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第3層—暗黄褐色土(大型ロームブロックと黒色土ブロックの混層。粘性無し。しまりややあり。)
- 第4層—暗赤褐色土(茶褐色土が主体。焼土分及び焼土粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第5層—明黒褐色土(黒色土ブロックとロームブロックとの混層。粘床層。硬方。粘性・しまりややあり。)
- 炉 第1層—茶褐色土(きめ細かい茶褐色土が主体。焼土分・焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第2層—赤褐色土(鮮やかな赤色をなす焼土塊。粘性無し。しまりややあり。)
- 第3層—暗赤黄褐色土(焼土ブロック、ロームブロック、茶褐色土との混層。粘性・しまり無し。ソフト。)

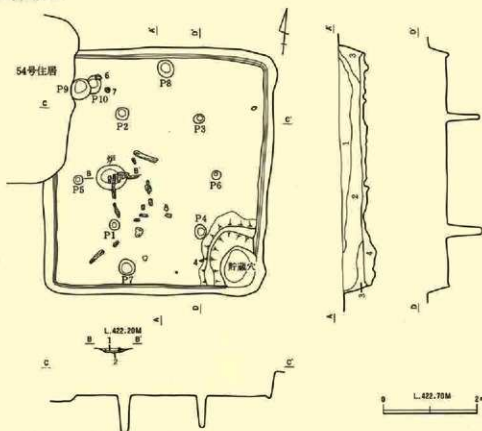


第25図 第48号住居址出土遺物



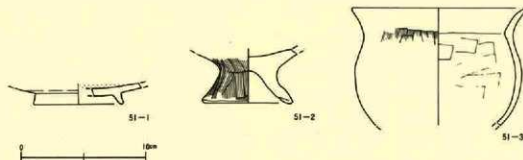
周溝状の溝を有していた。溝自体はそれほど明確なものではないが、確かに存在している。北側で幅48cm、深さ16cm、南側で幅58cm、深さ16cm、西側で幅70cm、深さ18cmである。柱穴は、計3本検出された。いずれも主柱穴ではないと思われる。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、しっかりしたものが全周する。北側で幅12cm、深さ6cm、南側で幅13cm、深さ7cm、東側で幅11cm、深さ7cm、西側で幅10cm、深さ4cmである。炉は、小型住居である本住には不似合いなほどしっかりしていたものであった。径80cmぐらいの円形を呈し、住居中央西側に存在していた。南北長78cm、東西長78cmで中央部で底面までの深さは約10cmである。第2層が焼土層で全体に厚く堆積していた。付属施設はなかったが、炉の南西に接続して56cm×44cmの平たい川原石が床面直上にあり、石の中央部に使用痕があるところから、たたき台として使用したものと思われ、炉との関係からこれは調理用具の一つではなかったかと思われる。遺物は、環1、壺2が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期属年の第Ⅱ期に所属すると思われる。

第51号住居址

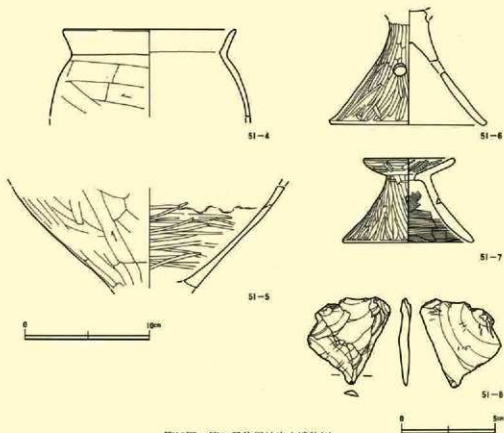


- 覆土 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒子を多く含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第2層-黒褐色土(1層とはほぼ同様の組成。黄褐色ロームブロックを混入。全体に1層より明るい。)
 第3層-黒色土(きめの細かい黒色土が主体。ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層-明黒褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまりあり。)
 灰 第1層-暗赤褐色土(黒色土と焼土分、焼土粒子の混層。粘性・しまり無し。)
 第2層-暗黄褐色土(黄色ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。バサバサ。

第26図 第51号住居址



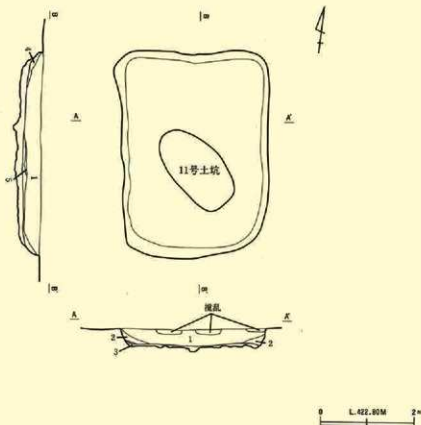
第27図 第51号住居址出土遺物(1)



第28図 第51号住居址出土遺物(2)

C地区の中央にある。第54号住居に切られている。本住居は焼失家屋であった。炭化建材と焼土が住居中央から南側にかけて広がっている。平面形態は、長方形を呈する。南北長5.2m、東西長4.8mを測る。方位は、N-91°57'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ44cm、南壁で46cm、東壁で50cm、西壁で47cmであった。床面は、中央部を中心として硬質床面が広がっている。壁沿いのみやや軟弱である。掘方は、明確ではないが、四壁に沿ってうっすらと溝があり、方形周溝状の溝として認識できると思われる。柱穴は、計10本検出されている。うち主柱穴は4本である。貯蔵穴は、南東コーナーより検出されている。平面は不正楕円形を呈し、長軸長89cm、短軸長77cm、深さ27cmである。周囲を意識的に高くしており、中の掘り込みは以外と乱雑な掘方である。壁溝は、現況で細く深めの壁溝が全周する。東壁北寄りで幅10cm、深さ7cm、北壁中央で幅10cm、深さ6cm、西壁中央で幅8cm、深さ4cm、南壁中央で幅7cm、深さ3cmであった。炉は、中央西側にある。平面形は東西に長い楕円形をなしている。長軸長64cm、短軸長52cm、深さ10cmである。東側には例によって枕石がある。堆積層は2層で第1層が焼成面となろう。遺物は、皿(1)、器台(7)、高坪(6)、台付甕(2)、甕(3~5)、石鏃(8)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅱ期に所属すると思われる。

第52号住居址

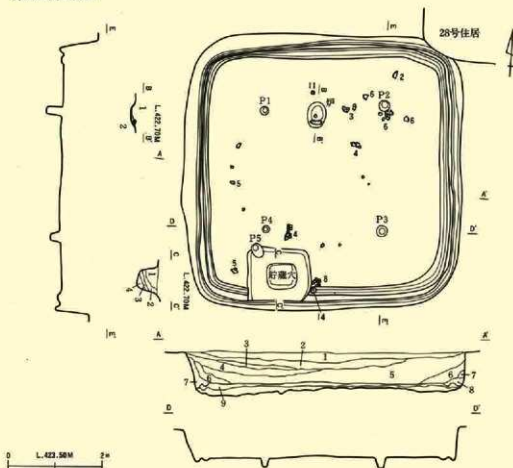


- 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。僅かにF P、やや大型のロームブロックを含む。粘性・しりり無し。)
 第2層—暗黒褐色土(黒褐色土が主体。F P粒子を僅かに含む。粘性・しりり無し。)
 第3層—明黒褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しりり無し。)
 第4層—黒色土(この部位にのみ認められ。軽石を多量に含む。粘性・しりり無し。)
 第5層—明黒褐色土(ロームブロックと黒色土との混層で粘土。粘性・しりり無し。ソフト。)

第29図 第52号住居址

C地区の中央にある。第13号土坑を切っている。第50号住居西側にある。平面形態は、隅丸長方形を呈する。南北長5.2m、東西長4.1mを測る。方位は、N-4°34'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ30cm、南壁で32cm、東壁で34cm、西壁で34cmであった。床面は、比較的軟弱な貼床であった。柱穴、貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、検出されなかった。カマドは、検出されなかった。出土遺物はなく、本住居の時期は、不明である。(形態より考えて弥生末古墳前期と思われる。)

第53号住居址

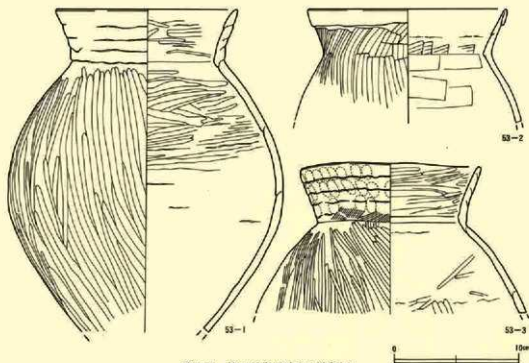


- 覆土
- 第1層-黒褐色土(黒色土分が主体。ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第2層-暗黒褐色土(黒色土分が主体。小ロームブロック及びローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第3層-明黒褐色土(黒色土が主体。ロームブロックとローム粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第4層-暗黒褐色土(2層とほぼ同じ。)
 - 第5層-明黒褐色土(3層と同じ。)
 - 第6層-黒褐色土(4層と同じ。)
 - 第7層-暗黄褐色土(黒色土とロームブロックとの混層。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第8層-黒色土(ほぼ純粋な黒色土。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第9層-明黒褐色土(黒褐色土とロームブロックとの混層。粘性・しまりあり。堅床。)
- 貯蔵穴
- 第1層-茶褐色土(茶褐色土が主体。ローム粒子、小ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第2層-黒色土(非常にきめ細かい純粋な黒色土。粘性・しまり無し。きわめてソフト。)
 - 第3層-茶褐色土(黒色土とロームブロックとの混層。ロームブロックは小さくほとんど粒子。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第4層-黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。)
- 貯蔵穴
- 第1層-黒色土(黒色土分が主体。カーボンを多量に含む。粘性・しまり無し。)
 - 第2層-明黒褐色土(黄色土ブロックと黒色土との混層。粘性・しまり若干あり。)

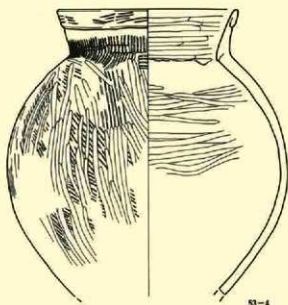
第30図 第53号住居址

C地区の北東側にある。第28号住居に切られている。第34号住居南東側に位置している。平面形態は、隅丸正方形を呈する。南北長5.8m、東西長5.9mを測る。方位は、N-5°3'-Wを指している。覆土は、平均70cmと深く、堆積状態が良好に観察された。全般的にレンズ状堆積である。

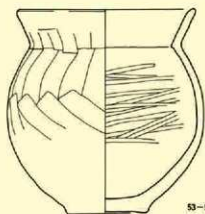
明黒褐色土と暗黒褐色土が相互に堆積している状態であった。焼失家屋ではないと思われる。壁は、北壁で高さ72cm、南壁で75cm、東壁で68cm、西壁で64cmであった。床面は、支柱穴に挟まれる範囲に硬質床面が広がっていた。掘方は、床面をどけると下からもう1枚床面が検出され、一回り小さい周溝が巡っていた。柱穴は、計5本が検出され、その中の4本が支柱穴である。ノーマルな位置に細く深い柱穴が存在していた。掘方面にもこの4本以外に見あたらないので、拡張の際柱穴の位置には変更がなかったものと思われる。貯蔵穴は、南壁沿い西側に方形のプランを呈し、床面近くには広く四角形の浅めの掘り込みが巡っている。規模は外側の広く浅い部分で、南北長110cm、東西長133cm、深さ10cm、内側も平面長方形をなし、南北長55cm、東西長64cm、深さ61cmである。壁溝は、細めの壁溝が全周する。またこのすぐ内側に1条の壁溝が巡っており、このことより本住居は拡張住居と判断される。外側の壁高の規模は、北側で幅12cm、深さ10cm、南側で幅12cm、深さ5cm、東側で幅16cm、深さ6cm、西側で幅16cm、深さ10cmである。内側の壁高の規模は、北側で幅20cm、深さ7cm、南側で幅17cm、深さ5cm、東側幅14cm、深さ3cm、西側で幅14cm、深さ6cmである。炉は、中央北側に位置する。南北に長い楕円形をなし、南西端には枕石が存在する。底面には珍しく土器の一片が散っていた。平面は楕円形をなし、長軸長54cm、短軸長40cm、深さ12cmである。遺物は、器台01、鉢(7・8)、甕(1~5)、壺(6・9・12)、台付甕08、石包丁03、敲石04が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第II期に所属すると思われる。



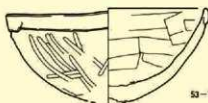
第31図 第53号住居址出土遺物(1)



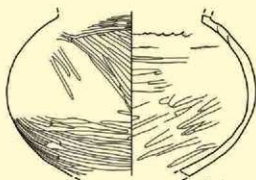
53-4



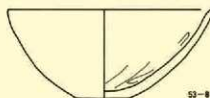
53-5



53-7



53-6



53-8



53-9



53-12



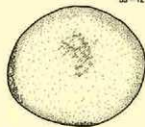
53-10



53-11



53-13



53-15

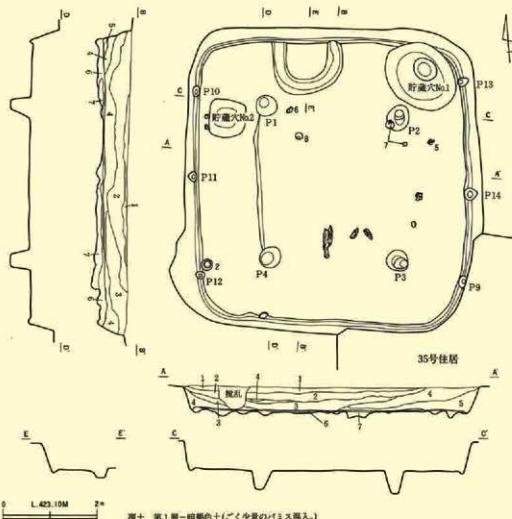


0 10cm

0 10cm

第32図 第53号住居址出土遺物(2)

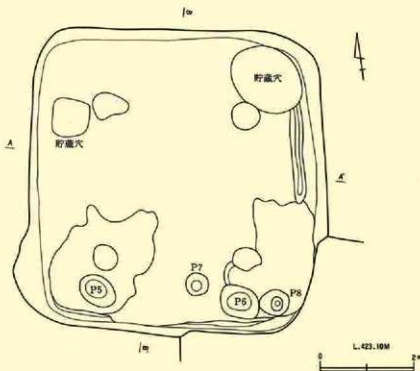
第57号住居址



- 覆土
- 第1層—暗褐色土(ごく少量のバミス混入。)
 - 第2層—黒色土
 - 第3層—暗黄褐色土(ロームブロックを含む。)
 - 第4層—黒色土(黒色土とロームブロックの混層。)
 - 第5層—黄褐色土(ロームブロックを少量に含む。)
 - 第6層—黒褐色土(黒色土と黄褐色ローム層との混層。貼床。粘性無し。しまり強い。)
 - 第7層—暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックが主体。黒色土を含む。粘性無し。しまりあり。)

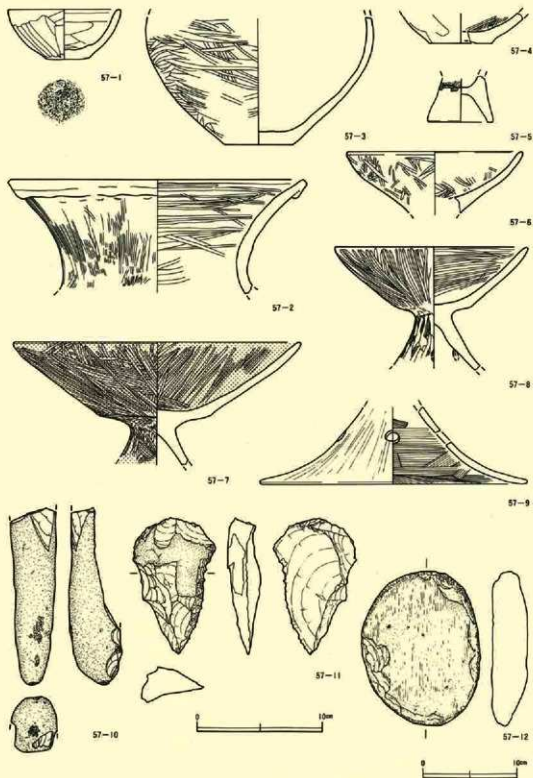
第33図 第57号住居址

C地区の北東側にある。第35号住居に切られている。第48号住居南側にある。本住居は焼失家屋であった。平面形態は隅丸正方形を呈する。南北長6.9m、東西長6.4mを測る。方位は、N-174°7'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ59cm、南壁で46cm、東壁で45cm、西壁で49cmであった。床面は、4本の支柱穴に囲まれる範囲に硬質床面が広がっていた。またP1とP4を結ぶ線に段差が存在していた。うっすらとはあるが南側にも存在して



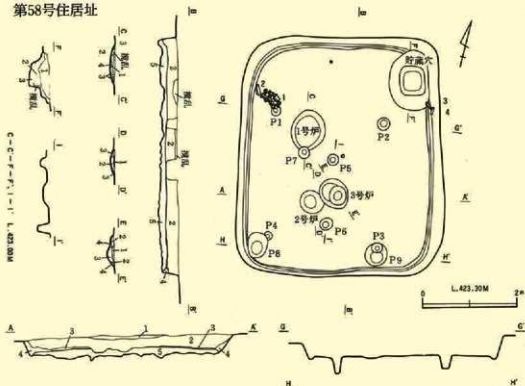
第34図 第57号住居址掘方

いるようである。掘方は、床下土坑のほか、アットランダムな掘り込みが検出されている。住居北東コーナーの床下土坑は明確なプランを有しているが、住居南東側や南西側のものは明確でない。柱穴は計14本検出され、うち主柱穴は4本である。床面精査時には、ノーマルな位置に4本の柱穴が検出された。また東西両壁沿いに3本ずつの壁柱穴が確認された。主柱穴に比してこれらはごく小径のものであったらしい。また掘方面では、南側主柱穴と南壁との間にそれぞれ柱穴を有しており、本住の建替えを示唆するものである。貯蔵穴は、北東コーナー部（No.1）とP1西側（No.2）に検出されている。No.1は平面楕円形をなし、長軸長167cm、短軸長129cm、深さ51cmである。No.2は平面不正正方形で、南北長80cm、東西長78cm、深さ56cmである。壁溝はカマド部と貯蔵穴部を除いて全周している。全体的に広めで浅いものであった。東壁北寄りで幅12cm、深さ5cm、北壁中央で幅8cm、深さ2cm、西壁中央で幅11cm、深さ6cm、南壁中央で幅12cm、深さ6cmであった。炉は検出されなかった。その他の施設として床面上の北壁南側にUの字形の溝を検出した。入口施設に関係すると推定される。南北長106cm、東西長148cm、南側の深さ20cmである。遺物は、坏11、高坏（6～9）、甕（2～4）、台付甕（5）、敲石00、擦石02、削器01が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅱ期に所属すると思われる。



第35圖 第57号住居址出土遺物

第58号住居址



第36図 第58号住居址

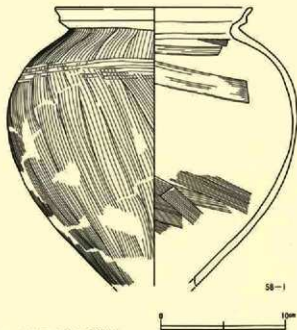
- 壁土**
- 第1層—黒褐色土(きめ細かい黒色土が主体。ロームブロック、ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第2層—黒色土(1層と同じ黒色土の純層。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第3層—明黒褐色土(床面直上に存在。黄褐色ローム分及びローム粒子と黒色土の混層。層が不規則で、床面の影響を受けた。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第4層—明黒褐色土(黒色土とロームブロックの混層。粘性・しまり無し。硬弱れ。)
 - 第5層—暗黄褐色土(大型ロームブロックと黒色土との混層。断方。粘性無し。しまりあり。)

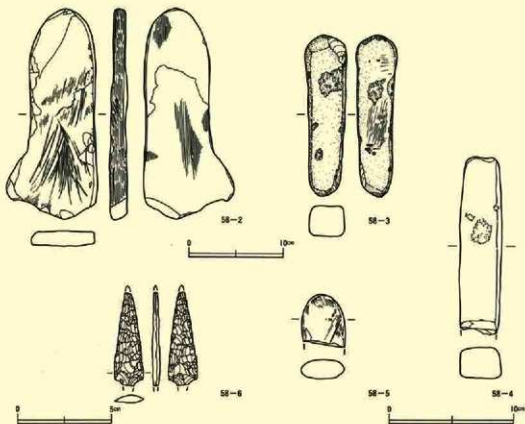
- 貯蔵穴**
- 第1層—黒色土(きめ細かいソフトな黒褐色土が主体。明褐色粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第2層—茶褐色土(黒色土分とローム分及び小ロームブロックとの混層。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第3層—明黒褐色土(第1層の黒色土が主体。ローム分、ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)

(1・2・3号炉とも共通)

- 炉**
- 第1層—黒褐色土(ソフトな黒褐色土が主体。焼土粒子、焼土分を少量に含む。粘性・しまり無し。)
 - 第2層—赤色土(鮮赤色の焼土。粘性無し。しまりあり。)
 - 第3層—赤褐色土(黒色土分と焼土との混層。粘性・しまり無し。)
 - 第4層—黄色土(熱を受けバサバサになったローム。粘性・しまり無し。)

第37図 第58号住居址出土遺物(1)

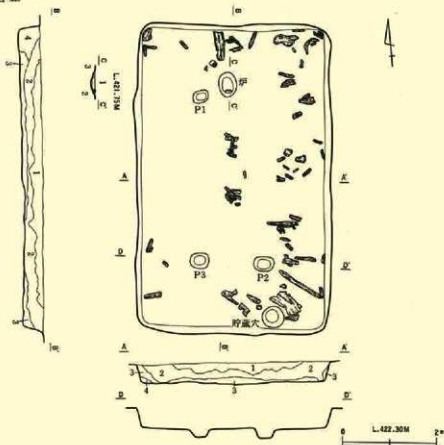




第38図 第58号住居址出土遺物(2)

C地区の北東側にある。重複はない。第36号住居址西側に位置する。平面形態は、隅丸長方形を呈する。南北長5.3m、東西長4.3mを測る。方位は、N-16°50'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ22cm、南壁で26cm、東壁で31cm、西壁で27cmであった。床面は、全体に軟弱な貼床であった。柱穴は、計9本が検出され、うち4本が主柱穴で、全体に南西に偏している。また中央に2本の副柱穴らしきものが検出されている。貯蔵穴は、北東コーナーにテラスをもった土坑があり、これが貯蔵穴ではないかと思われる。規模は外側で、長軸長122cm、短軸長84cm、内側で長軸長62cm、短軸長54cm、深さ41cmである。壁溝は、しっかりした壁溝が全周する。東壁北寄りで幅12cm、深さ6cm、北壁中央で幅16cm、深さ8cm、西壁中央で幅12cm、深さ7cm、南壁中央で幅12cm、深さ9cmであった。炉は、3基検出されている。No.1は平面楕円形で、長軸長86cm、短軸長72cm、深さ12cmである。No.2は平面楕円形で、長軸長68cm、短軸長58cm、深さ12cmである。No.3は平面円形で南北長49cm、短軸長52cm、深さ9cmである。遺物は、S字状口縁台甕(1)、砥石(2)、敲石(3・4)、擦石(5)、石鏃(6)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期Ⅱ年の第Ⅱ期に所属すると思われる。

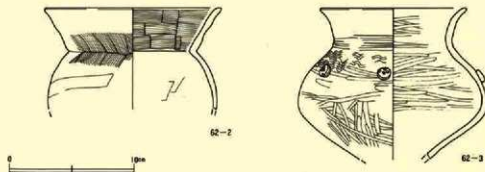
第62号住居址



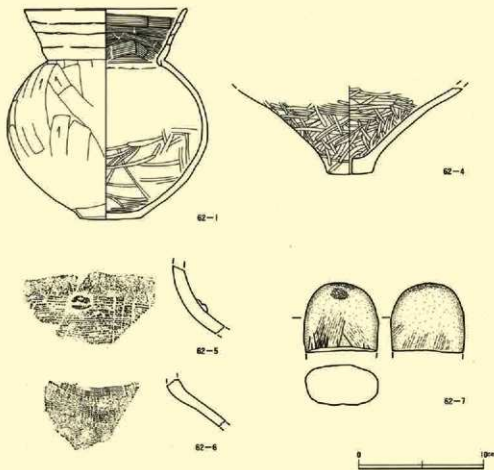
- 面土 第1層一暗茶褐色土(茶褐色土と黒褐色土が互いに雲状をなす。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第2層一黒色土(黒色土が主体。ローム分を若干含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第3層一黒褐色土(黒褐色土が主体。カーボン、焼土を多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第4層一明黒褐色土(黒褐色土と黄褐色ロームとの混層。粘性・しまり無し。ソフト。)

- 砂 第1層一黒褐色土(黒色土が主体。焼土粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。)
- 第2層一明赤褐色土(純粋な焼土層。粘性・しまり無し。焼成面。)
- 第3層一暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。崩れ。)

第39図 第62号住居址



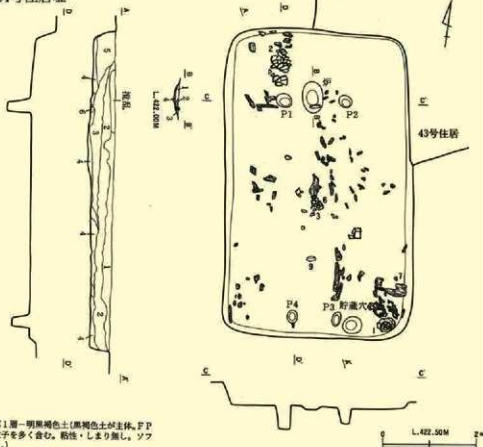
第40図 第62号住居址出土遺物(1)



第41図 第62号住居址出土遺物(2)

C地区の中央北側にある。重複はない。第91号住居南西側に位置する。本住居は焼失家屋である。床面や壁面も焼けて真っ赤になっていたところが検出されている。炭化建材も比較的良好に遺存していた。平面形態は、長方形を呈する。南北長6.4m、東西長4.2mを測る。方位は、N-4°27'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ47cm、南壁で44cm、東壁で43cm、西壁で38cmであった。床面は、掘方面と一致している。柱穴は、3本の主柱穴と思われるピットを検出したが、北東にあるべきはずのピットが検出されなかった。貯蔵穴は、南壁沿い東側に検出されている。平面は円形で、南北長45cm、東西長47cm、深さ10cmである。壁溝は、検出されなかった。炉は、北側中央にある。平面形は南北に長い楕円形を呈している。長軸長52cm、短軸長38cm、深さ9cmである。南よりに枕石を有している。セクションは3層で、底面付近はよく焼け、焼土も良好に堆積していた。遺物は、壺(1~3・5・6)、甗(4)、擦石(7)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第1期に所属すると思われる。

第64号住居址

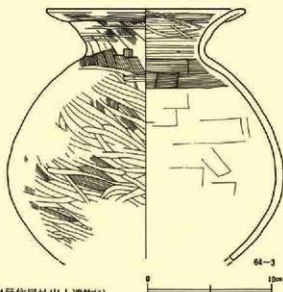


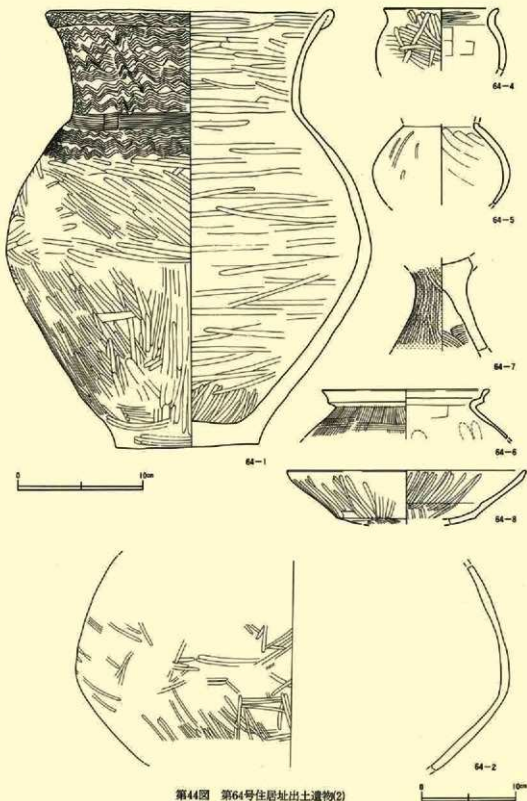
第42図 第64号住居址

- 覆土 第1層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。P
粒子を多く含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第2層—黒褐色土(黒褐色土が主体。明褐色
の粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。
ソフト。1層よりやや暗い。)
- 第3層—明黒褐色土(住居北側に認められ
た。1、2層と大差はない。黒褐色土が主
体。ローム粒子、明褐色粒子を含む。粘性・
しまり無し。)
- 第4層—黒褐色土(黒褐色土が主体。焼土、
カーボンを多く含む。焼失建材の含有層。
粘性・しまり無し。)
- 第5層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム
粒子、明褐色粒子を多量に含む。粘性・
しまり無し。ソフト。)
- 第6層—黒色カーボンのブロック。

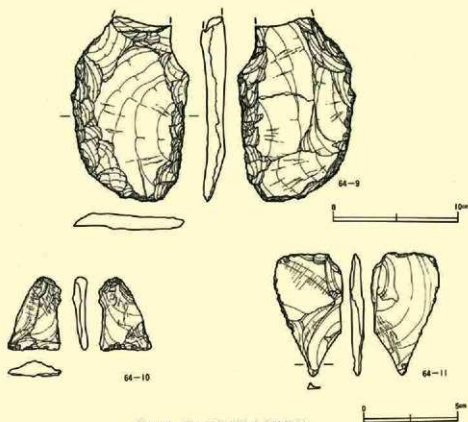
- 第1層—黒褐色土(黒色土が主体。ローム粒
子、焼土粒子を若干含む。粘性・しまり無
し。ソフト。)
- 第2層—暗黄褐色土(ローム分が主体。カー
ボン、黒色土分を含む。炭源不明。粘性・
しまり無し。ソフト。)
- 第3層—淡赤褐色土(ローム分、焼土分、カー
ボンの混層。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第4層—赤褐色土(純粋な焼土層。粘性・し
まり無し。)

第43図 第64号住居址出土遺物(1)





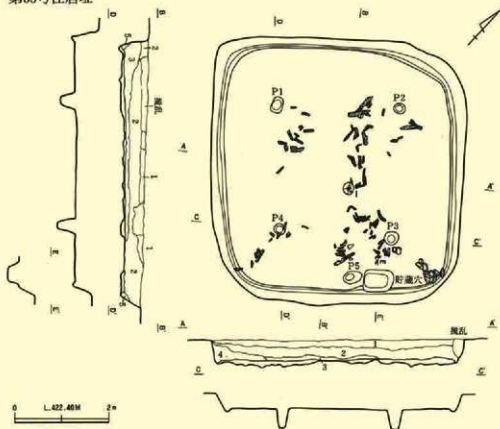
第44図 第64号住居址出土遺物(2)



第45図 第64号住居址出土遺物(3)

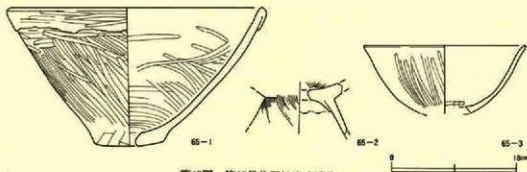
C地区の中央にある。第43号住居に切られている。本住居は焼失家屋であった。カーボンと焼土が大量に出土し、その状況は第62号住居に近似している。炭化建材には規則性が認められなかった。平面形態は、長方形を呈する。南北長6.6m、東西長4.1mを測る。方位は、N-5°52'-Wを指している。覆土は、ソフトな土で黒褐色のものを主体としている。自然なレンズ状堆積である。壁は、北壁で高さ46cm、南壁で43cm、東壁で43cm、西壁で41cmであった。床面は、若干貼っているが顕著ではない。全体に硬質床面が広がっていた。柱穴は、4本の支柱穴が検出されている。北側2本はノーマルな位置にあり、南側2本は南壁沿いに存在している。貯蔵穴は、南壁沿い東側に検出されている。平面は円形で、南北長40cm、東西長36cm、深さ33cmであった。壁溝は、うっすらとごく細く浅いものが存在しているように観察された。ごく漠然としたものである。炉は、北寄りの支柱穴の中間より検出した。全体に楕円形を呈し、長軸長66cm、短軸長43cm、深さ11cmである。例によって中央部北寄りに枕石が1本設置されていた。炉の断面は舟底型で、焼土は表面近くに堆積し、それほど大きな厚みをもった堆積ではなかった。遺物は、高坏(7・8)、埴(5)、甕(1〜3)、S字状口縁台付甕(6)、甕(4)、石鉄(9)、削器(10)、石錐(11)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第I期に所属すると思われる。

第65号住居址



- 覆土 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第2層-暗黒褐色土(1層と同様だが、主体となる黒色土が薄い。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層-明黒褐色土(黒褐色土が主体。多量のカーボン及び焼土、ロームブロックを混入。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層-明黒褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第5層-暗黄褐色土(黒色土とロームブロックとの混層。粘性・しまり無し。ソフト。)

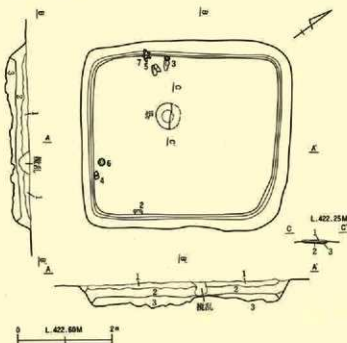
第46図 第65号住居址



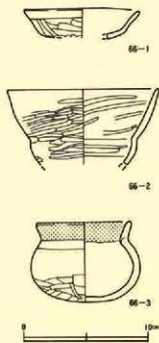
第47図 第65号住居址出土遺物

C地区の中央にある。重複はない。第69号住居南西側に位置している。本住居は焼失家屋であった。床面に焼土・炭化建材が散っており、炭化建材には規則性が認められなかった。平面形態は、不正隅丸正方形を呈する。南北長5.5m、東西長5.3mを測る。方位は、N-47°4'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ51cm、南壁で35cm、東壁で42cm、西壁で43cmであった。床面は、中央部を中心として硬質床面が広がっていた。柱穴は、ノーマルな位置に主柱穴4本を検出した。全体に形は小さく、深いものであった。貯蔵穴は、南壁沿い東寄りに検出された。平面は長方形で、長軸長64cm、短軸長47cm、深さ24cmであった。壁溝は、全周しているが南壁はあまり明確でなかった。東壁北寄りで幅10cm、深さ8cm、北壁中央で幅12cm、深さ6cm、西壁中央で幅13cm、深さ6cm、南壁中央で幅13cm、深さ8cmであった。炉は検出されなかった。遺物は、高環(3)、台付甕(2)、甕(1)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅱ期に所属すると思われる。

第66号住居址

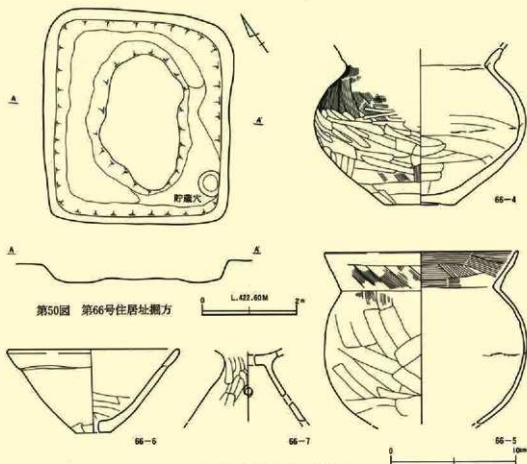


第48図 第66号住居址



第49図 第66号住居址出土遺物(1)

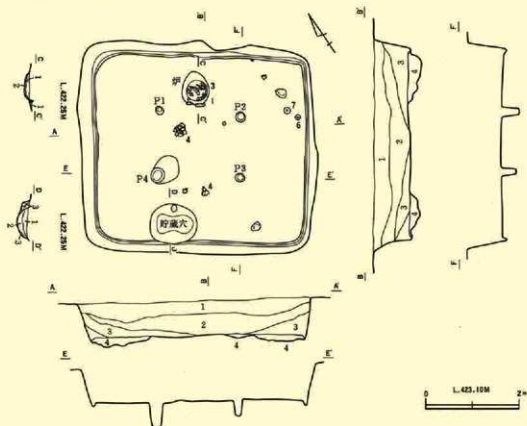
- 覆土 第1層—黒褐色土(黒色土分と赤褐色土分が互いに雲状をなす。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第2層—明赤褐色土(1層が主体。小ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層—暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックと黒色土との混層。粘性無し。しまりあり。)
- SP 第1層—黒色土(きめ細かいサラサラした黒色土が主体。黒土分を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第2層—明赤褐色土(明赤褐色土の純粋な焼土層。粘性・しまり無し。)
 第3層—黒褐色土(黒色土が主体。黄褐色土ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。)



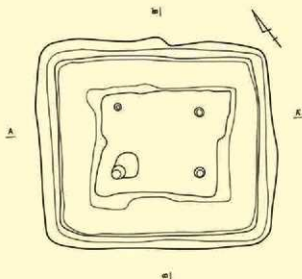
第51図 第66号住居址出土遺物(2)

C地区の中央北側にある。重複はない。第69号住居北西側に位置している。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.6m、東西長4.0mを測る。方位は、N-50°34'-Wを指している。覆土はレンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ51cm、南壁で35cm、東壁で42cm、西壁で43cmであった。床面は、全面に比較的軟弱な貼床が広がっていた。掘方には、住居南側から西側にかけて、溝状の掘り込みが観察された。プランや底面は明確でなく、一定していない。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナー付近に大きめのピットがあり、覆土中から一括土器が検出されている。平面は長方形をなし、長軸長64cm、短軸長47cm、深さ24cmである。壁溝は、全周している。全体的にしっかりしたものである。東壁北寄りで幅10cm、深さ8cm、北壁中央で幅12cm、深さ6cm、西壁中央で幅13cm、深さ6cm、南壁中央で幅13cm、深さ8cmであった。炉は、住居確認のためのトレンチによって半分ほど壊されてしまっていた。南北54cm、深さ5cmである。住居中央西寄りに位置している。第2層の焼土は厚く堆積していた。遺物は、坏(1)、埴(2)、器台(7)、小型壺(3)、壺(4・5)、甗(6)が出土している。本住居の時期は、本道跡弥生末古墳前期編年の第II期に所属すると思われる。

第67号住居址

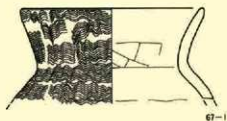


第52図 第67号住居址

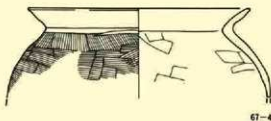


第53図 第67号住居址掘方

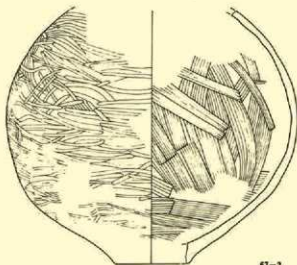
- 層土**
- 第1層—暗褐色土
 - 第2層—暗褐色土(ロームブロックと黒褐色土ブロックとの混層。)
 - 第3層—暗褐色土(ほぼ2層と同様だが、明るい。)
 - 第4層—明黒褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまりややあり。)
- 貯蔵穴**
- 第1層—黒褐色土(黒褐色土とローム分の茶褐色土が雲状に入り混み、ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第2層—暗黄褐色土(黒色土、ローム分、ロームブロックの混層。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第3層—黄褐色土(黄色ロームブロック。粘性無し。しまりややあり。)
- 戸**
- 第1層—黒褐色土(黒褐色土分が主体、ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。)
 - 第2層—明黒褐色土(黒褐色土とロームブロックとの混層。粘性・しまりややあり。)



67-1



67-4



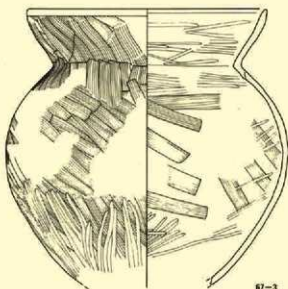
67-2



67-5



67-6



67-3



67-7



67-8



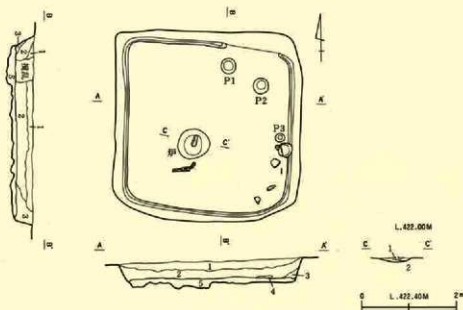
67-9



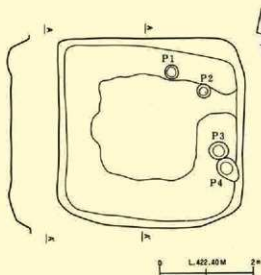
第54圖 第67号住居址出土遺物

C地区の中央北側にある。重複はない。第73号住居北側に位置している。本遺跡の中で覆土の堆積が最も厚い住居であった。床面までの深さが平均70cmある。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.6m、東西長5.0mを測る。方位は、N-35°50'-Eを指している。覆土はレンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ77cm、南壁で71cm、東壁で79cm、西壁で72cmであった。床面は、支柱穴4本に囲まれる範囲に硬質床面が広がっている。掘方には、第36号住居と同じく方形周溝状を呈した溝が掘方に検出された。溝部のセクションは黒色土とロームブロックの混層で単一層であるところから、人為的に一気に埋めたものと思われる。規模は、北側で幅82cm、深さ25cm、南側で幅103cm、深さ27cm、東側で110cm、深さ16cm、西側で116cm、深さ19cmである。柱穴は、支柱穴が4本、ノーマルな位置に検出された。貯蔵穴は、南壁沿いに平面楕円形の土坑があり、その周囲に高まりがあり、第69号住居と同様の構造をなすと思われる。平面は不正楕円形をなし、長軸長101cm、短軸長84cm、深さ31cmである。壁溝は、細めの壁溝が全周する。東壁北寄りで幅10cm、深さ10cm、北壁中央で幅12cm、深さ5cm、西壁中央で幅11cm、深さ8cm、南壁中央で幅10cm、深さ9cmであった。炉は、中央北壁寄りにあり、焼土が全く見あらず、しかも底面に一括土器を敷き並べている点で特異であった。炉の南には例によって枕石があり、2本検出されている。またほぼ住居中央部付近に径28cmの炉のように焼けた範囲が検出できた。性格は不明である。焼土その他の堆積はない。平面は不正円形で、長軸長69cm、短軸長58cm、深さ12cmである。遺物は、壺(2~5)、甕(1)、鉢(6・7)、ミニチュア土器(8・9)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第II期に所属すると思われる。

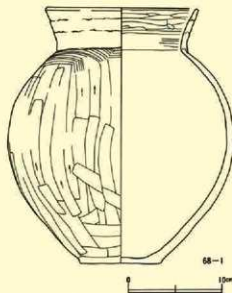
第68号住居址



第55図 第68号住居址



第56図 第68号住居址掘方

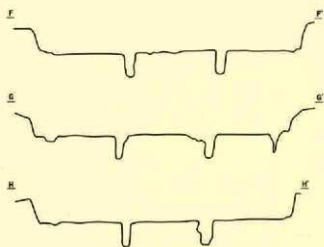
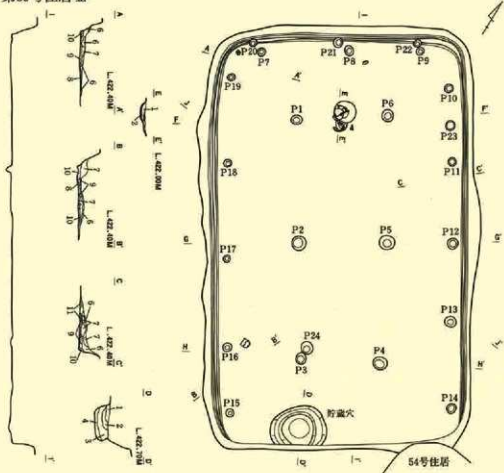


第57図 第68号住居址出土遺物

- 覆土 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。F P粒子上層に含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層-黒褐色土(黒褐色土が主体。上層に小ロームブロック、ローム粒子、下層ではカーボン、焼土を随所に含む(焼土建材)。粘性無し。しまりややあり。)
 第3層-暗黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム分を雲状に、ローム粒子を全面に含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第4層-赤褐色土(焼土ブロック。)
 第5層-暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまりあり。掘方土。)
- Ⅱ 第1層-黒色土(きめ細かい黒色土が主体。焼土粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第2層-明赤褐色土(純粋な明赤褐色焼土層。粘性無し。しまりややあり。)

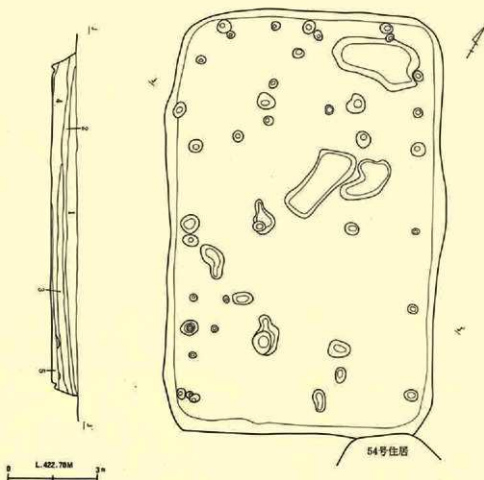
C地区の中央にある。重複はない。第69号住居西側にある。平面形態は、正方形を呈する。南北長4.0m、東西長3.9mを測る。方位は、N-86°00'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ38cm、南壁で35cm、東壁で40cm、西壁で34cmであった。床面は、全体に軟弱であった。その中でも炉の周囲にやや硬質の床面が認められた。柱穴は、計4本検出されている。主柱穴と思われるピットは検出されていない。北西側にアットランダムなピットが2本検出されている。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、全周する。全体に浅めで幅も一定していない。東壁北寄りで幅11cm、深さ3cm、北壁中央で幅10cm、深さ3cm、西壁中央で幅9cm、深さ4cm、南壁中央で幅10cm、深さ3cmであった。炉は、円形で、南北長62cm、東西長68cm、深さ9cmである。枕石が中央に位置していたという点で特異なものであった。1層の黒色土は中央付近にごく僅かで、あとは床面まで焼土が厚く堆積していた。遺物は、壺(1)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅱ期に所属すると思われる。

第69号住居址



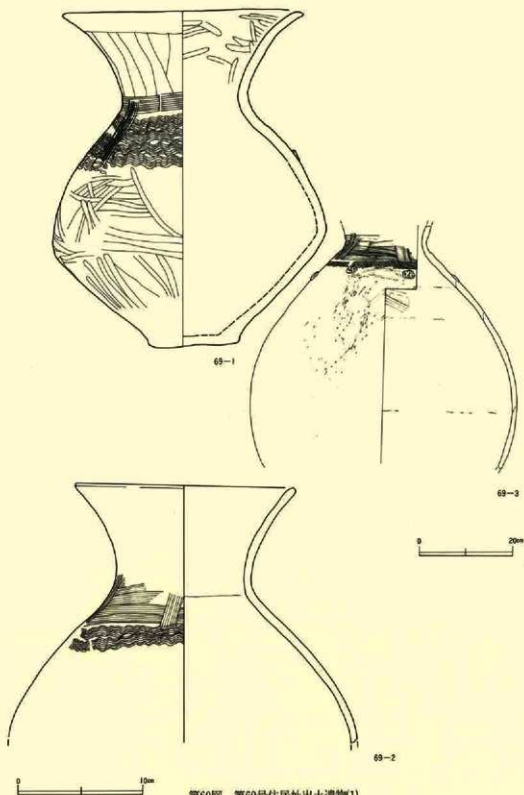
第58圖 第69号住居址

- 覆土
- 第1層—FP純層
 - 第2層—黒褐色土(軽石を少量含む。粘質)
 - 第3層—黒褐色土(1層とほぼ同じ。)
 - 第4層—褐色土(褐色土ブロックを含む。)
 - 第5層—暗褐色土
 - 第6層—暗赤褐色土(赤褐色焼土と黒褐色土との混層。粘性・しまり無し。ソフト)
 - 第7層—赤褐色土(純粋な赤褐色焼土層。粘性無し。しまりややあり。)
 - 第8層—黒褐色土(黒褐色土とカーボンブロック、ローム粒子との混層。粘性・しまり無し。)
 - 第9層—黒色カーボン層(黒色に炭化した住居の建築材。)
 - 第10層—明褐色土(黒色土とローム分、ローム粒子との混層。粘性・しまり無し。)
 - 第11層—黒褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロックを含む。粘性・しまりややあり。床面直上の上のっており住居破壊時にすでに存在していた。)
- 貯蔵穴
- 第1層—明黒褐色土(明黒褐色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第2層—明赤褐色土(純粋な明赤褐色焼土層。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第3層—黒褐色土(茶褐色及び大量のカーボンブロックが主体。焼土ブロックを混入。粘性・しまり無し。)
 - 第4層—茶褐色土(茶褐色土が主体。ローム粒子を含む。粘性・しまりややあり。)
- 炉
- 第1層—黒褐色土(黒褐色土分が主体。焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第2層—暗赤褐色土(赤褐色焼土と黒色土との混層。粘性・しまり無し。)

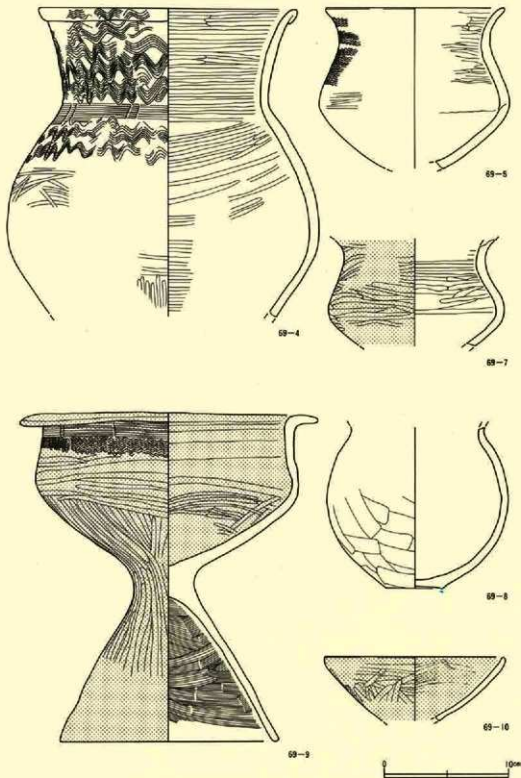


第59図 第69号住居址掘方

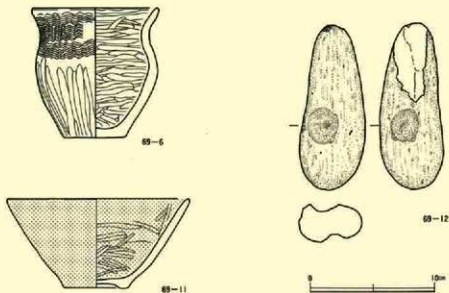
C地区の中央にある。第54号住居に僅かに切られている。本住居は本遺跡の中では最も興味深い住居であった。まずその規模が飛び抜けて大きく、隣接する戸神諏訪遺跡と合わせて考えなければならないとしても、この台地上における弥生末期の盟主的な存在であると推定される。住居構造も特殊であり、また本住居は焼失家屋であり、遺存状態が良好である。また、覆土の中で焼土の堆積の下に炭化建材が位置しており、いわゆる「土屋根」構造であったことが推察される。平面形態は、長方形を呈する。南北長11.2m、東西長7.2mを測る。方位は、N-30°57'-Wを指している。覆土は、最上層にF Pがレンズ状に堆積していた。F Pが降下した6世紀末にはこの住居は未だなお窠みを残していたということになる。壁は、北壁で高さ70cm、南壁で62cm、東壁で62cm、西壁で63cmであった。床面は、掘方面と一致し、中央部付近を中心として硬質床面が広がっていた。柱穴は、主柱穴が6本、副柱穴が長軸方向沿いに5本ずつ、北壁沿いに3本（この3本は、建て替えがあったらしい）を配していた。そしてこれらのいずれの柱穴も白色粘土を含んだ土で充填された痕跡が認められた。南壁沿いには副柱穴は確認できなかった。おそらく入り口があったのであろう。貯蔵穴は、南壁やや西寄りに位置し、横長の不正楕円形で、周囲はドーナツ状の高まりがあった。このセクションより興味深い事実が観察し得た。まず第3層のカーボンを含む層の上に第2層の赤褐色焼土が堆積しており、このことから確実に屋根材の上に土が乗っていたことが観察された。また火災の直前にはこのピットは確実に空いており、第4層のみ溜っていたに過ぎなかったことが明かである。南北長102cm、東西長150cm、深さ42cmであった。壁溝は、長軸方向2辺と北壁にあり、溝自体は細い。溝と床との間に3～5cmぐらいの明確な段差を意識的に造りだしていた。本住居特有の構造である。東壁北寄りで幅8cm、深さ4cm、北壁中央で幅12cm、深さ4cm、西壁中央で幅8cm、深さ3cmであった。炉は、不正円形で南側にテラスが存在していた。規模は、全長84cm、幅60cmである。覆土中に、壺(9)の一括土器が検出されている。また、前述の住居覆土内の焼土と炭化建材との関係を観察するために3本のサブトレを設定し、焼土と炭化建材との関係を見たところ、炭化材の上に焼土が乗っている状態を観察できた。遺物は、壺(1～3)、甕(4・8)、台付甕(5・7)、高坏(9・10)、小型甕(6)、鉢(1)、敲石(2)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅰ期に所属すると思われる。



第60图 第69号住居址出土遺物(1)

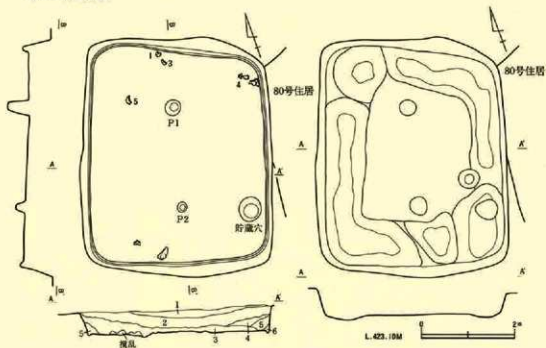


第61图 第69号住居址出土遺物(2)



第62図 第69号住居址出土遺物(3)

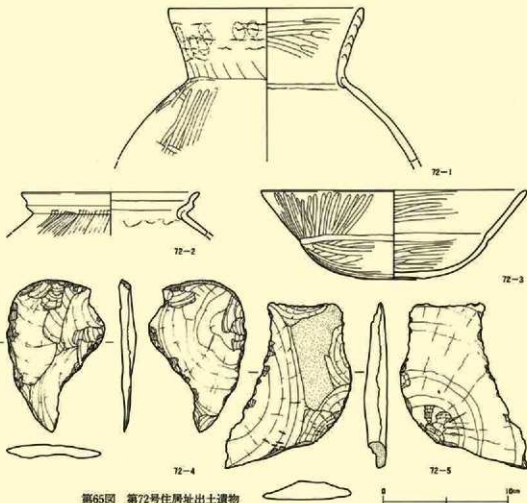
第72号住居址



第63図 第72号住居址

第64図 第72号住居址掘方

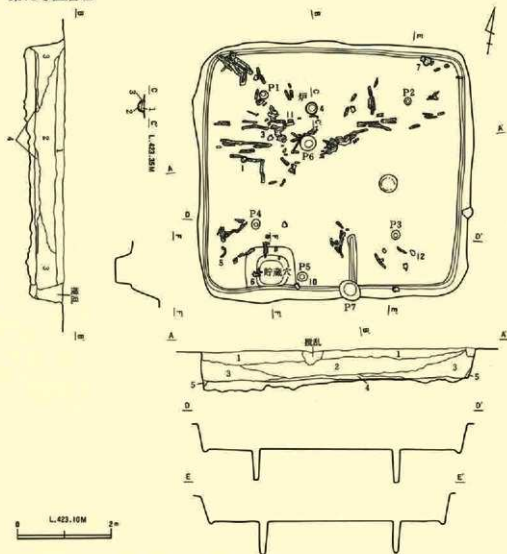
- 覆土 第1層-白色砂石層(砂子大~3cm大のF P純層.)
 第2層-黒褐色土(黒色土が主体。F P小ブロックを含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第3層-明黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまりややあり。)
 第4層-明黒褐色土(黒褐色土に茶褐色土が斑状に混入。粘性・しまり無し。)
 第5層-明黒褐色土(黒色土が主体。ローム粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第6層-暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性無し。しまりあり。)



第65図 第72号住居址出土遺物

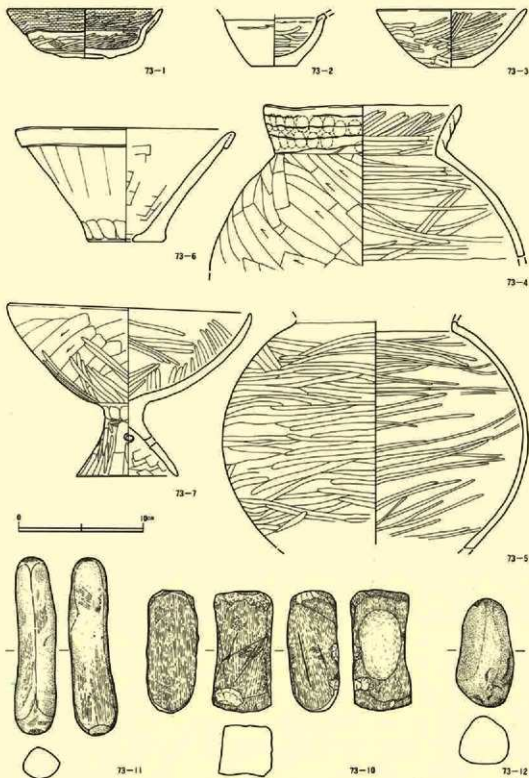
C地区の北端にある。第80号住居を切っている。第52号住居北西側にある。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長5.0m、東西長4.1mを測る。方位は、N-165°57'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ47cm、南壁で60cm、東壁で52cm、西壁で46cmであった。床面は、中央部を中心として硬質床面が広がっていた。また全体に凹凸がみられた。掘方には、明確ではないが方形周溝状の溝が巡っていた。北側で幅80cm、深さ14cm、南側で幅95cm、深さ14cm、東側で幅67cm、深さ12cm、西側で幅86cm、深さ10cmである。柱穴は、計3本検出され、2本の支柱穴が検出された。貯蔵穴は、東壁沿い南側には大きめのピットがあり、これが相当すると思われる。平面は円形で、南北長52cm、東西長47cm、深さ43cmであった。壁溝は、ごく細い壁溝が全周している。東壁北寄りで幅8cm、深さ5cm、北壁中央で幅13cm、深さ13cm、西壁中央で幅8cm、深さ4cm、南壁中央で幅14cm、深さ8cmであった。炉は、検出されなかった。遺物は、埴(3)、甕(1)、S字状口縁台付甕(2)、削器(4・5)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅱ期に所属すると思われる。

第73号住居址



- 覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。明褐色粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第2層—明黒褐色土(黒褐色土と茶褐色土(くすんだローム分)が雲状を呈し、ロームブロックを多く含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層—茶褐色土(黒色土とローム分が混ざり合って茶褐色土をなし、さらにロームブロックを混入。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層—赤褐色土ないし黒褐色土(焼失家屋の建材。焼土を多量に混入。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第5層—暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。)
- が 第1層—茶褐色土(茶褐色土、焼土、カーボンの混層。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第2層—暗茶褐色土(1層とほぼ同組成だが、色調が暗い。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層—明黒褐色土(黄色ロームブロックと黒褐色土との混層。粘性無し。しまりややあり。)

第66図 第73号住居址



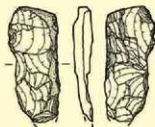
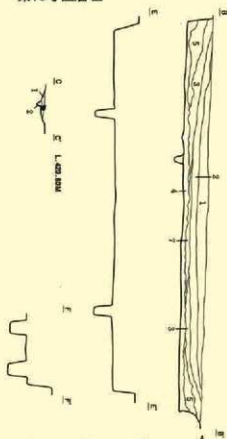
第67図 第73号住居址出土遺物(1)



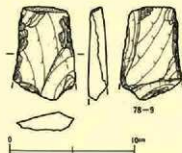
第68図 第73号住居址出土遺物(2)

C地区の中央北東よりにある。重複はない。第57号住居北西側に位置する。平面形態は、長方形を呈する。南北長6.3m、東西長5.7mを測る。方位は、N-26°25'-Wを指している。覆土は自然堆積である。壁は、北壁で高さ63cm、南壁で59cm、東壁で64cm、西壁で61cmであった。床面は、前面に良好な硬質床面が存在していたが、特に中央部付近に顕著であった。柱穴は、計7本検出され、そのうち主柱穴は4本である。貯蔵穴は、南壁西寄りにテラスを持った四角形のピットがある。規模は外側で長軸長105cm、短軸長84cm、内側で長軸長69cm、短軸長66cm、深さ34cmである。壁溝は、しっかり安定した壁溝が全周している。東壁北寄りで幅9cm、深さ3cm、北壁中央で幅9cm、深さ10cm、西壁中央で幅10cm、深さ10cm、南壁中央で幅9cm、深さ4cmであった。炉は、中央北壁よりにある。妻の胴部上半を逆さにして、床面に埋め込み、炉としたものである。土器の内側には焼土が堆積していた。本遺跡では、このような埋燵炉は、唯一の例となっている。径26cm、深さ14cmである。遺物は、埴(1・2)、鉢(3)、高坏(7)、甕(4・8・9)、甕(5)、甕(6)、砥石(10)、敲石(11・12)が検出されている。また中央部東壁寄りに、平たい丸石が床面直上に設置されている。中央部を中心として使用痕がある。たたき台として使用したものであろう。本住居は焼失家屋であるが、炭化建材と焼土との関係が明瞭であった。壁隙では炭化材の下に焼土があり、やや内側では炭化材の上部に焼土が位置していた。この現象は家屋が火災で内側に潰れた時、樫木が折れ、壁隙では樫木の間を抜けて焼土がその下に溜り、住居中央部では建材と一緒に焼土が落下し、堆積したものと考えられる。こうした考えは「土屋根」を想定して初めて理解されるものである。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅱ期に所属すると思われる。

第78号住居址

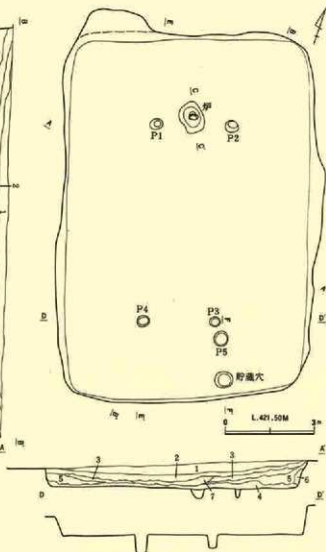


78-8



78-9

第70図 第78号住居址出土遺物(1)



第69図 第78号住居址

覆土 第1層一灰黄褐色軽石層(1~3cm大のF P純層。上層に比較的小粒。下層に大粒のものを含む。粘性・しまり無し。)

第2層一黒褐色土(黒褐色土が主体。粒子大~5mm大のF Pを多く含む。粘性無し。しまりややあり。)

第3層一暗茶褐色土(茶褐色土と黒褐色土が互いに斑状をなす。粘性・しまり無し。)

第4層一黒褐色土(黒褐色土が主体。カーボンを多量に含む。粘性・しまり無し。)

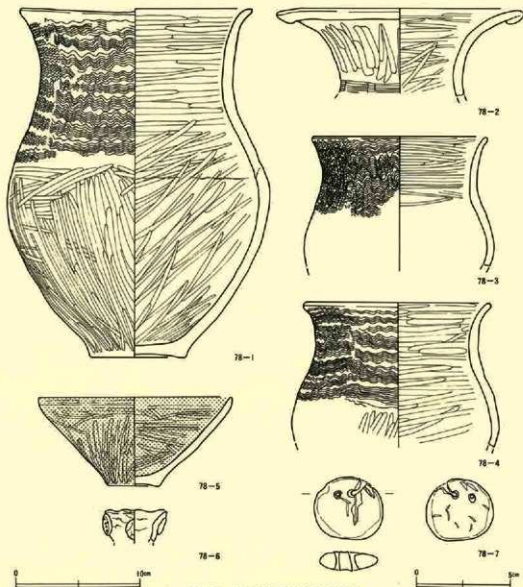
第5層一明茶褐色土(黒褐色土と暗黄褐色ローム分との混層。粘性・しまり無し。ソフト。)

第6層一暗黄褐色土(ロームブロック、ローム分と黒褐色土との混層。粘性・しまり無し。)

第7層一黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。)

砂 第1層一黒褐色土(きめ細かい黒土が主体。焼土粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。ソフト。)

第2層一黒褐色土(1層とほぼ同様。やや色調が明る。粘性・しまり無し。ソフト。)

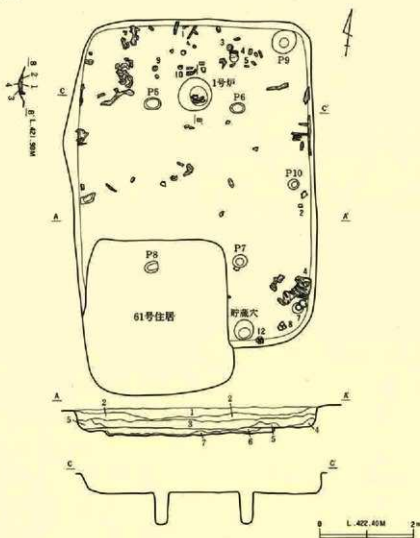


第71図 第78号住居址出土遺物(2)

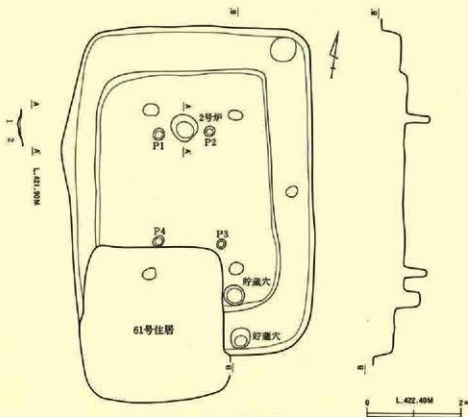
C地区の西側にある。重複はない。第81号住居東側にある。大型の住居である。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長10.4m、東西長7.0mを測る。方位は、N-15°21'-Wを指している。覆土は、最上層にF Pが堆積していた。セクションは全体に典型的なレンズ状堆積であった。最下層にはカーボンを大量に含んだ第4層がある。本住居にはあまり焼土が認められなかった。壁は、北壁で高さ68cm、南壁で60cm、東壁で72cm、西壁で49cmであった。床面は、掘方面と一致している。柱穴は、計5本検出され、そのうち4本が主柱穴である。貯蔵穴は、南壁沿い東側に径のやや大きなピットを検出している。平面は不正円形で、南北長42cm、東西長48cm、深さ52cmであった。壁溝は、存在していない。炉は、住居中央北側の主柱穴に挟まれる位置にある。平面不

正楕円形で、長軸長85cm、短軸長63cm、深さ12cmである。焼土はほとんど検出できず、一部にのみ確認し得た。ほぼ中央に小さなピットがあるが、性格はわからない。セクションより見ると炉に伴うようである。中央やや南寄りに支脚が横位に存在していた。覆土は黒色土で、焼土はほとんど含まれていない。遺物は、鉢(5)、甕(1・3・4)、壺(2)、ミニチュア土器(6)、土製円盤(7)、石斧(8・9)が検出されている。本住居は焼失家屋で、住居南側には、カーボンの上に焼土が乗っている事実が認められた。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅰ期に所属すると思われる。

第79号住居址



第72図 第79号住居址

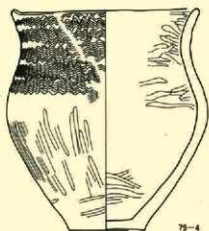


第73図 第79号住居址掘方

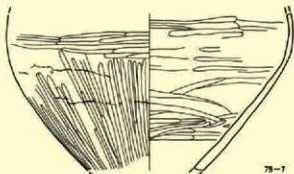
- 覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。上層に僅かにF.P.粒を含む。粘性・しまり無し。)
- 第2層—明黒褐色土(黒褐色土と茶褐色土が互いに雲状をなす。粘性・しまり無し。)
- 第3層—黒褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロックを含む。床面上部付近に、焼失建材のカーボンを少量を含む。粘性・しまり無し。)
- 第4層—明黒褐色土(ロームブロックと黒褐色土との混層。粘性・しまり無し。)
- 第5層—暗赤褐色土(黒褐色土と焼土分との混層。粘性・しまり無し。)
- 第6層—暗赤褐色土(大型ロームブロックと黒褐色土との混層。粘性無し。しまりあり。人為的埋土。)
- 第7層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム分、ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。人為的埋土。)
- 第1号炉 B-B' 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。焼土粒を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第2層—明赤褐色土(純粋な赤褐色焼土。粘性・しまり無し。)
- 第3層—暗赤褐色土(黒褐色土が主体。焼土ブロックを含む。粘性・しまり無し。)
- 第4層—黒褐色土(黒褐色土とロームブロックとの混層。粘性・しまり無し。)
- 第2号炉 A-A' 第1層—黒色土(きめ細かいサラサラした黒色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。)
- 第2層—暗赤褐色土(黒褐色土と焼土分との混層。ただしあまり焼けていない。粘性・しまり無し。ソフト。)



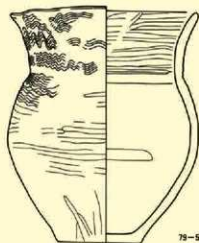
第74図 第79号住居址出土遺物(1)



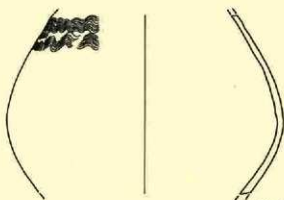
79-4



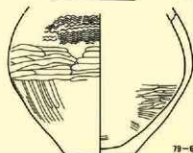
79-7



79-5



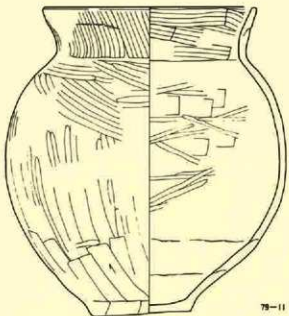
79-8



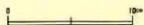
79-6



79-9



79-11



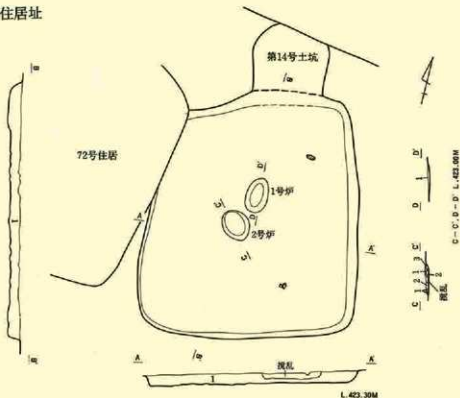
第75図 第79号住居址出土遺物(2)



第76図 第79号住居址出土遺物(3)

C地区の中央にある。第61号住居に切られている。第64号住居西側にある。本住居は焼失家で、また建て替え住居であった(ただし、焼失の復旧ではない)。建て替えは本遺跡の中では最も大規模なものであり、その拡張のあり方がよくつかめる好資料であった。平面形態は、拡張前・拡張後とも長方形を呈する。拡張前は南北長5.1m、東西長3.8mであった。拡張後は南北長7.0m、東西長5.2mを測る。方位は、N-7°57'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、拡張前で北壁高さ16cm、南壁で17cm、東壁で10cm、西壁で12cmであった。拡張後で北壁高さ40cm、南壁42cm、東壁42cm、西壁41cmである。床面は、ほぼ全面に渡って硬質床面が広がっていた。また拡張前床面は掘方面と一致しており、中央部を中心として硬質床面が存在していた。掘方には、拡張前住居が検出された。上床面より10~15cm程下に、一回り小さいプランがあり、炉や柱穴もはっきり残っていた。セクションは一応、2層に分層しているが、大きな差異、時期の相違ではなく、埋土の堆積の偶然的なものである。柱穴は、計10本が検出されている。拡張前では、支柱穴4本が検出されている。貯蔵穴は、拡張前では、南壁沿い東側にあり、平面形は円形である。南北長42cm、東西長44cm、深さ38cmである。拡張後では、同じく南壁沿い東側にあり、平面形は円形である。南北長41cm、東西長41cm、深さ43cmである。壁溝は、拡張前・拡張後とも検出されなかった。炉は、拡張後では北側中央にある。平面形は円形をなし、南北長69cm、東西長71cm、深さ13cmである。枕石とその内側に壺の胴部破片を配していた。この土器は出土状態からして土器として機能していたのではなく、枕石の補助機能であると思われる。拡張前床面にも炉が存在している(第2号炉)。平面形はほぼ円形をなし、南北長57cm、東西長58cm、深さ7cmである。中央付近に土器の破片が3片存在していた。これは枕石として使用したものであろう。その付近にのみ焼土が残っており、他には焼けた痕跡は見受けられなかった。遺物は、壺(7・8・12)、甕(2~6・9~11)、鉢(1)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第1期に所属すると思われる。

第80号住居址



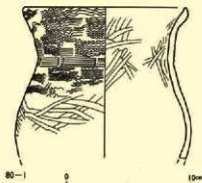
第77図 第80号住居址



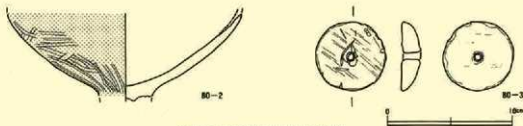
第78図 第80号住居址掘方

覆土 第1層一黒色土(きめ細かいソフトな黒色土が主体。ごく僅かにローム散子を含む。粘性・しまり無し。)

炉 第1層一明赤褐色(純粋な焼土層。粘性・しまり無し。ソフト。炭成部。)
第2層一暗黄褐色土(暗黄褐色ローム分で上層に焼土を含む。粘性無し。しまりややあり。)



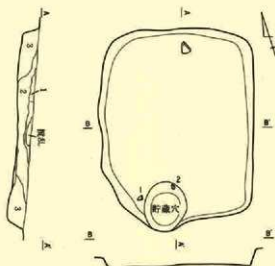
第79図 第80号住居址出土遺物(1)



第80図 第80号住居址出土遺物(2)

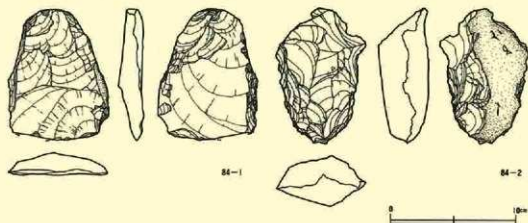
C地区の北端にある。第72号住居に切られ、第14号土坑を切っている。平面形態は、長方形を呈する。南北長6.6m、東西長4.6mを測る。方位は、N-7°56'-Wを指している。覆土は、すべてを第1層によって占められており、人為的な埋土の可能性があると思われる。壁は、北壁で高さ24cm、南壁で26cm、東壁で22cm、西壁で24cmであった。床面は、全体に軟弱で、凹凸が認められた。掘方では、床下土坑が2基検出されている。No 1は、平面不正長方形で、長軸長112cm、短軸長78cm、深さ52cmである。No 2は、平面長方形で、長軸長76cm、短軸長66cm、深さ45cmである。柱穴は、計4本検出した。床面精査時には検出されなかったが、掘方面より南壁沿いに主柱穴になりうるとされる2本のピットを検出した。また東壁沿い中央にもピット1本を検出した。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、検出されなかった。炉は、2基存在していた。1号炉の方がやや小さく浅い。どちらも単純構造で、枕石は存在していない。2号炉の第1層表面は硬質床面化しており、第80号住居廃棄時には1号炉が機能していたものであろう。1号炉は平面楕円形をなし、長軸長75cm、短軸長46cm、深さ4cmである。2号炉は平面楕円形をなし、長軸長69cm、短軸長55cm、深さ4cmである。遺物は、高坏(2)、壺(1)、紡錘車(3)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第II期に所属すると思われる。

第84号住居址



第81図 第84号住居址

覆土 第1層—暗茶褐色土(黒色土と茶褐色土が互いに雲状をなし入り組む。粘性無し。しまりややあり。)
第2層—茶褐色土(1層とほぼ同様の構成をなすが、茶褐色土分が主体。粘性無し。しまりややあり。)
第3層—明茶褐色土(1層と同様だが、茶褐色土分が2層より多く、さらに明るい。粘性無し。しまりあり。)



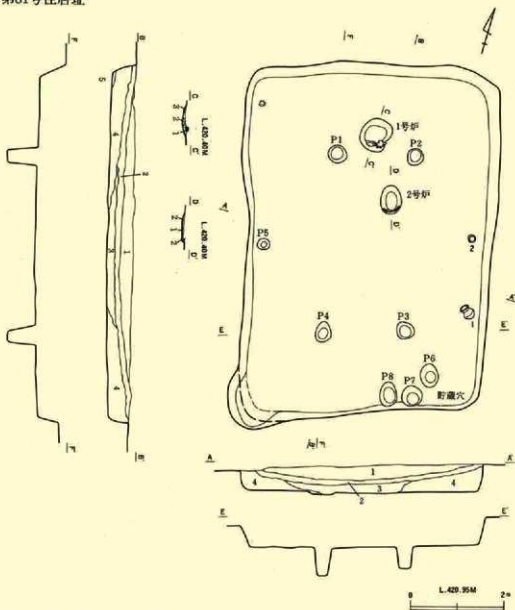
第82図 第84号住居址出土遺物

C地区の南西端にある。重複はない。第81号住居南側に位置する。方形のプランを呈しているが、南西コーナー部においてやや乱れが認められた。平面形態は、不正方形を呈する。南北長4.3m、東西長3.3mを測る。方位は、N-14°31'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ35cm、南壁で38cm、東壁で34cm、西壁で20cmであった。床面は、掘方面に一致し、全体に硬質床面が広がっている。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南壁沿いに大きな土坑を検出しているが、性格は不明である。壁溝は、検出されなかった。炉は、確認できなかった。遺物は、土器がほとんど出土せず、覆土中より比較的多くの石器及び石器の未製品が検出され(1・2)、石器製作の性格が考えられる。その他の遺構として、南側に土坑状の落ち込みがみられた。平面形は楕円形をなし、長軸長103cm、短軸長90cm、深さ16cmである。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第II期に所属すると思われる。

第81号住居址

C地区西側にある。重複はない。第78号住居西側に位置している。平面形態は、長方形を呈する。南北長7.4m、東西長5.4mを測る。方位は、N-12°29'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ51cm、南壁で45cm、東壁で58cm、西壁で40cmであった。床面は、掘方面と一致しており、全体に硬質床面が広がっていた。柱穴は、計8本検出され、ノーマルな位置に主柱穴が4本検出されている。貯蔵穴は、南壁沿いに3基の比較的大きなピットを検出したが、いずれかが貯蔵穴の可能性があるとと思われる。壁溝は、存在していない。炉は、2基検出されている。1号炉は、平面不正楕円形をなし、長軸長70cm、短軸長56cm、深さ9cmである。2号炉は、平面楕円形をなし、長軸長60cm、短軸長45cm、深さ6cmである。セクションは3層で焼土層も明確であった。遺物は、甕(1・2)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第I期に所属すると思われる。

第81号住居址

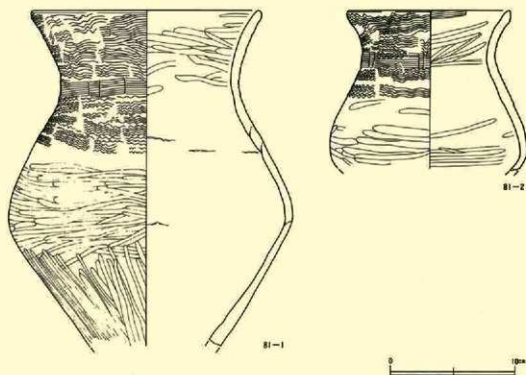


- 覆土 第1層—淡黄色砂石層(5mm~1cm大のF.P.純層。粘性・しまり無し。)
 第2層—黒色土(きめ細かい黒色土が主体。F.P.粒子を多量に含む。粘性無し。しまりあり。)
 第3層—黒色土(きめ細かい黒色土が主体。F.P.は含まずローム粒子を僅かに含む。粘性無し。しまりあり)
 第4層—明黒褐色土(黒色土と茶褐色土が互いに雲状をなす。ローム粒子を含む。また床面直上部にカーボンを含む。粘性・しまり無し。)
 第5層—黒色カーボン純層

(1・2号炉共通)

- 炉 第1層—黒褐色土(きめ細かい黒色土が主体。焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第2層—明赤褐色土(赤褐色粘土層。粘性・しまり無し。)
 第3層—明黒褐色土(黒褐色土と黄色ロームブロックとの混層。粘性・しまり無し。壁剥れあり。)

第83図 第81号住居址

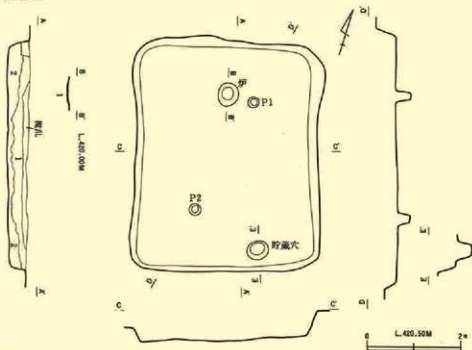


第84図 第81号住居址出土遺物

第85号住居址

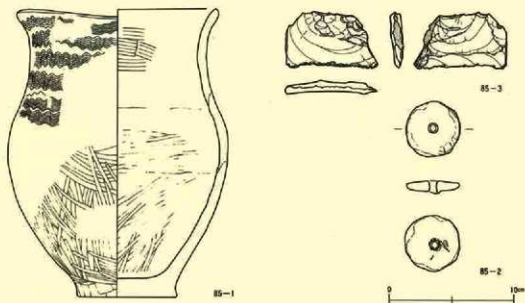
C地区の西端にある。重複はない。第81号住居南西側に位置している。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.8m、東西長4.2mを測る。方位は、N-16°59'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ44cm、南壁で37cm、東壁で56cm、西壁で28cmであった。床面は、掘方面に一致する。全体的に硬質床面が広がる。比較的凹凸が見られた。柱穴は、支柱穴と思われるビットが北東側と南西側に計2本検出された。貯蔵穴は、南壁沿い東寄りにある。平面不正円形をなし、南北長39cm、東西長46cm、深さ28cmである。壁溝は、存在していない。炉は、住居中央北側にあり、P1の西隣にある。南北に長い楕円形をなし、長軸長49cm、短軸長43cm、深さ5cmである。底面はよく焼けていた。セクションは1層で、黒色土のみであった。遺物は、甕(1)、土製紡錘車(2)、刮器(3)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第1期に所属すると思われる。

第85号住居址



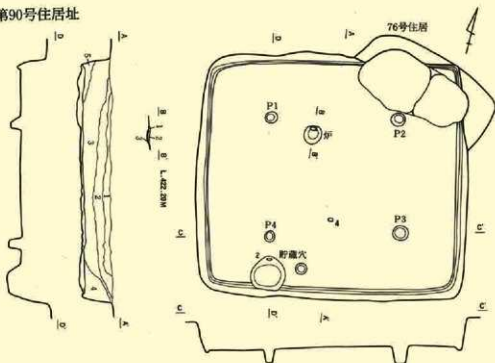
- 層土 第1層-黒色土(きめ細かい黒色土が主体。細かいローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第2層-明黒褐色土(1層の黒色土が主体。ローム小粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 伊 第1層-黒色土(黒色土が主体。換土粒を含む。粘性・しまり無し。なお、下底面は赤褐色化。)

第85図 第85号住居址

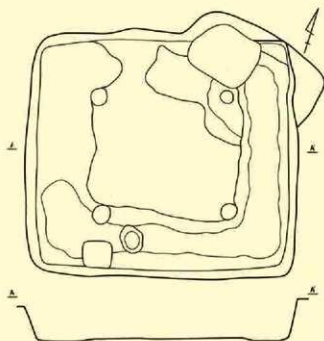


第86図 第85号住居址出土遺物

第90号住居址



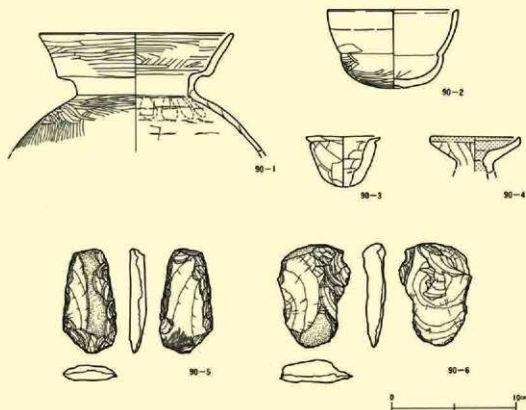
第87図 第90号住居址



第88図 第90号住居址掘方

- 覆土
- 第1層-黒色土(黒色土が主体、FP粒子を土層に含む。粘性・しまり無し。)
 - 第2層-暗茶褐色土(黒色土と茶褐色土が互いに雲状をなす。下層にローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第3層-明茶褐色土(2層の暗茶褐色土が主体。大型ロームブロックを混入。所々に黒色土がサンドイッチ状に堆積。粘性・しまり無し。ソフト。)
 - 第4層-茶褐色土(3層とほぼ同様。)
 - 第5層-黒色土(きめ細かい純粋な黒色土層。粘性・しまり無し。ソフト。)
- IP
- 第1層-灰白色土(灰白色粘土ブロック。枕石代わりか。粘性・しまり強い。)
 - 第2層-黒褐色土(黒色土が主体。赤褐色焼土粒子を少量に含む。粘性・しまり無し。)
 - 第3層-明赤褐色土(純粋な焼土層。粘性・しまり無し。)

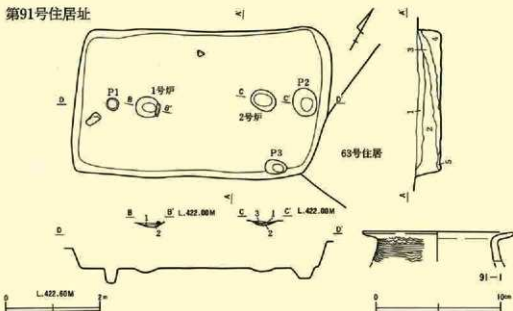
L. 422.80M 2m



第89図 第90号住居址出土遺物

C地区の北側にある。第76号住居に切られている。第91号住居東側にある。重複している第76号住居址より低く床面が造られていたため、北東コーナー部の第76号住居の床下土坑による破壊のみであった。平面形態は、長方形を呈する。南北長5.6m、東西長6.2mを測る。方位は、N-16°25'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ54cm、南壁で60cm、東壁で61cm、西壁で60cmであった。床面は、4本の主柱穴に囲まれた範囲内に硬質床面が認められた。またわずかに周囲部が高めであった。掘方は、東壁・西壁沿い及び南壁沿いに、プランの不明瞭な溝が認められた。掘り込みは東壁が最も深い。柱穴は、ノーマルな位置に4本検出されている。いずれも径が小さめで深い。貯蔵穴は、南壁沿い西側にある。平面は長方形をなし、南北長72cm、東西長55cm、深さ20cmである。壁溝は、細く比較的浅い壁溝が全周している。東壁北寄りで幅14cm、深さ7cm、北壁中央で幅10cm、深さ4cm、西壁中央で幅9cm、深さ5cm、南壁中央で幅8cm、深さ4cmであった。炉は、住居中央北寄りにある。平面不正楕円形をなし、長軸長39cm、短軸長37cm、深さ6cmである。北側に枕石が検出されている。遺物は、器台(4)、埴(2)、ミニチュア土器(3)、壺(1)、石斧(5)、割器(6)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第II期に所属すると思われる。

第91号住居址



第90図 第91号住居址

第91図 第91号住居址出土遺物

- 覆土 第1層-赤褐色土(赤褐色土が主体、明褐色粒子を多量に含む。粘性・しまり無し)
 第2層-赤褐色土(赤褐色土が主体。ロームブロック(最大4cm大)とローム粒子を多量に混入。粘性・しまり無し)
 第3層-明黒褐色土(赤褐色土と黒色土が互いに雲状をなし、これを主体に、ロームブロック、ローム粒子を含む。粘性・しまり無し)
 第4層-明赤褐色土(赤褐色土が主体。ローム小粒子・ローム分を多量に含む。粘性・しまり無し)
 第5層-黒色土(純粋な黒色土。粘性・しまり無し)

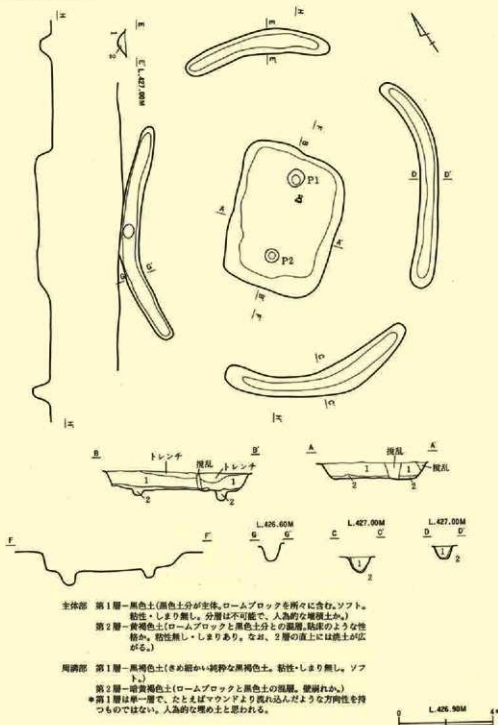
(1・2号炉とも共通)

- 炉 第1層-黒褐色土(きめ細かい黒色土が主体。焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト)
 第2層-明赤褐色土(純粋な赤褐色焼土。粘性無し。しまりあり)
 第3層-暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘床。粘性ややあり。しまり強い)

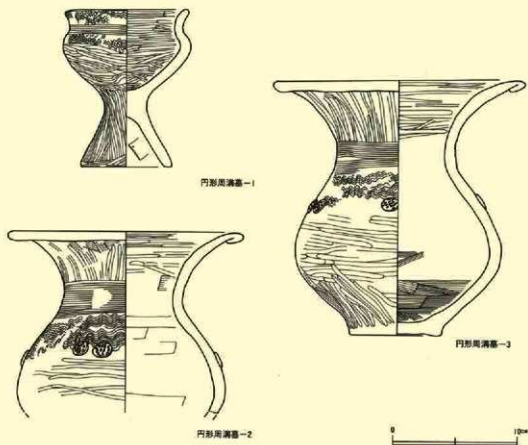
C地区の北側にある。第63号住居に切られている。第90号住居西側に位置している。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長3.1m、東西長5.3mを測る。方位は、N-114°31'-Wを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁高は、北壁で高さ52cm、南壁で50cm、東壁で55cm、西壁で44cmであった。床面は、掘方面に一致している。全体に硬質床面が広がっている。柱穴は、計3本検出され、うち主柱穴は2本である。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、存在していない。炉は、中央西側にある。比較的小さめで東西に長い楕円形をなす。枕石あり。セクションは2層に分層された。第2層が焼土で、比較的固く締まっていた(1号炉)。もう1つ東側にも認められた(2号炉)。最上層に床面が貼ってあり、1号炉以前に使用していた炉である。両方とも比較的小型で、長軸方向にやや楕円をなしている。セクションは2層である。2号炉には枕石が見られず、おそらく、抜き取られたものと思われる。1号炉は平面楕円形をなし、長軸長51cm、短軸長42cm、深さ10cmである。2号炉は平面楕円形をなし、長軸長54cm、短軸長42cm、深さ10cmである。遺物は、瓠(1)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第I期に所属すると思われる。

2. 円形周溝墓

第1号円形周溝墓



第92図 第1号円形周溝墓

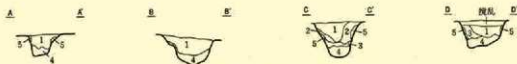
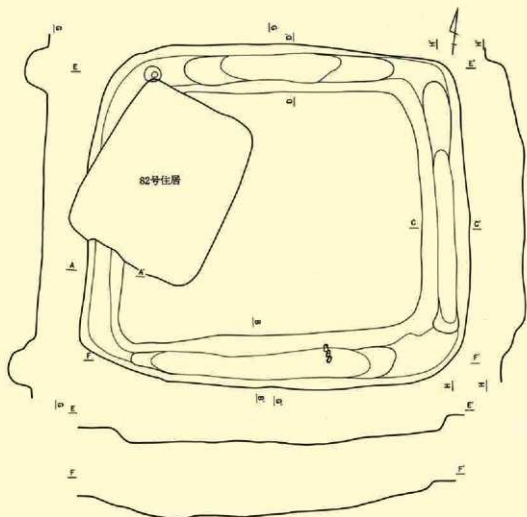


第93図 第1号円形周溝墓出土遺物

A地区ほぼ中央に位置し、西側の周溝がわずかに第1号溝に切られている。平面形は、楕円形気味の円形をなし、長軸長5.85m、短軸長5.18mである。周溝部と主体部からなっている。主体部は、歪長方形のプランを呈し、住居址のような貼床構造をしていた。長軸長152cm、短軸長111cm、深さ16cmである。その床面上には焼土が散っており、完形の台付甕が1点横倒しの状態で検出されている。また中央北側と南側に2本のピットを持っており、この主体部は意図的に家屋を模倣したものではないかと思われる節がある。P1は、平面円形で径19cm、深さ15cmである。P2は、平面円形で、径14cm、深さ11cmである。周溝は、4本に分割され、全体で歪円形をなしている。各々の周溝は断面形がUの字をなし、しっかりした掘り込みを持っている。1号溝は、長さ310cm、中央幅50cm、同深さ16cmである。2号溝は、長さ436cm、中央幅38cm、同深さ26cmである。3号溝は、長さ396cm、中央幅54cm、同深さ32cmである。4号溝は、長さ451cm、中央幅38cm、同深さ12cmである。出土遺物は、台付甕(1)、壺(2・3)が検出されている。時期は、本遺跡弥生末古墳前期編年の第Ⅰ期に所属すると思われる。(壺(2・3)は、沼田市教委の行なった試掘調査時に、主体部より検出されたものである。)

3. 方形周溝墓

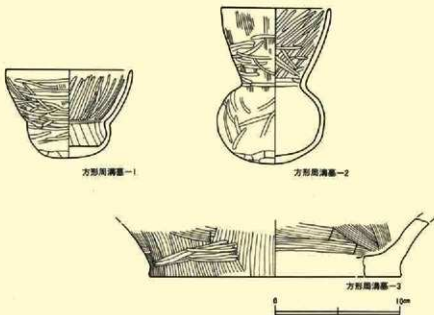
第1号方形周溝墓



- 周溝部 第1層→明黒褐色土(きめ細かい黒色土が主体。ローム粒子を少量に含む。粘性・しまり無し。サラサラ。)
 第2層→黒褐色土(1層の黒褐色土の純粋層。粘性・しまり無し。サラサラ。)
 第3層→明黒褐色土(1層の黒褐色土が主体。大型ロームブロックを多く含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第4層→暗黄褐色土(大型ロームブロックが主体。黒色土を含む。粘性無し。しまり強い。)
 第5層→増黄褐色土(壁崩れ。)

0 L. 421.60M 2m

第94図 第1号方形周溝墓出土遺物

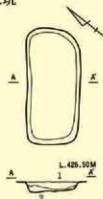


第95図 第1号方形周溝墓出土遺物

C地区南西側に位置し、第82号住居に切られている。周溝部のみで主体部は検出されなかった。周溝部は、平面隅丸正方形をなし、南北7.2m、東西8.1mである。四隅部は全て接続するタイプであるが、各辺は中央部が深く、四隅部で浅くなる構造をなしている。各辺の中央部の規模は、北辺中央で幅102cm、深さ57cmである。東辺中央で幅100cm、深さ73cmである。南辺中央で幅112cm、深さ58cmである。西辺南側で幅68cm、深さ44cmである。溝のセクションには、共通した特徴が認められた。第4層がロームブロックを多量に含む層で、住居の貼床のごとき性格をもつものと考えられる。検出された小型埴2点もこの第4層直上から検出されている。出土遺物は、小型埴(1・2)、壺底部(3)が検出されている。本遺構の時期は、弥生末古墳前期の第II期に位置づけられると思われる。

4. 土坑

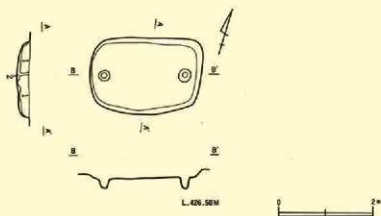
第1号土坑



第15号土坑



第2号土坑



第1号土坑

第1層—黒褐色土(きめ細かい黒色土が主体。ロームブロックを僅かに含む。粘性・しまり無し。ソフト。)

第2層—明黒褐色土(1層とほぼ同様だが、ロームブロックを多数を含む。粘性・しまり無し。)

第2号土坑

第1層—黒褐色土(きめ細かい黒色土が主体。小粒のロームブロックを僅かに含む。)

第2層—黄褐色土(ロームブロックを主体に黒色土と斑状の土層をなす。粘性なし。しまりややあり。)

※第1層は単一層で人為的な埋土と思われる。第2層は貼り床と思われる。

(1号円形周溝基主体部にも見られる)

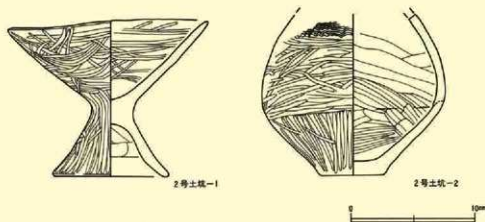
第15号土坑

第1層—黒色土(きめ細かい黒色土が主体。小ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。ソフト。)

第2層—明黒褐色土(黒色土がローム分を多く含む茶褐色化。ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。)

第3層—暗黄褐色土(ロームブロック。粘性無し。しまりあり。)

第96図 第1、2、15号土坑



第97図 第2号土坑出土遺物

第1号土坑

第1号円形周溝墓の北西側にある。覆土が第1号円形周溝墓主体部と同様な感じであるところから、1号土坑も同時期に位置づけられる。(本遺跡の奈良・平安時代の遺構覆土は、必ずF Pブロックを大量に含んでおり、弥生末・古墳前期の覆土と判別が容易である) 平面形は、不正長方形で、長軸長246cm、短軸長115cm、深さ20cmである。底面の深さは一定していない。層序は、第1層と第2層とはレンズ状堆積のようにも見受けられるが、両者には明確な相違はなく、自然堆積とは断定できない。

第2号土坑

第1号土坑西側にあり、重複はなし。平面形は不正隅丸長方形をなす。長軸長218cm、短軸長162cm、深さ24cmである。第1号円形周溝墓主体部と同様、貼床構造を持ち、床面上に高坏と壺がほぼ中央に並んでいた。また東側と西側にピットを持ち、全くの第1号円形周溝墓主体部のコピーである。周溝は、存在していなかった。柱穴の規模は、以下の通りである。P1は、平面円形で、南北30cm、東西25cm、深さ40cmである。P2は、平面円形で、南北22cm、東西24cm、深さ39cmである。出土遺物はほぼ中央に高坏(1)、壺(2)が検出されている。

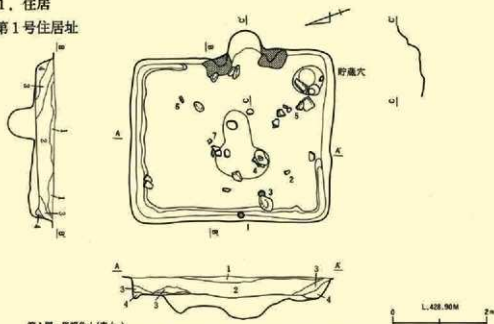
第15号土坑

第64号住居床下より検出されたもので、同住居より古いものと思われる。平面形は不正長方形をなし、長軸長309cm、短軸長86cm、深さ27cmである。底面から壁面にかけての断面形は、不正半球形状をなす。出土遺物はなし。セクションは4層に分層され、自然堆積と思われる。

第3節 平安時代

1. 住居

第1号住居址



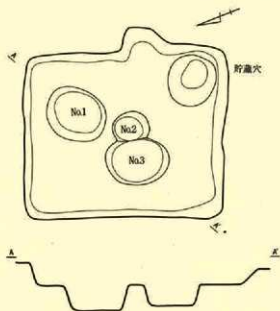
第1層—黒褐色土(表土)

第2層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F Pブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)

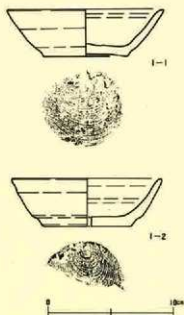
第3層—黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サラサラ。粘性・しまり無し。ソフト。)

第4層—黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し。)

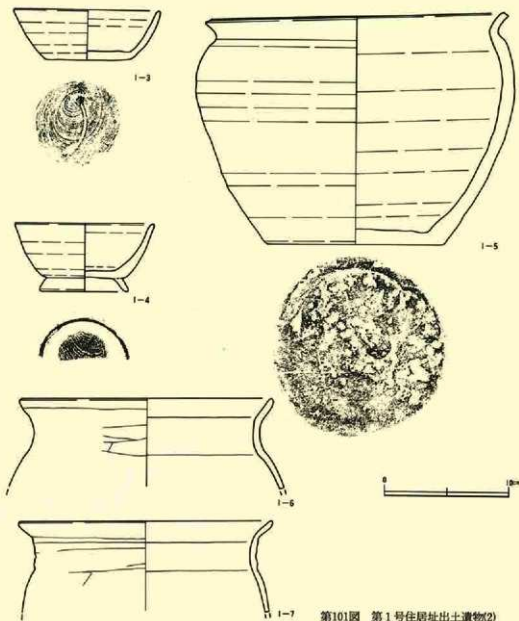
第98図 第1号住居址



第99図 第1号住居址掘方



第100図 第1号住居址出土遺物(1)

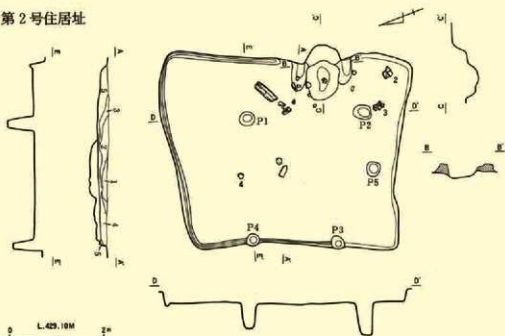


第101図 第1号住居址出土遺物(2)

A地区の東南端にある。重複はない。第2号住居の南西側に位置している。平面形態は、カマドに向かって横長の長方形を呈する。南北長4.2m、東西長4.0mを測る。方位は、N-110°10'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ35cm、南壁で39cm、東壁で38cm、西壁で30cmであった。床面は、ほぼ全面に硬質床面が存在している。住居中央部に浅い陥没が認められるが、これは床下に存在している床下土坑のためである。柱穴は、検出されていない。貯蔵穴は、南東コーナーに1基検出されている。平面は円形であるが底面は任意な楕円形状である。南北長130cm、東西長109cm、深さ58cmであった。壁溝は、カマド部と貯蔵穴部を除いて

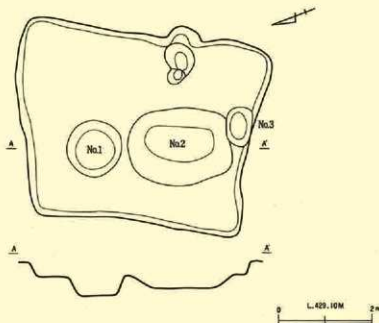
全周している。全体的に浅めで、幅・深さとも不安定であった。東壁北寄りで幅16cm、深さ7cm、北壁中央で幅20cm、深さ8cm、西壁中央で幅18cm、深さ7cm、南壁中央で幅20cm、深さ7cmであった。カマドは、東壁中央にある。両袖は全体に短く、比較的良好な白色粘土を用いて構築されている。規模は、全長89cm、袖部内幅66cm、外幅174cmである。掘方より、床下土坑が3基検出されている。No1は、住居北東側に位置し、平面形が楕円形を呈し、長軸長130cm、短軸長109cm、深さ51cmであった。底面はやや丸みを帯び、白色粘土層まで到達している。壁は垂直に立ち上がる。No2は、住居中央に位置し、平面形態は円形に近い楕円形を呈している。P3と重複しているが新旧関係は不明である。南北長79cm、東西長61cm、深さ59cmである。底面は丸みを帯び、壁は垂直に立ち上がっている。No3は、住居西側中央にあり、平面形態は楕円形である。長軸長135cm、短軸長97cm、深さ44cmである。底面はやや丸みを帯び、壁は垂直に立ち上がっている。遺物は、覆土中より、須恵器環(1・2・3)、高台付埴(4)、鉢(5)、土師器甕(6・7)が出土している。また角礫・丸礫が住居址全体よりほぼ床面直上で多く出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代偏年の第IV期に所属すると思われる。

第2号住居址



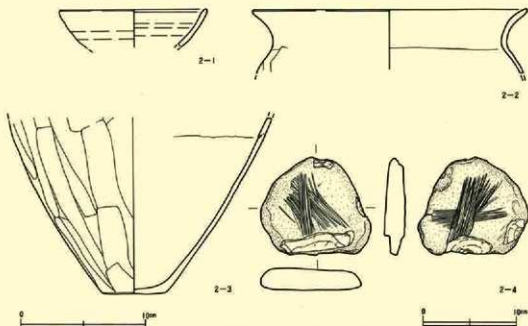
- 第1層—黒色土(パミスを含む。)
- 第2層—明黒色土(ロームブロックと黒色土との混層。パミスを少量含む。)
- 第3層—黒色土(パミスを多く含む。)
- 第4層—暗黄褐色土層(ロームブロックと黒色土との混層。パミスは含まれない。)
- 第5層—黒色土(炭化材を含む。パミスを少量含む。)

第102図 第2号住居址



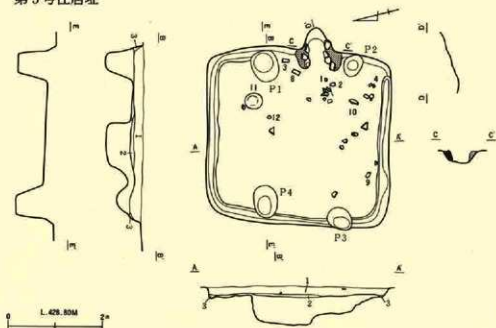
第103図 第2号住居址掘方

A地区の東南端にある。重複はない。第1号住居の北東側に位置している。平面形態はカマドに向かって横長の台形状を呈する。本遺跡の中でもこのような形態をなすものは他に類例を見ないものである。南北長3.86m（中央）、東西長4.87m（中央）で、北辺長4.14m、南辺長3.96m、東辺長5.22m、西辺長4.20mであった。方位は、N-113°26'-Eを指している。壁は、北壁で高さ25cm、南壁で28cm、東壁で27cm、西壁で19cmであった。床面は、中央部を中心として硬質床面範囲が存在していた。また床面上にはカーボンが所々に認められ、焼失家屋の可能性がある。柱穴は、5本検出されており、うち4本が主柱穴である。北側の2本はノーマルな位置にあり、南側の2本は南壁に沿って検出された。各主柱穴は、深くしっかりしている。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、北・東・西壁の3辺を巡っている。全体的に壁溝の幅は狭く、浅めである。東壁北寄りで幅10cm、深さ4cm、北壁中央で幅8cm、深さ6cm、西壁中央で幅7cm、深さ6cmであった。カマドは、東壁中央南寄りにある。両袖は白色粘土で構築している。底面の掘り込みは深い。規模は、全長117cm、袖内幅72cm、外幅128cmである。掘方より床下土坑が3基検出されている。No.1は、住居北側に位置し、平面形は円形を呈し、南北長117cm、東西長121cm、深さ63cmであった。底面はフラットで壁面はやや丸みをもって立ち上がる。No.2は、住居南側中央にあり、平面形は楕円形状を呈しているが、No.1と対象的に上端も下端も崩れている。長軸長222cm、短軸長166cm、深さ47cmである。No.3は、平面不正楕円形を呈し、長軸長83cm、短軸長55cm、深さ32cmである。遺物は、須恵器環(1)、土師器甕(2・3)、使用痕のある蔵石(4)が出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。



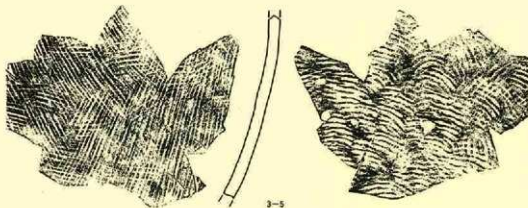
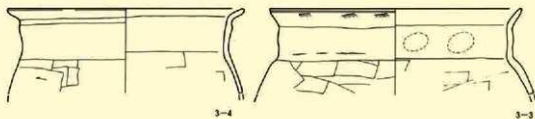
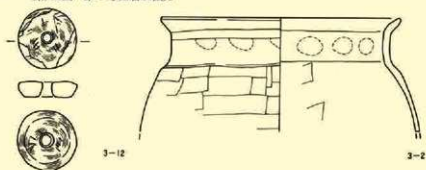
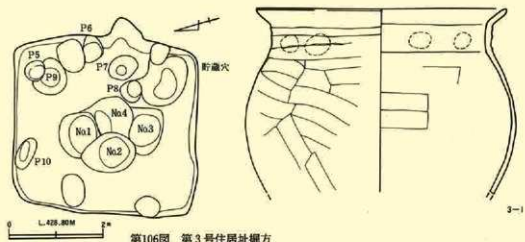
第104図 第2号住居址出土遺物

第3号住居址



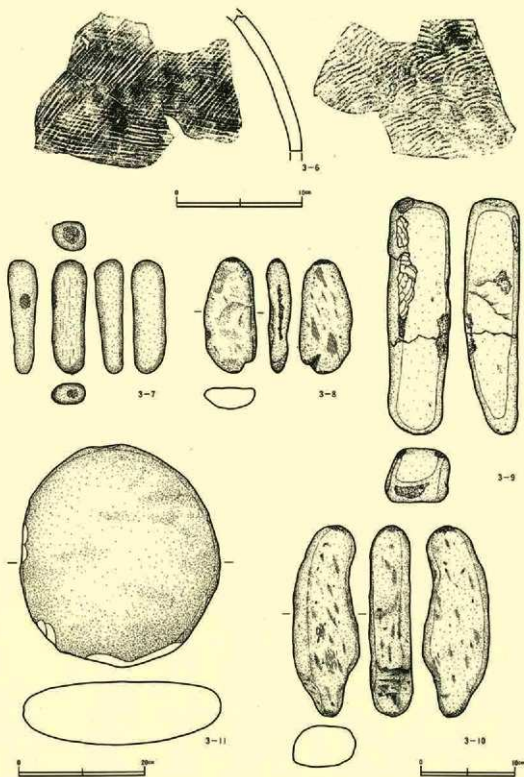
- 第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。FPブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
 第2層—黒褐色土(黒褐色土の純層。粘性・しまりややあり。)
 第3層—黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し。)

第105図 第3号住居址



第107图 第3号住居址出土遺物(1)

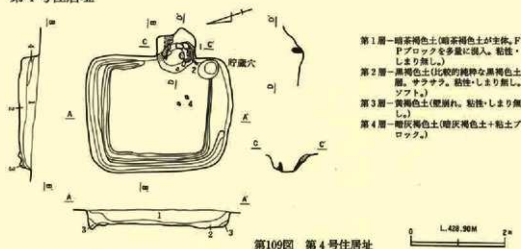




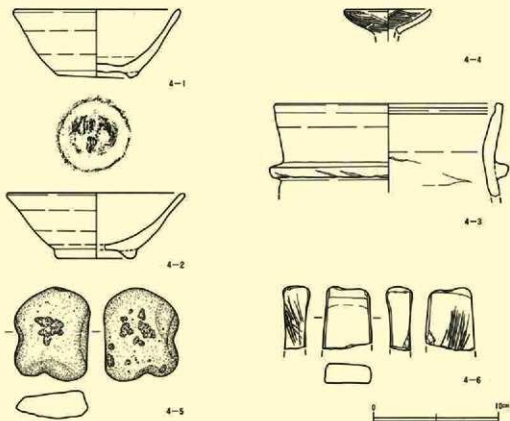
第108圖 第3号住居址出土遺物(2)

A地区の東南端にある。重複はない。第1号住居の南西側に位置している。平面形態は、ほぼ正方形を呈している。南北長3.9m、東西長4.1mを測る。方位は、N-105°57'-Eを指している。壁は、北壁で高さ16cm、南壁で13cm、東壁で22cm、西壁で24cmであった。床面は、中央部を中心として硬質床面が広がっていた。なお、中央部に浅い陥没が認められるが、その下に床下土坑が存在しているためである。柱穴は、10本あり、その内主柱穴と思われるビットが4本検出されている。P1とP2は東壁沿いにカマドを跨いであり、P3とP4は西壁沿いにある。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は不正楕円形状で、長軸長120cm、短軸長86cm、深さ45cmであった。底面から壁面にかけて半円形をなしている。壁溝は、カマド部と貯蔵穴部を除いて全周している。全体的に浅めで、幅・深さともやや不安定であった。東壁北寄りで幅22cm、深さ3cm、北壁中央で幅22cm、深さ6cm、西壁中央で幅15cm、深さ2cm、南壁中央で幅16cm、深さ6cmであった。カマドは、東壁中央南寄りにある。袖は白色粘土を用い内側を壁で補強する。規模は、全長82cm、袖部内幅31cm、袖部外幅98cm、深さ45cmである。掘方より、床下土坑が4基検出されている。No1は、住居中央に位置し、No2及びNo3と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形が楕円形状を呈し、長軸長97cm、短軸長86cm、深さ68cmであった。底面はやや丸みを帯び、壁は北側で垂直に立ち上がる。No2は、住居中央に位置し、平面形が楕円形を呈し、長軸長118cm、短軸長86cm、深さ86cmであった。深さは他に比して最も深く、白色粘土層まで到達している。底面は凹凸があり、壁は垂直に立ち上がる。No3は、住居中央に位置し、平面形が不正円形を呈し、南北長70cm、東西長101cm、深さ44cmであった。底面はほぼフラットである。No4は、住居北東側に位置し、平面形はほぼ円形を呈し、南北長80cm、東西長72cm、深さ60cmであった。底面から壁面にかけて半球形を呈している。遺物は、土師器壺(1~4)、須恵器壺(5・6)、石製紡錘車(12)、敲石(7~10)、磨石(11)が出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第V期に所属すると思われる。

第4号住居址

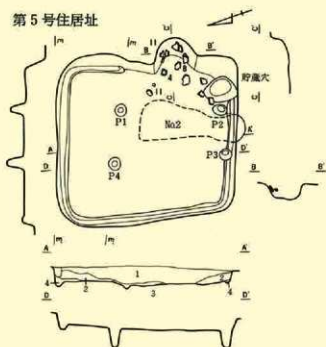


A地区の東南端にある。重複はない。第1号住居の北側に位置している。平面形態はカマドに向かってやや横長の長方形を呈する。南北長3.1m、東西長3.0mを測る。小型の住居である。また壁溝が二重に回っており、本住居は拡張住居の可能性がある。方位は、N-103°38'-Eを指している。覆土はレンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ31cm、南壁で35cm、東壁で38cm、西壁で21cmであった。床面は、ほぼ全面に硬質床面が広がっていた。若干の凹凸がある。柱穴は、検出されていない。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は円形で、南北長46cm、東西長39cm、深さ16cmであった。底面はフラットである。壁溝は、二重に検出されている。外側のものはカマド部と貯蔵穴部及び南壁を除いて巡っている。東壁北寄りで幅16cm、深さ6cm、北壁中央で幅22cm、深さ9cm、西壁中央で幅13cm、深さ5cmであった。内側は東壁北寄りで幅14cm、深さ4cm、北壁中央で幅15cm、深さ3cm、西壁中央で幅23cm、深さ5cm、南壁中央で幅7cm、深さ2cmであった。カマドは、東壁南寄りにある。住居外に中心があり、袖は白色粘土を用いて内側を隙で補強している。規模は、全長96cm、袖幅38cm、掘方幅83cmである。掘方より、床下土坑等は検出されていない。遺物は、須恵器碗(1・2)、須恵器甕(4)、土師器器台(3)、敲石(5)、砥石(6)が出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅷ期に所属すると思われる。



第110図 第4号住居址出土遺物

第5号住居址

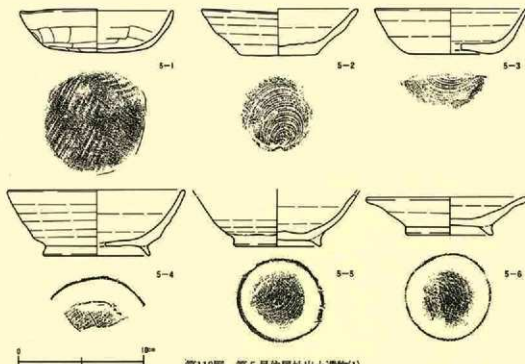


0 L. 429.20 M 2m

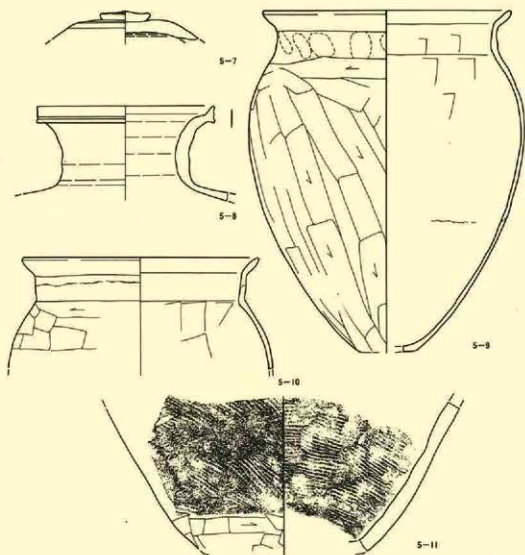
第111図 第5号住居址

第112図 第5号住居址掘方

第1層一暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体、F.P.ブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
第2層一黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サクサク。粘性・しまり無し。ソフト。)
第3層一黄褐色土(壁面。粘性・しまり無し。)
第4層一暗茶褐色土(住居床面中央部の西みに増積。きめ細かい黒色土分と黄褐色ローム粒子との混層。焼土はみられない。粘性・しまり若干あり。)



第113図 第5号住居址出土遺物(1)

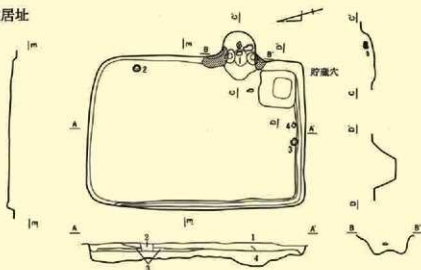


第114図 第5号住居址出土遺物(2)

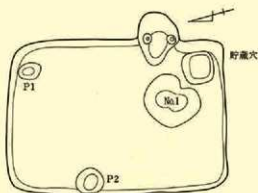
A地区の東南端にある。第1号住居の南側に位置している。平面形態はカマドに向かってやや横長の不正長方形を呈する。南北長3.9m、東西長3.8mを測る。方位は、N-106°41'-Eを指している。覆土はレンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ24cm、南壁で26cm、東壁で42cm、西壁で23cmであった。床面は、中央部から南壁沿いにかけて軽いくぼみが存在していたが、これはその下にある床下土坑の影響である。ほぼ全面に硬質床面が広がっていた。柱穴は、支柱穴と思われるピットが4本検出されている。P1とP4は住居北側のノーマルな位置にあり、P2とP3は南壁沿いにNo2の床下土坑を跨ぐようにして存在している。貯蔵穴は、南東コーナーに1基検出されている。平面は不正円形で、長軸長63cm、短軸長54cm、深さ47cmであった。底面はフラットで、壁は垂直に立ち上がっている。壁溝は、カマド部と貯蔵穴部を除いて全周している。全体

的に浅めで、幅・深さとも不安定であった。東壁北寄りで幅13cm、深さ8cm、北壁中央で幅20cm、深さ11cm、西壁中央で幅16cm、深さ8cm、南壁中央で幅14cm、深さ7cmであった。カマドは、東壁中央南寄りにある。4号住居と近似した構造であるが、袖の粘土が不良で範囲が限定できなかった。規模は、全長98cm、袖部掘方幅90cmである。掘方より、床下土坑が2基検出されている。No1は、住居中央に位置し、平面形が米俵形を呈し、長軸長161cm、短軸長99cm、深さ46cmであった。底面は掘り過ぎのため不明であるが、壁は垂直に立ち上がる。No2は、住居南側中央に位置し、平面形は南北に極端に長い長方形形状を呈している。南端が住居の南壁より少し外へ飛び出している。No1の床下土坑と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。長軸長65cm、短軸長50cm、深さ45cmであった。底面はほぼフラットをなし、壁は垂直に立ち上がる。遺物は、土師器冢(1)、土師器壺(9・10)、須恵器坏(2・3)、埴(4・5)、皿(6)、蓋(7)、須恵器壺(8・11)が出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VI期に所属すると思われる。

第6号住居址



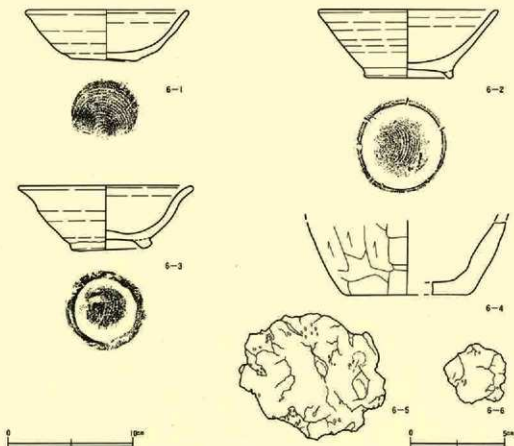
第115図 第6号住居址



第116図 第6号住居址掘方

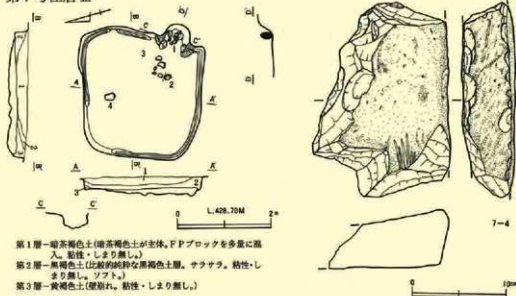
第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F Pブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
第2層—黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。セラセラ。粘性・しまり無し。ソフト。)
第3層—暗茶褐色土(上面が灰面。一部掘り過ぎ。黒色土分とロームブロックとの混層。粘性ややあり。しまり無し。ソフト。)
第4層—暗茶褐色土(住居址より新しい時期のビット。F Pと粘土分を含む。粘性ややあり。しまり無し。ソフト。)

A地区の東南側にある。重複はない。第12号住居の東側に位置している。平面形態はカマドに向かって横長の長方形を呈する。南北長4.7m、東西長3.7mを測る。方位は、N-103°3'-Eを指している。覆土は、浅めでレンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ11cm、南壁で7cm、東壁で6cm、西壁で9cmであった。床面は、湿地近くにある関係で、全体に軟弱であった。硬質床面範囲は認められない。柱穴は、2本検出されている。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は正方形で、南北長60cm、東西長60cm、深さ45cmであった。底面は丸みを帯びている。壁溝は、カマド部と貯蔵穴部を除いて全周している。西壁中央で幅14cm、深さ4cm、南壁中央で幅13cm、深さ9cmであった。カマドは、東壁南よりにある。白色粘土の袖は小さく、内側に石の抜取り痕があった。規模は、全長77cm、袖部内幅44cm、外幅103cm、深さ34cmである。掘方より、床下土坑が1基検出されている。№1は、住居側に位置し、平面不正円形を呈し、長軸長91cm、短軸長84cm、深さ36cmであった。底面はやや丸みを帯び、壁は垂直に立ち上がる。遺物は、須恵器坏(1)、埴(2・3)、土師器羽釜(4)、鉄滓(5・6)が出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅷ期に所属すると思われる。

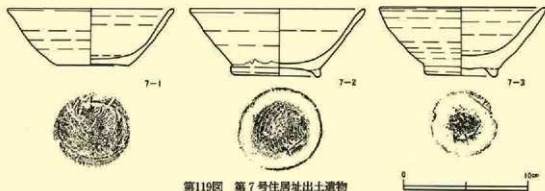


第117図 第6号住居址出土遺物

第7号住居



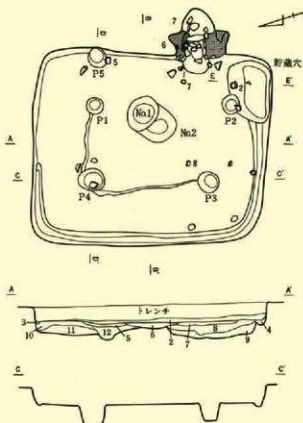
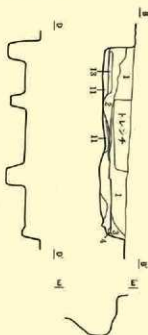
第118図 第7号住居



第119図 第7号住居出土遺物

A地区の東南端にある。重複はない。第1号掘立柱建物跡の南西側に位置している。平面形態は、不正正方形を呈する。南北長2.6m、東西長2.9mを測る。方位は、N-107°25'-Eを指している。覆土はレンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ17cm、南壁で16cm、東壁で21cm、西壁で14cmであった。床面は、カマド前面にのみ硬質床面が広がっていた。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、ほぼ全周しているが、部分的にはっきりしないところもある。東壁北寄りで幅9cm、深さ7cm、北壁中央で幅7cm、深さ4cm、西壁中央で幅9cm、深さ2cm、南壁中央で幅9cm、深さ6cmであった。カマドは、東壁南寄りにある。4号住居と近似した構造である。規模は、全長48cm、袖部内幅24cm、外幅65cm、深さ32cmである。掘方より、床下土坑等は検出されなかった。遺物は、全般的に少ないが、カマド周辺より比較的集中的に出土している。須恵器環(1)、埴(2・3)、台石(4)が出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VIII期に所属すると思われる。

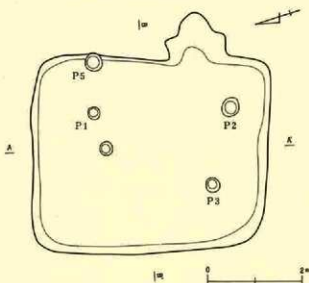
第8号住居址



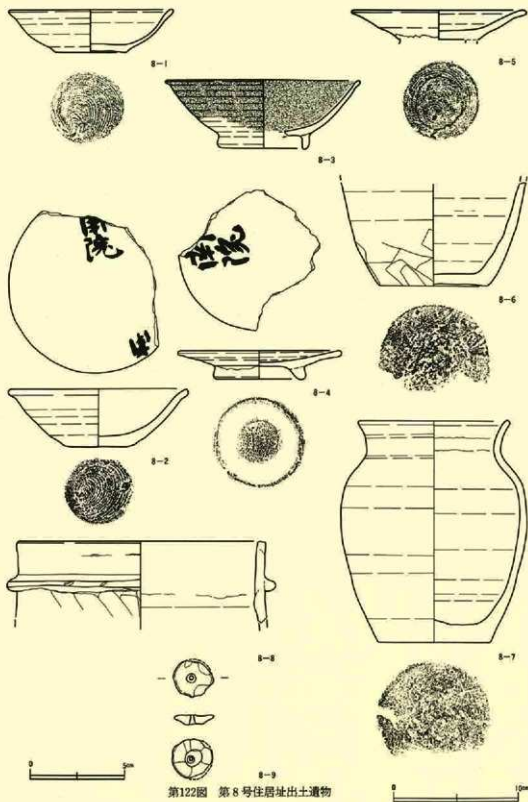
第120图 第8号住居址

L. 428.00 M

- 第1層一暗褐色土色(暗茶褐色土)が主体。F.P.P.が多少散在し、粘りあり、しまり強い。
第2層一茶褐色土(暗黄褐色土)を含む。粘性があり強い。住居跡(床面直上)に分布。
第3層一黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層)。F.P.P.、粘性、しまり無し、ソフト。
第4層一黒褐色土(黒褐色、粘性、しまり無し)。
第5層一暗褐色土色(粘土、ロームブロックと黒色の土)と混雜。粘性無し。しまり強い。よく踏み固められた性質無し。
第6層一灰茶褐色土(粘土層。F.P.、粘土、ロームブロック、黒色の土)と混雜でよくしまっている。粘性無し。
第7層一黄褐色土(灰土層、黄褐色ロームを主体とし黒色土、F.P.が散在。粘性あり。しまり強い)。
第8層一黒褐色土(黒色土を主体とし小ロームブロックを若干含む。粘性無し。しまりやや弱い)。
第9層一暗褐色土色(大ロームブロックと黒色の土)と混雜。粘性・しまりあり。
第10層一黒褐色土(黒褐色土)が主体。ロームを含む。粘性・しまり若干あり。最上層は床面であり、しまり強い。
第11層一暗黄褐色土(ローム層移積。しまりすぎ)。
第12層一黒褐色土(ほぼ第8層と同じ。上部に床面があるのは穴状ではない)。
第13層一黒褐色土(ほぼ第12層と同じ)。



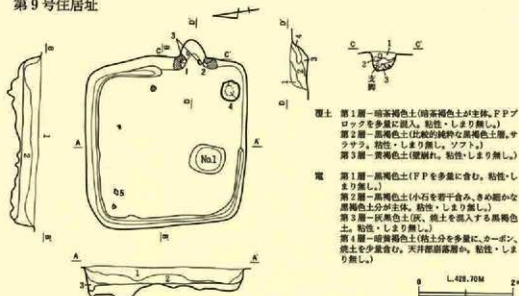
第121回 第8号住居址掘方



第122图 第8号住居址出土遺物

A地区の東側にある。重複はない。第12号住居の南側に位置している。本住居は、A地区の中でも遺存状態が最も良好であった。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長5.0m、東西長5.0mを測る。方位は、N-110°19'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしているが、第1層の占める割合が大きく、ある段階での人為的な埋土の可能性があると考えられる。壁は、北壁で高さ30cm、南壁で38cm、東壁で39cm、西壁で24cmであった。床面は、住居中央部（主柱穴に囲まれた部分）に非常に良好な硬質床面があり、またP2-P1-P4を結ぶライン上に断差があり、周囲が高くベッド状をなしていた。柱穴は、5本検出されている。そのうち主柱穴は4本で、ほぼノーマルな位置にあるが、P3のみややずれている。また北壁沿いのP5も、しっかりと深く、主柱穴ないし副柱穴であったと思われる。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は不正平行四辺形で、南北長89cm、東西長74cm、深さ37cmであった。壁溝は、住居西半部に確認されたが、明確でない部分もある。北壁中央で幅14cm、深さ6cm、西壁中央で幅20cm、深さ7cm、南壁中央で幅20cm、深さ11cmであった。カマドは、東壁中央にある。両側に粘土を貼付け、内側を礫で補強している。内部には礫が散乱していた。規模は、全長139cm、袖部内幅38cm、外幅104cm、深さ58cmである。掘方より、床下土坑が2基検出されている。No1は、平面楕円形を呈し、長軸長77cm、短軸長63cm、深さ16cmであった。No2は、平面形は不明、南北長70cm、東西長74cm、深さ12cmである。遺物は、灰釉埴(3)、須恵器坏(1・2)、皿(4・5)、羽釜(8)、小型甕(6・7)、土製紡錘車(9)が検出されている。このうち注目されるものとして須恵器坏(2)及び須恵器皿(4)に「南院」の墨書銘が記されていた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅶ期に所属すると思われる。

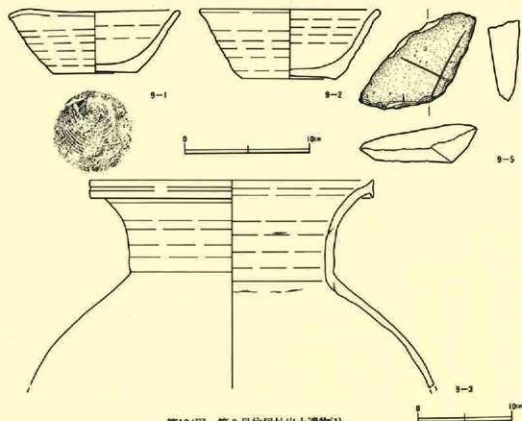
第9号住居址



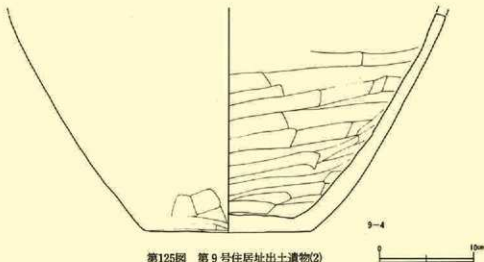
覆土 第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体、FPブ
ロックを少量に混入。粘性・しり無し。)
第2層—黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サ
ラサラ。粘性・しり無し。ソフト。)
第3層—黄褐色土(壁崩れ。粘性・しり無し。)

電 第1層—黒褐色土(FPを少量に含む。粘性・し
り無し。)
第2層—黒褐色土(小石を若干含む、きめ細かな
黒褐色土が主体。粘性・しり無し。)
第3層—灰黒色土(灰・焼土を混入する黒褐色
土。粘性・しり無し。)
第4層—暗黄褐色土(粘土分を少量に、カーボン、
焼土を少量含む。天井部崩落部。粘性・しり
無し。)

A地区の北東端にある。重複はない。第11号住居の東側に位置している。本住居は焼失家屋と思われる。住居北東側は風倒木によって攪乱されている。平面形態は、長方形を呈する。南北長3.5m、東西長4.0mを測る。方位は、N-95°29'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ41cm、南壁で36cm、東壁で38cm、西壁で31cmであった。床面は、凹凸が激しい。硬質床面は検出されなかった。柱穴、貯蔵穴は、検出されていない。壁溝は、南東コーナー部を除いてほぼ全周している。幅・深さとも全体に不安定であった。東壁北寄りで幅15cm、深さ6cm、北壁中央で幅16cm、深さ11cm、西壁中央で幅20cm、深さ7cm、南壁中央で幅13cm、深さ7cmであった。カマドは、東壁中央南寄りにある。両袖は小さく、内側に竈が貼られる。規模は、全長63cm、袖部内幅37cm、外幅93cm、深さ40cmである。壁へは約41cm切込み、最大幅は55cmである。中央部北寄りに支脚(石)が残存していた。門構えは右袖には川原石と須恵器甕口縁部破片を補強材とし、比較的良質な白色粘土を貼付けている。左袖は比較的小きな河原石1個と白色粘土である。10号住居のようなテラスは持っていない。右袖の補強石は左に比して大きくかつ深く埋め込んでいる。掘方より、床下土坑が1基検出されている。No 1は平面不正方形を呈し、長軸長73cm、短軸長59cm、深さ7cmであった。遺物は、須恵器坏(1・2)、甕(3)、甕(4)、敲石(5)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VI~VII期に所属すると思われる。

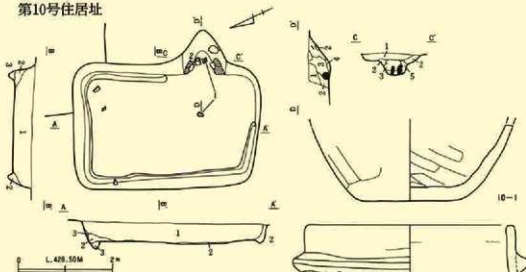


第124図 第9号住居址出土遺物(1)



第125図 第9号住居址出土遺物(2)

第10号住居址

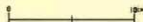


第126図 第10号住居址

覆土 第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F.P.ブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
 第2層—黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サラサラ。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層—黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し。)

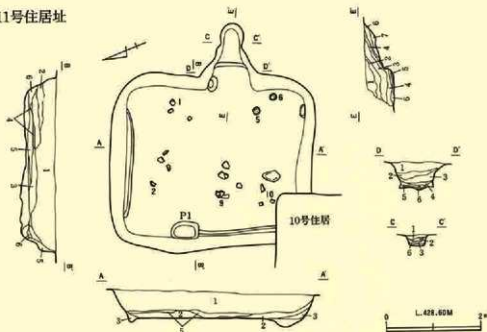
電 第1層—黒色土(細かい黒色土が主体。F.P.粘土分を含む。粘性・しまり無し。)
 第2層—黒色土(1層に近似するが、粘土分を多く含む。粘性あり。しまり若干あり。)
 第3層—灰黒色土(粘土分を多量に含む。F.P.も若干混じる。しまりあり。天井部崩落層か。)
 第4層—茶褐色土(ロームブロックと茶褐色土の混層。壁方覆土。粘性・しまり無し。)
 第5層—灰黒色土(灰黒色土粘土分が主体。小石、カーボン、ロームブロックを含む。粘性・しまり強い。)

第127図 第10号住居址出土遺物



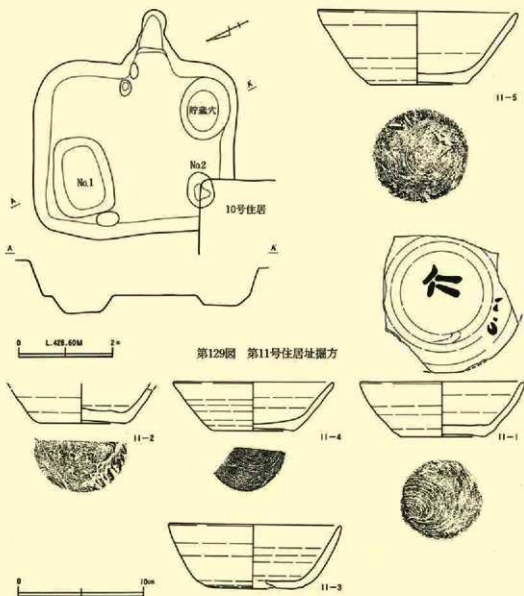
A地区の東北側にある。第9号住居の西側にあり、重複は、第11号住居址を切っている。カマドに対して極端に横長となる住居タイプである。平面形態は、長方形を呈する。南北長3.9m、東西長3.3mを測る。方位は、N-111°18'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしているようであるが、この中でも第1層の占める割合が高く、人為的埋土の可能性が考えられる。壁は、北壁で高さ41cm、南壁で34cm、東壁で42cm、西壁で39cmであった。床面は、ほぼ全面に硬質床面が広がっている。柱穴、貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、南東コーナー部付近を除いて全周する。幅は細めでしっかりしている。東壁北寄りで幅20cm、深さ12cm、北壁中央で幅24cm、深さ16cm、西壁中央で幅16cm、深さ10cm、南壁中央で幅16cm、深さ6cmであった。カマドは、東壁中央南寄りにある。規模は、全長94cm、袖部幅35cmである。壁へは約74cm切込み、幅(掘方最大幅)は50cm程度で、幅が狭い方である。中央部に支脚が直立した状態で残存していた。石製で表面がよく焼けていた。袖部は右袖がはっきりしないものの、左袖はよく残存する。すなわち、掘方の壁に混じり気の多い粘土を貼付け、それを土器で補強し、さらに石で支えていた。袖内にも石があり、補強材として使用していたものと思われる(補強の土器は羽釜破片)。門構えの石の左袖先端のものはおそらく原位置を保っており、石はやや内側に傾いたものと思われる。なお、掘方は上部にテラスを有し天井を造り易くしているものと考えられる。掘方より、床下土坑等は検出されなかった。遺物は、須恵器羽釜(1・2)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅷ期に所属すると思われる。

第11号住居址



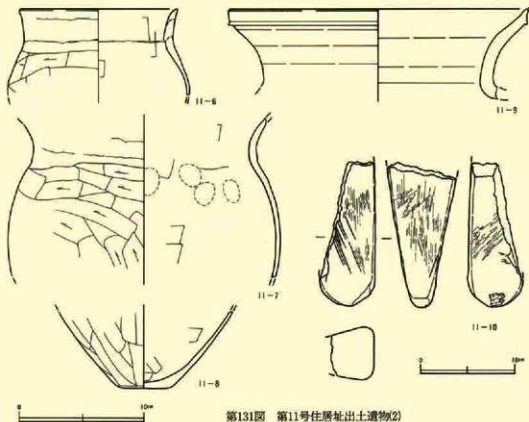
第128図 第11号住居址

- Ⅷ土 第1層一暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F Pブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
 第2層一黄褐色土(黄褐色粘土ブロックが主体。F P、黒色土を含む層。粘性あり。しまり無し。)
 第3層一暗茶褐色土(1層とはほぼ同様だが、F Pブロックは少ない。)
 第4層一黄褐色土(黄褐色粘土分と黄土、黒色土の混層。2層と同じく電よりの流出層か。粘性・しまり無し。)
 第5層一黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サラサラ。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第6層一黄褐色土(凝結れ。粘性・しまり無し。)
 Ⅸ 第1層一黒色土(黒色土が主体。F Pを含む。粘性・しまり無し。)
 第2層一暗黄褐色土(黒色土、ロームブロック、粘土の混層。第2回目の天井部崩落層。粘性無し。しまりややあり。)
 第3層一黒色土(ほぼ純粋な黒色土。小さなロームブロックを僅かに含む。粘性・しまり無し。)
 第4層一黄褐色土(黄褐色の粘土ブロックの層。第1回目の天井部崩落層。粘性・しまり無し。)
 第5層一暗赤褐色土(灰、炭土、カーボンを多量に含む層。焼成面か。粘性・しまり無し。)
 第6層一暗黄褐色土(黒色土とロームブロックの混層。凝方。粘性・しまりややあり。)
 第7層一暗黄褐色土(6層に近似、やや明るい。凝方。粘性・しまり無し。)



第129図 第11号住居址掘方

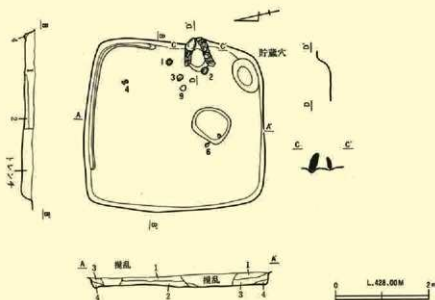
第130図 第11号住居址出土遺物(1)



第131図 第11号住居址出土遺物(2)

A地区の東南端にある。第9号住居の西側にあり、重複は、第10号住居に切られている。本住居は覆土が深く、カマド・床面が良好な状態で検出された。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.3m、東西長4.7mを測る。方位は、N-111°38'-Eを指している。覆土は深く、セクションは良好に観察された。堆積そのものは自然堆積のようであるが、第1層の占める割合が大きく、人為的埋土の可能性があると考えられる。壁は、北壁で高さ59cm、南壁で53cm、東壁で58cm、西壁で54cmであった。床面は、全体的に良好な硬質床面が広がっていた。貯蔵穴は、床面精査時には確認されなかったが、掘方で南東コーナーに楕円形のものが検出された。長軸長133cm、短軸長107cm、深さ40cmであった。壁溝は、カマド部と貯蔵穴部を除いて全周している。北壁中央で幅15cm、深さ8cm、西壁中央で幅14cm、深さ7cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。規模は、全長143cm、焼成室幅80cmである。袖らしいものは検出されなかった。また掘方では焼成室と煙道部との間に明確な段差が存在した。掘方より、床下土坑が2基検出されている。No.1は平面不正長方形を呈し、長軸長170cm、短軸長127cm、深さ52cmであった。No.2は平面不正楕円形を呈し、長軸長75cm、短軸長56cm、深さ29cmであった。柱穴は、1本検出されている。遺物は、須恵器(1~5)、(1は判読不能な墨書あり)、壺(9)、土師器甕(6~8)、台石③が検出されている。また南壁沿い寄りに平石が床面に埋め込まれた状態で検出され、たたき台として使用されたものと思われる。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属する。

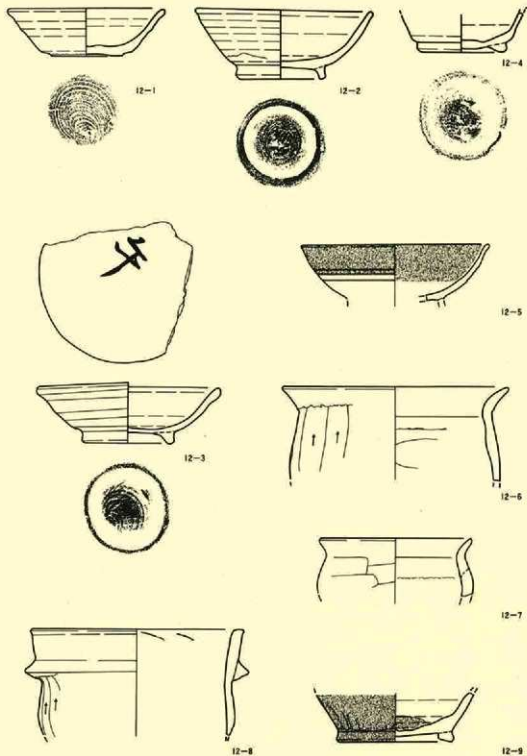
第12号住居址



- 覆土 第1層-暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F Pブロックを少量に混入。粘性・しまり無し)
 第2層-黒褐色土(黒色土とロームブロックとの混層。粘土に近似し人為的な土。粘性・しまりあり。)
 第3層-黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サラサラ。粘性・しまり無し。ソフト)
 第4層-黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し)

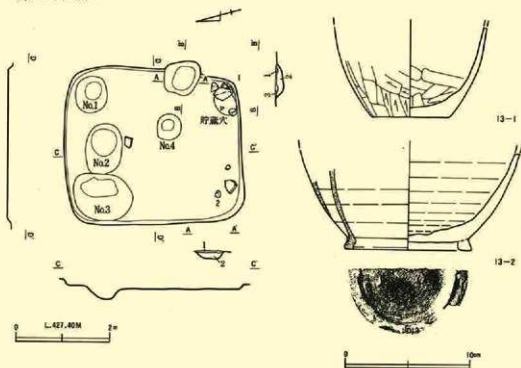
第132図 第12号住居址

A地区の東南端にある。重複はない。第2号掘立柱建物跡の南東側に位置している。A地区南側の谷部に近い位置にあり、黒色土中に切り込んで床面を造っており、かつ覆土が黒色土であるため、全般的に確認が難しかった。平面形態は、不正正方形を呈する。南北長3.8m、東西長3.8mを測る。方位は、N-105°18'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ17cm、南壁で25cm、東壁で19cm、西壁で22cmであった。床面は、黒色土中にあり、さらに地下水位に近いため、軟弱で確認が難しかった。検出された床面は凹凸が激しい。柱穴は、検出されていない。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は楕円形で、長軸長79cm、短軸長49cm、深さ19cmであった。壁溝は、東壁北寄りで幅12cm、深さ4cm、北壁中央で幅10cm、深さ4cmであった。カマドは、東壁中央にある。全体に住居外に張り出さず、焼成室の主体は住居内にある。両袖は礎を立て並べそれを白色粘土で被っていた。床面への掘り込みはわずかである。規模は、全長71cm、袖幅38cmである。掘方では床下土坑等は検出されなかった。遺物は、カマド周辺より比較的多くの遺物を検出している。灰釉埴(5)、長頸瓶(9)、須恵器環(1)、埴(2~4)、小型甕(7)、土師器甕(6)、羽釜(8)が検出されている。このうち須恵器埴(3)の内面には「午」の墨書銘が記されていた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VIII期に所属すると思われる。



第133図 第12号住居址出土遺物

第13号住居址



電 第1層一暗赤褐色土(暗赤褐色土が主体。Fブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)

第2層一黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サラサラ。粘性・しまり無し。ソフト。)

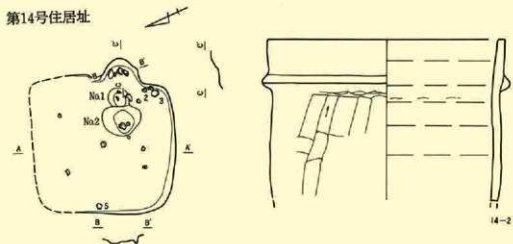
第3層一黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し。)

第134図 第13号住居址

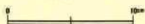
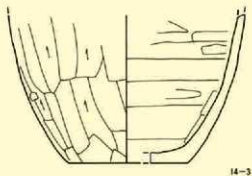
第135図 第13号住居址出土遺物

A地区の東南端にある。重複はない。第2号掘立柱建物跡の南西側に位置している。覆土が非常に浅く、確認面と床面がほとんど一致するほどであった。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長3.8m、東西長3.4mを測る。方位は、N-105°11'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ13cm、南壁で11cm、東壁で9cm、西壁で9cmであった。床面は、第12号住居と同様、黒色土中に構築し、水位に近く軟弱なため確認が難しく、かなりの部分を掘り過ぎてしまった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナー部より検出されている。平面楕円形をなし、長軸長52cm、短軸長41cm、深さ19cmである。壁溝は、床面を掘り過ぎてしまったためか、確認されなかった。カマドは、東壁中央南寄りにある。掘方部分のみ残存していた。規模は、全長73cm、袖幅77cmである。焼成室の中心は住居内にある。掘方より床下土坑が4基検出されている。No.1は平面不正円形を呈し、長軸長79cm、短軸長67cm、深さ16cmであった。No.2は平面不正楕円形を呈し、長軸長107cm、短軸長78cm、深さ22cmであった。No.3は平面不正楕円形を呈し、長軸長126cm、短軸長98cm、深さ16cmであった。No.4は平面不正円形で南北長56cm、東西長51cm、深さ11cmであった。遺物は、灰釉瓶(2)、土師器甕(1)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅶ～Ⅷ期に所属すると思われる。

第14号住居址



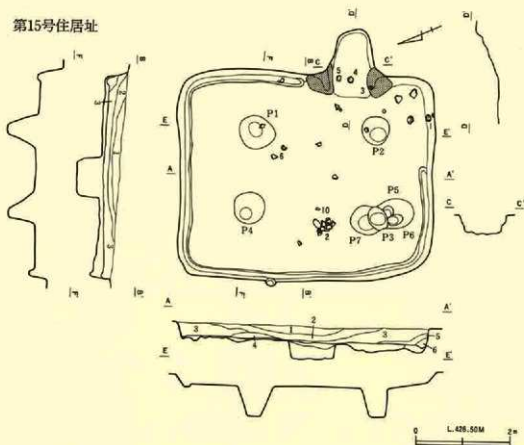
第136图 第14号住居址



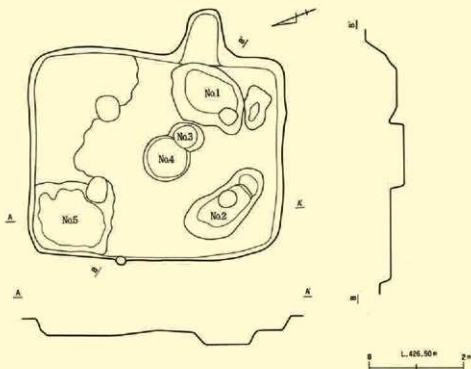
第137图 第14号住居址出土遺物

A地区の東側にある。重複はない。第2号掘立柱建物跡の北側に位置している。確認面の精査時には既にプランが不定形であった。床面・遺物・カマドが検出されたことから住居址として認識できると思われるが、住居北側半分を確定できなかった。平面形態は、カマドに向かって長方形を呈すると思われる。南北長3.0m、東西長3.3mを測る。方位は、N-107°17'-Eを指している。覆土は、ごく浅いため層位を的確に認識できなかった。壁は、南壁で9cmであった。床面は、中央部北側に硬質床面の一部が検出されている。他は軟弱で床面としては確定できなかった。掘方で床下土坑が2基検出されている。No 1は平面不正円形をなし、南北長39cm、東西長15cm、深さ15cmであった。No 2は平面不正円形で、南北長84cm、東西長63cm、深さ25cmである。柱穴、貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、確認できなかった。カマドは、東壁にある。覆土が非常に薄いため、構造は不明である。規模は、全長60cm、深さ11cmである。掘方と煙道部の一部を確認したのみで、袖は残存していなかった。遺物は、須恵器環(1)、甕(4・5)、土師器羽釜(2・3)が検出されている。また住居南側半分より大小の石が多く認められた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅳ期に所属すると思われる。

第15号住居址



第138図 第15号住居址

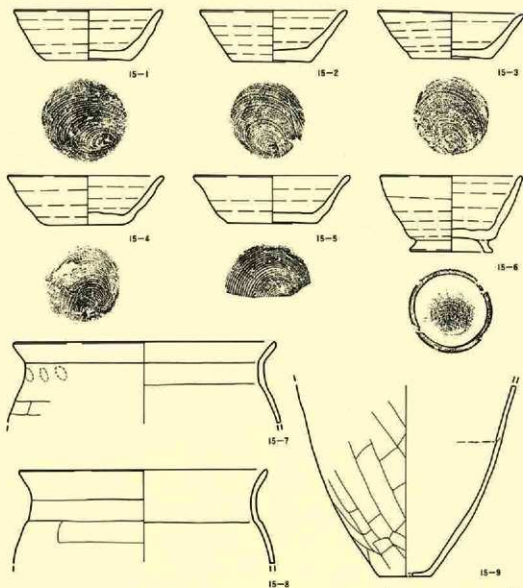


- 覆土 第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F.Pブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
 第2層—暗茶褐色土(1層に近似。やや明るい。)
 第3層—暗茶褐色土(1層に近似。大型ロームブロックを含む。)
 第4層—黄褐色土(ロームブロックと黒色土の混層。人為的なものか。断面はマウンド状をなす。貼床と同じ。粘性無し。しまり強い。)
 第5層—黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サラサラ。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第6層—黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し。)

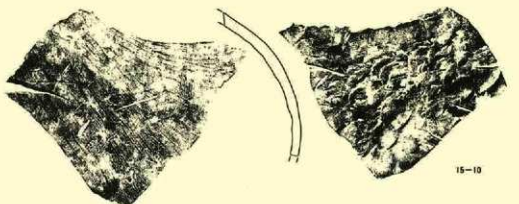
第139図 第15号住居址掘方

A地区の中央北端にある。重複はない。第20号住居の南西側に位置している。A地区の中では最も大きな住居であり、覆土も深めで、カマド・床面とも良好な遺存状態であった。平面形態は、カマドに向かって長方形を呈する。南北長5.5m、東西長4.4mを測る。方位は、N-109°40'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ26cm、南壁で34cm、東壁で38cm、西壁で18cmであった。床面は、全体に貼床で、支柱穴を囲む範囲内に硬質床面が広がっている。掘方で床下土坑が5基検出されている。No.1は平面形は不定形、南北長192cm、東西長84cm、深さ30cmであった。No.2は平面形は不定形で、南北長200cm、東西長102cm、深さ37cmであった。No.3は平面円形を呈し、南北長78cm、東西長60cm、深さ41cmであった。No.4は平面円形を呈し、南北長101cm、東西長99cm、深さ40cmであった。No.5は平面が不定形で、南北長168cm、東西長149cm、深さ21cmであった。柱穴は、7本検出され、支柱穴はノーマルな位置に4本検出されている。支柱穴はいずれも太く、しっかりしたものであった。貯蔵穴は、床面精査時には検出されず、掘方で南東コーナーに小さめの楕円形のピットが検出されたが、貯蔵穴らしくなく、貯蔵穴として認定できるか疑問である。壁溝は、南東コーナー部を除いて全周している。やや浅めであるがしっ

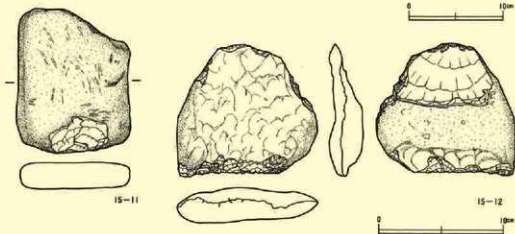
かり安定している。東壁北寄りで幅16cm、深さ7cm、北壁中央で幅14cm、深さ4cm、西壁中央で幅16cm、深さ10cm、南壁中央で幅16cm、深さ6cmであった。カマドは、東壁南寄りにある。全体に作りが大きく、コーナー部に小さな袖を持つ。補強礫はない。規模は全長145cm、袖部内幅73cm、深さ45cmである。焼成室の中心は住居壁ライン上にある。遺物は、カマドから住居中央にかけて、多くの土器・石等が検出されている。須恵器坏(1～5)、埴6)、壺10)、土器器甕(7～9)、敲石(11・12)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VI期に所属すると思われる。



第140図 第15号住居址出土遺物(1)

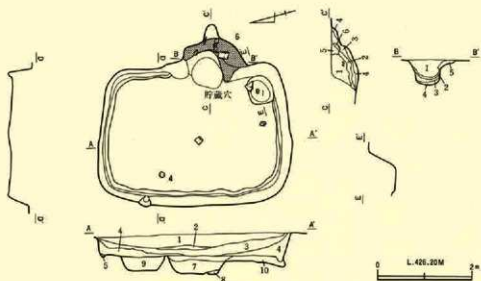


15-10

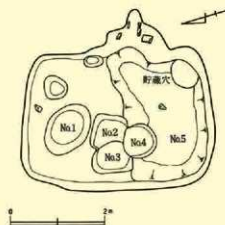


第141图 第15号住居址出土遺物(2)

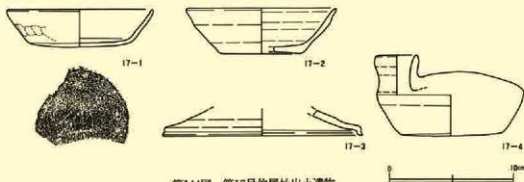
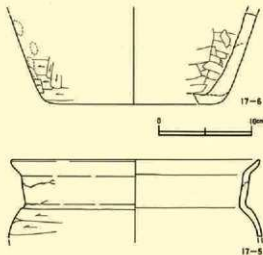
第17号住居址



第142图 第17号住居址



第143図 第17号住居址掘方



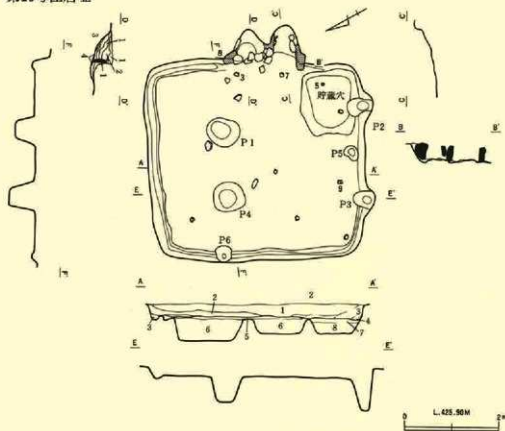
第144図 第17号住居址出土遺物

- 覆土 第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F Pブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
- 第2層—黒褐色土(F Pを含み、ロームブロックを少量混入。全体にきめの細かい黒色土分が主体。)
- 第3層—茶褐色土(F P、ロームブロックを含み、部分的に明褐色を呈す。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第4層—茶褐色土(3層に近似、明褐色を呈す。)
- 第5層—黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し。)
- 第6層—黒褐色土(上面は灰面。黒色土分が主体。ロームブロックを多量に混入。粘性・しまりあり。)
- 第7層—黄褐色土(ロームブロックが主体。黒色土を混入。粘性・しまり若干あり。)
- 第8層—灰黄色土(灰黄色粘土分が主体。粘性あり。しまり無し。壁崩れ。)
- 第9層—灰黄色土(ロームブロック、白色粘土、黒色土、カーボンの混入。最上面は灰面。粘性。しまり無し。ただし床面はしまっている。)
- 第10層—黄褐色土(大型ロームブロックが主体。若干黒色土を混入。粘性あり、しまり強い。)
- 竈 第1層—茶褐色土(茶褐色土が主体。F P、ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第2層—灰黄色土(粘土ブロック及び粘土分が主体。天井部崩落層。粘性強い。しまりややあり。)
- 第3層—暗赤褐色土(焼土、カーボンを多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。焼成面。)
- 第4層—黒色土(黒色土と黄色ロームとの混層。粘性あり。しまりややあり。面方。)
- 第5層—灰白色土(白色粘土が主体。焼土、カーボンを含む。天井部の残存。粘性あり。しまり強い。)
- 第6層—暗茶褐色土(5より粘土分が少ないが天井部に焼土を僅かに含む。下部に土器を貼り付けている。粘性・しまりあり。)

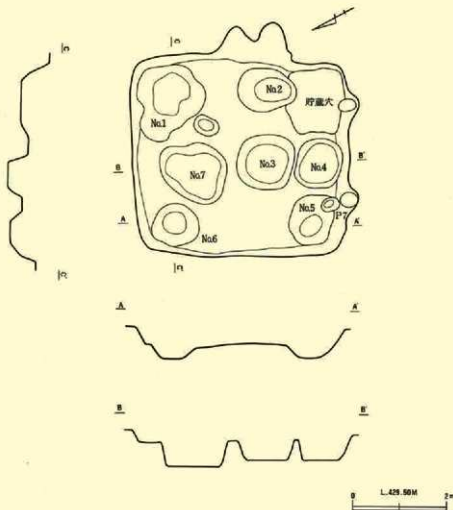
A地区の中央南寄りにある。重複はない。第15号住居の南側に位置している。平面形態は、歪台形を呈する。南北長4.4m、東西長3.8mを測る。方位は、N-102°6'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ36cm、南壁で50cm、東壁で41cm、西壁で43cmであった。床面は、中央部付近を中心として硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が5基検出されている。中央北側に1基、中央西寄りに2基検出されている。後者には重複関係があり、西側の

ほうがより新しい。覆土は三者とも単一層か、それに近く、ロームブロックが多く混入している。人為的埋土と考えられる。No 1 は、平面楕円形を呈し、長軸長120cm、短軸長87cm、深さ34cmであった。No 2 は平面方形状を呈すると思われ、南北長76cm、東西長77cmで、深さ38cmであった。No 3 は平面形は不明、南北長88cm、東西長53cm、深さ38cmであった。No 4 は平面円形で、南北長は不明、東西長71cm、深さ40cmであった。No 5 は平面不正方形で、南北長176cm、東西長251cm、深さ25cmであった。柱穴は、2本検出されている。主柱穴ではないと思われる。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は不正長方形で、長軸長61cm、短軸長52cm、深さ10cmであった。壁溝は、南壁半分を除いて全周している。全体的にしっかりした掘り込みを持っていた。東壁北寄りで幅12cm、深さ9cm、北壁中央で幅10cm、深さ3cm、西壁中央で幅12cm、深さ3cm、南壁中央で幅15cm、深さ8cmであった。カマドは、東壁中央にある。規模は、全長101cm、袖部幅73cmである。左袖から煙道部にかけて、灰白色粘土による袖とブリッジが残存していた。粘土をどけてみると石が使用されていた。遺物は、須恵器坏(1・2)、蓋(3)、平瓶(4)、鉢(6)、土師器甕(5)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第V期に所属すると思われる。

第16号住居址



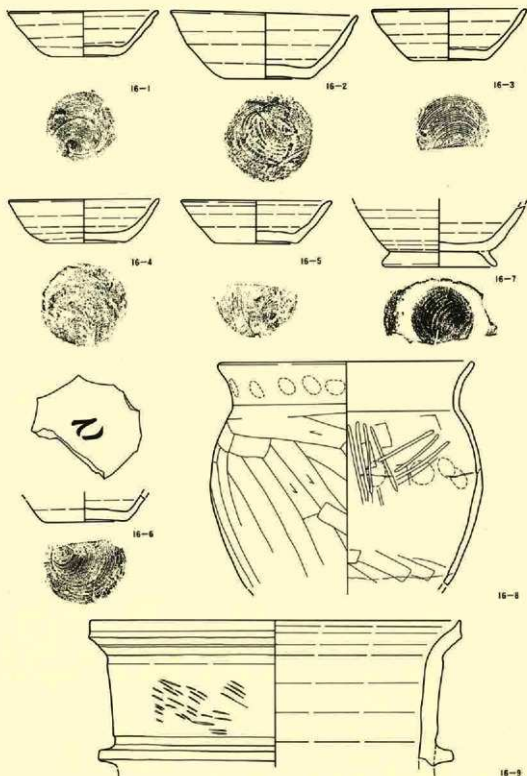
第145図 第16号住居址



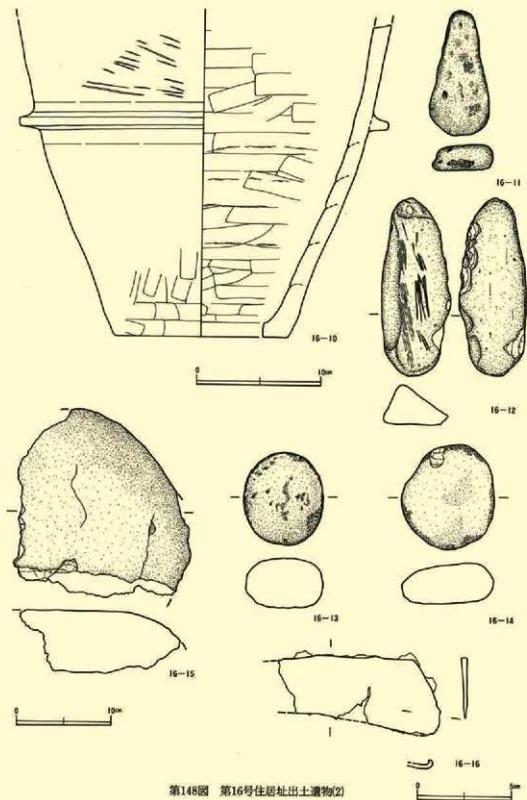
- 覆土 第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F Pブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
 第2層—赤褐色土(F P、ロームブロック。粘土分の混層。粘性・しまりあり。)
 第3層—黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サラサラ。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層—黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し。)
 第5層—黒褐色土(黒色土分が主体。F P、ロームブロックを若干含む。最上面が床面。粘性無し。しまり強い。)
 第6層—褐色土(大型ロームブロックと黒色土との混層。最上面が床面。本住居は建て替えがあったか。粘性無し。しまりあり。)
 第7層—灰黒褐色土(粘土分、ロームブロック、F Pの混層。新住居の床下土壌覆土。最上面は床面で、粘性無し。しまり強い。以下は粘性無し。しまり弱い。)
 第8層—黒褐色土(小ロームブロックと黒色土との混層。粘土分を含まない点で7層と異なる。粘性・しまり無し。)
 電 第1層—暗黄白色土(黄白色粘土とロームブロックの混層。粘性ややあり。しまりあり。)
 第2層—灰黒褐色土(黒褐色土分が主体。粘土分を多量に、カーボンを僅かに含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第3層—灰黒褐色土(2層とよく近似。灰色粘土分。黒褐色土の混層。粘性・しまり無し。)
 第4層—黒色土(黒色土分が主体。焼土を僅かに混入。粘性・しまり無し。)

第146図 第16号住居址掘方

A地区の中央北端にある。重複はない。第15号住居の西側に位置している。本住居は明らかに建て替えを行っている。またそれに伴ってカマドも建て替えを行っており、古いカマドを意識的に破壊し、密閉している。また床下土坑が多数検出され注目される。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.6m、東西長4.9mを測る。方位は、N-112°58'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ29cm、南壁で30cm、東壁で34cm、西壁で10cmであった。床面は、中央部を中心として硬質床面が広がっていた。ほぼ全面貼床である。また掘方セクションでは、現床面の下に、さらにもう1枚の床面を確認し、本住居が建て替えの住居であることを確認した。床下土坑は、7基検出されている。No 1は平面は不定形で、南北長171cm、短軸長148cm、深さ34cmであった。No 2は平面不正楕円形を呈し、長軸長126cm、短軸長93cm、深さ36cmであった。No 3は平面円形を呈し、南北長119cm、東西長119cm、深さ46cmであった。No 4は平面不正円形を呈し、南北長126cm、東西長93cm、深さ46cmであった。No 5は平面不正円形を呈し、南北長107cm、東西長92cm、深さ48cmであった。No 6は平面不正円形を呈し、南北長102cm、東西長92cm、深さ53cmであった。No 7は平面不正方形を呈し、長軸長148cm、短軸長124cm、深さ60cmであった。柱穴は、7本検出され、そのうち主柱穴と思われるビットを4本を検出している。主柱穴P1とP4はノーマルな位置にあり、P2とP3は南壁沿いにあり、住居の壁より飛び出すように存在している。またP1・P4に比して径が格段に狭くなっている。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されているが、床下土坑中に造られていたもので、プラン・深さともはっきりしないところがあった。平面は不正長方形で、南北長134cm、東西長130cm、深さ36cmであった。壁溝は、南壁があまりはつきりしなかったが、残りは全周している。東壁北寄りで幅18cm、深さ6cm、北壁中央で幅18cm、深さ9cm、西壁中央で幅15cm、深さ6cm、南壁中央で幅12cm、深さ5cmであった。カマドは、東壁中央には2基のカマドが検出された。南側を1号、北側を2号と呼ぶ。本住居平面精査の段階で、2号は住居内に袖・焼土等の広がりを持たず、本住居廃棄時点では1号が機能していたことが容易に確認された。2号はそれ以前に意識的に破壊・密閉されていたものである。2号を切開してみると、まず袖石が両側に残存し、その間に2本の丸石を立て、焼却口を密閉していることが判明した。かつ、天井部には厚く黄白色粘土が敷かれ、つまり、カマド内部に土を充填したのち、石と粘土を用いて封鎖した状態が観察された。縦断セクションでは天井部の粘土層以下に2枚の天井部崩落層が認められた。1号は、両側に白色粘土の袖を持ち、その内側を立て並べた隙で補強していた。床面への掘り込みは行っていなかった。遺物は、須恵器坏(1~6)、埴(7)、羽釜(9)、甗(10)、土師器甕(8)、台石(5)、敲石(11~14)、鉄製鏃(16)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VI期に所属すると思われる。

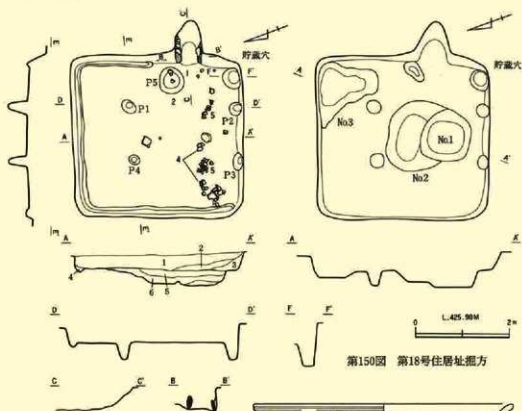


第147图 第16号住居址出土遺物(1)



第148圖 第16号住居址出土遺物(2)

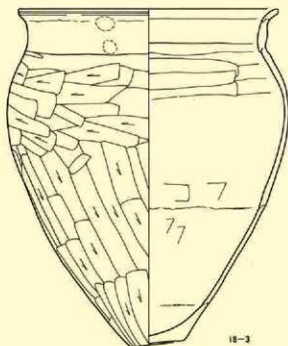
第18号住居址



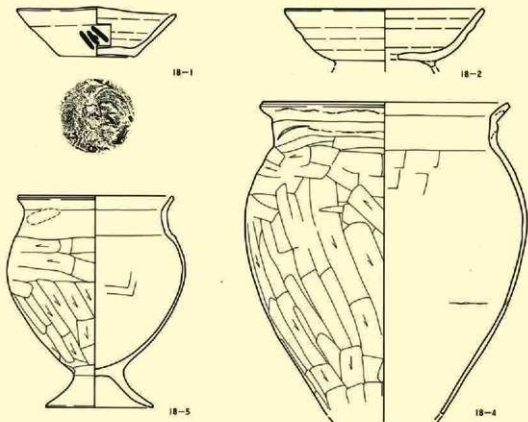
第150図 第18号住居址掘方

第149図 第18号住居址

第1層-暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F Pブロックを少量に混入。粘性・しまり無し。)
 第2層-茶褐色土(F Pは少量。ロームブロックを少量に含む。粘性・しまり無し。)
 第3層-黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サラサラ。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層-黄褐色土(硬固。粘性・しまり無し。)
 第5層-暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。黒色土が5層より多く混入しているの
 で黒色が強い。粘性・しまり弱い。ただ上面は
 床面のためしまっている。)
 第6層-黄褐色土(黒色土分とローム分との混
 層。ロームとローム分と小ブロックよりなる。
 黒色土分は5層より少ない。粘性・しまり弱い。)



第151図 第18号住居址出土遺物(1)

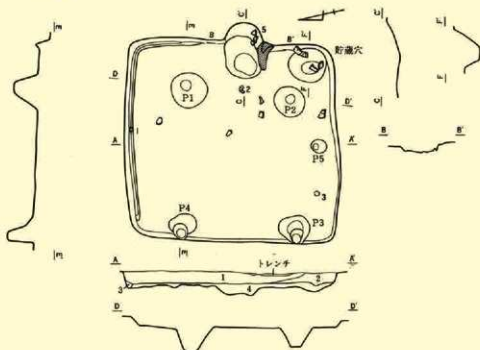


第152図 第18号住居址出土遺物(2)

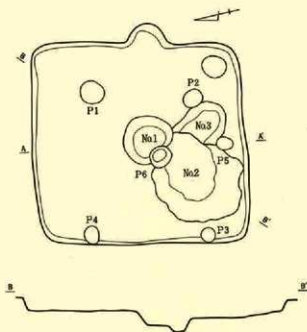


A地区の中央西寄りにある。重複はない。第16号住居の南西側に位置する。平面形態は、正方形を呈する。南北長3.6m、東西長4.1m。方位は、N-107°3'-Eを指す。覆土は、レンス状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ29cm、南壁で38cm、東壁で34cm、西壁で22cm。床面は、主柱穴に挟まれる部分を中心に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が3基検出される。大きな土坑で、主柱穴4本に挟まれる位置にある。No 1は平面不正方形で南北長107cm、東西長110cm、深さ44cm。No 2は平面不正長方形で南北長120cm、東西長151cm、深さ25cm。No 3は平面不正台形で、南北長130cm、東西長(中央)80cm、深さ23cmである。柱穴は5本検出し、主柱穴と思われるピットは4本で、比較的細めである。貯蔵穴は南東コーナーに検出される。平面は不正円形で、南北長44cm、東西長36cm、深さ49cm。壁溝は、南壁を除いて全周する。比較的深くしっかりしている。東壁北寄りで幅12cm、深さ5cm、北壁中央で幅18cm、深さ7cm、西壁中央で幅18cm、深さ8cmである。カマドは東壁南寄りにある。両側に白色粘土と礫を貼り付けている。規模は全長95cm、袖部幅34cmである。焼成室は住居壁ライン上にある。遺物は、須恵器環(1)、埴(2)、土師器台付甕(5)、甕(3・4)が検出される。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VII期に所属すると思われる。

第19号住居址



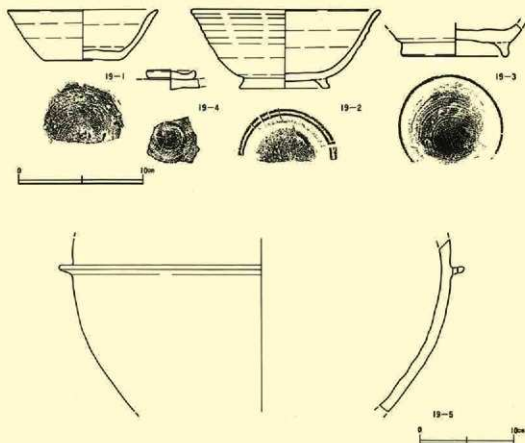
第153図 第19号住居址



- 第1層—黒色土(黒色土分が主体。F P、
ロームブロックを混入。粘性・しまりやや
あり。)
- 第2層—黄褐色土(ローム分が主体。黒色土
分僅かに含む。粘性・しまりややあり)
- 第3層—黄褐色土(ロームブロックと黒色土
分との混層。粘性・しまりややあり。)
- 第4層—黒色土(黒色土分の純粋な層。粘
性・しまり無し。)

第154図 第19号住居址掘方

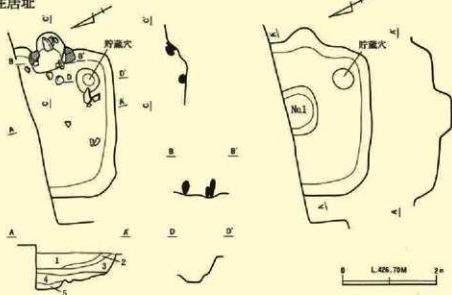
0 L. 425.50M 2m



第155図 第19号住居址出土遺物

A地区の西端にある。重複はない。第18号住居の北西側に位置している。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.6m、東西長4.6mを測る。方位は、N-101°11'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ26cm、南壁で21cm、東壁で17cm、西壁で18cmであった。床面は、支柱穴に挟まれる部分を中心として、硬質床面が広がっていた。貼床である。掘方で床下土坑が3基検出されている。No.1は平面不正円形を呈し、南北長107cm、東西長102cm、深さ48cmであった。No.2は平面不正楕円形で長軸長214cm、短軸長172cm、深さ33cmである。No.3は平面不正楕円形上で、長軸長111cm、短軸長88cm、深さ20cmである。柱穴は、5本検出しており、そのうち支柱穴と思われるビットを4本検出している。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は不正円形で、南北長83cm、東西長73cm、深さ34cmであった。壁溝は、北壁のみ検出された。東壁北寄りで幅12cm、深さ8cm、北壁中央で幅14cm、深さ9cmであった。カマドは、東壁中央にある。焼成室の中心は住居内にある。左袖のみ残存していた。底面は床面をわずかに掘り込んでいる。規模は全長118cm、袖部幅70cmである。遺物は、須恵器坏(1)、埴(2・3)、蓋(4)、壺(5)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。

第20号住居址



第156図 第20号住居址

第157図 第20号住居址掘方

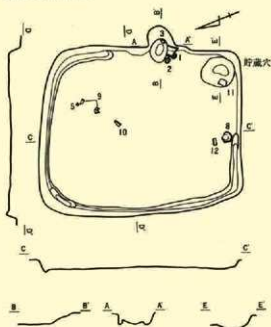
- 覆土 第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F.D.ブロックを多量に混入。粘性・しり無し。)
 第2層—茶褐色土(F.D.、ロームブロックを含む。粘性・しり無し。)
 第3層—黒褐色土(比較的純粋な黒褐色土層。サラサラ。粘性・しり無し。ソフト。)
 第4層—暗茶褐色土(大量ロームブロックと黒色土との混層。粘性無し。しり弱い。最上層のみ硬い。)
 第5層—黒褐色土(黒色土分が主体。小ロームブロックが混じる。粘性・しり無し。)

A地区の中央北端にある。重複はない。調査区外にかかるため半分のみ調査できた。第15号住居の北東側に位置している。平面形態は、方形を呈する。東西長は3.5mを測る。方位は、N-114°49'-Eを指している。覆土はレンズ状堆積をなしていた。壁は、南壁で41cm、東壁で41cm、西壁で48cmであった。床面は、カマド全面を中心として、硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が1基検出されている。No.1は平面不正円形を呈し、南北長66cm、東西長103cm、深さ47cmであった。底面はやや丸みを帯び、壁は垂直に立ち上がる。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナー付近に検出されている。平面はほぼ円形で、南北長49cm、東西長52cm、深さ13cmであった。壁溝は、検出されなかった。カマドは、東壁にある。規模は、全長81cm、袖部幅98cmである。残存状態は良好であった。袖は白色粘土と石を用いて構築している。遺物は、小片で復元実測に耐えない物であった。器種は弱いコの字型口縁をなす土師器甕、煙し焼成の須恵器坏である。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。

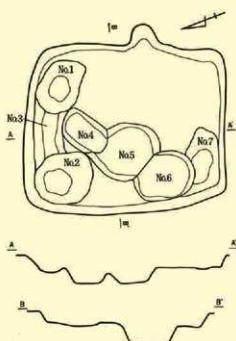
第21号住居址

A地区の西側にある。重複はない。第25号住居の西側に位置している。平面形態は、歪長方形を呈する。南北長4.3m、東西長3.9mを測る。方位は、N-105°46'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ19cm、南壁で21cm、東壁で24cm、西壁で12cmであった。床面は、地下水位に近いので全体に軟弱で、確認が困難であった。カマド前面に硬質床面が

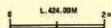
第21号住居址



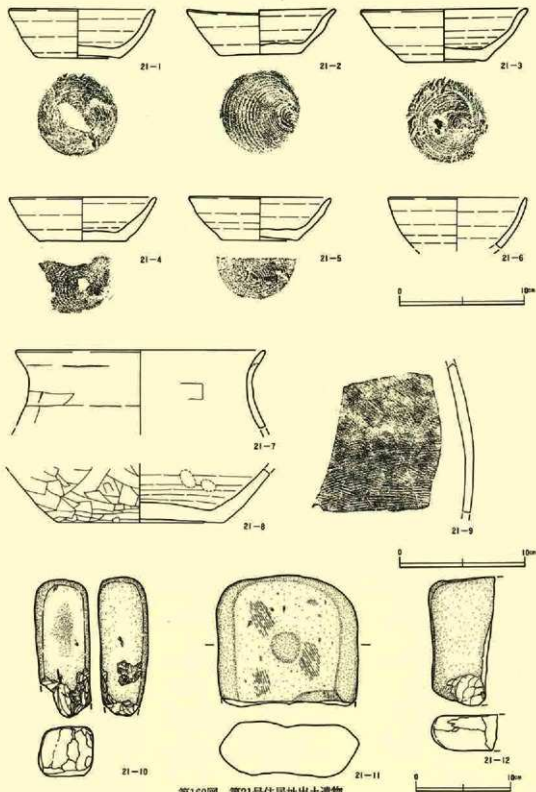
第158図 第21号住居址



第159図 第21号住居址掘方

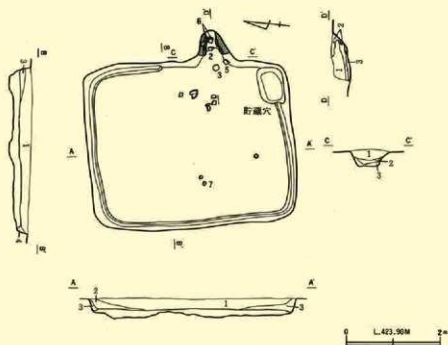


存在していたことを確認した。掘方で床下土坑が7基検出されている。住居中央から西寄りにかけて2基の床下土坑が検出されている。北側の1基が長方形プランを呈し、南側の2基は円形プランをなし、3基ともそれぞれ重複している。また北壁沿い及び南西コーナーにプランの不明確な落込みが検出されている。No. 1は平面不正楕円形で、長軸長118cm、短軸長88cm、深さ20cmであった。No. 2は平面不正楕円形で、長軸長130cm、短軸長113cm、深さ24cmであった。No. 3は平面帯状をなし、幅62cm、深さ12cmであった。No. 4は平面不正方形で、長軸長107cm、短軸長71cm、深さ47cmであった。No. 5は平面不正円形で、南北120cm、東西124cm、深さ48cmであった。No. 6は平面不正円形で、南北133cm、東西102cm、深さ48cmであった。No. 7は平面不定形で、南北135cm、東西71cm、深さ20cmであった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は楕円形で、長軸長73cm、短軸長65cm、深さ11cmであった。壁溝は、北壁・西壁・南壁の一部が認められた。北側が最もしっかりしており、他は幅も深さも一定していない。東壁北寄りで幅19cm、深さ5cm、北壁中央で幅10cm、深さ4cm、西壁中央で幅11cm、深さ5cm、南壁中央で幅16cm、深さ4cmであった。カマドは、東壁中央にある。袖は検出されなかった。底面の掘り込みはきわめてわずかであった。規模は、全長78cm、袖部内幅37cmである。遺物は、須恵器環(1～6)、甕(8・9)、土師器甕(7)、台石(10・12)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。



第160圖 第21号住居址出土遺物

第22号住居址



第161図 第22号住居址

覆土 第1層一暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F Pブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)

第2層一茶褐色土(1層とほぼ同様だが、若干黒色が強い。粘性・しまりややあり。)

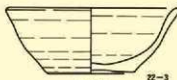
第3層一黒褐色土(黒褐色土の純層。粘性・しまりややあり。)

第4層一黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し。)

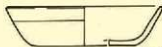
竈 第1層一黒褐色土(きめの細かい黒色土分が主体。僅かにロームブロックが混じる。粘性・しまりあり。)

第2層一灰白色土(灰白色粘土分が主体。黒色土分を混入。天井部の崩落層。粘性・しまりあり。)

第3層一黒色土(黒色土と焼土・粘土の混層。粘性・しまりあり。)



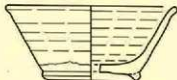
22-3



22-1



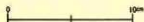
22-2

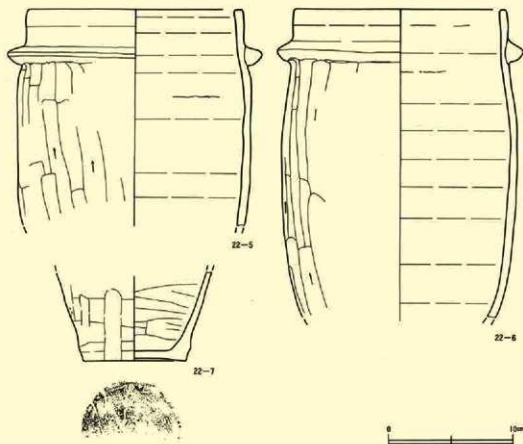


22-4



第162図 第22号住居址出土遺物(1)

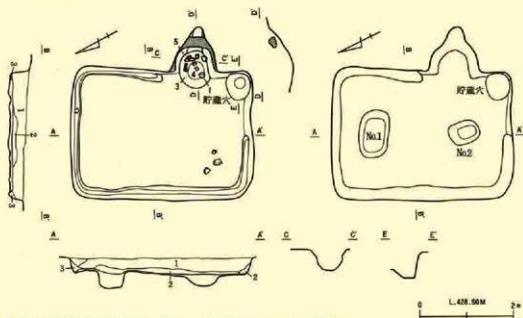




第163図 第22号住居址出土遺物(2)

A地区の北西端にある。重複はない。第21号住居の北西側に位置している。第21号住居と同様に、地下水位に近く、湧水のため確認が困難であった。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.4m、東西長4.1mを測る。方位は、N-100°27'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ22cm、南壁で25cm、東壁で24cm、西壁で16cmであった。床面は、湧水のため軟弱であった。住居中央部付近に硬質床面が一部確認された。床下土坑は、検出されなかった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は不正長方形で、深さは比較的浅い。長軸長78cm、短軸長53cm、深さ14cmであった。壁溝は、カマド部と貯蔵穴部を除いて全周している。東壁北寄りで幅16cm、深さ6cm、北壁中央で幅14cm、深さ5cm、西壁中央で幅14cm、深さ8cm、南壁中央で幅14cm、深さ4cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。規模は、全長75cm、袖部内幅35cmである。板状の石を掘方の両側面に立て並べ、煙道部・焼成部を造りだしている。遺物は、須恵器坏(2・3)、埴(4)、甕(7)、羽釜(5・6)、土師器坏(1)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VII期に所属すると思われる。

第23号住居址



第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。Fブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)

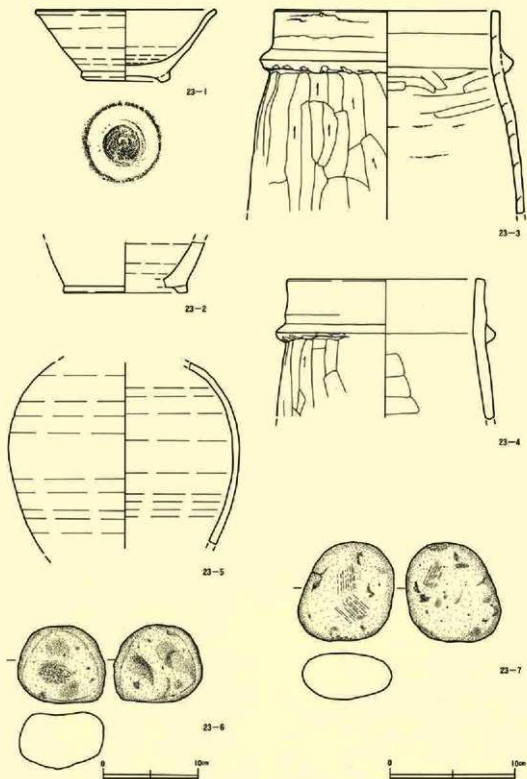
第2層—黒褐色土(黒褐色土の純層。粘性・しまりややあり。)

第3層—黄褐色土(壁崩れ。粘性・しまり無し。)

第164図 第23号住居址

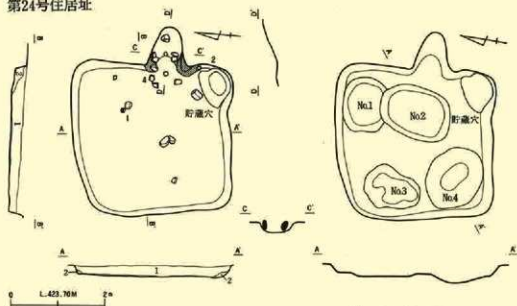
第165図 第23号住居址掘方

A地区の東側にある。重複はない。第14号住居南東側に位置している。平面形態は、長方形を呈する。南北長3.9m、東西長3.6mを測る。方位は、N-115°45'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ22cm、南壁で34cm、東壁で33cm、西壁で23cmであった。床面は、全体に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が2基検出されている。北側とカマド前面に方形の床下土坑が2基検出されている。No.1は平面不正長方形をなし、長軸長101cm、短軸長63cm、深さ44cmであった。No.2は平面不正長方形をなし、長軸長65cm、短軸長49cm、深さ39cmであった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は不正円形で、南北長57cm、東西長51cm、深さ28cmであった。壁溝は、カマド部と貯蔵穴部を除いて全周している。全体的に深めで、幅・深さとも不安定であった。東壁北寄りで幅13cm、深さ5cm、北壁中央で幅13cm、深さ7cm、西壁中央で幅15cm、深さ8cm、南壁中央で幅14cm、深さ6cmであった。カマドは、東壁南寄りにある。規模は、全長131cm、袖部内幅61cm、深さ47cmである。煙道部と焼成室の間の天井部が残存していた。良質な白色粘土で構築されていた。遺物は、瓶(2)、須恵器埴(1)、羽釜(3・4)、壺(5)、敲石(6)、擦石(7)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VII期に所属すると思われる。



第166圖 第23号住居址出土遺物

第24号住居址



第167図 第24号住居址

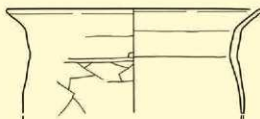
第168図 第24号住居址掘方



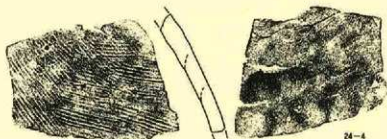
24-1



24-2



24-3



24-4

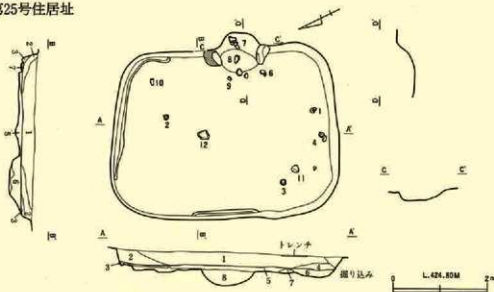


面土 第1層-暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F Pブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
第2層-黄褐色土(硬弱れ。粘性・しまり無し。)

第169図 第24号住居址出土遺物

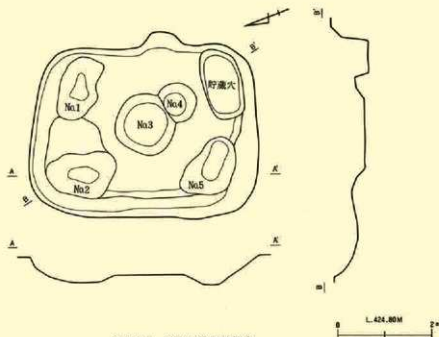
A地区の西端にある。重複はない。第21号住居の西側に位置している。地下水位に近く調査中住居址内が常に湧水のため水没している状態で、確認や作業が困難を極めた。平面形態は、歪正方形を呈する。南北長3.4m、東西長3.9mを測る。方位は、N-85°57'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ18cm、南壁で22cm、東壁で25cm、西壁で28cmであった。床面は、全体に軟弱であった。掘方で床下土坑が4基検出されている。No1は平面不正円形で、南北115cm、東西96cm、深さ10cmである。No2は平面不正楕円形で、長軸長153cm、短軸長109cm、深さ11cmである。No3は平面不定形で、長軸長121cm、短軸長94cm、深さ16cmである。No4は平面楕円形で、長軸長143cm、短軸長115cm、深さ21cmであった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面不正楕円形で、長軸長143cm、短軸115cm、深さ14cmであった。底面は、壁溝は、検出されなかった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。コーナー部に白色粘土を貼付け、袖としている。北側のみ内部に礫がある。規模は、全長104cm、袖部幅40cmである。遺物は、須恵器環(1・2)、甕(4)、土師器甕(3)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VI期に所属すると思われる。

第25号住居址



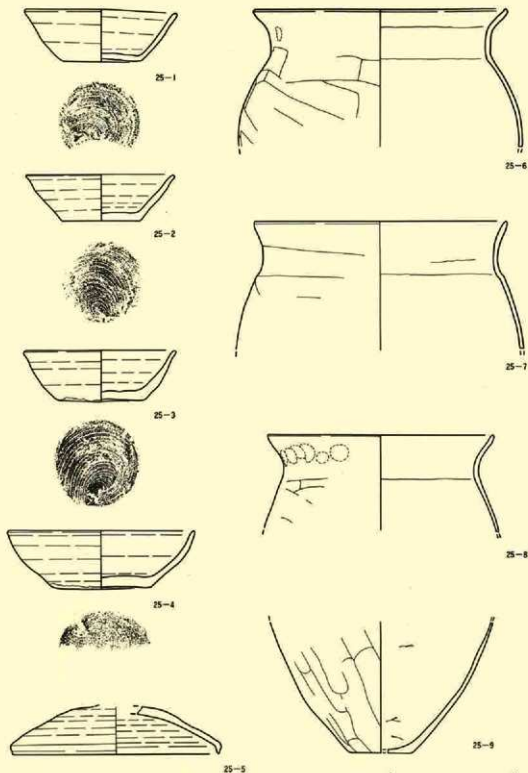
- 覆土 第1層—暗茶褐色土(暗茶褐色土が主体。F.D.ブロックを多量に混入。粘性・しまり無し。)
 第2層—黒褐色土(黒褐色土の純層。粘性・しまりややあり。)
 第3層—黄褐色土(壁跡。粘性・しまり無し。)
 第4層—灰色土(粘土分を混入する茶褐色土。粘性あり。しまりややあり。)
 第5層—黒色土(きめ細かい黒色土分が主体。小ロームブロックを混入。粘性無し。しまり強い。最上面は床面。)
 第6層—黒褐色土(黒色土とロームブロックとの混層。粘性無し。しまりあり。床下土壌の覆土。)
 第7層—黄褐色土(ローム分が主体。黒色土分が若干混じる。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第8層—暗黄褐色土(床下土壌の覆土。小ロームブロックと黒色土の混層。粘性無し。しまり強い。)

第170図 第25号住居址

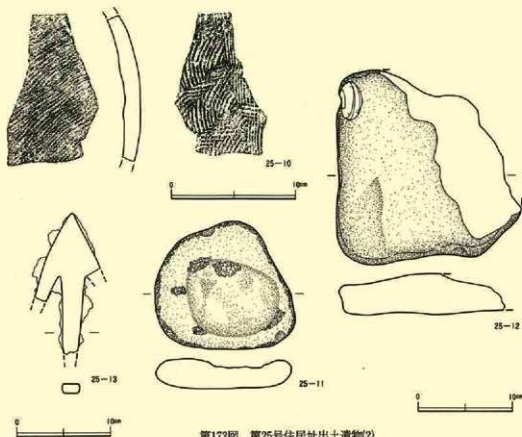


第171図 第25号住居址掘方

A地区の東北端にある。重複はない。第21号住居の東側に位置している。本住居は拡張住居であった。床面で一回り小さいプランが検出され、下に床面があったが、深さはきわめて浅いものであった。平面形態は、歪長方形を呈する。南北長4.8m、東西長4.6mを測る。方位は、N-108°32'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。第5層の直下は床面で、本住居は建て替えを行ったものと思われる。壁は、北壁で高さ29cm、南壁で28cm、東壁で30cm、西壁で25cmであった。床面は、住居中央部を中心として硬質床面範囲を確認した。掘方で床下土坑が5基検出された。中央部に円形のものが2基、南東コーナーより楕円形のものが1基検出されている。また北東、北西、南西の旧住プランに沿ってプランの不明瞭な落込みを検出している。No.1は平面不定形で、長軸長140cm、短軸長134cm、深さ25cmである。No.2は平面不定形で、南北長166cm、東西長151cm、深さ45cmである。No.3は、平面円形で、南北長128cm、短軸長130cm、深さ49cmである。No.4は平面円形で、南北84cm、東西84cm、深さ49cmである。No.5は平面不正楕円形で、長軸長128cm、短軸長（中央）84cm、深さ35cmである。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、掘方より南東コーナーに楕円形の掘込みを検出しているが、これは床下土坑として認識すべきと思われる。平面不正長方形で、長軸長152cm、短軸長84cm、深さ58cmであった。壁溝は、北壁その他の一部分に検出された。北側幅12cm、深さ8cm、西側幅12cm、深さ4cmである。カマドは、東壁中央にある。壁面への掘り込みは浅く、白色粘土を用いて袖を構築している。規模は、全長85cm、袖部内幅75cmである。遺物は、須恵器坏(1~4)、蓋(5)、甕(6)、土師器壺(6~9)、台石(11・12)、鉄線(13)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。

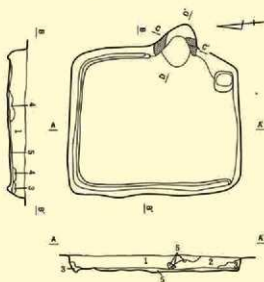


第172图 第25号住居址出土遺物(1)

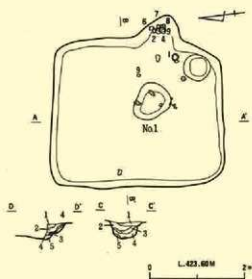


第173图 第25号住居址出土遺物(2)

第28号住居址



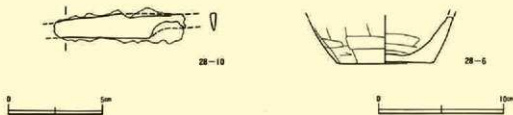
第174图 第28号住居址



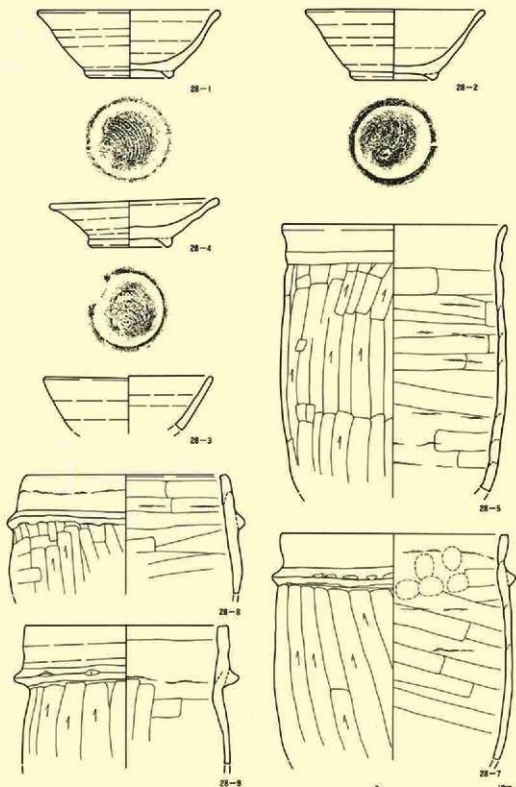
第175图 第28号住居址掘方

- 覆土 第1層-黒褐色土(黒色土分が主体。F.P.、小ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。ボソボソ。)
 第2層-明黒褐色土(黒色土分が主体。F.P.、小ロームブロックを1層より多く含む。粘性・しまりややあり)
 第3層-暗黄褐色土(黄褐色ローム分が主体。僅かに黒色土を含む。粘性・しまり無し。)
 第4層-白色粘土ブロック。
 第5層-暗黄褐色土(黒色土と黄褐色ロームブロックとの混層。粘性無し。しまり強い。)
- 壁 第1層-暗白色土(白色粘土が主体。黒褐色土が混じる。本層は天井部ブリッジの残存、部分的に内側表面が焼けて赤色をなす。粘性・しまり強い。)
 第2層-黒褐色土(黒褐色土分が主体。小砂利を含む。粘性・しまり無し。)
 第3層-暗赤灰色土(焼土ブロック、白色粘土ブロック、黒褐色土の混層。焼土・粘土が混じっているのは、天井部が割離的に崩落したからか。粘性・しまり無し。)
 第4層-暗赤灰色土(焼土粒子、黒褐色土、灰の混層。粘性・しまり無し。)
 第5層-黒褐色土(ほぼ純粋な黒褐色土分。粘性・しまりややあり。)

C地区の北東側にある。重複は第53号住居を切っている。第27号住居の南西側に位置している。平面形態はカマドに向かって横長の長方形を呈する。南北長3.7m、東西長3.6mを測る。方位は、N-91°29'-Eを指している。覆土は、4層に分層されるが、第1層と第1層に近似する第2層によって大部分が占められていることにより、人為的な埋土の可能性がある。壁は、北壁で高さ28cm、南壁で27cm、東壁で35cm、西壁で29cmであった。床面は、カマド前面を中心として、硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が住居中央部に1基、浅目の床下土坑が検出されている。No1は、平面不正円形をなし、長軸長83cm、短軸長72cm、深さ22cmである。プランは余り明確でなく、壁面・底面ともに凹凸が激しい。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、床面精査時には確認できなかったが、掘方では南東コーナーより、円形の土坑が検出されている。平面は方形で、南北長40cm、東西長44cm、深さ22cmであった。壁溝は、北壁・東壁(カマド以北)・西壁に巡っている。全体に浅く、明確でないところもある。東壁北寄りで幅13cm、深さ6cm、北壁中央で幅13cm、深さ7cm、西壁中央で幅15cm、深さ8cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。規模は全長93cm、袖部幅75cmである。左袖奥部に天井部のブリッジが一部残存していた。材質は黒色土混じりの白色粘土である。礎による補強材は使用していない。左袖に比して右袖の残存状況は不良であった。焼成面は良好に検出された。焼成室内より羽釜の一括、皿が出土している。遺物は、須恵器埴(1~3)、皿(4)、甕(5・6)、羽釜(7・8・9)、刀子0個が検出されている。また住居中央部にまとまって石が出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅲ期に所属すると思われる。

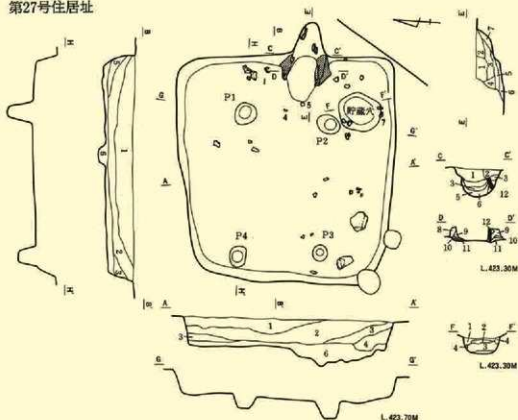


第176図 第28号住居址出土遺物(1)

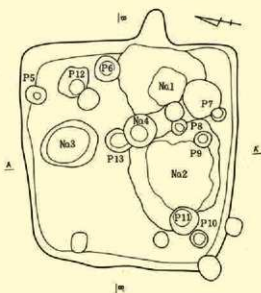


第177图 第28号住居址出土遺物(2)

第27号住居址



第178図 第27号住居址



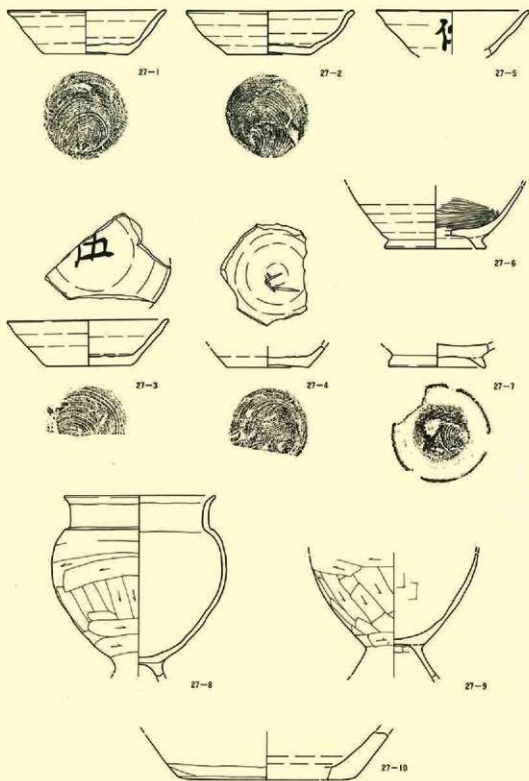
第179図 第27号住居址掘方

覆土 第1層一黒褐色土(黒色土分が主体。比較的細かなF Pを多量に含む。粘性・しまり無し。)
 第2層一茶褐色土(主体となる黒色土分は1層と同じだが、小ロームブロック、F Pを含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層一黒色土(きめ細かい黒色土。ごく僅かにローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層一黒色土(3層とほぼ同じ。僅かに大型ロームブロックを含む。)
 第5層一灰白色土(羅河面にのみ認められ、灰白色粘土及びロームブロック・黒色土・F Pの混層。粘性あり。しまりややあり。)
 第6層一明黒褐色土(黒褐色土が主体。黄褐色ロームブロックを多量に混入。粘性ややあり。しまりあり。貼床。中央部はよく踏み固められている。)

貯蔵穴 第1層一黒褐色土(黒色土とロームブロック、焼土粒子が混在。黒色土分が主体。全体に黒褐色をなす。粘性・しまりややあり。)
 第2層一暗黄褐色土(ロームブロックが主体。黒色土・焼土が混じる。粘性・しまりややあり。)
 第3層一明赤褐色土(焼土分を多く含む。黒色土、白色粘土、ロームブロックが混在。粘性・しまりややあり。)
 第4層一黄灰色土(灰色粘土と黒色土、ロームブロックとの混層。粘性・しまりあり。)

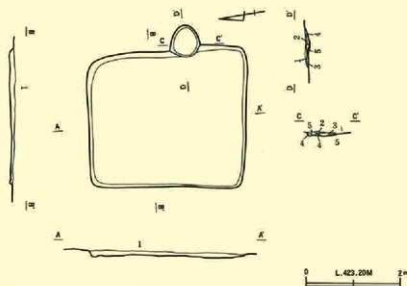
- 重 第1層一暗褐色土(住居層土1層と同じ。)
 第2層一暗褐色土(黄褐色ローム分と黒色土との混層。焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。土質からみて天井部崩落層とは思えない。住居境界の崩落と考えるべきか。)
 第3層一暗褐色土(黒色土と黄土ブロック。ローム粒子の混層。粘性・しまり無し。天井部崩落(1層)の後壁部崩壊したものか。)
 第4層一暗褐色土(黒色土分が主体。ローム粒子を多量に含む。粘性・しまり無し。不自然な地層を示す。成因は不明。)
 第5層一暗赤褐色土(粘土ブロック、黄土ブロック、黒色土との混層。粘性・しまり無し。天井部崩落層と焼成面。)
 第6層一暗赤褐色土(茶色土と粘土ブロック、粘土ブロックとの混層。掘方層土。粘性・しまり無し。)
 第7層一黒色土(純粋な黒色土。自然堆積層。)
 第8層一暗褐色土(黄褐色ロームブロック分が主体。黒色土及び僅かに焼土粒子を混入。粘性無し。しまりややあり。)
 第9層一黄褐色土(黄褐色ロームブロック、他からロームブロックをブロックで切りとって充填したものである。粘性無し。しまりあり。)
 第10層一黒色土(黒色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第11層一暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックと黒色土との混層。左袖はほとんどローム分が主体。粘性無し。しまりあり。)
 第12層一暗赤褐色土(ロームと黒色土との混層。全体によく焼けている。粘性・しまり無し。ボロボロ。)

C地区の北東端にある。重複は第56・70号住居を切っている。第28号住居の北東側に位置している。平面形態は長方形を呈する。西壁より東壁の方が長く若干台形気味である。南北長4.6m、東西長5.4mを測る。方位は、N-86°53'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ56cm、南壁で43cm、東壁で54cm、西壁で39cmであった。床面は、全体に硬質床面が残存していた。掘方で床下土坑が4基検出されている。No1は平面不定形で、明確なプランを有さず、壁・底面も乱れていた。南北長190cm、東西長146cm、深さ30cmである。No2は平面不正方形で、No1と同じく、明確なプランを持たず、底面・壁ともに一定していない。南北長182cm、東西長188cm、深さ38cmである。No3は平面不正円形で、長軸長128cm、短軸長100cm、深さ53cmである。壁面はほぼ垂直で、底面は丸みを持っている。No4は平面円形で、南北長70cm、東西長71cm、深さ34cmである。平面から底面にかけての断面形は、ほぼ半球形をなしている。柱穴は、計13本検出した。主柱穴は床面精査時には明確でなかったが、掘方で4本を検出した。北側の2本はノーマルの位置にあり、南側の2本は南壁沿いに検出された。数本の副柱穴らしきものも存在しており、建て替えの可能性が考えられる。また南西コーナーのピット底部には敷石が存在していた。貯蔵穴は、南東コーナーにあり、平面形は円形を呈する。南北長89cm、東西長80cm、深さ34cmであった。壁溝は、検出されなかった。カマドは、東壁南寄りにある。全体に残りがよく、構造も分かりやすいものであった。全体に規模が大きく、全長168cm、袖内幅54cmである。右袖は黒色土をベースとしているため一部を掘りすぎてしまった。焼成室は壁面よりやや内側に主体があり、袖はローム及び川原石で構築されていた。煙道部は焼成室より斜めに直線的に立ち上がっており、両サイドを川原石で押さえてあった。検出された袖内面と焼成室底面はよく焼けていた。またカマド全面北側にも焼けて赤色化した床面を検出している。遺物は、覆土の比較的高い位置より土器等が比較的多量に出て出土している。また南西コーナー近くにたたき台と思われる平石が出土している。須恵器坏(1~5)、埴(6・7)、土師器台付甕(8・9)、甕が検出されている。このうち、須恵器坏(3・5)には「伍」の墨書銘が記されていた。また須恵器坏(4)には判読不能の文字が見込み部に施されていた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第V期に所属すると思わ



第180図 第27号住居址出土遺物

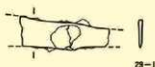
第29号住居址



覆土 第1層-黒褐色土(黒色土分を主体。F Pを少量に含む。粘性・しまり無し。)

- 電 第1層-黒褐色土(ソフトな黒褐色土が主体。細かい粘土粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第2層-赤褐色土(小礫土ブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。焼成面の一部あり。)
 第3層-赤褐色土(焼土ブロック、粘土ブロック、黒色土の混層。粘性・しまり無し。焼成面の一部あり。)
 第4層-黒褐色土(黒色土が主体。粘土粒子を含む。粘性・しまり無し。掘方土。)
 第5層-黒褐色土(黒褐色土の純粋層。粘性・しまり無し。)

第181図 第29号住居址



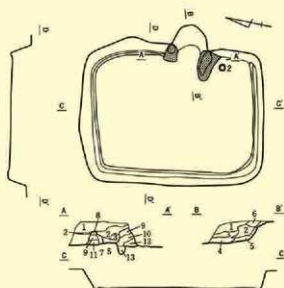
第182図 第29号住居址出土遺物



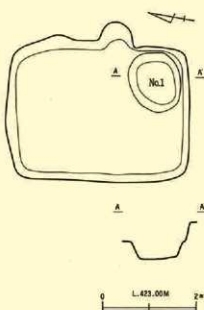
れる。

C地区の東端にある。重複はない。第30号住居の北側に位置している。小型住居で、全体的に遺存状態は不良であった。平面形態は、方形を呈する。南北長3.3m、東西長3.4mを測る。方位は、N-94°48'-Eを指している。壁は、床面を掘りすぎてしまったために、正確な高さは確認できなかった。床面は、軟弱であり、カマド前面のみわずかに硬質床面が存在していた。このため大部分を掘りすぎてしまった。掘方では、床下土坑は検出されなかった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、検出されなかった。カマドは、掘方のみ残存していた。東壁にある。規模は全長64cm、袖部幅64cmである。遺物は、出土量は全般的に少ない。復元実験に耐えない土器が少量存在する。須恵器杯・羽釜・土師器甕等である。また刀子(1)と思われる鉄製品が検出されている(1)。本住居の時期は、特定できない。

第30号住居址



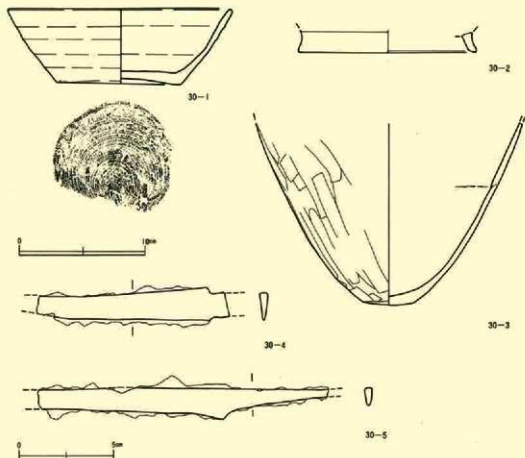
第183図 第30号住居址



第184図 第30号住居址掘方

- 電 第1層—黒褐色土(ザラザラした黒色土が主体。F P粒子が少量に散じる。粘性無し。しまりあり。)
- 第2層—暗黄褐色土(黒色土、黄褐色粘土、焼土部の混層。天井部崩落層と粘の混れ。粘性・しまり無し。)
- 第3層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。F P粒子、ローム分を含む。粘性無し。しまりあり。)
- 第4層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F P、白色粘土、カーボン粒子を含む。粘性無し。しまりあり。)
- 第5層—暗赤褐色土(黒色土と焼土分との混層。粘性・しまり無し。)
- 第6層—黒褐色土(2層に近似。粘性無し。しまりややあり。)
- 第7層—暗黄褐色土(黄褐色土分が主体。黒色土分を含む。粘性・しまり無し。)
- 第8層—明黒褐色土(黒色土と淡黄粘土ブロックとの混層。粘性・しまり無し。)
- 第9層—淡黄褐色土(淡黄色粘土ブロック。粘性少ない。しまりあり。粘。)
- 第10層—暗灰白色土(淡黄色、白色粘土ブロック及び黒褐色土の混層。粘性少ない。しまりあり。粘。)
- 第11層—茶褐色土(茶褐色土。粘性無し。しまりややあり。)
- 第12層—黒褐色土(焼土分、黒色土、ロームブロックの混層。粘性無し。しまりややあり。)
- 第13層—明黒褐色土(黒色土、小ロームブロック、焼土ブロックの混層。粘性・しまり無し。粘。埋込み穴覆土。)

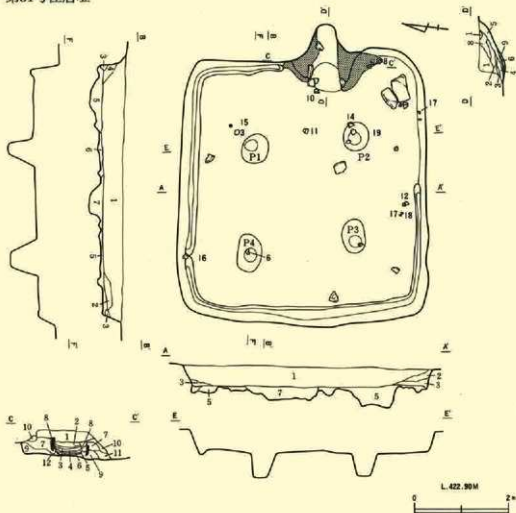
C地区の東端にある。重複はない。第31号住居の東側に位置している。小型住居である。平面形態は、カマドに向かって横長の長方形を呈する。南北長3.8m、東西長3.7mを測る。方位は、N-77°21'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ40cm、南壁で37cm、東壁で39cm、西壁で37cmであった。床面は、全体的にやや軟弱な床面が広がっている。比較的凹凸が激しい。掘方で床下土坑が1基南東コーナーに平面楕円形のものが検出されている。No.1は、平面楕円形を呈し、長軸長130cm、短軸長109cm、深さ31cmであった。底面はやや丸みを帯び、壁は垂直に立ち上がる。柱穴は、主柱穴と思われるピットは検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、カマド左袖付近のみはっきりせず、他は全周する。東壁北寄りで幅9cm、深さ3cm、北壁中央で幅9cm、深さ4cm、西壁中央で幅15cm、深さ2cm、南壁中央で幅12



第185図 第30号住居址出土遺物

cm、深さ3cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。質の悪い黄白色の粘土で両袖を作り出している。底面への掘り込みはなかった。カマドセクションは不明瞭であった。規模は、全長117cm、袖部幅53cmである。遺物は、須恵器坏(1)、埴(2)、土師器甕(3)、刀子(4・5)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅲ～Ⅳ期に所属すると思われる。

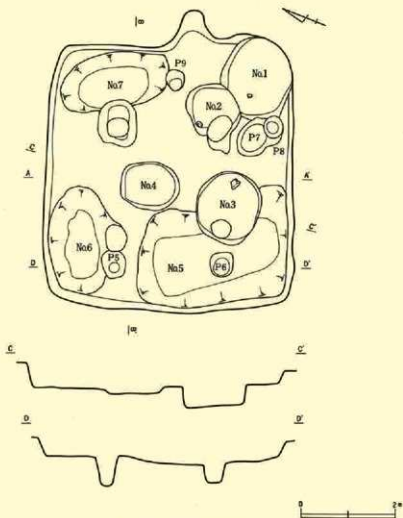
第31号住居址



- 土 第1層—黒褐色土(FDと小ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。ボソボソ。)
 第2層—黒色土(きめ細かい純粋な黒色土。粘性・しまり無し。サラサラ。)
 第3層—暗黄褐色土(ロームと黒色土との混層。緩弱。粘性・しまり無し。)
 第4層—灰白色土(粘土ブロックを多量に含む。粘性・しまりあり。電の影響か。)
 第5層—黒褐色土(黒色土が主体。ロームブロックが多く混じる。粘性・しまりあり。粘床。)
 第6層—淡黄褐色土(黄色粘土分と焼土との混層。粘性・しまりややあり。)
 第7層—黒褐色土(黒褐色土と大粒ロームブロックとの混層。粘性・しまりあり。床下土壌の覆土。)

- 電 第1層—茶褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロック、ローム分を大量に含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層—茶褐色土(黒褐色土が主体。焼土ブロック、ロームを含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第3層—黒色土(黒褐色土のカーボン多量を含む層。レンズ状に堆積。粘性・しまり無し。)
 第4層—明褐色土(粘土ブロックと焼けて褐色に変化した粘土ブロックとの混層。粘性・しまり無し。)
 第5層—赤褐色土(焼土が主体。黄色土分を含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第6層—明黒褐色土(黒色土とロームとの混層。粘性無し。しまりややあり。隅方。)
 第7層—黄土(黄土色粘土層。袖石の支え土。粘性・しまりあり。)
 第8層—赤褐色土(黄色粘土が熱を受け真っ赤に変色したもの。粘性無し。しまりあり。)
 第9層—明黒褐色土(黒色土ブロックと黄色ロームとの混層。袖基部及び焼成部。粘性無し。しまりあり。)
 第10層—暗黄褐色土(7層の黄色粘土の質を悪くしたもの。焼土粒子、黒色土分を含む。粘性無し。しまりあり。7層の再締結土。)
 第11層—茶褐色土(黒色土、白色粘土ブロック、焼土ブロック、ロームの混層。粘性無し。しまりあり。袖基部。)
 第12層—黄褐色土(ロームブロック。)

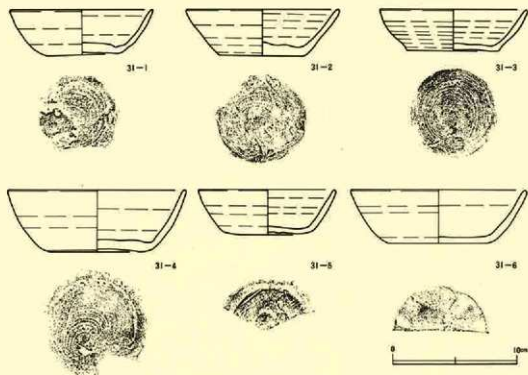
第186図 第31号住居址



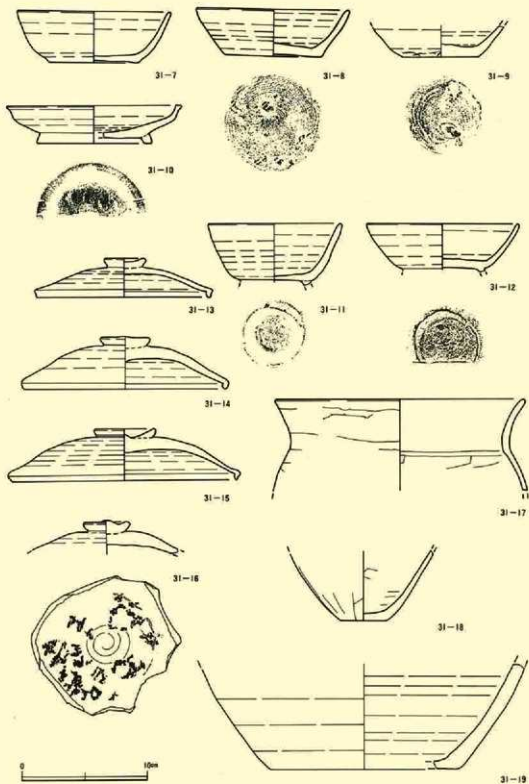
第187図 第31号住居址掘方

C地区の東側にある。重複はない。第30号住居の西側に位置している。平面形態はカマドに向かって縦長の長方形を呈する。南北長4.3m、東西長6.3mを測る。方位は、N-83°57'-Eを指している。覆土は、3層に分層されるが第1層が圧倒的であり、人為的埋土の可能性はある。壁は、北壁で高さ42cm、南壁で34cm、東壁で46cm、西壁で33cmであった。床面は、全体に硬質床面が広がっていた。また南壁沿い中央部に高まりがあり、入口部施設なのではないかと思われる。掘方で床下土坑が7基検出された。No.1は明確な不正円形のプランを持ち、南北長153cm、東西長169cm、深さ70cmである。壁面は垂直で、底面は凹面をなす。No.2は明確な不正円形のプランを持ち、南北長117cm、東西長110cm、深さ36cmである。底面は凹面をなし、壁は垂直に立ち上がる。No.3は明確な円形のプランを持ち、南北長138cm、東西長156cm、深さ52cmである。底面にはかなり凹凸が認められ、壁は垂直に立ち上がる。No.4は明確な楕円形のプランを持ち、長軸長126cm、短軸

長102cm、深さ34cmである。底面は凹面をなし、壁は垂直に立ち上がる。No 5は不明確な長方形のプランを持ち、南北長325cm、東西長200cm、深さ16cmである。壁面・底面ともに凹凸が激しい。No 6は不明確な楕円形状をなし、長軸長226cm、短軸長144cm、深さ20cmである。壁面・底面ともに凹凸が激しい。No 7は不明確な楕円形状のプランをなし、長軸長238cm、短軸長116cm、深さ24cmである。壁面・底面ともに凹凸が激しい。柱穴は、計9本検出され、そのうち主柱穴は4本である。主柱は全体に大きく、深くしっかりしている。また掘方からは西壁沿いにもう2本のピットが検出され、主柱穴の移動、すなわち建て替えを行ったのではないかと思われる。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、南壁東半分を除いて全周する。北壁と東壁が深く広い。東壁北寄りでは幅11cm、深さ9cm、北壁中央で幅22cm、深さ15cm、西壁中央で幅17cm、深さ5cm、南壁中央で幅14cm、深さ8cmであった。カマドは、東壁にある。規模は、全長142cm、袖部幅63cmである。石組構造のものとしては非常に良好な遺存状態であった。丸く平たい川原石を袖石とし、その内外を黄色の良質な粘土で補強していた。黄色粘土は袖の上半部で、下半部は明黒褐色土で台部を造っている。遺物は、住居内全体より出土している。また南東コーナーより角石の平石が2個床直で出土している。須恵器坏(1~9)、皿(10)、埴(11・12)、蓋(13~16)、甕(19)、土師器甕(17・18)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代遷年の第Ⅲ期に所属すると思われる。

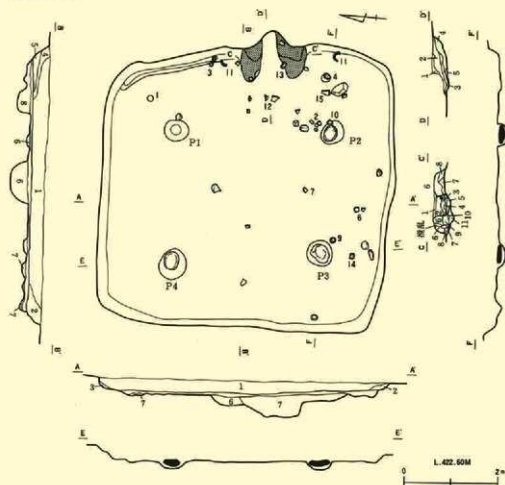


第188図 第31号住居址出土遺物(1)



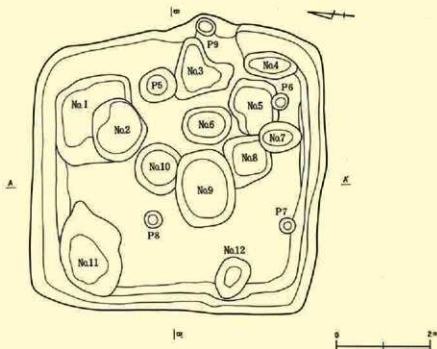
第189圖 第31号住居址出土遺物(2)

第32号住居址



- 覆土**
- 第1層一茶褐色土(黒褐色土分が主体。F P、ロームブロックを混入。粘性・しまり無し。)
 - 第2層一茶褐色土(黒褐色土分が主体。小ロームブロック、F Pを含むが、F Pは第1層よりぐっと少ない。粘性・しまり無し。)
 - 第3層一暗黒褐色土(小ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。)
 - 第4層一灰白色土(灰白色の粘土が主体。F P、焼土が混じる。電よりの流れ出し。粘性・しまり有り。)
 - 第5層一黒褐色土(ロームブロックと黒色土の混層。粘土のように堅い。盛り過ぎかもしれない。粘性あり。しまり有り。)
 - 第6層一黒色土(黒色土が主体。小ロームブロックを層状に含む。粘性・しまり無し。)
 - 第7層一暗黒褐色土(黒褐色土、大型ロームブロック、F Pの混層。粘性・しまり無し。)
 - 第8層一暗黄褐色土(ローム分、ロームブロックが主体。黒色土が混じる。粘性・しまり無し。)
- 電**
- 第1層一黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒とF Pを僅かに含む。粘性無し。しまりやや有り。)
 - 第2層一暗灰白色土(灰白色粘土分が主体。黒色土が混じる。粘性・しまり無し。天井部剥落層か。)
 - 第3層一暗灰白色土(白色粘土、焼土、黒色土の混層。粘性・しまり無し。)
 - 第4層一暗茶褐色土(茶褐色土、黒色土の混層。粘性・しまり無し。)
 - 第5層一赤褐色土(焼土と粘土との混層。粘性・しまり無し。)
 - 第6層一暗灰色土(バツバツの灰色粘土分が主体。焼土粒、F P粒を含む。粘性ほとんど無し。しまりやや有り。地。)
 - 第7層一暗黄褐色土(黄色ロームと黒色土との混層。粘性無し。しまりやや有り。)
 - 第8層一暗黄褐色土(7層とほぼ同様だが、ロームブロックが少ないため黒色土っぽい。粘性無し。しまりやや有り。)
 - 第9層一黒褐色土(黒褐色土が主体。大型F Pを多量に含む。地表面。粘性無し。しまりやや有り。)
 - 第10層一赤褐色土(焼土ブロック。粘性・しまり無し。)
 - 第11層一暗黄褐色土(ロームブロックと焼土との混層。粘性無し。しまりやや有り。)

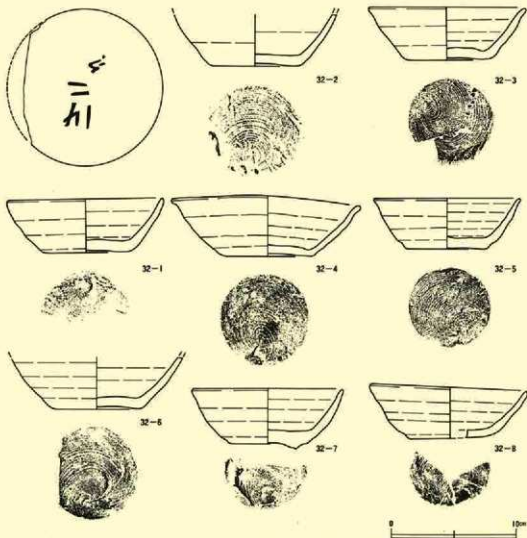
第190図 第32号住居址



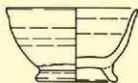
第191図 第32号住居址掘方

C地区の東側にある。重複はない。第31号住居の南側に位置している。本住居は拡張住居で、現カマドの内側に1つのカマド痕が認められた。平面形態は、拡張前では、平面、南北長、東西長である。拡張後では不正正方形を呈する。南北長6.3m、東西長6.3mを測る。方位は、N-91°18'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、拡張前で、北壁高さ11cm、南壁10cm、東壁5cm、西壁9cmである。拡張後で北壁で高さ26cm、南壁で15cm、東壁で35cm、西壁で31cmであった。床面は、拡張後では、カマド前から中央部にかけて硬質床面が広がっていた。拡張前は余り明確ではないが、全体的に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が12基検出されている。No. 1は平面方形を呈し、南北長163cm、東西長185cm、深さ25cmである。No. 2は平面不正楕円形をなし、長軸長133cm、短軸長116cm、深さ41cmである。No. 3は平面は不定形で、南北長128cm、東西長122cm、深さ15cmである。No. 4は平面長楕円形をなし、長軸長114cm、短軸長58cm、深さ23cmである。No. 5は平面不正方形で、長軸長115cm、短軸長106cm、深さ14cmである。No. 6は平面不正長方形で、長軸長106cm、短軸長80cm、深さ30cmである。No. 7は平面楕円形をなし、長軸長91cm、短軸長66cm、深さ29cmである。No. 8は平面不正方形で、南北長99cm、東西長100cm、深さ17cmである。No. 9は平面楕円形で、長軸長161cm、短軸長126cm、深さ45cmである。No. 10は平面円形で、南北長101cm、東西長111cm、深さ30cmである。No. 11は平面不正楕円形で、長軸長209cm、短軸長129cm、深さ41cmである。No. 12は平面楕円形で、長軸長90cm、短軸長67cm、深さ44cmである。柱穴は、計9本が検出されている。主柱穴に関しては非常に興味深い事実が観察された。拡張後のものは

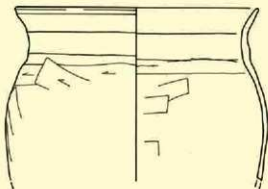
ノーマルな位置に床面中に敷石を行っており、拡張前住居は全体に南東に偏した位置に4本の柱穴が検出された。このことは、拡張前住居址がピットを用いたノーマルな住居であったに対して、拡張後が礎石を用いたものに変化していることが認識される。貯蔵穴は、旧住居のものは主柱穴P3の北側にある浅めの掘り込みが貯蔵穴であろう。新住居は南東コーナーに南北に長く長方形プランを検出しているが、これであると思われる。壁溝は、新住居・旧住居とも部分的に確認された。東壁北寄りで幅13cm、深さ8cmであった。カマドは、東壁中央にある。規模は全長102cm、袖部幅56cmである。袖はロームブロックプラス黒色土で基部を造り、その上にバサバサの不良な灰色粘土を乗せている。焼成面はあまり顕著にはみられなかった。また左袖の補強に砂岩を使用していた。遺物は、須恵壺坏(1~8)、埴(9)、蓋皿、土師器甕(11~13)、高坏04、砥石04が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。



第192図 第32号住居址出土遺物(1)



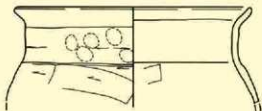
32-9



32-11



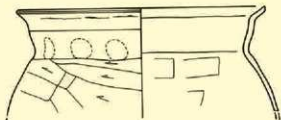
32-10



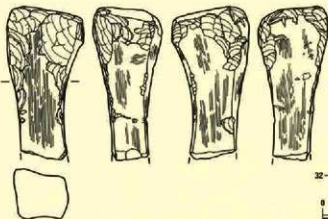
32-12



32-14



32-13

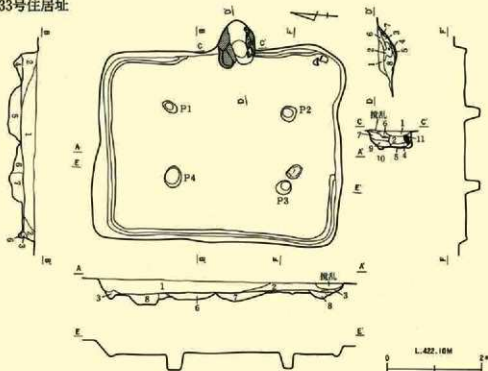


32-15

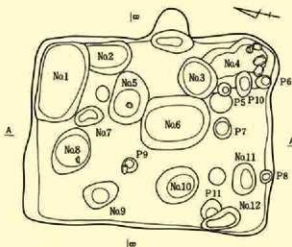


第193図 第32号住居址出土遺物(2)

第33号住居址



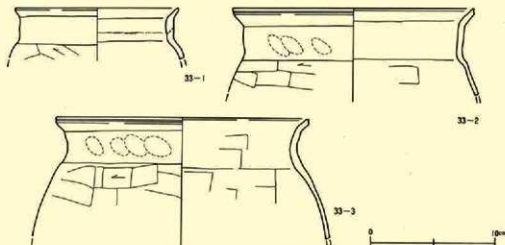
第194図 第33号住居址



第195図 第33号住居址細方

- 覆土
- 第1層—黒褐色土(黒色土分が主体。F P、ロームブロックが混入。粘性・しまり無し。)
 - 第2層—黒褐色土(1層と同様だが、部分的に白色粘土やロームブロックが多量に含まれ、色彩もやや明るい。粘性・しまりややあり。)
 - 第3層—明黒褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。)
 - 第4層—茶褐色土(暗褐色ロームブロック、焼土ブロック、黒色土の混層。粘性無し。しまりあり。)
 - 第5層—明黒褐色土(黒色土・暗黄褐色粘土ブロック、ロームブロックの混層。粘性・しまりややあり。)
 - 第6層—暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックが主体。黒色土を混入。粘性・しまりややあり。)
 - 第7層—明黒褐色土(黒色土が主体。ロームブロック、暗黄褐色粘土ブロックを混入。粘性・しまりややあり。)
 - 第8層—暗茶褐色土(ロームブロック、黒色土、白色粘土ブロック、焼土分の混層。粘性・しまりややあり。)

- 電 第1層—黒色土(バヤバヤの黒色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。)
 第2層—明褐色土(黒褐色土が主体。焼土、ロームブロックを含む。粘性無し。しまりやあり。)
 第3層—赤褐色土(焼土ブロックと黄色粘土ブロックとの混層。粘性無し。しまりやあり。天井部腐落層)
 第4層—赤褐色土(赤褐色土が主体。焼土粒、カーボン、ローム粒を含む。粘性・しまり無し。)
 第5層—赤褐色土(純粋な焼土層。粘性・しまり無し。)
 第6層—赤褐色土(赤褐色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。)
 第7層—明褐色土(黒色土とロームとの混層。粘性・しまり無し。)
 第8層—黒褐色土(1層と近似。黒褐色土が主体。ローム粒子を混入。粘性・しまり無し。)
 第9層—灰色、赤褐色、暗黄褐色土(灰色粘土、焼土、ロームの混層。粘性・しまり無し。)
 第10層—黒褐色土(焼土、カーボン、赤褐色土の混層。粘性・しまり無し。)
 第11層—赤褐色土(黒色土とローム分の混層。粘性・しまり無し。)

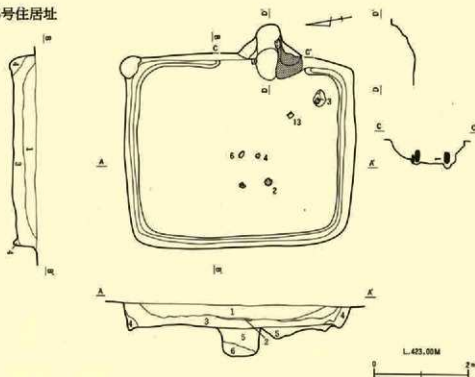


第196図 第33号住居址出土遺物

C地区の南東側にある。重複はない。第32号住居の南側に位置している。平面形態は、長方形を呈する。南北長5.4m、東西長4.6mを測る。方位は、N-86°20'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ33cm、南壁で21cm、東壁で33cm、西壁で25cmであった。床面は、ほぼ全面に硬質床面が広がっていた。掘方では床下土坑は多く、計12基検出されている。No 1は北東コーナーに接し、平面は明確な不正楕円形をなし、長軸長178cm、短軸長102cm、深さ28cmである。底面は凹凸がめだち、壁は斜めに立ち上がる。No 2は楕円形をなすと思われ、プランは比較の明瞭である。長軸長102cm、短軸長70cm、深さ28cmである。底面・壁面とも凹凸が激しい。No 3は平面円形で、明瞭なプランを有する。南北長84cm、東西長88cm、深さ23cmである。底面はやや凹凸が目だち、壁は垂直気味に立ち上がる。No 4は不明瞭なプランで、不定形をなし、長軸長148cm、短軸長110cm、深さ25cmである。底面は凹凸が激しく、壁面は垂直気味に立ち上がる。No 5は明確な楕円形をなし、長軸長112cm、短軸長76cm、深さ29cmである。底面は凹凸が激しいものの、フラット気味で、壁は垂直気味に立ち上がる。No 6は明確な俵形をなし、長軸長150cm、短軸長113cm、深さ32cmである。底面は凹面をなし、壁は垂直に立ち上がる。No 7は不明瞭な不正楕円形で、長軸長63cm、短軸長39cm、深さ28cmである。No 8は明瞭な円形をなし、南北長104cm、短軸長78cm、深さ32cmである。底面はやや凹面をなし、壁は垂直気味に立ち上がる。No 9は明瞭な不正三角形をなし、長軸長75cm、短軸長53cm、深さ31cmである。底面は凹面をなし、壁は垂直気味に立ち上がる。No 10は平面楕円形をなし、長軸長67cm、短軸長49cm、深さ22cmである。断面

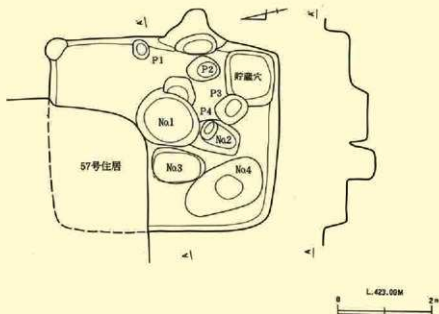
形は半円形をなす。No11は平面不正楕円形で、長軸長67cm、短軸長49cm、深さ20cmである。No12は平面不定形で、長軸長85cm、短軸長43cm、深さ30cmである。柱穴は、計11本が検出され、うち4本が主柱穴である。ノーマルな位置に4本検出されている。また南壁沿いに2本主柱穴らしきピットが検出されており、本住居は建て替えの可能性があると考えられる。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、南壁が明確でなかったのを除いて全周している。東壁北寄りで幅14cm、深さ6cm、北壁中央で幅17cm、深さ9cm、西壁中央で幅16cm、深さ11cm、南壁中央で幅15cm、深さ6cmであった。カマドは、東壁中央にある。規模は、全長94cm、袖部幅45cmである。袖は石と白色粘土を用いて構築している。残存状況は余り良好ではなかった。底面への掘り込みはやや深目で焼成面は良好に検出されている。遺物は、土師器甕(1~3)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第V期に所属すると思われる。

第35号住居址



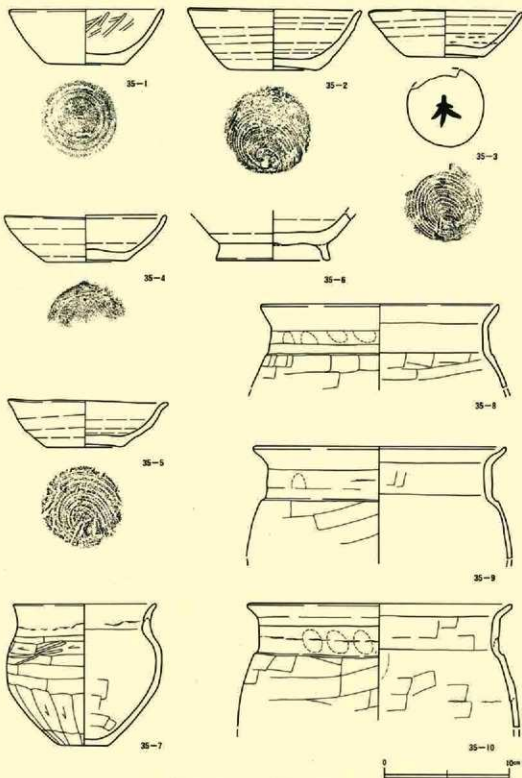
- 覆土 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。FPを少量に、ロームブロックを少量含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層-黒褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロック多量。カーボンを含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層-黒褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロックを少量に、FPを僅かに含む。粘性・しまり無し。)
 第4層-黒褐色土(黒色土と黄褐色ローム層との混層。壁跡のみ。粘性・しまり無し。)
 第5層-明黄褐色土(黒褐色土が主体。大型ロームブロック、粘土ブロックを少量に含む。粘性・しまり無し。)
 第6層-半黄灰色土(黄灰色粘土分と黒色土との混層。粘性・しまり無し。)

第197図 第35号住居址

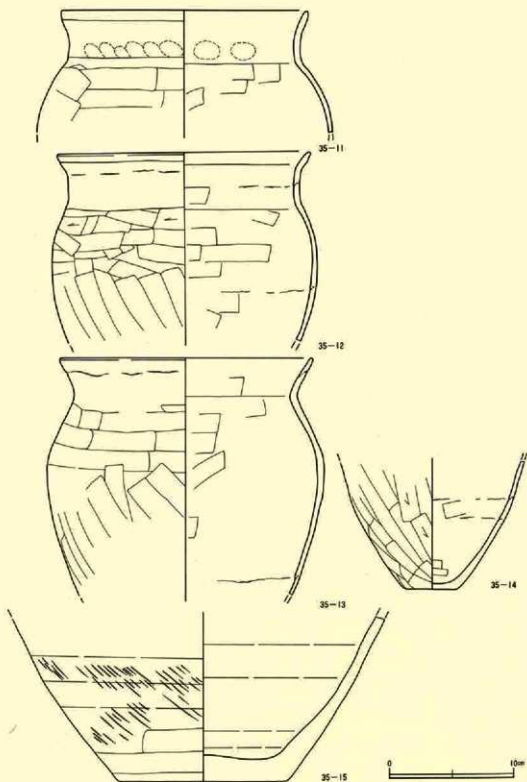


第198図 第35号住居址掘方

C地区の北東側にある。重複は第57号住居を切っている。第37号住居の南側に位置している。住居内北側より焼土が多量に検出され、本住居が焼失家屋であることを確認した。平面形態は、長方形を呈する。南北長5.1m、東西長4.7mを測る。方位は、N-102°26'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ50cm、南壁で38cm、東壁で50cm、西壁で42cmであった。床面は、全体にやや軟弱気味の貼床が広がっていた。住居北西側では重複関係にある第52号住居の覆土中に床面を造っているため軟弱で、一部を掘りすぎてしまった。また住居中央に床面の浅い陥没が認められるがこれは下に床下土坑があるためである。掘方で床下土坑が計4基検出されている。住居中央部に円形の床下土坑2基（重複している）と楕円形の床下土坑が1基検出されている。No.1は平面楕円形で、長軸長139cm、短軸長114cm、深さ53cmである。No.2は平面円形と思われ、南北73cmで、深さ45cmである。No.3は平面不正楕円形で、長軸長67cm、短軸長58cm、深さ59cmである。No.4は平面不正楕円形で、長軸長179cm、短軸長100cm、深さ39cmである。柱穴は、計3本検出されているが、いずれも主柱穴ではないと思われる。貯蔵穴は、床面精査時には確認できなかったが、掘方で南東コーナーに方形の掘り込みを検出した。平面は長方形で、南北長105cm、東西長118cm、深さ15cmであった。壁溝は、全周している。東壁北寄りで幅17cm、深さ5cm、北壁中央で幅10cm、深さ6cm、西壁中央で幅12cm、深さ8cm、南壁中央で幅14cm、深さ6cmであった。カマドは、東壁中央南寄りにある。左袖のみ良好に検出された。内部には小數であるが補強障が設置されている。底面は床面をごくわずかに掘り下げている。規模は、全長119cm、袖部幅50cmである。遺物は、須恵器環(1~5)、埴(6)、埴(3)、土師器埴(7~14)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第V期に所属すると思われる。

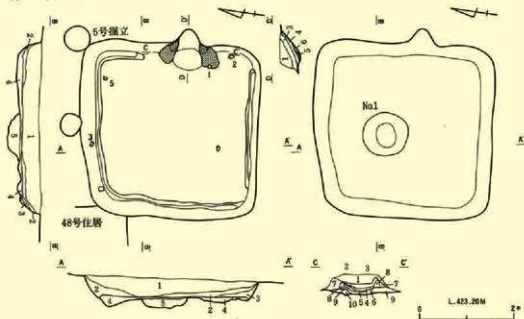


第199圖 第35号住居址出土遺物(1)



第200図 第35号住居址出土遺物(2)

第37号住居址



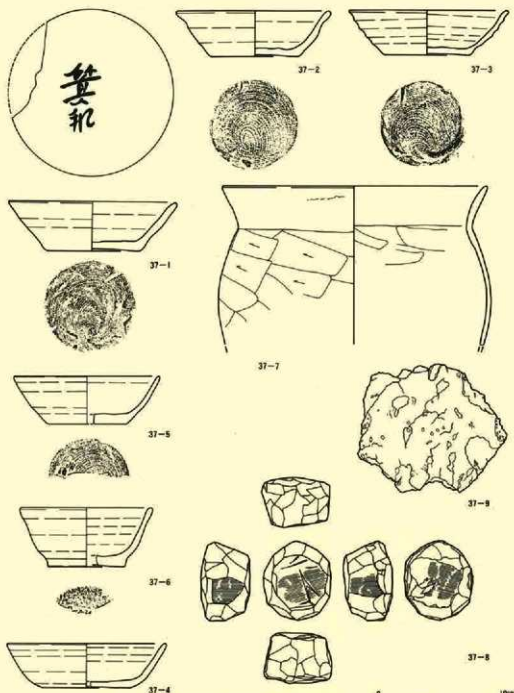
第201図 第37号住居址

第202図 第37号住居址掘方

- 覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F P、ロームブロックを少量に含む。粘性・しまり無し。バサバサ。)
- 第2層—黒色土(黒褐色土が主体。F P、ローム粒子を僅かに含み、サラサラした感じ。粘性・しまり無し)
- 第3層—黒褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロックをやや多く含む。粘性・しまり無し。)
- 第4層—明黒褐色土(黒色土と黄褐色ロームブロックとの混層。粘性無し。しまり強い。粘床層。)
- 第5層—明黒褐色土(ほぼ4層と同様だが、4層よりしまりがない。)
- 竈 第1層—黒褐色土(黒色土が主体。ローム粒子、F Pを含む。粘性・しまり無し。)
- 第2層—黄褐色土(黄褐色土ロームブロック。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第3層—赤褐色土(白色粘土ブロック、焼土の混層が主体。黒色土を含む。粘性・しまり無し。天井部の崩落層か。)
- 第4層—赤褐色土(黄土色の土、焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第5層—赤褐色土(純粋な焼土層。粘性・しまり無し。焼成面。)
- 第6層—黒色土(きめ細かい黒色土の純粋な層。粘性・しまり無し。)
- 第7層—灰白色土(灰白色粘土が主体。黒色土を含む。粘性・しまりあり。)
- 第8層—暗灰白色土(黒褐色土と灰白色粘土ブロックとの混層。粘性・しまりあり。)
- 第9層—黒褐色土(黒褐色土と焼土との混層。粘性無し。しまりややあり。)
- 第10層—明黒褐色土(黒褐色土とロームブロックとの混層。袖台部。粘性無し。しまりややあり。)

C地区の北東側にある。重複はない。第48号住居の東側に位置している。平面形態は、不正正方形を呈する。南北長3.8m、東西長3.5mを測る。方位は、N-85°57'-Eを指している。覆土は、3層に分層され、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ39cm、南壁で34cm、東壁で40cm、西壁で40cmであった。床面は、全体に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が1基検出されている。No1は平面円形をなし、南北長99cm、東西長92cm、深さ54cmである。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、東壁南側を除いて全周するが、底面の凹凸が激しく、また明確でないところもある。東壁北寄りで幅19cm、深さ4cm、北壁中央で幅15cm、深さ8cm、西壁中央で幅12cm、深さ2cm、南壁中央で幅10cm、深さ5cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。規模は全長86cm、袖幅61cmである。袖はロームブロック・白色粘土等

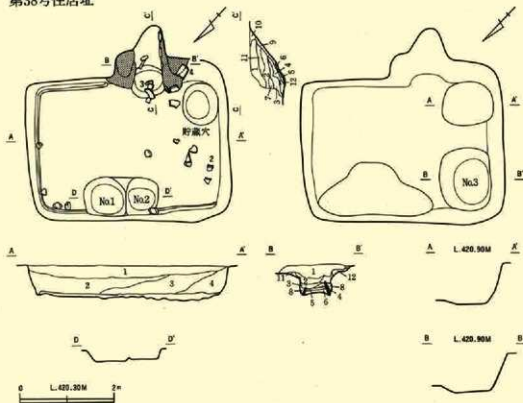
で造られ、補強材は用いられていないようである。焼成面は明確で、煙道部は斜めに直線的に立ち上がっている。遺物は、須恵器坏(1～6)、土師器甕(7)、紡錘車の末製品(8)、鉄滓(9)が検出されている。このうち、須恵器坏(1)の見込み部には「糞邦」銘の墨書が記されていた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅲ期に所属すると思われる。



第203図 第37号住居址出土遺物



第38号住居址



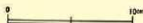
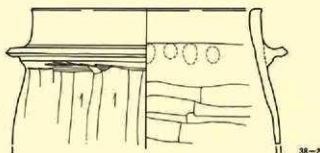
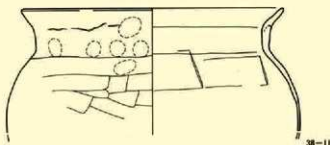
第204図 第38号住居址

第205図 第38号住居址断面

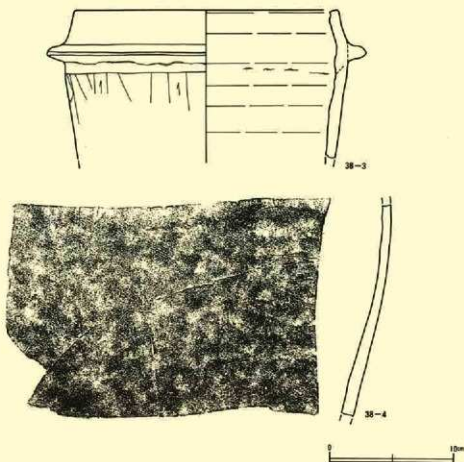
- 覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F Pを少量に含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。F P、ローム小ブロックを含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第3層—茶褐色土(第1層の黒褐色土に少量のロームブロック、ローム分を混入。F Pの量は比較的に少ない。粘性・しまりややあり。)
 第4層—暗茶褐色土(黒褐色土とローム分が混じって茶褐色土となり、僅かにF Pと小ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 竈 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F P粒子、ローム小ブロックを含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層—暗茶褐色土(大型黄褐色ロームブロックが主体。黒色土を含む。粘性・しまりややあり。天井部崩落層。)
 第3層—黒褐色土(黒褐色土が主体。カーボン、灰土を少量含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層—暗茶褐色土(暗茶褐色ロームブロック、黒色カーボン、灰土ブロックの混層。粘性・しまり無し。ソフト。天井部ないし袖部崩落層。)
 第5層—暗茶褐色土(暗茶褐色土の順層。さめが細かくササナラ、風成層か。粘性・しまり無し。)
 第6層—黒褐色土(4層に近似。カーボンを多く含む。粘性・しまり無し。)
 第7層—黒褐色土(1層にはほぼ同じ。)
 第8層—暗茶褐色土(黄褐色ローム分が主体。黒褐色土を含む。粘性・しまり無し。袖部崩落層か。)
 第9層—黒褐色土(さめが細かく黒褐色の純層。粘性・しまり無し。風成層。)
 第10層—黒褐色土(12層に近似。色調がやや暗い。粘性・しまり無し。)
 第11層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F P小ロームブロックを含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第12層—赤褐色土(灰土の純層。粘性無し。しまりややあり。焼成面。)

D地区にある。重複はない。100号住居の南側に位置している。本住居は覆土が深く、カマド・床面等が良好に検出された。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.3m、東西長4.1mを測る。方位は、N-134°26'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ54cm、南壁で59cm、東壁で69cm、西壁で53cmであった。床面は、ほぼ全面に硬質床面が広がって

た。掘方で床下土坑が計3基検出されている。床面精査時に西壁沿い中央に土坑2基が検出されているが、これは本来床下土坑と思われる。また掘方より平面長方形の床下土坑が検出されている。No 1 は平面円形で、南北長90cm、東西長83cm、深さ24cmである。No 2 は平面方形気味で、南北長69cm、東西長78cm、深さ21cmである。No 3 は平面長方形で、長軸長133cm、短軸長109cm、深さ85cmである。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、南東コーナーより、平面円形の貯蔵穴が検出されている。南北長76cm、東西長89cm、深さ88cmである。壁溝は、南壁を除き全周する。比較的幅が細めでしっかりしている。東壁北寄りで幅14cm、深さ6cm、北壁中央で幅10cm、深さ8cm、西壁中央で幅10cm、深さ4cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。規模は全長154cm、袖部幅68cmである。平たい板状の石を焼成室上部から煙道部先端まで縦に並べ白色粘土と黒色土の混層で袖を造りだしている。焼成面は良好に検出された。遺物は、須恵器羽釜(2・3)、壺(4)、土師器甕(1)が検出されている。また床面上より拳大から小頭大の礫が散っていた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VI期に所属すると思われる。



第206図 第38号住居址出土遺物(1)



第207図 第38号住居址出土遺物(2)

第42号住居址 (第22図参照)

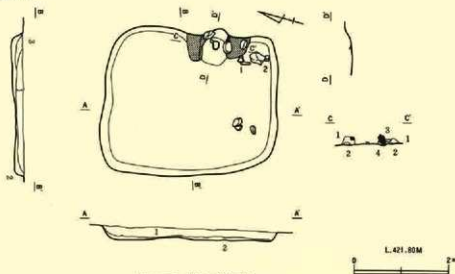
C地区の北東端にある。調査限界のため4分の1のみ調査した。第46号住居を調査中に検出されたもので、南西コーナーのごく一部を検出したのみである。本住居の時期は、特定できない。

第39号住居址

C地区の東南側にある。重複はない。第40号住居の東側に位置している。本住居は地下水位に近い位置にあったため、全体に軟弱で、床・壁等の確認が難しく、部分的に掘りすぎてしまったところがある。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長3.7m、東西長3.1mを測る。方位は、N-79°5'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ29cm、南壁で20cm、東壁で24cm、西壁で21cmであった。床面は、全体に軟弱であるが、カマド全面に硬質床面を確認した。掘方では床下土坑は検出されなかった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、明確でないが、部分的に認識できたところもある。カマドは、東壁中央

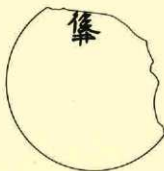
やや南寄りにある。規模は全長79cm、袖部幅54cmである。全体に残存状態は良くなかった。袖は黒色土・黄褐色土・灰白色粘土で造っており、補強材として平石を用いている。遺物は、カマド周辺より多くの土器が出土した。須恵器環(1・2)が検出され、そのうち(2)は「?井」銘の墨書が記されていた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅶ～Ⅷ期に所属すると思われる。

第39号住居址

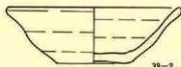


第208図 第39号住居址

- 覆土 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。FPを含むが多くはない。粘性無し。しまりややあり。)
- 第2層-黒褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロックを含む。粘性無し。しまりあり。)
- 第3層-黒褐色土(黒褐色土が主体。粘土分・焼土を含む。粘性無し。しまりあり。)
- 竈 第1層-明黒褐色土(黒色土と黄褐色粘土ブロックとの混層。粘性・しまりややあり。袖。)
- 第2層-黒褐色土(黒色土が主体。ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。袖台部。)
- 第3層-灰白色土(純粋な灰白色粘土ブロック。粘性・しまり強い。)
- 第4層-黒色土(2層に近似。袖石埋土。)



39-1



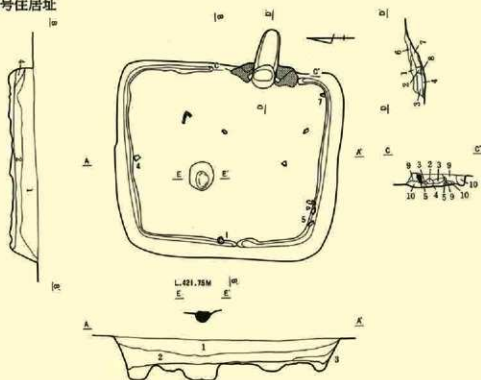
39-2



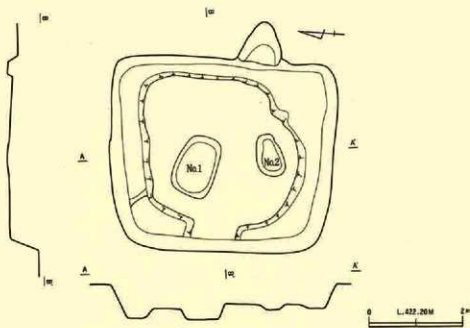
第209図 第39号住居址出土遺物



第40号住居址



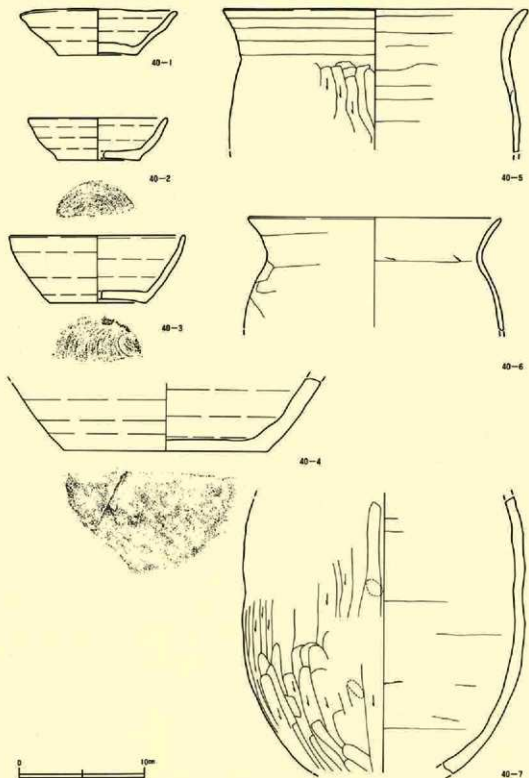
第210図 第40号住居址



第211図 第40号住居址掘方

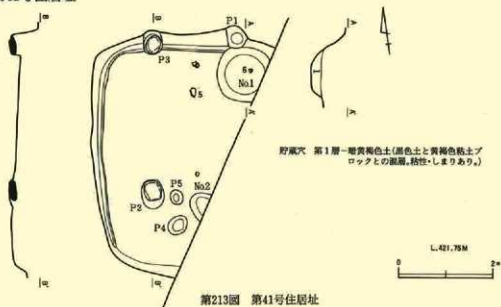
- 覆土 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。大型のF P 粒子を大量に含む。粘性・しまり無し。)
 第2層-明黒褐色土(黒褐色土が主体。F P は余り含まず、ロームブロック、ローム粒子を多く含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第3層-黒褐色土(黒色土分が主体。ローム分を含む。両側セクションにのみ認められた。粘性・しまりあり。)
 第4層-暗黒褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。)
- 電 第1層-黒褐色土(黒色土が主体。黄色粘土分・焼土粒子を密平含む。粘性・しまり無し。)
 第2層-黒灰色土(粘土ブロック、粘土分が主体。黒色土を含む。粘性無し。しまりあり。)
 第3層-黒褐色土(第1層と同構成。黒色が強い。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層-黒褐色土(黒褐色土が主体。カーボン、ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。)
 第5層-赤黄褐色土(黄褐色粘土ブロックが主体。熱を受け赤色化。粘性強い。しまりあり。)
 第6層-茶褐色土(茶褐色土が主体。ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第7層-茶褐色土(茶褐色土が主体。小ロームブロック、焼土ブロックを含む。粘性・しまり無し。)
 第8層-茶褐色土(第7層と同構成。焼土は少ない。粘性・しまり無し。)
 第9層-黄褐色土(黄褐色粘土。粘性・しまりあり。)
 第10層-黒褐色土(黒色土が主体。ローム粒子を含む。粘性・しまりややあり。)

C地区の南側にある。重複はない。第39号住居の西側に位置している。平面形態は、不正台形を呈する。南北長4.8m、東西長4.5mを測る。方位は、N-95°53'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ62cm、南壁で49cm、東壁で40cm、西壁で49cmであった。床面は、中央部を中心として硬質床面が広がっていた。壁沿いは軟弱である。掘方で床下土坑が計2基検出されている。中央北側と中央南側に検出した。前者は楕円形を呈し、後者はプランがはっきりせず浅い。また壁に沿って方形周溝状の溝が掘られ、西側中央のみ連結していない。No 1は平面依形をなし、長軸長131cm、短軸長87cm、深さ42cmである。No 2は平面不正楕円形で、長軸長93cm、短軸長58cm、深さ18cmである。方形周溝状の溝の規模は、北側中央で幅66cm、深さ38cm、南側中央で、幅60cm、深さ28cmで、東側中央で幅38cm、深さ18cm、西側では検出されなかった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、全局している。東壁北寄りで幅12cm、深さ6cm、北壁中央で幅15cm、深さ6cm、西壁中央で幅14cm、深さ6cm、南壁中央で幅16cm、深さ8cmであった。カマドは、良質の黄色粘土と袖石を使って構築したものである。第31号住居と同構造である。規模は全長126cm、袖部幅50cmである。遺物は、須恵器環(1~3)、甕(4)、土師器壺(5~7)が検出されている。また中央北西側には大きめの石が埋め込まれており、切ってみたところ、平たい面を上にして埋め込んでいたものである。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。

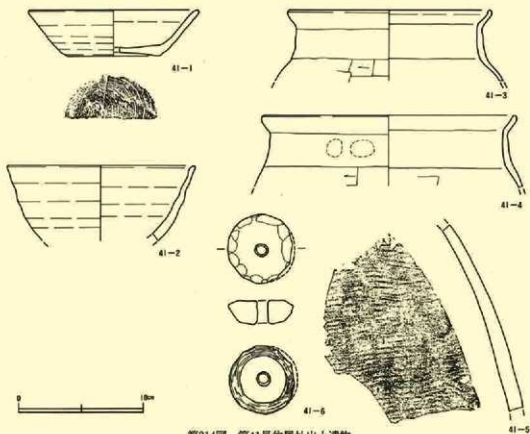


第212圖 第40号住居址出土遺物

第41号住居址



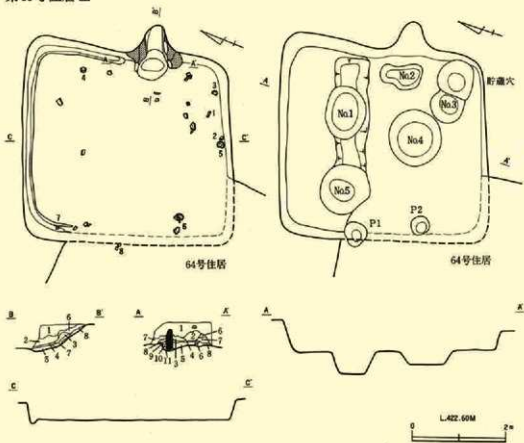
第213図 第41号住居址



第214図 第41号住居址出土遺物

C地区の南東端にある。調査区外にかかるため、半分のみ調査した。第33号住居の南側に位置している。規模は、南北長5.1mを測る。方位は、N-97°45'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ35cm、南壁で32cm、西壁で31cmであった。床面は、全体に硬質床面が広がっている。掘方では、床下土坑が2基検出された。No 1は、平面円形。南北118cm、東西114cm、深さ28cm。No 2は、平面形は大半が調査限界に入っているため不明。深さ40cm。柱穴は、計5本検出された。うち3本が支柱穴である。2本が北壁沿いにあり、うち1本は底部にかわら石が埋め込まれていた。また住居中央南寄りには丸石が床面に埋め込まれ、これらが支柱穴と対応すると考えられる。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、現状で南壁を除いて全周すると思われる。北壁中央で幅12cm、深さ4cm、西壁中央で幅8cm、深さ5cmであった。カマドは、調査区外に存在すると思われる。遺物は、須恵器坏(1)、埴(2)、甕(5)、土師器甕(3・4)、土製紡錘車(6)が検出されている。本住居の時期は、本道跡平安時代編年の第VI期に所属すると思われる。

第43号住居址

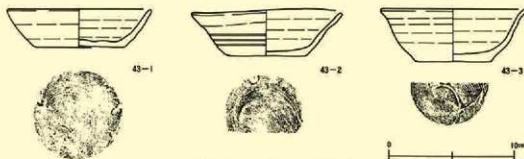


第215図 第43号住居址

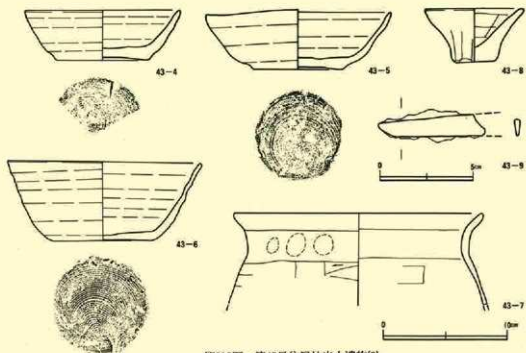
第216図 第43号住居址掘方

- 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。FPを少量に含む。粘性・しまり無し。)
 第2層-明黒褐色土(黒褐色土が主体。小ロームブロック、焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第3層-灰色土(灰色粘土ブロックが主体。黒色土が混じる。粘性無し。しまりあり。天井部腐層部。)
 第4層-明黒褐色土(黒褐色土が主体。焼土粒子を含む。風成的でソフト。粘性・しまり無し。)
 第5層-暗黒褐色土(黒褐色土、ローム分、焼土分の混層。掘方。粘性・しまり無し。)
 第6層-暗赤褐色土(焼土ブロックが主体。ロームブロック、灰、茶褐色土を混入。粘性・しまり無し。天井部腐層部の一帯。)
 第7層-茶褐色土(ソフトな茶褐色土が主体。小焼土ブロック、同粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第8層-明茶褐色土(細かなロームの胎砕粒子の集合のようなもので、きわめてソフト。粘性・しまり無し。)
 第9層-暗黄褐色土(黄褐色ローム分。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第10層-黒褐色土(ソフトな黒色土が主体。ローム粒子を少量に混入。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第11層-暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。)

C地区の中央東寄りにある。重複は第64号住居を切っている。第71号住居の南側に位置している。平面形態は、不正正方形を呈すると思われる。南北長5.2m、東西長5.0mを測る。方位は、N-76°25'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ49cm、南壁で55cm、東壁で56cm、西壁で49cmであった。床面は、カマド全面を中心として、硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が計6基検出されている。住居北側と南側に、円形の床下土坑を検出している。また住居北側半分が落ち込んでいる。No 1は平面楕円形で、長軸長112cm、短軸長87cm、深さ64cmである。No 2は平面不定形で、長軸長88cm、短軸長49cm、深さ30cmである。No 3は貯蔵穴と重複している。平面円形で、南北長73cm、東西長68cm、深さ40cmである。No 4は平面円形で、南北長112cm、東西長120cm、深さ47cmである。No 5は平面円形で、南北長106cm、東西長106cm、深さ51cmである。No 6は平面は長方形を長くした帯状をなし、現状で長軸長240cm、短軸長70cm、深さ30cmである。柱穴は、計2本検出されている。床面精査時には明確でなかったが、掘方で西側沿いに2本検出された。主柱ではないと思われる。貯蔵穴は、床面精査時には明確でなかったが、掘方より南東コーナーに円形の大きめのピットが検出された。南北長77cm、東西長76cm、深さ49cmであった。壁溝は、北側半分に検出されている。東壁北寄りで幅15cm、深さ7cm、北壁中央で幅16cm、深さ7cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。規模は全長118cm、袖部幅62cmである。袖及び煙道部の補強に川原石の平たいものを使用していた。現状では右袖に3枚、左袖に1枚で、先端の方2枚分が欠けていた。石の外側には白色粘土その他で石を補強していた。煙道部は斜めに直線的に外傾していた。遺物は、須恵器環(1~6)、土師器甕(7)、手づくね(8)、刀子(9)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。

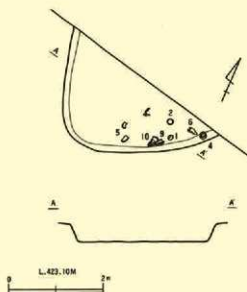


第217図 第43号住居址出土遺物(1)

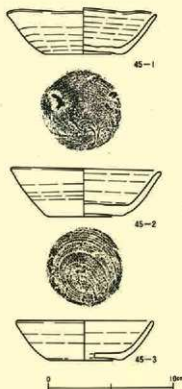


第218図 第43号住居址出土遺物(2)

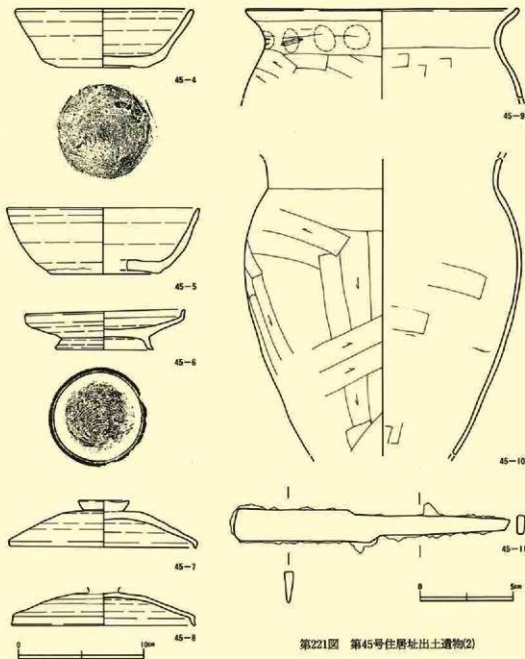
第45号住居址



第219図 第45号住居址



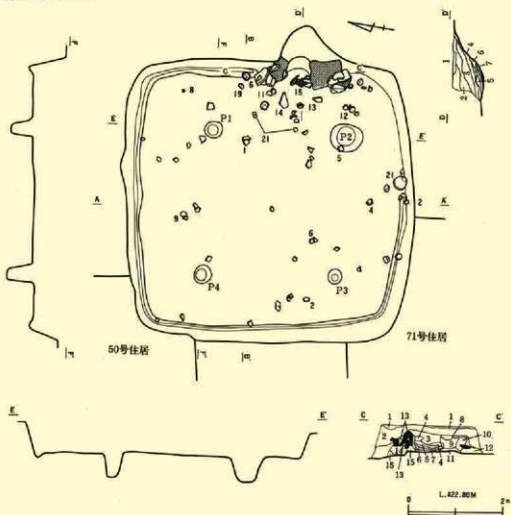
第220図 第45号住居址出土遺物(1)



第221図 第45号住居址出土遺物(2)

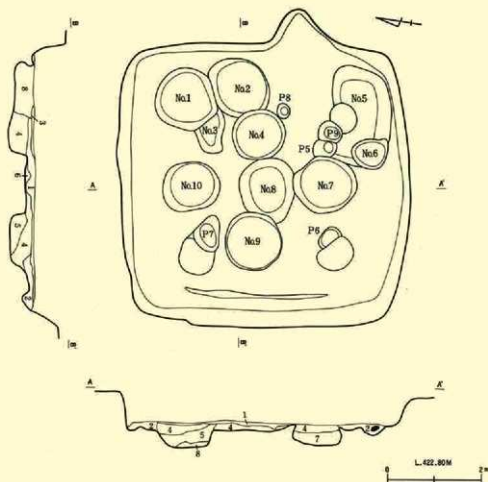
C地区の北東端にある。約2分の1が調査限界にかかっている。第8号獨立柱建物跡号住居の北側に位置している。壁は、南壁で40cm、西壁で36cmであった。床面は、ほぼ全面に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が検出されなかった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、検出されなかった。カマドは、調査区外に存在していると思われる。遺物は、須恵器坏(1~5)、皿(6)、蓋(7・8)、土師器甕(9・10)、刀子(11)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。

第47号住居址



- 第1層一黒色土(腐乱土)
 第2層一赤褐色土(赤褐色土が主体。ロームブロック、F Pを含む。粘性無し。しりややあり。)
 第3層一黄褐色土及び赤褐色土(黄色粘土ブロックと粘土との混層。下層に白色粘土が堆積。これが天井部崩落層と考えられるところから、本層は袖の上部の崩落と考えられる。粘性・しりやあり。)
 第4層一暗灰白色土(良質の白色粘土ブロックと粘土ブロックとの混層。天井部崩落層。粘性強い。しりやあり。)
 第5層一黒色土(ソフトなカーボンが主体。炭土分を含む。粘性・しりや無し。)
 第6層一明赤褐色土(ソフトな粘土分。粘性・しりや無し。)
 第7層一黄褐色土(ロームブロックが主体。黒色土を僅かに含む。粘性無し。しりやあり。掘方。)
 第8層一明赤褐色土(黄色粘土分と黒色土との混層。粘性・しりややあり。)
 第9層一淡黄褐色土(黄色粘土が主体。黒色土、粘土を僅かに含む。粘性あり。しりや強い。粘土。)
 第10層一暗灰白色土(白色粘土が主体。黒色土、小ロームブロックを少量含む。粘性強い。しりやあり。)
 第11層一明赤褐色土(赤褐色土とロームブロックとの混層。粘性無し。しりやあり。)
 第12層一赤褐色土(黒褐色土が主体。小ロームブロックを含む。粘性無し。しりややあり。)
 第13層一白色土(純粋な白色粘土。粘性・しりや強い。礫石の接合部。)
 第14層一明黒褐色土(明黒褐色土が主体。白色粘土、小石、ローム粒子を含む。粘性弱い。しりやあり。)
 第15層一明黒褐色土(黒褐色土とロームブロックとの混層。粘性無し。しりややあり。)

第222図 第47号住居址

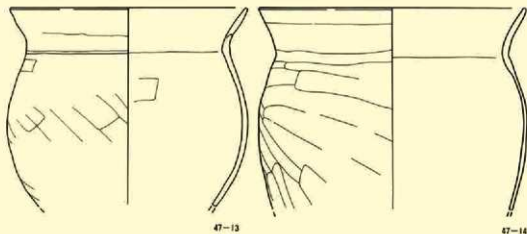


- 第1層一暗黄褐色土(大型ロームブロック、黒色土の混層。部分的に両者のサンドイッチ状の堆積が認められる。粘床。粘性無し。しまり強い。)
- 第2層一暗黄褐色土(大型ロームブロックと黒色土の混層。1層ほど堅くしまっていない。粘性・しまり無し。)
- 第3層一黒褐色土(黒色土が主体。粘土、焼土、カーボンを含む。床面上に電からかきだした土が堆積したものか。粘性無し。しまりあり。)
- 第4層一暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックが主体。黒色土分を含む。粘性無し。しまりあり。)
- 第5層一暗黄褐色土(黒色土と焼土分の混層土が主体。白色ブロックを多く混入。粘性・しまり無し。)
- 第6層一黄褐色土(大型ロームブロックと白色粘土ブロックの混層。粘性ややあり。しまり無し。)
- 第7層一暗黄褐色土(黄褐色土ロームブロックと黒色土との混層。粘性ややあり。しまりあり。)
- 第8層一暗黄褐色土(7層に近似。粘性無し。しまりややあり。)

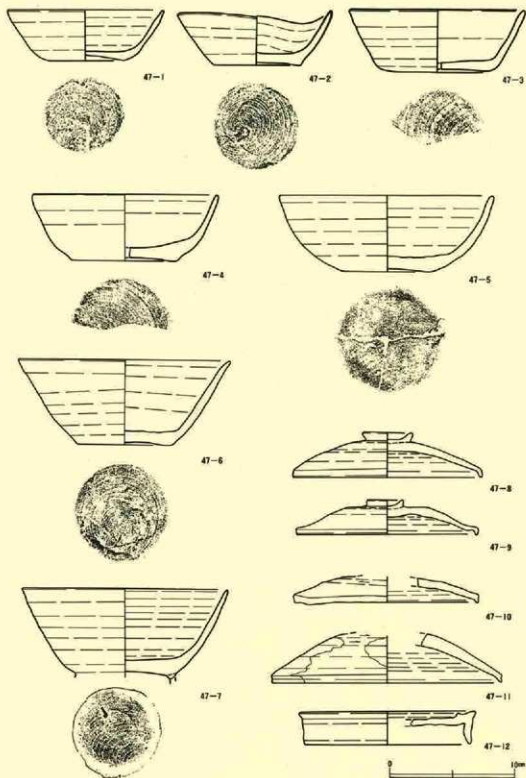
第223図 第47号住居址掘方

C地区の中央にある。重複は、第71号住居と第50号住居に切られている。第73号住居南側に位置している。本住居は覆土が深く、遺物も大量に出土しており、また床下土坑の特異なあり方が注目される。平面形態は、胴張りの正方形を呈する。南北長6.3m、東西長6.7mを測る。方位は、N-85°27'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ64cm、南壁で61cm、東壁で55cm、西壁で65cmであった。床面は、中央部を中心として、粘床の硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が多く計10基検出されている。特徴的であるのは、東西南北の4ヶ所に円形の床下土坑があり、この4ヶ所を結ぶと四角形状をなしており、意識的に掘ったものかもし

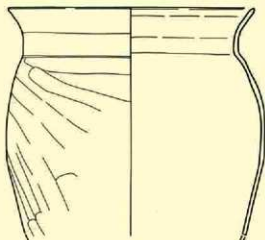
れない。この四ヶ所の覆土にはいずれも焼土を含んでおり、何かの意味があるのかもしれない。No 1 は平面円形で、南北長133cm、東西長133cm、深さ47cmである。No 2 は平面円形で、南北長130cm、東西長125cm、深さ45cmである。No 3 は平面は不定形で、南北長67cm、東西長103cm、深さ37cmである。No 4 は平面円形で、南北長115cm、東西長106cm、深さ49cmである。No 5 は平面方形で、長軸長207cm、短軸長126cm、深さ40cmである。No 6 は平面不正円形で、長軸長75cm、東西長65cm、深さ58cmである。No 7 は平面円形で、南北長137cm、東西長122cm、深さ47cmである。No 8 は平面卵形で、長軸長140cm、短軸長120cm、深さ47cmである。No 9 は平面円形で、南北長122cm、東西長122cm、深さ49cmである。No 10 は平面円形で、南北長123cm、東西長102cm、深さ54cmである。柱穴は、計8本検出され、すべて主柱穴である。床面精査時には、ノーマルな位置に4本検出されたが、掘方では、その内側に一回り小さい柱穴が検出されており、拡張の建て替えがあったのではないと思われる。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、南壁東側を除いて全周する。東壁北寄りで幅10cm、深さ8cm、北壁中央で幅14cm、深さ10cm、西壁中央で幅12cm、深さ7cm、南壁中央で幅16cm、深さ2cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。規模は全長135cm、袖部幅61cmである。本住居のカマドは他と違い、袖部に平石を多数使用している点が際だっている。右袖の石組は現状ではアットランダムであるが、すべて原位置を保っていると思われる石と石の間には黄色粘土を用いて袖を造り上げている。なお、左袖の壁部は掘りすぎてしまっている。遺物は、カマド周辺から床面・覆土全般から、まんべんなく多量に出土している。須恵器環(1~6)、埴(7)、蓋(8~12)、甕(19~22)、土師器甕(13~18)、敲石(20)、砥石(21)、青銅製丸柄杓(23)、刀子(25~27)、棒状鉄製品(28)、鉄滓(29)が出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅲ期に所属すると思われる。



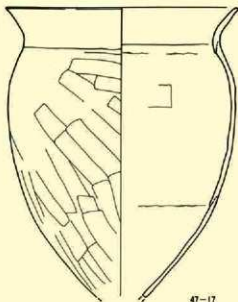
第224図 第47号住居址出土遺物(1)



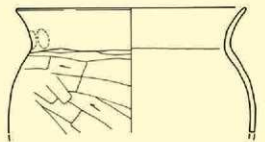
第225圖 第47号住居址出土遺物(2)



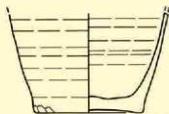
47-15



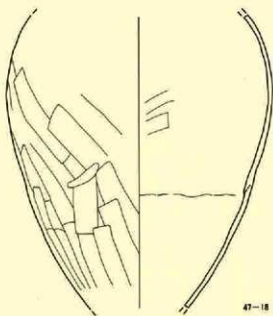
47-17



47-16



47-19



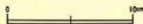
47-18

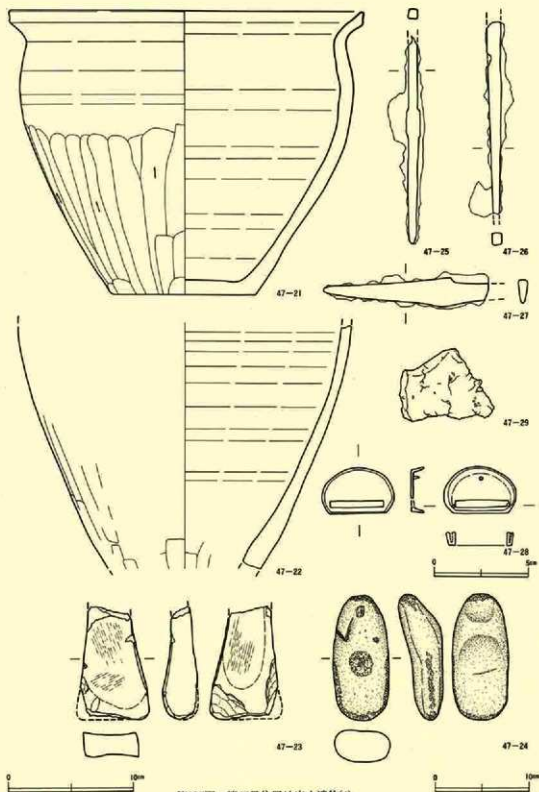


47-20



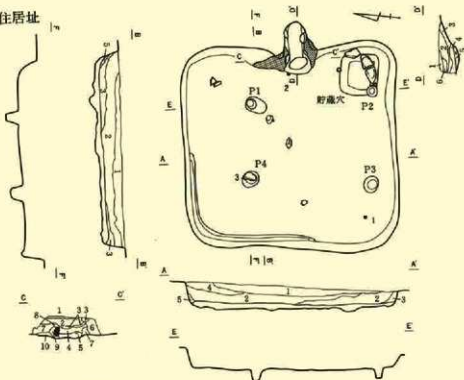
第226图 第47号住居址出土遺物(3)



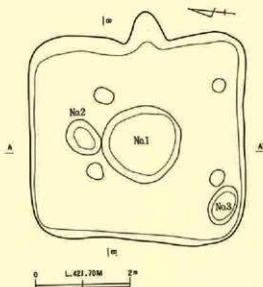


第227図 第47号住居址出土遺物(4)

第49号住居址



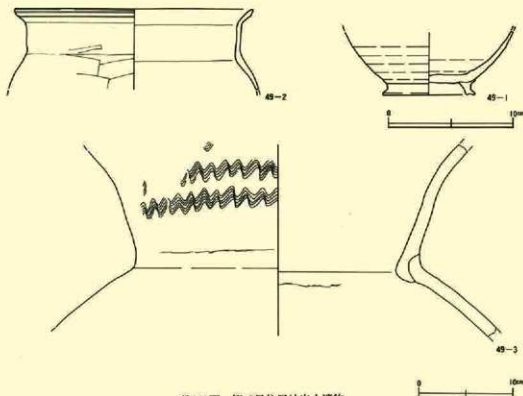
第228図 第49号住居址



第229図 第49号住居址掘方

- 覆土 第1層—黒褐色土(黒色土が主体。小砂、F Pを多量に含む。粘性・しまり無し。ガサガサ。)
 第2層—黒褐色土(黒褐色土が主体。小ロームブロック、F Pを少量含む。粘性・しまり無し。)
 第3層—黒褐色土(2層とは同様。小ロームブロック、F Pをほんの僅かに含む。粘性・しまり無し。)
 第4層—黒褐色土(2層と近似。ロームブロックは含まない。粘性・しまり無し。)
 第5層—明黒褐色土(ロームブロックと黒色土ブロックとの混層。粘性・しまり無し。)

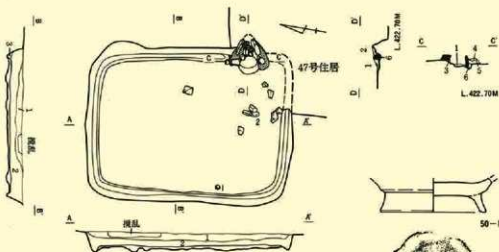
- 竪 第1層—黒色土(腐乱土。)
 第2層—黒褐色土(黒褐色土が主体。小ロームブロックを含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第3層—明黒褐色土(黄色粘土ブロックと黒色との混層。天井部剥落層。粘性・しまりあり。)
 第4層—黒褐色土(黒色に近い黒褐色土が主体。黄色ローム粒子を僅かに含む。天井部剥落前の腐成層か。)
 第5層—明黒褐色土(黒色土と焼土。ロームブロックの混層。焼成面直上層。粘性無し。しまりややあり。)
 第6層—明黒褐色土(黒色土と黄色粘土ブロックとの混層。粘性・しまりややあり。第1次天井部剥落層か。)
 第7層—黄褐色土(淡黄褐色粘土。焼。粘性強い。しまりあり。)
 第8層—赤褐色土(黄色粘土が熱を受け赤褐色に変色。粘性・しまりあり。)
 第9層—赤褐色土(黒色土とローム分との混層。粘性・しまり無し。フアト。)
 第10層—明黒褐色土(黒色土と黄色粘土との混層。粘性・しまりあり。袖台部。)



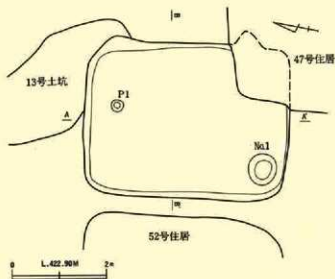
第230図 第49号住居址出土遺物

C地区の東南端にある。重複はない。第40号住居の南東側に位置している。平面形態は、正方形に近い長方形を呈する。南北長4.5m、東西長4.8mを測る。方位は、N-87°1'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ40cm、南壁で22cm、東壁で42cm、西壁で34cmであった。床面は、地下水位に近いため、全体に軟弱であった。床面より下の面にもう1枚の床面が検出され、プランに1回り小さい壁溝が検出できたことから、本住居は拡張住居であると思われる。掘方で床下土坑が計3基検出されている。No.1は平面円形で、南北長169cm、東西長165cm、深さ20cmである。No.2は平面不正楕円形で、長軸長82cm、短軸長62cm、深さ17cmである。No.3は平面楕円形をなし、長軸長86cm、短軸長56cm、深さ21cmである。柱穴は、計4本検出され、いずれも主柱穴である。北側2本はノーマルな位置に、南側は壁沿いに2本検出されている。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面は正方形で、南北長80cm、東西長88cm、深さ20cmであった。壁溝は、余り明確でなく、一部のみ検出されている。北側で幅12cm、深さ6cm、西側で幅13cm、深さ6cmである。カマドは、東壁中央にある。全長112cm、袖内幅53cmである。袖は内側に張り出さないタイプで、袖石を用い、袖部は黒色土・ロームを用いている。袖石はよく焼けており、焼成面も明確である。煙道部の立ち上がりは、直線的で急である。遺物は、須恵器壺(1)、甕(3)、土師器甕(2)が出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第V期に所属する。

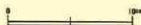
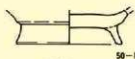
第50号住居址



第231図 第50号住居址



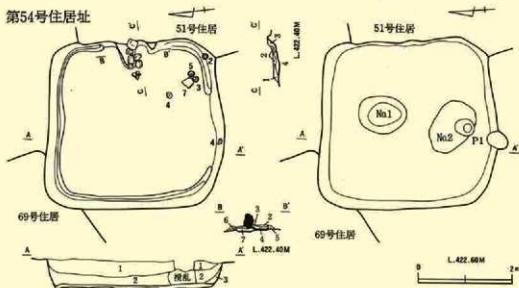
第232図 第50号住居址掘方



第233図 第50号住居址出土遺物

- 覆土 第1層—黒褐色土(黒色土が主体。F Pを少量に含む。粘性・しまり無し。)
 第2層—黒褐色土(1層とほぼ同じ。F Pは少なく、ローム粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。)
 第3層—明黒褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性・しまり無し。)
- 電 第1層—暗赤褐色土(黒褐色土と赤色焼土分との混層。粘性・しまり無し。)
 第2層—黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層—茶褐色土(茶褐色土純層。袖石の基礎。粘性・しまり無し。)
 第4層—黄土色土(黄土色粘土ブロック。袖石補強の芯。粘性強い。しまりあり。)
 第5層—暗黄土色土(黄土色粘土分と黒褐色土との混層。粘性・しまりあり。袖石補強部。)
 第6層—黒褐色土(ほぼ純粋な黒褐色土。粘性・しまり無し。袖石・支脚の埋め込み土。)

C地区の中央にある。重複は第47号住居を切っている。第50号住居の東隣にある。平面形態は、隅丸長方形を呈する。南北長4.4m、東西長3.4mを測る。方位は、N-84°44'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ30cm、南壁で25cm、東壁で26cm、西壁で25cmであった。床面は、全面に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が1基検出された。Na1は平面円形をなし、南北長60cm、東西長42cm、深さ42cmである。柱穴は、1本のみ検出された。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、浅く明確でない部分もあるが、全周している。東壁北寄りで幅12cm、深さ9cm、北壁中央で幅18cm、深さ13cm、西壁中央で幅10cm、深さ9cm、南壁中央で幅15cm、深さ6cmであった。カマドは、東壁南コーナー付近にある。規模は全長85cm、袖部幅39cmである。第47号住居掘り下げ中に検出したもので、重複を誤認したことに気づき処置をしたが、既に相当掘ってしまっていた。両袖に大きな平たい川原石を用い、内面にはっきりしないが、焼成面を検出した。左袖は袖手を黄土色粘土で補強してあった。珍しく石製の支脚を確認している。よく焼けていた。遺物は、須恵器埴(1)、敲石(2)が出土している。またカマド前面に角石が多く出土している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅲ～Ⅳ期に所属すると思われる。

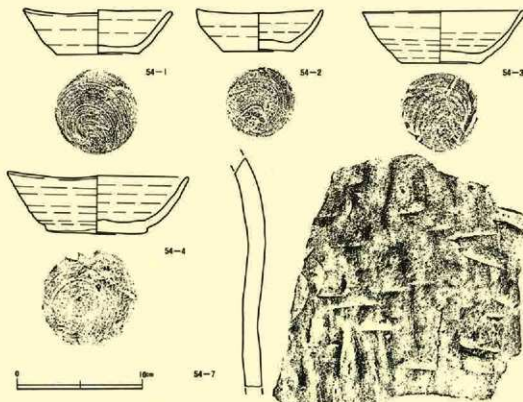


第234図 第54号住居址

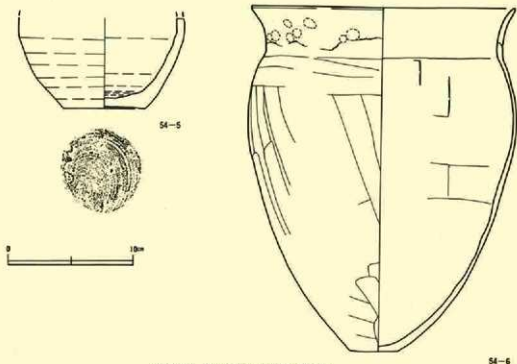
第235図 第54号住居址断面

- 覆土 第1層-茶褐色土(ロームブロック、FPを多く混入。茶褐色土が主体。粘性・しまり無し。)
 第2層-茶褐色土(1層とほぼ同様。1層よりロームブロック、FPの混入量が少ない。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層-黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒を含む。粘性・しまり無し。)
- 竈 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。細かなローム粒を含む。粘性・しまり無し。)
 第2層-黒灰色土(大型の粒土と黒褐色土との混層。粘性・しまり無し。天井部の崩落層。)
 第3層-黒褐色土(黒褐色土が主体。炭土分を含む。粘性・しまり無し。きわめてソフト。)
 第4層-黒褐色土(黒褐色土が主体。粘土分、ローム粒を含む。粘性・しまり無し。)
 第5層-明黒褐色土(黒色土とロームブロックの混層。炭土を僅かに含む。粘性・しまりややあり。)
 第6層-黄褐色土(黄色ローム分が主体。黒色土分を含む。粘性・しまりなし。ソフト。)
 第7層-黒色土(ソフトな黒色土を主体。僅かにローム粒を含む。粘性・しまり無し。)

C地区の中央にある。重複は第51・69号住居を切っている。平面形態は、不正正方形を呈する。南北長3.8m、東西長3.5mを測る。方位は、N-94°40'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ51cm、南壁で45cm、東壁で62cm、西壁で52cmであった。床面は、ほぼ全面に硬質床面が広がっていた。南側では凹凸が著しい。掘方で床下土坑が計2基検出された。中央北側に楕円形のものがある。また同南側にはプランが明確ではないが浅い掘り込みが存在している。No.1は平面楕円形で、長軸長102cm、短軸長80cm、深さ49cmである。No.2は平面楕円形で、長軸長117cm、短軸長80cm、深さ26cmである。柱穴は、1本検出された。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、南壁沿いのほぼ中央部で、少しの高まりがあり、そのあたりで一旦壁溝が途切れるようである。カマド部と貯蔵穴部を除いて全周している。東壁北寄りで幅13cm、深さ8cm、北壁中央で幅12cm、深さ5cm、西壁中央で幅14cm、深さ8cmであった。カマドは、重複関係にある第51号住居を掘り下げ中に検出されたものであり、(切り合いを誤認したと気づいた時には既に相当掘ってしまっていた。しかし遺存状態は始めからあまり良くなかったようである。)右袖に丸石を3連結しているのに対して、左袖にはほとんど何も存在していなかった。天井部崩落層はわずかに確認でき、焼成面ははっきりしなかった。なお中央部に壁の胴部破片を検出している。規模は全長64cm、袖部幅36cmである。遺物は、須恵器坏(1~4)、小型甕(5)、甕(7)、土師器甕(6)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。



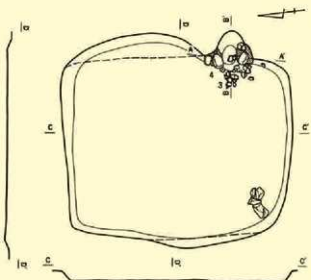
第236図 第54号住居址出土遺物(1)



第237図 第54号住居址出土遺物(2)

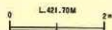
54-6

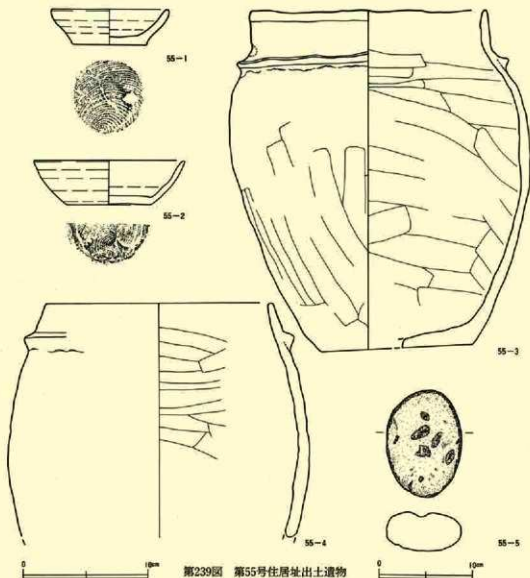
第55号住居址



- 第1層—茶褐色土(茶褐色土が主体、焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第2層—黒褐色土(黒褐色土が主体、F P 粒子を多量に含む。粘性無し。しまりややあり。)
- 第3層—暗灰白色土(黒色土、F P 粒子、灰白色粘土分との混層。粘性はほとんど無し。しまりややあり。)
- 第4層—茶褐色土(茶褐色土に僅かにF P 粒子を含む。粘性無し。しまりややあり。)
- 第5層—暗黄褐色土(黄褐色ローム分と黒色土との混層。粘性無し。しまりややあり。)

第238図 第55号住居址

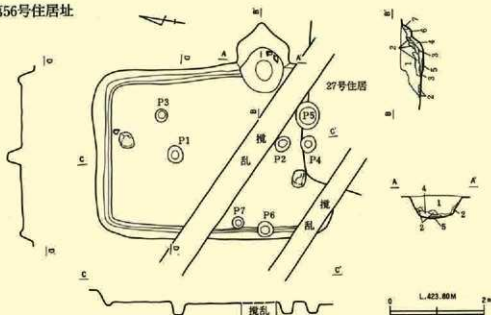




第239図 第55号住居址出土遺物

C地区の中央南側にある。重複はない。第60号住居南側に位置する。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長4.9m、東西長4.4mを測る。方位は、N-84°17'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ22cm、南壁で24cm、東壁で10cm、西壁で10cmであった。床面は、概して軟弱で、部分的に攪乱を受けていたところから掘り過ぎてしまった。掘方で床下土坑が検出されなかった。柱穴は主柱穴と思われるピットは検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、明確でなく確認できなかった。カマドは、東壁南寄りにある。規模は全長85cm、袖幅31cmである。袖石の門構えに大きな丸石を用い、袖土には質の良くない灰白色粘土を用いている。遺物は、須恵器環(1・2)、羽釜(3・4)、敲石(5)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第XI期に所属すると思われる。

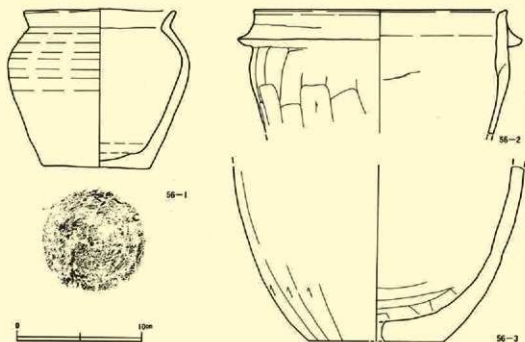
第56号住居址



- 第1層一黒褐色土(黒褐色土が主体。F.P.、小ロームブロックを含む。粘性・しり無し。)
 第2層一灰白色土(良質な灰白色粘土ブロック。粘性・しり強い。)
 第3層一淡赤白色土(焼土と灰白色粘土ブロックとの混層。一部焼土の層状堆積(サンドイッチ状)が認められる。粘性・しり無し。天井部内面の焼成面剥離ではないか。)
 第4層一黒褐色土(黒色土、黄色ローム小ブロックのほかにカーボンを多量に含む。粘性・しり無し。)
 第5層一赤褐色土(純粋な焼土層。粘性・しり無し。)
 第6層一黒褐色土(黒褐色土が主体。焼土ブロックを多量に含む。粘性・しり無し。)
 第7層一茶褐色土(きめの細かい疎かな茶褐色土。粘性・しり無し。)

第240図 第56号住居址

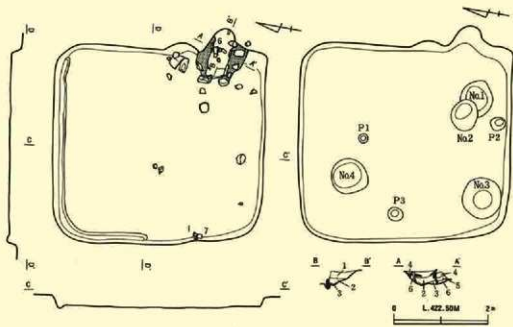
C地区の北東側にある。重複は第27号住居を切っている。平面形態は、カマドに向かって横長の長方形を呈する。南北長5.0m、東西長3.5mを測る。方位は、N-82°2'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ26cm、南壁で26cm、東壁で29cm、西壁で20cmであった。床面は、中央部を中心として硬質床面が広がっている。掘方で床下土坑等の施設は、検出されなかった。柱穴は、計7本検出され、そのうち2本が主柱穴である。貯蔵穴は、第27号住居に切られているため、確認できなかった。壁溝は、現況では全周する。東壁と北壁では安定した幅と深さを保っているが、西壁では不安定となっている。東壁北寄りで幅18cm、深さ6cm、北壁中央で幅17cm、深さ7cm、西壁中央で幅18cm、深さ7cmであった。カマドは、東壁にある。規模は全長147cm、袖部幅93cmである。焼成室奥部の天井部が一部残存しており、焼成室自体も比較的大型のものであった。第1層の堆積幅が大きいのは、比較的是やく天井部が崩落してしまったためであろう。天井部の崩落は、ブロック状に落ちていた。なお焼成室内には羽釜の一括が残存していた。遺物は、須恵器小型壺(1)、羽釜(2)、土釜?(3)が検出されている。また北壁沿いと南西側に大きめの丸石がそれぞれ床面直上で出土した。たたき台ではないようである。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VIII期に所属すると思われる。



第241図 第56号住居址出土遺物

第59号住居址

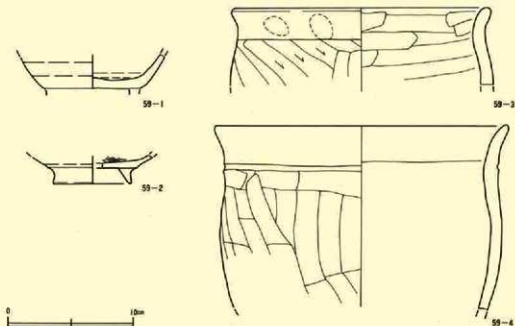
C地区の中央にある。重複はない。第88号住居址東側に位置する。平面形態は、正方形を呈する。南北長4.5m、東西長4.3mを測る。方位は、N-82°27'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ24cm、南壁で20cm、東壁で28cm、西壁で20cmであった。床面は、硬質床面は検出されなかった。床下土坑は、計4基検出した。1号が最も深めであった。2号はそれよりも浅めでプランもあまり明確でない。3・4号は重複関係にあるが、いずれも小さく浅く床下土坑と判断に危ぶまれるようなものであった。No1は平面円形で、南北長78cm、東西長76cm、深さ12cmである。No2は平面不正円形で、南北長57cm、東西長66cm、深さ18cmである。No3は平面円形で、南北長82cm、東西長87cm、深さ30cmである。No4は平面不正円形で、南北長78cm、東西長74cm、深さ32cmである。柱穴は、計3本検出されたが、いずれも支柱穴ではないと思われる。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、北壁と西壁の一部に確認できたがあとは不明確である。北壁中央で幅12cm、深さ7cm、西壁中央で幅15cm、深さ5cmであった。カマドは、東壁南寄りにある。規模は全長122cm、袖部幅42cmである。カマドの袖に石を多用しており、周辺に散乱する石も元はこのカマドのものであったであろう。カマドの主軸は若干傾きをもっている。遺物は、須恵器埴(1)、埴(2)、羽釜(7)、土師器甕(3・4)、甕(5・6)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VIII期に所属すると思われる。



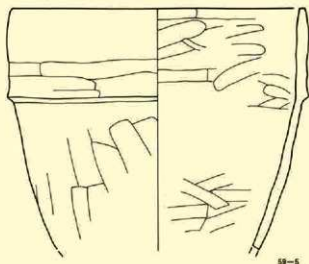
第242図 第59号住居址

第243図 第59号住居址掘方

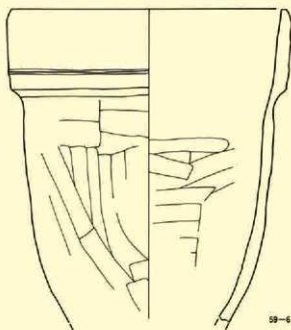
- 電 第1層—明茶褐色土(茶褐色土が主体。焼土粒子・ローム粒子を含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層—黒褐色土(黒褐色土が主体。焼土粒子を僅かに含む。粘性・しまり無し。)
 第3層—暗黄褐色土(純粋な黄褐色土。粘性・しまり無し。)
 第4層—暗灰色土(暗灰色粘土。粘性・しまり強い。)
 第5層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。暗灰色粘土ブロック、カーボンを含む。粘性・しまりややあり。袖台部。)
 第6層—茶褐色土(純粋な茶褐色土。粘性・しまり無し。)



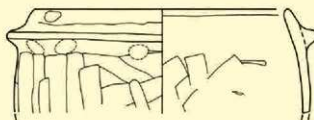
第244図 第59号住居址出土遺物(1)



59-5



59-6



59-7

第245図 第59号住居址出土遺物(2)

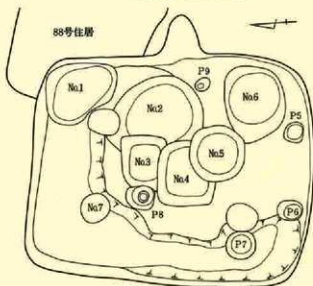


第60号住居址

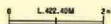


第246图 第60号住居址

88号住居

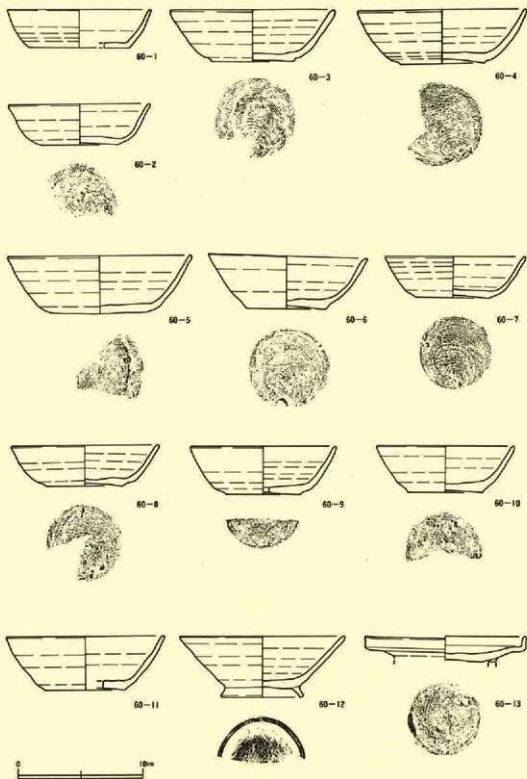


第247图 第60号住居址掘方

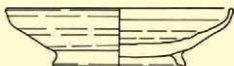


- 覆土 第1層-黒褐色土(ダラダラの黒褐色土が主体。小石、F Pを含む。粘性・しまり無し。)
 第2層-明黒褐色土(黒褐色土が主体。F P、ロームブロックを少量に含む。粘性・しまり無し。ダラダラ。)
 第3層-黒褐色土(2層と同組成だが、色調が暗い。粘性無し。しまりややあり。)
 第4層-明茶褐色土(ソフトな茶褐色土が主体。ロームブロックを混入。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第5層-黒褐色土(黒色土、大型ロームブロック、焼土小ブロックの混層。粘性ややあり。しまりあり。上端は床面。床下土坑埋土。)
 第6層-黄褐色土及び黒色土(上下2層に分層。自然堆積ではないと思われる。上層は黄褐色ロームブロックが主体。黒色土、焼土小ブロックを混入。下層は、きめ細かい黒色土が主体、小ロームブロックを含む。粘性・しまりややあり。床下土坑埋土。)
 第7層-暗黄褐色土(本来的な住居層方土。ロームブロックと黒色土の混層。一部互いにサンドイッチ状をなしている。粘性ややあり。しまり強い。上端は床面。)
 第8層-暗黄褐色土(黒色土と黄褐色ロームブロックとの混層。灰白色粘土ブロックも含む。粘性・しまりややあり。)
- 電 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。F P粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第2層-黒褐色土(黒褐色土が主体。灰白色粘土分、焼土分を含む。粘性・しまり無し。)
 第3層-灰茶褐色土(黒色土と灰白色粘土分との混層。焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第4層-黒色土(茶褐色土と黒色土・ボンとの混層。粘性・しまり無し。)
 第5層-茶褐色土(茶褐色土が主体。焼土、ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第6層-暗赤褐色土(茶褐色土と灰土分との混層。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第7層-茶褐色土(黒褐色土、焼土分、小ロームブロックの混層。粘性・しまり無し。ソフト。袖石と側面補強粘土(8層)との間の層。)
 第8層-暗灰色土(暗灰色粘土ブロックと茶褐色土との混層。粘性・しまりあり。袖の側面補強。)
 第9層-暗黄褐色土(ローム分と黒褐色土分との混層。粘性・しまり無し。袖石基部埋土。)
 第10層-黄褐色土(大型ロームブロックと黒褐色土との混層。袖芯部。粘性無し。しまりあり。)
 第11層-黒褐色土(1層の黒褐色土と灰白色粘土分との混層。粘性・しまりあり。)
 第12層-明黒褐色土(11層と近似的。焼土ブロックが混じる。粘性・しまりややあり。袖基部。)
 第13層-暗赤褐色土(茶褐色土と焼土との混層。粘性・しまり無し。)

C地区の中央にある。重複は第88号住居に切られている。平面形態は、カマドに向かって横長の長方形を呈する。南北長6.0m、東西長5.7mを測る。方位は、N-94°34'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ54cm、南壁で42cm、東壁で58cm、西壁で48cmであった。床面は、中央部を中心としてほぼ前面に良好な硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が7基を検出した。そのうち4基は重複している。また北側から西側にかけて不正形な溝状のものが認められている。No 1は平面不定形で、南北長154cm、東西長129cm、深さ39cmである。No 2は平面不正円形で、南北長209cm、東西長150cm、深さ34cmである。No 3は平面方形で、南北長98cm、東西長118cm、深さ44cmである。No 4は平面長方形で、長軸長125cm、短軸長138cm、深さ34cmである。No 5は平面円形で、南北長119cm、東西長119cm、深さ57cmである。No 6は平面不正方形で、南北長129cm、東西長163cm、深さ50cmである。No 7は平面Lの字形の帯状を呈し、西側中央で幅92cm、深さ14cmで、北側中央で幅131cm、深さ14cmである。柱穴は、9本検出されている。そのうち4本が主柱穴である。大きく深いしっかりした主柱穴がノーマルな位置に確認された。また床下より南壁沿いに2本の旧主柱穴と思われるピットを検出した。本住居も拡張であろうか。壁溝は、幅は狭いが深くしっかりした壁溝が全周する。東壁北寄りで幅10cm、深さ6cm、北壁中央で幅12cm、深さ7cm、西壁中央で幅16cm、深さ7cm、南壁中央で幅16cm、深さ7cmであった。カマドは、東壁中央にある。規模は全長205cm、袖部幅55cmである。特に左袖の遺存状態が良かった。煙道部まで平たい丸石を並べ、それと掘方との間には大きなロームブロックを充填しその上を灰白色粘土で補強したものである。新にロームブロックを用いている点で特異である。遺物は、須恵器環(1~11)、埴(12)、皿(13~15)、蓋(16~18)、土師器甕(19・20)、砥石(21・22)、敲石(23)、刀子(24)、か帯(25)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅲ期に所属すると思われる。



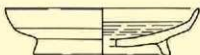
第248图 第60号住居址出土遺物(1)



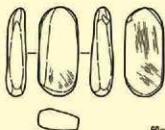
60-14



60-21



60-15



60-22



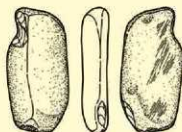
60-16



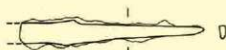
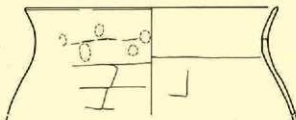
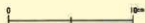
60-17



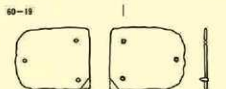
60-18



60-23



60-24



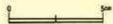
60-25



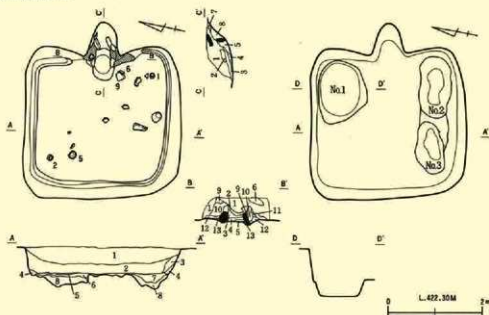
60-20



第249图 第60号住居址出土遺物(2)



第61号住居址



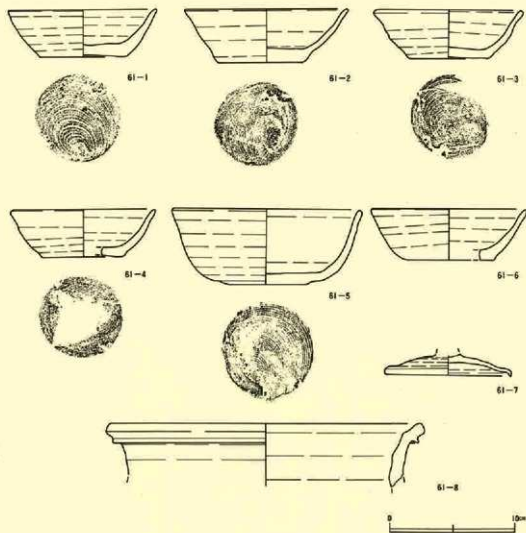
第250図 第61号住居址

第251図 第61号住居址掘方

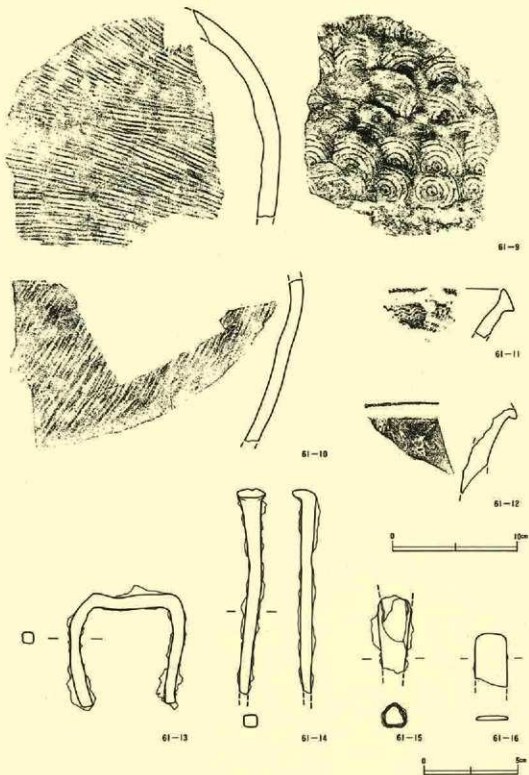
- 覆土 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。F Pを少量に、小ロームブロックを少量含む。粘性無し。しまりあり。ザラツク。)
- 第2層-黒褐色土(1層とほぼ同様の組成。主体の黒褐色土が1層より黒い。粘性無し。しまりあり。)
- 第3層-黒褐色土(ソフトなきめ細かい黒色土が主体。上部に少量のF Pが混じる。粘性・しまり無し。)
- 第4層-明黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム分、ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
- 第5層-黄灰白色土(灰白色粘土ブロックと黄色粘土ブロック及び黒色土との混層。粘性・しまり強い。)
- 第6層-黒褐色土(黒褐色土が主体。小ロームブロックを含む。粘性・しまりややあり。)
- 第7層-明黒褐色土(黒色土とロームブロックとの混層。粘性・しまりややあり。)
- 第8層-暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックが主体。黒色土が混じる。粘性ややあり。しまり強い。)
- 電 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。細かなF Pを少量に含む。粘性・しまり無し。)
- 第2層-暗灰白色土(灰白色粘土と黒色土との混層。粘性・しまりあり。天井部所属層。)
- 第3層-黒褐色土(黒褐色土が主体。粘土分を僅かに含む。粘性・しまりややあり。)
- 第4層-暗赤褐色土(粘土ブロック、カーボン、粘土ブロックの混層。粘性・しまり無し。焼成面ではなく、第1次天井部所属層か。)
- 第5層-黄褐色土(ロームブロック、焼土分、黒色土の混層。粘性・しまり無し。)
- 第6層-黄褐色土(純粋な黄褐色粘土。粘性・しまり強い。)
- 第7層-赤褐色土(赤褐色粘土ブロックと黒色土との混層。粘性無し。しまりややあり。)
- 第8層-明黒褐色土(黄褐色ロームブロックと特色土との混層。粘性無し。しまりややあり。)
- 第9層-赤褐色土(10層の黄色粘土が融て赤色。粘性・しまりややあり。)
- 第10層-黄色土(純粋な黄色粘土ブロック。粘性ややあり。しまり強い。)
- 第11層-暗灰白色土(灰白色粘土ブロックと黒色土との混層。粘性・しまり強い。)
- 第12層-黒褐色土(黒色土と黄褐色ローム粒子との混層。粘性・しまりややあり。)
- 第13層-明黒褐色土(黒色土とローム分との混層。粘性・しまり無し。)

C地区の中央南寄りにある。重複は第79号住居を切っている。平面形態は、正方形を呈する。南北長3.3m、東西長3.7mを測る。方位は、N-80°54'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ55cm、南壁で54cm、東壁で51cm、西壁で43cmであった。床面は、ほぼ前面に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が計3基検出した。北東コーナーに大きな床下土坑を1基検出した。また西側及び南側に不正形な掘り込みを検出した。No.1は平面楕円形で、長軸長136cm、短軸長102cm、深さ67cmである。No.2は平面不正楕円形で、長軸長130cm、短軸

長69cm、深さ18cmである。No 3は平面楕円形で、長軸長112cm、短軸長60cm、深さ28cmである。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、全周している。東壁北寄りで幅16cm、深さ5cm、北壁中央で幅14cm、深さ7cm、西壁中央で幅16cm、深さ4cm、南壁中央で幅12cm、深さ4cmであった。カマドは、東壁中央にある。袖に石と黄色粘土をふんだんに用いて構築していた。掘方と袖石の間に黄色粘土を充填しているようである。規模は全長123cm、袖部幅63cmである。遺物は、須恵器坏(1~6)、蓋(7)、甕(8・10~12)、壺(9)、かすがい状鉄製品(13)、釘(14)、板状鉄製品(15)、用途不明鉄製品(16)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。

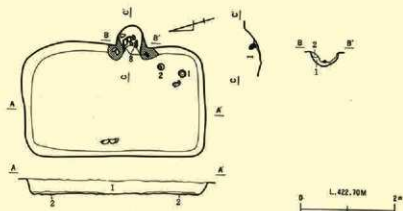


第252図 第61号住居址出土遺物(1)



第253图 第61号住居址出土遺物(2)

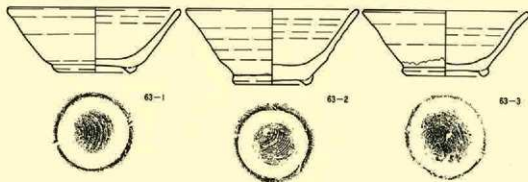
第63号住居址



- 覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。FPを多量に含む。粘性・しまりややあり。)
 第2層—暗黄褐色土(黄褐色ローム分が主体。黒褐色土分を多く含む。粘性・しまりややあり。)
- 竈 第1層—羽黒褐色土(黒褐色土が主体。赤褐色焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第2層—灰白色土(灰白色粘土ブロック。粘性・しまりあり。)

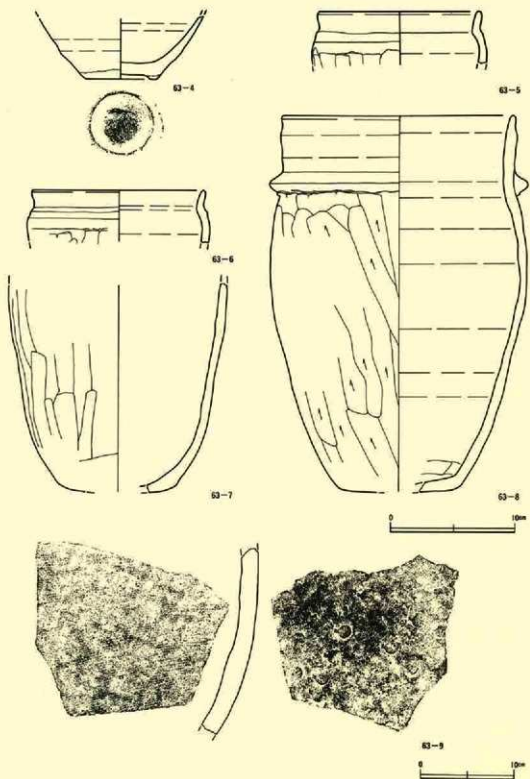
第254図 第63号住居址

C地区の中央北側にある。重複は第91号住居を切っている。本住居は比較的小型で、カマドに対して極端に横長となる形態で、本遺跡でも他に例がない。平面形態はカマドに向かって横長の長方形を呈する。南北長3.8m、東西長2.7mを測る。方位は、N-100°26'-Eを指している。覆土は、第1層が大部分を占め人為的な埋土の可能性があると思われる。壁は、北壁で高さ33cm、南壁で27cm、東壁で28cm、西壁で24cmであった。床面は、全体に軟弱な床面が広がっていた。掘方で床下土坑が検出されなかった。柱穴、貯蔵穴、壁溝は、検出されなかった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。質の悪い灰白色の粘土で両側に袖を作り出している。底面への掘り込みは行っていない。全長73cm、袖内幅36cmである。遺物は、須恵器碗(1~4)、小型甕(5・6)、羽釜(8)、甕(7・9)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VII期に所属すると思われる。



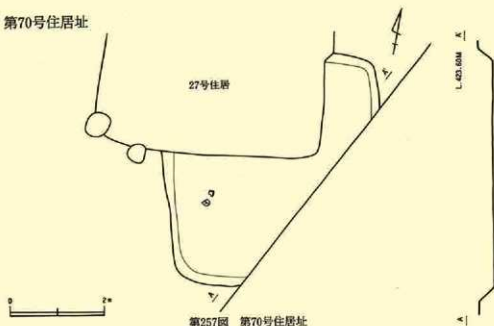
第255図 第63号住居址出土遺物(1)





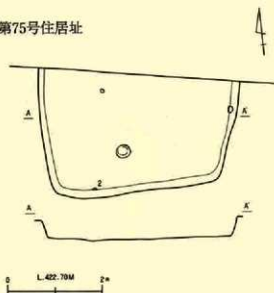
第256图 第63号住居址出土遺物(2)

第70号住居址

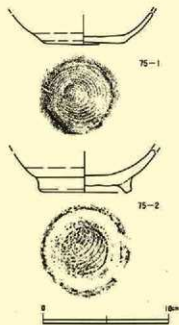


C地区の北東端にある。重複は第27号住居を切っている。方位は、N-87°20'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ32cm、南壁で30cm、西壁で32cmであった。床面は、薄い貼床を全面に施していた。掘方で床下土坑は検出されなかった。柱穴、貯蔵穴、壁溝は、検出されなかった。カマドは、調査区外に存在すると思われる。遺物は、検出されなかった。本住居の時期は、特定できない。

第75号住居址



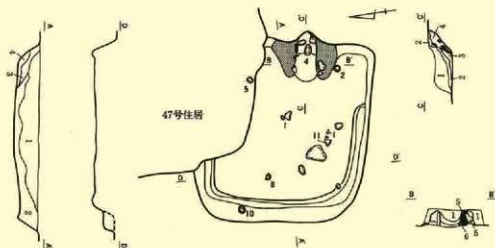
第258図 第75号住居址



第259図 第75号住居址出土遺物

C地区の北端にある。第72号住居西側に位置している。調査限界にかかり、半分のみ調査した。規模は、東西長4.2mを測る。覆土はレンズ状堆積をなしていた。壁は、南壁で49cm、東壁で40cm、西壁で36cmであった。床面は、中央付近に硬質床面がある。全体に凹凸が激しい。柱穴、貯蔵穴、壁溝は、検出されなかった。カマドは、調査区外に位置すると思われる。遺物は、須恵器環(1)、埴(2)が検出されている。また南寄りにたたき石が埋め込まれていた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅶ～Ⅷ期に所属すると思われる。

第71号住居址



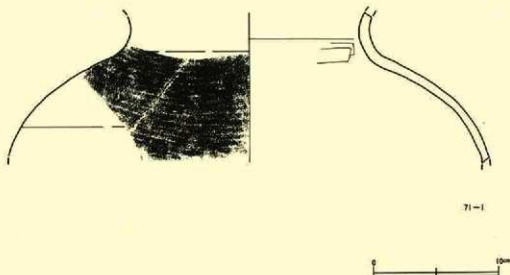
第260図 第71号住居址



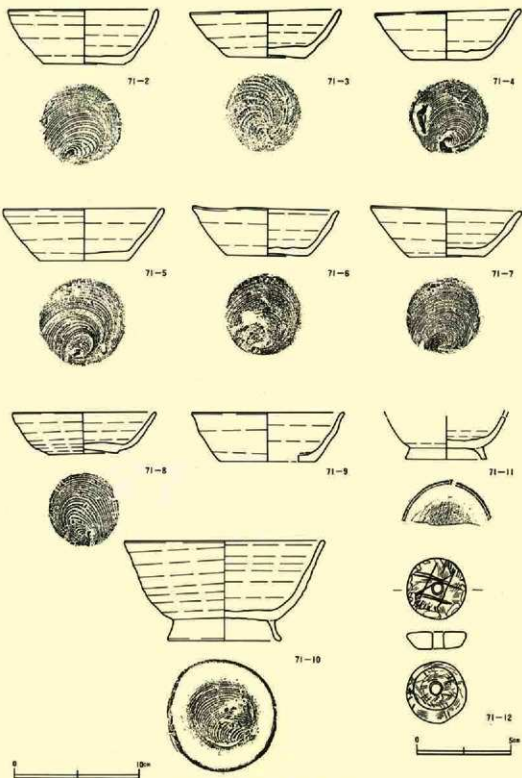
第261図 第71号住居址側方

- 覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F.P.、小ロームブロックを多量に含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層—暗黒褐色土(ほぼ1層に等しいが、主体となる黒色土がやや多い。)
 第3層—明黒褐色土(1層に粘土分の混ざったもの。粘性・しまりややあり。)
 第4層—灰白色土(暗灰白色粘土ブロック。粘性・しまり強い。)
- 竈 第1層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。F.P.、小ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。)
 第2層—明黒褐色土、ローム分、灰白色粘土ブロックの混層。粘性・しまりややあり。天井部崩落層。)
 第3層—黒褐色土(黒褐色土が主体。焼土ブロックを含む。粘性・しまり無し。)
 第4層—黒褐色土(3層に近似。焼土は含まずわりとサラサラしている。粘性無し。しまりややあり。)
 第5層—淡黄色土(淡黄色ロームブロック。焼。粘性無し。しまりあり。)
 第6層—黒色土(きめ細かい黒色土が主体。ロームブロック・焼土を含む。粘性無し。しまりややあり。袖台部。)

C地区の中央にある。重複は第47号住居を切っている。平面形態は、隅丸正方形を呈する。南北長4.1m、東西長4.1mを測る。方位は、N-85°25'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ48cm、南壁で39cm、東壁で51cm、西壁で52cmであった。床面は、カマド前面を中心として、硬質床面が広がっている。かなりの凹凸が見られる。掘方床下土坑が1基検出された。住居中央南側に比較的大きな床下土坑がある。No1は平面不正長方形で、長軸長176cm、短軸長140cm、深さ45cmである。柱穴、貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、西壁の一部が認められた。幅17cm、深さ5cmである。カマドは、東壁中央南寄りにある。規模は、全長107cm、袖部幅46cmである。煙道部まで石組で、袖は石と黄色土で造られ、台部は黒色土であった。黄色土は粘土でなくロームであった。色が淡黄色なのは一度水で練っているからではないか。遺物は、覆土全般より比較的多くの遺物が出土した。須恵器環(2~9)、埴(10・11)、甕(1)、石製紡錘車(2)が検出されている。また南西側床面直上にはたたき台と思われる石が存在していた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。

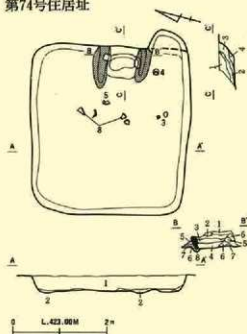


第262図 第71号住居址出土遺物(1)



第263図 第71号住居址出土遺物(2)

第74号住居址



第264図 第74号住居址

覆土 第1層—黒褐色土(黒色土が主体。黄褐色ロームブロック、FPを多く含む。粘性無し。しりやあり。)

第2層—明黒褐色土(一部床面の腐り過ぎも含む。黒色土と黄褐色ロームブロックとの混層。粘性無し。しりやあり。)

電 第1層—黒褐色土(黒色土が主体。ローム粒子、FP粒子を含む。粘性無し。しりやあり。)

第2層—暗黄灰色土(黄色粘土分、ローム粒子、黒褐色土の混層。粘性・しりや無し。)

第3層—黒褐色土(黒色土が主体。焼土分を含む。粘性・しりや無し。)

第4層—明黒褐色土(黒色土、黄色ローム小ブロック、焼土分を含む。粘性・しりや無し。)

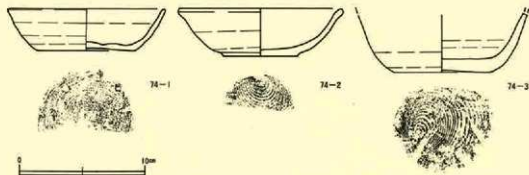
第5層—暗灰白色土(灰白色粘土分と黒色土分との混層。粘性・しりやあり。礫石。)

第6層—黒褐色土(黒色土が主体。ローム粒子、FP粒子を若干含む。粘性無し。しりやあり。)

第7層—暗黄褐色土(ロームブロックが主体。黒色土を含む。粘性無し。しりやあり。礫石部。)

第8層—明黒褐色土(粘土とロームブロックとの混層。粘性無し。しりやあり。礫石部。)

C地区の中央北寄りにある。重複はない。第76号住居東側に位置している。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長3.4m、東西長3.9mを測る。方位は、N-76°6'-Eを指している。覆土は、ほぼ単一層であった。このことより、人為的埋土の可能性がある。壁は、北壁で高さ36cm、南壁で33cm、東壁で32cm、西壁で32cmであった。床面は、比較的軟弱でカマド前面にのみわずかに硬質床面があった。凹凸が著しい。掘方で床下土坑が検出されなかった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、検出されなかった。カマドは、東壁はほぼ中央にある。規模は全長90cm、袖部幅64cmである。セクションは3層に分層された。天井部崩落層と焼成面ははっきりしていない。遺物は、須恵器坏(1~3)、埴(4)、甕(8)、土師器甕(5~7)が検出されている。本住居の時期は、本道跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。



第265図 第74号住居址出土遺物(1)



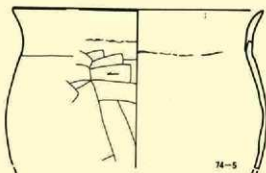
74-4



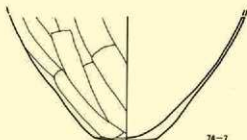
74-6



第266图 第74号住居址出土遺物(2)



74-5

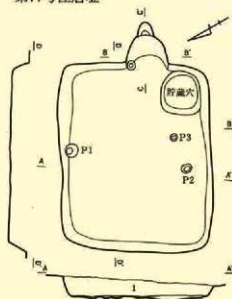


74-7

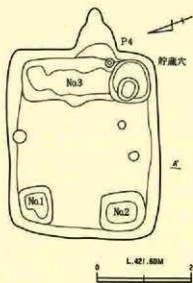


74-8

第77号住居址



第267图 第77号住居址



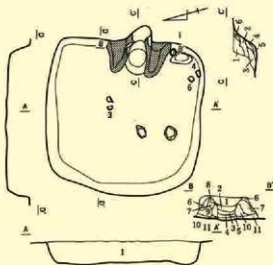
第268图 第77号住居址掘方

覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F.P.、大型ブロック(2cm〜5cm)を含む。粘性無し。しまりやあり、82号住居の第1層と同じ。)

- 電 第1層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。F.P.、黄色ロームブロックを含む。しまり無し。)
 第2層—明赤褐色土(ほぼ純粋な焼土層。粘性・しまり無し。)
 第3層—赤黒褐色土(黒色土と赤褐色焼土との混層。粘性・しまり無し。)
 第4層—赤褐色土(2層と同様純粋な焼土層だが、赤色が濃い。粘性無し。しまりやあり。)
 第5層—赤褐色土(黒色土と黄色土分で赤褐色土を造り、僅かにカーボン・焼土を含む。粘性・しまり無し。)
 第6層—赤褐色土(5層と近似。粘性・しまり無し。)

C地区の中央南西側にある。重複は第1号方形周溝墓をわずかに切っている。平面形態は、長方形を呈する。南北長3.2m、東西長4.0mを測る。方位は、N-111°4'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ41cm、南壁で23cm、東壁で32cm、西壁で40cmであった。床面は、全体的に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が計3基検出されている。東壁に沿って幅広の溝があり、また北西、南西コーナーに掘り込みが検出されている。No.1は平面不正方形で、南北69cm、東西長82cm、深さ10cmである。No.2は平面長方形で、長軸長98cm、短軸長82cm、深さ10cmである。No.3は平面長方形で、長軸長213cm、短軸長88cm、深さ13cmである。柱穴は、計4本検出したが、いずれも主柱穴ではないと思われる。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面不正円形で、南北長84cm、東西長92cm、深さ32cmである。壁溝は、検出されなかった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。規模は全長99cm、袖部幅88cmである。ごく簡素なもので、袖も造りだしていなかった。袖石も見られない。遺物は、小片のみで復元実測に耐えないものであった。本住居の時期は、不明である。

第76号住居址



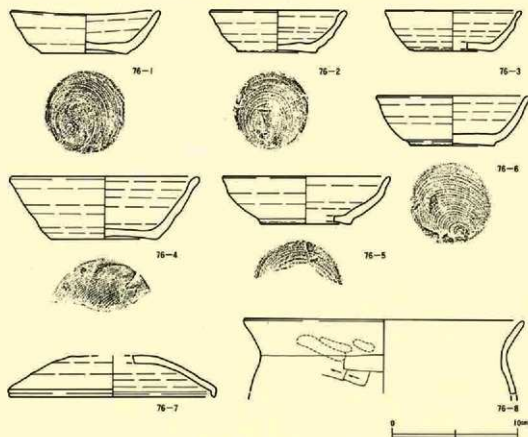
0 1.422.80M 2m

第269図 第76号住居址

覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F.P.、ローム小ブロックを少量を含む。粘性無し。しまりあり。)

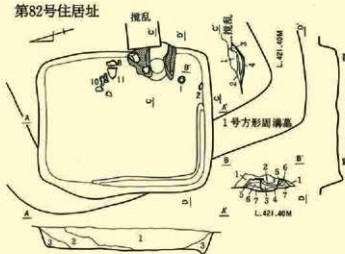
- 電 第2層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F.P.粒子を少量を含む。粘性無し。しまりやあり。)
 第2層—暗赤褐色土(ロームブロック、焼土ブロック、黒色土、白色粘土ブロックの混層。粘性・しまりやあり。袖上部の崩落か。)
 第3層—灰白色土、暗赤褐色土(灰白色粘土ブロックと焼土ブロック。黒色土の混層。粘性・しまりやあり。天井部崩落層か。)
 第4層—暗赤褐色土(黒色土と赤褐色焼土分との混層。粘性・しまり無し。ソフト。焼成面ではなく崩落ないし剝離によるものである。)
 第5層—明黒褐色土(黒褐色土とロームブロックとの混層。粘性・しまりやあり。掘方。)
 第6層—灰白色土(純粋な灰白色粘土層。粘性・しまり強い。)
 第7層—暗赤褐色土(黒色土とローム分との混層。小ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。)
 第8層—暗灰色土(灰白色粘土ブロックと黒色土との混層。粘性・しまりやあり。)
 第9層—暗褐色土(ロームブロックとローム分。粘性無し。しまりあり。袖芯。)
 第10層—赤褐色土及び灰白色土(焼成部のため赤褐色に空白。灰白色粘土ブロックを含む。粘性無し。しまりやあり。ボロボロ。)
 第11層—黒褐色土(黒色土が主体。ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。ソフト。袖上部。)

C地区の中央北側にある。重複は第90号住居を切っている。平面形態は正方形を呈する。南北長3.3m、東西長3.6mを測る。方位は、N-107°21'-Eを指している。覆土は、第1層で占められ人為的な埋土の可能性があると思われる。壁は、北壁で高さ46cm、南壁で49cm、東壁で44cm、西壁で44cmであった。床面は、第90号住居の覆土中に造られているので、全体に黒色でロームブロックが少なく、中央部を中心として硬質床面が広がっている。掘方で床下土坑が北東コーナーに2基検出している。No 1は平面不正長方形をなすと思われる、短軸長101cm、深さ34cmである。No 2は平面不正長方形をなし、長軸長140cm、短軸長115cm、深さ56cmである。柱穴、貯蔵穴、壁溝は、検出されなかった。カマドは東壁中央にある。規模は、全長110cm、袖部幅48cm。セクションは明瞭であった。カマドの掘方が重複住居に入っているため、黒色土であった。第3層と第2層上部に天井部の崩落が認められ、2回に渡って崩れたようである。袖部の残存は良好であった。袖石を芯とし、袖土をロームブロックと灰白色粘土とで造っている。面白いことに、袖の芯近くにはロームブロックと黒色土との混層を用い、灰白色をそれで覆うようにして用いているところで、灰白色粘土の有効的な使い方が示されているようである。遺物は、須恵器環(1~6)、蓋(7)、土師器甕(8)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅲ期に所属すると思われる。

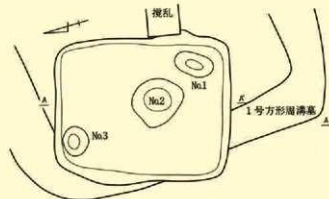


第270図 第76号住居址出土遺物

第82号住居址



第271図 第82号住居址

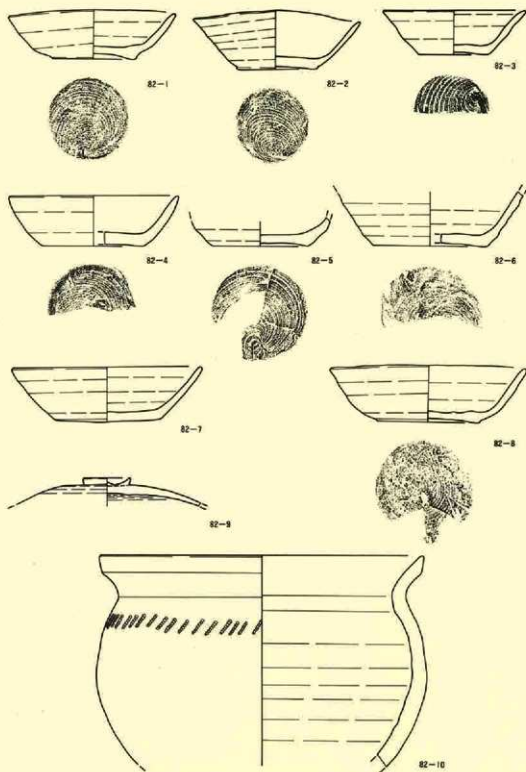


第272図 第82号住居址掘方

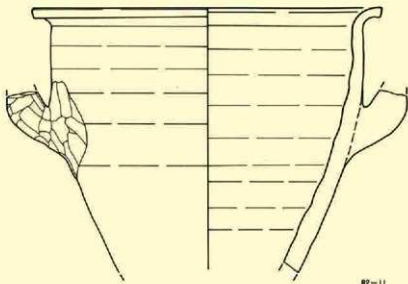
覆土 第1層—黒褐色土(黒色土が主体、F・P、2 cm〜5 cm大の大型ロームブロックを含む。粘性・しまりややあり。)
第2層—黒褐色土(1層とはほぼ同じだが、ロームブロックでなくローム粒子となり、全体にやや黒色が強い。)
第3層—黒褐色土(黒色土が主体、ローム粒子とF・P粒子を若干含む。粘性無し。しまりややあり。)

電 第1層—明黒褐色土(きめ細かい黒色土が主体。小ロームブロック、小粘土ブロックを含む。粘性・しまり無し。)
第2層—暗赤褐色土(黒色土と焼土分との混層。粘性・しまり無し。ソフト。天井部・袖基底部に剥離層。)
第3層—暗赤褐色土(赤褐色焼土分と黒色土分との混層。粘性・しまり無し。ソフト。焼成面。)
第4層—明黒褐色土(黒色土と大型ロームブロックとの混層。粘性無し。しまりややあり。掘方土。)
第5層—灰白色土(純粋な良質の灰白色粘土。粘性・しまり強い。袖。)
第6層—暗灰白色土(灰白色粘土と黒褐色土との混層。焼土を含む。粘性・しまりあり。袖。)
第7層—明黒褐色土(焼土ブロック、黒色土、黄褐色ロームブロックの混層。粘性無し。しまりややあり。)

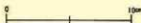
C地区の中央南西側にある。重複は第1号方形周溝墓を切っている。平面形態は、長方形を呈する。南北長3.9m、東西長3.6mを測る。方位は、N-108°00'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ42cm、南壁で40cm、東壁で44cm、西壁で44cmであった。床面は、カマド全面を中心として、硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が計3基検出した。No.1は平面楕円形で、長軸長83cm、短軸長47cm、深さ26cmである。No.2は平面楕円形で、長軸長106cm、短軸長100cm、深さ57cmである。No.3は平面楕円形で、長軸長62cm、短軸長54cm、深さ26cmである。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、一部確認している。南壁中央で幅16cm、深さ8cmであった。カマドは、東壁中央南寄りにある。ほとんど壁を切り込まず、焼成室は住居内部に入っている。床面への掘り込みは比較的深い。袖は石と灰白色粘土を用いている。袖基底部の第7層中に焼土が含まれており、建て替えが考えられる。遺物は、須恵器坏(1〜8)、蓋(9)、甕(10)、甕(11)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。



第273図 第82号住居址出土遺物(1)



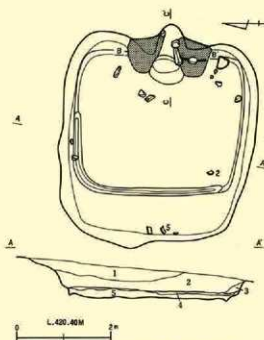
第274図 第82号住居址出土遺物(2)



第83号住居址

C地区の南西側にある。重複はない。87号住居の東側に位置している。また本住居は拡張住居と思われる。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長4.5m、東西長4.7mを測る。方位は、N-91°45'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、拡張前で、北壁で高さ60cm、南壁で46cm、東壁で48cm、西壁で44cmであった。拡張後で、北壁で50cm、南壁で33cm、東壁で48cm、西壁で32cmであった。床面は、カマド前面を中心として、硬質床面が広がっていた。また床面精査時に一回り小さいプランを確認し、拡張住居であると判断された。拡張前住居の床面は全体に硬質床面が広がっていた。掘方では床下土坑は検出されなかった。柱穴、貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、拡張前では検出されなかった。拡張後では、北壁で幅17cm、深さ6cm、西壁で、幅16cm、深さ6cmである。カマドは、東壁中央にある。規模は全長127cm、袖部幅69cmである。セクションは全体に不明瞭で、明確に分層できるものではなかった。第2層はロームブロックを多量に含んでいるところから、天井部崩落と思われるが、一度、攪はんされたような印象を受ける。溢水でもあったのであろうか。袖は、石と灰白色粘土を用いたものであるが、セクション同様、整然としておらず、後になんらかの攪乱を受けたような印象を受ける。袖は床をある程度掘りくぼめて造っているようである。遺物は、須恵器坏(1~4)、皿(5)、甕(8)、土師甕(6・7)、砥石(9)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅲ期に所属すると思われる。

第83号住居址



第275図 第83号住居址

覆土 第1層—黒色土(黒色土が主体。F Pを含む。粘性無し。しまりややあり。)

第2層—黒色土(1層と近似。主体となる黒色土がやや明るい。粘性無し。しまりややあり。)

第3層—黒褐色土(黒色土と茶褐色土との混層。粘性・しまりややあり。)

第4層—暗茶褐色土(黒褐色土と黄褐色ロームブロックとの混層。部分的に両者がサンドイッチ状をなしている。粘床面。粘性無し。しまりあり。)

第5層—黒褐色土(漆黒土が主体。暗茶褐色ロームブロックを含む。粘性あり。しまりあり。掘方土。)

電 第1層—黒褐色土(黒色土が主体。小F Pブロック、F P粒子を含む。粘性無し。しまりややあり。覆土1層と共通。)

第2層—暗黄褐色土(大型の暗黄褐色粘土ブロックと黒褐色土との混層。粘性・しまりややあり。天井部と袖部断層部。)

第3層—黒褐色土(黒褐色土が主体。小粘土ブロックを含む。粘性・しまり無し。ソフト。焼土がやや少ないことが仄になるが、焼成面。)

第4層—黒褐色土(3層と近似。焼土は含まずF P粒子を含む。粘性無し。しまりややあり。)

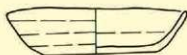
第5層—灰白色土(灰白色粘土ブロック。粘性・しまりあり。)

第6層—暗灰白色土(灰白色粘土ブロックと黒色土との混層。粘床面。粘性・しまりあり。)

第7層—明黒褐色土(黒色土、灰褐色土小ブロック、ローム小ブロックの混層。粘性・しまりあり。)

第8層—明茶褐色土(ローム分と黒色土分が混じった茶褐色土。粘性・しまり無し。)

第9層—暗赤褐色土(黒色土、焼土ブロック、ローム小ブロック、灰白色粘土土との混層。粘性・しまりあり。)



83-1



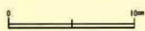
83-2



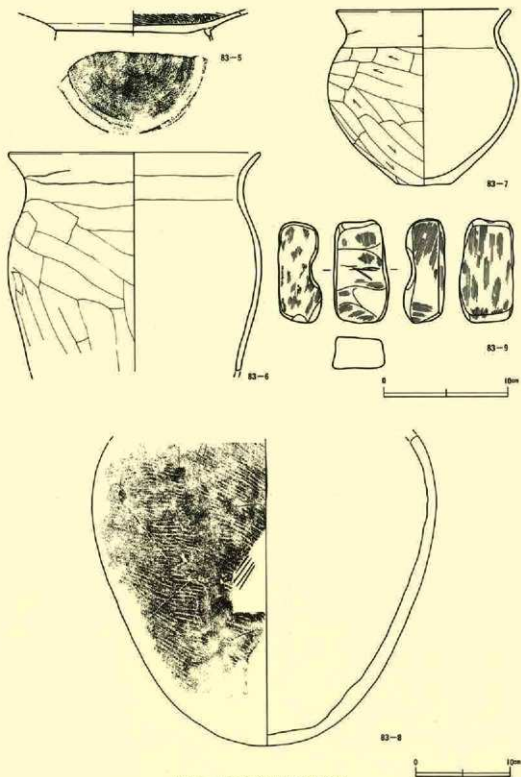
83-3



83-4

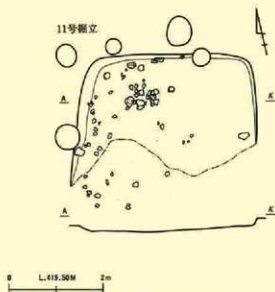


第276図 第83号住居址出土遺物(1)

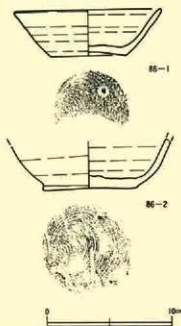


第277図 第83号住居址出土遺物(2)

第86号住居址



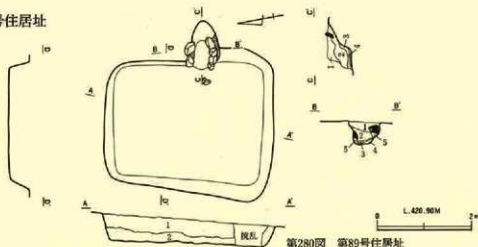
第278図 第86号住居址



第279図 第86号住居址出土遺物

C地区の南西端にある。第11号掘立柱建物跡と重複する。C地区南側の谷部の落ち際に位置し、床面は自然の礫層の中にある。覆土は浅く、南側半分は削られてしまっていた。平面形態は、不明で、南北長3.3m、東西長3.8mを測る。方位は、N-104°25'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ20cm、東壁で14cm、西壁で13cmであった。床面は、礫層中にあり、明確には観察されなかった。掘方では床下土坑は検出されなかった。柱穴、貯蔵穴、壁溝は、検出されなかった。カマドは、東壁に存在していた。ごく僅かの焼土の広がりを確認したにすぎなかった。遺物は、須恵器坏(1)、埴(2)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第V期に所属すると思われる。

第89号住居址



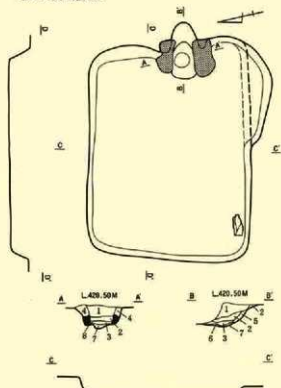
第280図 第89号住居址

覆土 第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。F Pを少量に含む。ガラガラ。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層-黒褐色土(黒褐色土が主体。F P、粘土ブロックを含む。粘性・しまりややあり。)

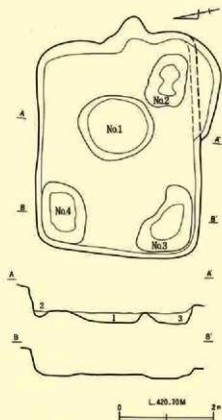
竪 第1層-茶褐色土(茶褐色土が主体。F P粒子を多量に含む。粘性・しまりややあり。)
 第2層-明黒褐色土(明黒褐色土が主体。上層にF P粒子、下層に焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層-明茶褐色土(茶褐色土小ブロックと明茶褐色土との混層。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層-黒色土(きめ細かい黒色土が主体。焼土ブロックを僅かに含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第5層-暗灰白色土(灰白色粘土と黒色土との混層。焼土の接着補強及び袖自体にも使っている。粘性あり。しまり強い。)

C地区の南端にある。重複はない。本住居は黒色土を切り込んで造っており、きわめて確認が困難なものであった。平面形態は、長方形を呈する。南北長3.9m、東西長4.2mを測る。方位は、N-99°10'-Eを指している。覆土は、2層に分層された。壁は、北壁で高さ55cm、南壁で47cm、東壁で42cm、西壁で42cmであった。床面は、全体に軟弱で、硬質床面は認められなかった。掘方で床下土坑が検出されなかった。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は、確認されなかった。壁溝は、確認されなかった。カマドは、東壁中央南寄りにある。両側に灰白色粘土を貼り付け、その内側に礫を立て並べている。底面への掘り込みは行っていない。規模は全長103cm、袖部幅38cm、深さ50cmである。遺物は、検出されなかった。本住居の時期は、不明である。

第87号住居址



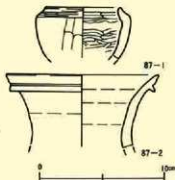
第281図 第87号住居址



第282図 第87号住居址掘方

覆土 第1層一明黒褐色土(黒色土と黄褐色ロームブロックとの混層、粘性や
やあり。しりあり。床下土壌覆土)
第2層一明黒褐色土(1層にほぼ近似。)
第3層一黒褐色土(黒褐色土が主体。FPを含む。粘性ややあり。しり
あり。掘方覆土。)

竪 第1層一黒褐色土(黒褐色土が主体。FP粒子を少量に含む。粘性・し
り無し。住居を覆土1層と共通。)
第2層一暗灰白色土(暗灰白色粘土ブロック、粘土分が主体。黒褐色土
分を含む。粘性あり。しりややあり。天井部腐層。)
第3層一明黒褐色土(黒色土分と粘土小ブロック、粘土分との混層。塊
成面。粘性・しり無し。)
第4層一黒褐色土(1層に近似。FPを含む。粘性・しり無し。)
第5層一明黒褐色土(灰白色粘土分、粘土粒子、黒色土との混層。粘性・
しり無し。)
第6層一黒色土(サラサラした純粋な黒色土。粘性・しり無し。)
第7層一明黒褐色土(黒色土と黄褐色土分の混層。粘性・しり無し。)
第8層一黒褐色土(純粋な黒褐色土。粘土埋め込み土。粘性無し。しり
あり。)

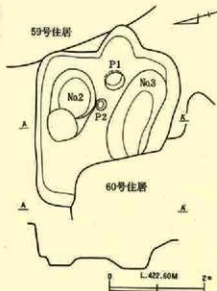


第283図 第87号住居址出土遺物

C地区の南西側にある。重複はない。83号住居の西側に位置している。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.2m、東西長5.0mを測る。方位は、N-105°57'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ34cm、南壁で17cm、東壁で45cm、西壁で36cmであった。床面は、カマド前面を中心として、硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が計4基検出されている。No1は平面不正円形で、南北長162cm、東西長137cm、深さ28cmである。No2は平面不正長方形で、長軸長120cm、短軸長78cm、深さ33cmである。No3は平面不正三角形で、南北長114cm、東西長140cm、深さ40cmである。No4は平面不正長方形で、長軸長128cm、短軸長95cm、深さ25cmである。柱穴、貯蔵穴、壁溝は、検出されなかった。カマドは、東壁中央南寄りにある。規模は全長120cm、袖部幅49cmである。灰白色粘土と石を用いて袖を造っている。床面への掘り込みは浅い。遺物は、須恵器甕(2)、土師器小型壺(1)が検出されている。本住居の時期は、不明である。



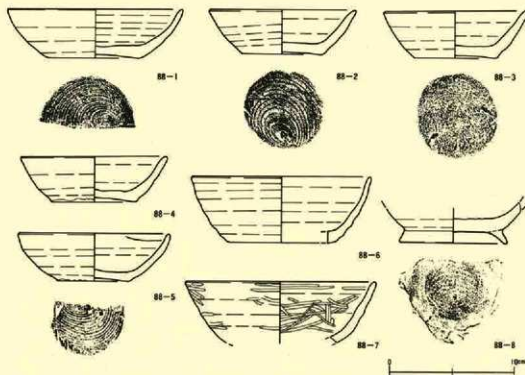
第284図 第88号住居址



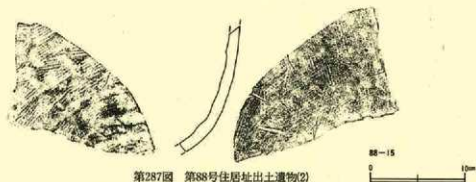
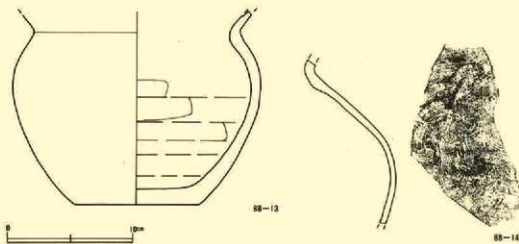
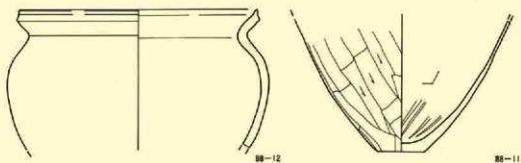
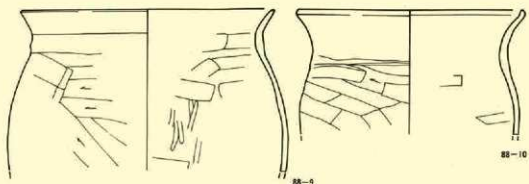
第285図 第88号住居址掘方

- 第1層—明黒褐色土(明黒褐色土が主体。灰白色粘土ブロック・ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。)
 第2層—黒褐色土(黒色土が主体。ローム粒を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第3層—赤褐色土及び灰白色土(灰白色粘土ブロックと焼土(灰白色粘土が焼けたもの)との混層。天井部崩落層。粘性・しまり強い。)
 第4層—黒色土(黒色土が主体。カーボン粒を多く含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第5層—暗赤褐色土(黒色土分と赤褐色焼土分との混層。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第6層—黒褐色土(黒色土が主体。ローム粒、FDを僅かに含む。粘性・しまり無し。住居土最上層と同じ。)
 第7層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロック、粘土ブロックを含む。粘性・しまり無し。ソフト。住居内覆土。)
 第8層—暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性無し。しまりあり。袖部。)

C地区中央にある。重複は第60号住居を切っている。本住居は小型住居である。覆土が深く、カマド・床面なども良好な状態で検出された。平面形態はカマドに向かって長方形を呈する。南北長3.1m、東西長3.3mを測る。方位は、N-116°39'-Eを指している。壁は、北壁で高さ50cm、南壁で60cm、東壁で50cm、西壁で60cmであった。床面は、カマド前面を中心として硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が3基検出されている。No.1は平面楕円形で、長軸長75cm、短軸長60cm、深さ31cmである。No.2は平面楕円形で、長軸長102cm、短軸長96cm、深さ26cmである。No.3は平面不正楕円形で、長軸長206cm、短軸長90cm、深さ30cmである。柱穴は、2本検出された。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、一部のみ検出された。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。質の悪いロームブロックの混層土の両袖の内側に竈を立て並べている。規模は全長133cm、袖部幅54cmである。遺物は、須恵器環(1~7)、埴(8)、甕(12・13)、壺(14・15)、土師器甕(9~11)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代福年の第IV期に所属すると思われる。

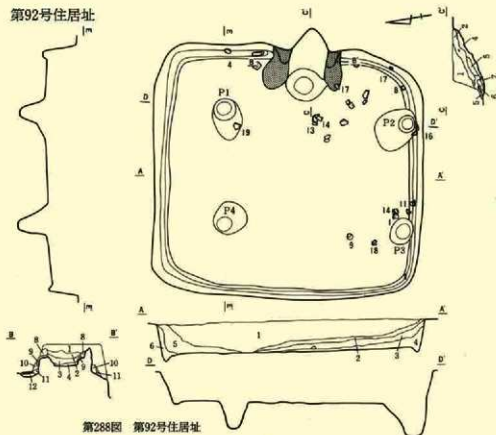


第286図 第88号住居址出土遺物(1)

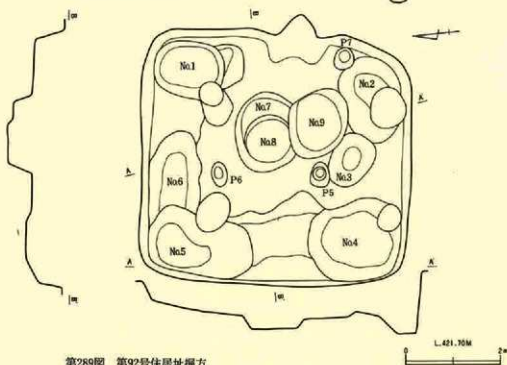


第287図 第88号住居址出土遺物(2)

第92号住居址



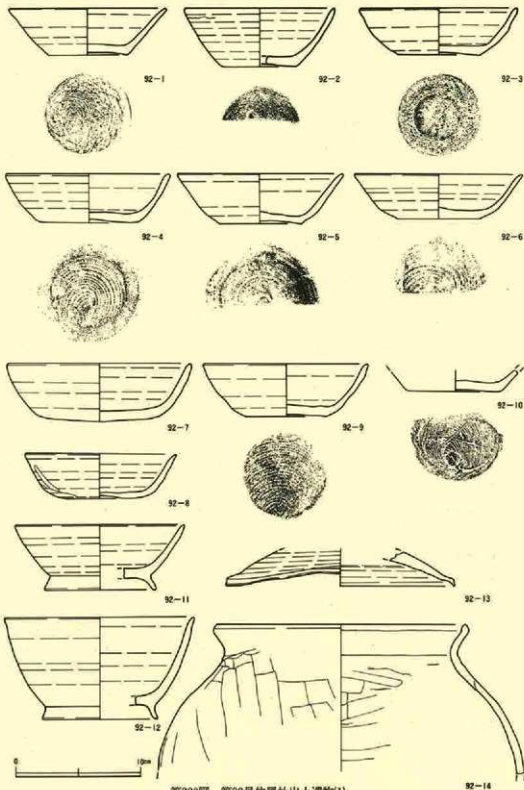
第288图 第92号住居址



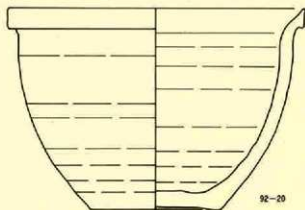
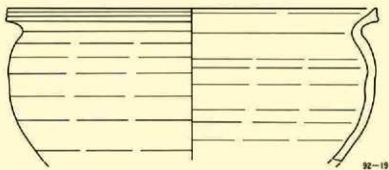
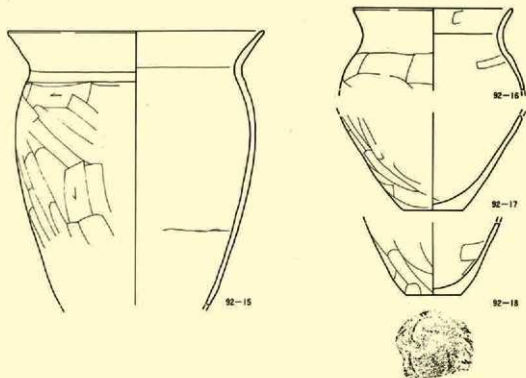
第289图 第92号住居址圖方

- 覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F Pブロック及び粒子を多量に含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層—暗黒褐色土(第1層の黒褐色土にソフトな漆黒土がサンドイッチ状に含まれる。)
 第3層—黒褐色土(第1層の黒褐色土が主体。F Pは僅かである。灰色粘土を含む。粘性・しまり無し。)
 第4層—暗黒褐色土(粘性のある暗黒褐色土が主体。F P、ロームブロックを含む。粘性・しまりあり。)
 第5層—黒褐色土(第1層とほぼ同じだが、やや暗い。)
 第6層—明黒褐色土(黒色土が主体。ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。)
- 窠 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F P、ローム小ブロックを多量に含む。住居址覆土第1層と同じ。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層—暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックと黒褐色土との混層。粘性・しまり無し。)
 第3層—明黄褐色土(黄褐色ローム分と焼土ブロックとの混層。粘性・しまり無し。袖部混層か。)
 第4層—灰赤褐色土(灰白色粘土分と焼土分と混層。一応、焼成面か。)
 第5層—黄灰白色土(黄灰白色をした純粋な焼土ブロック。粘性・しまり強い。天井部混層か。)
 第6層—黒褐色土(黒色土、灰白色粘土、ローム小ブロックの混層。粘性・しまり無し。)
 第7層—黒色土(黄褐色土とカーボンとの混層。粘性・しまり無し。カーボンはかきだしたものか。)
 第8層—暗黄褐色土(黄褐色ロームブロック。粘性無し。しまりあり。)
 第9層—明黒褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性無し。しまりややあり。)
 第10層—灰白色土(灰白色粘土ブロック。粘性・しまり強い。)
 第11層—暗灰白色土(灰白色粘土ブロックに黒色土、ロームブロックを含む。粘性・しまりあり。)
 第12層—暗黄褐色土(ロームブロックと黒色土との混層。粘性無し。しまりあり。)

D地区にある。重複はない。93号住居の東側に位置している。D地区においては、覆土が最も深く、残存状態が最も良好であった。また床下土坑が多く、注目される。平面形態は、正方形を呈する。南北長5.7m、東西長5.7mを測る。方位は、N-100°47'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ66cm、南壁で59cm、東壁で71cm、西壁で65cmであった。床面は、全体的に硬質床面が広がっている。掘方で床下土坑が9基検出されている。No 1は平面楕円形で、長軸長150cm、短軸長120cm、深さ50cmである。No 2は平面楕円形で、長軸長186cm、短軸長120cm、深さ33cmである。No 3は平面楕円形で、長軸長118cm、短軸長88cm、深さ30cmである。No 4は平面楕円形で、長軸長198cm、短軸長172cm、深さ39cmである。No 5は平面楕円形で、長軸長224cm、短軸長131cm、深さ45cmである。No 6は平面不正楕円形と思われる、長軸長は不明、短軸長109cm、深さ30cmである。No 7は平面不正楕円形と思われる、長軸長、短軸長とも不明、深さ35cmである。No 8は平面円形で、南北長122cm、東西長121cm、深さ41cmである。No 9は平面不正楕円形で、長軸長154cm、短軸長125cm、深さ32cmである。柱穴は、計7本検出され、そのうち主柱穴は4本である。北側の2本はノーマルな位置に南側の2本は南壁沿いにあった。また掘方より、別の主柱穴4本が検出されており、本住居は拡張住居であると考えられる。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、全周する。東壁北寄りで幅17cm、深さ9cm、北壁中央で幅18cm、深さ12cm、西壁中央で幅14cm、深さ8cm、南壁中央で幅18cm、深さ11cmであった。カマドは、東壁中央にある。規模は全長155cm、袖部幅72cmである。本住居のカマドは、袖台部や焼成室を住居構築時に掘り残し、その上に白色粘土で袖を造っている。このような掘り残し台部のカマドは、本遺跡内でも他に類例を見ないものである。遺物は、須恵器坏(1~10)、埴(11・12)、蓋(13)、甕(19・20)、土師器甕(14~18)が検出された。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅲ期に所属すると思われる。



第290図 第92号住居址出土遺物(1)

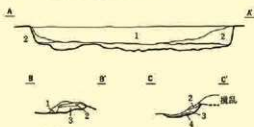
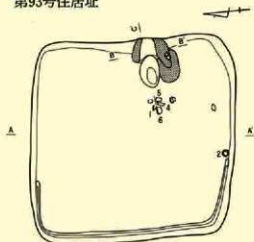


92-20

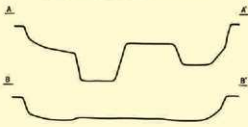
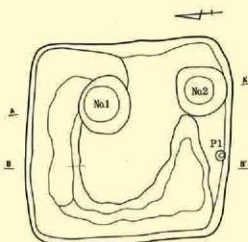
第291图 第92号住居址出土遺物(2)



第93号住居址



第292図 第93号住居址



第293図 第93号住居址掘方

覆土 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F P、ローム小ブロックを少量に含む。粘性無し。しまりややあり。)

第2層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム分、ロームブロックを少量に含む。F Pは含まれない。粘性・しまり無し。)

電 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F P粒子、ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。)

第2層—明黒褐色土(黒褐色土とローム分との混層。焼土分を部分的に含む。粘性・しまり無し。)

第3層—暗赤褐色土(黒褐色土と焼土ブロックの混層が主体。ローム粒子を多く含む。粘性無し。しまりややあり。)

第4層—明赤褐色土(純粋な焼土層。粘性無し。しまりややあり。)



93-1



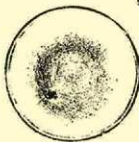
93-2



93-3



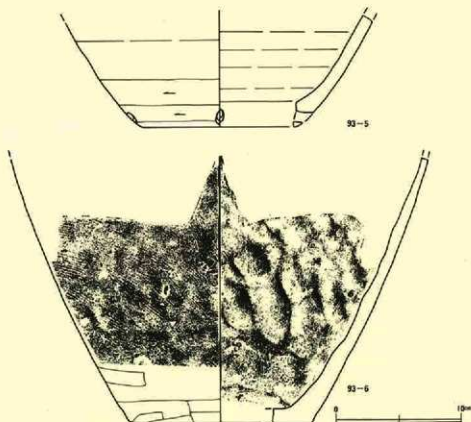
93-4



第294図 第93号住居址出土遺物(1)

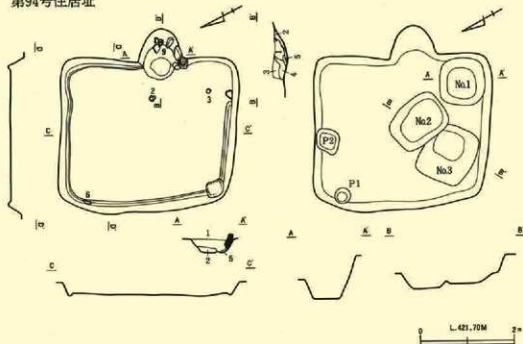


D地区にある。重複はない。92号住居の西側に位置している。平面形態は、不正正方形を呈する。南北長4.4m、東西長4.3mを測る。方位は、N-90°21'Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなす。壁は、北壁で高さ31cm、南壁で36cm、東壁で46cm、西壁で34cmであった。床面は、中央部を中心として、硬質床面が広がっている。やや凹凸が多い。掘方で床下土坑が2基検出された。カマド北側と住居南東コーナー部に円形の床下土坑を検出している。後者はあるいは貯蔵穴であったかもしれない。No.1は平面円形で、南北長110cm、東西長122cm、深さ49cmである。No.2は平面不正円形で、南北長107cm、東西長105cm、深さ15cmである。柱穴は、1本検出された。主柱穴ではないと思われる。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、住居西側に検出された。深さや幅は一定しておらず、不明確である。西壁中央で幅10cm、深さ4cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。全長105cm、袖内幅44cm、深さ28cmである。上部は攪乱で破壊されていた。壁面にはほとんど掘り込みをせず、焼成室は完全に住居内にある。右袖はほとんど何も残っていなかったが、左袖は造り付けの台部を持っていた。粘土はみられず、どのような構造であったか不明な点が多い。遺物は、須恵器坏(1)、皿(2)、瓶(4)、甗(5)、甗(6)、土師器甗(3)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第IV期に所属すると思われる。



第295図 第93号住居址出土遺物(2)

第94号住居址



第296図 第94号住居址

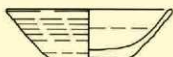
第297図 第94号住居址掘方

- 電 第1層—黒褐色土(ソフトな黒褐色土が主体。ローム粒子、焼土粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第2層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。小ロームブロック、焼土を多量に含む。粘性・しまり無し。)
 第3層—黒褐色土(黒褐色土が主体。F.P.を少量、ローム粒子を多量に含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第4層—黒褐色土(3層とほぼ同様だが、焼土粒子を若干含む。粘性・しまり無し。)
 第5層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。小ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。)

D地区にある。重複はない。93号住居の南側に位置している。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長3.7m、東西長3.8mを測る。方位は、N-113°39'-Eを指している。壁は、北壁で高さ24cm、南壁で23cm、東壁で22cm、西壁で21cmであった。床面は、カマド前面周辺に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が計3基検出された。プランがはっきりせず、浅めの床下土坑が、住居中央部及び住居南西部に認められた。No.1は平面正方形で、南北長96cm、東西長100cm、深さ80cmである。No.2は平面長方形形状をなし、長軸長123cm、東西長92cm、深さ60cmである。No.3は平面不正長方形形状をなし、長軸長122cm、短軸長110cm、深さ40cmである。柱穴は、計2本検出された。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、ほぼ全周する。東壁北寄りで幅10cm、深さ5cm、北壁中央で幅10cm、深さ6cm、西壁中央で幅14cm、深さ5cm、南壁中央で幅10cm、深さ5cmであった。カマドは、東壁中央にある。全体に残存状態は不良であった。袖は南側の一部のみ確認した。補強石もともなっているが、全体に崩れたような感じであった。規模は、全長108cm、袖幅65cmである。遺物は、灰釉長頸瓶(8)、須恵器環(1~5)、埴(6)、甕(9)、土師器甕(7)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代鑑年の第V期に所属すると思われる。



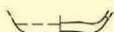
94-1



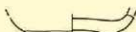
94-2



94-3



94-4



94-5



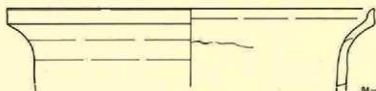
94-6



94-7



94-8

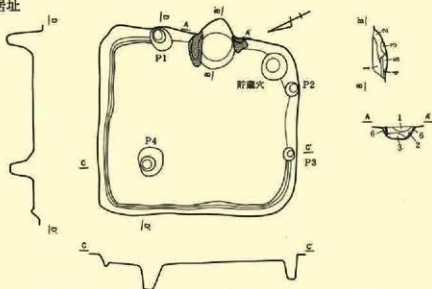


94-9



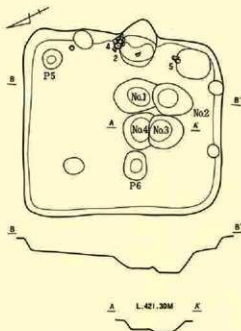
第298圖 第94号住居址出土遺物

第95号住居址



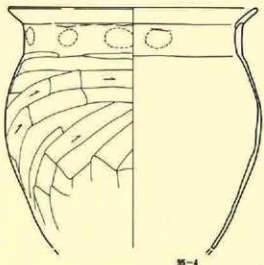
- 第1層—黒色土(黒色土が主体。ローム粒子を含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層—暗茶褐色土(黒色土とローム分との混層で茶褐色土を形成。粘性・しまり無し。)
 第3層—茶褐色土(2層の茶褐色土が主体。焼土分を多量に含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第4層—黒褐色土(1層に近似。粘性無し。しまりややあり。)
 第5層—黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒子、カーボン粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第6層—黒褐色土(4層に近似。)

第299図 第95号住居址



0 L. 421.60M 2m

第300図 第95号住居址掘方

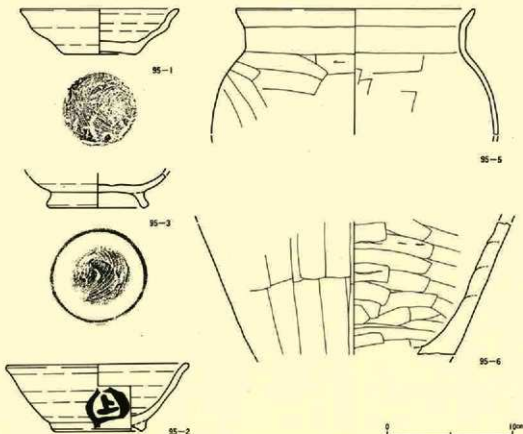


95-4

0 10m

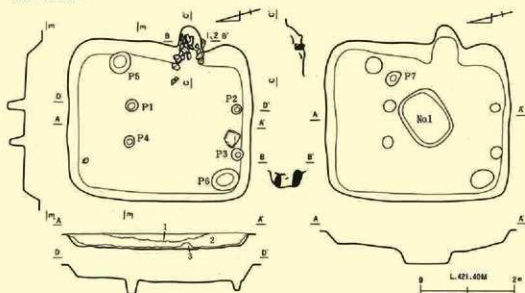
第301図 第95号住居址出土遺物(1)

D地区にある。重複はない。94号住居の東側に位置している。平面形態は、不正正方形を呈する。南北長4.2m、東西長4.2mを測る。方位は、N-113°58'-Eを指している。壁は、北壁で高さ25cm、南壁で20cm、東壁で24cm、西壁で10cmであった。床面は、カマド前面を中心として、硬質床面が広がっていた。住居中央に浅い陥没が認められるが、これは床下土坑のためである。掘方で床下土坑が4基検出されている。No.1は平面不正楕円形で、長軸長不明、短軸長72cm、深さ43cmである。No.2は平面不正楕円形で、長軸長90cm、短軸長68cm、深さ55cmである。No.3は平面不正楕円形で、長軸長77cm、短軸長70cm、深さ45cmである。No.4は平面形は不明で、長軸長不明、短軸長74cm、深さ46cmである。柱穴は、計6本検出され、うち4本が主柱穴である。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面形は、不正方形をなし、南北長54cm、東西長57cm、深さ38cmである。壁溝は、南壁と東壁の一部を除いて全周している。東壁北寄りで幅14cm、深さ4cm、北壁中央で幅12cm、深さ7cm、西壁中央で幅14cm、深さ5cm、南壁西寄りで幅13cm、深さ4cmであった。カマドは、東壁中央にある。全長109cm、袖内幅69cm、深さ31cmである。左袖はほとんど残っておらず、右袖は粘土を用いていない。右袖上部より土器が一括して出土している。遺物は、須恵器杯(1・2)、埴(3)、甕(6)、土師器甕(4・5)が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第V期に所属すると思われる。



第302図 第95号住居址出土遺物(2)

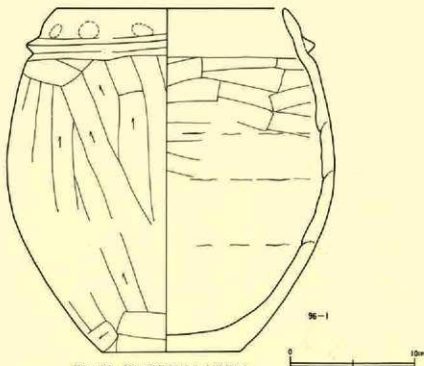
第96号住居址



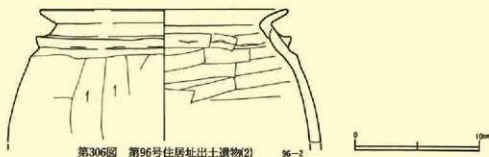
第303図 第96号住居址

第304図 第96号住居址掘方

- 覆土 第1層一黒灰色砂石層(純粋な浅間B砂石層。粒子は2mm以下で全体に均質。粘性・しまり無し。)
 第2層一黒褐色土(黒褐色土が主体。F Pを多量に含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第3層一暗茶褐色土(黒色土とローム分が混じって茶褐色土を形成。所々に小ロームブロックを含む。粘性・しまり無し。)



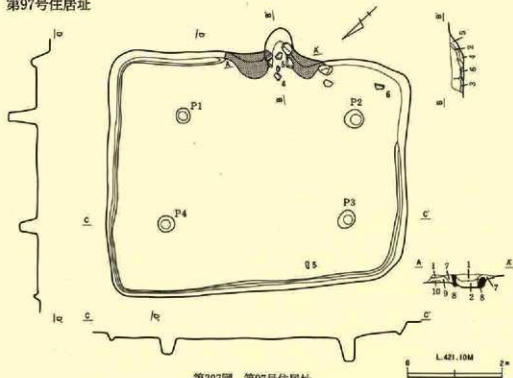
第305図 第96号住居址出土遺物(1)



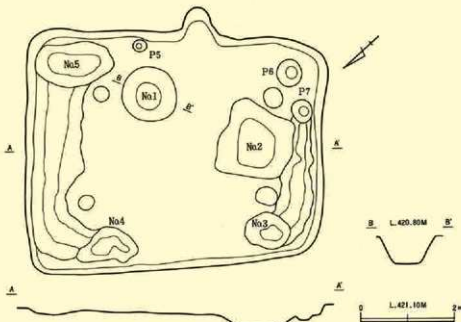
第306図 第96号住居址出土遺物(2) 96-2

D地区にある。重複はない。93号住居の北側に位置している。平面形態は、長方形を呈する。南北長3.9m、東西長3.7mを測る。方位は、N-104°29'-Eを指している。覆土は、第1層に浅間B軽石層が純層で認められた。全体的には自然堆積であろう。壁は、北壁で高さ27cm、南壁で27cm、東壁で30cm、西壁で31cmであった。床面は、全体に軟弱な貼床で、凹凸も見られた。掘方で床下土坑が1基検出されている。№1は平面形狭形をなし、長軸長121cm、短軸長92cm、深さ36cmである。柱穴は、計7本検出され、うち4本が主柱穴である。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、ごく一部にうっすらと観察されたのみであった。カマドは、東壁南寄りにある。規模は、全長94cm、袖部幅43cmである。袖は住居内に張り出さず、壁に掘り込み、側面に石を多用して、構築していた。遺物は、須恵器羽釜(1・2)が検出されている。また南壁沿い中央に大きめの石を床面直上で検出している。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第X I期に所属すると思われる。

第97号住居址



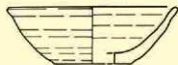
第307図 第97号住居址



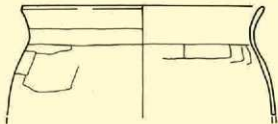
- 電 第1層—黒褐色土(黒褐色土が主体。大粒のF Pを多量に含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第2層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。焼土粒子、ローム粒子を含む。粘性・しまり無し。)
 第3層—黒褐色土(黒褐色土が主体。ローム粒子、焼土粒子を含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第4層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。焼土を多く含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第5層—明黒褐色土(黒褐色土が主体。ロームブロックを含む。粘性無し。しまりややあり。)
 第6層—暗赤褐色土(赤褐色土が主体。黒色土を含む。粘性・しまり無し。ソフト。)
 第7層—黒褐色土(黒色土が主体。黄褐色ロームブロックを含む。粘性・しまりややあり。)
 第8層—暗赤褐色土(黒色土と焼土との混層。粘性・しまり無し。粘土質土。)
 第9層—明黒褐色土(黒色土とロームブロック、焼土との混層。粘性無し。しまりややあり。粘。)
 第10層—暗黄褐色土(黄褐色ロームブロックが主体。黒色土を含む。粘性無し。しまりあり。)

第308図 第97号住居址掘方

D地区にある。重複はない。38号住居の南側に位置している。D地区の中では最も大きな住居である。覆土は浅い。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長6.3m、東西長5.4mを測る。方位は、N-126°41'-Eを指している。壁は、北壁で高さ30cm、南壁で31cm、東壁で29cm、西壁で10cmであった。床面は、全体的に軟弱であった。凹凸も激しい。掘方で床下土坑が計5基検出された。No. 1は平面円形で、南北長117cm、東西長115cm、深さ65cmである。No. 2は平面不正正方形で、南北長160cm、東西長150cm、深さ36cmである。No. 3は平面不正楕円形で、長軸長96cm、短軸長72cm、深さ22cmである。No. 4は平面不正楕円形で、長軸長134cm、短軸長72cm、深さ10cmである。No. 5は柱穴は、計7本検出され、うち4本が主柱穴である。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、南東コーナーを除いて全周している。東壁北寄りで幅20cm、深さ10cm、北壁中央で幅12cm、深さ10cm、西壁中央で幅12cm、深さ7cm、南壁中央で幅10cm、深さ7cmであった。カマドは、東壁中央に位置する。全長108cm、袖内幅40cmである。石と黒褐色土で幅広の袖を造っている。遺物は、須恵器坏(1)、埴(2)、須恵器甕(6・7)、甕(5)、土師器甕(4)、小型甕(3)、穀石(8)が検出されている。このうち、須恵器甕(3)の胴部外面には判読不能な墨書が記されている。本住居の時期は、本道跡平安時代編年の第VIII期に所属すると思われる。



97-1



97-4



97-2



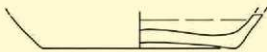
97-3



97-5



97-3



97-6



97-7

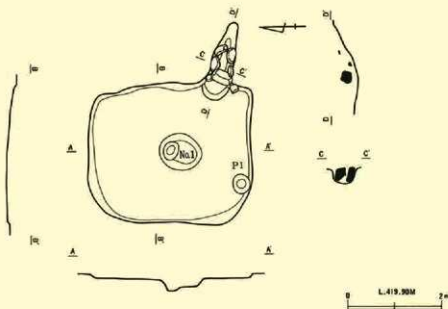


97-8

第309圖 第97号住居址出土遺物



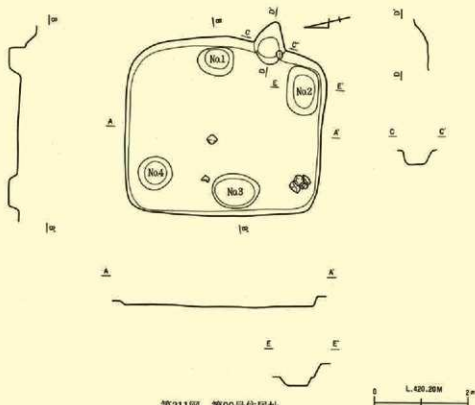
第98号住居址



第310図 第98号住居址

D地区にある。重複はない。99号住居の南側に位置している。平面形態は、不正長方形を呈する。南北長3.5m、東西長4.3mを測る。方位は、N-93°36'-Eを指している。壁は、北壁で高さ3cm、南壁で19cm、東壁で13cm、西壁で6cmであった。床面は、全体に軟弱で、その確認に苦慮した。北側ははっきりしない。掘方で床下土坑が住居中央部に1基検出されている。平面楕円形で、長軸長92cm、東西長78cm、深さ23cmである。柱穴は、1本検出された。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、確認できなかった。カマドは、煙道部が異常に長く、また比較的大きな丸石を多用していた。粘土は使用していない。焼成室は住居内にはいると思われるが、焼土は認められなかった。規模は、全長170cm、袖部幅78cmである。遺物は、検出されなかった。本住居の時期は、不明である。

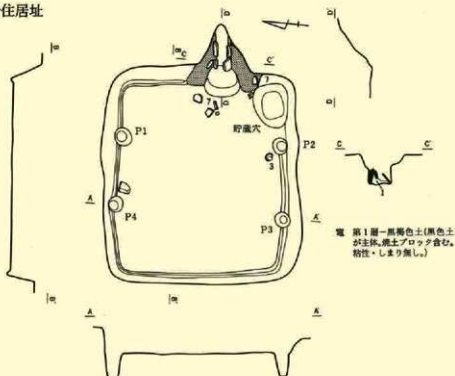
第99号住居址



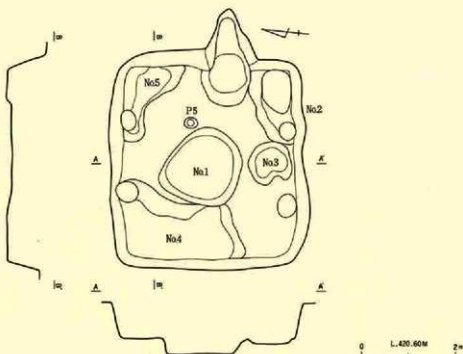
第311図 第99号住居址

D地区にある。重複はない。100号住居の南西側に位置している。黒色土中に住居を構築しており、全体に確認が難しかった。平面形態は、隅丸長方形を呈する。南北長4.2m、東西長4.0mを測る。方位は、N-106°57'-Eを指している。壁は、北壁で高さ33cm、南壁で30cm、東壁で29cm、西壁で35cmであった。床面は、黒色土中に床面を作り出しており、硬質床面と思われる面は観察されなかった。掘方で床下土坑が計4基検出されている。No. 1は平面不正楕円形で、長軸長96cm、短軸長62cm、深さ25cmである。No. 2は平面不正長方形で、長軸長102cm、短軸長67cm、深さ16cmである。No. 3は平面不正楕円形で、長軸長102cm、短軸長54cm、深さ22cmである。No. 4は平面円形で、南北長72cm、東西長70cm、深さ32cmである。柱穴、貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、確認されなかった。カマドは、東壁南寄りにある。規模は、全長92cm、袖部幅52cmである。石と白色粘土で袖を作り出すが、袖自体はあまり住居内には飛び出さないものである。焼成面は良好な状態で確認された。遺物は、須恵器環の小片が検出されている。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第Ⅶ～Ⅷ期に所属すると思われる。

第100号住居址

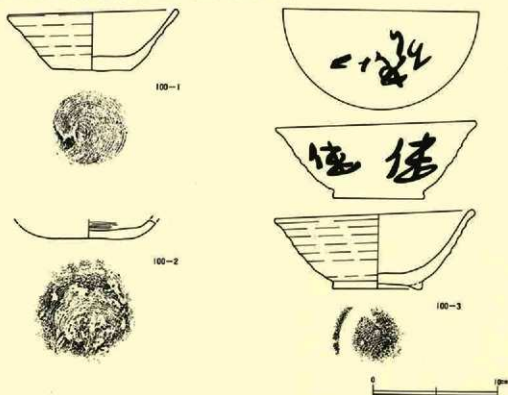


第312図 第100号住居址

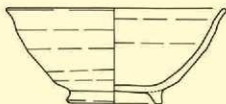


第313図 第100号住居址掘方

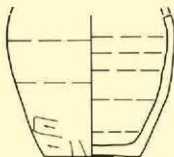
D地区にある。重複はない。99号住居の北東側に位置している。平面形態は、長方形を呈する。南北長4.5m、東西長5.4mを測る。方位は、N-90°16'-Eを指している。覆土は、レンズ状堆積をなしていた。壁は、北壁で高さ59cm、南壁で62cm、東壁で76cm、西壁で54cmであった。床面は、ほぼ全面に硬質床面が広がっていた。掘方で床下土坑が5基検出されている。No 1は平面不正卵形をなし、長軸長184cm、短軸長169cm、深さ53cmである。No 2は平面不正長方形で、長軸長154cm、短軸長91cm、深さ20cmである。No 3は平面不正楕円形で、長軸長90cm、短軸長83cm、深さ20cmである。No 4は平面不正長方形で、長軸長252cm、短軸長164cm、深さ34cmである。No 5は平面不正三角形をなし、南北長130cm、東西長158cm、深さ24cmである。柱穴は、計5本検出され、うち4本が主柱穴である。主柱穴と思われるピットは北壁及び南壁沿いに2本づつ検出されている。貯蔵穴は、南東コーナーに検出されている。平面不正楕円形で、長軸長94cm、短軸長74cm、深さ51cmである。壁溝は、浅く狭いものが全周している。東壁北寄りで幅10cm、深さ5cm、北壁中央で幅11cm、深さ8cm、西壁中央で幅10cm、深さ6cm、南壁中央で幅15cm、深さ8cmであった。カマドは、東壁中央やや南寄りにある。規模は全長152cm、袖部幅68cmである。住居の覆土が深いため、良好な状態で検出された。遺物は、須恵器坏(1)、埴(3・4)、黒色土器(2)、小型甕(5)、羽釜(6・7)が検出されている。このうち須恵器埴(3)の内外面に判読不能な墨書が記されていた。本住居の時期は、本遺跡平安時代編年の第VI期に所属すると思われる。



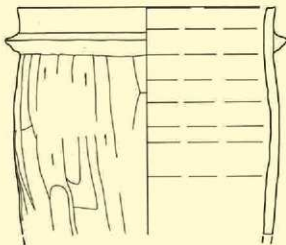
第314図 第100号住居址出土遺物(1)



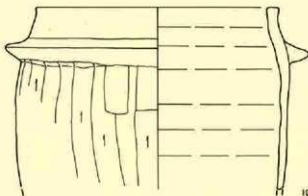
100-4



100-5



100-6



100-7

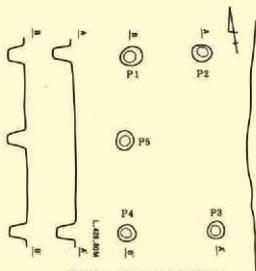
第315図 第100号住居址出土遺物(2)



2. 掘立柱建物址

第1号掘立柱建物跡

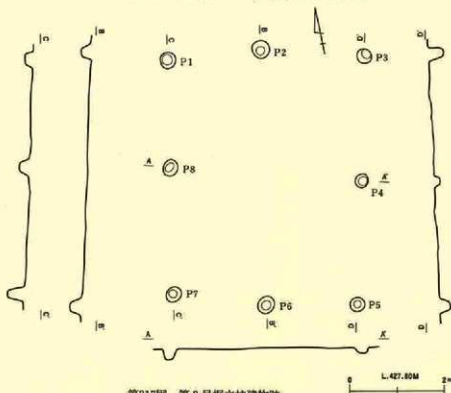
A地区東端にあり、寺院の外溝によって東側3本分が切られている。この溝の東側よりは柱穴は検出されなかったため、元は2間×2間であると思われる。方位は、N-102°25'-Eを指している。柱根は検出されていない。規模は南北4.09m、東西は不明である。



第316図 第1号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡

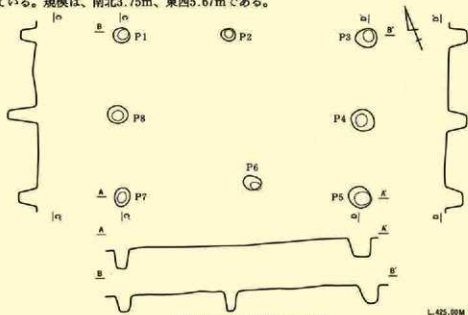
A地区東側、第12号住居の北西側にある。2間×2間で、南北に長い長方形をなしている。方位は、N-104°16'-Eを指している。規模は、南北5.71m、東西4.43mである。



第317図 第2号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡

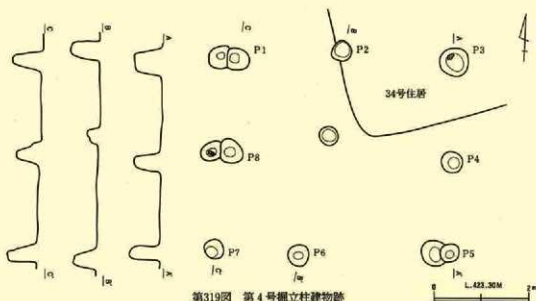
A地区北西側にあり、第19号住居西側にある。2間×2間で、東西に長い不正長方形をなす。P6の位置がかなり内側に入っており、正確な長方形をなしていない。方位は、N-110°25'-Eを指している。規模は、南北3.75m、東西5.67mである。



第318図 第3号掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡

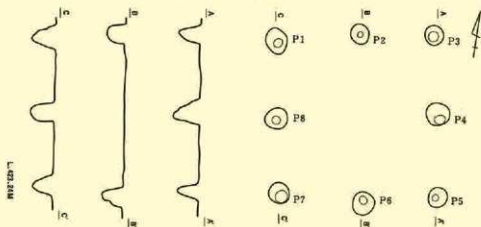
C地区北東にある。第34号住居を切っている。2間×2間で東西にやや長い長方形をなしている。方位は、N-92°57'-Eを指している。規模は、南北4.60m、東西5.15mである。出土遺物は、須恵器坏の小片が6点検出されており、時期は9世紀代と考えられる。



第319図 第4号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡

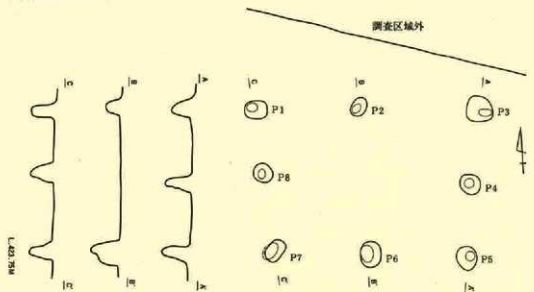
C地区北東にある。第36号住居を切っている。2間×2間で、ほぼ正方形に近いプランをなしている。方位は、N-80°54'-Eを指している。規模は、南北4.03m、東西3.95mである。



第320図 第5号掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡

C地区北東端にある。第56号住居北側に位置し、重複はない。2間×2間で、東西に長い長方形をなし、やや平行四辺形気味である。方位は、N-91°45'-Eを指している。規模は南北4.93m、東西3.56mである。

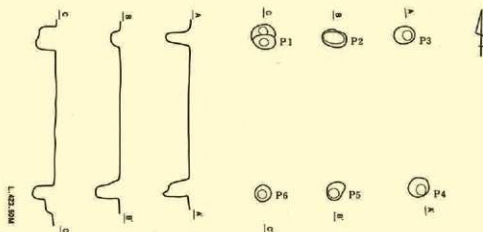


第321図 第6号掘立柱建物跡



第7号掘立柱建物跡

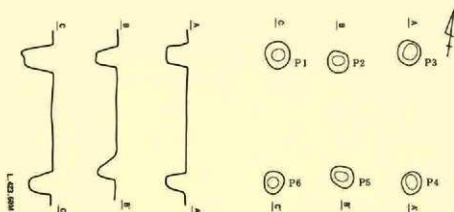
C地区北東に位置する。第26号住居西側に位置している。1間×2間のやや小型の掘立柱建物跡である。東西にやや長い長方形をなしている。重複はない。方位は、N-87°4'-Eを指している。規模は、南北3.62m、東西3.74mである。



第322図 第7号掘立柱建物跡

第8号掘立柱建物跡

C地区北東に位置する。第7号掘立柱建物跡の北西側にあり、重複はない。1間×2間で小型の掘立柱建物跡である。東西に長い長方形をなしている。方位は、N-81°28'-Eを指している。規模は、南北2.41m、東西2.50mである。

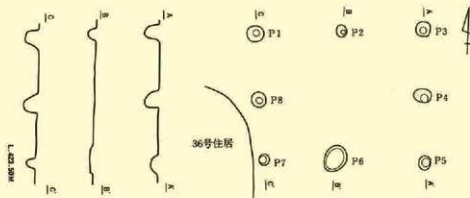


第323図 第8号掘立柱建物跡



第9号掘立柱建物跡

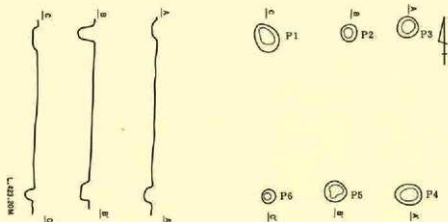
C地区北東に位置する。第7号掘立柱建物跡の西側にあり、重複はない。2間×2間で、小型の掘立柱建物跡である。東西に長い長方形をなしている。方位は、N-84°10'-Eを指している。規模は、南北3.13m、東西3.88mである。



第324図 第9号掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡

C地区北東にある。第4号掘立柱建物跡の南側にあり、第4号掘立柱建物跡と主軸を同じくする。1間×2間で、ほぼ正方形をなしている。重複はない。方位は、N-92°17'-Eを指している。規模は、南北3.96m、東西3.47mである。

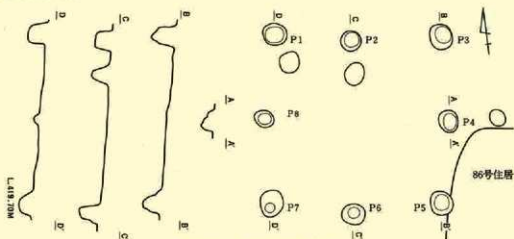


第325図 第10号掘立柱建物跡



第11号掘立柱建物跡

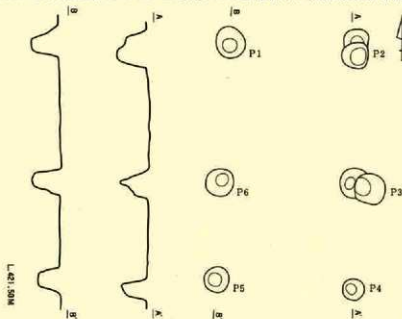
C地区南西側にある。第86号住居と重複を持つが、新旧関係は明らかにできなかった。2間×2間で、東西に長い長方形をなす。方位は、N-98°17'-Eを指している。規模は、南北4.03m、東西4.10mである。



第326図 第11号掘立柱建物跡

第13号掘立柱建物跡

D地区に位置する。第93号住居南西側にある。重複はない。2間×1間で、南北に長い長方形をなしている。方位は、N-1°11'-Eを指している。規模は、南北5.70m、東西3.41mである。

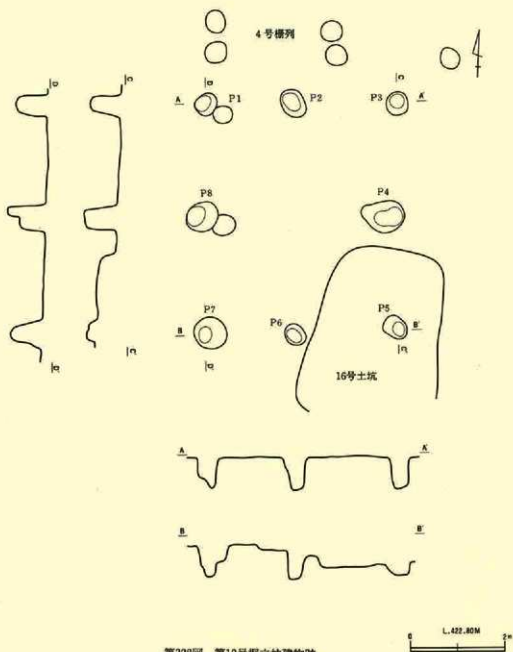


第327図 第13号掘立柱建物跡



第12号掘立柱建物跡

C地区北東側にある。第35号住居の南東側にある。第16号土坑に切られている。2間×2間で、南北に長い不正長方形をなしている。方位は、N-3°34'-Wを指している。規模は、南北5.37m、東西4.56mである。



第328図 第12号掘立柱建物跡

3. 土坑

第3号土坑

A地区中央にある。重複はなし。平面形はほぼ円形をなし、南北長132cm、東西長138cm、深さ33cmである。底面は凹凸が激しい。壁は垂直に立ち上がる。出土遺物はなし。

第7号土坑

A地区中央にある。第1号・第2号溝と重複する。新旧関係は不明。平面形は、胴張り長方形をなし、長軸長267cm、短軸長215cm、深さ42cmである。底面は、細かな凹凸の多い凹面で、壁は垂直気味に立ち上がる。出土遺物はなし。

第8号土坑

A地区西端にある。重複はなし。平面形は、長方形をなし、長軸長165cm、短軸長110cm、深さ28cmである。底面は、緩やかな凹面をなし、壁は垂直気味に立ち上がる。出土遺物はなし。

第9号土坑

C地区北西側にある。重複はなし。平面形は、ほぼ円形をなし南北長126cm、東西長145cm、深さ48cmである。底面は緩い凹面をなし、壁は垂直気味に立ち上がる。出土遺物はなし。なおセクションよりの観察では、下層よりカーボンの純層が認められ、何かを燃やしたものと考えられる。

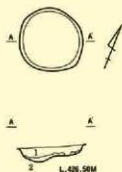
第10号土坑

C地区中央にある。重複はなし。平面形はほぼ円形をなし、南北長182cm、東西長195cm、深さ32cmである。底面は緩い凹面をなし、壁は垂直に立ち上がる。出土遺物はなし。

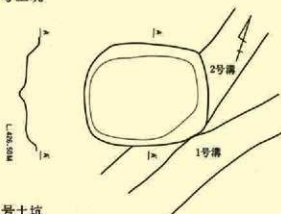
第16号土坑

C地区東側にある。第12号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。平面形は、台形気味の長方形をなし、長軸長398cm、短軸長298cm、深さ42cmである。底面は凹凸が激しい。壁は垂直に立ち上がる。

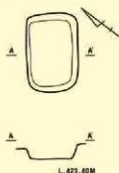
第3号土坑



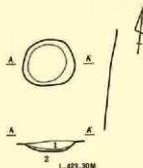
第7号土坑



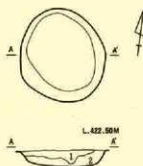
第8号土坑



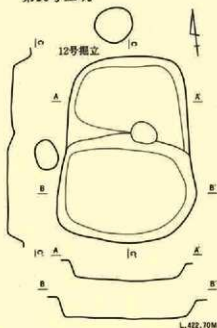
第9号土坑



第10号土坑



第16号土坑



第3号土坑

第1層-黒褐色土(ほとんど純粋なきめ細かい黒褐色土。僅かに小ロームブロックが混入。粘性・しまり無し。ソフト。)

第2層-暗黄褐色土(黒色土とローム分との混層。粘性・しまり無し。ソフト。)

※第2層は貼床のような意味はない。単なる腐層、遷移層であろう。

第9号土坑

第1層-茶褐色土(茶褐色土が主体。FPを少量に含む。粘性無し。しまりややあり。)

第2層-黒色土(黒色のサラサラした黒色土(カーボン?)の純層。粘性・しまり無し。ソフト。)

第10号土坑

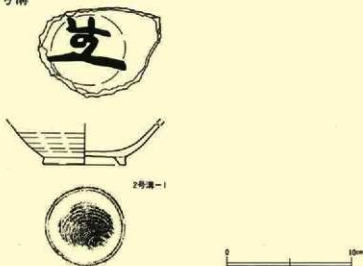
第1層-黒褐色土(黒褐色土が主体。FP、小ロームブロックを含む。粘性無し。しまりあり。)

第2層-黒褐色土(1層と同様の組成だが、やや黒色が濃い。)

第329図 第3、7、8、9、10、16号土坑



4. 溝 第1、2、3号溝



第330図 第2号溝出土遺物

第1号溝

A地区中央にあり、わずかに第1号円形周溝基を切っている。またあまり明確ではないが、2号溝に切られているようである。方向は、ほぼ北北西から南南西に走る。幅も深さも一定しておらず、また深さも浅いことから水路的な性格は考えられない。

出土遺物は、須恵器甕の口縁部破片、坏、碗等が検出されているが、どれも小破片のため図示できなかった。時期は9世紀代と思われる。

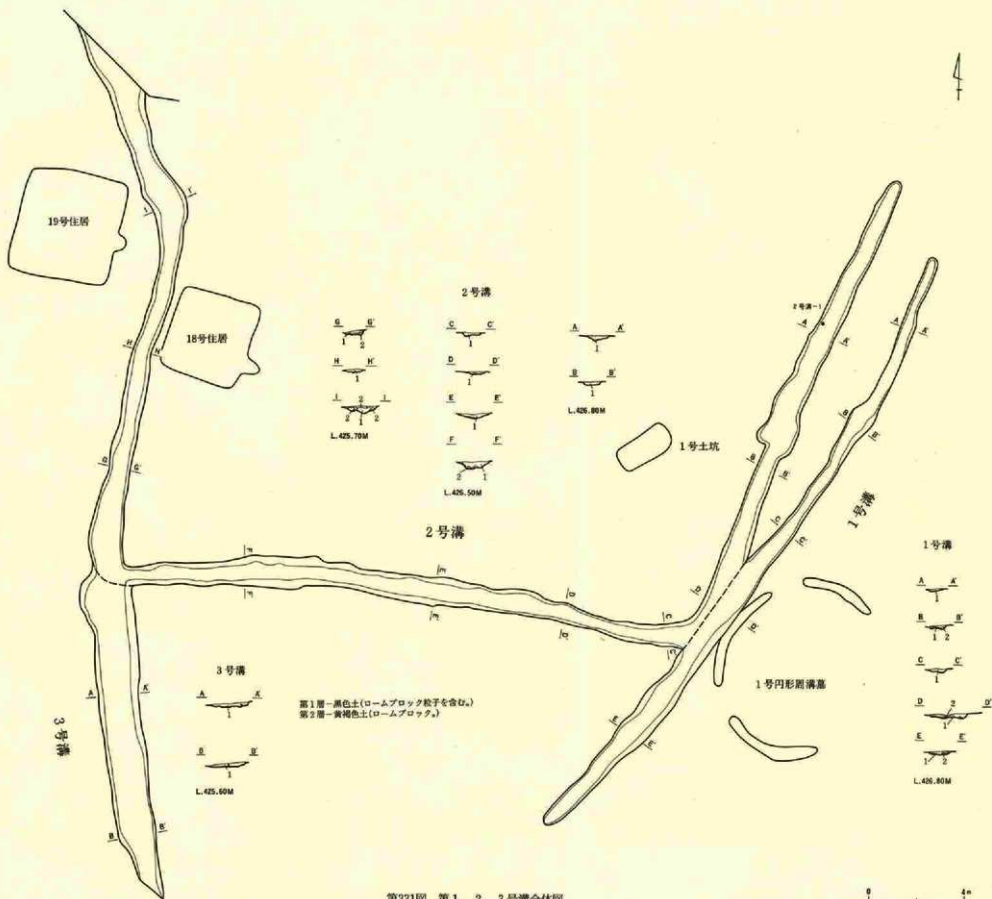
第2号溝

A地区中央にあり、コの字状の形態をなしている。第3号溝との新旧関係は明確でない。東溝・南溝・西溝に分かれるが、南溝が最も掘り込みが深く、しっかりしている。しかし第1号溝と同様、水路的な性格は考えられない。

出土遺物は、須恵器境(1)が検出されており、同碗には「生」と判読できる墨書が記されている。他に図示できなかったが、須恵器瓶の胴部下半破片、羽釜の小片が検出されている。時期は9世紀後半～10世紀と思われる。

第3号溝

A地区中央にあり、第2号溝西溝にスムーズに接続している。(第2号溝との関係は明らかでない。両者が幅や深さの点で相違があるところから別の遺構としたものである。)幅が比較的広く、深さは浅い。出土遺物は、須恵器甕の口縁部破片等が検出されているが、小破片のため図示できなかった。時期は平安時代と思われる。

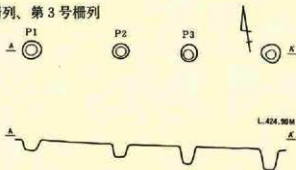


第331図 第1、2、3号溝全体図

5. 柵列 第1号柵列、第2号柵列、第3号柵列

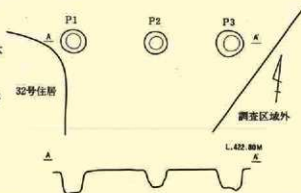
第1号柵列

A地区西側にある。重複はなし。4本のピットよりなり、3間の規模を持つ。長さは、5.48mである。出土遺物は検出されなかった。



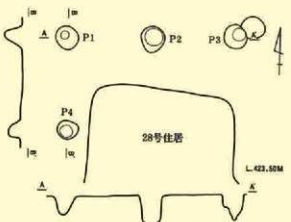
第2号柵列

C地区東側にある。重複はなし。3本のピットよりなり、2間の規模を持つ。長さは3.88mである。出土遺物は検出されなかった。



第3号柵列

C地区北東側にある。重複はなし。4本のピットよりなり、Lの字型をなす。規模は南北1間、東西2間の規模を持つ。長さは南北2.45m、東西4.05mである。出土遺物は検出されなかった。

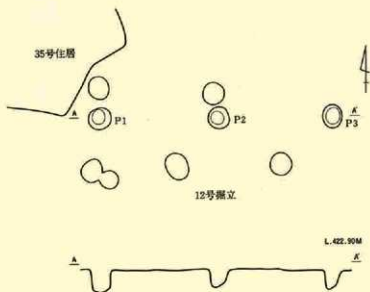


第332図 第1、2、3号柵列



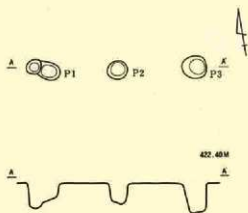
第4号棚列

C地区東側にある。重複はなし。3本のピットよりなり、規模は2間である。長さは、5.39mである。出土遺物は検出されなかった。



第5号棚列

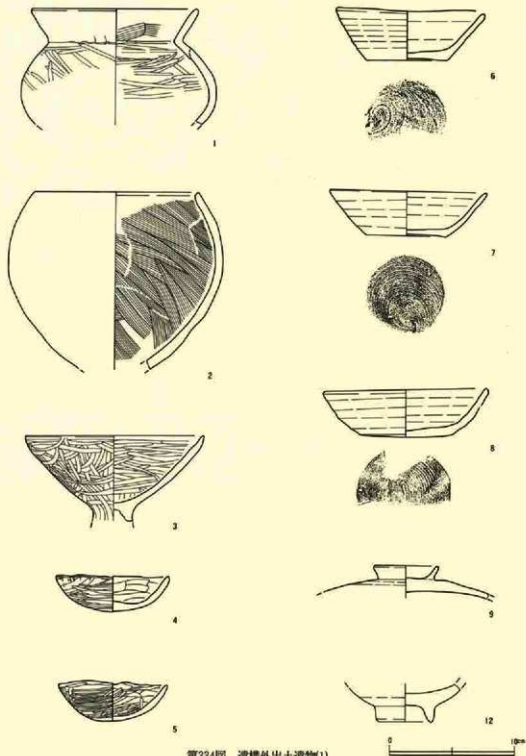
C地区東側にある。重複はなし。3本のピットよりなり、規模は2間である。長さは、3.60mである。出土遺物は検出されなかった。



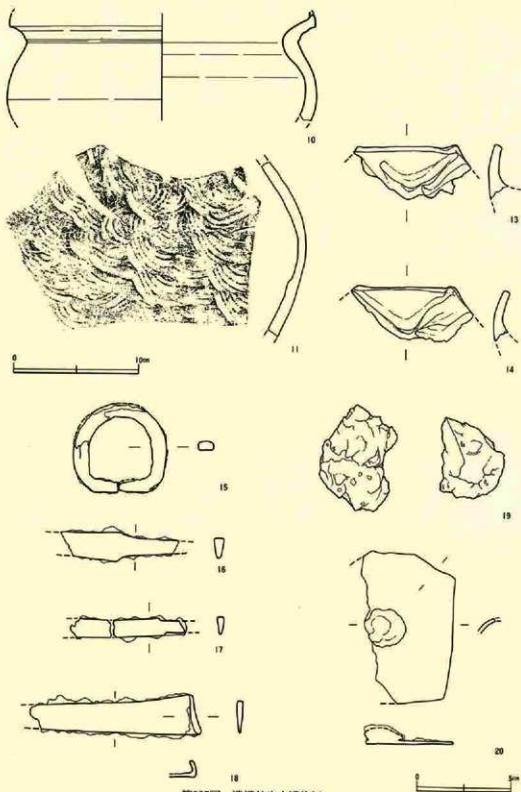
第333図 第4、5号棚列



6. 遺構外出土遺物



第334圖 遺構外出土遺物(1)



第335圖 遺構外出土遺物(2)

7. 弥生時代後期末～平安時代の石器について

弥生時代後期末～古墳時代前期の石器は、縄文時代から引き続き剥片および礫に剝離調整を施す削器、打製石斧等の出現率が高く29点中15点51%に達する。さらに前時代には認められない器種の磨製石鏃、石包丁(?)が加わる。

第Ⅰ期では遺構の覆土より打製石斧2、削器2、石鏃1、石鎌1、敲・擦石1、敲・凹石1の計8点の石器が出土する。このうち剥片あるいは礫に剝離調整を施す石器は6点あり、その出現率は75%となる。このうち第64号住居址-9の石鏃は弥生時代に特徴的な器種といえる。

第Ⅱ期では、住居址床直上4点(第58号住居址-5、他)、覆土14点の計18点が出土する。それぞれ石鏃1、削器4、石鏃1、石斧2、敲石3、敲・擦石3、擦石1、砥石2、石包丁(?)1である。このうち剥片および礫に剝離調整を施す石器は7点あり39%の出現率となる。第53号住居址-13は欠損品であるが半月形になると思われる板状の石器で形態から石包丁の可能性がある。

遺構外からは第13図-52の磨製石鏃が表採される。所属時期を特定できないが、これも弥生時代後期末から古墳時代前期の石器とする。

平安時代の石器は敲石・擦石・砥石・台石等の礫石器が主体を占める。前時代まで認められた剥片および礫に剝離調整を施す石器は皆無で、加えて新たに石製の紡錘車が出現する。前時代の紡錘車は土製で、断面形態は半月形ないし凸レンズ状を呈し、径5.5～4.5cm、重量40.6～17.6gである。一方平安時代のものは石製・土製を含め断面台形状を呈し、径2.2cm、重量1.6gの小型のものと、径5.5～4.8cm、重量52～42.5gの2種を認める。

第Ⅲ期の石器はすべて住居址覆土より出土する。8点中4点が砥石で、ほかは紡錘車、敲・凹石、敲石、不明石製品各1点が出土する。第60号住居址-21の砥石は上位に小孔を穿つ特徴的な形態である。第37号住居址-8の石製品は形態からみて紡錘車の未製品の可能性がある。

第Ⅳ期は敲石1、敲・擦石3、砥石1、台石3の計8点で、そのうち住居址床直上6点、覆土2点とそれぞれ出土する。台石が初めて出現し、それに伴うものと思われる敲石・擦石の出現率も高くなる。この傾向は引き続き第Ⅶ期まで見られる。

第Ⅴ期は敲石4、敲・擦石1、台石1、紡錘車1の計7点の石器が出土する。第3号住居址-10の床直上以外は覆土から出土する。第3号住居址では4点の敲石・擦石と台石が出土しセット関係を窺わせる。

第Ⅵ期では敲石2、敲・擦石4、台石1の計7点の石器が出土する。このうち床直上は4点ある。(第15号住居址-12、他)。なお第16号住居址では、第Ⅴ期の第3号住居址と同様のセットが検出される。さらに第41号住居址-6は第Ⅳ・Ⅴ期同様の形態を示す土製紡錘車が出土する。

第Ⅶ期では敲石3、擦石、砥石、台石各1の合計6点の石器が出土する。敲石は第Ⅴ期までは棒状礫を多用していたが、第Ⅶ期から偏平ないし円礫を用いるようになり、第Ⅶ期にいたりこの比が逆転する。このほか小型土製紡錘車が第8号住居址覆土から出土する。

第4節 遺物観察表

縄文時代(1) (第9、10図参照)

※法量中の()内は推定値。

遺物 番号	種類	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
1	縄文 深鉢	C区 表採	----- 胴部破片	細砂粒を含む。 内外面鈍い褐色。	入り組みとなる格子目文。この間に連続する斜状沈線が加わる。内面施ナデ。	
2	縄文 深鉢	表採	----- 口縁部破片	細粒を含む。 外面明赤褐色、内面鈍い褐色。	口唇部半軟竹管による刻み。同施文具による沈線。横内形または三角形の区画内に刺突文、円形刺突文。	
3	縄文 深鉢	表採	----- 口縁部破片	少量の繊維、細砂粒を含む。 外面鈍い黄褐色、内面灰黄褐色。	半軟竹管による3条の平行沈線。これに重複し、同施文具による爪形文が施される。内面施ナデ。	
4	縄文 深鉢	表採	----- 胴部破片	少量の繊維、砂粒を含む。 内外面黒褐色。	半軟竹管による平行沈線。上位の一条に連続する爪形文が加わる。L R、R L 単節縄文の變形文。	
5	縄文 深鉢	表採	(44.6)----- 口縁部破片	少量の繊維、軽石粒を含む。 外面黒褐色、内面赤褐色。	小さな山形突起をもつ。半軟竹管による2条の平行沈線。上部は3条の菱形沈線が施される。	
6	縄文 深鉢	D区 表採	----- 口縁部破片	繊維、細砂粒を含む。 内外面黒褐色。	半軟竹管による連続刺突文が横状屈曲状に施文される。地文はR L 単節縄文。内面丁寧ナデ。	
7	縄文 深鉢	表採	----- 胴部破片	繊維、細砂粒を含む。 内外面鈍い黄褐色。	半軟竹管による屈曲状あるいは平行する沈線。 組紐回転。内面ナデ。	
8	縄文 深鉢	表採	----- 口縁部破片	繊維を極く僅か、砂粒を含む。 外面暗褐色、内面褐色。	L R と R L の単節縄文が施される。 内面施磨き。	
9	縄文 深鉢	表採	----- 口縁部破片	繊維、砂粒を含む。 外面褐色、内面明赤褐色。	口唇部は丸みを帯び外へ張り出す。 無節R1縄文を施文する。	
10	縄文 深鉢	C区 表採	----- 口縁部破片	繊維を含む。 外面鈍い褐色、内面褐色。	L R 単節縄文。内面施磨き。	
11	縄文 深鉢	D区 表採	----- 口縁部破片	繊維、大粒の砂を含む。 内外面鈍い黄褐色。	無節Lr縄文。内面ナデ。	
12	縄文 深鉢	表採	----- 口縁部破片	繊維、大粒の砂を含む。 外面褐色、内面鈍い褐色。	単節L R、R L の羽状縄文。	
13	縄文 深鉢	D区 表採	----- 胴部破片	繊維、少量の砂粒、軽石粒を含む。 外面鈍い褐色、内面明赤褐色。	0段多条R L とL R の継束縄文。内面ナデ。	
14	縄文 深鉢	表採	----- 胴部破片	繊維を多く、砂粒、軽石粒を少量含む。 外面褐色、内面赤褐色。	附加条1種。L R + L r とR L の羽状縄文。	
15	縄文 深鉢	C区 表採	----- 胴部破片	繊維、砂粒を含む。 外面褐色、内面灰黄褐色。	単節L R 縄文。内面ナデ。	
16	縄文 深鉢	D区 表採	----- 胴部破片	繊維を多く、砂粒を含む。 外面明赤褐色、内面鈍い褐色。	無節R1とR1結束縄文。内面ナデ。	
17	縄文 深鉢	表採	----- 胴部破片	砂粒を含む。 外面灰褐色、内面黒色。	集合沈線。(附加条1種か?) 内面丁寧ナデ。	
18	縄文 深鉢	C区 表採	----- 胴部破片	繊維、砂粒、少量の大粒砂粒を含む。 外面褐色、内面鈍い黄褐色。	単節L R、R L 縄文。内面ナデ。	
19	縄文 深鉢	D区 表採	----- 胴部破片	僅かに繊維、砂粒を含む。 内外面明褐色。	半軟竹管の2条の沈線間に彫状の沈線が内い合わる。沈線間には爪形文。R L、L R の単節縄文(變形文)。	
20	縄文 深鉢	D区 表採	----- 口縁部破片	砂粒を含む。 内外面明赤褐色。	単節R L 縄文。内面粗い施磨き。	

縄文時代(2) (第10、11図参照)

* 注量中の()内は推定値。

遺物 番号	器 種	出土 位置	法 (口径・高・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
21	縄文 深鉢	B区 表層	—・—・— 口縁部破片	細砂粒、軽石粒を含む。 外面褐色、内面鈍い褐色。	山形突起部分で平行した3条の縄彫帯 を有す。単節L R、RL 2種類の原体を 使用する。	
22	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 胴部破片	細砂粒を含む。 内外面褐色。	縦位沈線文、RL単節縄文。 内面磨き。	
23	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 胴部破片	細砂粒を含む。 外面鈍い黄褐色、内面褐色。	縦位沈線文、弧状沈線、RL単節縄文。 内面磨き。	
24	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 胴部破片	細砂粒を多量に含む。 外面褐色、内面鈍灰色。	縦位沈線、LR単節縄文。 内面ナデ。	
25	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 口縁部破片	細砂粒を含む。 内外面鈍い褐色。	内面口唇部から折り返された粘土層が 認められる。 RL単節縄文。横走沈線文。内面ナデ。	
26	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 胴部破片	砂粒を含む。 外面浅黄色、内面褐灰色。	三重沈線間に刺突文列が加わる。RL 単節縄文を僅かに認める。沈線施文後 ナデ。	
27	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 口縁部破片	砂粒が多い。 内外面鈍い黄褐色。	横、縦、弧状に太い沈線が施される。 内面器壁は荒れる。	
28	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 口縁部破片	砂粒を多く含む。 外面鈍い褐色、内面黒褐色。	平行沈線間に弧状の沈線。この部分の 隆帯は磨かれる。地文はRL縄文が施 される。内面磨き。	
29	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 胴部破片	砂粒を多く含む。 外面鈍い黄褐色、内面黒褐 色。	弧状の沈線文。地文はRL単節縄文。	
30	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 胴部破片	砂粒を含む。 内外面鈍い黄褐色。	内面は荒れる。縦位沈線。 沈線間が磨り消している。RL単節 縄文。	
31	縄文 深鉢	C区 表層	—・—・— 胴部破片	砂粒を含む。 外面鈍い褐色、内面黒色。	縦位沈線。沈線間は磨かれる。LR単 節縄文。 内面は磨き。	
32	縄文 深鉢	表層	(45.2)・—・— 口縁部破片	粗砂粒、小石を含む。石英 を少量含む。 内外面鈍い褐色。	口縁部文様帯は横円区画文。RL単節 縄文を充填する。 内面磨き。	
33	縄文 深鉢	表層	—・—・— 胴部破片	粗砂粒、石英を少量含む。 内外面鈍い褐色。	隆帯による縄文か。地文はRL単節 縄文。 内面粗い磨き。	

石器観察表 (第11、12、13図参照)

※量中の()は現存値

遺物 番号	器 種	出土 位置	法 (縦・横・厚さ)cm	量 (g)	重 量 (g)	石 質	特 徴
34	石斧 (分銅形)	C区 表採	11.7・6.3・1.8	155.0	黒色頁岩	表面に礫面が残る。加工は表面が頭部と右・裏面は多方向から行われる。使用痕は刃部と頭部、挟入部に認められる。	
35	石斧 (短冊形)	C区 表採	9.9・6.8・1.9	125.0	細粒安山岩	縦長の素材。表面に礫面を残し主に横方向に摩打が見られる。刃部に僅かに使用痕、裏面は主制礫面を残し、隆起部分のみ磨かれる。	
36	石斧 (腰形)	表採	8.8・5.0・1.9	86.8	黒色頁岩	多方向より整形される。両側中から上位が敲打される。表・裏面中部に僅かに使用痕が認められる。	
37	石斧 (腰形)	表採	11.7・5.9・2.4	185.0	黒色頁岩	表面右側縁が制礫成形される。細調整は頭部を除く全周に及ぶ。裏面には後が残され調整制礫が刃部と右側縁に施される。	
38	石斧 (腰形)	表採	6.9・4.3・1.7	54.0	灰色安山岩	表裏面とも全面にわたり研磨される。表面右側・裏面右側に調整制礫が施される。	
39	石斧	表採	(4.3)・5.0・1.1	26.9	黒色頁岩	頭部のみ現存する。細部調整が周辺に認められる。他の石斧に比べ薄手である。	
40	石斧 (腰形)	表採	10.2・7.7・2.8	185.0	黒色頁岩	三角形に近い形態を有す。表面左側縁に敲打が集中し連続する制礫痕が認められる。右側縁中央が制礫により僅かに快入する。	
41	石斧	表採	(5.6)・7.8・1.6	77.2	黒色頁岩	刃部のみ現存する。表面に礫面を残す。裏面は無加工。片側の石斧である。	
42	石斧	表採	(4.9)・6.8・2.5	67.8	粗粒安山岩	刃部のみ現存する。表面に後を有す。裏面は礫面で刃部のみに制礫が施される。片側の石斧である。	
43	刮器	表採	12.2・5.2・1.3	92.8	黒色頁岩	打面に礫面を残す。表面右側縁に調整制礫が施される。	
44	刮器 表採	C区	7.1・6.8・2.4	130.0	粗粒安山岩	やや内厚の素材を数方向より制礫成形し、表面の両側及び上部、裏面の左側から上部にかけて調整を行う。右側面に礫面を残す。	
45	刮器	表採	6.7・3.7・1.0	24.0	黒色頁岩	微細な制礫は表面の下端及び左側と裏面西側に連続して施される。礫面は表面に残される。	
46	刮器	表採	5.6・10.2・1.3	66.8	黒色頁岩	打面と図下方に礫面が残される。下方が刃部と思われ表裏に細調整が認められる。	
47	刮器	表採	12.2・5.1・2.1	135.0	黒色安山岩	右側縁が制礫され僅かに弧状となる。この反対側面は礫面が残される。	
48	掻器	表採	10.7・9.1・2.6	280.0	黒色頁岩	周辺より粗い制礫が施され、さらに縁辺に細調整が行われる。刃部は急角度である。	
49	石鏃	表採	9.0・3.1・1.4	23.9	黒色頁岩	縦長の素材をそのまま利用したので、尖端部が使用される。	
50	両面調整 表採	C区	4.4・3.5・1.4	18.8	黒色安山岩	隅丸三角形の形態で両面に入念な調整が行われる。後者あるいは石鏃の未製品の可能性もある。	
51	石鏃 (有柄)	表採	(2.3)・1.8・0.5	1.5	瑣質頁岩	先端・柄部欠損する。中央に向かい合う細長い制礫と縁辺に微細制礫が施される。	
52	石鏃 (無柄)	表採	3.7・2.4・0.2	2.4	瑣質頁岩	両面研磨される。両面からの小さな穿孔が認められる。	

弥生時代後期末～古墳時代前期(1)

* 法量中の()内は推定値。

遺物 番号	器 種 類	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
26-1	土師器 埴	7 cm	12.0・17.8・ 1/2	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。明赤褐色、暗赤褐色。	口縁部直線的に開く。外面口縁部から 底部にかけて粗い寛磨き。内面粗作り 痕、ハケ目。	
26-2	土師器 甕	床直	18.4・ 口縁部～胴部下 位1/2	白～灰色の細・粗砂粒を多 く含む。 やや硬質。鈍い褐色。	口縁部横ナデ。外面胴部細かいハケ目、 胴部寛磨き。内面口縁部から胴部にか けて寛磨きあり。	
26-3	土師器 壺	覆土	――(7.9) 胴部下位～底部 小片	白色の細砂粒。僅かに粗砂 粒・細磨を含む。 普通。鈍い褐色、暗灰黄色。	底部に本基盤あり。外面胴部下位ハケ 目の後粗い寛磨き、内面寛磨き。	
26-4	土師器 台付甕	床直	20.4・ 口縁部～頸部	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。黒褐色、鈍い褐色。	口縁部は間延びした感じのS字状口 縁。外面は比較的細かいハケ目。内面 は横ナデ。	
26-5	土師器 台付甕	覆土	――11.5 胴部下位～上部	白～灰色の細・粗砂粒多く、 僅かに石英を含む。普通。 暗赤褐色、鈍い褐色。	外面胴部下位から上部にかけてハケ 目。内面上部細かいハケ目、下部寛磨 り、端部折面、台部内面ナデ。	
26-6	土師器 高杯	貯穴 覆土	――(18.0) 胴部1/2	白～灰色の細砂粒多く、僅 かに石英を含む。普通。 鈍い褐色。	胴部に円孔を4ヶ穿つ。外面細かいハ ケ目、端部横ナデ。内面横方向のハケ 目。	
26-7	土師器 高杯	6 cm	――9.9 胴部のみ	白色の細砂粒を含む。 普通。赤色。	胴部に円孔を3ヶ穿つ。外面は丁寧な寛 磨き。 内面は横ナデ。	外面赤色 塗彩
26-8	弥生 甕	覆土	―― 頸部～胴部上位 小片	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	外面頸部ハケ目、肩部R L縄文施文。 内面口縁部ハケ目、肩部横ナデ。	
34-1	土師器 器台	7 cm	8.5・9.1・10.0 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。淡黄褐色。	器受部丸みをもって開く。胴部に4個、 中央に1個の円孔を穿つ。内外面寛磨 き。胴部内面ハケ目。	
34-2	土師器 高杯	床直	18.4・15.3・11.0 4/5	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。鈍い褐色。	体部は丸みをもって大きく開く。 内外面丁寧な寛磨きあり。	
36-1	土師器 台付甕	床直	18.4・32.9・10.6 2/3	白色・褐色・黒色の細・粗砂 粒。少しの細磨を含む。普 通。鈍い黄褐色、黄褐色。	S字状口縁。外面肩部に横方向ハケ目、 胴部ハケ目。内面ハケ目調整後ナデ、 胴部端部折返しあり。	
36-2	土師器 器台	6 cm	―― 器受部下位～脚 部上位	白～灰色の細砂粒。僅かに 粗砂粒、角閃石を含む。普 通。褐色、鈍い黄褐色。	胴部外面寛磨き。内面調整。器受部 内外面とも寛磨き。胴部円孔2個確認。	
36-3	土師器 器台	床直	7.4・8.9・10.8 口縁部・胴部一 部欠損	白～灰色の細砂粒。僅かに 粗砂粒、細磨、褐色細砂粒 を含む。普通。鈍い黄褐色。	円孔の透孔3個あり。器受部内外面と も寛磨き。胴部外面寛磨き。内面寛 磨ナデ、端部横ナデ。	
36-4	土師器 埴	覆土	―― 胴部1/3	白～灰色の細砂粒。僅かに 細磨を含む。 普通。淡黄色。	丸底に近い平底。胴部外面磨削り後寛 磨き。内面粗作り痕あり、寛ナデ。	
36-5	土師器 甕	覆土	――(7.8) 胴部下位～底部 1/4	白～灰色の細砂粒。僅かに 粗砂粒、褐色細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	底部にかすかな本基盤あり。 胴部下位外面ナデ調整。内面寛ナデ。	
36-6	土師器 甕	12cm 覆土	――(7.8) 胴部下位～底部 1/4	白色の細・粗砂粒。少しの細 磨。僅かに中磨、褐色細・粗 砂粒を含む。普通。鈍い黄 褐色。	胴部下位外面寛磨き。内面ハケ目調整 後、ナデ。	
48-1	土師器 高杯	覆土	(12.5)・―― 1/4	白～灰色の細砂粒。僅かに 角閃石を含む。 普通。鈍い赤褐色。	口唇部で立ち上がる。口縁部横ナデ。 外面体部から底部にかけて寛磨り。 内面寛ナデ。	
48-2	埴	2 cm	(5.5)・―― 口縁部～胴部上 位1/4	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い赤褐色、鈍い黄 褐色。	口唇部で面を作る。外面口縁部から胴上 位にかけて粗いハケ目。内面口縁、胴 部上位に粘土接合痕あり。	
51-1	須恵器 皿	覆土	――(7.0) 底部破片	白～灰色の細砂粒。僅かに 粗砂粒・細磨を含む。還元 焰。灰色。	底部右側板未切り後、周辺部は高台貼 付時の回転ナデ。	内面丹彩

弥生時代後期末～古墳時代前期(2)

遺物番号	種類	出土位置	法 (口縁・器底・底面) 残存率	量 (重量) cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
51-2	土師器 古付壺	5cm	一・一・7.0 台部		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 やや硬質。鈍い黄褐色。	胴部外面横方向のハケ目あり。器端部 折り返しあり。	
51-3	土師器 壺	覆土	(13.8)一・一・ 口縁部から胴部 1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い橙色。	口縁部外反する。頸部細い縦方向の ハケ目あり。 胴部外面調整不明瞭。内面荒ナデ。	
51-4	土師器 壺	覆土	14.0一・一・ 口縁部～胴部上 位1/2		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	口縁部短く外反する。外面胴部上位横 方向の荒削り。 内面ナデ。	
51-5	土師器 壺	覆土	一・一・ 胴部下位		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。明赤褐色。	外面荒削り。内面胴下位紐作り痕あり、 荒磨き。 内面下部に炭化物の付着あり。	
51-6	土師器 高杯	床直	一・一・12.3 脚部		白～灰色の細砂粒を多く含む。 普通。鈍い橙色。	内孔3つ穿たれる。器部外反する。 脚部外面横方向の荒磨き。内面ナデ。	
51-7	土師器 器台	2cm	7.0・6.7・10.3 5/6		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。明赤褐色。	外面口縁から脚部にかけて荒磨き。内面 器受部荒磨き。胴部ハケ目、一ヶ所貫 通されていない孔あり。	
51-8	石皿	覆土	(底)4.6・(横)4.3・(厚)0.6・(重量)59.6g (石質)黒色頁岩			横長剥片の尖端部を使用する。調整刻離が認めら れず、剥片の可能性もある。	
53-1	壺	炉内	14.0一・一・ 口縁部～胴部3/ 4		白～灰色の細・粗砂粒、石英 の細粒を少量含む。普通。 鈍い橙色、褐色。	口縁部に4段の輪痕を明確にもつ。外 面胴部横方向の荒磨き。内面は横方向 荒磨き、輪痕痕の所々に残る。	
53-2	壺	22cm 覆土	(17.0)一・一・ 口縁部～胴部上 位1/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。橙色、黒色。	折り曲げ口縁。口縁部横ナデ。胴部外 面ハケ目。内面荒ナデ。	
53-3	壺	床直	14.0一・一・ 口縁部～胴部上 位3/4		白～灰色の細・粗砂粒、褐色 粒を少量含む。普通。 鈍い橙色、黒褐色。	口縁部に4段の輪痕を明確にもつ。外 面胴部横磨き内面口縁部横方向の荒磨き。	
53-4	壺	床直	14.2一・一・ 口縁部～胴部1/ 2		白～灰色の細・粗砂粒、角閃 石・石英の粗砂粒を僅かに 含む。普通。鈍い褐色。	外面胴部粗いハケ目後縦方向の荒磨 き。内面口縁部横方向の荒磨き、胴部 荒磨き。	
53-5	壺	床直	14.0・16.3・6.0 2/3		白～灰色の細・粗砂粒、僅 かに細粒を含む。 普通。橙色、黒褐色。	口縁部直線的に開く。外面胴部ナデ。 内面口縁部横ナデ、胴部横方向荒磨き。	
53-6	壺	床直	一・一・ 胴部1/2部		白～灰色の細・粗砂粒、石英 を多量に含む。やや軟質。 外面鈍い橙色、黒色、内面 淡黄褐色。	胴部は球形に近い。外面上位は縦方向 の荒磨き。下位は横方向の荒磨き。内 面は縦横方向の荒磨き。	
53-7	鉢	覆土	16.0・6.0一・ 1/2		白～灰色の細・粗砂粒、石英 の細粒を少量含む。外面鈍 い橙色・黒色、内面淡褐色。	体部はやや内湾する。外面体部縦な 荒磨きあり。底部内外面が刻離されてい る。	
53-8	鉢	床直	16.5・7.1・4.3 1/2		白～灰色の細・粗砂粒、僅か に石英の細粒を含む。普通。 橙色。	体部はやや丸みを持って開く。口縁部 横ナデ。内外面とも荒磨きと思われる が単位不明瞭。	
53-9	壺	覆土	一・一・6.2 胴部下位～底部		白色・黒色・褐色の細砂粒、 僅かに粗砂粒、細粒、5mm 大の礫を含む。普通。鈍い 黄褐色。	底部に木葉痕あり。 胴部下位外面荒削り。内面荒ナデ。	
53-10	古付壺	覆土	一・一・9.0 台部		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い橙色。	台部外面上位にハケ目、内面は指ナデ。 器端部折り返し部分に指押えによる凹凸 が明瞭。	
53-11	器台	床直	一・一・ 脚部		白～灰色の細砂粒、僅かに 器母を含む。 普通。淡黄色。	脚部内孔は4分割の位置にあるが、3 孔穿たれる。 外面荒磨き。内面ナデ。	
53-12	壺	覆土	一・一・ 頸部破片		白～灰色の細砂粒を含む。 硬質。鈍い黄褐色。	口縁部内面に2個の内形浮文あり。 外面ハケ目後粗い荒磨き。内面荒磨き。	

弥生時代後期末～古墳時代前期(3)

遺物番号	種類・形態	出土位置	法 (口厚・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
53-13	石包丁?	覆土	(縦)13.1・(横)5.6・(厚)0.9・(重量)110.0g (石質)斑頁岩(鳴滝)		欠損品。半月形の形態と思われる。表面周辺に僅かに調整刻痕を残す。ほぼ全面にわたり磨かれる。表面は主刻痕が残され僅かに磨かれる。	
53-14	敲石	覆土	(縦)9.7・(横)10.9・(厚)7.7・(重量)1210.0g (石質)ひん岩		円錐表面と周辺を敲打する。	
57-1	土師器 環	床直	8.7・3.9・3.5 完形	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。底部外面 黒斑あり。	口縁部横ナデ。外面底部敲方向に磨ナデ。内面磨ナデ。	
57-2	土師器 壺	4cm	23.8・―― 口縁部	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	折り返し口縁。外面敲方向にハケ目。内面横方向に磨ナデ。	
57-3	土師器 壺	床直	――・5.4 胴部下位～底部 3/4	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。外面黒褐色、内面 褐色。	外面胴部斜め、横方向に磨ナデ。底部磨ナデ。内面磨ナデ。	
57-4	土師器 壺	覆土	――・5.0 底部	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。一部 黒色。	胴部下位外面ナデ、内面磨ナデ。底部の一部に磨ナデ。	
57-5	土師器 台付罌	床直	――・5.0 台部	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い赤褐色。	小さい台部である。 外面上位ハケ目後ナデ、内面ナデ。	
57-6	土師器 高杯	35cm 覆土	(14.0)・―― 杯部1/3	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部横ナデ。杯部外面磨ナデ。内面磨ナデ後、磨ナデ。	
57-7	土師器 高杯	床直	23.0・―― 胴部下位～胴部 欠損	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。 外面鈍い赤褐色、内面暗 褐色～黄褐色。	口縁部横ナデ。外面杯部から胴部にかけて磨ナデ。内面杯部敲方向に磨ナデ。	内外面丹 彩
57-8	土師器 高杯	床直	15.7・―― 胴部欠損	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部横ナデ。外面杯部敲方向に磨ナデ。胴部ハケ目後磨ナデ。内面杯部横方向に磨ナデ。	
57-9	土師器 高杯	9cm	――・(21.6) 胴部1/2部	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。やや硬質。褐色。黒 褐色。	外面は縦方向の磨ナデの上を丁寧にナデられ、単位は不明瞭。内面ハケ目。	
57-10	敲石	覆土	(縦)13.8・(横)3.7・(厚)4.3・(重量)225.0g (石質)粗粒安山岩		棒状。欠損する。長軸先端から側面にかけて敲打される。焼けている。	
57-11	削器	覆土	(縦)10.8・(横)6.5・(厚)2.1・(重量)130.0g (石質)黒色頁岩		横長削片の一個縁に対し調整刻痕が行われる。表面に磨面を残す。焼けている。	
57-12	敲・磨石	覆土	(縦)16.3・(横)12.9・(厚)3.8・(重量)1220.0g (石質)粗粒安山岩		表面磨かれる。周辺が敲打される。このため数カ所が剥離する。	
58-1	土師器 台付罌	覆土	15.8・―― 口縁部～胴部下位 部欠損	白色の細・粗砂粒。少しの細 粒・褐色細・粗砂粒を含む。 やや軟質。鈍い黄褐色。	S字状口縁。口縁部横ナデ。外面胴部横方向ハケ目。内外面ともハケ目調整。	
58-2	砥石	覆土	(縦)22.0・(横)9.8・(厚)1.9・(重量)355.0g (石質)黒紋岩質凝灰岩		舌状の偏平磨の表・裏及び両側面が使用される。磨痕は長軸方向に対して行われる。表面には明確な磨痕が残る。	
58-3	敲・磨石	覆土	(縦)16.8・(横)4.4・(厚)3.6・(重量)510.0g (石質)黒色頁岩		四角柱磨の長軸両端と表・裏両側面の一部と磨痕部が敲打される。さらに部分的に磨かれる。焼けている。	
58-4	敲石	覆土	(縦)13.9・(横)3.4・(厚)2.4・(重量)365.0g (石質)頁岩		四角柱磨。僅かに敲打痕が認められる。下位は欠損する。	
58-5	磨石	床直	(縦)4.1・(横)3.3・(厚)1.4・(重量)12.9g (石質)黒紋岩質凝灰岩		ほぼ全面にわたり磨られる。下位が欠損する。	
58-6	石鏃 (有柄)	覆土	(縦)4.9・(横)1.5・(厚)0.4・(重量)3.4g (石質)黒色頁岩		尖端と基部が欠損する。調整は縁刃から中央に達する剥離後さらに微細な剥離が行われる。	
62-1	赤生 壺	覆土	10.8・16.8・4.9 3/4	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	口縁部に2段の輪横溝を持つ。外面胴部上位縦方向に磨ナデ。内面口縁部ハケ目、胴部磨ナデあり。	

弥生時代後期末～古墳時代前期(4)

遺物番号	種類	出土位置	法 (口徑・高さ・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
62-2	弥生 甕	覆土	14.0・(8.1)・ 口縁部～胴部上 位3/4		白～灰色の細砂粒。僅かに 石英、角閃石を含む。普通。 黄褐色。	口縁部「く」の字状を呈す。口縁部横 ナデ。胴部縦方向ハケ目。内面口縁部 横方向のハケ目。胴部縦ナデ。	
62-3	弥生 甕	覆土	11.0・ 口縁部～胴部 3/4		白～灰色の細砂粒。僅かに 角閃石を含む。 普通。鈍い灰色。	胴部上位5ヶ所に円形浮文添付される。 外面胴部縦状文、波状文施文、胴部下 位寛磨きあり。内面寛磨き。	
62-4	弥生 甕	24cm 覆土	(一)・ 胴部下位～底部 3/4		白～灰色の細砂粒。僅かに 角閃石を含む。 普通。灰色。	底部中央に一孔を穿つ。外面胴部下位 寛磨き。内面寛磨き。	
62-5	弥生 甕	覆土	―― 胴部上位破片		白色・黒色細砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	外面胴部に直線文が施され、その上に 3本線を磨下させる。中央に凹線が施 される。円形浮文添付。	
62-6	弥生 甕	覆土	―― 胴部上位破片		少量の白～灰色の細砂粒。 褐色粘土粒を含む。普通。 鈍い灰色。	外面胴部？連止め横状文か？。胴部波 状文を施す。	
62-7	敲・磨石	覆土	(縦)52.0・(横)5.8・(厚)3.0・(重量)190.0g (石質)愛宕安山岩			扁平型の裏面に敲打、磨痕が認められる。下半 は欠損。	
64-1	弥生 甕	床直	22.5・34.8・11.4 ほぼ完形		白～灰色の細砂粒を多く、 僅かに角閃石を含む。やや 硬質。淡灰色。	折り返し口縁。口縁部から胴部上位に かけて波状文、底部に横状文あり。胴 部内外面とも丁寧な寛磨き。	
64-2	須恵器	覆土	―― 胴部中位1/4		白～灰色の細砂粒を含む。 還元層。灰オリーブ、淡黄 色。	胴部外面寛磨き、内面横方向のナデ。	
64-3	弥生 甕	27cm 覆土	(15.8)・ 口縁部～胴部下 位1/4		白～灰色・黒色・褐色の細砂 粒を含む。 普通。鈍い褐色。	折り返し口縁。外面口縁部寛磨き、胴 部から胴部ハケ目後寛磨き。内面口縁 部から胴部寛磨き。	
64-4	弥生 小型甕	覆土	(9.0)・ 口縁部～胴部上 位1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。鈍い灰色。	口唇部外反する。外面口縁から胴部上 位にかけて寛磨きあり。内面口縁部寛 磨き、胴部縦ナデ。	口唇部に 煤痕
64-5	弥生 甕	覆土	―― 胴部1/4		白～灰色の細・粗砂粒を多 く含む。 普通。明赤褐色、褐色。	外面割離のため不明瞭だが、胴部縦方 向の寛磨きあり。内面ナデ。	
64-6	弥生 台付甕	27cm 覆土	(13.2)・ 口縁部～胴部上 位1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。鈍い赤褐色。	S字状口縁。口縁部横ナデ。外面胴部 上位縁のハケ目後横のハケ目あり。内 面肩部捻えりあり。	
64-7	弥生 高杯	床直 脚部	―― ――		白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。外面赤褐色、内面橙 色。	外面縦方向の寛磨きあり。内面横方向 のハケ目あり。	胴部外面 赤色塗彩
64-8	土師器 高杯	覆土	(19.0)・ 杯部小片		白色の細砂粒。僅かに粗砂 粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	杯部内外面とも後をもち、放射状寛磨 き。	
64-9	石椁	覆土	(縦)14.5・(横)9.3・(厚)2.0・(重量)260.0g (石質)黒色頁岩			胴部を有するがこの一部が欠損する。裏面とも 大きな割離面を残す。縁辺の加工は、長さ1～2c mの剝離を行った後、細部調整される。これらの 剝離は全周する。	
64-10	甕	覆土	(縦)5.7・(横)4.2・(厚)1.2・(重量)23.6g (石質)黒色頁岩			裏面に主剝離面を残す。側面は上部に残る。パル プ表・裏面に対しての剝離がみられる。さらに微細 な剝離が両側面に残る。	
64-11	石椁	覆土	(縦)6.4・(横)3.6・(厚)0.6・(重量)13.3g (石質)黒色頁岩			横長切片の尖頭部を利用。微細な剝離が表面上位 から左側縁にかけ認められる。	
65-1	甕	15cm 覆土	19.8・11.1・5.4 口縁部一部欠損		白～灰色の細砂粒を多く含 む。 普通。灰黄褐色。	折り返し口縁。底部中央に一孔を穿つ。 胴部内外面寛磨き。	
65-2	土師器 台付甕	33cm 覆土	―― 台部4/5		白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。明褐色。	台部外面斜め方向のハケ目あり。内面 砥作り痕あり。	

弥生時代後期末～古墳時代前期(5)

遺物番号	種類	出土位置	法 (口徑・高さ・底径) 残存率	量 (g) cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
65-3	土師器 高坏	覆土	(10.0)・―― 1/4	――	白～灰色の粗砂粒を多く含む。 普通。明黄褐色。	口唇部やや外反気味。口縁部横ナデ。 外面体部寛磨き内面底部付近寛削り。	
66-1	坏	覆土	9.2・―― 3/4	――	白～灰色の細・粗砂粒を多く、石英を僅かに含む。普通。鈍い橙色。	体部浅く、脚状を呈す。体部丁寧ナデ。 底部寛ナデ。	
66-2	埴	堀方内	(12.0)・―― 1/3	――	白～灰色の細・粗砂粒を多く、石英を僅かに含む。普通。橙色。	口縁部直線的に開く。 内外面ともに横方向の寛磨きあり。	
66-3	小型甕	6cm	7.5・6.4・―― ほぼ完形	――	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色、赤色、黒褐色。	口縁部横ナデ。外面胴部上位ナデ、下位から底部寛ナデ。	口縁部内 外面丹彩
66-4	甕	6cm	――・――・5.6 1/2	――	白～灰色の細・粗砂粒を多く含む。 普通。鈍い黄褐色、一部黒色。	外面胴上位ハケ目、下位は寛磨き。内面はナデ。	
66-5	甕	4cm	15.2・――・―― 5/6底部欠損	――	白～灰色の細砂粒を多く、粗砂粒を少量含む。 普通。黒褐色。	口縁部直線的に開く。外面口縁部から胴上位ハケ目、胴下位ナデ。内面口縁部ハケ目、胴部ナデ。	
66-6	甕	4cm	13.6・6.5・2.8 口縁部一部欠損	――	白～灰色の細・粗砂粒を多く含む。 普通。外面鈍い橙色、内面黒褐色。	口縁部は折り返し、膨らみを持つ。胴部から口縁にかけて直線的に開く。胴部はナデ。底部に一孔を穿つ。	
66-7	甕台	覆土	――・――・―― 1/4	――	白～灰色の細・粗砂粒を多く含む。 普通。橙色。	脚部の円孔は4ヶ所にあけられると思われる。 外面寛磨き。内面ナデ。	
67-1	甕	炉内	16.0・――・―― 口縁部～胴部上位	――	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。褐色。	口縁部は直線的に開く。口縁部から胴部上位にかけて波状文を施す。内面寛ナデ。	
67-2	甕	床直	――・――・7.8 胴部～底部1/2	――	白～灰色の細砂粒、少しの褐色粗砂粒を含む。普通。 鈍い黄褐色。	肩部から大きく張り出し球形を呈す。外面胴部ハケ目後、丁寧な寛磨き。内面粗いハケ目。	
67-3	甕	炉内	(25.5)・――・―― 口縁部～胴部下位1/4	――	白～灰色の細砂粒、少しの粗砂粒を含む。 普通。褐色。	口唇部横ナデ。外面口縁部から胴中位部までハケ目、胴下位ハケ目後粗い寛磨き。内面ハケ目後寛磨き。	
67-4	甕	覆土	(16.0)・――・―― 口縁部～胴部上位1/4	――	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。褐色。	胴部は肩を帯て強く屈曲し、「く」の字状を呈す。口縁部横ナデ。胴部外面ハケ目、内面寛ナデ。	
67-5	甕	覆土	――・――・5.8 胴部下位～底部1/2	――	白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒を含む。 普通。外面暗褐色、内面鈍い橙色。	全体に難な作り。外面胴部から底部にかけてハケ目、寛磨きあり。内面ナデ。	
67-6	鉢	床直	10.7・3.5・3.1 口縁部一部欠損	――	白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒を含む。 普通。明黄褐色。	外面体部ハケ目後ナデ、底部付近寛磨き。 内面寛ナデ。	
67-7	鉢	床直	(13.4)・4.8・(3.5) 底部一部欠損	――	白～灰色の細砂粒、僅かに赤褐色粒を含む。 普通。橙色。	口唇部僅かに内湾し、体部は直線的に開く。 内外面とも丁寧な寛磨き。	
67-8	ミニチュア甕	8cm	6.9・5.4・1.5 ほぼ完形	――	白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒を含む。 普通。鈍い褐色、一部黒色。	口縁部内外面に接合痕あり。外面ハケ目後難な寛磨き、内面寛ナデ。	
67-9	ミニチュア甕	覆土	2.0・3.3・―― 口縁部一部欠損	――	白色・少しの黒色粗砂粒を含む。 やや軟質。黄褐色、鈍い黄褐色。	口縁部から底部中央に向かって穿孔あり。胴上位から口縁部に向かって指押え痕、下位は寛ナデ、ナデ。	
68-1	甕	床直	15.8・27.1・(8.5) 2/3	――	白～灰色の細・粗砂粒、石英を多く含む。 普通。褐色、褐色。	口縁部3段の輪積痕あり。外面胴上位ハケ目、中位部、下位横方向寛磨き。内面口縁部寛磨き、胴部寛ナデ。	

弥生時代後期末～古墳時代前期(6)

遺物 番号	種類 名称	出土 位置	法 (口縁・器高・底径) cm	量 (口縁部・底径) cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
69-1	弥生 壺	10cm	19.0・26.7・7.0 ほぼ完形		白～灰色の細砂粒を含む。 普通。明黄褐色、黒褐色。	動物T文字、波状文が施され、円形浮文が5ヶ所に貼付される。外面口縁部磨削り。内面横方向に磨き。	
69-2	弥生 大型壺	6cm	――― 頸部～胴部下位 1/2		白～灰色の細砂粒を多く含む。 軟質。暗灰黄色、鈍い黄褐色、黒色。	内外面とも剝離が著しい。頸部動物T文字、波状文、8ヶ所に9ヶの円形浮文貼付。外面胴部磨削き。	
69-3	弥生 壺	10cm	(17.4)・――― 口縁部～胴部中 位1/2		白～灰色の細砂粒、黒色鉱物粒を含む。 普通。淡灰色、鈍い褐色。	頸部帯状2段によりなるT文字、下位に波状文を施す外面胴部磨削き。	
69-4	弥生 壺	16cm 覆土	20.4・――― 口縁部～胴部1/ 3		白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒、黒色鉱物粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	口縁部折り返し、肩から口縁部2連止め波状文、上下に波状文施す。外面胴部磨削き。内面全体磨削き。	
69-5	弥生 壺	10cm	(14.0)・――― 1/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。赤褐色。	頸部から胴部上位にかけて波状文を施す。外面横方向の磨削あり。	
69-6	弥生 小型壺	2cm	10.0・10.2・5.0 口縁部一部欠損		白～灰色の細砂粒、僅かに角閃石を含む。 普通。鈍い黄褐色、黒色、鈍い赤褐色。	口縁から胴部上位にかけて波状文が施される。外面胴部磨削き、底部磨削ナデ。内面横方向の磨削き。	
69-7	弥生 白付壺	覆土	――― 体部1/2		白～灰色の細砂粒を含む。 普通。赤色、明赤褐色。	口縁部は外反して開き、体部中位に丸みをもつ。 内外面横方向に磨削き。	外面丹彩
69-8	弥生 壺	覆土	―――4.5 胴部～底部1/2		白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い赤褐色、黒褐色。	胴部は丸みを持つ。外面胴部磨削り、底部磨削ナデ。 内面ナデ。	
69-9	弥生 高坏	床直	23.6・26.3・17.0 口縁部一部欠損		白～灰色の細砂粒を含む。 普通。外面赤褐色、黒褐色、内面赤褐色、黒褐色、明黄褐色。	口縁部下に2連止め波状文、波状文施す。外面体部から台部にかけて磨削き。内面体部磨削き、台部ハケ目。	体部内外 面丹彩
69-10	弥生 鉢	覆土	14.5・――― 口縁部～体部3/ 4		白～灰色の細砂粒を含む。 普通。赤色。	内外面とも全面磨削き。	内外面丹 彩
69-11	弥生 鉢	床直	(14.7)・7.0・5.2 1/2		白～灰色の細砂粒、僅かに角閃石を含む。 普通。鈍い褐色、赤色。	体部外面磨削しているが磨削き、内面磨削き。	内外面丹 彩
69-12	敲・凹石	覆土	(縦)13.1・(横)5.2・(厚)3.0・(重量)275.0g (石質)砂岩			棒状石器の表裏に各一ヶ所の凹が見られる。敲打痕は左側面と上位にある。裏面の剝離は打撃の際によるものと思われる。	
72-1	壺	2cm	(15.6)・――― 口縁部～胴部上 位2/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	口縁部指環状、輪状あり。外面胴部上位磨削き。 内面口縁部横方向の磨削きあり。	
72-2	土師器 白付壺	覆土	(14.0)・――― 口縁部破片		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。灰黄褐色。	S字状口縁。胴部上位縦方向のハケ目。 内面胴部粘土接合痕あり。	
72-3	土師器 罎	2cm	(21.0)・7.1・(4.7) 1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色、一部黒色。	口縁部直線的に開く。底部平底。 内外面磨削きあり。	
72-4	削器	床直	(縦)12.1・(横)7.8・(厚)1.3・(重量)78.7g (石質)黒色頁岩			横長切片を素材とする。上位に断面、裏面に主制断面を残す。剝離は裏面にみられ、左側は弧状に磨らみ、右側は内に湾入する。	
72-5	削器	床直	(縦)13.1・(横)10.0・(厚)1.8・(重量)170.0g (石質)粗粒安山岩			横長切片を素材とする。表面に断面、裏面に主制断面を残す。剝離は左側面に集中する。	
73-1	埴	床直	12.2・29.0・3.8 ほぼ完形		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	折り返し口縁。 内外面とも丁寧な磨削き。	口縁部内 外面丹彩
73-2	埴	19cm 覆土	―――3.5 口縁部欠損		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	体部外面磨削り後ナデ。内面粗い磨削き。	

弥生時代後期末～古墳時代前期(7)

遺物 番号	種 類	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
73-3	鉢	10cm	(11.8)・4.7・3.5 1/3		白～灰色の細・粗砂粒、僅かに 石英を含む。 普通。明赤褐色。	体部やや丸みを持って開く。外面篋削り 後、粗い荒磨き。内面荒磨き。	
73-4	甕	炉内	15.8・―― 口縁部～胴部中 位		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。褐色。	口縁部は4段の輪痕が顕著で指頭痕あ り。胴部外面荒削り、内面荒磨き。	
73-5	壺	床直	(胴中位径)24.4 1/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	胴部は球形を呈す。内外面横方向の荒 磨き。	
73-6	甕	25cm 覆土	17.0・9.0・6.0 2/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	底部から直線的に開き、口唇部は折り 曲げられる。底部に一孔を穿つ。外面 荒削り後ナデ。内面荒ナデ。	
73-7	高坏	床直	19.3・13.5・8.0 坏部～胴部2/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。褐色。	坏部は大きく開く。胴部に4ヶ所の円孔 を穿つ。外面は斜位の荒削り後、粗な 荒磨き。内面粗い荒磨き。	
73-8	甕	覆土	(18.0)・―― 口縁部破片		白～灰色の細・粗砂粒、石英 を僅かに含む。 普通。外面褐色、内面黒色。	折り返し口縁。口縁部に7本単位の波状 文が施されている。内面は荒磨き。	
73-9	甕	覆土	―― 破片		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	胴部から胴部にかけて14本単位とする 帯状直線文が、横方向に3単位、垂直 に1単位施される。	
73-10	磁石	床直	(縦)12.7・(横)6.3・(厚)5.6・(重量)655.0g (石質)流紋岩質凝灰岩			柱状で両面が使用される。数か所に敲打痕、凹み、 線状の擦痕がみられる。	
73-11	磁・磁石	覆土	(縦)18.4・(横)3.5・(厚)3.1・(重量)485.0g (石質)粗粒安山岩			柱状際の長軸両端が敲打される。擦痕は長軸方向 にみられる。	
73-12	磁石	覆土	(縦)11.3・(横)5.6・(厚)4.8・(重量)590.0g (石質)黒色頁岩			要角際の長軸両端が使用される。	
78-1	弥生 甕	床直	18.0・27.9・7.4 口縁部一部欠損		白色・褐色・黒色細砂粒、僅かに 金雲母を含む。 普通。鈍い黄褐色。	口縁部から胴部上位波状文施文。外面 胴部中位から下位荒磨き。底部荒削り。 内面丁寧な荒磨き。	
78-2	弥生 壺	床直	(19.0)・―― 口縁部～胴部1/ 3		白～灰色・黒色細砂粒、僅かに 金雲母を含む。 普通。鈍い黄褐色。	口縁部は大きく外反し、折り返す。胴部 2連止め縹状文。外面口縁部から胴部 縦方向荒ナデ。内面荒磨き。	
78-3	弥生 甕	床直	13.6・―― 口縁部～胴部中位 一部欠損		白色・黒色細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部はやや外反する。口縁部から胴部 上位にかけて波状文施文。内面横方向 荒磨き。	外面彫付着
78-4	弥生 甕	床直	14.5・―― 口縁部～胴部中 位		白色の細砂粒、角閃石、金 雲母を含む。 普通。鈍い褐色、黄褐色。	口縁部から胴部中位波状文。胴部外面 中位から下位荒磨き、内面横方向荒磨 き。	
78-5	弥生 鉢	床直	15.2・7.1・3.8 口縁部一部欠損		白～灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒・磁石・角閃石を含む。 普通。赤褐色。	体部は直線的に開く。内外面とも丁寧 な荒磨き。	内外面丹 彩
78-6	弥生 ミナツアサ	覆土	4.7・―― 底面欠損		白色細砂粒、僅かに褐色・黒 色細砂粒を含む。軟質。浅 黄色。	4ヶ所に刺突を施した円形浮文あり。手 づくね土。粗なナデ。	
78-7	土製品 円盤状	覆土	(長径)3.6・(厚)0.9・(孔径)0.2・(重量)11g (短径)3.3			歪んだ楕円形を呈す。中心よりずれて2つの小孔を 穿つ。全体的に粗な作り。	
78-8	石斧 短冊形?	覆土	(縦)9.3・(横)3.9・(厚)1.4・(重量)59.1g (石質)黒色頁岩			下半が欠損する。胴部から右側面にかけ磨面を残す。 加工は表面が主に左から、裏面は両側から行 われ、さらに微細な調整を行う。	
78-9	石斧	覆土	(縦)7.4・(横)4.9・(厚)1.5・(重量)69.0g (石質)黒色頁岩			下半が欠損する。胴部に磨面を残す。調整刻痕は 縁辺にのみ行われる。	
79-1	弥生 ミナツアサ	15cm 覆土	6.0・3.5・2.0 完形		白～灰色の細砂粒を含む。 普通。黄褐色、黒色。	外面は縦方向、内面は横方向の荒磨き。	
79-2	弥生 小型甕	4cm	8.9・9.2・4.0 口縁部一部欠損		白～灰色の細砂粒を含む。 普通。暗灰色、褐色、黒 色。	胴部上位に波状文あり。外面口縁部か ら体部中位縦方向に荒磨き、下位斜め 横方向に荒磨きあり。	

弥生時代後期末～古墳時代前期(8)

遺物 番号	種 類	出 土 位 置	法 (口径・高さ・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
79-3	弥生 小型甕	床直	12.3・11.2・6.0 口縁部一部欠損	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。明赤褐色、黒色。	口縁部波状文、頸部に8本1単位の簾状文が施される。胴部内外面、底部とも寛磨き。		
79-4	弥生 甕	床直	14.6・17.3・5.8 3/4	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。褐色。	口縁部から胴部上位に7本1単位の波状文が5単位施される。胴部内外面、底部とも寛磨き。		
79-5	弥生 甕	床直	15.0・18.4・6.4 一部欠損	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。褐色、黒褐色。	口縁部から胴部上位にかけて波状文。底部寛磨き。内面寛磨き。		
79-6	弥生 甕	覆土	――・5.5 胴部～底部1/2	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。褐色、黒褐色。	胴部上位波状文。外面胴部中心横方向、下位縦方向に寛磨き。内面寛磨き。		
79-7	弥生 甕	床直	――・―― 胴部下位全周	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。明黄褐色、黒色。	胴部外面横方向、縦方向に寛磨き。内面横方向に寛磨き。横溝線に沿ってかなりひびが入っている。		
79-8	弥生 甕	床直	――・―― 胴部1/5	白～灰色の細砂粒、僅かに細砂を含む。 普通。明黄褐色。	胴部上位に波状文。外面胴部中心横方向、下位縦方向に寛磨き。内面寛磨き。		
79-9	弥生 甕	7cm	――・4.1 胴部下位～底部	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色、黒色。	外面胴部は寛磨き後粗い縦方向の寛磨き。内面横方向に寛磨き。		
79-10	弥生 甕	8cm	――・5.0 胴部下位～底部	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。外面明黄褐色、内面鈍い赤褐色。	胴部外面縦方向に寛磨き。内面寛磨き。		
79-11	弥生 甕	覆土	16.8・24.5・7.5 1/2	白～灰白粗砂粒、角閃石、石英を含む。 普通。明赤褐色。	外面口縁部粗いハケ目。胴部寛磨き後上位に粗い寛磨き。内面口縁部ハケ目、胴部寛磨き後寛磨き。		
79-12	弥生 甕	23cm 覆土	――・―― 胴部破片	白～灰色の細砂粒、僅かに褐色微物粒・金雲母を含む。 普通。鈍い黄褐色、淡黄褐色。	胴部に1単位9条よりなる帯状十字文、円形浮文、波状文。内面粗いハケ目。		
80-1	甕	覆土	12.8・―― 口縁部～胴部3/4	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。明褐色、一部黒色。	口縁部から胴部上位は波状文、頸部に簾状文が施され内外面寛磨き。		
80-2	高坏	覆土	――・―― 口縁部～坏部1/2割	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。外面赤褐色、内面暗灰褐色。	外面坏部上位横方向、下位縦方向に寛磨き。内面寛磨き。	外面丹彩	
80-3	土製品 紡車	覆土	(径)5.5・(厚)1.4・(孔径)0.5・(重量)40.5g		ほぼ円形で、凸面側は丸みを持ち縁を作らない。中央の孔は下から上に向かって穿つ。下面は寛磨き。上面はナゲ後粗い寛磨き。		
81-1	弥生 甕	床直	18.0・―― 底部欠損	白～灰色の細砂粒、角閃石を多く含む。 硬質。灰褐色。	口縁部から胴部上位にかけて波状文、胴部簾状文。胴部外面寛磨き。内面寛磨き。胴部粗作り痕あり。		
81-2	弥生 甕	床直	12.8・―― 底部欠損	白～灰色の細砂粒、僅かに角閃石を含む。 普通。明黄褐色、一部黒色。	口縁部から胴部上位にかけて波状文、頸部に簾状文あり。胴部内外面寛磨き。		
84-1	石斧 (扇形)	床直	(縦)10.4・(横)7.9・(厚)1.9・(重量)175.0g (石質)黒色頁岩		表面と頸部に磨面が残る。裏面に主刺摩が残る。調整は裏面、両面縁に見られる。刃部は鋭い。		
84-2	削器	床直	(縦)10.6・(横)7.2・(厚)4.1・(重量)320.0g (石質)黒色頁岩		魚甲状の形態で、表面は全面にわたって縁部からの刺摩が認められる。裏面に自然面を残す。		
85-1	弥生 甕	覆土	16.0・22.7・8.0 2/3	白色の細・粗砂粒・石英の細砂を僅かに含む。 普通。鈍い褐色、黒褐色。	口縁部から胴部上位にかけて波状文が施される。外面胴部中心から下位縦方向に寛磨き。内面ヘラ磨き。		
85-2	土製品 紡車	覆土	(径)4.5・(厚)0.8・(孔径)0.6・(重量)17.6g		扁平な歪んだ円形を呈す。中心の孔は穿孔した際の粘土の盛り上がりで周囲に残る。ナゲ調整で、中心孔のところに寛の当たった痕がある。		
85-3	削器	覆土	(縦)4.4・(横)7.4・(厚)1.1・(重量)26.8g (石質)黒色頁岩		横長切片の一個縁に連続する刺摩が行われる。側面に磨面を残す。		
90-1	甕	床直	15.6・―― 口縁部～胴部上位	白色・黒色・褐色細・粗砂粒、僅かに細砂・金雲母を含む。 普通。鈍い黄褐色。	有段口縁。口縁部内外面丁寧な寛磨き。胴部寛磨き。		

弥生時代後期末～古墳時代前期(9)

遺物 番号	種 類	出土 位置	法 (口径・器高・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
90-2	土師器 甕	15cm 覆土	10.4・6.2・— 口縁部一部欠損		白～灰色の細砂粒、少し角 閃石を含む。	窪み底。口縁部横ナデ。胴部外面磨 き、内面磨ナデ。 普通。鈍い橙色。	
90-3	土師器 ミナヅカ型	覆土	(5.9)・—・— 1/4		白色の細砂粒、僅かに細礫・ 褐色鉱物粒を含む。やや軟 質。鈍い黄褐色。	手づくね土器。 胴部内外面調整。	
90-4	器台	26cm 覆土	7.2・—・— 口唇部～器受部 1/2		白～灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒・黒色鉱物粒を含む。 普通。浅黄褐色、明赤褐色。	口縁部横ナデ。器受部内面磨ナデ。	器受部内 外面丹彩
90-5	石片 (扇形)	覆土	(縦)8.3・(横)4.3・(厚)1.3・(重量)57.3g (石質)黒色頁岩			表面に磨面を残す。調整刻層は砥目のみ施される。 刃部は弧状となる。裏面に使用痕がみられる。	
90-6	閉器	覆土	(縦)8.2・(横)5.7・(厚)1.8・(重量)73.7g (石質)黒色頁岩			表面に磨面を残す。表面には両側からの刻層が加 えられる。微細な刻層は下端に集中する。裏面 には調整加工が行われていない。	
91-1	弥生 甕	覆土	(12.0)・—・— 口縁部～頸部1/ 4		白色の細砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色、黄灰色。	口縁部大きく反外し、平坦面を持つ。 口縁部に波状文、頸部に簾状文・波状文 を施す。	
1号内 周-1	弥生 土付甕	溝内 覆土	9.6・12.6・6.7 実形		白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 やや硬質。外面浅黄褐色、 内面橙色。	口縁部から胴上位に波状文、頸部に簾 状文が高る。内外面磨き。胴部内面 磨ナデ。	
1号内 周-2	弥生 甕	覆土	18.6・—・— 口縁部～胴部中 位1/2		多量の白～灰色の細砂粒、 僅かの粗砂粒、金部母、角 閃石、褐色細砂粒を含む。 普通。灰白色。	折返し口縁。頸部から胴部に簾状文、 波状文、4ヶ所に2個ずつの円形浮文。 内外面磨き、胴部内面磨ナデ。	
1号内 周-3	弥生 甕	覆土	19.5・20.6・7.1 口縁部～胴部一 部欠損		白～灰色、褐色、黒色の細・ 粗砂粒、僅かに細礫、金部 母を含む。普通。黄褐色。	折返し口縁。頸部から胴部に簾状文、 波状文、4ヶ所に2個ずつの円形浮文。 内外面磨き、内面下位ハケ目。	
1号方 周-1	弥生 埴	溝内 26cm	10.0・7.0・— 実形		白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 やや硬質。鈍い橙色、黒色。	口縁部は緩やかに内湾する。外面口縁 部粗い磨き、底部磨ナデ。内面口縁 部磨き、底部磨ナデ。	
1号方 周-2	弥生 埴	溝内 26cm	8.6・12.5・— 実形		白色の細・粗砂粒を含む。 普通。浅黄褐色。	口唇部でやや内湾する。口縁部外面ハ ケ目後斜め方向の粗い磨き、内面斜め 方向の磨き。底部磨ナデ。	
1号方 周-3	土師器 甕	溝内 35cm	—・—・— (20.0) 胴部下位～底部 1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。外面黄褐色、内面黒 褐色。	器内は厚手である。外面腹方向のハケ 目後粗い磨きが施される。内面ハケ 目。	
2号土 坑-1	弥生 高杯	覆土	15.7・12.4・9.0 底部・口縁部一 部欠損		白～灰色の細・粗砂粒、細礫 を僅かに含む。 やや硬質。鈍い橙色、黒褐 色。	坏部は直線的に開く。外面坏部横方向、 脚部縦方向の磨き。内面坏部横方向 の磨き、脚部磨ナデ。	
2号土 坑-2	弥生 甕	覆土	—・—・— 5.0 口縁部欠損		白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 硬質。灰白色、黒色。	胴部に波状文が施される。胴部中部横 方向に丁寧な磨き、下位腹方向の磨 き。内面斜方向の磨き。	

平安時代(1)

* 質量中の()内は推定値。

遺物 番号	種類 形態	出土 位置	法 (口徑・器高・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
1-1	須恵器 杯	覆土	12.4・3.7・6.7 口縁部1/4欠損	白～灰色の細砂粒。僅かに 細砂、中砂を含む。還元焰。 灰色。	体部下位は窄まり、口縁部は僅かに外 反する。 底部右回転糸切り未調整。	
1-2	須恵器 杯	床面	(11.8)・3.8・(6.8) 1/4	白色細砂粒。僅かに細砂を 含む。 還元焰。灰白色。	体部は丸味を持って開き。下位は窄ま る。 底部右回転糸切り未調整。	
1-3	須恵器 杯	床直	11.5・4.0・6.8 口縁部一部欠損	白色細砂粒。僅かに細砂、 黒色鉱物粒を含む。還元焰 (酸化硫黄味)。鈍い黄褐色。	体部は丸味を持って開く。底部左回転 糸切り未調整。	
1-4	須恵器 碗	床面	(11.1)・5.4・(6.8) 1/4	白色細砂粒。僅かに粗砂粒 を含む。 還元焰。灰白色。	体部は丸味を持って開く。底部は回転 糸切り後、高台貼付け時回転ナデ。	
1-5	須恵器 鉢	貯穴 上部	23.3・18.2・13.8 口縁部1/4欠損	白～灰色の細砂粒。少量の 細砂、黒色鉱物粒を含む。 還元焰。灰白色。	体部は口縁調整、内面底部立ち上がり 寛ナデ。 底部断面の割箸著しいが寛ナデか。	
1-6	土師器 甕	覆土	(20.2)・一一一 口縁部1/3	白～灰色の細砂粒。僅かに 細砂を含む。 普通。褐色。鈍い褐色。	口縁部は緩やかに外反する。 外面胴部上位は横方向寛ナデ。内面は 横寛ナデ。	
1-7	土師器 甕	覆土	(19.9)・一一一 口縁部1/4	白～灰色の細砂粒。僅かに 粗砂粒を含む。 やや軟質。褐色。	口縁部は「コ」字状を呈す。外面胴 部上位は横方向寛ナデ。内面横寛ナデ。	
2-1	須恵器 杯	甕内	(11.7)・一一一 口縁部～体部1/4	白～灰色の細砂粒を含む。 素地は赤。 還元焰(黒し気味)。暗灰色。	体部丸味を持って開く。口縁調整。	
2-2	土師器 甕	覆土	(28.0)・一一一 口縁部～頸部1/10	白～灰色の細砂粒。僅かに 赤褐色粒を含む。 普通。赤褐色。	口縁部は外反する。口縁部横ナデ、指 頭直あり。外面胴上位は横方向寛ナデ。 内面寛ナデ。	
2-3	土師器 甕	覆土	一一一・5.0 胴部下位～底部 3/4	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。赤褐色。鈍い赤褐色、 褐色。	胴部直線的に開く。外面腹方向に寛ナ デ。底部寛ナデ。内面寛ナデ。胴中位 に接合痕。	
2-4	敲・擦石	床直	(縦)10.3・(横)11.9・(厚)2.4・(重量)455.0g (石質)灰色安山岩		扁平磨削縁が敲打により剥離する。表面平坦面は 極めて細かい溝状の磨痕が2、3方向に認められ る。	
3-1	土師器 甕	甕内	(20.0)・一一一 口縁部～胴部上 位1/5	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。褐色。	胴部はやや丸味を持つ。口縁部横ナデ、 頸部指押え。胴部外面寛ナデ、内面寛 ナデ。	
3-2	土師器 甕	覆土	(19.0)・一一一 口縁部1/2	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 やや硬質。鈍い褐色。	口縁部は「コ」字状を呈す。口縁部 横ナデ。体部、頸部指押えあり。体部 外面寛ナデ、内面寛ナデ。	
3-3	土師器 甕	覆土	(20.2)・一一一 口縁部1/4	白～灰色の細砂粒を含む。 やや硬質。鈍い褐色。	口縁部は僅かに外反する。口縁部横ナ デ。体部外面寛ナデ、内面寛ナデ。	
3-4	土師器 甕	貯穴 覆土	(19.0)・一一一 口縁部1/3	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 やや硬質。鈍い褐色。	口縁部に強いナデによる沈線が通る。 体部外面寛ナデ、内面寛ナデ。	
3-5	須恵器 甕	覆土	一一一 胴部破片	白～灰色の細・粗砂粒。僅かに 細砂、褐色鉱物粒を含む。 還元焰。堅緻。灰白色。	胴部外面平行叩き、内面背割波の当て 具痕。	
3-6	須恵器 甕	覆土	一一一 胴部破片	白～灰色の細・粗砂粒。僅かに 細砂、褐色鉱物粒を含む。 還元焰。堅緻。灰白色。	胴部外面平行叩き、内面背割波の当て 具痕。	5と同一 個体か
3-7	敲石	覆土	(縦)11.9・(横)3.0・(厚)2.5・(重量)200.0g (石質)デイサイト質凝灰岩		棒状磨削縁両端及び一側縁が敲打される。	
3-8	敲・擦石	覆土	(縦)12.2・(横)3.1・(厚)2.3・(重量)260.0g (石質)粗粒安山岩		扁平磨削の長軸両端及び側縁を帯状に敲打にする。 表面平坦面にわずかな磨痕が認められる。	
3-9	敲石	覆土	(縦)25.3・(横)6.7・(厚)5.8・(重量)1770.0g (石質)粗粒安山岩		柱状磨削の長軸両端と一側縁及び後が敲打される。 ほぼ中央で折れる。	
3-10	敲石	床直	(縦)20.1・(横)4.7・(厚)4.3・(重量)1060.0g (石質)粗粒安山岩		柱状磨削の長軸両端を敲打する。	

平安時代(2)

遺物 番号	種 類	出土 位置	法 (口徑・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
3-11	台石?	床面	(縦)35.4・(横)32.2・(厚)9.9・(重量)17700.0g (石質)石英閃緑岩		大型の扁平円盤である。特に目立つ擦、磨痕、凹痕は認められない。	
3-12	石製品 紡織車	床直	(上径)37.5・(下径)47.5・(厚)12.5・(孔径)0.9 (石質)蛇紋岩		台形状の断面形を呈する。穿孔は両面より行われる。裏面には研磨前の刺痕が残る。研磨痕は表裏面に同心円状に認められる。	
4-1	須恵器	甕内	13.0・5.3・5.5 3/4	白～灰色の細・粗砂粒、粗砂、僅かに4mm～10mmの塊を含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い褐色。	全体的に軟質で、器内は厚手。高台部は使用の為に削られている。底部は粘土を詰めた補修痕がある。	
4-2	須恵器 埴	甕内	(14.0)・(5.1)・ (6.0) 1/4割	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。褐色。	体部は直線的に開く。底部は未切り後、周辺は高台貼付時の回転ナデ。	
4-3	須恵器 甕?	覆土	(17.6)・―― 口縁部破片	白～灰色の細・粗砂粒、石英を少量含む。 還元焰。鈍い黄褐色、黒色。	口縁部が比較的に長く、やや開く。 押下の質の当たりが顕著である。	
4-4	土師器 器台	覆土	6.9・―― 器受部1/2	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに褐色細粒を含む。普通。 明黄褐色。	器受部内外面寛磨き。	
4-5	磁石	甕内	(縦)7.4・(横)5.9・(厚)2.1・(重量)140.0g (石質)粗粒安山岩		扁平盤の裏面が取打される。僅かであるが側縁(上位)も敲打される。	
4-6	磁石	覆土	(縦)5.0・(横)4.0・(厚)2.1・(重量)57.4g (石質)流紋岩		4面が使用される。このうち裏面と左側面には線状の擦痕が見られる。下位は欠損している。	
5-1	土師器 杯	覆土	12.3・3.4・8.0 元形	白～灰色の細砂粒を僅かに含む。 普通。鈍い褐色、黒褐色。	口縁部歪みあり。口縁部横ナデ。底部寛磨り。内面ヘナナデ。	内外面保 行着
5-2	須恵器 杯	覆土	12.6・3.6・6.3 3/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。やや軟質。鈍い黄褐色。	体部直線的に開く。内外面クロク調整。 底部左回転余切り未調整。	
5-3	須恵器 杯	覆土	(12.2)・3.6・(6.5) 1/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰白色。	体部は丸みを持って開く。 底部右回転余切り未調整。	
5-4	須恵器 埴	甕内	(14.1)・5.1・(8.5) 1/4	白～灰色の細・粗砂粒を多く含む。 還元焰。堅緻。黄灰色。	クロク目顕著。底部回転余切り未調整。 高台貼付。	
5-5	須恵器 埴	覆土	――・5.6 2/3	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。酸化焰。褐色。	体部は膨らみを持つ。底部右回転余切り調整後、周辺は高台貼付による回転ナデ。	
5-6	須恵器 皿	覆土	(12.8)・3.0・6.6 3/5	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。やや軟質。褐灰色。	口縁部外反する。底部回転余切り調整後、周辺は高台貼付による回転ナデ。	
5-7	須恵器 皿	覆土	――・径4.0 0 1/5	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	天井部回転寛磨り。紐は中央に膨らみを持つ。	
5-8	須恵器 鉢	甕内	(14.0)・―― 口縁部1/3	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。堅緻。灰色。	口縁部が上につまみ上げられ、縁帯を持つ。沈線が走る。	
5-9	土師器 鉢	覆土	(19.6)・(27.5)・ (4.6) 3/5	白～灰色の細・粗砂粒、角閃石を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部「コ」字状を呈す。口縁部横ナデ。頸部推押え。胴部外面寛磨り、内面寛ナデ。	内外面保 行着
5-10	土師器 鉢	覆土	(19.0)・―― 口縁部～胴部上 位1/2	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。暗褐色。	口縁部「コ」字状を呈す。口縁部横ナデ。紐作り痕あり。胴部外面上位寛磨り、内面寛ナデ。	
5-11	須恵器 鉢	覆土	――・―― 胴部下位1/2	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。堅緻。灰色。	外面胴部下位寛磨り。内外面に平行叩きあり。	

平安時代(3)

遺物番号	種類	出土位置	法 (口徑・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・構成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
6-1	須恵器 杯	覆土	12.8・4.0・5.2 1/2	白～灰色の細砂粒を多く、 粗砂粒・細粒を僅かに含む。 還元焰。軟質。灰白色、内 面黒色。	体部は丸みを持ち、口縁部は僅かに外 反する。 底部右回転糸切り後ナデ。内面立ち上 がりなだらか。	
6-2	須恵器 碗	覆土	14.0・5.4・6.6 口縁部一部欠損	白～灰色の粗砂粒を多く含 む。 還元焰。軟質。黄褐色。	底部右回転糸切り後、高台貼付け時回 転ナデ。体部外面はロクロ目順着、内 面はなだらか。	
6-3	須恵器 碗	覆土	13.5・5.1・5.6 口縁部・体部一 部欠損	灰～黒色の細粒・中粒を僅 かに含む。 還元焰。軟質。灰黄褐色。	体部は丸みを持ち、口縁部はなだらかに 外反する。 高台は外反し、粗雑に貼られている。	
6-4	土師器 羽釜	覆土	一・一・9.2 胴部下位～底部 小片	白～灰色の粗砂粒・細粒を 含む。 やや軟質。浅灰色、淡黄色。	胴部上方向直削り、単位は大きい。 底部は調整不明瞭だがナデか。	
6-5	鉄製品 鉄片	覆土	(長)7.7・(幅)6.6・(厚)1.6			
6-6	鉄製品 鉄片	覆土	(長)3.3・(幅)3.1・(厚)1.3			
7-1	須恵器 杯	竈内	13.2・4.4・5.6 3/4	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。鈍い黄色、黒褐色。	口縁部外反気味で、体部直線的に開く。 底部右回転糸切り、未調整。内面直ナ デ。	
7-2	須恵器 碗	床直	13.9・5.3・6.6 口縁部一部欠損	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰色。	口縁部外反気味で、体部直線的に開く。 底部回転糸切り後、高台貼付。内面直 ナデ。	
7-3	須恵器 碗	竈内	13.4・5.4・3.7 口縁部一部欠損	白～灰色の細砂粒、細粒を 多く含む。 還元焰。灰色。	体部直線的に開く。底部回転糸切り後、 高台貼付。内面直ナデ。	
7-4	古石	覆土	(縦)20.4・(横)14.9・(厚)5.3・(重量)2300.0g (石質)粗粒安山岩		偏平角礫。表面僅かに磨痕が見られる。磨削縁 の創痕は自然的なものと思われる。	
8-1	須恵器 杯	覆土	(13.1)・3.4・(5.6) 口縁部～底部1/ 3	白～灰色の細粒を少し、5 mm位の粒を僅かに含む。還 元焰。やや軟質。灰白色。	体部に丸味をもち、口縁部はゆるく外 反する。体部は内湾、口縁部肥厚。底 部右回転糸切り。	
8-2	須恵器 杯	覆土	14.0・4.6・4.0 1/2	白～灰色の細砂粒、僅かに 細粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。暗灰 黄色。	内面底部から体部はなだらかに立ち上 がり、口縁部は外反。底部右回転糸切 り未調整。	内面に墨書 有[南院]
8-3	灰輪陶器 碗	覆土	(15.7)・5.4・(6.5) 口縁部～底部1/ 5	白～灰色の細砂粒を僅かに 含む。還元焰。灰白色。釉 は灰白色、灰オリーブ色。	口縁部はやや外反し、底部はナデ。高 台は弱い三ヶ月灰輪状を呈す。釉は刷 毛で、外面、内面底部まで施釉。	
8-4	須恵器 皿	覆土	(13.0)・2.3・(6.8) 口縁部～底部1/ 4	白～灰色の細砂粒、僅かに 細粒を含む。還元焰。軟質。 淡黄色、一部黒色。	底部は回転糸切り後、高台貼付け。内 外面ともロクロナデを施す。釉面やや 厚手。	内面に墨書 有[南院]
8-5	須恵器 皿	20cm 覆土	(14.0)・一・一・ 口縁部～底部1/ 4	黒色鉱物粒を含む。還元焰 (酸化焰気味)。灰黄色。内 面一部黒色。	体部は大きく開き、口縁部は外反気味 である。外底は回転糸切り後、高台貼 付け。	
8-6	須恵器 小型壺	竈内	一・一・8.7 底部～胴部下位 1/2	白～灰色の細粒、5mm大の 粒を少し含む。 還元焰。灰色。	平底。外面下部は撚削りを施す。 粘土紐作り痕有り。	
8-7	須恵器 小型壺	覆土	(11.9)・17.3・8.8 口縁部～底部1/ 2弱	白～灰色の細砂粒、僅かに 5mm以上の粒を含む。還元 焰。灰白色。	口縁部は外反し、胴部上位に最大径を 持つ。胴部下位は回転撚削り。底部は 調整不明瞭、平底。	
8-8	須恵器 羽釜	覆土	(20.0)・一・一・ 口縁部～胴部上 位小片	白～灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒・細粒・褐色鉱物粒を 含む。還元焰(酸化焰気味)。 淡黄色。	胴は断面三角形。付け方は粗雑である。 胴部粗い撚削り。	
8-9	土製品 紡車	覆土	(長径)2.2・(短径)1.9・(厚)0.6・(孔径)0.25		小型で薄い。断面台形状。中心の孔は上から下へ 穿つ。成形時の指押え痕が明瞭。	

平安時代(4)

遺物 番号	器 種 類	出土 位置	法 (口・底・高・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
9-1	須恵器 杯	竈内	(13.5)・4.9・6.6 2/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 酸化焰。鈍い黄褐色。	器内厚手。体部は直線的に開く。ロクロ目顯著。 底部右回転糸切り未調整。	
9-2	須恵器 杯	竈内	(14.0)・5.5・(7.4) 1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 酸化焰。鈍い黄褐色。	器内厚手。体部は直線的に開く。ロクロ目顯著。 底部右回転糸切り未調整。	
9-3	須恵器 盃	竈内	(30.6)・―― 口縁部～胴上部 1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰白色。	胴部外面は平行叩き後ナデ消し。内面は素文の当て具による凹凸があるがナデられている。	
9-4	須恵器 盃	床直	――・18.2 胴部下位～底部		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。堅緻。灰色。	外面平行叩きあり。胴部下位置削り。 底部寛ナデ。内面素文の当て具がみられるが、ナデ消している。	
9-5	殿石	覆土	(縦)7.6・(横)9.2・(厚)3.1・(重量)160.0g (石質)粗粒安山岩			個半角縁の縁部が敲打により剥離する。	
10-1	須恵器 羽盃?	覆土	――・(7.0) 胴部～底部1/3		白～灰色の細砂粒。僅かに細線を含む。 還元焰(酸化焰気味)。浅黄褐色。	底部から胴部は、丸みをもって立ち上がり。底部面が荒れている為調整は不明。平底。	
10-2	須恵器 羽盃	竈内	(16.5)・―― 口縁部～胴部1/3		白～灰色の細砂粒。少し細線を含む。やや軟質。浅黄褐色。口縁部内外面一部黒色。	胴部上方向への寛削りで単位は細かい。 縁は粗粒に付けられ、歪みがある。	
11-1	須恵器 杯	覆土	(13.1)・4.3・6.5 1/2		白～灰色の細・粗砂粒。僅かに細線を含む。 還元焰。やや軟質。灰白色。	外底径より内底径が大きい。 底部左回転糸切り未調整。	外底底部に 集積(仁)
11-2	須恵器 杯	覆土	――・7.0 体部下位～底部 1/2		少量の白色細・粗砂粒・黒色鉱物粒。僅かな褐色鉱物粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。褐色。	底部回転糸切り未調整。	
11-3	須恵器 杯	覆土	(13.8)・5.0・(6.5) 1/5		白色の細・粗砂粒。僅かに褐色鉱物粒を含む。還元焰。 灰色、浅灰色。	体部は下位に丸みをもって開く。 底部回転糸切り。	
11-4	須恵器 杯	竈内	(12.8)・3.8・(6.5) 1/4		少量の白～灰色の細・粗砂粒。僅かに細線を含む。還元焰。灰色、灰白色。	体部は直線的に開く。 底部右回転糸切り未調整。	
11-5	須恵器 杯	床直	16.0・5.7・7.7 3/4		白～灰色の細・粗砂粒。僅かに5mm大の黒・褐色鉱物粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い褐色。	底部右回転糸切り未調整。焼成前に置き「十」。器内は厚い。	
11-6	土師器 小盃	床直	12.5・―― 口縁～胴上位は 半完成		白色の細砂粒。僅かに角閃石を含む。 普通。鈍い褐色。褐色。	胴部内外面に接合痕あり。口縁部から頸部横ナデ。胴部上位横方向寛削り、内面横寛ナデ。	
11-7	土師器 盃	竈内	――・―― 胴部～胴部中心 1/4		白～灰色の細砂粒。僅かに粗砂粒・角閃石を含む。普通。鈍い黄褐色。鈍い赤褐色。	頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。横ナデ。胴部に接合痕あり。胴部外面寛削り、内面寛ナデ。	
11-8	土師器 盃	竈内	――・4.3 胴部下位～底部 3/4		白～灰色の細砂粒。角閃石。少しの褐色鉱物粒を含む。普通。鈍い褐色。	外面胴部下位置削り。内面寛ナデ。 底部不定方向寛削り。	
11-9	須恵器 盃	床直	(24.0)・―― 口縁部～頸部1/4		白色の細砂粒。僅かに粗砂粒を含む。 還元焰。堅緻。灰色、灰黄色。	口縁部は外反し、口縁部に一条の突帯を巡らす。 ロクロ整形。	
11-10	殿・摩石	覆土	(縦)15.1・(横)7.3・(厚)5.6・(重量)725.0g (石質)粗粒安山岩			角柱状の襖の端部と破断面の一部が敲打される。表裏の一部に磨痕、裏面には線状の磨痕を認める。 焼けている。	
12-1	須恵器 杯	覆土	12.4・3.8・5.8 口縁部1/4欠損		白～灰色の細砂粒を少し。細線を僅かに含む。還元焰。 軟質。浅灰色、大半黒色化。	体部外面ロクロ目顯著。内面はなだらかな。口縁部はやや外反する。底部右回転糸切り後未調整。	

平安時代(5)

遺物 番号	種類 器名	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
12-2	須恵器 埴	床直	14.1・5.4・6.4 3/4	白〜灰色の細砂、5mm大の 礫を少し含む。還元焰。や や軟質。灰白色、一部黒色 化。	体部はやや丸みをもつて開く。底部回 転糸切り後、周辺は高台貼付け時の回 転ナデ。	
12-3	須恵器 埴	覆土	(14.4)・4.5・(6. 8) 1/3	白〜灰色の細砂粒を多く、 僅かに細礫を含む。還元焰。 軟質。淡黄色、一部黒色化。	体部上位に膨らみをもち、口縁部は外 反し肥厚する。底部右回転糸切り後、 高台貼付け時の回転ナデ。	内面底部に 「通割午」
12-4	須恵器 埴	床直	一一・6.6 体部下位〜底部	白〜灰色の細砂を少量含 む。還元焰(酸化焰気味)。 内面褐色、外面鈍い褐色。	体部下位に丸みをもつ。底部は高台貼 付け時の回転ナデで、粗雑な作りであ る。	
12-5	灰釉陶器 埴	覆土	(16.0)・一一・ 口縁部〜底部小 片	僅かに白色の細砂粒・黒色 鉱物粒を含む。 還元焰。灰色。釉は灰色。	体部に三条の浅い沈線を巡らす。 施釉は不明。高台付。	灰釉
12-6	土師器 壺	床直	(18.0)・一一・ 口縁部〜胴部小 片	白〜灰色の粗砂粒を多く、 細礫を僅かに含む。還元焰。 軟質。鈍い黄褐色。	口縁部は「く」の字状を呈す。 胴部上方直削り、単位は大きい。	
12-7	土師器 小壺	覆土	(11.9)・一一・ 口縁部〜胴部上 位小片	白〜灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒・細礫を含む。やや軟 質。淡黄色。	口縁部は短く外反し、横ナデ。 胴部上位横方向直削り。器肉は薄い。	
12-8	須恵器 羽釜	竈内	(16.9)・一一・ 口縁部〜胴部小 片	白〜灰色の細砂粒を多く、 細礫を僅かに含む。還元焰。 軟質。灰白色。	筒の断面は三角形、比較的丁寧な作り である。 胴部上方直削り、単位は粗い。	
12-9	灰釉陶器 長頸瓶	覆土	一一・9.9 胴部下位〜底部	白〜灰色の細砂粒・黒色 鉱物粒を少し含む。 還元焰。灰色。釉はオリ ブグリーン。	胴部下位は回転直削り。底部回転直ナ デ。 調整は丁寧。	灰釉
13-1	土師器 壺	床直	一一・6.1 胴部下位〜底部	白〜灰色の粗砂粒、僅かな 細礫・中礫を含む。やや軟 質。鈍い黄褐色。	平底。外面胴部縦方向直削り。 内面胴下半横方向直削りナデ。	
13-2	灰釉陶器 長頸瓶	床直	一一・(10.1) 胴部下位〜底部 3/4	僅かに白〜灰色の細砂粒を 含む。素地はやや粗い。還 元焰。灰色。	胴部はやや丸みをもつ。 胴部下位に回転直削り。底部は回転ナ デ。	重投? 灰釉
14-1	須恵器 埴	覆土	(12.0)・4.6・5.7 1/4	白〜灰色の細砂粒、僅かに 細礫を含む。 還元焰。鈍い黄褐色。	器肉は厚手。大部クロロ目が顕著。 底部右回転糸切り未調整。	
14-2	須恵器 羽釜	覆土	(19.0)・一一・ 口縁部〜胴部上 位1/4	白〜灰色の細砂粒を含む。 酸化焰気味。黒褐色。	外面上方に直削り。単位はやや細い。	
14-3	須恵器 羽釜	覆土	一一・9.5 胴部下位〜底部	白〜灰色の細砂粒、僅かに 細礫を含む。 酸化焰気味。外面鈍い黄褐 色、内面黒褐色。	胴部外面上方への直削り、内面横ナ デ。底部ナデ。	
14-4	須恵器 壺	覆土	一一・ 胴部破片	白〜灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒・細礫・7mm大の礫を 含む。還元焰。灰白色、灰 色。	胴部外面平行叩き、内面素地の当て具 痕。	
14-5	須恵器 壺	覆土	一一・ 胴部破片	白〜灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒を含む。 還元焰。灰色、灰白色。	胴部外面平行叩き後、ナデ消している。 内面ナデ。	
15-1	須恵器 埴	覆土	11.6・4.0・6.8 ほぼ完形	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰色。	体部直線的に開く。 底部右回転糸切り未調整。	
15-2	須恵器 埴	床直	11.8・4.2・6.2 口縁部一部欠損	白〜灰色の細砂粒、僅かに 赤褐色粒を含む。 還元焰。外面黒色。内面鈍 い黄褐色。	体部直線的に開く。 底部右回転糸切り未調整。	
15-3	須恵器 埴	覆土	11.6・3.8・6.3 ほぼ完形	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰色。	体部直線的に開く。 底部右回転糸切り未調整。	
15-4	須恵器 埴	覆土	12.5・3.9・6.3 3/4	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰。外面暗灰色。内面 黒褐色、黄褐色。	体部直線的に開き、口縁部僅かに外反 する。 底部左回転糸切り未調整。	

平安時代(6)

遺物 番号	種類	出土 位置	法 (口・底・高・底厚) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
15-5	須恵器 環	覆土	(12.5)・4.0・7.3 1/2	白〜灰色の細砂粒、僅かに 雲母を含む。還元焰。浅黄色。	体部やや丸みをもって開き、口縁部外 反する。 底部回転糸切り未調整。	
15-6	須恵器 埴	床直	11.3・5.9・6.7 口縁部一部欠損	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰黄色。	体部直線的に開く。 底部回転糸切り後、高台貼付け。	
15-7	土師器 埴	覆土	(20.2)・--- 口縁部〜体部上 位1/4	白〜灰色の細砂粒、僅かに 赤褐色粒を含む。 普通。明褐色。	口縁部は上半部が開く弱い「コ」字 状を呈す。 口縁部中程に指痕が顕著。	
15-8	土師器 埴	覆土	(19.8)・--- 口縁部〜胴部上 位1/4	白〜灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部は緩やかに外反する。口縁部狭 ナデ。胴部外面横方向彫削り、内面寛 ナデ。	
15-9	土師器 埴	覆土	---・4.0 胴部下位〜底部 1/2	白〜灰色の細砂粒、僅かに 赤褐色粒を含む。 普通。外面黒褐色、内面橙 色。	胴部下位斜め下方向削削り。 底部寛削り。内面寛ナデ。	
15-10	須恵器 埴	床直	---・--- 胴部破片	白〜灰色の細砂粒、僅かに 細砂・7mm大の緑・褐色鉱物 粒を含む。還元焰。灰色、 鈍い黄色。	外面胴部粗い平行叩き。内面上位粗か い寛ナデ。下位葉文の当て具。	
15-11	灰・礫石	覆土	(版)13.5・(横)12.4・(厚)3.3・(重量)1040.0g (石質)灰色安山岩		扁平角礫の端部が敲打のため大きく割離する。敲 打は左側縁から下端に及ぶ微細な節痕が全面に認 められる。	
15-12	礫石	床直	(版)14.0・(横)15.2・(厚)3.7・(重量)800.0g (石質)粗粒安山岩		扁平礫の側面が敲打される。割離は図の下位及び 上位から右側縁にかけて集中する。なお裏面の大 割離は使用中の欠損と思われる。	
16-1	須恵器 環	甕内	12.0・3.6・5.8 3/4	白〜灰色の細・粗砂粒・石英 粗砂粒を僅かに含む。還元 焰。軟質。外面黒褐色、内 面鈍い褐色。	体部は直線的に開き、口唇部は僅かに 外反する。 外面クロロ目顕著。底部左回転糸切り 未調整。	
16-2	須恵器 環	覆土	14.3・5.2・7.0 3/4	白〜灰色の細・粗砂粒・石英 の細砂を少量含む。還元焰。 やや軟質。灰白色。	体部は丸みをもって開く。 クロロ調整。左回転糸切り未調整。	
16-3	須恵器 環	覆土	(12.2)・4.1・6.0 1/4	白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。外面灰白色、内面 褐色。	体部は直線的に開き、口縁部やや丸み をもつ。 クロロ調整。底部左回転糸切り未調整。	
16-4	須恵器 環	覆土	(12.0)・3.4・6.5 1/2強	白〜灰色の細・粗砂粒、5 〜12mmの礫を僅かに含む。 還元焰(酸化焰気味)。黒褐 色。	器内はやや厚手である。体部は直線的 に開く。底部右回転糸切り未調整。	
16-5	須恵器 環	覆土	(12.0)・3.4・6.6 1/4	白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。褐色。	体部は直線的に開き、口唇部は僅かに 外反する。 クロロ調整。底部左回転糸切り未調整。	
16-6	須恵器 環	覆土	---・6.5 底部3/4	白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。 外面黒色、内面鈍い褐色。	クロロ調整。底部は左回転糸切り未調 整。	外周底部に 差目「乙」
16-7	須恵器 埴	甕内	---・9.0 1/2	白〜灰色の細・粗砂粒・細礫 を含む。還元焰。鈍い褐色。	体部は直線的に開く。クロロ目顕著。 底部右回転糸切り後、周辺は高台貼付 け時の回転ナデ。	
16-8	土師器 埴	甕内	(20.0)・--- 口縁部〜胴部1/ 2	白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。褐色。	口縁部は比較的に開く。口縁部狭ナ デ。指痕あり胴部外面横方向の寛削 り。内面寛ナデ。粗い彫削り。	
16-9	須恵器 羽釜	覆土	(30.0)・--- 破片	白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。 外面褐色、内面黒褐色。	胴部上位は直線的に開き、口縁部外反 する。 胴上位に平行叩き痕あり。脚が付けら れる。	
16-10	須恵器 甕	甕内	---・(14.0) 胴部〜底部1/5	白〜灰色の細・粗砂粒・石英 の粗砂粒を僅かに含む。還 元焰(酸化焰気味)。黒色、 鈍い黄色。	底部から直線的に開く。中央部に脚を もち、底部に一孔を穿つ。外面胴部上 位平行叩き痕、下位寛削り。	

平安時代(7)

遺物 番号	種類	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
16-11	蔵・燻石	覆土	(縦)13.0・(横)15.3・(厚)2.5・(重量)350.0g			機長軸両端が敲打される。燻石は表面に僅かに見られる。	
16-12	蔵・燻石	床直	(縦)18.7・(横)7.1・(厚)4.0・(重量)730.0g		(石質)粗粒安山岩	三角柱状の櫓の先端部と壁が敲打される。裏面の左側縁には割離が集中する。	
16-13	蔵石	床直	(縦)9.5・(横)8.6・(厚)5.1・(重量)650.0g		(石質)粗粒安山岩	内縁周囲及び裏面が敲打される。特に周囲の敲打は著しい。	
16-14	蔵・燻石	床直	(縦)10.9・(横)9.9・(厚)4.3・(重量)650.0g		(石質)粗粒安山岩	垂円縁の周囲を帯状に敲打する。裏面には数珠の痕跡が認められる。	
16-15	台石	覆土	(縦)19.1・(横)17.0・(厚)6.5・(重量)3170.0g		(石質)粗粒安山岩	僅かに凹直が残される。焼けている。図の下から右にかけて大きく欠損する。	
16-16	鉄製品 鏝	覆土	(長)(7.7)・(幅)3.9・(厚)0.3・(重量)25.18g			耳部側を残し、刃先側を欠損する。身巾のある大型鏝片。巾は刃先側に狭くなる。	
17-1	土師器 杯	床直	(11.6)・3.0・(8.0) 1/4		白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い赤褐色、黒褐色。	体部は直線的に開く。口縁部横ナデ。 体部指頭痕あり底部寛削り。内面寛ナデ。	
17-2	須恵器 杯	覆土	(12.0)・(3.6)・ (6.5) 破片		白～灰色の細・粗砂粒、石英の細粒を僅かに含む。還元焰(酸化焙気味)。鈍い黄褐色。	体部は直線的に開く。外面ロクロ調整痕明瞭。 底部回転糸切り未調整。	
17-3	須恵器 蓋	覆土	(15.9)・―― 破片		白～灰色、褐色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰黄色。	口縁部は垂直気味に折れ曲がる。 ロクロ調整。	
17-4	須恵器 平瓶	25cm 覆土	3.3・6.5・8.1 完形		白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰色。	体部、底部に焼成時の裂が入る。 手持ち寛削り。	
17-5	土師器 壺	覆土	(19.8)・―― 口縁部～胴部上 位1/4		白～灰色の細砂粒を含む。 僅かに雪母を含む。鈍い褐色。	口縁部「コ」字状に開く。横ナデ。 紐作り痕あり。胴上部寛削り。	
17-6	須恵器 鉢?	覆土	――(19.2) 体部下位～底部 1/4		白～灰色の細砂粒、僅かに雪母を含む。 還元焰。灰黄色。	外面体部平行印きをナデ消している。 下位寛削り。内面寛ナデ。紐作り痕あり。 底部寛削り。	
18-1	須恵器 杯	甕内	12.9・3.9・6.2 3/4		白～灰色の細・粗砂粒を多く含む。細粒を僅かに含む。還元焰。灰色、鈍い黄色。	体部は直線的に開く。 底部左回転糸切り未調整。	外周体部に 磨削[三]
18-2	須恵器 碗	甕内	(16.0)・―― 1/4		白～灰色の細砂粒を多く含む。 還元焰。灰色。	器内はやや厚手である。体部はロクロ目調整。 底部回転糸切り未調整。高台貼付け。	
18-3	土師器 壺	床直	20.7・26.9・4.2 ほぼ完形		白～灰色の粗砂粒を多く含む。 普通。明赤褐色、鈍い赤褐色。	「コ」字状口縁を呈す。口縁部から頸部にかけて横ナデ。指頭痕あり。胴部外面寛削り、内面寛ナデ。	
18-4	土師器 壺	床直	19.6・―― 2/3底部欠損		白～灰色の粗砂粒を多く含む。 普通。鈍い褐色、黒褐色。	「コ」字状口縁を呈す。口縁部横ナデ。外面胴上部横方向、下部は縦方向の寛削り。内面寛ナデ。	
18-5	土師器 台付甕	床直	12.5・16.8・8.6 4/5		白～灰色の粗砂粒を多く含む。 普通。暗赤褐色。	器内は薄手。口縁部から頸部にかけて横ナデ。指頭痕あり。外面胴部寛削り、脚部横ナデ。内面寛ナデ。	
19-1	須恵器 杯	覆土	(12.0)・6.0・4.0 1/3		白～灰色の細・粗砂粒、5～8mmの礫を含む。 還元焰。灰白色、黒褐色。	体部は直線的に開く。 底部は左回転糸切り未調整。	
19-2	須恵器 碗	床直	(15.0)・6.2・6.8 1/2弱		白～灰色の細・粗砂粒、細礫を含む。 還元焰。褐灰色。	体部は丸みをもって開く。底部は左回転糸切り後、周辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
19-3	須恵器 碗	土坑 内	――8.4 底部のみ		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰白色。	底部右回転糸切り後、周辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
19-4	須恵器 蓋	覆土	――・―― 蓋径(3.8) 蓋～天井部小片		白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細礫を含む。還元焰(酸化焙気味)。褐色、鈍い黄褐色。	蓋は周辺部が輪状になり、中央部が突出する。 内面中央部に「人」字の寛痕あり。	

平安時代(8)

遺物番号	種類	出土位置	法 (口径・底径・底厚) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
19-5	須恵器 壺	甕内	一・一・一 胴部破片		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰黄色。	胴部中央に突帯が比較的小く、しっかり付けられる。突帯部に一孔を穿つ。 外面平行叩き。ナデ。	
21-1	須恵器 杯	甕土	11.5・3.8・6.5 4/5		白～灰色の細・粗砂粒、4～5mmの礫を僅かに含む。 還元焰。やや軟質。明褐色。	体部はやや丸みをもって開く。内外面口縁調整。底部は右回転糸切り未調整。	
21-2	須恵器 杯	甕内	11.7・3.5・6.4 4/5		白色の細・粗砂粒、細礫を僅かに含む。 還元焰。鈍い褐色、黒褐色。	口縁部は僅かに外反する。体部内外面口縁調整。底部は右回転糸切り未調整。	
21-3	須恵器 杯	甕内 覆土	13.0・4.2・6.5 1/2		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。やや軟質。鈍い褐色、黒色。	体部はやや丸みをもち、口唇部は外反。体部内外面口縁調整。底部は右回転糸切り未調整。	
21-4	須恵器 杯	甕土	(11.5)・3.4・(7.0) 1/4割		白～灰色の細・粗砂粒、5～7mmの礫を僅かに含む。 還元焰。軟質。黒褐色、鈍い黄褐色。	体部は直線的に開く。内外面口縁調整。底部は左回転糸切り未調整。	
21-5	須恵器 杯	甕土	(11.0)・3.4・6.0 1/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。黒色。	口縁部は僅かに外反する。内外面口縁調整。底部は右回転糸切り未調整。	
21-6	須恵器 杯	甕前 床直	(10.8)・一・一 口縁部～体部1/2割		白～灰色の細・粗砂粒、細礫、石英を僅かに含む。 還元焰。やや軟質。灰白色、灰黄色。	体部は丸みをもつ。 内外面口縁調整。	
21-7	土師器 壺	甕内	(20.0)・一・一 口縁部1/6		白～灰色の細砂粒、角閃石を僅かに含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部は、緩やかに外反する。横ナデ。体部外面直削り、内面直ナデ。	
21-8	須恵器 壺	床直	一・一・一・18.0 胴部下位～底部1/3		白～灰色の細・粗砂粒、細礫、石英を僅かに含む。 還元焰。外面灰白色、内面鈍い黄褐色。	胴部外面縦な寛肩。内面指ナデ、指痕が明瞭。	
21-9	須恵器 壺	甕土	一・一・一 胴部破片		白～灰色の細砂粒、僅かに細礫を含む。 還元焰。堅緻。黒色、暗灰黄色。	胴部外面平行叩き、内面は丁寧にナデられている。	
21-10	磁石	床直	(縦)14.5・(横)5.8・(厚)5.1・(重量)860.0g (石質)粗粒安山岩			柱状顔の両端と一側縁が敲打される。特に図の下端には刻痕が集中する。	
21-11	台石	床直	(縦)13.5・(横)15.2・(厚)5.6・(重量)2140.9g (石質)粗粒安山岩			櫛状の線痕が表裏面に認められる。(鼠歯状か)	
21-12	磁・棒石	床直	(縦)13.5・(横)7.1・(厚)3.5・(重量)610.0g (石質)粗粒安山岩			偏平角棒下端に敲打による刻痕が認められる。さらに左側縁と表裏面に僅かに線痕が見られる。欠損する。	
22-1	土師器 杯	甕土	(12.3)・一・(8.0) 口縁部～底部小片		角閃石、少量の白色細砂粒を含む。 やや軟質。褐色。	体部は緩やかに丸みをもって開く。口縁部は横ナデ。体部外面ナデ、内面直ナデ。	
22-2	須恵器 杯	甕 覆土	(12.8)・4.1・5.9 口縁部～底部1/2割		白～灰色の細砂粒、黒色鉱物粒を少し含む。 還元焰。軟質。黄褐色、一部黒色。	体部に丸みをもち、口唇部は外反する。内面底部から体部はなだらかに立ち上がる。底部は右回転糸切り。	
22-3	須恵器 杯	甕 底面	13.5・5.2・6.8 口縁部1/3欠損		白～灰色の細砂粒、3～5mmの細礫を少し含む。 還元焰。軟質。鈍い黄褐色。	口縁部にやや歪みがあり、内面底部から体部の立ち上がりはなだらか。底部は右回転糸切り未調整。	
22-4	須恵器 壺	甕土	(13.6)・5.8・7.0 口縁部～底部1/4		白～灰色の細砂粒、黒色鉱物粒、僅かに白色細礫を含む。 還元焰。軟質。鈍い褐色。	口縁部は外反する。底部は右回転糸切り後、高台貼付け。高台端部は外側にめくられる。	

平安時代(9)

遺物番号	種類	出土位置	法 (口徑・高さ・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
22-5	須恵器 羽釜	甕 覆土	(16.9)・一・一・一 口縁部～胴部1/5		白～灰色の細砂粒、僅かに粗粒、5mm以上の礫を含む。還元焰。軟質。鈍い黄褐色。	胴部上方直筒形、単位は細い。筒は整円形をなす。	
22-6	須恵器 羽釜	甕内	(16.7)・一・一・一 口縁部～胴部1/4		白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒を含む。還元焰。軟質。淡黄色、一部明褐色。	体部上方直筒形、単位は粗い。筒は比較的整円形をなすが、粗粒に付いてある。	
22-7	須恵器 小型甕	甕土	一・一・一(8.2) 胴部下位～底部1/2		白～灰色の細砂粒を含む。還元焰。軟質。鈍い橙色。	外面胴部下位に右回転ナデ。内面は横方向のナデ。底部回転糸切り後、ナデ。	
23-1	須恵器 埴	甕内 覆土	(14.4)・5.7・7.2 2/3		白～灰色の細砂粒を含む。還元焰。鈍い黄褐色。	口縁部は外反気味。底部は回転糸切り後、周辺部は高台貼付け時の回転ナデ。	
23-2	須恵器 埴	甕土	一・一・一(10.6) 胴部下位～高台1/5		白～灰色の細砂粒を含む。還元焰。外面橙色。内面灰白色。	ロクロ調整。胴部外面下位は器面の磨耗により不規則だが、回転ナデ。	
23-3	須恵器 羽釜	甕土	(18.0)・一・一・一 口縁部～胴部上位1/4		白～灰色の細砂粒、僅かに礫を含む。酸化焰。鈍い橙色。	口縁部横ナデ。胴部外面上方に比較的大きい直筒形。内面紐作り痕あり。麓ナデ。	
23-4	須恵器 羽釜	甕内	(15.6)・一・一・一 口縁部～胴部上位1/5		白～灰色の細砂粒を含む。酸化焰。橙色。	口縁部横ナデ。胴部外面上方にやや細かい直筒形。内面麓ナデ。	
23-5	須恵器 甕	甕内	一・一・一 胴部破片		白～灰色の細砂粒を含む。還元焰。褐灰色、鈍い赤褐色。	ロクロ調整。	
23-6	磁石	甕土	(縦)8.2・(横)9.3・(厚)6.0 (石質)粗粒安山岩	635.0g		歪み角の縁が破打される。	
23-7	磁石	甕土	(縦)8.1・(横)7.2・(厚)3.8 (石質)粗粒安山岩	360.0g		偏平礫の平坦面に磨痕が見られる。	
24-1	須恵器 埴	甕土	(12.6)・4.0・(6.4) 口縁部～底部1/3		白～灰色の細砂粒、僅かに5mm位の白色礫を含む。還元焰。灰色。	体部は直線的に立ち上がる。底部左回転糸切り未調整。	
24-2	須恵器 埴	床直	12.8・4.1・5.3 口縁部一部欠損		白～灰色の粗砂粒、僅かに6mm位の灰色礫を含む。還元焰。灰色。	口縁部はやや深む。内面底部は輪強の丸が粘土塊が貼付けしてある。底部は右回転糸切り未調整。	
24-3	土師器 埴	甕土	(20.2)・一・一・一 口縁部～胴部上位1/4		微細な菅母片・角閃石・赤褐色粒を僅かに含む。普通。鈍い橙色。	口縁部は崩れた「コの字」状を呈す。胴部外面は横方向直筒形、内面は麓ナデ。	
24-4	須恵器 埴	甕土	一・一・一 胴部破片		白色の細砂粒、僅かに粗砂粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。浅黄色。	胴部外面平打ち、内面ナデ。	
25-1	須恵器 埴	床直	12.0・4.1・6.3 3/4		白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い黄褐色。	体部は丸みをもって開き、口縁部はやや外反する。底部左回転糸切り未調整。	
25-2	須恵器 埴	床直	(11.4)・3.7・(6.3) 1/2割		白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒、黒色鉱物粒を含む。還元焰。やや軟質。灰白色。	口縁部は僅かに外反し、内面はロクロ目顯著。底部右糸切り未調整。体部下位に麓ナデ。	
25-3	須恵器 埴	床直	11.9・4.0・6.5 口縁部一部欠損		白～灰色の細砂粒・粗砂粒、少し粗粒を含む。還元焰。灰色。	体部は丸みをもって開き、口縁部は外反する。体部上方のナデ。底部左回転糸切り未調整。	
25-4	須恵器 埴	甕土	(14.8)・4.6・(7.8) 1/2割		白～灰色の細砂粒、僅かに黒色鉱物粒を含む。還元焰。やや軟質。灰白色、一部灰色。	体部は丸みをもって開くが、下位は窄まる。底部左回転糸切り未調整後ナデ。	
25-5	須恵器 甕	甕土	(16.5)・一・一・一 口縁部～体部1/4		白～灰色の細・粗砂粒を少し含む。還元焰。灰白色。	体部から口縁部まで緩やかに丸みを持ち、口縁部はやや内傾気味に折れる。	

平安時代(10)

遺物 番号	種類 器種	出土 位置	法 (口径・高さ・重量) 残存率	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
25-6	土師器 甕	覆土	19.9・一・一 口縁部～胴部上 位3/4	白～灰色の細砂粒、角閃石 を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部は明確な「コ」の字状を呈す。	
25-7	土師器 甕	甕内	(20.0)・一・一 口縁部～胴部上 位1/3	白～灰色の細砂粒、微細な 角閃石を含む。 普通。鈍い赤褐色。	口縁部は緩やかに外反する。胴部上位 横方向に寛り。内面直ナデ。	
25-8	土師器 甕	甕内	(18.0)・一・一 口縁部～胴部上 位1/5	白～灰色の細砂粒、微細な 角閃石、僅かな白色粗砂粒 を含む。普通。鈍い褐色。	口縁部は緩やかに外反する。指頭痕が 顕著。胴上位横方向に寛り。	
25-9	土師器 甕	覆土	一・一・(4.5) 胴部下位～底部	白～灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒、角閃石を含む。普 通。鈍い褐色、鈍い褐色。	胴部下位縦方向に寛ナデ。内面は横方向 ナデ。 底部一方向に寛ナデ。	
25-10	須恵器 甕	覆土	一・一・一 胴部小片	白色の細砂粒、黒色鉱物粒 を含む。 還元焰。灰色。	外面は平行叩き、内面は背割の当て 具痕。	
25-11	台石	床直	(縦)13.4・(横)14.9・(厚)3.2・(重量)9700.0g (石質)砂岩		扁平の平坦面が大きく凹められここに敲打が集 中する。敲打はこの外縁にも見られ、さらに側縁 の一部、裏面のほぼ全面にわたる。	
25-12	台石	床直	(縦)20.9・(横)19.5・(厚)4.4・(重量)2750.0g (石質)粗粒安山岩		明確な敲打、擦痕は認められない。僅かに磨痕 が見られる。	
25-13	鉄製品 鉄鏝	覆土	(長)7.2・(幅)1.2・(厚)0.5・(重量)14.53g		平根のやや大身の鉄鏝で、茎を欠損している。膨 張(わたり)は深い。	
27-1	須恵器 環	6cm	12.6・3.6・6.6 3/4	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰色。	体部直線的に開く。底部左回転余切り 未調整。	口唇部に 爆付着
27-2	須恵器 環	覆土	(13.3)・3.4・6.6 1/2	白～灰色の細砂粒を多く含 む。 還元焰。褐色。	体部丸みをもつ。内面底部と体部の境 が明確。 底部右回転余切り未調整。	
27-3	須恵器 環	覆土	(13.0)・3.7・(6.9) 1/4	白～灰色の細砂粒を多く含 む。 還元焰。灰黄色。	体部直線的に開く。 底部左回転余切り未調整。	内面底部 磨書「伍」
27-4	須恵器 環	44cm 覆土	一・一・(5.5) 1/3	白～灰色の細・粗砂粒、石英 を含む。 還元焰。黒褐色。	内面底部磨成後の縁あり。判読不可。 底部左回転余切り未調整。	
27-5	須恵器 環	覆土	(12.0)・一・一 口縁部～体部1/ 6	白～灰色の細砂粒を多く含 む。 還元焰。灰黄色。	体部直線的に開く。 口口調整。	外面体部 に磨書「伍」
27-6	須恵器 環	覆土	一・一・(8.0) 1/2	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。内面黒色。外面褐色。	底部回転余切り後、周辺は高台貼付け 時の回転ナデ。内面黒色処理、横方向 の磨痕。	
27-7	須恵器 環	38cm 覆土	一・一・7.8 底部～高台部	白～灰色の粗砂粒、微細な 小石を含む。 還元焰。灰色。	底部回転余切り後、周辺は高台貼付け 時の回転ナデ。	
27-8	土師器 台付甕	3cm	(12.0)・一・一 口縁部～胴部上 位	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。褐色。	口唇部で外反する。口縁部横ナデ、胴 部と胴部の境に明確な線あり。胴部外 面直ナデ。内面直ナデ。	外面直ナ デに爆付 着
27-9	土師器 台付甕	6cm	一・一・一 胴部下半部片	白～灰色の細・粗砂粒、角閃 石を含む。 普通。鈍い褐色。	胴部下部下に斜め方向の寛り、台 部直ナデ。 内面直ナデ。	
27-10	甕	覆土	一・一・(14.0) 胴部下位～底部 1/3	白～灰色の粗砂粒を多く含 む。 普通。褐色。	胴部斜縁のため調整不明瞭。 底部付近に寛り。底部ナデ。	
28-1	須恵器 環	甕内	14.4・5.4・6.2 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒、石英 を多く含む。 還元焰(還元焰気味)。鈍い 黄褐色。	口唇部は外反し、体部中央によく丸み をもつ。底部回転余切り後、周辺は高 台貼付け時の回転ナデ。	

平安時代(11)

遺物 番号	種 類	出土 位置	法 (口徑・高・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
28-2	須恵器 埴	竈内	(14.1)・5.7・5.9 2/3		白～灰色の粗・粗砂粒、石英 を含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い 褐色。	口縁部は外反する。底部回転糸切り後、 周辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
28-3	須恵器 埴	覆土	13.2・―― 口縁部～体部		白～灰色の粗・粗砂粒を多く、 細砂を僅かに含む。還元焰 (酸化焰気味)。鈍い褐色。	器内厚手。体部から口縁部にかけて直 線的に開く。	
28-4	須恵器 皿	竈内	13.3・3.6・5.7 2/3		白～灰色の粗・粗砂粒を多 く、石英を僅かに含む。還元焰 (酸化焰気味)。鈍い黄 褐色。	器内厚手。口唇部外反する。底部回転 糸切り後、周辺は高台貼付け時の回転 ナデ。	
28-5	須恵器 盥	5 cm	(17.7)・―― 口縁部～胴部1/ 4		白～灰色の粗砂粒、石英を 多く含む。還元焰。灰色。	口縁部横ナデ。外面胴部縦方向の篋削り。 内面横方向の篋ナデ。接合痕あり。	
28-6	須恵器 小型埴	竈内	――・7.6 胴部下位～底部		白～灰色の粗・粗砂粒、石英 を多く含む。還元焰。灰黄褐色。	胴部下位外面篋削り、内面篋ナデ。 底部篋ナデ。	
28-7	須恵器 羽釜	竈内	(18.0)・―― 口縁部～胴部1/ 4		白～灰色の粗砂粒、細砂、 石英を多く含む。還元焰(酸化焰気味)。褐色。	口唇部平坦。踵は断面三角形を呈す。 胴部外面上方向の篋削り。内面胴上部 指衝痕、紐作り痕あり、篋ナデ。	
28-8	須恵器 羽釜	竈内	(16.0)・―― 口縁部～胴部上 位1/2		白～灰色の粗・粗砂粒多く、 石英を少量含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い黄褐色。	口唇部平坦でやや内傾する。口縁部紐 作り痕あり。踵は断面三角形を呈す。 外面胴部上位篋削り。	
28-9	須恵器 羽釜	8 cm	(16.2)・―― 口縁部～胴部上 位1/4		白～灰色の粗砂粒・細砂を 多く、石英を少量含む。還元焰(酸化焰気味)。灰色。	口唇部平坦。踵は断面三角形を呈す。 外面胴部上位篋削り。内面紐 作り痕、篋ナデあり。	
28-10	鉄製品 刀子	床直	(長)(7.0)・(幅)1.3・(厚)0.3・(重量)6.44 g			刃先部及び基部を欠損している。楔区(わねまち) は不明瞭。刃幅は区(まち)部より先が狭くなる。	
29-1	鉄製品 刀子	覆土	(長)(4.6)・(幅)1.6・(厚)0.2・(重量)4.07 g			刃先部と基部を欠損し、刃部のみの残存。	
30-1	須恵器 埴	覆土	(17.8)・5.9・9.9 1/2		白～灰色の粗砂粒。僅かに 赤褐色粒を含む。還元焰。褐色。	体部直線的に開く。 底部右回転糸切り未調整。内面篋ナデ。	
30-2	須恵器 埴	床直	――・(14.0) 高台部1/4		白～灰色の粗砂粒を含む。 還元焰。褐色。	大型の高台部である。断面形は長方 形を呈し、しっかりしている。ログロ 調整。	
30-3	土師器 罌	覆土	――・4.0 胴部下位～底部 1/2		白～灰色の粗砂粒を含む。 普通。外面黒褐色、内面鈍 い赤褐色。	外面胴部縦方向に篋削り、底部篋削り。 内面篋ナデ、胴中部に接合痕あり。	
30-4	鉄製品 刀子	覆土	(長)(10.3)・(幅)1.7・(厚)0.5			刃先端部と基部を欠損している。区(まち)は両側 縁部に明確に遺存している。 刃先部に少し反りがある。	
30-5	鉄製品 刀子	覆土	(長)(15.5)・(幅)1.7・(厚)0.4			刃先端部と基部を欠損している。基部に柄の木質 片が残存する。刃区は明確。	
31-1	須恵器 埴	覆土	11.3・3.5・5.5 2/3		白～灰色の粗砂粒。僅かに 粗砂粒・細砂を含む。還元焰 (酸化焰気味)。淡黄褐色。	体部は丸みをもって開く。内面底部が 円盤状に盛り上がる。底部左回転糸切り 未調整。	
31-2	須恵器 埴	覆土	12.0・3.8・6.2 1/2		白～灰色の粗砂粒。僅かに 細砂を含む。還元焰。外面灰色、内面灰 白色。	体部上位に丸みをもって開く。 底部右回転糸切り未調整。	
31-3	須恵器 埴	床直	(11.7)・3.3・6.9 1/3		白～灰色の粗砂粒。僅かに 粗砂粒・細砂を含む。還元焰。 灰色。	体部下位は窄まり気味で丸みをもって 開く。底部右回転糸切り未調整。	
31-4	須恵器 埴	覆土	(14.2)・5.0・8.0 1/4		白～灰色の粗砂粒。僅かに 粗砂粒・細砂を含む。還元焰。 灰色。	体部は丸みをもって開く。 底部左回転糸切り後、周辺は回転ナデ。	

平安時代(12)

遺物 番号	器 種 類	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
31-5	須恵器 杯	覆土	(10.8)・3.6・(6.0) 1/4	白～灰色の細砂粒、僅かに細砂を含む。還元焰。灰白色。	体部はほぼ直線的に開く。底部は回転糸切り後、丸ナデ。	
31-6	須恵器 杯	18cm 覆土	(13.9)・4.2・(7.8) 1/5	白～灰色の粗砂粒、僅かに細砂を含む。還元焰。灰白色。	体部は直線的に開く。下位にナデ。底部は手持ちの寛ナデ。	
31-7	須恵器 杯	覆土	(12.1)・4.1・(7.0) 1/5	白～灰色の細砂粒、僅かに細砂を含む。還元焰。灰白色。	体部は丸みをもって開く。底部は回転糸切り後ナデ。	
31-8	須恵器 杯	5cm	12.1・3.7・7.5 口縁部一部欠損	白～灰色の粗砂粒、僅かに細砂を含む。還元焰。軟質。灰白色。	体部は直線的に開き、クロロ目顯著。底部は回転糸切り後未調整。	
31-9	須恵器 杯	覆土	一一・5.9 体部下位～底部	白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。褐灰色。	底部は器内が厚く、体部下位に糸のあった敷がある。底部は回転糸切り未調整。	
31-10	須恵器 皿	36cm 覆土	(13.8)・3.0・(8.8) 1/4	白～灰色の細砂粒、僅かに細砂を含む。還元焰。灰色。	口唇部は水平な平面を持つ。底部は右回転糸切り後、周辺部は高台貼付け時のナデ、接地面は平坦。	
31-11	須恵器 碗	5cm	10.6・4.8・4.8 口縁一部と高台部欠損	白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒、細砂、5mm大の礫を含む。還元焰。軟質。灰白色。	体部は立ち上りに丸みをもち、口唇部まで直線的に開く。底部は回転糸切り後、高台貼付け時にナデ。	
31-12	須恵器 碗	床直	12.1・3.8・6.2 口縁部～底部1/2欠損	白～灰色の細砂粒・僅かに粗砂粒・細砂を含む。還元焰。灰色。	体部はやや丸みをもち、器内は口唇部までほぼ均一に開く。底部は回転糸切り後、周辺部は高台貼付け時にナデ。	
31-13	須恵器 蓋	覆土	13.8・3.1・3.0 3/4	白～灰色の細砂粒、少量の粗砂粒を含む。還元焰。やや軟質。灰白色。	天井部は丸みをもち、口縁部の屈曲部はシャープである。底部は丸みをもつ。	
31-14	須恵器 蓋	土坑 底面	16.2・4.2・3.7 1/2	白～灰色の細砂粒、少しの細砂を含む。還元焰。灰色。	口縁部は内傾気味に折れる。天井部の器内は厚く、回転糸ナデ。	
31-15	須恵器 蓋	床直	(17.9)・4.2・(4.7) 1/3	白～灰色の細砂粒、僅かに細砂を含む。還元焰。軟質。灰白色。	天井部の器内は厚く、口縁部に向かって薄くなる。天井部は回転糸ナデ。	
31-16	須恵器 蓋	9cm	一一・3.4 紐～天井部	白～灰色の細砂粒・粗砂粒・僅かに5mm以上の礫を含む。還元焰。軟質。灰白色。	クロロ調整。内面には皸痕が見られるが、摺った痕跡はない。	
31-17	土師器 鉢	床直	19.9一一・口縁部～胴上部一部欠損	白～灰色の細砂粒、僅かに5mm大位の礫を含む。やや軟質。鈍い橙色。	口縁部は「く」の字状に開く。口縁部上位に粘土組織合痕が見られる。	
31-18	土師器 鉢	床直	一一・3.7 胴部下位～底部2/3	白～灰色の細砂粒、僅かに細砂を含む。やや軟質。鈍い橙色。	底部は平底。胴部内外面寛ナデ。底部はナデ。	
31-19	須恵器 鉢	42cm 覆土	一一・一一・胴部下位～底部小片	白色の細・粗砂粒、僅かに褐色鉱物粒を含む。還元焰。灰色、灰白色。	胴部下位左回転糸ナデ。	
32-1	須恵器 杯	2cm	12.4・4.2・6.8 口縁部1/4欠損	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細砂を含む。還元焰。やや軟質。外面灰黄色、内面褐色。	口縁部はやや内湾する。底部は左回転糸切り未調整。	内面底部磨 損不明
32-2	須恵器 杯	9cm	一一・7.2 底部～体部下位	白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。鈍い橙色。	底部は左回転糸切り未調整。周辺に底の当たり痕が数ヶ所みられる。	
32-3	須恵器 杯	8cm	12.4・4.1・6.0 3/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。外面黒色、内面鈍い黄褐色。	底部は左回転糸切り未調整。	

平安時代(13)

遺物 番号	器 種	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
32-4	須恵器 環	7cm	15.0・4.8・7.0 口縁部1/2欠損	白～灰色の細・粗砂粒。粗砂、褐色鉱物粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。灰色、浅黄色。	口縁部が楕円形に歪む。底部右回転糸切り未調整。	
32-5	須恵器 環	5cm	11.7・4.0・6.4 口縁部1/2欠損	白～灰色の細砂粒。僅かに粗砂粒、鉱物を含む。還元焰。灰色、灰白色、灰オリーブ色。	体部内外面はクロコ目が顕著である。下位は卒まる。底部右回転糸切り未調整。	
32-6	須恵器 環	覆土	一・一・一・7.0 体部～底部1/2	白～灰色の細砂粒。僅かに粗砂粒、粗砂、5～8mm大の礫を含む。還元焰。灰色、灰白色。	底部左回転糸切り未調整。	
32-7	須恵器 環	2cm	12.0・4.4・6.2 1/2	白～灰色の細砂粒。僅かに8mm大の礫、褐色鉱物粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。浅黄色。	体部は丸みをもって開き、内底径は外底径より大きい。底部左回転糸切り未調整。粗線を作り。	
32-8	須恵器 環	覆土	(12.8)・4.4・(6.8) 1/3	白～灰色の細・粗砂粒。僅かに5mm大の礫、褐色鉱物粒を含む。還元焰。やや軟質。灰白色。	体部は下位に丸みをもって開き、内底径は外底径より大きい。底部右回転糸切り未調整。	
32-9	須恵器 壺	3cm	10.4・5.6・6.0 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒。僅かに石英の礫を含む。還元焰。黒色、鈍い黄褐色。	体部はクロコ目が顕著である。高台部器肉は比較的高い。厚手でしっかり付けられている。	
32-10	須恵器 蓋	8cm	一・一・一・(紐)4.0 体部～蓋2/3	白～灰色の細砂粒。少しの粗砂粒、粗砂を含む。素地は粗い。還元焰。灰色。	器内は厚い。天井部寛削りの後、回転ナデ。	
32-11	土師器 甕	5cm	19.5・一・一・一 口縁部～胴部中位	白・黒・褐色細砂粒。僅かに粗砂粒、角閃石を含む。普通。鈍い褐色、鈍い褐色。	口縁部緩やかな「コ」字状を呈し、一条の沈線が通る。口縁部横ナデ。胴部外面寛削り、内面寛ナデ。	
32-12	土師器 甕	15cm 覆土	(18.9)・一・一・一 口縁部～胴部上位1/3	白～灰色・褐色細砂粒。少しの角閃石を含む。普通。褐色。	口縁部は「コ」字状を呈す。口縁部横ナデ。胴部外面寛削り、内面寛ナデ。	
32-13	土師器 甕	甕内	(20.0)・一・一・一 口縁部～胴部上位1/4	白色。褐色細砂粒。僅かに粗砂粒、角閃石を含む。普通。鈍い褐色。	「コ」字状口縁を呈す。頸部に指痕あり。口縁部横ナデ。胴部外面寛削り、内面寛ナデ。	内外面保存
32-14	須恵器 高杯	10cm	13.0・一・一・一 杯部1/2	白～灰色の細・粗砂粒。僅かに石英の粗砂を含む。還元焰。外面褐色、内面灰白色。	蓋と形質は類似するが、刺座部分を見ると胴部のものである。重ね焼きによる色調の差がみられる。	
32-15	砥石	覆土	(縦)16.5・(横)5.9・(厚)5.4・(重量)960.0g (石質)砂岩		四角柱状で4面が使用される。第2面に僅かに線状の磨痕が残される。	
33-1	土師器 小型甕	覆土	(12.8)・一・一・一 口縁部～胴部上位1/4	白～灰色の細砂粒。僅かに角閃石を含む。普通。褐色。	口縁部は「コ」字状を呈す。口縁部横ナデ。胴部外面寛削り、内面粘土接合痕あり。	
33-2	土師器 甕	甕内	(19.2)・一・一・一 口縁部～胴部上位1/4	白～灰色の細砂粒。僅かに角閃石を含む。普通。鈍い褐色。	口縁部「コ」字状を呈す。口唇部に沈線あり。口縁部横ナデ。外面胴部上位横方向寛削り、内面寛ナデ。	
33-3	土師器 甕	覆土	(20.0)・一・一・一 口縁部～胴部上位	白～灰色の細砂粒を含む。普通。鈍い褐色。	口縁部崩れた「コ」字状を呈す。口縁部横ナデ。外面胴部上位横方向寛削り、内面寛ナデ。	
35-1	黒色土師 土師器 環	甕内	12.5・3.7・6.0 3/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。外面鈍い褐色。内面黒色。	体部は丸みをもって開く。底部回転糸切り。内面寛削り後、黒色処理。	
35-2	須恵器 環	甕内 覆土	13.7・4.8・7.0 4/5	白～灰色の細・粗砂粒。粗砂を少量含む。還元焰。灰白色。褐色。灰色。	体部は丸みをもって開く。器内はやや厚手である。底部は右回転糸切り未調整。	

平安時代(14)

遺物 番号	種類 形態	出土 位置	法 (口徑・器高・底径) 残存率 cm	胎土・構成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
35-3	須恵器 杯	1cm	(12.2)・3.8・6.0 1/2	白～灰色の細・粗砂粒、石英を僅かに含む。還元焰(酸化焰気味)。外一薄灰色、内一鈍い黄褐色。	体部は直線的に開く。内面紐作り痕が明瞭。 底部は右回転糸切り未調整。	外面底部に 墨書「本」
35-4	須恵器 杯	覆土	(12.7)・3.7・6.4 1/2弱	白～灰色の細・粗砂粒、石英、細礫を僅かに含む。還元焰。明褐色。	体部は丸みをもって開き、口唇部やや内湾気味。底部は左回転糸切り未調整。	
35-5	須恵器 杯	床直	12.6・3.7・6.0 4/5	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。黒褐色、橙色。	口縁部はやや外反し歪んでいる。体部口縁部目顯著。底部は右回転糸切り未調整。	
35-6	須恵器 碗	覆土	→→→9.0 底部1/2	白～灰色の細・粗砂粒、4～5mmの礫を僅かに含む。 還元焰。灰白色。	器内はやや厚手。底部は回転重切り後、周辺部は高台貼り付時の回転ナデ。	
35-7	土師器 小甕	電内 覆土	10.0・11.4・3.8 胴部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い橙色。	口縁部は直線的に短く開き、口唇部がやや外反。口縁部横ナデ。外面肩部粗い寛磨き、寛削り、内面磨ナデ。	
35-8	土師器 甕	覆土	(19.0)・→→→ 口縁部～胴部上位1/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い橙色。	口縁部は弱い「コ」字状を呈する。外面胴部寛削り、内面磨ナデ。	
35-9	土師器 甕	覆土	(20.0)・→→→ 口縁部～胴部上位1/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い橙色。	口縁部は「コ」字状を呈する。口縁部横ナデ。外面胴部寛削り、内面磨ナデ。	
35-10	土師器 甕	覆土	(21.0)・→→→ 口縁部～胴部上位1/4	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を僅かに含む。 普通。橙色。	口縁部は「コ」字状を呈す。口縁部横ナデ。肩部に輪痕痕明瞭。指押え。胴部外面寛削り、内面磨ナデ。	
35-11	土師器 甕	電内 覆土	(19.0)・→→→ 口縁部～胴部上位1/5	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い橙色、黒褐色。	口縁部は緩やかに外反する。口縁部横ナデ。肩部指押え。外面胴部寛削り、内面磨ナデ。	
35-12	土師器 甕	電内 覆土	(20.0)・→→→ 口縁部～胴部上位1/3	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い橙色。	口縁部は弱い「コ」字状を呈す。口縁部横ナデ。外面磨削り、内面磨ナデ。	口縁部係 付着
35-13	土師器 甕	床直	20.0・→→→ 口縁部～胴部1/3	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い橙色。	口縁部「く」の字状を呈し、直線的に開く。 口縁部横ナデ。外面磨削り、内面磨ナデ。	
35-14	土師器 甕	電内	→→→4.5 胴部下位～底部1/2	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い橙色。	器内は薄手である。胴部外面縦方向の磨削り後粗い寛磨き、内面磨ナデ。	
35-15	須恵器 甕	覆土	→→→13.5 胴部下位～底部	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を僅かに含む。 還元焰(酸化焰気味)。鈍い橙色、黒色。	胴部外面口縁調整後平行叩き、下位磨ナデ。 内面磨ナデ。	
37-1	須恵器 杯	5cm	13.2・4.0・7.3 口縁部一部欠損	白～灰色の細砂粒、少量の細礫を含む。 還元焰。灰黄褐色、鈍い黄褐色。	体部直線的に開く。口縁調整。 底部左回転糸切り未調整。	内面底部磨 削り不可
37-2	須恵器 杯	6cm	12.2・3.6・7.0 3/4	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰褐色。	口縁部は外反気味に開き、体部はやや丸みをもつ。口縁調整。底部右回転糸切り未調整。	
37-3	須恵器 杯	床直	12.5・3.7・6.3 3/4	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。暗灰色。	体部は直線的に開く。口縁調整。 底部右回転糸切り未調整。	
37-5	須恵器 杯	29cm 覆土	(11.7)・4.0・(6.2) 1/4	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。暗灰色。	体部は直線的に開く。口縁調整。 底部回転糸切り未調整。	
37-4	須恵器 杯	電内	(12.6)・3.5・(7.0) 1/4	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰色。	体部は直線的に開く。口縁調整。 底部回転糸切り未調整。	
37-6	須恵器 杯	覆土	(10.4)・4.8・(6.1) 1/10	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰白色。	体部は直線的に開く。口縁調整。 底部回転糸切り未調整。	

平安時代(15)

遺物 番号	種 類	出土 位置	法 (口徑・高さ・底径) 残存率 cm	胎 土・焼 成・色 調	成形・調整技法の特徴	備 考
37-7	土師器 甕	甕内	(22.0)・―― 口縁部～胴部1/ 4	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。褐色。	口縁部はやや外反する。口縁部横ナデ。 胴部外面横方向に荒削り、内面直ナデ。	
37-8	石製品 不明	覆土	(上径)4.4・(下径)5.9・(厚)4.0 (石質)威沢石		台形状の断面形で全面にわたり磨り落すように 剥離される。上下面及び側面の数か所に磨痕が見 られる。紡錘車の未製品か。	
37-9	鉄製品 鉄片	8 cm	(長)12.0・(幅)10.2・(厚)2.8			
38-1	土師器 甕	覆土	(21.0)・―― 口縁部～胴部上 位1/4	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。明赤褐色。	「コ」の字」状口縁。作りは粗い。瓶作 り痕明瞭。口縁部横ナデ。頸部指環状。 胴部外面荒削り、内面直ナデ。	
38-2	須恵器 羽釜	2 cm	(18.4)・―― 口縁部～胴部上 位1/4	白～灰色の細・粗砂粒を多 く含む。 還元焰。灰黄褐色。	口唇部平坦で口縁部直立する。肩は断 面四角形、やや上方向を向く。口縁部 横ナデ。胴部荒削り、内面直ナデ。	
38-3	須恵器 羽釜	8 cm	(21.0)・―― 口縁部～胴部上 位1/4	白～灰色の粗砂粒、石英を 多く含む。 還元焰。灰黄色。	口唇部は平皿で内傾する。肩は断面三 角形を呈す。口縁部横ナデ。胴部外面 荒削り、内面直ナデ。	
38-4	須恵器 甕	―― 胴部破片	―― ――	白～灰色の細・粗砂粒、僅か に細砂、中砂を含む。還元 焰(酸化焰気味)。やや軟質。 灰オリーブ色。	胴部外面平打叩き、内面僅かに当て具 痕が見られるが、ナデ消されている。	
39-1	須恵器 環	甕左 袖上	13.0・3.9・5.7 4/5	白～灰色の細・粗砂粒、石英 の粗砂粒、細砂を多量に含 む。還元焰。軟質。褐灰色。	体部は丸みを持って開き、口縁部はや や外反する。底部右回転ネリ未調整。	
39-2	須恵器 環	床直	13.6・4.5・5.8 3/4	白～灰色・石英の細・粗砂粒 を含む。 還元焰。やや軟質。灰黄褐 色。	体部は丸みを持って開き、器内はや や厚手である。 底部右回転ネリ未調整。	内面体部是 書判読不可
40-1	須恵器 環	10cm	12.4・3.6・6.2 口縁部1/4欠損	白～灰色の細砂粒、僅かに 細砂を含む。 還元焰。やや軟質。灰黄色、 一部浅黄色。	体部上位に丸味をもち、口縁部はや や外反し歪みを持つ。底部左回転ネリ 未調整。	
40-2	須恵器 環	覆土	(11.0)・3.3・(6. 4) 1/3	白～灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒を含む。還元焰。断 灰色、内面一部鈍い黄褐色。	体部は丸味をもち、下位はやや窄まり 気味。 底部右回転ネリ未調整。	
40-3	須恵器 環	覆土	(13.9)・5.3・(7. 5) 1/6	白～灰色粗砂粒を少し、細 砂を僅かに含む。 還元焰。灰白色。	体部上位に丸味をもち、内面底部と体 部の立ち上がり明瞭。底部左回転ネリ 未調整。	
40-4	須恵器 甕	10cm	――(15.8) 胴部下位～底部 1/3	白～灰色の細砂を少し含 む。 還元焰。堅緻。灰白色。	胴部下位はクロコ調整の蓋ナデ。底部 不定方向のナデ。平底。	
40-5	土師器 甕	5 cm	(23.9)・―― 口縁部～胴部1/ 6	白～灰色の細砂粒、少しの 細砂を含む。 普通。鈍い褐色、外面一部 黒色化。	口縁部は強い横ナデによりやや凹凸あ り。胴部外面下方角直ナデ、単位は細 かい。内面は横直ナデ。	
40-6	土師器 甕	土坑 覆土	(20.0)・―― 口縁部～胴部1/ 2割	微細な角閃石を少し、白 ～灰色の細砂粒を僅かに含 む。普通。褐色。	口縁部は「く」の字状を呈す。 口縁部横ナデ。外面胴部上位横方向 荒削り。	
40-7	土師器 甕	23cm	―― 覆土胴部1/4	白～灰色の粗砂粒、細砂、 僅かに7mm程度の礫を含む。 普通。鈍い褐色。	胴部外面下方方向荒削り、内面右方向横 直ナデ。	
41-1	須恵器 環	覆土	(13.6)・3.6・(7. 4) 1/3	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰白色、黒褐色。	体部は直線的に開き、口唇部は僅かに 外反する。 底部左回転ネリ未調整。	
41-2	須恵器 環	覆土	(14.8)・―― 口縁部～体部1/ 5	白～灰色の細・粗砂粒、5 ～7mmの礫を僅かに含む。 還元焰。外面褐灰色、内面 鈍い黄褐色。	体部はやや丸みを持って開く。クロコ 調整。内外面クロコ目顯著。	

平安時代(16)

遺物 番号	種 類	出 土 位置	法 (口縁・底面・底面) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
41-3	土師器 甕	覆土	(16.0)・一・一 口縁部破片		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い赤褐色。	口縁部は緩やかな「コ」状を呈す。 器内はやや薄手。口縁部傾ナデ。胴部 外面磨削り、内面直ナデ。	
41-4	土師器 甕	覆土	(20.0)・一・一 口縁部破片		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い赤褐色。	口縁部は比較的短く開く。口縁部傾ナ デ。胴部外面直削り、内面直ナデ。	
41-5	須恵器 甕	床直	一・一・一 胴部破片		白～灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒、細線を含む。還元 焰。堅緻。灰色。	胴部外面平行叩き、内面直ナデ。	
41-6	土製品 紡輪	28cm 覆土	(上径)3.8・(厚)1.6・(孔径)0.8・(重量)46.5g (下径)5.5			断面台形状を呈す。周囲が打ち欠かれている。比 較的に丁寧な作りで、全体に肌磨きが施される。凸 面側に線状の磨痕が残る。中央の円孔は真っ直ぐ にあけられる。	
43-1	須恵器 杯	19cm 覆土	11.4・3.0・7.2 完形		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。黒褐 色、褐色。	体部は直線的に開く。底部右回転糸切り 未調整。 内面クロ目顯著。	
43-2	須恵器 杯	10cm	(12.0)・3.6・(6.4) 2/3		白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰白色。	口縁部歪みあり。底部右回転糸切り未 調整。	
43-3	須恵器 杯	床直	(11.5)・4.1・6.0 1/2		白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰色。	体部膨らみを持ち、口縁部は外反する。 底部右回転糸切り未調整。	
43-4	須恵器 杯	1cm	(12.4)・4.0・(7.4) 1/3		白～灰色の細砂粒多く、細 線を僅かに含む。 還元焰。灰白色。	器内は厚手である。体部は直線的に開 く。 底部右回転糸切り未調整。	
43-5	須恵器 杯	13cm 覆土	14.7・4.8・7.2 口縁部一部欠損		白～灰色の細・粗砂粒を多 く、細線を少量含む。還元 焰。灰色。	体部低位に膨らみを持って開く。 底部右回転糸切り未調整。	
43-6	須恵器 杯	10cm	15.3・6.3・8.0 口縁部一部欠損		白～灰色の細・粗砂粒を多 く、細線を少量含む。還元 焰。灰色。	体部僅かな膨らみを持ち、口縁部は直 線的に開く。 クロ目顯著。底部右回転糸切り未調 整。	
43-7	土師器 甕	21cm 覆土	(19.8)・一・一 口縁部～胴部上 位1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。明赤褐色。	口縁部緩やかな「コ」状を呈す。口 縁部傾ナデ、胴部指押え。外面胴上位 磨削り、内面直ナデ。	
43-8	土師器 ミナヅナ	5cm	7.7・4.3・3.0 口縁部1/3欠損		白～灰色の細砂粒、少しの 金雲母を含む。 普通。褐色、明黄褐色。	器内は厚い。体部外面直削り後ナデ、 内面直ナデ。底部直調整。	
43-9	鉄製品 刀子	覆土	(長)5.7・(幅)1.2・(厚)0.3・(重量)4.23g			欠損部が多く器種は断定できないが、刀子の刀先 部と思われる。	
45-1	須恵器 杯	23cm 覆土	11.9・3.6・6.0 完形		白色の細砂粒、黒色鉱物粒 を含む。 還元焰。灰色。	口縁部に歪みを持つ。 底部右回転糸切り未調整。	
45-2	須恵器 杯	床直	11.8・3.7・5.7 口縁部一部欠損		白色の細・粗砂粒、僅かに細 線、5～8mm大の礫、黒色 鉱物粒を含む。還元焰。灰 色。	内面口縁から底部にかけて一部に磨 削り、5mm大の礫が附かる。底部右 回転糸切り未調整。	
45-3	須恵器 杯	覆土	(11.0)・一・(6.0) 口縁部～底部1/ 4		白～灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	体部は緩やかに丸みを持って開く。 底部右回転糸切り後調整。	
45-4	須恵器 杯	竈 上部	14.0・4.6・7.0 口縁部一部欠損		白～灰色の細・粗砂粒、僅かに 細線、5mm大の礫を含む。 還元焰。灰白色、灰色。	体部は低位に丸みを持ち、ほぼ直線的 に開く。 底部右回転糸切り未調整。	
45-5	須恵器 杯	16cm 覆土	15.5・一・(8.7) 口縁部～底部1/ 2		白～灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒、細線・5mm大の礫を 含む。還元焰。灰白色、灰 色。	体部は丸みを持って開き、器内は厚い。 底部右回転糸切り。素地は粗い。	

平安時代(17)

遺物 番号	種 類	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
45-6	須恵器 皿	甕袖 上部	12.8・3.0・7.7 ほぼ実形		白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒、細礫を含む。還元焰。灰色、灰オリーブ色。	体部は直線的に開き、壁をなして口縁部は直立。底部右回転糸切り後、周辺部は高台貼付け時の回転ナデ。	
45-7	須恵器 蓋	覆土	(15.1)・3.6・(3.9) 1/4		白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒、細礫を含む。還元焰。灰色。	天井部は水平、口縁部はやや内傾気味に折れる。 天井部の器内は厚い。	
45-8	須恵器 蓋	覆土	14.7・―― 天井部～口縁部 1/2		白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	天井部から口縁部まで緩やかに丸みをもち、口縁部は折れ曲がる。器は欠けている。	
45-9	土師器 鉢	24cm 覆土	21.6・―― 口縁部～胴部上位		白色・黒色の細砂粒、僅かに白色・褐色粗砂粒を含む。普通。鈍い褐色。	口縁部横ナデ、胴部指押え、粘土紐接合痕あり。 外面胴部上位横方向内削り、内面寛ナデ。	
45-10	土師器 鉢	床直	―― 胴部～胴部下位 1/3		白色・黒色の細砂粒を含む。普通。褐色、浅黄色、褐色。	胴部外面削り、内面寛ナデ。 粘土紐作り痕あり。	
45-11	鉄製品 刀子	覆土	(長)14.6・(幅)1.6・(厚)0.5・(重量)25.42g			刃先端部を欠損するのみで、残存状態は良好。刃先端部に木質片が認められる。	
47-1	須恵器 杯	床直	(12.5)・4.0・(6.0) 1/3		白色の細・粗砂粒を含む。還元焰。灰色。	体部は上位と下位に丸みをもって開く。 底部左回転糸切り未調整。	
47-2	須恵器 杯	床直	12.3・3.9・7.0 口縁部一部欠損		白～灰色の細砂粒、少し粗砂粒、細礫を含む。還元焰。灰白色。	口縁部に歪みを持つ。 底部右回転糸切り未調整。	
47-3	須恵器 杯	覆土	(14.0)・5.0・8.4 1/5		白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒、細礫を含む。還元焰。灰白色。	体部はほぼ直線的に開く。 底部回転糸切り未調整。	
47-4	須恵器 杯	9cm 床直	(14.8)・5.2・8.5 1/2弱		白～灰色の細・粗砂粒、少しの細礫を含む。還元焰。灰白色、灰色。	体部は丸みを持って開き、下位は窄まる。 底部左回転糸切り未調整。	
47-5	須恵器 杯	床直	(17.2)・6.0・6.8 1/2		白～灰色の細砂粒、僅かの細礫、褐色・黒色鉱物粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い黄褐色。	体部は大きく丸みを持って開く。器内は厚い。 底部は一方のナデ。	
47-6	須恵器 杯	11cm 床直	17.0・6.7・7.5 2/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い褐色。	体部はほぼ直線的に開く。 底部右回転糸切り後、不定方向の寛ナデ。	
47-7	須恵器 埴	床直	16.3・―― 口縁部～底部 1/2		白色の細砂粒、僅かに粗砂粒、細礫を含む。還元焰。灰色。	体部は丸みを持って開き、内外面ともロクロ目顯著。底部右回転糸切り後、周辺部は高台貼付け時のナデ。	
47-8	須恵器 蓋	40cm 覆土	15.1・3.5・3.7 口縁部1/4欠損		白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細礫、5～8mm程度の礫を含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い褐色。	体部は丸みを持って開き、口縁部は折れ曲がる。高台状の趾が付く。天井部回転糸切り。	
47-9	須恵器 蓋	床直	(14.5)・2.7・2.7 1/3		白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒、褐色・褐色鉱物粒を含む。還元焰。灰白色、灰色。	天井部に水平面を持ち、体部は丸みを持って開く。口縁部はやや内傾気味に折れ曲がる。	
47-10	須恵器 蓋	覆土	(14.6)・―― 天井部～口縁部 1/2		白色の細砂粒、黒色鉱物粒を含む。還元焰。灰色、灰白色。	天井部から体部にかけて自然釉が掛かる。 天井部、体部回転糸切り。	自然釉
47-11	須恵器 蓋	床直	(18.1)・―― 天井部～口縁部 1/4		白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細礫、黒色鉱物粒を含む。還元焰。灰色。	器内は厚い。口縁部は屈曲し、口唇部は外反する。内外面部分的に自然釉が掛かる。天井部回転糸切り。	自然釉
47-12	須恵器 蓋	4cm 床直	(13.1)・――(13.8) 天井部～口縁部 小片		白色の細砂粒、黒色鉱物粒を含む。還元焰。暗褐色。灰色。	天井部の変形は比較的にしっかりしている。口縁部はやや内傾する。ロクロ調整。	

平安時代(18)

遺物 番号	種 類 型 機	出土 位置	法 (口縁・器高・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
47-13	土師器 壺	7cm	(18.6)・--- 口縁部~胴部中 位1/4	白~灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部外反する。胴部に棒状具で一周 したような沈線あり。口縁部横ナデ。 胴部外面部磨り、内面磨ナデ。	
47-14	土師器 壺	8cm	21.3・--- 口縁部~胴部中 位3/4	白~灰色の細砂粒。僅かに 細砂、黒色鉱物粒を含む。 普通。褐色。	体部は直線的に開き、口縁部でやや外 反する。 底部右回転糸切り未調整、内面磨ナデ。	
47-15	土師器 壺	電内	(19.6)・--- 口縁部~胴部中 位3/4	白~灰色の細砂粒、角閃石 を含む。 やや軟質。褐色。	口縁部は外反する。口縁部横ナデ。外 面割部は横方向磨ナデ。	
47-16	土師器 壺	電内	(18.0)・--- 口縁部~胴部上 位1/4	白~灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部は外反する。口縁部横ナデ。胴 部外面部方向に磨り、内面磨ナデ。	
47-17	土師器 壺	電内	(18.3)・--- 口縁部~胴部1/ 4	白~灰色の細砂粒を含む。 普通。黒褐色。	口縁部は外反する。口縁部横ナデ。胴 部外面部方向に磨り、内面磨ナデ。 胴部下位に紐作り痕あり。	
47-18	土師器 壺	電内	--- 胴部	白~灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	胴部外面部方向に磨り、内面磨ナデ。	
47-19	須恵器 壺	2cm	---・8.5 胴部中位~底部 1/4	白~灰色の細砂粒。僅かに 細砂を含む。 普通。鈍い褐色。	ロクロ調整。底部と胴部の境はシャ ープで、胴部は直線的に立ち上がる。底 部回転糸切り未調整。	
47-20	須恵器 小型壺	12cm 覆土	---・7.1 胴部下位~底部 1/2	少しの白~灰色の細砂粒、 細砂、褐色・黒色鉱物粒を含 む。還元焰(酸化焰気味)。 鈍い黄褐色。	磨。ロクロ調整。底部右回転糸切り 後磨ナデ。	
47-21	須恵器 壺	床直	28.3・22.4・11.4 3/4	白~灰色の細・粗砂粒、細 砂、少量の中砂を含む。還 元焰(酸化焰気味)。浅黄褐色。	口縁部は外反する。ロクロ調整。 体部下位に上方方向の磨り、底部は磨 ナデ。	
47-22	須恵器 壺	覆土	--- 体部1/8	白~灰色の細・粗砂粒、僅か に細砂、中砂を含む。還元 焰(酸化焰気味)。浅黄褐色。	体部縦方向磨り。ロクロ調整。	
47-23	磁石	覆土	(縦)9.0・(横)5.4・(厚)2.2・(重量)190.0g (石質)ダイサイト質凝灰岩		表裏・面及び側面が使用される。表裏面とも浅く凹 む。欠損する。	
47-24	磁・凹石	覆土	(縦)13.4・(横)6.0・(厚)4.1・(重量)400.0g (石質)流紋岩(?)		横円盤平端の長軸両端及び両側縁が破打される。 表面に深さ1.5mmの円形の凹みがある。	
47-25	鉄製品 不明	覆土	(長)(11.0)・(幅)0.6・(厚)0.5・(重量)13.40g		鉄の茎部か?。四角柱状で、中間に少しふくらみ がみられる。	
47-26	鉄製品 不明	覆土	(長)(10.2)・(幅)0.7・(厚)0.6・(重量)10.95g		四角柱状の棒状鉄製品で、器種は不明。	
47-27	鉄製品 刀子	覆土	(長)(8.8)・(幅)1.5・(厚)0.5・(重量)11.27g		基部を欠損する。検区(わなまち)は甘く、刃区は 不明瞭。研ぎ減りにより、刃先は鋭くなる。	
47-28	青銅製品 丸網	覆土	(長)3.8・(幅)2.4・(厚)0.7・(重量)12.27g		寛存。表面下端に2.8×0.4の方形の通し。網が3ヶ 所に半分欠損して遺存する。	
47-29	鉄製品 鉄棒	覆土	(長)4.9・(幅)3.6・(厚)0.9			
49-1	須恵器 壺	電方	---・(7.3) 体部~底部1/4	白~灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰黄色。	体部やや丸みを持って開く。底部回転 糸切り後、周辺台粘付け時の回転ナデ。	
49-2	土師器 壺	電内	(19.0)・--- 口縁部1/6	白~灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。鈍い褐色。	「コ」字1状口縁。口唇部二本の沈線 あり。口縁から頸部横ナデ。外面割上 部横方向の磨り、内面磨ナデ。	
49-3	須恵器 壺	床直	(18.6)・--- 口縁部~胴部上 位1/4	白~灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰色。	口縁部波状文あり。頸部粘土紐接合痕 あり。 外面割部上位に平行叩き、内面素文の 当て具痕あり。	
49-4	石斧 (短冊形)	覆土	(縦)9.9・(横)6.8・(厚)1.9・(重量)125.0g (石質)細粒安山岩		縦長の素材。表面に磨面を残し主に横方向に磨面 が見られる。刃部に僅かに使用痕。裏面は主割磨 面を残し、隆起部分のみ磨かれる。	

平安時代(19)

遺物 番号	種 類	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
50-1	須恵器 埴	11cm	一・一・(8.4) 底部～高台部	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	ロクロ調整。外面底部寛ナデ。	
50-2	敲石	覆土	(縦)14.9・(横)7.5・(厚)2.4・(重量)450.0g (石質)凝灰質砂岩。		偏平盤の表面の約1/3。長軸両端及び両側を敲打する。裏面は大きく凹む。	
54-1	須恵器 杯	覆土	10.0・3.3・5.6 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	体部上位やや膨らみをもつ。 底部左回転未切り未調整。	
54-2	須恵器 杯	覆土	11.6・3.5・6.6 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	体部は直線的に開く。 底部右回転未切り未調整。	
54-3	須恵器 杯	床直	13.0・4.2・6.0 3/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。外面灰色。内面鈍い黄褐色。	体部は直線的に開き、口縁部僅かに外反する。 底部左回転未切り未調整。	
54-4	須恵器 杯	覆土	14.5・4.6・8.0 4/5	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。 外面灰黄褐色。内面鈍い黄褐色。	体部は直線的に開く。ロクロ目顕著。 底部右回転未切り未調整。	
54-5	須恵器 小型壺	床直	一・一・6.6 胴部下位～底部 2/3	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。 明褐色。	胴部はやや丸みをもつ。ロクロ調整。 底部右回転未切り未調整。	
54-6	土師器 壺	覆土	20.9・27.5・(3.7) 2/3	白～灰色の細・粗砂粒を多く、角閃石を少量含む。普通。暗赤褐色、鈍い褐色。	口縁部に指痕、紐作り痕あり。 胴部外面寛削り、内面寛ナデ。	
54-7	須恵器 壺	床直	一・一・一 胴部破片	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細線。5～10mm大の礫を含む。還元焰。堅緻。灰色。	胴部外面ナデ、内面寛ナデ。	
55-1	須恵器 杯	覆土	(9.3)・2.8・5.8 1/2	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。 褐色。	胴内厚手。体部上位に膨らみをもつ。 底部右回転未切り未調整。	
55-2	須恵器 杯	覆土	(11.9)・3.5・(6.5) 1/3	白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒、細線。8mm大の礫を含む。還元焰。堅緻。灰白色。	体部は丸みを持って開く。 底部右回転未切り未調整。	
55-3	須恵器 壺	床直	(18.7)・一・一 2/3	白～灰色の粗砂粒を多く含む。 普通。黒褐色、鈍い黄褐色。	歪みがあり、罫は小さく僅に付けられる。 口縁部指痕。外面胴部上位横ナデ、下位縦削り。内面寛ナデ。	
55-4	須恵器 羽釜	床直	(18.0)・一・一 口縁部～胴部上位 1/6	白～灰色の粗砂粒多く、細線を僅かに含む。 普通。灰黄褐色。	罫は比較的小さい。外面胴部上位は横方向ナデ、下位は上方向寛削り、内面横方向寛ナデ。	
55-5	敲・凹石	覆土	(縦)11.2・(横)8.1・(厚)4.2・(重量)510.0g (石質)粗粒安山岩		偏平盤の両辺及び裏面の中央を使用する。凹みは表面に数カ所認められる。裏面欠損する。焼けている。	
56-1	須恵器 小型壺	甕内	12.0・12.6・8.4 2/3	白～灰色の細砂粒を多く含む。 還元焰(酸化焰気味)。 灰黄褐色。	胴上部に膨らみを持つ。ロクロ調整。 底部は回転未切りをナデ削っているようにも見えるが不明瞭。	
56-2	須恵器 羽釜	甕内	(20.1)・一・一 口縁部～胴部上位 小片	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細線、褐色鉱物粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。鈍い黄褐色。	口縁部と罫は蟹内形に近く、罫は断面三角形を呈す。外面胴部上方向寛削り。	
56-3	須恵器 土釜?	覆土	一・一・一(10.8) 胴部下位～底部 1/2	白～灰色の細・粗砂粒、細線を多く含む。 還元焰(酸化焰気味)。褐色。	外面胴部下方向寛削り、底部ナデ。 内面寛ナデ。	
59-1	須恵器 杯	覆土	一・一・一(7.4) 体部下位～底部 1/6	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。 褐色。	ロクロ調整。外面底部ナデ。 高台貼付け。	

平安時代(20)

遺物 番号	種 類	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
59-2	黒色土器 埴	覆土	→→→(5.0) 体部下位〜底部 1/4		白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 酸化焰。外面鈍い褐色、内 面黒色。	内面黒色処理後、底部磨き。 高台貼付け。	
59-3	土師器 埴	覆土	(20.0)→→→ 口縁部〜胴部上 位1/5		白〜灰色の細・粗砂粒を多 く、僅かに石英を含む。普 通。外面明赤褐色、内面黒 褐色。	口縁部はやや外反する。 口縁部横ナデ。外面胴上位磨削り、内 面寛ナデ。	
59-4	土師器 埴	覆土	(23.0)→→→ 口縁部〜胴部上 位1/4		白〜灰色の細・粗砂粒、石英 を含む。 普通。鈍い褐色。	胴部に一帯の沈線あり。 胴部外面縦方向に寛削り、内面寛ナデ。	
59-5	土師器 埴	覆土	(23.2)→→→ 口縁部〜胴部上 位1/5		白〜灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部に強い稜をもつ。外面口縁部横 方向に寛削り、胴部縦方向に磨削り。 内面寛ナデ。	
59-6	土師器 埴	内 覆土	(21.8)→→→ 口縁部〜胴部中 位1/4		白〜灰色の細・粗砂粒を含 む。 普通。鈍い褐色。	口縁部に強い稜をもつ。 胴部外面縦方向に寛削り、内面寛ナデ。	
59-7	須恵器 羽釜	6 cm	(22.0)→→→ 口縁部〜胴部上 位1/5		白〜灰色の細・粗砂粒、僅か に石英を含む。 普通。鈍い褐色。	口縁部横ナデ、指環痕あり。 胴部外面縦方向に寛削り、内面寛ナデ。	
60-1	須恵器 埴	覆土	(11.4)・3.1・(8. 0) 1/4		白〜灰色の細砂粒を多く含 む。 還元焰。灰色。	体部は直線的に開く。内面底部と体部 の境が明瞭。 底部回転糸切り未調整。	
60-2	須恵器 埴	覆土	(11.3)・3.3・(6. 0) 1/3		白〜灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰色。	体部は丸みを持って開く。 底部右回転糸切り未調整。	
60-3	須恵器 埴	覆土	(13.0)・4.1・6.6 2/3		白〜灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰黄色。	体部は直線的に開く。 底部右回転糸切り未調整。	
60-4	須恵器 埴	覆土	(13.4)・4.3・6.6 1/4		白〜灰色の細・粗砂粒、細砂 を含む。 還元焰。灰色。	体部は直線的に開く。クロロ目顯著。 底部右回転糸切り未調整。	
60-5	須恵器 埴	覆土	(14.9)・4.5・(8. 0) 1/4		白〜灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰色。	体部は直線的に開く。内面底部と体部 の境が明瞭。 底部回転糸切り未調整。	
60-6	須恵器 埴	床直	12.8・4.2・6.4 完全		白〜灰色の細・粗砂粒多く、 細砂を少量含む。酸化焰気 味。鈍い赤褐色。	体部は直線的に開く。底部右回転糸切 り未調整。	
60-7	須恵器 埴	覆土	11.1・3.4・5.8 3/4		白〜灰色の細・粗砂粒を多 く含む。 還元焰。灰色。	体部は直線的に開く。内面底部と体部 の境が明瞭。 底部右回転糸切り未調整。	
60-8	須恵器 埴	覆土	11.7・3.2・6.0 3/4		白〜灰色の細・粗砂粒、黒色 鉱物粒を含む。 還元焰。灰色。	体部は丸みをもって開く。内面クロロ 目顯著。 底部右回転糸切り未調整。	
60-9	須恵器 埴	覆土	(11.8)・3.8・(6. 0) 1/4		白〜灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰白色。	体部はやや丸みをもって開く。 底部回転糸切り未調整。	
60-10	須恵器 埴	覆土	10.9・3.7・6.0 2/3		白〜灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰色。	体部は丸みをもって開く。内面底部と体 部の境が明瞭。底部右回転糸切り未調 整。	
60-11	須恵器 埴	覆土	(12.5)・4.3・6.4 1/4		白〜灰色の細・粗砂粒を多 く含む。 還元焰。灰色。	体部直線的に開く。内面底部と体部 の境がやや明瞭。底部回転糸切り未調 整。	
60-12	須恵器 埴	覆土	13.1・4.8・6.0 2/3		白色の細・粗砂粒を多く含 む。 還元焰。灰白色。	体部は直線的に開く。底部回転糸切 り後、周辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
60-13	須恵器 皿	3 cm	12.8→→→ 口縁部一部欠損		白〜灰色の細砂粒多く、細 砂を僅かに含む。 還元焰。灰色。	口縁部は直立する。体部は強く偏平。 底部回転糸切り後、周辺は高台貼付 け時の回転ナデ。高台割離。	

平安時代(21)

遺物番号	種類	出土位置	法 (口徑・高さ・底径) 残存率	量 cm	胎土・構成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
60-14	須恵器 皿	7cm	18.0・4.9・10.5 2/3		白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	口縁部直立気味。底部回転糸切り後、 周辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
60-15	須恵器 皿	3cm	(15.6)・3.7・ (11.0) 1/3		白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰白色。	口縁部直立気味。底部左回転糸切り。 周辺は高台貼付けによる回転ナデ。	
60-16	須恵器 蓋	25cm 覆土	13.6・3.6・(紐 径)4.0 1/2		白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	口縁部は折り曲げ、少し歪みがある。 高台状のつまみが付く。天井部は回転 糸切り。	
60-17	須恵器 蓋	15cm 覆土	14.8・3.6・(紐 径)3.7 ほぼ完形		白〜灰色の粗砂粒を多く、 細砂を少量含む。 還元焰。灰色。	口縁部歪みあり。紐は周辺部が輪状に なり、中央部が自然軸付着突出する。	
60-18	須恵器 蓋	覆土	(18.5)・3.5・(紐 径)4.3 1/4		白〜灰色の細・粗砂粒、黒色 鉱物粒を含む。 還元焰。灰色。	口縁部折り曲げ。高台状のつまみが付 く。 天井部回転糸切り。	自然軸付 着
60-19	土師器 壺	覆土	(20.0)・…… 胴部〜胴部上 位1/6		白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。明赤褐色。	口縁部横ナデ、指頭痕あり。外面胴部 上位横方向の磨削り。	
60-20	土師器 壺	覆土	……・4.8 胴部下位〜底部 2/3		白〜灰色の粗砂粒を多く含む。 普通。鈍い褐色。	外面胴部下位は縦方向の磨削り。底部 磨削り。 内面寛ナデ。	
60-21	不明 (スランプ 灰)	覆土	(縦)5.2・(横)3.7・(厚)3.3・(重量)89.2g			台形状の形態で、長軸下位に僅かに偏部をもつ。 上・下面を含む全面にわたり磨かれる。孔は両側より 穿たれる。	
60-22	磁石	覆土	(縦)7.0・(横)3.1・(厚)1.8・(重量)49.7g			偏平である。形態は長楕円形に近い。表面及び 両側縁が使用される。	
60-23	磁石	覆土	(縦)9.9・(横)4.9・(厚)2.1・(重量)160.0g			偏平の長楕円部を使用する。判然としなが ら裏面が磨かれる。	
60-24	鉄製品 刀子	覆土	(長)(9.8)・(幅)1.2・(厚)0.4・(重量)11.37g			刃先部を欠損し基部を残存する。刃区は不明瞭。	
60-25	青銅製品 か帯	覆土	(長)4.0・(幅)3.3・(厚)0.1・(重量)10.45g			ほぼ完形。帯は3本中1本は完形。1本は半分欠 損。1本は遺存していない。表面には緑青が浮出 するが、全体的に遺存状態は良好。裏金具は有 きない。	
61-1	須恵器 杯	床直	11.4・3.7・6.6 口縁部一部欠損		白〜灰色の細・粗砂粒、僅かに 細塵を含む。 還元焰。オリーブ黒色。	体部はやや丸みを持って開く。 底部右回転糸切り未調整。	
61-2	須恵器 杯	覆土	13.1・4.2・6.2 口縁部1/4欠損		白〜灰色の細・粗砂粒、僅かに 細塵を含む。還元焰。やや 軟弱。外面黒褐色、内面 浅黄色。	底部左回転糸切り未調整。	
61-3	須恵器 杯	床直	11.8・3.8・6.1 2/3		白〜灰色の細・粗砂粒、僅かに 細塵を含む。 還元焰。灰色、鈍い黄色。	口縁部は外反する。体部ロクロ目顯著。 底部右回転糸切り未調整。	
61-4	須恵器 杯	覆土	11.5・3.8・6.3 口縁部〜底部1/ 2		白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 酸化焰気味。鈍い黄褐色。 灰黄褐色。	体部は丸みを持って開く。底部は右回 転糸切り。体部と底部の磨耗が著しい。	
61-5	須恵器 杯	38cm 覆土	15.1・6.0・6.0 3/4		白〜灰色の細・粗砂粒、少し の細塵。5mm大の塵を含む。 還元焰。灰白色。	体部は下位に大きく丸みを持って開 く。口縁部はやや内湾気味に折り曲がる。 紐は欠損する。	
61-6	須恵器 杯	床直	(12.4)・4.0・(6. 8) 口縁部〜底部1/ 4		白色の粗砂粒、僅かに金雲 母を含む。 還元焰。暗灰色。	体部はやや丸みを持って開く。 底部右回転糸切り未調整。	
61-7	須恵器 蓋	覆土	(10.0)・…… 口縁部〜天井部 1/4		白〜灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。褐灰色、灰色。	天井部から体部は丸みを持って開き、 口縁部はやや内湾気味に折り曲がる。 紐は欠損する。	

平安時代(22)

遺物番号	種類	出土位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
61-8	須恵器 壺	覆土	(24.4)・―― 口縁部破片	白～灰色の細・粗砂粒、黒色鉱物粒、僅かの褐色鉱物粒を含む。還元焰。灰オリーブ色、灰色。	口縁部に外稜、端部にも稜をもつ。	
61-9	須恵器 壺	床直	――・―― 胴部破片	白色の細砂粒、僅かに粗砂粒・細礫を含む。還元焰。暗オリーブ灰色、灰色。	胴部外面平行叩き、内面青海波の当て具痕あり。	
61-10	須恵器 壺	甕内	――・―― 胴部破片	白色の細・粗砂粒を含む。還元焰。堅緻。灰色、鈍い赤褐色。	胴部外面平行叩き、内面ナデ。	
61-11	須恵器 壺	覆土	――・―― 口縁部破片	白色の細砂粒、僅かに細礫、黒色鉱物粒を含む。還元焰。灰白色。	口縁部に波状文を施す。	
61-12	須恵器 壺	覆土	――・―― 口縁部破片	白色の細砂粒、僅かに細礫、黒色鉱物粒を含む。還元焰。堅緻。黄灰色、灰色。	口縁部に波状文を施す。	
61-13	鉄製品 不明	覆土	(長)6.0・(幅)6.0・(厚)0.6・(重量)19.63g		角張ったU字状を呈し、断面は方形である。用途は不明。	
61-14	鉄製品 釘	覆土	(長)10.8・(幅)0.8・(厚)0.6・(重量)20.90g		先端部を欠損する。少し曲がっている。	
61-15	鉄製品 不明	覆土	(長)4.1・(幅)1.8・(厚)1.2・(重量)9.0g		中は空洞になっている。用途不明。	
61-16	鉄製品 不明	覆土	(長)2.1・(幅)1.7・(厚)0.2・(重量)2.64g		扁平な薄い板状を呈する。幅は一定している。用途不明。	
63-1	須恵器 埴	15cm 覆土	13.6・5.1・5.7 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細礫、中礫、石英を含む。還元焰(酸化焰気味)。淡黄色。	体部は僅かに丸みをもって開き、口縁部はやや外反する。内面の立上りがない。底面は回転糸切り。	
63-2	須恵器 埴	5cm	(13.6)・6.0・5.6 口縁部3/4欠損	白～灰色の細砂粒、僅かに細礫、中礫、石英の粗砂粒を含む。還元焰。軟質。淡黄色。	体部直線的に開き、ロクロ目が強く残る。底面は回転糸切り後、周辺部は高台貼付け時の回転ナデ。	
63-3	須恵器 埴	覆土	(13.1)・5.1・(6.0) 口縁部～底面1/5	白～灰色の細砂粒、僅かに5mm大の礫を含む。還元焰。軟質。鈍い黄褐色。	体部は僅かに丸みをもって開き、口縁部はやや外反する。底面は回転糸切り後、高台貼付け時の回転ナデ。	
63-4	須恵器 埴	覆土	――・5.5 体部～底面1/3	白～灰色の細・粗砂粒、石英を含む。還元焰(酸化焰気味)。黄褐色。	体部内面の立ち上がりはなだらか。底面は回転糸切り後、高台貼付け時の回転ナデ。	
63-5	須恵器 小型壺	覆土	(12.8)・―― 口縁部～胴部上位1/3	白～灰色の細砂粒を含む。還元焰。やや軟質。灰黄褐色。	ロクロ調整。外面胴部上方向寛削り。	
63-6	須恵器 小型壺	覆土	(13.7)・―― 口縁部1/4弱	白～灰色の細砂粒を含む。(酸化焰気味)。黄色、鈍い黄褐色。	ロクロ調整。外面胴部上方向寛削り。	
63-7	須恵器 壺	覆土	――・―― 胴部下位～底面1/4	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細礫を含む。酸化焰気味。灰黄褐色、鈍い黄褐色。	胴部外面縦方向寛ナデ、内面横方向ナデ。	
63-8	須恵器 羽蓋	甕内	(21.0)・―― 口縁部胴部1/4弱	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を含む。酸化焰気味。灰白色、淡黄色。	脚の付け方は比較的丁寧で鑿形に近い。外面胴部縦方向寛削り。単位は大きい。	
63-9	須恵器 壺	覆土	――・―― 胴部小片	白色の細砂粒、僅かに細礫、黒色鉱物粒を含む。還元焰。灰色。	外面は平行叩き、内面は当て具痕を丁寧にナデ削っている。	
71-1	須恵器 壺	3cm	――・―― 胴部～胴部上位1/4	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細礫、5mm大の礫を含む。還元焰。鈍い褐色。	胴部外面は平行叩き、内面は僅かに当て具痕の痕跡がみられるがナデ調整。	

平安時代(23)

遺物 番号	種類	出土 位置	法 (口徑・高さ・底径) 残存率	量 (重量)g	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
71-2	須恵器 環	床直	12.0・4.3・6.5 口縁部一部欠損		白～灰色の細砂粒を多く含む。還元焰(酸化焰気味)。黒褐色、底部褐色。	口縁部やや内傾気味。ロクロ調整。底部左回転糸切り未調整。	
71-3	須恵器 環	土坑 内	12.0・3.7・6.1 2/3		白～灰色の細砂粒を多く含む。還元焰。明褐色。	体部から口縁部にかけてやや丸みを持って開く。ロクロ調整。底部左回転糸切り未調整。	
71-4	須恵器 環	甕袖 上部	11.8・3.8・5.9 2/3		白～灰色の細砂粒を多く含む。還元焰。外面黒褐色、内面褐色。	口縁部やや外反する。ロクロ調整。底部左回転糸切り未調整。	
71-5	須恵器 環	27cm 覆土	12.6・4.2・6.9 完形		白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。口縁部黒褐色、体部～底部褐色。	器内厚手。体部から口縁部にかけて直線的に開く。底部左回転糸切り未調整。	
71-6	須恵器 環	土坑 内	11.7・3.7・6.6 3/4		白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。外面黒褐色、内面鈍い黄色。	口縁部歪みあり。内面底部と体部の境が明確。底部左回転糸切り未調整。	
71-7	須恵器 環	16cm 覆土	12.0・3.9・5.9 2/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。外面黒褐色、内面灰黄色。	体部から口唇部にかけて直線的に開く。ロクロ調整。底部左回転糸切り未調整。	
71-8	須恵器 環	12cm	11.3・3.3・5.5 3/4		白～灰色の細砂粒を多く含む。還元焰。灰色。	体部は丸みをもつ。ロクロ目顯著。底部右回転糸切り未調整。上げ底気味。	
71-9	須恵器 環	覆土	(12.0)・3.8・(7.6) 1/5		白～灰色の細砂粒を含む。還元焰。黒褐色。	口縁部はやや外反する。底部回転糸切り未調整。	
71-10	須恵器 環	16cm 覆土	(15.8)・8.0・8.8 2/3		白～灰色の細・粗砂粒、7mm 大の礫を含む。還元焰。灰色。	体部丸みを持って開く。ロクロ目顯著。底部右回転糸切り後、周辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
71-11	須恵器 環	3cm	→→→(6.6) 高台部1/4		白～灰色の細砂粒を多く含む。還元焰。灰色。	ロクロ調整。底部回転糸切り後、周辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
71-12	石製品 紡錘車	床面	(上部)3.7・(下部)4.8・(厚)1.3・(孔径)0.9 (石質)滑石質蛇紋岩・(重量)52g			断面台形状。裏面に刻線が残る以外は全面が研磨される。表面にはやや高い縁状痕。裏面に一部二重線となる井グタ状の刻線が施される。	
74-1	須恵器 環	甕内	(12.4)・3.3・7.5 2/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。灰色。	体部は丸みを持って開く。底部回転糸切り未調整。	
74-2	須恵器 環	覆土	(12.9)・3.8・5.8 2/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。暗褐色。	体部は丸みをもち、口縁部はやや外反する。底部右回転糸切り未調整。	
74-3	須恵器 環	床直	→→→7.6 体部～底部欠		白～灰色の細・粗砂粒を多く含む。粗礫を少量含む。還元焰。灰黄色。	体部は丸みを持って開く。底部右回転糸切り未調整。	
74-4	須恵器 環	床直	11.4・4.9・6.8 口縁部、高台一部欠損		白～灰色の細・粗砂粒多く、粗礫を僅かに含む。還元焰。褐色。	体部は丸みをもち直線的に開く。底部回転糸切り後、周辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
74-5	土師器 鉢	24cm 覆土	(19.8)・→→→ 口縁部～胴部上位1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含む。普通。明褐色。	口縁部は軽やかに外反する。縦作り痕あり。口縁部僅ナデ。外面胴上位磨削り、内面磨ナデ。	
74-6	土師器 鉢	覆土	→→→5.4 胴部下位～底部		白～灰色の細・粗砂粒を含む。普通。鈍い黄褐色。	底部木葉痕あり。外面胴部ハケメ。	
74-7	土師器 鉢	甕内	→→→4.8 胴部下位～底部3/4		白～灰色の細・粗砂粒を含む。普通。鈍い赤褐色。	外面胴部下位縦方向の荒削り、底部磨ナデ。	外面煤付着

平安時代(24)

遺物 番号	種類 器種	出土 位置	法 (口徑・器高・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
74-8	須恵器 甕	18cm 覆土	一→一(16.0) 胴部下位～底部 1/4	白～灰色の細・粗砂粒を多く、細砂を少量含む。還元焰。灰黄色。	ロクロ調整。外面胴部下位寛削り、底部ナデ。	
75-1	須恵器 環	覆土	一→一5.5 底部～底部1/2	白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒・細砂を含む。還元焰。灰色、浅灰色。	底部右回転糸切り未調整。	
75-2	須恵器 塊	床直	一→一5.6 底部～底部1/2	白～灰色の細・粗砂粒、少しの細砂を含む。還元焰。灰色、浅灰色。	内面の立上がりはなだらかな。器内は厚く、素地は粗い底部回転糸切り後、周辺部高台貼付け時の回転ナデ。	
76-1	須恵器 環	8cm	11.8・3.7・5.6 完形	白～灰色の粗砂粒、細砂を含む。還元焰。灰色。	底部は直線的に開く。底部右回転糸切り未調整。ロクロ調整。	
76-2	須恵器 環	覆土	(11.2)・3.5・6.1 1/2	白～灰色の細砂粒を含む。還元焰。灰色。	底部は直線的に開く。底部右回転糸切り未調整。ロクロ調整。	
76-3	須恵器 環	24cm 覆土	(10.6)・3.3・(6.2) 1/4	白～灰色の細砂粒を含む。還元焰。灰色。	底部は直線的に開く。底部回転糸切り未調整。ロクロ調整。	
76-4	須恵器 環	覆土	(15.0)・5.3・8.2 1/2	白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂、赤褐色粒を含む。還元焰。外面黒褐色、内面褐色。	底部は直線的に開く。底部回転糸切り未調整。ロクロ調整。	
76-5	須恵器 環	覆土	(12.4)・3.9・(6.4) 1/4	白～灰色の細砂粒を含む。還元焰。外面黒褐色、内面褐色。	底部中央に膨らみを持つ。底部回転糸切り未調整。ロクロ調整。	
76-6	須恵器 環	2cm	(12.2)・4.1・6.6 1/2	白～灰色の細砂粒、僅かに粗砂を含む。還元焰。灰色。	底部は丸みを持って開く。底部右回転糸切り未調整。ロクロ調整。	
76-7	須恵器 蓋	覆土	(16.0)・一→一 1/5	白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。灰色。	口縁部折り曲げ。天井部回転寛削り。ロクロ調整。	
76-8	土師器 甕	覆土	(21.0)・一→一 口縁部～胴部下 位1/5	白～灰色の細砂粒を含む。普通。褐色。	口縁部は外反する。口縁部横ナデ、指押え。外壁胴部上位横方向に寛削り。	
82-1	須恵器 環	床直	13.0・4.0・6.5 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒、細砂を僅かに含む。還元焰。褐色。	僅かに高台をもち丸みを持って開く。ロクロ調整だが作りは雑。底部は左回転糸切り未調整。	
82-2	須恵器 環	13cm	13.2・4.7・6.0 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒、細砂、黒色細砂粒を含む。還元焰。やや軟質。褐色。	器底半面は大きく歪む。底径が外径より内径の方が大きい。底部右回転糸切り未調整。	体面外面自然釉付着
82-3	須恵器 環	覆土	(11.2)・3.6・(5.7) 1/3	白～灰色の細・粗砂粒、細砂を含む。還元焰。外面オリ～灰色の釉が付着、内面灰白色。	口縁部はやや外反する。底部は右回転糸切り未調整。	体面外面自然釉付着
82-4	須恵器 環	覆土	(13.3)・4.0・(8.0) 1/5	白～灰色の細・粗砂粒、細砂を僅かに含む。還元焰。褐色。	器内は厚手である。ロクロ調整。底部は左回転糸切り未調整。	
82-5	須恵器 環	覆土	一→一7.5 底部下位～底部 3/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。やや軟質。外面褐色。内面灰白色。	底部下位に丸みを持つ。底部は左回転糸切り未調整。	
82-6	須恵器 環	覆土	一→一(9.0) 底部下位～底部 1/2	白～灰色の細・粗砂粒、細砂、褐色粗砂粒を含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い褐色。	外面ロクロ目が顕著である。底部は左回転糸切り未調整。	
82-7	須恵器 環	覆土	(15.0)・4.3・(8.5) 1/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。やや軟質。灰白色。	底部はやや丸みを持って開く。ロクロ調整。底部は回転寛削りで、中央に膨らみを持つ。	

平安時代(25)

遺物 番号	種類 形態	出土 位置	法 (口徑・高・重) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
82-8	須恵器 壺	覆土	15.3・4.5・8.0 3/4	白〜灰色の細・粗砂粒、僅かに褐色細砂粒を含む。還元焰(酸化焰気味)、鈍い褐色。	体部下位は丸みを持ち、口縁部にかけて直線的に開く。僅かに歪む。内外面ロクロ調整。	
82-9	須恵器 壺	覆土	一・一・一(径)3.6 1/2	白〜灰色の細・粗砂粒、細粒、黒色鉄粉粒を僅かに含む。還元焰。やや軟質。褐灰色。	天井部はやや平坦で丸みをもって開く。肩の中央部が僅かに突出する。天井部は回転施削り。	
82-10	須恵器 壺	床直	(20.0)一・一・一 口縁部〜胴部中 位1/4	白〜灰色の細・粗砂粒、細粒、5〜10mmの礫を少量含む。還元焰。やや軟質。灰白色。	口縁部直直気味に立上がり、胴部は丸みを持つ。胴上側変文。ロクロ調整。内面当て具痕による凹凸が著しい。	
82-11	須恵器 壺	4cm	(28.0)一・一・一 1/3	白〜灰色の細・粗砂粒を含む。還元焰。堅緻。褐灰色。	口唇部は幾直な平坦面をもつ。内外面ロクロ目が顕著である。取手部はナデ調整。	
83-1	須恵器 壺	覆土	14.3・3.5・9.0 口縁部一部欠損	白〜灰色の細・粗砂粒、僅かに細粒を含む。還元焰。外面褐白色、内面灰白色。	口縁部は僅かに歪んでいる。底部は回転施削り後、一方の方向の施ナデ。	
83-2	須恵器 壺	覆土	14.0・4.7・7.0 3/4	白〜灰色、黒色の細・粗砂粒を含む。還元焰。褐灰色。	内外面に火だすきがある。底部は外縁より内縁が大きい。底部右回転施削り。	
83-3	須恵器 壺	覆土	(12.0)・4.2・(6.0) 1/4	白〜灰色の粗砂粒を含む。還元焰。やや軟質。鈍い黄褐色、褐灰色。	体部は直線的に開く。底部は右回転施削り後、一方の方向の施ナデ。	
83-4	須恵器 壺	覆土	(12.1)・3.8・6.1 1/2	白〜灰色・褐色細砂粒を含む。還元焰。やや軟質。暗灰色、鈍い黄褐色。	口縁部は外反し、体部下位は窄まる。底部左回転施削り未調整。	
83-5	黒色土器 壺	14cm 覆土	一・一・一(台 脚) (12.2) 体部下位〜底部 1/2	少量の白色細砂粒、僅かに褐色・黒色鉄粉粒を含む。酸化焰。明黄褐色。	内面黒色処理後丁寧な磨き。底部回転施削り。裏台付。	
83-6	土師器 壺	床直	20.2一・一・一 口縁部〜胴部上 位	白色の細・粗砂粒、角閃石を少量含む。普通。外面黒褐色、内面褐色。	口縁部は緩やかに外反し、頸部に粘土被合痕あり。胴部縦方向の磨削り。	
83-7	土師器 小壺	床直	13.6・13.9・4.2 3/4	白〜灰色の細砂粒、僅かに粗砂粒、細粒、褐色細砂粒を含む。普通。鈍い褐色。	口縁部横ナデ。胴部外面磨削り、内面磨ナデ。	
83-8	須恵器 壺	床直	一・一・一 1/2	白〜灰色の細・粗砂粒を多く、細粒を少量含む。還元焰。灰黄色。	底部丸底。胴部外面に平行叩きあり、内面素文による当て具痕。	
83-9	砥石	覆土	(縦)8.2・(横)4.3・(厚)3.3・(重量)225.0g (石質)細粒安山岩		角礫を素材とする。その内の一面を短軸方向に集中して使用し、U字状の凹みとなる	
86-1	須恵器 壺	覆土	(11.6)・3.7・(6.0) 1/3	白〜灰色の細砂粒、黒色鉄粉粒を含む。還元焰。灰色。灰軸はオリブ灰色。	施胎は体部外面のみハケ塗り。底部右回転施削り未調整。	灰軸
86-2	須恵器 壺	覆土	一・一・一7.6 体部〜底部3/4	白〜灰色の細砂粒を多く含む。還元焰。灰色。	ロクロ調整。底部右回転施削り未調整。	
87-1	黒色土器 小壺	覆土	(5.0)一・一・一 1/6	白〜灰色の細砂粒を多く含む。普通。外面赤褐色、内面黒色。	口縁部内傾する。口縁部外面横方向の磨き、体部磨き。内面黒色処理。	
87-2	須恵器 壺	覆土	(12.0)一・一・一 口縁部のみ1/6	白〜灰色の細砂粒を多く含む。還元焰。灰色。	口唇部が上につまみ上げられ、縁帯を持つ。内面ロクロ目顕著。	
88-1	須恵器 壺	43cm 覆土	(11.7)・3.8・3.7 1/2	白〜灰色の細・粗砂粒、石英を僅かに含む。還元焰。褐灰色。	体部は丸みを持って開く。ロクロ調整。底部左回転施削り未調整。	

平安時代(26)

遺物番号	種類	出土位置	法 (口縁・器高・底径) 残存率	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
88-2	須恵器 杯	8cm	11.5・3.6・5.4 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒、4～5mmの礫を含む。 還元焰。やや軟質。褐灰色。	口縁部はやや外反する。外面口クロ調整痕あり。 底部右回転糸切り未調整。	
88-3	須恵器 杯	覆土	11.2・3.7・5.7 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を僅かに含む。還元焰。やや軟質。淡黄褐色、黒褐色。	体部から口縁部にかけて直線的に開く。 底部回転糸切り未調整。	
88-4	須恵器 杯	8cm	(11.5)・3.6・5.5 1/3	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を僅かに含む。還元焰。灰色。	体部はやや丸みを持って開く。内外面口クロ調整。 底部右回転糸切り未調整。	
88-5	須恵器 杯	覆土	(12.0)・3.8・5.7 1/4	白～灰色の粗砂粒、4～5mmの礫を僅かに含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い橙色。	体部はやや丸みを持って開く。口クロ調整。底部右回転糸切り未調整。内面底部に「×」の線刻あり。	
88-6	須恵器 杯	覆土	(14.0)・5.2・(8.0) 1/5	白～灰色の細・粗砂粒、石炭を僅かに含む。還元焰。軟質。鈍い橙色、褐灰色。	体部は丸みを持って開く。内外面口クロ調整。	
88-7	須恵器 杯	掘方床直	14.8・―― 口縁部～体部1/2	白～灰色の細・粗砂粒、4～7mmの赤褐色粒を僅かに含む。還元焰(酸化焰気味)。鈍い橙色。	体部丸みを持って開く。内外面横方向の緩な風磨き。	
88-8	須恵器 埴	覆土	――・8.5 底部2/3	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を含む。還元焰。褐灰色。	底部回転糸切り後、周辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
88-9	土師器 埴	覆土	(20.0)・―― 口縁部～胴部上位1/8	白～灰色の細・粗砂粒を含む。普通。鈍い橙色。	口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁部横ナデ。胴部外面寛削り、内面寛ナデ。	
88-10	土師器 埴	覆土	(18.0)・―― 口縁部～胴部上位1/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。普通。鈍い赤褐色。	口縁部緩やかに開き、口唇部は内傾する。口縁部横ナデ。胴部外面寛削り、内面寛ナデ。	
88-11	土師器 埴	30cm 覆土	――・3.5 胴部下位～底部のみ	白～灰色の細・粗砂粒を含む。普通。外面鈍い橙色・黒褐色、内面褐色。	器内は薄手である。胴部外面横方向の寛削り、内面寛ナデ。	外面煤付着
88-12	土師器 埴	覆土	(19.0)・―― 口縁部～胴部上位1/5	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を少量含む。普通。外面黒褐色、内面褐色。	口唇部に縁帯を持つ。胴部外面割離が著しい。口縁部横ナデ。胴部外面寛削り、内面寛ナデ。	
88-13	須恵器 埴	覆土	(18.0)・15.5・10.0 胴部～底部1/3	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を僅かに含む。還元焰(酸化焰気味)。外面黒色、内面鈍い褐色。	口クロ調整。胴部外面は器面の割離が著しい。底部は寛ナデと思われ、切り離し技法は不明。	
88-14	須恵器 埴	11cm 覆土	――・―― 胴部破片	白色の細砂粒、僅かに黒色鉱物粒を含む。還元焰。灰色。	外面平行引き目度をナデ削している。内面寛海攻の当て具痕。	
88-15	須恵器 埴	43cm 覆土	――・―― 胴部破片	白色の細砂粒、細礫、黒色鉱物粒、石炭を含む。還元焰。灰色。	外面平行引き目度をナデ削している。内面当て具痕。	
92-1	須恵器 杯	2cm	12.6・3.7・5.3 1/2	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を少量含む。還元焰。内面灰白色、外面暗灰色。	器内は口唇部に向かって薄くなる。底部右回転糸切り未調整。	
92-2	須恵器 杯	覆土	(12.0)・(4.6)・(6.0) 1/2弱	白色粗砂粒を含む。還元焰。灰白色。	体部は直線的に開く。体部口クロ順着。 底部は右回転糸切り未調整。	
92-3	須恵器 杯	覆土	12.6・3.6・6.5 口縁部一部欠損	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに細礫を含む。還元焰。灰白色。	底部は右回転糸切り後、周辺部右回転寛削り。中央部に焼成前の線刻「ノ」あり。	
92-4	須恵器 杯	20cm 覆土	13.0・3.8・8.0 3/4	白～灰・灰褐色細・粗砂粒を含む。還元焰。やや軟質。淡黄色。	体部はやや丸みを持つ。底部は左回転糸切り後、周辺部は左回転寛削り。	

平安時代(27)

遺物 番号	種類	出土 位置	法 (口徑・高・底径) 残存率 cm	胎土・構成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
92-5	須恵器 坏	覆土	(13.2)・3.9・6.5 口縁部～底部1/3	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに礫を含む。 還元焰。やや硬質。灰白色。	体部から底部にかけて自然釉付着。 底部は右回転糸切り未調整。	自然釉
92-6	須恵器 坏	覆土	(13.4)・3.5・7.0 口縁部～底部1/3	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。浅黄褐色。	体部はやや丸みを持って開く。ロクロ目が顕著。 底部は左回転糸切り未調整。	
92-7	須恵器 坏	覆土	(14.7)・4.6・8.5 1/2弱	白～灰色の粗砂粒を含む。 還元焰。やや軟質。灰白色。	体部はやや丸みをもち、器内は厚手。 底部は回転篋切り後、右回転篋削り。	
92-8	須恵器 坏	5cm	12.0・3.5・6.5 3/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。鈍い 褐色。	体部から底部境に丸みを持つ。 底部右回転糸切り後、周辺部は手持ち 篋削り調整。	
92-9	須恵器 坏	床直	13.0・4.1・6.5 口縁部～底部2/3	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。体部 褐色、口縁部黒色。	体部はやや丸みを持つ。 底部は左回転糸切り未調整。	
92-10	須恵器 坏	覆土	11.1・7.0 底部1/2	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに 礫を含む。 還元焰。灰白色。	底部右回転糸切り後、「+」字の篋切り。	
92-11	須恵器 坏	1cm	(13.6)・6.1・(9.0) 1/4	白色粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	器内は薄手で比較的丁寧に作られている。 高台部はしっかり付けられ端部は シャープである。	
92-12	須恵器 坏	覆土	(15.1)・8.0・(9.0) 口縁部～底部1/4	白～灰色の細・粗砂粒、細礫を 少量含む。 還元焰。褐灰色。	口唇部は薄手。底部回転篋切り後、周 辺は高台貼付け時の回転ナデ。	
92-13	須恵器 蓋	覆土	(18.3)・11.1 口縁部～体部1/3	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	口唇部は歪み、浅い紋線が走る。天井 部の器内は厚手である。外面に自然釉 が付着する。	体部外面 自然釉
92-14	土師器 壺	床直	(20.0)・11.1 口縁部～胴部上 位1/4	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに 褐色粒を含む。 普通。鈍い赤褐色。	口縁部は短く外反し、胴部は張る傾向 にある。 口縁部横ナデ。胴部外面篋削り、内面 篋ナデ。	
92-15	土師器 壺	5cm	(20.0)・11.1 口縁部～胴部1/4	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに 角閃石を含む。やや硬質。 鈍い赤褐色。	口唇部は緩やかに外反する。頸部横ナ デ。胴部外面篋削り、内面ナデ。	
92-16	土師器 壺	床直	(12.8)・11.1 口縁部～胴部上 位1/4	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに 角閃石を含む。普通。鈍 い褐色。	口縁部は緩やかにくびれる。口縁から 頸部外面篋削り。胴部横方向の篋削り。	
92-17	土師器 壺	甕左 袖部	11.1・4.8 胴部下位～底部	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。鈍い赤褐色。	胴部は縦方向の篋削り。底部篋ナデ。	
92-18	土師器 壺	床直	11.1・4.3 胴部下位～底部 1/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 やや硬質。暗赤褐色。	外面胴部から底部篋削り。内面篋ナデ。	
92-19	須恵器 鉢	床直	(29.8)・11.1 口縁部～胴部上 位1/4	白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。褐灰色。	口縁部に縁帯をもつ。胴部は器らみ、 ロクロ目が顕著である。	
92-20	須恵器 鉢	覆土	(23.8)・15.8・ 11.4 1/4	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに 2～5mmの礫を含む。還元 焰。明赤灰色。	口唇部が上につまみ上げられ縁帯をも つ。全体的に器内は厚手である。胴部 ロクロ目が顕著である。	
93-1	須恵器 坏	15cm 覆土	12.6・4.2・5.9 1/2	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰。浅黄色。	体部直線的に開く。器内は比較的薄手。 底部右回転糸切り未調整。	
93-2	須恵器 皿	床直	15.0・3.7・11.0 口縁部～底部欠損	白～灰色の細砂粒を含む。 還元焰、堅緻。浅黄色、灰 色。	底部は中心に僅かに糸切り痕を残し、 回転篋削り。 全体的に施き型みがある。高台付。	
93-3	土師器 壺	覆土	(20.0)・11.1 口縁部3/8	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。暗赤褐色。	口縁部は弱い「コ」字状を呈す。 外面胴部篋削り。	

平安時代(28)

通物 番号	種 類	型 式	出土 位置	法 (口縁・器底・底面) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
93-4	須恵器 瓶		12cm 覆土	(15.0)・一 口縁部のみ1/2		白～灰色の細・粗砂粒、黒色 粘土粒を含む。還元焰。黄褐色。灰色。	口縁部は反外し縁帯をもつ。 内外面とも自然釉付着。ロクロ調整。	自然釉
93-5	須恵器 皿		12cm 覆土	一 胴部下位～底部 小片		白色細・粗砂粒、僅かに6mm 大の褐色粘土粒を含む。還元 焰。軟質。灰白色、オリーブ 黄色。	ロクロ調整。内外面回転削り。底部 は削げ。	
93-6	須恵器 壺		12cm 覆土	一(14.5) 胴部中位～底部 1/5		白～灰色の細・粗砂粒、僅かに 5mm大の礫を含む。還元 焰。灰色。	胴部外面は平行叩き、内面は素文の当 て具痕。 胴部下位は横方向寛ナデ。底部寛ナデ。	
94-1	須恵器 環		覆土	(12.2)・3.8・(6. 0) 1/4		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	体部やや丸みを持って開く。 底部回転未切り未調整。	
94-2	須恵器 環		4cm	(13.3)・4.0・6.2 2/3		白～灰色の細砂粒、石英を 多く含む。還元焰。灰色。	体部直線的に開く。ロクロ目顯著。 底部右回転未切り未調整。	
94-3	土師器 環		床直	一(6.0) 底部1/3		白～灰色の細砂粒を含む。 酸化焰。褐色。	ロクロ調整。 底部左回転未切り未調整。	
94-4	土師器 環		覆土	一・5.6 体部下位～底部		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 酸化焰。鈍い黄褐色。	ロクロ調整。 底部左回転未切り未調整。	
94-5	土師器 環		覆土	一・7.2 体部下位～底部		白～灰色の細砂粒を多く含 む。酸化焰。褐色。	底部回転未切り未調整。焼成後「+」 の痕跡あり。	
94-6	須恵器 埴		3cm	15.3・6.2・6.8 口縁部一部欠損		白～灰色の細・粗砂粒、石英 を多く含む。還元焰。灰黄色。	体部ロクロ目顯著。底部右回転未切り 後、周辺は高台貼付け時による回転ナ デ。	
94-7	土師器 壺		覆土	(16.9)・一 口縁部1/6		白～灰色の細砂粒を多く、 角閃石を僅かに含む。普通。 褐色。	口縁部「コ」字状を呈す。 口縁部横ナデ。胴部寛ナデ。	
94-8	灰釉陶器 長頸瓶		覆土	(12.2)・一 口縁部1/6		白～灰色の細砂粒を多く含 む。還元焰。灰色。釉は緑灰色。	口唇部が上につまみ上げられ、縁帯を 持つ。 内外面とも施釉はハケ塗り。	灰釉
94-9	須恵器 壺		電内	(29.2)・一 口縁部1/6		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。灰色。	口唇部内傾する。内面紐作り痕あり。	
95-1	須恵器 環		覆土	(12.5)・3.7・5.5 1/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 還元焰。黒褐色。	器内厚手。ロクロ目顯著。 底部右回転未切り未調整。	
95-2	須恵器 埴		電右 袖部	14.2・5.4・6.7 3/4		白～灰色の細砂粒、僅かに 粗砂粒、細礫。7mm大の礫 を含む。還元焰。灰オリーブ 色。	底部右回転未切り後、周辺は高台貼付 け時の回転ナデ。	体部外面 黒書「上」
95-3	須恵器 埴		覆土	一(7.5) 底部～高台部1/ 3		白～灰色の細砂粒を多く含 む。還元焰。灰白色。	底部回転未切り調整後、周辺は高台貼 付け時の回転ナデ。	
95-4	土師器 壺		電右 袖部	(20.0)・一 口縁部～胴部下 位1/3		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。暗褐色。	口縁部「コ」字状を呈す。口縁部横 ナデ。胴部外面斜め横方向の寛ナデ、 内面寛ナデ。	
95-5	土師器 壺		床直	(19.0)・一 口縁部～胴部上 位1/6		白～灰色の細・粗砂粒を含む。 普通。褐色。	口縁部「コ」字状を呈す。口縁部横 ナデ。外面胴上位横方向の寛ナデ、内 面寛ナデ。	
95-6	須恵器 壺		覆土	一 胴部下位1/6		白～灰色の粗砂粒を多く含 む。還元焰。灰色。	外面胴下位縦方向の削り。内面胴部 紐作り痕あり、寛ナデ。	
96-1	須恵器 羽釜		電内	18.0・27.4・11.0 1/2		白～灰色の細・粗砂粒、細礫 を含む。還元焰(酸化焰気 味)。やや軟質。鈍い褐色。	全体的に丸みを持ち、口縁部は内湾す る。比較的粗い作りである。胴部外面 縦方向の寛ナデ、内面寛ナデ。	

平安時代(29)

遺物 番号	種 別	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備 考
96-2	須恵器 羽釜	竈内	(20.0)・--- 口縁部1/3	白〜灰色の細・粗砂粒、石英 の粗砂粒を僅かに含む。還元 焰(酸化焰気味)。やや軟 質。鈍い黄褐色。	口縁部は外反し、胴部は丸みを持つ。 作りは焼。 胴部外面粗い荒削り、内面荒ナデ。	
97-1	須恵器 環	覆土	(13.9)・4.6・(5. 2) 1/4	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰。灰色。	口縁部外反気味、体部は直線的に開く。 底部回転糸切り未調整。	
97-2	須恵器 碗	2cm	14.5・5.5・5.8 3/4	白〜灰色の細砂粒、僅かに 細砂を含む。 還元焰。浅黄色、黄灰色。	口縁部外反気味、体部は直線的に開く。 底部右回転糸切り後、高台貼付け。	
97-3	須恵器 小型壺	覆土	(10.0)・--- 口縁部〜胴部上 位1/4	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰(酸化焰気味)。鈍い 褐色。	器内はやや厚手で、口唇部は丸みを持 つ。 ロクロ調整。	
97-4	土師器 壺	竈内	(19.5)・--- 口縁部〜胴部上 位1/4	白〜灰色の細砂粒、赤褐色 粒を少量含む。 普通。褐色。	口縁部は崩れた「コ」の字状を呈す。	
97-5	須恵器 釜	床直	13.8・--- 口縁〜胴部上位 1/2	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰。浅黄色。	口唇部は垂直に立ち上がり、内面に比 線が走る。 ロクロ調整。	
97-6	須恵器 釜	竈内	---・15.8 底部	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰。浅黄色。	底部は平底。胴部下位は回転荒削り。	
97-7	須恵器 甕	14cm 覆土	--- 胴部破片	白〜灰色の細・粗砂粒を多 く、石英を少量含む。還元 焰(酸化焰気味)。褐灰色、 鈍い黄褐色。	ロクロ調整。	外周胴部墨 書判読不可
97-8	敲石	覆土	(縦)13.7・(横)4.2・(厚)380.0g (石質)粗粒安山岩		角柱状の西端に敲打が集中し、僅かに焼けている。	
100-1	須恵器 杯	覆土	(13.6)・4.5・6.1 1/2	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰。鈍い褐色。	体部は直線的に開く。ロクロ目顯著。 底部右回転糸切り未調整。	
100-2	黒色土器 杯	覆土	---・6.0 底部	白色・褐色の細・粗砂粒、細 砂を含む。素地は粗い。酸 化焰。外面褐色、内面黒色。	内面黒色処理後、底部放射状磨き。 外周右回転糸切りか?	
100-3	須恵器 碗	床直	15.6・6.0・(7.0) 1/2	白〜灰色の細砂粒を含む。 還元焰。鈍い黄褐色、黒色。	ロクロ目顯著。底部回転糸切り後、高 台貼付け。 内面墨書は判読不可。	体部内外 周面[注]
100-4	須恵器 碗	覆土	(17.6)・7.5・7.6 1/2	白〜灰色の細砂粒、僅かに 細砂を含む。 還元焰。鈍い黄褐色、褐灰 色。	体部はやや丸みを持って開き、口縁部 は外反気味。 底部回転荒ナデ後、高台貼付け。ロク ロ調整。	
100-5	須恵器 小型壺	竈内	---・7.8 胴部〜底部1/2	白〜灰色の細砂粒、僅かに 石英を含む。 還元焰。灰色。	ロクロ調整。胴部下位に横方向荒削り。 底部は荒ナデ。	
100-6	須恵器 羽釜	竈内	(20.7)・--- 口縁部〜胴部1/ 4	白〜灰色の細砂粒、僅かに 石英を含む。 還元焰。灰色。	胴は比較的にしっかりしている。 口縁部横ナデ。胴部上方向に荒削り。	
100-7	須恵器 羽釜	竈左 袖部	19.5・--- 口縁部〜胴部上 位3/4	白〜灰色の細砂粒、僅かに 石英を含む。 還元焰。灰色、灰白色。	胴は比較的大きい。 口縁部横ナデ。胴部上方向に荒削り。	
2号溝 -1	須恵器 碗	覆土	---・6.5 底部下位〜高台 部1/3	白〜灰色の細砂粒多く、石 英を多く含む。還元焰(酸 化焰気味)。浅黄色。	底部右回転糸切り後、周辺は高台貼付 け時の回転ナデ。	内面底部 に墨書[注]

遺構外出土遺物 (第334、335図参照)

遺物 番号	種類 形態	出土 位置	法 (口径・高さ・底径) 残存率	量 cm	胎土・焼成・色調	成形・調整技法の特徴	備考
1	土師器 甕	表掘	(13.7)・―― 口縁部～胴部中 位1/3	――	白～灰色の細・粗砂粒、僅かに 磁石、黒色細砂粒を含む。 普通。鈍い黄褐色。	外面胴部磨削り後、粗い磨削き。内面 口縁部ハケ目、胴部磨削き。	
2	土師器 甕	C区 表掘	(13.1)・―― 口縁部～胴部下 位1/3	――	白～灰色の細砂粒、僅かに 磁石を含む。 普通。黒褐色、明赤褐色、 鈍い黄褐色。	口縁部横ナデ。外面胴部は器面の荒れ により不明瞭だが、下位に細かいハケ 目が見える。内面はハケ目。	
3	土師器 高坏	C区 表掘	14.0・―― 坏部	――	白～灰色の細砂粒多く含 む。 やや硬質。暗赤褐色。	口唇部内湾気味。内外面とも丁寧な磨 削き。内面横ナデ。	内外面丹 彫
4	土師器 鉢	C区 表掘	9.0・2.8・―― 底部一部欠損	――	白～灰色の細砂粒、僅かに 赤褐色粒を含む。 普通。黒褐色。	全体に雑な作り。外面磨削り後、磨削 き。内面横ナデ。	
5	土師器 鉢	C区 表掘	8.7・3.1・―― 口縁部一部欠損	――	白～灰色の細砂粒を含む。 普通。鈍い褐色。黒褐色。	内外面磨削り後、磨削き。	
6	須恵器 坏	表掘	11.8・3.9・5.5 2/3	――	白～灰色の細・粗砂粒、黒色 磁石粒を多く含む。還元焰。 灰色、釉は灰オリーブ色。	体部から口縁部にかけて直線的に開 く。 底部右回転糸切り未調整。	自然釉
7	須恵器 坏	C区 表掘	(12.5)・3.6・6.3 2/3	――	白～灰色の細砂粒を多く含 む。 還元焰。やや軟質。灰色。	体部から口縁部にかけて直線的に開 く。 底部右回転糸切り未調整。	
8	須恵器 坏	表掘	13.0・3.7・7.4 1/2弱	――	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。還元焰(酸化焰気味)。 外面黒褐色、内面鈍い黄褐 色。	器肉厚手。体部ロクロ目顯著。 底部回転糸切り調整後、横ナデあり。	
9	須恵器 甕	表掘	――・――(縦径)5.0 1/3	――	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰白色。	高台状のつまみが付く。天井部回転磨 削り。	
10	須恵器 甕	表掘	――・―― 口縁部～胴部1/4	――	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰色。	口唇部を欠く。口縁部内面、肩部外面 に自然釉が付着する。	自然釉
11	須恵器 甕	C区 表掘	――・―― 胴部破片	――	白～灰色の細・粗砂粒を含 む。 還元焰。灰色。	内面は青黄緑色の当て具痕。	外面胴部 に自然釉
12	陶磁器 埴	表掘	――・――4.2 体部下位～高台 1/2	――	胎土は淡黄色のモグサ土。 釉は透明感のある暗黄色。	京焼き風陶器。付け高台。登付部は無 釉。全体に細かな貫入。	

金属器観察表 (第335図参照)

遺物 番号	種類 形態	出土 位置	法 (長・幅・厚さ) cm	形状・整・成	備考
13・14	鉄製品 不明	C区 表掘	5.7・(2.8)・0.5	三角形状を呈し、下部は剝離したものと思われる。用途不明。内外 面に赤色塗彩痕が残る。	13.41.87 g 14.35.34 g
15	鉄製品 不明	位置 不明	5.0・4.7・0.5	用途不明。上部は輪状を呈し、下部でやや直角に折れ曲がりまっ すぐになる。	19.87 g
16	鉄製品 刀子	位置 不明	(6.3)・1.5・0.5	刃先部と基部を欠損する。刃縁部は明確に残存する。	91.5 g
17	鉄製品 刀子	位置 不明	(9.3)・1.4・0.3	刃先部と基部を欠損する。区(まち)は不明瞭。2辺が接合する。	
18	鉄製品 鏃	C区 覆土	(8.5)・2.1・0.3	耳部側を残し、刃先側を欠損する。耳部の折り返し幅は約1cm。	13.44 g
19	鉄製品 鉄鏃	位置 不明	大5.5・3.4・3.3 小4.1・3.4・2.0		
20	鉄製品 不明	位置 不明	7.9・――・0.2	平面は五角形状を呈し、中央に鉄の丸い盛り上がりが見られる。右 端部は少し折曲がっている。用途不明。	26.57 g

第5節 遺構観察表

弥生時代後期末～古墳時代前期住居址一覧表

■26号住居が円2号土坑を切る

住居番号	形 態	長軸m	短軸m	面積㎡	方 位	壁高cm	周 溝	柱 穴	床坑	伊・電の位置	時 期	重複関係
26	長方形	7.3	6.2	45.26	N-2-W	18	全周	7	—	中央北側	II	*26住→12坑
34	長方形	5.3	4.1	21.73	N-106-E	50	不明確	2	—	中央北側	II	5掘→34住
36	隅丸正方形	7.5	7.2	54	N-88-E	50	全周	11	—	中央北西側	II	5掘→36住
44	—	—	—	—	N-不明-E	30	なし	0	—	—	—	46住→44住
46	—	—	—	—	N-不明-E	10	全周	0	—	—	—	46住→44住
48	長方形	3.3	3.3	10.89	N-99-W	32	全周	3	方溝	確認	II	なし
51	長方形	5.2	4.8	24.96	N-92-W	50	全周	10	方溝	中央西側	II	54住→51住
52	隅丸長方形	5.2	4.1	21.32	N-5-W	34	なし	0	—	—	—	52住→13坑
53	隅丸正方形	5.9	5.8	34.22	N-5-W	75	全周	5	0	中央北側	II	28住→53住
57	隅丸正方形	6.9	6.4	44.16	N-174-E	50	全周	15	—	なし	II	35住→57住
58	隅丸長方形	5.3	4.3	22.79	N-17-W	31	全周	9	—	3基あり	II	なし
62	長方形	6.4	4.2	26.88	N-5-E	47	なし	3	—	北側中央	I	なし
64	長方形	6.6	4.1	27.06	N-6-W	46	不明確	4	—	北側中央	I	43住→64住
65	隅丸正方形	5.5	5.3	29.15	N-47-W	51	全周	4	0	南壁沿い東側	II	なし
66	長方形	4.6	4	18.4	N-51-W	51	全周	0	溝有	中央西側	II	なし
67	長方形	5	4.6	23	N-36-E	79	全周	4	方溝	中央北側	II	なし
68	正方形	4	3.9	15.6	N-86-W	40	全周	4	—	確認	II	なし
69	長方形	11.2	7.2	80.64	N-31-W	70	北東西	19	—	確認	I	54住→69住
72	不正長方形	6	4.1	20.5	N-166-W	60	全周	3	方溝	なし	II	72住→80住
73	長方形	6.3	5.7	35.91	N-26-W	64	全周	7	—	中央北壁側	II	なし
78	不正長方形	10.4	7	72.8	N-15-W	72	なし	5	—	中央北側	I	なし
79	長方形	7	5.2	36.4	N-8-W	42	なし	10	—	北側中央	I	61住→79住
80	長方形	6.6	4.6	30.36	N-8-W	26	なし	4	—	2基あり	II	72住→80住→14坑
81	長方形	7.4	5.4	39.96	N-12-W	58	なし	8	—	2基あり	I	なし
84	不正方形	4.3	3.3	14.19	N-15-E	38	なし	0	0	なし	II	なし
85	長方形	4.8	4.2	20.16	N-17-W	56	なし	2	—	中央北側	I	なし
90	長方形	6.2	5.6	34.72	N-16-W	61	全周	4	溝有	中央北側	II	76住→90住
91	不正長方形	5.3	3.1	16.43	N-115-W	55	なし	3	—	中央西側	I	63住→91住

平安時代住居址一覧表(1)

住居番号	形 態	長軸m	短軸m	面積㎡	方 位	壁高cm	周 溝	柱 穴	床坑	伊・電の位置	時 期	重複関係
1	長方形	4.2	4	16.8	N-110-E	39	全周	0	3	東壁中央	IV	なし
2	台形	4.9	3.9	19.11	N-113-E	28	北東西	5	3	東壁中央南側	IV	なし
3	正方形	4.1	3.9	15.99	N-106-E	24	全周	10	4	東壁中央南側	V	なし
4	長方形	3.1	3	9.3	N-104-E	38	二重	0	0	東壁南側	VII	なし
5	不正長方形	3.9	3.8	14.82	N-107-E	42	全周	4	2	東壁中央南側	VI	5住→6坑
6	長方形	4.7	3.7	17.39	N-103-E	11	全周	2	1	東壁南側	VII	なし
7	不正正方形	2.9	2.6	7.54	N-107-E	21	全周	0	0	東壁南側	VII	なし

平安時代住居一覧表(2)

住居番号	形 態	長軸m	短軸m	面積㎡	方 位	壁高cm	周 溝	柱 穴	床 坑	炉・竈の位置	時 期	重複関係
8	不正長方形	5	5	25	N-110-E	39	西半部	5	2	東壁中央	Ⅷ	なし
9	長方形	4	3.5	14	N-95-E	41	全周	0	1	東壁中央南側	Ⅵ~Ⅶ	なし
10	長方形	3.9	3.3	13.87	N-111-E	42	全周	0	0	東壁南側	Ⅷ	10住→11住
11	長方形	4.7	4.3	20.21	N-112-E	59	全周	1	2	東壁中央南側	Ⅳ	10住→11住
12	不正正方形	3.8	3.8	14.44	N-105-E	25	北東側	0	0	東壁中央	Ⅷ	なし
13	不正長方形	3.8	3.4	12.92	N-105-E	13	なし	0	4	東壁中央南側	Ⅶ~Ⅷ	なし
14	長方形	3.3	3	9.9	N-107-E	9	なし	0	2	東壁	Ⅷ	なし
15	長方形	5.5	4.4	24.2	N-110-E	38	全周	7	5	東壁南側	Ⅵ	なし
16	長方形	4.9	4.6	22.54	N-113-E	34	全周	7	7	2基あり	Ⅵ	なし
17	近台形	4.4	3.8	16.72	N-102-E	50	全周	2	5	東壁中央	V	なし
18	正方形	4.1	3.6	14.76	N-107-E	38	全周	5	3	東壁南側	Ⅵ	なし
19	長方形	4.6	4.6	21.16	N-101-E	26	北	5	3	東壁中央	Ⅳ	なし
20	—	3.5	—	—	N-115-E	49	なし	0	1	東壁	—	なし
21	近長方形	4.3	3.9	16.77	N-106-E	24	北西南	0	7	東壁中央	Ⅳ	なし
22	長方形	4.4	4.1	18.04	N-100-E	25	全周	0	0	東壁中央南側	Ⅷ	なし
23	長方形	3.9	3.6	14.04	N-116-E	34	全周	0	2	東壁南側	Ⅷ	なし
24	近正方形	3.9	3.4	13.26	N-86-E	28	なし	0	4	東壁中央南側	Ⅵ	なし
25	近長方形	4.8	4.6	22.08	N-109-E	30	北他	0	5	東壁中央	Ⅳ	なし
27	長方形	5.4	4.6	24.84	N-87-E	56	なし	13	4	東壁南側	V	27住→56住・70住
28	長方形	3.7	3.6	13.32	N-91-E	35	北東西	0	1	東壁中央南側	Ⅷ	28住→53住
29	正方形	3.4	3.3	11.22	N-95-E	—	なし	0	0	東壁南側	—	なし
30	長方形	3.8	3.7	14.06	N-77-E	40	全周	0	1	東壁中央南側	Ⅲ~Ⅳ	なし
31	長方形	6.3	4.3	27.09	N-84-E	45	全周	9	7	東壁中央	Ⅲ	なし
32	不正正方形	6.3	6.3	39.69	N-91-E	35	部分	9	12	東壁中央	Ⅳ	なし
33	長方形	5.4	4.6	24.84	N-86-E	33	全周	11	12	東壁中央	V	なし
35	長方形	5.1	4.7	23.97	N-102-E	50	全周	3	4	東壁中央南側	V	35住→57住
37	不正正方形	3.8	3.5	13.3	N-86-E	40	全周	0	1	東壁中央南側	Ⅲ	なし
38	長方形	4.3	4.1	17.63	N-134-E	69	北東西	0	3	東壁中央南側	Ⅵ	なし
39	不正長方形	3.7	3.1	11.47	N-79-E	29	一部	0	0	東壁中央南側	Ⅶ~Ⅷ	なし
40	近台形	4.8	4.5	21.6	N-96-E	62	全周	0	2	東壁南側	Ⅳ	なし
41	—	5.1	—	—	N-98-E	35	北東西	5	2	—	Ⅵ	なし
42	—	—	—	—	N-不明-E	—	—	—	—	—	—	なし
43	不正正方形	5.2	5	26	N-76-E	56	北半分	2	6	東壁中央南側	Ⅳ	43住→64住
45	—	—	—	—	N-不明-E	40	なし	0	0	調査範囲外	Ⅳ	なし
47	割断正方形	6.7	6.3	42.21	N-85-E	65	全周	8	10	東壁中央南側	Ⅲ	30住・71住→47住
49	長方形	4.8	4.5	21.6	N-87-E	42	一部	4	3	東壁中央	V	なし
50	隅丸長方形	4.4	3.4	14.96	N-85-E	30	全周	1	1	東壁南コーナー	Ⅲ~Ⅳ	50住→47住
54	不正正方形	3.8	3.5	13.3	N-95-E	62	全周	1	2	再確認	Ⅳ	54住→51住・60住
55	不正長方形	4.9	4.4	21.56	N-84-E	24	なし	0	0	東壁南側	XI	なし

平安時代住居址一覧表(3)

住居番号	形 態	長軸m	短軸m	面積㎡	方 位	壁高cm	周 溝	柱 穴	床 坑	炬・竈の位置	時 期	重複関係
56	長方形	5	3.5	17.5	N-82-E	29	全周	7	0	東壁	Ⅷ	56住→27住
59	正方形	4.5	4.3	19.35	N-82-E	28	北西	3	4	東壁南側	Ⅷ	なし
60	長方形	6	5.7	34.2	N-95-E	58	全周	9	7	東壁中央	Ⅲ	88住→60住
61	正方形	3.7	3.3	12.21	N-81-E	55	全周	0	3	東壁中央南側	Ⅳ	61住→79住
63	長方形	3.8	2.7	10.26	N-100-E	33	なし	0	0	東壁中央南側	Ⅶ	63住→91住
70	—	—	—	—	N-87-E	32	なし	0	0	調査範囲外	—	70住→27住
71	隅丸正方形	4.1	4.1	16.81	N-86-E	52	西	0	1	東壁中央南側	Ⅳ	71住→44住
74	不正長方形	3.9	3.4	13.26	N-76-E	36	なし	0	0	東壁中央	Ⅳ	なし
75	—	4.2	—	—	N-不明-E	49	なし	0	0	調査範囲外	Ⅶ-Ⅷ	なし
76	正方形	3.6	3.3	11.88	N-107-E	49	なし	0	2	東壁中央	Ⅲ	76住→90住
77	長方形	4	3.2	12.8	N-111-E	41	なし	4	3	東壁中央南側	—	77住→1方墓
82	長方形	3.9	3.6	14.04	N-108-E	44	一部	0	3	東壁中央南側	Ⅳ	82住→1方墓
83	不正長方形	4.7	4.5	21.15	N-92-E	60	北西	0	0	東壁中央	Ⅲ	なし
86	—	3.8	3.3	12.54	N-104-E	20	なし	0	0	東壁	Ⅴ	86住→11堀
87	長方形	5	4.2	21	N-106-E	45	なし	0	4	東壁中央南側	—	なし
88	長方形	3.3	3.1	10.23	N-117-E	60	一部	2	3	東壁中央南側	Ⅳ	88住→60住
89	長方形	4.2	3.9	16.38	N-99-E	55	なし	0	0	北壁中央南側	—	なし
92	正方形	5.7	5.7	32.49	N-101-E	71	全周	7	9	東壁中央南側	Ⅲ	なし
93	不正正方形	4.4	4.3	18.29	N-90-E	46	西	1	2	東壁中央南側	Ⅳ	なし
94	不正長方形	3.8	3.7	14.06	N-114-E	24	全周	2	3	東壁中央	Ⅴ	なし
95	不正正方形	4.2	4.2	17.64	N-114-E	25	全周	6	4	東壁中央	Ⅴ	なし
96	長方形	3.9	3.7	14.43	N-104-E	31	不明確	7	1	東壁南側	Ⅹ	なし
97	不正長方形	6.3	5.4	34.02	N-127-E	31	全周	7	5	東壁中央	Ⅷ	なし
98	不正長方形	4.3	3.5	15.05	N-94-E	19	なし	1	1	南東コーナー	—	なし
99	隅丸長方形	4.2	4	16.8	N-107-E	35	なし	0	4	南壁南側	Ⅶ-Ⅷ	なし
100	長方形	5.4	4.5	24.3	N-90-E	76	全周	5	5	東壁南側	Ⅵ	なし

弥生時代後期末～古墳時代前期 住居址出土遺物内容一覧表

住居番号	出 土 遺 物	貯 蔵 穴	備 考
26	高坏2・S字甕2・埴1・甕2・甕1	南東コーナー	
34	器台1・高坏1	南壁西側	
36	器台2・埴1・甕2・S字甕1	南壁西側	
44	なし	なし	
46	なし	南壁西側	
48	坏1・甕1	なし	
51	皿1・器台1・高坏1・台付甕1・甕3・石鏝1	南東コーナー	
52	なし	なし	
53	器台・鉢2・甕5・甕3・台付甕1・石包丁?1・敲石1	南壁西側	
57	坏1・高坏4・台付甕1・甕3・敲石1・磨石1・削器1	北東コーナー	入り口施設あり
58	S字甕1・砥石1・敲石2・石鏝1・磨石1	北東コーナー	
62	甕5・甕1・磨石1	南壁東側	焼失家屋
64	高坏2・埴1・甕3・S字甕1・甕1・石鏝1・削器1・石鏝1	南壁東側	焼失家屋
65	高坏1・台付甕1・甕1	南壁東側	
66	坏1・埴1・器台1・小型甕1・甕2・甕1	南東コーナー	
67	甕4・甕1・鉢2・ミニチュア土器2	南壁西側	
68	甕1	なし	
69	甕3・甕3・台付甕2・高坏2・鉢1・敲石1	南壁西側	超大型住居・焼失家屋
72	埴1・甕1・S字甕1・削器2	東壁南側	
73	埴2・鉢1・高坏1・甕1・甕3・甕1・砥石1・敲石2	南壁西側	
78	鉢1・甕3・甕1・ミニチュア土器1・土製門簾1・石斧2	南壁東側	大型住居・焼失家屋
79	甕3・甕8・鉢1	2基あり	焼失家屋
80	高坏1・甕1・紡錘車1	なし	
81	甕2	南壁	焼失家屋
84	石鏝2	南壁	
85	甕1・土製紡錘車1・削器1	南壁東側	焼失家屋
90	器台1・埴1・ミニチュア土器1・甕1・石斧1・削器1	南壁西側	
91	甕1	なし	焼失家屋

平安時代 住居址出土遺物内容一覧表(1)

住居番号	出 土 遺 物	貯 蔵 穴	備 考
1	須恵器坏3・埴1・鉢1・土師器甕2	南東コーナー	
2	須恵器坏1・土師器甕2・敲石1	なし	
3	土師器甕4・須恵器甕2・石製紡錘車1・敲石4・磨石1	南東コーナー	
4	須恵器坏2・器台1・甕1・敲石1・砥石1	南東コーナー	
5	土師器坏1・甕2・須恵器坏2・埴2・皿1・甕1・甕2	南東コーナー	

平安時代 住居址出土遺物内容一覧表(2)

住居 番号	出 土 遺 物	貯 蔵 穴	備 考
6	須恵器坏1・埴2・土師器羽釜1・鉄滓2	南東コーナー	
7	須恵器坏1・埴2・台石1	なし	
8	灰軸埴1・須恵器坏2・皿2・羽釜1・小型甕2・土製紡錘車1	南東コーナー	墨書「南院」
9	須恵器坏2・蓋1・甕1・砥石1	なし	焼失家屋
10	須恵器羽釜2	なし	
11	須恵器坏5・蓋1・土師器甕3・台石1	南東コーナー	墨書「判読不可」
12	灰軸埴1・長頸瓶1・須恵器坏1・埴3・小型甕1・土師器甕1・羽釜1	南東コーナー	墨書「午」
13	灰軸埴1・土師器甕1	なし	
14	須恵器坏1・甕2・土師器羽釜2	なし	
15	須恵器坏5・埴1・蓋1・土師器甕3・砥石2	南東コーナー	
16	須恵器坏6・埴1・羽釜1・甕1・土師器甕1・台石1・砥石4・鉄製鎌1	南東コーナー	
17	須恵器坏2・蓋1・平瓶1・鉢1・土師器甕1	南東コーナー	
18	須恵器坏1・埴1・土師器台付甕1・甕2	南東コーナー	
19	須恵器坏1・埴2・蓋1・蓋1	南東コーナー	
20	復元不可	南東コーナー	
21	須恵器坏6・甕2・土師器甕1・砥石2・台石1	南東コーナー	
22	須恵器坏2・埴1・甕1・羽釜2・土師器坏1	南東コーナー	
23	瓶類1・須恵器埴1・羽釜2・蓋1・砥石・礫石1	南東コーナー	
24	須恵器坏2・甕1・土師器甕1	南東コーナー	
25	須恵器坏4・蓋1・甕1・土師器甕4・台石2・鉄滓1	南東コーナー	
27	須恵器坏5・埴2・甕1・土師器台付甕2	南東コーナー	墨書「伍」
28	須恵器埴3・皿1・甕2・羽釜3・刀子1	南東コーナー	
29	刀子1・他復元不可	なし	
30	須恵器坏1・埴1・土師器甕1・刀子2	なし	
31	須恵器坏9・皿1・埴2・蓋4・甕1・土師器甕2	なし	
32	須恵器坏8・埴1・蓋1・土師器甕3・高坏1・砥石1	2基あり	
33	土師器甕3	なし	
35	須恵器坏5・埴1・甕1・土師器甕8	南東コーナー	焼失家屋
37	須恵器坏6・土師器甕1・紡錘車未製品1・鉄滓1	なし	墨書「義邦」
38	須恵器羽釜2・蓋1・土師器甕1	南東コーナー	
39	須恵器坏2	なし	墨書「?井」
40	須恵器坏3・甕1・土師器甕3	なし	
41	須恵器坏1・埴1・甕1・土師器甕2・土製紡錘車1	なし	
42	なし	なし	
43	須恵器坏6・土師器甕1・手づくね1・刀子1	南東コーナー	
45	須恵器坏5・皿1・蓋2・土師器甕2・刀子1	なし	
47	坏6・埴1・蓋5・甕4・土師器甕6・砥石1・砥石1・青銅製丸觔1・鉄製品1・刀子2・鉄滓	なし	
49	須恵器埴1・甕1・土師器甕1	南東コーナー	

平安時代 住居址出土遺物内容一覧表(3)

住居 番号	出 土 遺 物	貯 蔵 穴	備 考
50	須恵器埴1・献台1	なし	
54	須恵器埴4・小型甕1・甕1・土師器甕1	なし	
55	須恵器埴2・羽釜2・甌石1	なし	
56	須恵器小型甕1・羽釜1・土釜1	不明	
59	須恵器埴1・埴1・羽釜1・土師器甕2・甕2	なし	
60	須恵器埴11・埴1・皿3・蓋3・土師器甕2・甌石2・甌石1・刀子1・か帯1	なし	
61	須恵器埴6・蓋1・埴4・甕1・鋸状鉄製品1・釘1・板状鉄製品1・用途不明鉄製品1	なし	
63	須恵器埴4・小型甕2・羽釜1・甕2	なし	
70	なし	なし	
71	須恵器埴8・埴2・甕1・石製紡輪車1	なし	
74	須恵器埴3・埴1・甕1・土師器甕3	なし	
75	須恵器埴・埴1	なし	
76	須恵器埴6・蓋1・土師器甕1	なし	
77	復元不可	南東コーナー	
82	須恵器埴8・皿1・甕1・甕1	なし	
83	須恵器埴4・皿1・甕1・土師器甕2・甌石1	なし	拡張住居
86	須恵器埴1・埴1	なし	
87	須恵器埴1・土師器小型甕1	なし	
88	須恵器埴7・埴1・甕2・蓋2・土師器甕3	なし	
89	なし	なし	
92	須恵器埴10・埴2・蓋1・甕2・土師器甕5	なし	
93	須恵器埴1・皿1・甕1・甕1・甕1・土師器甕1	なし	
94	灰釉長頸瓶1・須恵器埴5・埴1・甕1・土師器甕1	なし	
95	須恵器埴2・埴1・甕1・土師器甕2	南東コーナー	
96	須恵器羽釜2	なし	
97	須恵器埴1・埴1・甕2・蓋1・土師器甕1・小型甕1・甌石1	なし	墨書「判読不可」
98	なし	なし	
99	復元不可	なし	
100	須恵器埴1・埴2・黒色土器1・小型甕1・羽釜2	南東コーナー	墨書「判読不可」

住居ビット計画一覽表(1)

(単位: cm)

住居番号	No.	平面形種	長 軸 (南北)	短 軸 (東西)	深 さ
26号住居	1	円形	27	23	33
	2	円形	27	29	41
	3	不正円形	36	38	17
	4	円形	25	24	33
	5	円形	25	19	32
	6	円形	26	23	34
	7	円形	24	29	28
34号住居	1	円形	19	21	54
	2	円形	19	20	67
36号住居	1	円形	89	102	63
	2	円形	109	110	49
	3	円形	125	121	52
	4	不正円形	144	113	69
	5	円形	44	38	19
	6	円形	42	44	21
	7	円形	36	33	5
	8	円形	21	19	40
	9	円形	18	21	48
	10	円形	26	26	50
	11	円形	46	43	52
48号住居	1	不正円形	34	46	12
	2	不正円形	33	35	35
	3	円形	26	24	38
51号住居	1	円形	22	21	73
	2	円形	26	27	77
	3	円形	20	23	68
	4	円形	30	24	75
	5	円形	18	19	14
	6	円形	18	19	16
	7	円形	34	34	22
	8	円形	37	35	23
	9	円形	44	42	25
	10	円形	38	29	27
53号住居	1	円形	18	18	33
	2	円形	23	23	35
	3	円形	23	23	22
	4	円形	15	16	19
	5	不正円形	30	21	24
57号住居	1	円形	44	43	56
	2	円形	53	47	62
	3	不正円形	44	46	49
	4	円形	44	44	42
	5	楕円形	85	60	67
	6	楕円形	84	65	46
	7	円形	48	48	49
	8	不正円形	56	63	44
	9	楕円形	25	28	—
	10	楕円形	24	14	21
	11	不正円形	20	17	—
	12	不正円形	14	18	24
58号住居	13	円形	18	24	27
	14	円形	27	28	30
	1	円形	21	20	49
	2	円形	27	27	41
	3	円形	20	23	55
	4	円形	18	18	—
	5	円形	24	23	22

住居番号	No.	平面形種	長 軸 (南北)	短 軸 (東西)	深 さ
58号住居	6	円形	26	27	30
	7	円形	26	24	29
	8	不正円形	53	43	45
	9	円形	48	47	48
62号住居	1	楕円形	34	26	11
	2	楕円形	44	30	—
	3	楕円形	40	32	22
64号住居	1	不正円形	28	33	46
	2	不正円形	26	28	33
	3	楕円形	26	18	—
65号住居	4	楕円形	27	21	34
	1	不正円形	35	23	44
	2	円形	22	26	40
	3	円形	29	30	46
67号住居	4	円形	24	23	42
	1	円形	18	16	56
	2	円形	21	21	39
	3	円形	18	19	32
68号住居	4	不正円形	32	29	55
	1	円形	33	31	10
	2	円形	33	33	9
	3	楕円形	42	36	10
69号住居	4	楕円形	56	40	12
	1	楕円形	30	25	62
	2	円形	40	38	62
	3	楕円形	30	26	64
	4	楕円形	40	35	64
	5	楕円形	42	36	62
	6	円形	32	30	63
	7	円形	22	21	19
	8	楕円形	28	24	37
	9	円形	22	20	46
	10	円形	23	22	40
	11	円形	22	22	47
	12	円形	30	28	54
	13	楕円形	32	28	62
	14	楕円形	30	25	63
	15	円形	22	22	29
72号住居	16	円形	24	23	43
	17	円形	20	20	43
	18	円形	22	22	37
	19	円形	20	20	29
	20	円形	22	20	12
	21	円形	26	24	24
	22	円形	20	19	34
	23	円形	26	26	22
73号住居	24	円形	32	33	—
	1	円形	33	33	43
	2	円形	22	20	23
73号住居	3	円形	40	45	41
	1	円形	17	18	66
	2	円形	15	15	62
	3	円形	19	18	66
	4	円形	21	17	63
	5	円形	19	21	17
	6	円形	32	33	24
73号住居	7	円形	42	42	6

住居ビット計画一覧表(2)

(単位: cm)

住居番号	No.	平面形状	長 軸 (南北)	短 軸 (東西)	深 さ
78号住居	1	不正円形	28	35	51
	2	不正円形	31	34	23
	3	円形	25	29	35
	4	楕円形	34	30	49
	5	円形	40	37	46
79号住居	1	円形	25	24	40
	2	円形	21	22	48
	3	円形	21	19	30
	4	円形	21	24	24
	5	楕円形	36	24	65
	6	楕円形	32	21	61
	7	楕円形	31	27	65
	8	楕円形	29	23	63
	9	円形	50	50	12
	10	円形	22	22	36
80号住居	1	不正長方形	43	37	42
	2	不正長方形	64	60	41
	3	円形	29	28	40
	4	不正円形	64	56	49
82号住居	1	円形	38	39	65
	2	円形	35	34	55
	3	円形	36	38	45
	4	円形	42	34	61
	5	円形	23	27	30
	6	円形	51	38	42
	7	円形	43	44	50
	8	円形	52	36	48
85号住居	1	円形	22	24	29
	2	円形	24	26	28
90号住居	1	円形	24	27	24
	2	円形	27	30	28
	3	円形	31	34	38
	4	円形	23	21	32
91号住居	1	円形	60	50	34
	2	不正円形	26	26	22
	3	不正楕円形	46	30	26
1号内周基	1	円形	39	37	58
	2	円形	27	29	42
2号住居	1	円形	33	29	53
	2	不正円形	39	29	68
	3	不正円形	28	28	43
	4	不正円形	28	26	42
	5	不正円形	28	31	56
	1	不正円形	67	56	71
	2	不正円形	49	39	79
	3	円形	53	45	81
	4	不正円形	69	50	78
	5	不正円形	46	42	30
3号住居	6	不正円形	56	42	10
	7	不正円形	65	50	30
	8	不正円形	46	45	25
	9	円形	73	78	21
	10	長楕円形	70	36	33
5号住居	1	円形	26	25	37
	2	不正円形	31	22	40
	3	不正円形	26	24	42
	4	円形	26	26	40

住居番号	No.	平面形状	長 軸 (南北)	短 軸 (東西)	深 さ
6号住居	1	不正楕円形	37	26	36
	2	不正円形	43	43	40
8号住居	1	円形	36	35	32
	2	円形	38	42	30
	3	円形	46	45	40
	4	円形	56	47	43
	5	円形	39	42	39
11号住居	1	不正楕円形	59	37	14
15号住居	1	円形	77	72	64
	2	円形	58	61	61
	3	円形	42	51	73
	4	円形	65	68	58
	5	不明	26	23	40
	6	円形	35	22	40
	7	不明	50	52	40
16号住居	1	不正円形	71	61	47
	2	不正円形	55	39	73
	3	不正円形	46	36	76
	4	不正円形	66	62	50
	5	不正円形	35	30	30
	6	円形	35	35	26
17号住居	7	楕円形	40	28	11
	1	楕円形	40	26	—
18号住居	2	不正円形	51	49	12
	1	不正円形	34	24	43
	2	不正円形	26	28	47
	3	不正楕円形	36	22	44
	4	円形	21	23	41
19号住居	5	不正円形	52	56	12
	1	不正円形	78	74	51
	2	不正円形	67	65	42
	3	円形	67	61	71
	4	不正円形	60	55	65
	5	楕円形	34	29	28
27号住居	6	不正楕円形	48	42	54
	1	円形	47	46	50
	2	不正円形	51	40	49
	3	円形	32	34	23
	4	円形	34	44	28
	5	円形	44	38	51
	6	円形	55	55	35
	7	円形	32	29	50
	8	円形	32	34	30
	9	円形	37	35	56
31号住居	10	円形	38	38	20
	11	円形	62	60	38
	12	不正円形	64	65	15
	13	円形	59	51	13
	1	不正円形	56	61	73
	2	円形	54	60	65
	3	不正楕円形	71	49	59
	4	不正楕円形	79	51	57
	5	方形	51	58	65
	6	方形	49	51	39
7号住居	7	楕円形	74	66	36
	8	円形	42	47	36
	9	円形	38	46	16

住居ビット計画一覧表(3)

(単位: cm)

住居番号	No.	平面形態	長 軸 (南北)	短 軸 (東西)	深 さ
32号住居	1	不正円形	52	44	20
	2	不正円形	49	50	20
	3	不正円形	55	55	17
	4	不正円形	58	66	19
	5	不正楕円形	81	69	30
	6	円形	37	35	46
	7	円形	34	33	59
	8	円形	37	36	40
	9	円形	42	38	12
33号住居	1	不正楕円形	35	21	36
	2	不正円形	32	31	35
	3	円形	33	30	34
	4	不正円形	36	45	38
	5	円形	28	28	46
	6	円形	33	28	44
	7	円形	37	45	18
	8	不正円形	26	27	20
	9	円形	32	32	42
35号住居	10	不正楕円形	55	35	22
	11	円形	44	45	16
	1	楕円形	43	35	21
	2	不正楕円形	71	53	37
	3	不正楕円形	67	57	52
41号住居	1	円形	48	42	43
	2	楕円形	62	48	20
	3	楕円形	50	41	57
	4	円形	45	37	12
	5	円形	32	28	—
49号住居	1	不正円形	59	53	44
	2	円形	40	40	62
47号住居	1	円形	38	35	42
	2	不正円形	69	59	51
	3	円形	29	32	51
	4	円形	38	40	47
	5	円形	51	38	63
	6	楕円形	53	34	42
	7	不正楕円形	68	60	51
	8	円形	28	32	23
43号住居	1	不正円形	46	38	30
	2	円形	22	23	32
	3	不正円形	30	35	25
	4	不正円形	36	32	31
50号住居	1	円形	26	26	38
54号住居	1	不正円形	41	36	26
56号住居	1	円形	32	38	26
	2	不正円形	32	32	25
	3	円形	26	27	22
	4	円形	32	35	—
	5	円形	50	58	—
	6	円形	34	33	34
	7	円形	25	24	28
59号住居	1	円形	20	19	20
	2	円形	32	28	11

住居番号	No.	平面形態	長 軸 (南北)	短 軸 (東西)	深 さ
59号住居	3	円形	32	29	23
60号住居	1	円形	76	70	40
	2	円形	61	59	45
	3	円形	68	60	41
	4	円形	81	80	39
	5	不正円形	42	43	34
	6	不正円形	54	42	50
	7	円形	64	60	20
	8	円形	61	51	54
77号住居	9	円形	32	28	20
	1	円形	26	28	6
	2	円形	15	15	5
	3	円形	22	18	6
88号住居	4	円形	18	18	6
	1	円形	40	35	51
92号住居	2	円形	22	25	35
	1	不正円形	61	88	69
	2	不正円形	94	80	72
	3	不正円形	45	58	78
	4	不正円形	72	69	61
	5	不正円形	40	53	50
	6	不正円形	33	53	43
93号住居	7	不正円形	42	44	49
	1	不正円形	20	22	10
94号住居	1	円形	34	33	53
	2	不正円形	49	46	35
95号住居	1	不正円形	51	41	51
	2	円形	29	30	35
	3	円形	24	28	27
	4	不正円形	52	61	51
	5	円形	52	61	18
96号住居	6	不正円形	48	61	20
	1	円形	28	25	35
	2	円形	21	20	22
	3	円形	27	25	21
	4	円形	21	25	30
	5	不正円形	44	45	33
	6	楕円形	30	25	25
97号住居	7	不正円形	37	23	36
	1	円形	29	32	54
	2	円形	41	39	54
	3	円形	40	33	47
	4	円形	36	37	32
	5	円形	30	25	23
	6	円形	54	57	28
98号住居	7	円形	43	49	23
	1	円形	36	41	20
99号住居	1	不正円形	36	38	58
	2	円形	31	36	52
	3	円形	32	33	51
	4	円形	32	32	56
	5	円形	28	24	50

掘立柱建物跡計画一覧表

番号	平面形	南北×東西	間数	方位	柱穴	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	備考
1	不明	4.1×—m	2間×—間	N-102-E	南北cm 東西cm 深さcm	47 40 33	40 35 39	36 37 41	35 38 32	40 37 43				
2	長方形	5.7×4.4m	2間×2間	N-104-E	南北cm 東西cm 深さcm	33 32 16	37 37 20	30 31 11	28 23 16	27 31 26	35 33 26	32 31 36	33 29 21	
3	不正長方形	3.8×5.7m	2間×2間	N-110-E	南北cm 東西cm 深さcm	31 36 43	26 30 50	41 47 41	46 50 36	43 51 38	28 39 45	39 41 59	36 42 59	
4	長方形	4.6×5.2m	2間×2間	N-93-E	南北cm 東西cm 深さcm	42 44 60	46 38 57	57 59 53	43 43 65	51 50 49	52 41 59	39 50 47	49 50 47	34号住を切る
5	正方形	4.0×4.0m	2間×2間	N-81-E	南北cm 東西cm 深さcm	55 49 48	43 38 37	40 40 50	48 50 53	43 38 42	49 45 36	43 44 51	44 49 51	36号住を切る
6	長方形	3.6×4.9m	2間×2間	N-92-E	南北cm 東西cm 深さcm	36 46 54	39 30 42	53 56 41	41 43 58	50 42 58	54 42 58	50 33 48	42 52 54	
7	正方形	3.6×3.7m	1間×2間	N-87-E	南北cm 東西cm 深さcm	51 50 46	36 52 24	35 45 52	40 42 58	38 34 50	34 38 46			
8	正方形	2.4×2.5m	1間×2間	N-81-E	南北cm 東西cm 深さcm	58 52 58	48 64 44	54 48 48	48 44 48	46 48 44	48 44 44			
9	長方形	3.1×3.9m	2間×2間	N-84-E	南北cm 東西cm 深さcm	33 34 31	25 21 22	31 29 38	27 38 35	31 24 14	54 48 8	24 22 16	32 30 29	
10	正方形	4.0×3.5m	1間×2間	N-92-E	南北cm 東西cm 深さcm	58 48 10	35 33 33	43 45 8	44 56 19	44 45 19	29 29 18			
11	正方形	4.0×4.1m	2間×2間	N-98-E	南北cm 東西cm 深さcm	46 50 41	43 41 41	52 49 51	47 40 30	51 47 39	43 50 39	56 45 26	35 45 31	86号住と重複
12	不正長方形	5.4×4.6m	2間×2間	N-4-W	南北cm 東西cm 深さcm	48 37 68	59 48 70	48 47 67	65 40 71	37 34 66	42 49 78	64 73 68	64 56 85	16号土坑に切られる
13	長方形	5.7×3.4m	2間×1間	N-1-E	南北cm 東西cm 深さcm	67 63 59	52 55 66	62 68 60	45 45 50	55 51 49	57 60 64			

棚列計画一覧表

番号	平面形	規模	間数	方位	柱穴	P1	P2	P3	P4	備考
1	直線	東西5.50m	3間	N-101-E	南北cm	36	31	32	39	
					東西cm	39	33	33	39	
					深さcm	23	27	34	41	
2	直線	東西3.90m	2間	N-85-E	南北cm	49	46	54		
					東西cm	53	48	57		
					深さcm	52	42	46		
3	Lの字	東西4.08m 南北2.38m	2間×1間	N-90-E	南北cm	50	55	48	40	
					東西cm	46	52	48	42	
					深さcm	41	65	47	41	
4	直線	東西5.44m	2間	N-89-E	南北cm	45	45	48		
					東西cm	45	45	40		
					深さcm	47	38	44		
5	直線	東西3.84m	2間	N-96-E	南北cm	37	39	44		
					東西cm	45	42	50		
					深さcm	55	47	60		

住居址内床下土坑計画一覧(1)

(単位: cm)

	No.	平面形	規模	底面	幅	深さ
第1号住居	1	楕円形	130×109	105×82	51	
	2	楕円形	79×61	58×50	59	
	3	楕円形	135×97	108×89	44	
第2号住居	1	円形	117×121	84×84	63	
	2	楕円形	222×166	148×74	47	
	3	不正楕円形	83×55	57×35	32	
第3号住居	1	楕円形	97×86	81×59	68	
	2	楕円形	118×86	95×62	86	
	3	不正円形	70×101	68×64	44	
	4	円形	80×72	—×31	60	
第5号住居	1	米俵形	161×99	145×83	46	
	2	長方形	—×—	—×—	—	
第6号住居	1	不正円形	91×84	69×37	36	
第8号住居	1	楕円形	77×63	43×41	16	
	2	不明	70×74	—×30	12	
第9号住居	1	不正円形	73×59	53×49	7	
第11号住居	1	不正長方形	170×127	133×82	52	
	2	不正楕円形	75×56	33×22	29	
第13号住居	1	不正円形	79×67	38×34	16	
	2	不正楕円形	107×78	57×53	22	
	3	不正楕円形	126×98	80×35	16	
	4	不正円形	56×51	23×26	11	
第14号住居	1	不正円形	39×15	30×25	15	
第14号住居	2	不正円形	84×63	41×49	25	
	1	不定形	192×84	130×80	30	
	2	不定形	200×102	125×61	37	
	3	円形	78×60	50×48	41	
	4	円形	101×99	86×84	40	
第16号住居	5	不定形	168×149	140×116	21	
	1	不定形	171×148	92×80	34	
	2	不正楕円形	126×93	78×51	36	
	3	円形	119×119	88×82	46	
	4	不正円形	109×96	87×78	46	
	5	不正円形	107×92	82×38	48	
	6	不正円形	102×92	50×47	53	
第17号住居	7	不正方形	148×124	115×91	60	
	1	楕円形	120×87	79×62	34	
	2	方形	76×77	62×—	38	
	3	不明	88×53	69×—	38	
	4	円形	—×71	60×—	40	
第18号住居	5	不正方形	176×251	—×—	25	
	1	不正方形	107×110	78×68	44	
	2	不正長方形	120×151	100×51	25	
	3	不正台形	130×80	97×47	23	
第19号住居	1	不正円形	107×102	73×59	48	
	2	不正楕円形	214×172	153×104	33	

住居址内床下土坑計測一覧(2)

(単位: cm)

	No	平面形	規模	底面	面積	深さ
第19号住居	3	不正楕円形	111×88	—×48	20	
第20号住居	1	不正円形	—×103	70×—	47	
第21号住居	1	不正楕円形	118×88	52×43	20	
	2	不正楕円形	131×114	58×60	24	
	3	帯形	—×62	—×28	12	
	4	不正方形	—×71	—×48	47	
	5	不正円形	—×126	—×105	48	
	6	不正円形	133×102	110×90	48	
	7	不定形	135×71	79×42	20	
第23号住居	1	不正長方形	101×63	72×44	44	
	2	不正長方形	65×49	49×25	39	
第24号住居	1	不正円形	115×—	89×—	10	
	2	不正楕円形	153×109	124×88	11	
	3	不定形	121×94	100×53	16	
	4	楕円形	143×115	70×37	21	
第25号住居	1	不定形	140×134	55×38	25	
	2	不定形	166×151	66×35	45	
	3	円形	126×125	88×91	49	
	4	円形	84×84	48×48	49	
	5	不正楕円形	128×84	87×38	35	
第27号住居	1	不定形	178×150	80×70	30	
	2	不正方形	198×182	135×150	38	
	3	不正円形	128×100	98×76	53	
	4	円形	70×71	37×33	34	
第28号住居	1	不正楕円形	83×72	57×42	22	
第30号住居	1	楕円形	130×109	94×79	31	
第31号住居	1	不正円形	153×169	131×162	70	
	2	不正円形	117×110	101×84	36	
	3	円形	138×156	128×138	52	
	4	楕円形	126×102	107×88	34	
	5	長方形	—×—	—×—	16	
	6	楕円形	—×—	—×—	20	
	7	—	—×—	—×—	24	
第32号住居	1	方形	163×185	138×114	25	
	2	不正楕円形	133×116	109×93	41	
	3	不定形	128×122	82×95	15	
	4	長楕円形	114×58	89×34	23	
	5	不正方形	115×106	100×83	14	
	6	不正長方形	106×80	80×54	30	
	7	楕円形	91×66	63×33	29	
	8	不正方形	99×100	72×68	17	
	9	楕円形	161×128	126×96	45	
	10	円形	101×111	76×74	30	
	11	不正楕円形	210×130	106×78	41	

	No	平面形	規模	底面	面積	深さ
第32号住居	12	楕円形	90×67	45×30	44	
第33号住居	1	不正楕円形	178×102	159×90	28	
	2	楕円形	—×70	—×47	28	
	3	円形	84×88	67×59	23	
	4	不定形	—×110	—×60	25	
	5	楕円形	112×76	60×53	29	
	6	俊形	150×113	125×76	32	
	7	不正楕円形	63×39	40×17	28	
	8	円形	104×78	72×65	32	
	9	不正三角形	75×53	35×33	31	
	10	楕円形	67×49	60×47	22	
	11	不正楕円形	67×49	42×25	20	
	12	不定形	85×43	64×22	30	
第35号住居	1	楕円形	139×114	105×93	53	
	2	円形	73×—	48×—	45	
	3	不正楕円形	67×58	100×62	59	
	4	不正楕円形	179×100	58×50	39	
第37号住居	1	円形	99×92	40×51	54	
第38号住居	1	円形	90×83	68×63	24	
	2	方形	69×78	58×46	21	
	3	長方形	133×109	96×74	—	
第40号住居	1	俊形	131×87	110×72	42	
	2	不正楕円形	93×58	69×39	18	
第41号住居	1	円形	116×114	—×—	32	
	2	不明	38×60	85×83	40	
第43号住居	1	楕円形	112×87	80×54	64	
	2	不定形	88×49	72×35	30	
	3	円形	73×68	43×37	40	
	4	円形	112×120	74×74	47	
	5	円形	106×106	56×42	51	
	6	帯状	240×70	—×30	30	
第47号住居	1	円形	133×133	110×106	47	
	2	円形	145×122	116×106	45	
	3	不定形	67×103	42×—	37	
	4	円形	115×106	97×91	49	
	5	方形	207×126	166×76	40	
	6	不正円形	75×65	62×52	58	
	7	円形	137×122	109×101	47	
	8	圓形	140×120	96×76	47	
	9	円形	122×122	115×110	49	
	10	円形	123×102	93×90	54	
第49号住居	1	円形	169×165	142×130	20	
	2	不正楕円形	82×62	54×34	17	
	3	楕円形	86×56	64×41	21	

住居址内床下土坑計測一覧(3)

(単位: m)

	No.	平面形	規模	底面規模	深さ
第50号住居	1	円形	60×42	39×34	42
第54号住居	1	楕円形	102×80	71×49	49
	2	楕円形	167×80	—×—	26
第59号住居	1	円形	69×76	46×52	12
	2	不正円形	57×66	40×27	18
	3	円形	82×87	40×39	30
	4	不正円形	78×74	60×50	32
第60号住居	1	不定形	170×117	147×90	39
	2	不正円形	209×150	—×—	34
	3	方形	98×118	—×—	44
	4	長方形	125×138	—×—	34
	5	円形	119×119	—×—	57
	6	不正方形	129×163	—×—	50
	7	Lの字形	—×—	—×—	—
第61号住居	1	楕円形	136×102	113×85	67
	2	不正楕円形	130×69	76×30	18
	3	楕円形	112×60	68×31	28
第71号住居	1	不正長方形	176×140	121×68	45
第76号住居	1	不正長方形	—×101	—×—	34
	2	不正長方形	140×115	—×—	56
第77号住居	1	不正方形	69×82	55×45	10
	2	長方形	96×82	65×44	10
	3	長方形	—×88	—×52	13
第80号住居	1	不正楕円形	116×83	73×44	—
	2	長方形	77×67	57×38	—
第87号住居	1	不正円形	162×137	128×114	28
	2	不正長方形	120×78	66×41	33
	3	不正三角形	114×140	93×49	40
	4	不正長方形	128×95	83×54	25
第88号住居	1	楕円形	75×60	48×43	31
	2	楕円形	102×96	85×67	26
	3	不正楕円形	206×90	144×49	30
第92号住居	1	楕円形	150×120	125×87	50

	No.	平面形	規模	底面規模	深さ
第92号住居	2	楕円形	186×120	—×61	33
	3	楕円形	118×88	51×36	30
	4	楕円形	198×172	153×119	39
	5	楕円形	224×131	112×90	45
	6	不正楕円形	—×109	—×—	30
	7	不正楕円形	—×—	—×—	35
	8	円形	122×121	96×89	41
	9	不正楕円形	154×125	122×95	32
第93号住居	1	円形	110×122	76×75	49
	2	不正円形	107×105	61×59	15
第94号住居	1	正方形	96×100	66×65	80
	2	長方形	123×92	97×67	60
	3	不正長方形	122×110	55×64	40
第95号住居	1	不正楕円形	—×72	50×38	43
	2	不正楕円形	96×68	43×39	55
	3	不正楕円形	77×70	46×46	45
	4	不明	—×74	—×32	46
第96号住居	1	俵形	121×92	109×78	36
第97号住居	1	円形	117×115	—×58	65
	2	不正正方形	160×150	—×100	36
	3	不正楕円形	96×72	—×32	22
	4	不正楕円形	134×72	—×—	10
	5	不正楕円形	—×—	—×—	—
第98号住居	1	楕円形	92×78	—×45	23
第99号住居	1	不正楕円形	96×62	—×41	25
	2	不正長方形	102×67	—×46	16
	3	不正楕円形	102×54	—×57	22
	4	円形	72×70	—×49	32
第100号住	1	不正楕円形	184×169	—×136	53
	2	不正長方形	154×83	—×55	20
	3	不正楕円形	96×83	—×48	29
	4	不正長方形	252×164	—×90	34
	5	不正三角形	130×158	—×56	24

第IV章 調査の成果と課題

第1節 弥生時代後期末～古墳時代前期の土器編年

第2節 弥生時代後期末～古墳時代前期における
遺構と集落の変遷

第3節 平安時代の土器編年

第4節 平安時代における遺構と集落の変遷

第5節 「宮田寺」について

第6節 遺跡を中心とした地理学・地質学的考察

第IV章 調査の成果と課題

第1節 弥生時代後期末～古墳時代前期の土器編年

本節においては、本遺跡において検出された弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構出土の土器を資料として、土器の編年を整理しておきたいと思う。

土器の編年を行うにあたって、通常の場合、詳細な分類基準を設けて説明を行っていくが、ここでは各器種の中の基本的な器形までの分類にとどめ、あえてそれ以上の細かな基準を設けなかった。以下、分類基準を説明する。

壺型土器

A類 樽式土器系統のもの

B類 赤井戸系統のもの

C類 外来系統のもの

1 単口縁

2 有段口縁

甕型土器

A類 樽式土器系統のもの

B類 赤井戸系統のもの

1 縄文のもの

2 無文のもの

C類 外来系統のもの

台付甕型土器

A類 樽式土器系統のもの

B類 S字甕

C類 ノーマルな台付甕

高坏型土器

A類 樽式系統のもの

B類 外来型のもの

1 坏部下半に横を持つもの



- 2 持たないもの
- 3 脚部径が口縁径より大きいもの

器台型土器

- A類 Xの字型をなすもの
 B類 坏部が半球型をなすもの
 C類 坏部上半がつまみ上がるもの
 D類 坏部下部に稜を持つもの
 E類 坏部が直線的なもの

埴型土器

- A類 口縁径が胴部径より大きいもの
 B類 A類を平たくしたもの
 C類 壺を小型にしたようなもの

その他の器種は、分類基準なし。



第Ⅰ期

壺型土器

A類(1～8)とB類(9・10)が認められる。A類は、樽式の伝統を引くもので、大型のもの、中型のもの、小型のものがあるがそれぞれのものが規格的なわけではない。形態的な特徴は、朝顔形に開く口縁部、頸部は比較的緩やかに屈曲し、胴部は算盤玉状に近い球胴形をなす。頸部には櫛描文・櫛描波状文が多用され、希に円形浮文が貼付される。B類は、口縁部に輪横痕を残し、胴部は球形をなしている。しかしこのB類は、第2期に含めた方が妥当かもしれない。

碗型土器

A類(11～23・25・26)・C類(24・27)が認められる。A類は、中型のものと小型のものに分類されるが、この大きさの違いは規格的でなく、まちまちである。口縁部が折返しのもので単口縁のものがある。折返しのもの方が古い。頸部には横位に櫛描文がめぐり、その上下に櫛描波状文が配される。小型のものは、中型のスケールダウンしたもの、全体に上下に押し詰まったようなものがある。おおむね口縁部から頸部に櫛描文が配される。C類は口縁が単口縁で、胴部は球胴形をなし、上半に最大径を持っている。

台付壺型土器

A類(29~31)とB類(32)が認められる。B類は、S字甕で、肩部に1条の横位のハケ目を有している。量的には少数である。

高坏型土器

A類(28)とB1類(33)が認められる。A類は、樽式系統のもので、口縁部が大きく屈曲し、胴部下半にも稜を持つ。口縁部下には節描文が配されている。台部はハの字状に開いている。B1類は、坏部下方に稜を有するもので、口縁部は直線的に外形する。脚部はハの字状に開く。

罎型土器

C類(35)が検出されている。破片資料のため、詳細な特徴の把握は不可能である。

他の器種に関しては、割愛する。

第Ⅱ期

壺型土器

本期においては、全体に壺型土器の出土量は少ない。A類(40)はほとんど見られなくなり、C1類・C2類(42)が少量見られる。

甕型土器

A類(65)・B1類(64)・B2類(52~60)・C類(62・63)が認められ、他に北陸の月影Ⅱ式の影響を受けていると思われるもの(48)も検出されている。A類は少数となり、B1類も少量である。それに比して、B2類が出現し多数を占めるようになる。B2類は、口縁部に積上げ痕を明瞭に残す赤井戸系の甕で、胴部は球形をなす。

台付甕型土器

樽式系統であるA類は見られなくなる。B類(67~71)は肩部に横位のハケ目を持つものと持たないものとが存在している。C類(61)も少量認められる。

高坏型土器

樽式系統であるA類は見られず、全てがB類によって占められる。B1類(84・85)・B2類(72~75)・B3類(86・87)が存在している。

埴型土器

A類(91~93)・B類(94・95)・C類(88~89)が認められる。A類とB類は、本期より登場する。A類に比して、B類の方が後出的と思われる。

器台型土器

周辺の遺跡では、第I期にA類が検出されている例がある。本期においてはB類(82)・C類(81)・E類(78・83)が認められる。

以上の分類の標準となる遺構は、以下の通りである。

第I期 62・64・69・78・79・81・85・91号住居、1号円形周溝墓

第II期 26・34・36・48・51・52・53・57・58・65・66・67・68・72・73・80・84・90号住居・
1号方形周溝墓

さて、以上の編年に関して、従来の弥生時代後期末から古墳時代前期の土器編年とどの様に関係を持つのか、次に見て行きたい。これまでに県内の弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器編年は徐々に充実しつつあると言える(註1)。

周知のごとく、群馬県地方における弥生時代後期は、北西部を中心とする樽式土器と呼ばれる櫛歯文を多用する土器の一群が分布し、古墳時代前期には石田川式土器が東毛地区を中心として分布している。両土器形式には系譜的連続性がなく、しかも石田川式土器が、東海西部地方の土器形式ときわめて酷似した特徴を持つため、「集団入植」としてとらえられ、他の関東地方の弥生末古墳前期の様相とは大きく異なっている。

群馬県の弥生時代と古墳時代との接点は、石田川式土器が周辺の樽式土器・赤井戸式土器などに影響を与え、混在し、非常に複雑な様相を呈しており、これをいかに整理・分類していくかが、当地方の土器編年の焦点となっている。

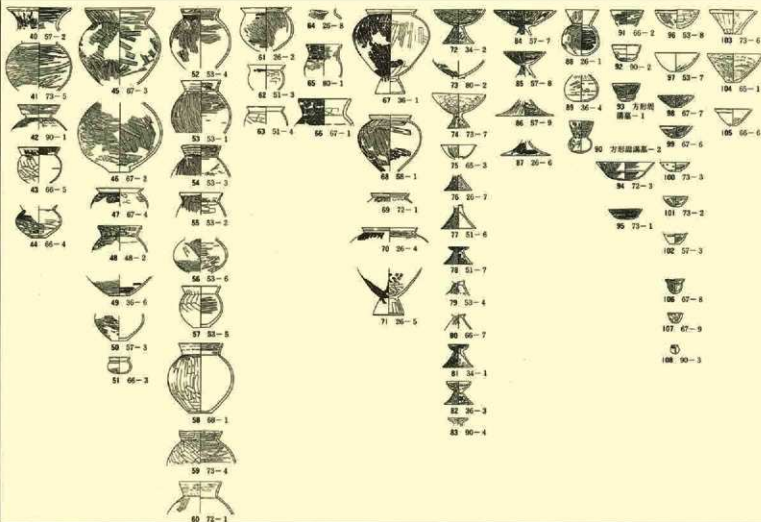
本遺跡の編年は上記の分類基準のごとく他の編年研究の細分より少ない分類にしてしまっている。これは主として土器の形式分類に対する考え方によるもので、当時の土器生産の在り方を問題としているからである。

たとえば、同じ土師器の中でも鬼高期以降の土器生産は、何らかの特定の生産者集団が存在したと推定されるが(例えば、良質の粘土の採取にもっとも都合が良い共同体であるとか)、これらによる生産は、一定の規範に従って製作され、製品そのものの器形的ばらつきは、相対的に小さいものと思われる。このことは鬼高式土器の坏や甕の顔つきがよく似ていることから判断される。

これに対し弥生末から古墳前期の土器生産は、個々の土器の大きさや文様のバラエティが相対的に大きい。これは当時において特定の生産者集団が存在し、彼らが土器製作を行う上で規格的な概念(大きさの一定性)が薄かったからバラエティが多かったのだと考えるよりも、特定

第336図 戸神原訪田遺跡土器編年表

	壺	甕	台付甕・S字状口縁台付甕	高坏・器台	長頸埴	埴	鉢	甌
Ib 期	1 69-3	11 69-4	15 78-1	28 69-9			36 69-11	
	2 69-2	12 69-6	16 78-4	29 69-7			37 69-10	
	3 69-1	13 81-1	17 78-3	30 69-5			38 78-5	
	4 円形周溝墓-3	14 81-2	21 79-5	31 円形周溝墓-1				
	5 円形周溝墓-2	18 79-3	22 79-4					
	6 78-2	19 79-6	20 79-2					
	7 64-3	23 79-7	25 85-1					
	8 62-3	24 79-11	26 64-1					
	9 62-1	27 64-4	32 64-6					
	10 62-2							



の生産者集団は存在せず、不特定多数の農民の農閑期的生産であったと考えたほうがよいと思う。

というのは、特定の集団が多数の土器を生産する場合、不特定多数の生産と比べて、ばらつきが少なくなる。ある一つの技術を習得した人間が、その技術に基づいて一定数の生産を行う場合、その製品のばらつきが大きいくほど、生産の能率は下がり、反対に規格性を持たせるほど生産効率は上がるからである。つまり違うものを作るより、同じもののばかりを造っていた方が生産効率が高いということである。

樽式の比較的強固な伝統が厳然として存在している段階では、生産は規範（樽式の各器種に対するイメージ）に縛られるため技法のバラエティは一定範囲に抑えられるが、新しい古墳時代文化の波及によって、樽式土器の規範が緩み、製作技法にとらわれず、新しい要素を取り入れて土器を製作できる時代に入ると、各生産者の製作技法は任意なものとなり、そこに現れる土器のバラエティは大きく、複雑なものとなる。（第337図）

ある人間の製作する土器は従来の技法であるが、同じ器種を製作していても、以前のような技法は用いず新しい技法を取り入れた土器を製作し始める人間がいるということである。

つまり、こうした時期として弥生末古墳前期を理解するならば、土器型式を設定するにあたって最も肝要な事は、各器形における細かなバラエティを追跡する事ではなく、特徴の共通性を主眼とした系譜関係の追跡にあるといえる。この時期において細かな器形的分類基準を設定することは、不特定多数の生産に必然的に伴うバラエティの迷路に迷いこむ事になると思うのである。これが本遺跡の福年において、各器種の中での基本的な器形のみで分類をとどめた理由である。

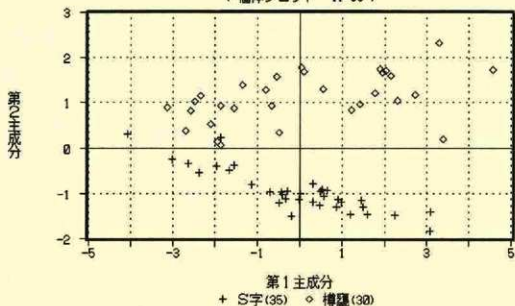
しかしながら、以上の生産体制の違いを証明することは至難のわざである。ただ主観的な器形的ばらつきのみで特定生産者集団の存在・非存在を主張する事は、証明としては弱い。何らかの方法で証明を行うとすれば、確実に特定の生産者集団による土器とそうでない土器とのばらつき度を比較する事がもっともこの場合有効的な方法であろうと思われる。

そこで同時代に製作された、ほぼまちがいなく特定の生産者集団の手になるものと考えられるS字壺と樽式の壺型土器とを比較してみる事にした。両方の土器の口縁径・頸部径・胴部最大径・口頸高（口縁部から頸部までの高さ）・口胴高（口縁部から胴部最大径までの高さ）を測定し、ばらつき度を検討する材料とする。（表1～5）

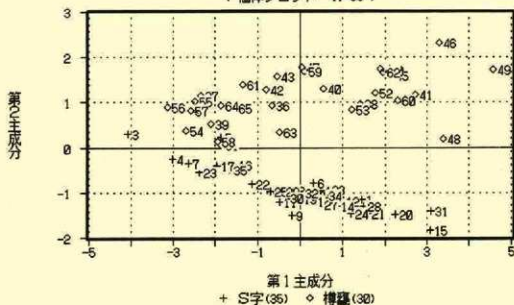
その比較の方法には、多くの特徴を一時に扱える統計的手法を用いる事が有効的と考え、「多変量解析」の中の「主成分分析」を行ってみた（註2）。主成分得点表によれば、第1主成分は、物理的な大きさを抽出し（+は大きく、-は小さい）、第2主成分は、相対的に口頸高の大きさを抽出しているようである。S字壺は、ほぼ直線的な分布を示しており、その直線から隔たるものがほとんどないところから、大きさの違いはあっても器形はある規範を中心として、ばらつきが非常に小さいことが判明する。樽式壺は一定の相関は示すもののやはりばらつきは大きく、また器形が大きくなるほどばらつきが大きくなる傾向があり、成形技法の未熟さが看取されるのである。

（第337図）

1. S字種・樽種の器形ハツキ
(個体プロット n=65)



2. S字種・樽種の器形ハツキ
(個体プロット n=65)



第337図 主成分分析図(1)

以上の「主成分分析」の結果、S字墓に比較して樽式土器の墓は、器形のばらつきが激しい事が判明した。このことは、樽式土器の墓が、不特定多数による生産であることをある程度傍証するものと思われる。

さて、当地の樽式土器が土師器化して行く段階としては、次のようなプロセスを想定することができる。

- ①純粋な樽式土器のみの段階。
- ②樽式土器圏外で土師器が成立しているが、未だその影響を受けない段階。
- ③外部の土器が、樽式土器圏内に入り込み、樽式土器もその影響を受け始める段階。
- ④樽式土器が大きく変容しつつも、その伝統は存在し、また集落内でも外来土器とその模倣品を使用している段階。
- ⑤樽式土器の伝統が消滅し、外来土器とその模倣品によって成立した土師器によって土器の全てが占められる段階。
- ⑥和泉期の段階。

以上の認識をふまえた上で、まず隣接の戸神諏訪遺跡の編年を検討してみたい。戸神諏訪遺跡と本遺跡とは同一の集落と考えられる事から、同遺跡の編年は詳しく検討する必要がある。戸神諏訪遺跡では弥生時代末から石田川期の土器群を4期に分類している。各期の特徴について以下引用してみる。

第Ⅰ期は、この地域の弥生時代後期の土器である樽式土器の最終段階としてとらえられ、第Ⅱ期の土器群とは、明確に弁別できる。住居形態も長方形住居の最後の段階であり、第Ⅰ期と第Ⅱ期との間には大きな転換が認められる。

第Ⅱ期は、「第Ⅰ段階において主たる出土遺物であった樽式土器を残しながらも個々の遺物における施文・器形等に若干の変化がみられる」時期であるとしている。

第Ⅲ期は、「出土遺物の主体は古式土師器へと移行し、客体的に弥生土器（樽式土器）を残す」段階としている。

第Ⅳ期は、「前段階である第Ⅲ期が僅かながら弥生時代の色を残しながら古式土師器が土器組成の主体となるのに対して、弥生時代の残影が見られなくなる時期として設定したが、遺物の器形や組成の面では前段階との大きな差異は認められず、然るに、前段階との時間差もさしてないものと考えられる。」としている。

戸神諏訪遺跡編年と本遺跡の編年との対応関係は、以下のようになる。

戸神諏訪遺跡編年第Ⅰ期———本遺跡第Ⅰ期

同 第Ⅱ期・第Ⅲ期—— 同 第Ⅱ期

(第Ⅳ期は第Ⅲ期に含める)

本遺跡編年と戸神諏訪編年との間には、区分の上でも概念的にもいくつかの違いを生じている。ここではこれについて見てみたい。

まず、戸神諏訪編年の第Ⅰ期及び本遺跡第Ⅰ期は、果たして弥生時代に含めて考えるべきか、あるいは古墳時代に含めて考えるべきであろうか。戸神諏訪遺跡では、樽式末期とされているが、本遺跡においては、古墳時代に含めて考えている。

本遺跡の編年が古墳時代に含めて考えるべきとした根拠は、後述の本期に先行するⅠa期の設定と共に、第Ⅰ期の土器群の中に明らかに外来系土器を模倣したものと考えられる器形が存在しているからである。例えば、本遺跡第Ⅰ期の中でも比較的古い様相を持つと思われる戸神諏訪遺跡第11号住居には、明らかに東海系の壺を模倣したと考えられる壺(26)が検出されており、この時期において樽式文化圏の外にすでに古墳文化が成立していたことを思わしめるのである。

第二の問題として、戸神諏訪遺跡の第Ⅱ期と第Ⅲ期を本遺跡編年では、第Ⅱ期として一時期に捉えている。その理由は、第Ⅱ期を構成する器種が不安定であり、一時期を構成するものとしては認識できないと判断したからである。この第Ⅱ期という時期は、第Ⅰ期と第Ⅲ期との過渡的形態をなすものであり、過渡的ということは流動的な形態をとっているといえ、ピュアな形で認識しにくいのである。つまり樽式の伝統を引く土器のどこまでを完成されたスタイルとし、どこからどこまでを過渡的形態とするのか、という明確な基準を設定できないのである。

例えば、樽式土器の壺や壺が消滅までにいたる過程は一様でなく、住居の一括検出土器の中でも装飾性が失われ、かなり消滅段階に近いと思われるものがある一方、樽式土器第Ⅲ期に含めてもおかしくないほどに伝統的手法が残存しているものも存在するのである。また樽式土器系以外の新器種のほとんどが戸神諏訪遺跡編年第Ⅲ期より出現しており、戸神諏訪遺跡編年第Ⅱ期にメルクマールとなる器種なり特徴が特定できないことから、現実問題としてこの第Ⅱ期の土器群を第Ⅰ期ないし第Ⅲ期から明確に弁別する事は不可能と思われる。従って本遺跡では、2期分類にならざるを得なかった。

第三の問題として、戸神諏訪遺跡において設定した第Ⅳ期の存在が、果たして妥当であるかという問題についてである。第Ⅳ期と第Ⅲ期について、あまり時間差はないとしているが、明確に一段階として認識している。この点に関しては土器の編年から確実に裏付けられているものではなく、根拠が薄弱といえ、疑問である。むしろ次代である和泉期の土器群をふまえてそれに近い形態をなす、糸井宮前遺跡44・46号住居出土資料等に注目するべきと考える。(註2)

本遺跡の編年は、前述の段階に当てはめるならば、第Ⅰ期は③段階、第Ⅱ期は④⑤段階と考えることができると思われる。

さて、本遺跡の土器群の編年を見てきたわけであるが、さらに周辺の遺跡を含めて、本遺跡で設定した第Ⅰ期及び第Ⅱ期の時期区分がさらに細分できる可能性がないのかどうかを検討してみたい。

第Ⅰ期に関しては、特徴的な小型器台をメルクマールとする一時期が設定できる可能性がある。

現在のところ③段階で最も通ると思われる資料は、勢多郡赤城村の見立瀬井遺跡であろう(註3)。同遺跡H7号住居の資料は、樽式の甕の装飾がほとんど失われておらず、また樽式に伴う高環が直線的に外傾する高環も伴出している中に、A類の小型器台が出現している。このA類は、洗川市有馬Ⅱ遺跡の古式土器の早い段階で出土しており、小型器台A類をメルクマールとした段階設定は有効性があると思われる。この時期をⅠa期とするならば、本遺跡編年第Ⅰ期は、第Ⅰb期という事ができるであろう。

次代の和泉期の初頭と思われる下佐野遺跡5区69号住居・同7C号住居などの土器群を見ると、ヘラ削りを多用する甕や有段口縁壺・小型埴などの石田川的色彩が濃厚に残存しており、これらの和泉期初頭の土器群を念頭において⑤段階の土器群を考えるならば、糸井宮前遺跡44・46号住居などが中間段階として設定できる可能性があると考えられる。これをⅡb期として認識し、本遺跡第Ⅱ期をⅡa期と考えることができよう。(第338図)

以上の編年分類とその流れを概観しておく。

第Ⅰa期は、小型器台A類をメルクマールとする時期で、他の器種は樽式第3期の特徴を崩していない。これは前述の③段階の初頭と考えられる。

第Ⅰb期は、第Ⅰa期と同様、樽式土器の器種は未だ大きな変質はしていない段階であるが、外来系の土器として、S字甕・埴C類・壺C2類・高環B1類などが登場し、C類である無文土器の甕が伴出するようになる。本期は③段階の後半段階といえるであろう。

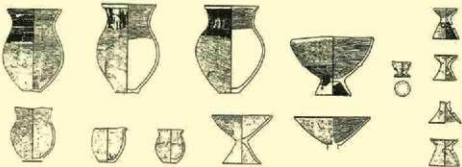
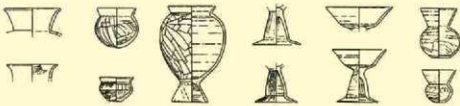
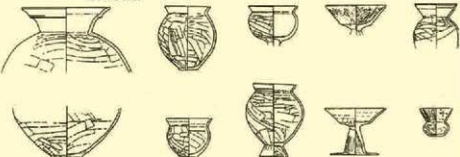
第Ⅱa期は、第Ⅰ期からかなり大きな転換を遂げる時期である。壺・甕には、樽式土器の系譜を引くものは、非常に少なくなり、特に甕はそれまでほとんど影響を受けることがなかった赤井戸系の甕(B2類)が多くを占めるようになる。また埴はC類のみでなく、A・B類が登場する。S字甕の段階は、肩部に横位のハケ目が残るものと残らないものとが混在している。

第Ⅱb期は、少数例のためはっきりしないが、かなり和泉期的様相に近くなり、甕型土器にヘラ削りが多用され、高環の脚部に屈曲がみられるようになる。この期に関しては、今後の資料増加を待ちたい。本期は、⑤段階として認識することができるであろうか。

さて、以上の編年的流れから時代背景に関して何かを捉えることができるであろうか。

比較的早い時期に小型器台(A類)がまず出現する現象は興味深い。周知の如く大和政権の東国進出の過程において小型埴・小型器台という大和政権の祭祀のシンボルであるこれらの器種を地方に浸透させるという政策が行われたらしい事を示唆するものであろう。

この第Ⅰa期および第Ⅰb期においては、小型器台・埴・S字甕などが認められ、また有段口縁壺も存在しているが、概して樽式土器は未だ大きな変化は引き起こされていないといえる。しかし、次の第Ⅱ期になるとほとんどの器種が大きな変化を遂げ、樽式土器文化は一部の土器にその残存を認めるのみとなってしまう。つまり第Ⅰ期と第Ⅱ期との間に大きな画期を想定する事ができるのである。この画期がいったいどの様な社会的現象を反映しているのかは、今後の課題となるであろうが、事実上、この第Ⅰ期末をもって樽式土器文化は、終焉を迎えたといえるであらう。

Ia 期	見立溜井遺跡 H7号住居 
Ib期	本遺跡 第I期
IIa期	本遺跡 第II期
IIb 期	永井宮前遺跡 44号住居 
和 泉 期	下佐野遺跡 5区7C住居  5区69号住居 

第338図 Ia期～和泉期の土器編年

う。(いくつかの残影的特徴は残存するが。)

第2点としてその変質し多様化した土器群が、いかに変化して後代である和泉期に収斂していくのであろうか。

それは具体的には次代である和泉期の基本的な器種構成とその代表的な調整技法であるヘラケズリが、一体いつの時点より開始されたかということになる。

これは第II期より登場する赤井戸系の平底甕に求められるであろう。つまり赤井戸系の甕が、次代の和泉期の甕の原型をなしたということができそうである。何故それまでほとんど影響を受けることがなかった樽式文化が、その伝統喪失過程において、赤井戸系の影響を受けるようになったのかについては、今のところまったく不明といわざるを得ないが、石田川文化の影響を受け変質していった周辺の弥生文化は、現在のわれわれが想像する以上に複雑な人的移動が行われたと考えるべきであろう。

最後に、これまで見落とされてきた点として石田川文化の一つの重要な要素といえるS字状口縁台付甕の性格について考察を行い、総括としたいと思う。

S字甕が、東国の古墳時代前期に存在することは、経済レベリックにみても非常に奇異な現象なのである。前述したように熟練された技術と高い斉一性を持つところから、ある特定の専業者集団によって製作されたものと、まちがいなく判断される。

ところがこのような生産体制は、この当時の東国においては、存在しないはずのものなのである。商品生産の一般理論から考えるに、商品経済の発達とともに、生産と消費が完結する範囲が、狭い共同体の範囲を越えて、より広く大きな範囲に拡大し、不特定多数の人間による大きな需要が発生したときに初めて専業的集団が形成され、専門的生産が開始される(王権に直結する部民制的な生産—玉類や装身具などを除いて)。古墳時代前期においてS字甕と同じ様な例は、畿内地方に分布する布留式土器くらいのものであろう。それ以前の段階では、生産体制は専門化せず、農閑期の生産で十分に供給しきれるのである。東国の土師器生産においてこのような専業者集団が登場する時期は、奈良時代以降のことであり、例えば武蔵型甕などの国単位での特徴的な器形が生み出されるようになってからである。

しかば、何故この石田川期にこのような先進的な生産体制が存在し得たのかということについて考えなければならない。当時、東国で一般的であったはずの後進的な農村環境の中には、このような生産体制が必要とされることは、絶対といって良いほどありえないのである。

理論的に考えるならば、古墳時代の前期の段階で、煮沸形態の甕に対して巨大な需要が発生し、それに対応してS字甕とS字甕の生産者集団が形成されたと考えられ、群馬県の東南部地方においては、そのような需要が一定期間存続したと考えなければならないのである。これは、具体的にどの様な政治的社会的情勢を考えなければならないであろうか。現段階で最も可能性のある推定は、おそらく大和政権の東国進出に伴う大量の派兵と駐留が入植と未分離な形で行われたとする考えが、もっとも妥当的ではないだろうか。つまり、単に東海地方から個々ばらばらの形で入

植を開始したのではなく、在地勢力との戦闘を前提とした緊張感の高い入植であり、入植者は常に應戦体制に近い状態で、管理・統率されていたと考えられる。石田川文化がヒエラルキーの性格を有していたことは、初期前方後円墳の築造にみられる計画性と技術力と統率性に明瞭に現れている。

この想定は、S字甕がなぜに和泉期以降に伝統を残さなかったのかという問題もある程度合理的に考えることができる。

S字甕の工人達は閉鎖的集団であり、在地の土器製作者と交わる事がなかったであろうと推定される。後の時代の須恵器工人が、大量生産のために比較的簡単に土師器工人を動員して生産を行ったことは異なっていたと思われる。つまり閉鎖的な生産とならざるを得なかったような事情、すなわち周囲の弥生文化との敵対関係などが存在したものと考えられ、このことが在地との接点を薄くならしめたと推定されるのである。

そして入植初期において不断に存在した軍事的緊張も周辺の弥生文化を変革させ、安定した古墳時代的システムが確立されると共に弛緩し、軍事的体制も緩やかに解体して行ったのではないかと推定される。

つまり、閉鎖的な専門的集団であったということと、その専門性を必要ならしめていた巨大な需要が緊張関係の緩和とともに次第に希薄になっていったことによって、S字甕はその存在意義を失い、急速に消失したものと考えられる。

S字甕は、以上のように理解しなければ、その先進性と短命性とを理解できないように思われる。S字甕の特異性を追求することによって、われわれがこれまで見逃していた歴史事象に近づける可能性があることを指摘しておきたい。ここでは一つの試案として軍事的体制を想定してみたが、さらに多くの角度からS字甕を研究していく必要があると思われる。

註

註1 1982 三宅敦気・相京建史 「樽式土器の分類」 『樽式土器の分類』 弥生終末期の土器・4世紀の土器
第3回3県シンポジウム

1988 友廣哲也 「古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石」 『群馬の考古学』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1988 平野道一 「弥生土器の終焉」 『群馬の考古学』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1990 若狭 徹 「群馬県における弥生土器の崩壊過程」 群馬考古学手帳1

1991 友廣哲也 「群馬県における古墳時代前期の土器様相」 群馬考古学手帳2

註2 1985 関根慎二 「糸井宮前遺跡1」 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

註3 1985 都丸 肇・茂木允規 「見立瀧井・見立大久保遺跡」 赤城村教育委員会 群馬県教育委員会

註4 1990 飯塚卓二・井川達雄 「下佐野遺跡」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 東日本旅客鉄道株式会社

註5 1990 佐藤明人 「有馬II遺跡」 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

註6 各土器の数値は、報告書の図面を直接測りこんだものである。一部観察表の数値と異なっている。
メイン解析は、相関係数行列に基づく方法で行っている。また反復計算の収束精度は、小数点第2桁までである。

また、『多変量解析』の数値計算及びグラフ作成には、ロータス1-2-3R2.3Jとオードマン社製の1-2-3多変量解析Ver.1.0を使用した。

主成分分析とは、端的に言えば、多数の変数を少数の合成変数に要約し、それによって分析対象の姿を対局的に把握しようとする方法である。例えば、一つの土器の中には、口径や頸部径や胴部最大径などの特徴が存在しているが、統計学では、この土器を「個体」と呼び、それに属する特徴を「変数」と呼ぶ。この変数間には、ある関係が存在する。例えば、土器の高さの変数と土器の重さの変数は、おおむね片方が大きくなれば、もう片方が大きくなるという関係をもっている。これを「相関関係」があるという。変数が多数存在する場合、これらの変数どうしの相関関係を知らうとしてもなかなかむづかしい。そこで各変数から少数の合成変数を作り、検討することによって個体の傾向をつかもうとする方法である。この抽出された合成変数を「主成分」と呼ぶ。主成分は、変数と同数の数が存在するが、通常は、第1主成分と第2主成分(ないし第3主成分)を用いて、2次元のグラフを作成することが一般的である。

(参考文献 1990 石原辰雄・長谷川勝也・川口舞久 『ロータス1-2-3活用多変量解析』 共立出版)

表1. 手法名: 主成分分析 表名: データ入力表

	データ名	属性	異常値	X				
				X1	X2	X3	X4	X5
	通 路 名	種 類 名		口 線 径	断 面 径	断 面 大 径	口 断 面	口 断 面
1	IO61-1	S字		15.8	14.3	26.8	1.8	12.2
2	IS1-11-20-5	S字		16.8	14.4	22.4	1.6	9.5
3	IS1-2-14-32	S字		7.5	6.8	10.4	1.4	4.5
4	IS1-2-14-33	S字		10.8	9.8	10.2	1.2	7.4
5	IS1-2-14-34	S字		11.8	9.8	13.8	2.1	7.5
6	IS1-2-6-4	S字		14	12.8	22.8	1.6	11.2
7	IS1-5-13-16	S字		10.6	9.6	13.8	1.4	4.8
8	IS1-5-2-3	S字		15.8	13.8	21.8	1.9	9.4
9	IS1-5-2-4	S字		11	14.8	23.8	1.5	9.3
10	IS1-5-24-10	S字		14.8	13.8	22.4	1.4	9.2
11	IS1-5-24-11	S字		13.4	12.9	20.8	1.1	7.9
12	IS1-5-30-17	S字		16.4	14.8	23.4	1.9	9.4
13	IS1-6-6-19	S字		14	12.8	21.6	1.2	7.2
14	IS1-8-7-2	S字		16.5	14.8	22.8	1.6	9.1
15	IS1-9-1-22	S字		20.4	18	26.6	1.2	11.4
16	SI25-11	S字		12.4	10.6	16.6	1.7	6.8
17	SI25-12	S字		11.4	10.1	15.6	1.3	6.8
18	SI25-13	S字		14.6	13.1	24	1.6	10.3
19	SI41-15	S字		15.5	13.7	20.4	1.7	7
20	SI41-16	S字		18.8	16.7	25.6	1.8	11.4
21	SI45D-1	S字		18	15.4	24.8	1.5	10.4
22	S2線-1	S字		13.2	11.6	18	1.3	8.9
23	ST6-5	S字		11.5	10.3	13.4	1.2	4.6
24	ST10-7	S字		16.8	15	25.4	1.8	9.1
25	ST18-5	S字		14	13	18.4	1.6	6.4
26	ST19-6	S字		14.4	12.5	20.8	1.6	7.2
27	ST32-1	S字		15	13.6	24.4	1.7	8.8
28	ST32-2	S字		16.8	15.2	25.6	1.9	10.6
29	ST34-1	S字		13.8	12.4	20.8	1.4	8.2
30	ST4-6	S字		14.6	13.6	19.8	1.7	6.5
31	ST5-4	S字		20.5	17.4	27.6	2.3	12.5
32	ST外-85	S字		14.2	12.8	22.6	1.6	9
33	ST外-96	S字		14.8	13.4	24	1.8	10.8
34	TO31-10	S字		15.8	13.7	23.1	1.9	9
35	TI65-1	S字		11.4	10.5	17.5	1.6	6.8
36	IA10-10	螺旋		13.9	11.7	13.6	4	8.8
37	IA10-7	螺旋		11.2	8.7	10.6	3.4	7.1
38	IA12-7	螺旋		16.8	14.3	19.2	5.4	11.4
39	IA12-8	螺旋		11.4	9.7	12.5	2.7	6.8
40	IB11-1	螺旋		15	12.7	15.9	4.7	12.5
41	IB15-1	螺旋		18.5	15.4	21.5	5.8	15
42	IB15-3	螺旋		12.7	11	13.9	4.4	9.7
43	IB16-7	螺旋		12.8	10.9	13.3	4.4	11.9
44	IB19-3	螺旋		17.4	13.5	19.2	6.3	14
45	IB6-2	螺旋		18.4	13.8	19.4	6	14.4
46	TO11-11	螺旋		20.2	13.7	21.4	7.2	17.8
47	TO11-12	螺旋		13.5	11.2	15	5	13.1
48	TO11-17	螺旋		20	16.4	26.8	5.2	13.9
49	TO11-18	螺旋		21	16.5	26.8	7.7	18.1
50	TO11-21	螺旋		17.3	13.1	20.2	5.9	15.6
51	TO11-8	螺旋		13.3	10.7	12.8	2.6	4.6
52	TO11-9	螺旋		17.1	13.6	20.2	5.3	13.9
53	TO32-11	螺旋		17.3	13.4	18.6	4.6	11.8
54	TO32-4	螺旋		10.7	9.5	10.5	2.2	5.5
55	TO32-5	螺旋		11.2	8.9	9.6	3	6.9
56	TO32-6	螺旋		9.8	8.2	9	2.6	5.9
57	TO32-7	螺旋		10.5	8.9	10.5	2.7	6.9
58	TO32-8	螺旋		11.5	10.6	13	2.2	6.7
59	TO32-9	螺旋		13.7	11	16.7	5.3	12.2
60	TO77-5	螺旋		17	14.9	21.2	5.1	15.6
61	TO77-8	螺旋		12.9	8.6	13.9	4	9.5
62	TO87-15	螺旋		17.5	13.6	19.1	6	14.6
63	TO87-16	螺旋		15.4	11.3	16.1	3.2	8.2
64	TI56-2	S字		13	9.9	10.7	3.5	6.3
65	TI56-3	S字		13	9.5	12.5	3	6.6

* I 永井宮前道線 IS 伊勢崎・東武池袋線 S 新保道線 II ST 下田中道線 T 戸神原防道線
 TO 戸神原防道線 IA・IB 石巻道線

表2. 手法名:主成分分析 表名:主成分得点表

	データ名	主成分				
		第 1	第 2	第 3	第 4	第 5
1	IOS1-1	1.44884	-1.1437	0.82461	0.19026	0.00624
2	IS1-11-20-5	0.89849	-1.1386	-0.1808	0.26136	-0.1956
3	IS1-2-14-32	-4.0763	0.31196	0.58535	0.05389	0.17943
4	IS1-2-14-33	-3.0098	-0.2403	-0.5042	-0.0421	-0.2562
5	IS1-2-14-34	-1.8750	0.22867	0.16480	0.21080	-0.0993
6	IS1-2-9-4	0.31640	-0.7817	0.8763	0.22187	-0.1563
7	IS1-5-15-16	-2.6347	-0.3465	-0.0037	-0.0479	0.13049
8	IS1-5-2-3	0.54005	-0.9134	-0.0576	0.11247	-0.0611
9	IS1-5-2-4	-0.1961	-1.5080	0.78107	-1.1561	-0.0782
10	IS1-5-24-10	0.30862	-1.1949	0.20506	0.00912	-0.1184
11	IS1-5-24-11	-0.4871	-1.1990	0.24548	-0.0639	-0.0752
12	IS1-5-30-17	0.98302	-1.1895	-0.1491	-0.0393	-0.0359
13	IS1-6-6-19	-0.2957	-0.9479	0.00678	-0.2036	0.37799
14	IS1-8-7-2	0.86035	-1.3014	-0.2505	0.03440	-0.1321
15	IS1-9-1-22	3.07447	-1.8324	-0.5183	0.03999	-0.1361
16	S125-11	-1.5467	-0.3848	0.09055	0.12787	0.12348
17	S125-12	-1.9706	-0.3966	0.29496	0.16155	-0.0346
18	S125-13	0.48709	-0.9429	0.62195	0.12871	0.13000
19	S141-15	-0.0250	-1.1289	-0.5132	-0.0638	0.08062
20	S141-16	2.24503	-1.4742	0.2947	0.12962	-0.3553
21	S165D-1	1.58507	-1.4651	-0.2123	0.28811	-0.1655
22	S238-1	-1.1334	-0.8070	-0.0096	0.12415	0.02120
23	S70-5	-2.3884	-0.5482	0.3391	-0.0617	0.0701
24	ST10-7	1.20518	-1.4676	-0.1236	-0.0311	0.19653
25	ST18-5	-0.7011	-0.9608	-0.4016	-0.1935	-0.0171
26	ST19-9	-0.4137	-1.0149	-0.0805	0.05097	0.25710
27	ST32-1	0.46281	-1.2563	0.26483	-0.0262	0.29204
28	ST32-2	1.49189	-1.3027	0.12834	0.01863	-0.0099
29	ST34-1	-0.4289	-0.9725	0.24561	0.09789	0.05952
30	ST4-6	-0.3259	-1.1120	-0.4586	-0.2564	0.06820
31	ST5-4	3.08980	-1.4159	-0.2019	0.24495	-0.2260
32	S6-85	0.02093	-1.0092	0.40180	0.07718	0.14592
33	S8-86	0.65408	-0.9294	0.83668	0.13455	0.00929
34	TO11-10	0.97317	-1.0559	-0.0042	0.09110	0.18857
35	T165-1	-1.6822	-0.4839	0.39314	-0.0333	0.18775
36	IA10-10	-0.6730	0.92785	-0.4298	-0.2117	-0.1136
37	IA10-7	-2.3433	-1.16182	-0.0648	0.04536	0.09172
38	IA12-7	1.42512	0.96705	-0.4727	-0.4699	0.1376
39	IA12-8	-2.0989	0.82759	-0.0445	-0.0453	0.01212
40	IB11-1	0.55375	1.29847	0.03185	-0.1252	-0.3544
41	IB19-1	2.71692	1.17911	-0.1385	-0.2234	-0.1638
42	IB15-3	-0.8095	1.127731	0.04422	-0.2981	-0.0257
43	IB16-7	-0.3495	1.38455	-0.30955	-0.0555	-0.3922
44	IB19-5	1.89017	1.74515	-0.1249	-0.1411	0.14263
45	IB6-2	2.14422	1.59450	-0.2506	0.08890	0.01649
46	TO11-11	3.28212	2.31541	-0.08613	0.45521	0.13386
47	TO11-12	0.04304	1.78437	0.50432	-0.0558	-0.2514
48	TO11-17	3.38035	0.19731	-0.2384	-0.1786	0.3447
49	TO11-18	4.56587	1.71935	0.08543	-0.2531	0.35786
50	TO11-21	2.03287	1.71769	-0.33947	-0.16492	0.00275
51	TO11-8	1.8644	0.06648	-0.8955	-0.0842	0.22541
52	TO11-9	1.78077	1.30849	0.07591	-0.0024	0.0409
53	TO22-11	1.21375	0.83386	-0.3962	-0.09721	-0.0053
54	TO32-4	2.6932	0.37226	-0.2417	-0.1041	-0.1445
55	TO32-5	-2.4755	1.02598	-0.1763	0.08438	-0.1308
56	TO32-6	-3.1218	0.89923	-0.0095	-0.0002	-0.0744
57	TO32-7	-2.5721	0.32475	0.00994	0.00695	-0.1225
58	TO32-8	-1.9474	0.13647	-0.0055	-0.1482	-0.1082
59	TO23-9	0.10047	1.69354	0.44998	-0.1307	0.19601
60	TO77-5	2.30332	1.04791	0.35929	-0.1735	-0.4166
61	TO77-8	-1.3485	1.40209	0.25779	0.43944	0.38331
62	TO87-15	1.94843	1.67636	-0.0031	-0.0215	-0.0433
63	TO87-16	-0.4870	0.34268	-0.5189	0.31290	0.20313
64	T156-2	-1.8745	0.93278	-0.7038	0.00726	0.08641
65	T156-3	-1.3520	0.86996	-0.0590	0.40934	-0.0810

※ I 糸井宮前道路 IS 伊勢崎・東武東上線道路 S 新保道路 II ST 下田中道路 T 戸神諏訪道路
 TO 戸神諏訪田道路 IA・IG 石黒道路

表 3. 手法名: 主成分分析 表名: 重み係数と構造係数

反復回数: 17 収束精度: 0.01			主 成 分				
			第 1	第 2	第 3	第 4	第 5
固 有 値			3.46348	1.31515	0.13627	0.05166	0.03341
比 率			0.69269	0.26303	0.02725	0.01033	0.00668
累積比率			0.69269	0.95572	0.98298	0.99331	1
Z の係数	c1	口縁径	0.51845	-0.0235	-0.6047	0.59460	0.10655
	c2	頸部径	0.48813	-0.3242	-0.2600	-0.6226	-0.4487
	c3	胴最大径	0.44628	-0.4518	0.45753	-0.0528	0.62008
	c4	口頸高	0.26847	0.74634	-0.1392	-0.4209	0.41755
	c5	口胴高	0.47083	0.36483	0.58128	0.28080	-0.4779
X の係数	w0	定数項	-8.5094	1.07393	1.27242	0.34867	0.25452
	w1	口縁径	0.17617	-0.0680	-0.2055	0.20205	0.03620
	w2	頸部径	0.20149	-0.1338	-0.1073	-0.2569	-0.1852
	w3	胴最大径	0.08485	-0.0859	0.08699	-0.0100	0.11789
	w4	口頸高	0.15529	0.43172	-0.0805	-0.2434	0.24153
	w5	口胴高	0.14260	0.11050	0.17606	0.08505	-0.1447
構造係数	r1	口縁径	0.96469	-0.0270	-0.2237	0.13367	0.02373
	r2	頸部径	0.90861	-0.3717	-0.0958	-0.1443	-0.0819
	r3	胴最大径	0.83072	-0.5182	0.16823	-0.0123	0.11398
	r4	口頸高	0.49997	0.85590	-0.0517	-0.0956	0.07614
	r5	口胴高	0.87580	0.41840	0.21462	0.06077	-0.0859

表 4. 手法名: 主成分分析 表名: 相関係数行列

		1	2	3	4	5
		口 縁 径	頸 部 径	胴最大径	口 頸 高	口 胴 高
1	口縁径	1	0.88703	0.77853	0.45937	0.79243
2	頸部径	0.88703	1	0.92358	0.14823	0.61798
3	胴最大径	0.77853	0.92358	1	-0.0272	0.53643
4	口頸高	0.45937	0.14823	-0.0272	1	0.77234
5	口胴高	0.79243	0.61798	0.53643	0.77234	1

表 5. 手法名: 主成分分析 表名: 基礎統計表

		1	2	3	4	5
		口 縁 径	頸 部 径	胴最大径	口 頸 高	口 胴 高
入力件数		65	65	65	65	65
平 均		14.6323	12.5107	18.7307	2.94	9.57076
標準偏差		2.96574	2.44144	5.30641	1.74219	3.32728
最 小 値		7.5	6.8	9	1.1	4
最 大 値		21	18	28.6	7.7	18.1

第2節 弥生時代後期末～古墳時代前期における遺構と集落の変遷

第1節の土器編年の成果に基づいて、本遺跡の住居を2時期分類した。以下その変化について見てゆく事にしたい。また、同じ台地上に位置する戸神諏訪遺跡についても、関係部分については言及する事にする。

第1期は、前述の③段階、すなわち「外部の土器が、樽式土器圏内に入り込み、樽式土器もその影響を受け始める段階」である。弥生後期である樽式土器文化の伝統がほとんど失われている段階といえる。

この時期の住居の特徴は、(1)長方形の形態(2)長方形に位置する4本ないし6本の支柱穴(3)1本の枕石以外は補強施設を持たない炉(4)壁溝を持っていない事(5)貼床を持たず基本的に掘方面と床面が一致している事などが上げられる。また、第1期に属する住居の全てが、焼失家屋である。長方形住居である事からして家屋形態は、寄棟造りであったであろう。入口は、炉の偏している位置と反対の側に存在したと思われ、この位置には壁沿いに2本のピットが検出される事が多く、入口施設に付随するものと考えられる。

また住居構造について付け加えたい事として、「土屋根」が上げられる。第69号住居の覆土中からは、大量の炭化建材と焼土が検出され、本住居が焼失家屋である事が判断されたが、この炭化建材と焼土の堆積状態を子細に観察してみると、焼土が炭化建材の上に堆積している状態が明白に観察されたのである。このことは、この住居が土屋根構造であったという解釈以外にこの現象を説明できない。時代は下がるが、淡川市の中筋遺跡(註1)において、FA(榛名山二ツ岳の火山灰。西暦6世紀初頭に堆積したといわれる。)によって破壊された鬼高期の住居が確実に土屋根構造である事が立証されているが、この伝統の源流が樽式期まで遡る可能性を示している。

第1期の住居址群は、62・64・69・79・78・81・85・91の各住居址よりなる。このグループは、西・南側の谷地形を勘案して、当時の生産・消費の単位集団と想定することが可能と思われる。(以下、Aグループと呼ぶ。)(第339図)

このグループが単位集団と規定できれば、非常に興味深い現象が看取される。すなわち69号住居を最大規模とし、それに次ぐ78号住居が存在しており、それより規模が小さくなって62・81号住居があり、さらに小型住居である64・79・91・85号が存在している。

このグループを構成する住居群は、以下のような特徴を有している。

- ①住居規模に大きなばらつきが、存在していること。
- ②全体にあまり密集して存在せず、歪Lの字型をなしていること。
- ③住居の方向は、全体に統一がとれていないこと。

などが指摘され得る。戸神諏訪遺跡のほぼ中央にも本遺跡編年第1期の住居群が認められる。しかしながら集落の分布は、さらに北側の未調査地区に広がりをもつ可能性もあり、この7軒が単位集団であるとは断じ難いが、①②③の特徴はAグループと同様に認められる。

Aグループのうち、最も巨大な住居である69号住居は、壁溝の内側に段差を設けたり、主柱穴の埋土に比較的良質な白色粘土を用いたりしており、他の住居と比して構築に神経を配っている様子がうかがえ、遺物も巨大な壺や大型の赤彩の高坪が出土している事からして、かなり特殊な住居と推定されるのである。

Aグループの住居群は8軒よりなっており、これに属する人間達は、おそらく30～50名前後であると思われる。この集団は血縁を紐帯とした集団であると推定されるのである。

第II期は、前節の④⑤段階、すなわち「樽式土器が大きく変容しつつも、その伝統は未だ存在し、また集落内でも外来土器とその模倣品を使用している段階」「樽式土器の伝統が消滅し、外来土器とその模倣によって成立した土師器によって占められる段階」といえる。石田川文化が、当地方に対して強い影響を与え、樽式土器文化はそれによって衰退してゆき、代わって古墳時代的な要素が強くなる段階としてとらえられるであろう。

住居の形態は、第I期の長方形住居から正方形住居に転換する。やや胴が張るタイプと直線的のものとは認められる。主柱穴の位置は、4本で平面プランと相似形の正方形をなし、ピットは径が細く、深いものが多い。掘方には方形周溝状の溝がみられるものが多い。用途は不明である。炉は住居中央からどちらかの壁に偏して存在し、枕石は見られなくなるようである。また壁溝をはっきりと持つものが多い。住居構造は、正方形のプランからして、入母屋造りに転換したものと考えられる。

第II期の住居址群は、26・34・36・48・51・52・53・57・58・65・66・67・68・72・73・80・84・90の各住居址よりなる。住居の立地は調査地区の西側半分全体に拡散しており、明確な単位集団の検出は不可能であると思われる。(第339図)

ここで、前節でも用いた「多変量解析」をこの時期の住居に関して応用してみたいと思う。本遺跡のみでなく、周辺の遺跡をも含めた全容の判明する弥生時代後期末から古墳時代前期の住居103例を「個体」とし、長軸長・短軸長・面積を「変数」として分析を試みた。(第340図) (表6～9)

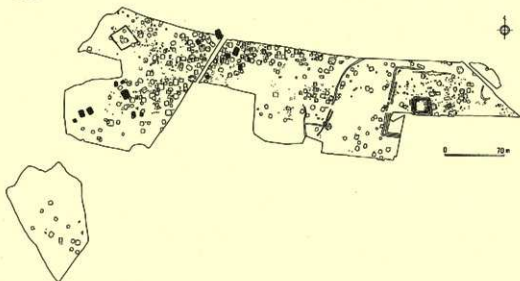
第1主成分は、物理的な大きさを抽出していると思われ、第2主成分は、長軸長と短軸長の比率の違いを抽出しているものと思われる。このグラフから、以下のような特徴が読み取れる。

- ・第I期と第II期とでは、明らかに分布を異にする。中央左から右下に分布するのが、第I期の住居である。右に下がるに従って規模が大きくなる。

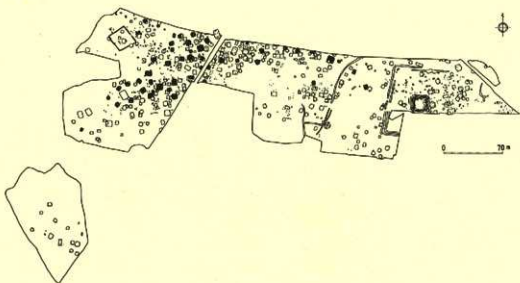
- ・第I期の住居群は、確実に3つのグループに分類する事ができる。いちばん右下端に特に大きな長方形住居があり(15・16・21)、そのとなりにやや規模が小さくなる住居が4例分布し(7・22・28・29)、そして比較的小型の住居が中央付近に分布している。小型であればあるほど、第II期の正方形住居と分布が重なり、見分けがつきにくくなる。反対に大きくなるほど長方形か正方形かの区別が明瞭となる。

- ・69号住居のような飛び抜けて大きな住居は存在しなくなる。

I 期



II 期



第339図 弥生時代後期末～古墳時代前期住居分布図（戸神諏訪遺跡含む）

・第Ⅱ期の住居は、中央左から右上にかけて伸び、全体に二等辺三角形形状に分布している。第Ⅰ期と異なるところは、分布内でグループが存在せず、規模において全てが連続的であるという事がいえる。

さて、本遺跡第Ⅰ期から第Ⅱ期への住居の変化には、以上のような特徴が認められた。以上の各変化点を踏まえて、樽式土器文化がいかに古墳文化に転換してゆくのかという問題について、いくつかの問題を提起しながら、若干の考察を行いたいと思う。

まず、前述の第Ⅰ期の単位集団の中の①の現象（住居のばらつき）を、このことから当時においては階層差が存在したものと想定して良いであろうか。確かに弥生時代末期には、集落内にときどきとびぬけて大きな住居が存在することがある。こうした住居は、時に有力な人間の家屋と思われがちである。

しかし、同時代の樽式文化圏の中にありながら、澁川市有馬Ⅱ遺跡の竈床墓群の所見によれば、副葬品の内容に大きな違いがみられず、階級差はいまだ存在していなかったとされている(註2)。この相反した現象をどの様に整合するべきであろうか。

確かに、住居の物理的大きさのみをもって、住居間に階級差が存在したと考えることは、今一つの証明段階を必要とするように思われる。なんとすればこの巨大住居は、その単位集団の集会所的な性格、または倉庫的な性格を有していたとも考えられ、さらに本遺跡の第Ⅱ期、すなわち古墳時代に入ってからの方が、住居格差が第Ⅰ期より小さくなる傾向があり、古墳時代に入ってからの方が階級差がより少なくなったと考えなければならなくなる。このことは住居の大小の規模の取扱は、慎重にしなければならぬことを物語っている。

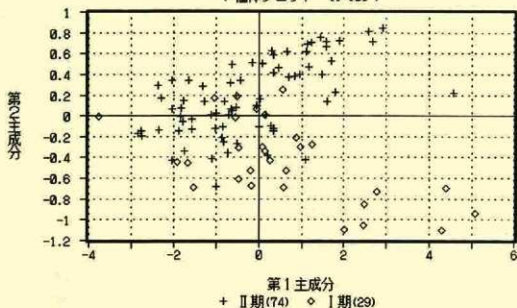
これに比べて竈床墓の副葬品は、その解釈するところにほとんど疑問の余地がない。従ってこの場合、階層差が存在しないという見解の方がより合理的と判断される。

ただ、弥生時代末期の段階で、縄文時代と同様な原始共産制社会を想定することもおかしなことといわねばなるまい。弥生時代中期以来、延々と継続されてきた農耕社会において、なんらの動産的蓄積物も指導者の人間も出現し得なかったとは考えられないのである。むしろ弥生時代後期において、飛躍的な集落の増加を実現してきた樽式文化の中に、そうした要素は確実に存在したのではないかと推定されるのである。

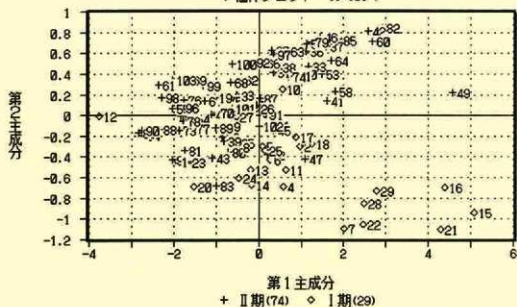
とするなら、当時において必ずしも動産物を所有しない有力者が存在していたと考える事もあろう。おそらく祭祀的・霊能的性格を体現する指導者が存在し、階級発生の源泉である動産物は、共同体の管理に委ねられていたのではないかと推定することも、あるいは可能かと思われるのである。指導者が共同体の管理であった動産物を私有し、共同体成員に君臨するようになるのは、次代である古墳時代となつてからと思われる。

次に、第Ⅰ期と第Ⅱ期との間には、住居の平面構造や出土土器の型式に大きな転換が認められた。これは、樽式文化の衰退過程と古墳文化の受容現象の中における一つの画期として捉えられるわけであるが、それでは樽式文化と石田川式文化とはどのような違いがあり、どのような点で石田

1. 群馬北部古墳前期住居址
(個体プロット n=103)



2. 群馬北部古墳前期住居址
(個体プロット n=103)



第340図 主成分分析図(2)

川文化が優れていたのであろうか。単に古墳文化が弥生文化を駆逐したと安易に考えることは、両文化の本質を見失うことになる。

弥生文化には、その当初から水稻耕作の他に畑作の技術も有していた。弥生時代から古墳時代前期までの各地の遺跡で検出された栽培植物は、稲の他に、麦・稗・粟・黍・蕎麦などの穀類、小豆・大豆・ササゲ・緑豆・豌豆・空豆などの豆類が検出されている（註3）。都出比呂志氏は、各地の農耕生産遺構を分析し、「水田・畑結合型」「畑卓越型」の2つの類型を抽出している（註4）。さらに「水田と畑との関係をこのように捉え、また弥生時代の始めから稲以外の穀類、豆類、果菜類の栽培を認めるとするならば、畑が弥生時代の成立期から一定の比重をもって存在していたと考えるのが合理的である。（中略）先にみた長野県や大分県の間山部のように弥生時代後期における人口増加の結果、新しい耕地を求めて畑卓越型の耕地開発を進めた地域では、もともと水田と畑とが結合した技術体系の中から、畑作をとくに選び、その比重をとくに大きくしたものと考えることができる。」としている（註5）。

この指摘は、かなりの妥当性を持つと思われ、長野県の弥生文化の系譜を引く当地方の樽式土器文化も、畑卓越型の生産構造であったことが推定される。その根拠としては、淡川市有馬条里遺跡（註6）の弥生時代後期の焼失家屋内より、炭化米とともに大量の大豆・小豆などの畑作物が出土していることや（註7）、有馬条里遺跡の浅間C軽石直下から随所に畑がくまなく広がっていることなどが上げられる（註8）。

これに対し、石田川文化は移植の文化であり、その主体となった人間の故郷は、東海地方西部に求められる。なぜ東海西部地方なのかという問題は、しばらくおくとしても、東海地方を含む東海道沿線沿いの弥生文化は、水稻耕作をメインとした生産体制すなわち「水田・畑結合型」として認識できると思われる。時代は少し遅るが、静岡県登呂遺跡の水田のあり方は、この代表的な例である。しかも石田川文化の場合には、大和政権とのつながりを想定しなければならないことから、畿内地方の先進的な水稻耕作技術を所有していた可能性が強い。

とするなら両文化の間には、その生産基盤に大きな相違が見いだせることになる。この相違は、両文化を比較する上において決定的に重要である。

水稻耕作は、水田の造成・整備、灌漑用水の築造など非常に多くの集中的な労力を必要とする。また作付している間にも洪水や病害などの危険が伴う。だが栽培作物の中では最も高い生産を上げることができる。つまり水田造成時には多くの労力を必要とするが、いったんできてしまえば、単位面積に投入する労力に比して畑作ものよりも収穫量ははるかに高いと言えるのである。同時に稲は貯蔵性に優れており、この点で畑作文化を大きく凌駕しているといえるのである。

余談になるが、常食とする穀類の中で、人間が味覚上最も好むものは、米であるそうである。中尾佐助氏によると、「米が人間の味覚上非常に好まれるという事実は、小麦と比較して検討すべき問題であろう。（中略）中国でもインドでも民衆は常に米を食する方を望んでおり、米の価格の方が高価となり、貧乏人はやむを得ず小麦食を強いられている。中国とインドではたぶん2000年

間にわたり、何億という人間が米と小麦を食べ比べての実験の結果がこのような評価差となったのだ。」(註9)。穀物の中でも、米を指向していく理由がこのことから推察される。

さて、樽式文化と石田川文化との間には、次のような生産基盤の相違に起因する集落構造の違いが存在している。

水稻耕作は、稲を植えるためにフラットなエリアを必要とし、かつ灌漑用水の設備を完備しなければならない。これには多量の人間の共同作業が必要となってくる。特に農地を拡大してゆくには、こうした労力が不可欠である。小規模な水田であれば、血縁集団程度の人数でまかなえたであろうが、簡単に農地に転換できる場所は、早く農地にされてゆき、条件の悪い土地が残ることとなる。こうした土地の開拓には、血縁関係を越えたより多くの集団が結束して開拓を行うこととなる。

多人数の築造による水田は、当然のことながら、所有権を主張できる人間が多人数存在することとなる。その意味で水田は個人の私有とはなりにくく、共同体の共用財産になってゆく。日本古代史の中で、一時期、律令時代以前に水田の定期割替えの慣行が存在したのではないかという説が一世を風靡したことがあったが、この説は、こうした水田の共用制を前提としている。律令期における一定期間の「占有」を前提とした口分田の班給は、このような共用制の伝統を引くものである。口分田(水田)以外の園地(畑)・宅地は私有が認められ、売買も自由であったということは、水田と畑では明らかに取り扱い方が異なっていたと考える事ができ、この違いの発生は実に水稻耕作発生期に遡ると思われるのである。

さて水田は、水の引き込める河川の近くでなければならず、1本の河川を幹として、水路である枝渠が多数に延びてゆく景観が想定される。このことは、水の導入をめぐる多くの人間の間に利害関係が錯綜することを意味する。

こうした現象は、血縁集団を越えて、必然的に共通した利害関係を有するもの達が集まり、一つの集落を営むようになる。これが地縁的共同体の成立である。利害関係の錯綜は、共同体間の紛争を惹起し、その結果として利害を共にする地縁的共同体内部の結束を強固なものとし、また共同体間に離合集散・淘汰が行われ、強者・弱者が決定されていく過程を通じて、階級分化が進展してゆく。おそらく一つの水系の中で、最も有力な地縁的共同体の指導者がこれらの利害の調停にあたることとなり、のちにいわゆる豪族となっていったものであろうと考えられる。

これに対し、畑作が中心となる生産では、地縁的共同体があまり強固なものとはなりにくい。というのは水稻耕作のように水田の築造・整備、水利灌漑施設の造成を必要としないため、広域的な集団の協同作業を必要としない。従って強固な地縁的共同体を形成するに代り、比較的小範囲にまとまった小集団を分散的に形成することとなる。本遺跡において検出された第Ⅰ期の単位集団が幾つか集まったものが、この小集団に相当するといえるであろう。この小集団が、実際の生産・消費の完結体となる。農地に対する私有的観念は強いが、共同体の規制は相対的に強くなく、比較的自由な移動を行い得たのではないかとと思われる。樽式文化の集落に比較的時間

間の集落が認められない事は、このような事情をある程度反映したものではないだろうか。

以上のように、この両文化の違いの最も重要な点は、生産基盤の相違から規制される社会的経済的構造である。

水稻耕作が卓越する文化は、上記のような地縁共同体の成立と強化、紛争を通じた階級制の成立といった現象は、水田農耕文化に特有なものである。結果として高い生産力と余剰を産みだし、ピラミッド型の社会体制を形成し、農村の中に都市を生み出し、古墳時代にみられる高い文化を出現させることとなる。東アジアの農耕文化において、非階級的社会から統一王国を創り出す歴史的過程は、平地水田の発達過程とまさにイコールの関係として認識できる。一つの水系を中心として、八方に水路を切り、線でなく面として拡張して行く平地水田こそが、巨大な余剰生産物を産みだし、統一国家の成立条件を形成したのである（註10）。

畑卓越型の樽式文化の場合は、小集団ごとの生産性は安定していても地縁共同体の形成は未成熟であり、広いエリアにおける統一的な権力体制を生み出す事はできなかった。生産基盤の相違が、共同体・集落のあり方を規定し、さらにその発展の方向をも決定したのである。樽式文化はこの意味において、石田川文化に大きく遅れをとっていたのである。

しかしながら、利根沼田地方の樽式文化が、石田川文化の影響によって、水稻耕作に転換したというような単純な図式で解釈しきれものではない。それは石田川期を通じて、比較的長く樽式土器の影響が残存する事からみても理解できる。

つまり、石田川文化の影響によって、それまでの樽式文化を短期間の間に消失させた高崎の井野川流域地方などは、地理的にみて水稻耕作を行い易い地域と判断できるが、利根沼田地方は、気候的にも地理的にも水稻耕作を本格的に行うに足る、きびしい条件が内在していた事が推定され、このことが伝統的な畑作文化である樽式文化を徹底して駆逐し得なかった理由ではないだろうか。本当の意味で、この地に水稻耕作が定着するのは、古墳時代後期以降になるであろうと思われる。

以上、両文化の構造分析のために、いささか理論的展開に終始してしまい、水田・畑結合型と畑卓越型とを白と黒のようにはっきり区別し過ぎたきらいがあったことを反省している。樽式文化圏の中でも、例えば高崎方面・渋川方面・利根沼田方面とでは、水田と畑との割合は異なっていたであろうし、また違いがあるからこそ、墓制において見られるような地方差が存在していたのであると推察される。この意味で、樽式文化は、石田川文化に比して、複雑な内容を有していたと考えられる。現在、この方面の研究は徐々に行われつつあるが、単なる現象面での相違把握にとどまらず、深い理論的理解を充実させていく必要性があろうと思われる。

註

註1 渋川市教育委員会

註2 群馬県史 通史編1 P499

註3 1981 寺沢薫・寺沢知子「野生時代植物質食料の基礎的研究」 権原考古学研究所紀要考古学論考5

註4 1989 都出比呂志「日本農耕社会の成立過程」 岩波書店

註5 註4に同じ

註6 「有馬条里遺跡」淡川市教育委員会

註7 群馬県史 通史編1

註8 註7に同じ

註9 1966 中尾佐助「栽培植物と農耕の起源」 岩波新書G103

註10 註9に同じ

表6. 手法名:主成分分析 表名:データ入力表

データ名	属性	長さ	X1	X2	X3
※遺跡名	時期	長軸m	短軸m	面積m ²	
1 IS-A101	I期	4.6	3	13.8	
2 IS-A102	I期	7.2	5.2	37.44	
3 IS-A12	I期	5.3	4.6	24.38	
4 IS-B11	I期	7.3	4.6	33.58	
5 IS-B15	I期	6.4	4.6	29.44	
6 IS-B16	I期	6.7	4.6	30.82	
7 IS-B19	I期	9	5.2	46.8	
8 IS-B22	I期	5.9	4.2	24.78	
9 IS-B23	I期	6.1	4.9	29.89	
10 IS-B6	I期	6.2	5.4	33.48	
11 JU-4	I期	7.16	4.78	34.2248	
12 JU-5	I期	2.03	1.88	3.8164	
13 T-62	I期	6.4	4.2	26.88	
14 T-64	I期	6.6	4.1	27.06	
15 T-69	I期	11.2	7.2	80.64	
16 T-78	I期	10.4	7	72.8	
17 T-79	I期	7	5.2	36.4	
18 T-81	I期	7.4	5.4	39.96	
19 T-85	I期	4.8	4.2	20.16	
20 T-91	I期	5.3	3.1	16.43	
21 TS-11	I期	10.8	6.6	71.28	
22 TS-148	I期	9.34	5.53	51.65	
23 TS-156	I期	4.88	3.2	15.62	
24 TS-158	I期	6.24	3.95	24.64	
25 TS-32	I期	6.5	4.6	29.9	
26 TS-42	I期	5.86	4.82	28.25	
27 TS-77	I期	5.5	4.4	24.2	
28 TY-1	I期	9.1	5.7	51.87	
29 TY-2	I期	9.2	6	56.2	
30 ITO-101	II期	5.58	5.56	31.0248	
31 ITO-108	II期	5.84	5.4	31.536	
32 ITO-112	II期	5.4	4	21.6	
33 ITO-119	II期	6.5	6	39	
34 ITO-123	II期	6.6	6.5	42.9	
35 ITO-125	II期	5.8	4.2	24.36	
36 ITO-3	II期	6.3	6.1	38.43	
37 ITO-38	II期	6.65	6.45	42.8925	
38 ITO-39	II期	5.88	5.52	32.4576	
39 ITO-44	II期	5.5	4	22	
40 ITO-46	II期	6.43	4.92	31.6356	
41 ITO-48	II期	7.24	6	43.44	
42 ITO-49	II期	7.32	7.22	52.8504	
43 ITO-50	II期	5.4	3.65	19.71	
44 ITO-51	II期	6.34	4.9	31.086	
45 ITO-52	II期	6.45	4.9	31.605	

データ名	属性	長さ	X1	X2	X3
※遺跡名	時期	長軸m	短軸m	面積m ²	
46 ITO-54	II期	6.44	6.44	41.4736	
47 ITO-56	II期	7.43	5.17	38.4131	
48 ITO-57	II期	4.9	4	19.6	
49 ITO-58	II期	9.5	7.9	75.05	
50 ITO-59	II期	6.4	5.8	37.12	
51 ITO-61	II期	4.2	3.45	14.49	
52 ITO-62	II期	5.4	4.5	24.3	
53 ITO-71	II期	6.85	6.15	42.1275	
54 ITO-76	II期	4.5	3.64	16.38	
55 ITO-87	II期	3.9	3.36	13.104	
56 JU-1	II期	5.82	4.84	28.1688	
57 JU-2	II期	6.23	6.17	38.4391	
58 T-26	II期	7.3	6.2	45.26	
59 T-34	II期	5.3	4.1	21.73	
60 T-36	II期	7.5	7.2	54	
61 T-48	II期	3.3	3.3	10.89	
62 T-51	II期	5.2	4.9	24.96	
63 T-53	II期	5.9	5.8	34.22	
64 T-57	II期	6.9	6.4	44.16	
65 T-58	II期	5.3	4.3	22.79	
66 T-65	II期	5.5	5.3	29.15	
67 T-66	II期	4.6	4	18.4	
68 T-67	II期	5	4.6	23	
69 T-68	II期	4	3.9	15.6	
70 T-72	II期	5	4.1	20.5	
71 T-73	II期	6.3	5.7	35.91	
72 T-80	II期	6.6	4.6	30.36	
73 T-84	II期	4.3	3.9	14.19	
74 T-90	II期	6.2	5.6	34.72	
75 TS-100	II期	5.67	4.35	22.05	
76 TS-103	II期	4.1	3.65	14.97	
77 TS-105	II期	4.6	3.55	16.33	
78 TS-108	II期	4.3	3.45	14.84	
79 TS-13	II期	6.3	6.25	39.38	
80 TS-134	II期	5.7	3.97	22.63	
81 TS-14	II期	4.66	3.23	15.05	
82 TS-142	II期	7.55	7.46	56.32	
83 TS-143	II期	5.81	3.5	20.34	
84 TS-147	II期	3.43	2.58	8.85	
85 TS-15	II期	6.84	6.7	45.83	
86 TS-151	II期	3.3	2.52	8.32	
87 TS-16	II期	5.82	4.95	28.81	
88 TS-161	II期	3.79	2.94	11.14	
89 TS-162	II期	5.14	3.96	20.35	
90 TS-165	II期	3.34	2.6	8.65	

	データ名	属性	間距離	X 1	X 2	X 3
	※道路名	時期	長軸m	短軸m	面積㎡	
91	TS-31	Ⅱ期	6.13	4.92	30.16	
92	TS-33	Ⅱ期	5.27	5.14	27.09	
93	TS-40	Ⅱ期	5.28	4.6	24.29	
94	TS-72	Ⅱ期	5.35	4.4	23.54	
95	TS-73	Ⅱ期	4.47	2.83	13.1	
96	TS-74	Ⅱ期	4.12	3.54	14.58	
97	TS-76	Ⅱ期	5.65	5.56	31.36	
98	TS-78	Ⅱ期	3.5	3.25	11.38	
99	TS-85	Ⅱ期	4.4	4.1	18.04	

	データ名	属性	間距離	X 1	X 2	X 3
	※道路名	時期	長軸m	短軸m	面積㎡	
100	TS-87	Ⅱ期	4.85	4.8	23.28	
101	TS-88	Ⅱ期	5.3	4.4	23.32	
102	TS-90	Ⅱ期	6.1	4.7	28.67	
103	TY-3	Ⅱ期	3.6	3.6	12.96	

※ IS 伊勢崎・東武池袋線道路 JU 十二原Ⅱ道路
T 戸神磯田道路 TS 戸神磯田道路
TY 戸神吉田道路 IT 糸井宮前道路

表 7. 主成分得点表

	データ名	主成分	第 1	第 2	第 3
	※道路名				
1	IS-A101	-1.9236	-0.4477	0.05383	
2	IS-A102	0.98018	-0.3006	-0.0635	
3	IS-A12	-0.5051	0.18564	-0.0586	
4	IS-B11	0.58213	-0.6907	-0.1533	
5	IS-B15	0.09287	-0.2963	-0.1107	
6	IS-B16	0.25596	-0.4278	-0.1249	
7	IS-B19	2.00244	-1.0937	-0.1291	
8	IS-B22	-0.4594	-0.3101	-0.0954	
9	IS-B23	0.14262	0.00954	-0.0869	
10	IS-B6	0.55496	0.25616	-0.0713	
11	JU-4	0.64146	-0.5254	-0.1306	
12	JU-5	-3.7642	-0.0078	0.61103	
13	T-62	-0.1957	-0.5284	-0.1300	
14	T-64	-0.1632	-0.6737	-0.1497	
15	T-69	5.08388	-0.9412	0.46568	
16	T-78	4.38802	-0.6951	0.33740	
17	T-79	0.86650	-0.2125	-0.0906	
18	T-81	1.24619	-0.2735	-0.0759	
19	T-85	-1.0396	0.17063	-0.0194	
20	T-91	-1.5207	-0.6914	-0.0413	
21	TS-11	4.28443	-1.0092	0.25565	
22	TS-148	2.47295	-1.0559	-0.0565	
23	TS-156	-1.6573	-0.4513	0.00856	
24	TS-158	-0.4592	-0.6038	-0.1293	
25	TS-32	0.14723	-0.3401	-0.1154	
26	TS-42	-0.0465	0.06838	-0.0807	
27	TS-77	-0.5334	-0.0187	-0.0679	
28	TY-1	2.47472	-0.8531	-0.0241	
29	TY-2	2.78404	-0.7266	0.03726	
30	ITO-101	0.30798	0.62321	-0.0683	
31	ITO-108	0.34739	0.41507	-0.0699	
32	ITO-112	-0.8594	-0.2087	-0.0597	
33	ITO-119	1.16317	0.47167	-0.0402	
34	ITO-123	1.58807	0.71704	-0.0678	
35	ITO-125	-0.5122	-0.2665	-0.0885	
36	ITO-3	1.11487	0.61851	-0.0417	
37	ITO-38	1.58251	0.66578	-0.0681	
38	ITO-39	0.45470	0.46730	-0.0676	
39	ITO-44	-0.8074	-0.2523	-0.0677	
40	ITO-46	0.34048	-0.1238	-0.0961	
41	ITO-48	1.60741	0.14323	-0.0190	
42	ITO-49	2.58127	0.8117	0.10320	
43	ITO-50	-1.0978	-0.4132	-0.0675	
44	ITO-51	0.27601	-0.0959	-0.0943	
45	ITO-52	0.33714	-0.1442	-0.0977	
46	ITO-54	1.44538	0.75355	-0.0197	
47	ITO-56	1.08790	-0.4192	-0.1000	
48	ITO-57	-1.1190	0.00910	-0.0197	
49	ITO-58	4.57373	0.21897	0.45775	
50	ITO-59	0.95882	0.40000	-0.0527	
51	ITO-61	-1.8305	-0.0099	0.07549	
52	ITO-62	-0.5188	0.08339	-0.0627	

	データ名	主成分	第 1	第 2	第 3
	※道路名				
53	ITO-71	1.48426	0.40310	-0.0192	
54	ITO-76	-1.5589	-0.0282	0.03208	
55	ITO-87	-2.0354	0.06702	0.11634	
56	JU-1	-0.0548	0.09762	-0.0792	
57	JU-2	1.12259	0.68028	-0.0413	
58	T-26	1.79504	0.23194	0.00215	
59	T-34	-0.8436	-0.1067	-0.0528	
60	T-36	2.66290	0.71887	0.11814	
61	T-45	-2.3672	0.29136	0.19242	
62	T-51	-0.4248	0.34649	-0.0572	
63	T-53	0.66271	0.62151	-0.0616	
64	T-57	1.70005	0.52545	0.00141	
65	T-58	-0.7082	0.01022	-0.0551	
66	T-65	0.08323	0.50676	-0.0685	
67	T-66	-1.2748	0.13983	0.00426	
68	T-67	-0.6682	0.31710	-0.0443	
69	T-68	-1.6489	0.34229	0.06950	
70	T-72	-1.0006	0.02412	-0.0304	
71	T-73	0.82784	0.38623	-0.0588	
72	T-80	0.20159	-0.3840	-0.1202	
73	T-84	-1.8763	-0.1415	0.07438	
74	T-90	0.69767	0.37238	-0.0638	
75	TS-100	-0.7972	0.16002	-0.0419	
76	TS-103	-1.7543	0.15134	0.07140	
77	TS-105	-1.5668	-0.1245	0.02658	
78	TS-108	-1.7806	-0.0832	0.06477	
79	TS-13	1.22271	0.70560	-0.0390	
80	TS-134	-0.7243	-0.3570	-0.0639	
81	TS-14	-1.7452	-0.3385	0.02502	
82	TS-142	2.91495	0.84612	0.15148	
83	TS-143	-0.9961	-0.6788	-0.1083	
84	TS-15	-2.7364	-0.1913	0.25886	
85	TS-17	1.88497	0.72573	0.02016	
86	TS-151	-2.8320	-0.1710	0.28639	
87	TS-16	0.02195	0.16170	-0.0773	
88	TS-161	-2.3485	-0.1334	0.16812	
89	TS-162	-1.0214	-0.1188	-0.0383	
90	TS-165	-2.7874	-0.1406	0.28847	
91	TS-31	0.17383	0.00799	-0.0871	
92	TS-33	-0.1563	0.51460	-0.0641	
93	TS-40	-0.5159	0.19439	-0.0575	
94	TS-72	-0.6137	0.04682	-0.0582	
95	TS-73	-2.0308	-0.4327	0.07541	
96	TS-74	-1.8138	0.07785	0.07721	
97	TS-76	0.34194	0.58643	-0.0679	
98	TS-78	-2.2990	0.17515	0.17455	
99	TS-85	-1.3146	0.28582	0.01424	
100	TS-87	-0.6179	0.50014	-0.0444	
101	TS-88	-0.6405	0.05869	-0.0563	
102	TS-90	0.00073	-0.1067	-0.0933	
103	TY-3	-2.0375	0.33896	0.12584	

表 8. 【重み係数と構造係数】

反復回数:5
収束精度:0.01

		主 成 分		
		第 1	第 2	第 3
固有値		2.77720	0.20500	0.01778
比 率		0.92573	0.06833	0.00592
累積比率		0.92573	0.99407	1
Z の係数	c1 長軸m	0.57058	-0.6700	-0.4748
	c2 短軸m	0.56456	0.73995	-0.3656
	c3 面積m ²	0.59640	-0.0594	0.80048
X の係数	w0 定数項	-5.5136	-0.2801	1.57050
	w1 長軸m	0.35735	-0.4196	-0.2973
	w2 短軸m	0.4624	0.60612	-0.2995
	w3 面積m ²	0.04049	-0.0040	0.05435
構造係数	r1 長軸m	0.95088	-0.3030	-0.0615
	r2 短軸m	0.94084	0.33531	-0.0507
	r3 面積m ²	0.99390	-0.0275	0.10688

表 9. 手法名:主成分分析 表名:基礎統計表

	1	2	3
	長軸m	短軸m	面積m ²
入力件数	103	103	103
平 均	5.91436	4.75427	29.6702
標準偏差	1.60452	1.22676	14.7999
最 小 値	2.03	1.88	3.8164
最 大 値	11.2	7.9	80.64

第3節 平安時代の土器編年

今回調査されたのは戸神諏訪遺跡の南側に続く部分であり、同じ集落となる。また时期的にも重なるため、戸神諏訪遺跡の土器編年に合わせて分類し各段階の様相を記し、集落の営まれた時期・住居数をより明らかにするため、出土量の少ない住居についても出来る限り、各段階に当てはめることとする。編年については戸神諏訪遺跡同様、9世紀代は平野部とも並行関係にある土師器甕を、10世紀代は形態の変遷が明瞭な須恵器羽釜を基軸としている。但し今回の調査ではI・II段階及びIX、IX段階は検出されておらず、戸神諏訪遺跡になかったX段階が検出されている。

III段階 (第341図)

この段階までには、須恵器の供給量の充実により、土師器坏はほとんど見られなくなる。甕は口縁部・胴部とも器内は薄手になっている。小形甕は台の付くものと付かないものの双方が存在し、口縁から胴部の形態はほとんど同一である。須恵器の器種には、蓋・坏・埴・皿・広口甕などがあり、まだ還元焰焼成で比較的堅緻に焼かれている。須恵器坏の底部調整には、左右の回転が見られ、糸切り未調整が多いが若干笠切りのものも残っている。広口甕も数少ないが出土しており、同段階の戸神諏訪遺跡の広口甕(141号住居-21)とは口縁部の形態が異なる。この段階に属する住居跡は、31・37・47・60・76・83・92号住居の6軒である。

IV段階 (第342、343図)

この段階の土師器甕は薄手で、口縁部の形状が「コ」の字に近くなっている。須恵器では、坏・蓋・坏・碗蓋・碗・広口甕・甕などの器種がある。坏は、前回の分類でこの段階に特徴的に見られたB類(器肉が厚く体部が直線的に開き、燻し焼成。20~23)が今回も多く検出された。他の坏もこの段階から燻し焼成のものが多くなる。底径が比較的大きく、口径の1/2以上あるものが多い。碗も底径が大きく、体部は直線的で丸みが少ないものである。広口甕は前段階のものと口縁部の形態が異なるが、戸神諏訪遺跡のIII段階のものと口縁部の形状が同じである。甕は胴上部に凸帯のあるもので、羽釜の出現以降は形態が類似するようになる系統のものと考えられる。この段階に属する住居は、1・2・11・15・16・19・21・25・32・40・43・45・54・61・71・74・82・88・93号住居の17軒である。

V段階 (第344図)

土師器甕の口縁部が、しっかりした「コ」の字状を呈す段階である。小形甕はこの段階でも双方が存在し、口縁部の形態はほぼ甕に類似する。須恵器にはほとんど蓋が見られなくなり、坏・碗類のうち坏の方が量的にはまだ多い。坏ではやはり戸神諏訪遺跡に特徴的に検出されたC類が、今回も多く出土している。

他の坏も全体として底径が前段階より小さくなり、体部の開きが大きくみえる。黒色土器の坏・碗が出土しているが、各段階を通じて出土量は僅かであり、比較的平野部では量の増える11世紀代のものも出土していない。この段階に属する住居は、3・17・27・33・35・49・86・94・95号住居の9軒である。

VI段階 (第345、346図)

土師器甕は「コ」の字状の口縁部が崩れる段階のものである。須恵器には坏・碗・皿・小形甕

等があり、この段階から羽釜が出現する。出現期の羽釜は、丁寧な作りで形が良く整い、鋳も比較的大形でしっかりと回転によって撫で付けられている。坏にはC類と類似するものがあるが、前段階よりも底径が小さくなっている。椀は体部に丸みをもつものが多くなっている。この段階から坏・椀類の胎土が前段階までと大きく異なり、砂粒を多く含む粗い胎土のものが多くなる。この段階に属する住居は、5・18・24・38・41・100号住居の6軒である。

Ⅶ段階（第347図）

土師器壺は今回は出土していないが、戸神諏訪遺跡には見られ口縁部の「コ」字形態が、かなり崩れた状態となっている。しかし、全体的に出土量は減っており、それを補完する形で羽釜の出土量が増えている。羽釜はまだ丁寧な作りであるが、鋳の付く部分を大きな変換点として、口縁部が立ち上がっていくのが特徴的とされる「月夜野型羽釜」の形態のものが多く、その他、須恵器には坏・椀・小形甕が出土している。坏・椀類では椀の比率が圧倒的となり、椀は全体的に小形化していく傾向にある。この段階に属する住居は、22・23・63号住居の3軒が検出されている。

Ⅷ段階（第348図）

この段階以降、利根・沼田地方では土師器壺は出土しなくなり、煮炊具は須恵器羽釜を主体とするが、甕も比較的多く見られる。その他、須恵器には坏・埴・皿・小形甕等がある。煮炊具の甕はこの段階から多く見られるようになるが、戸神諏訪遺跡ではⅦ段階にも若干出土している（46号住居—11）。成形技法・調整とも羽釜と類似している。また形態も羽釜とよく似ており、鋳を持たないだけの感じであるが、口縁部の形態にバリエーションが認められる。12のようなタイプが最も多いが、他に13のように口縁部のあまり開かないタイプ、戸神諏訪遺跡の109号住居—15のような口縁部のロクロ調整が顕著なものなどがある。羽釜は作りが雑になってきており、やや歪みも見られる。鋳も小さくなり、しっかりと貼り付けないで所々開いているような状態で、また内面の撫でも雑で紐作り痕が所々見える様な状態である。この段階に属する住居は、4・6・7・8・10・12・14・28・56・59・97号住居の11軒が検出されている。

Ⅸ段階

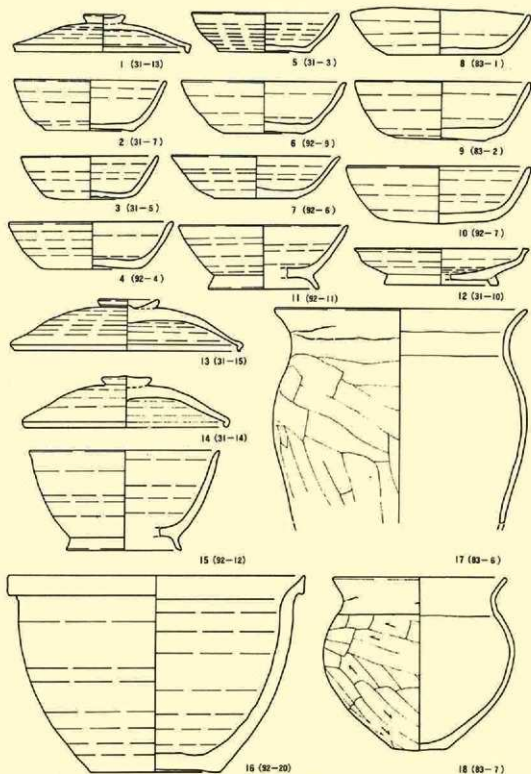
この段階の住居跡は今回の調査では検出されなかったが、戸神諏訪では7軒検出されている。

X段階

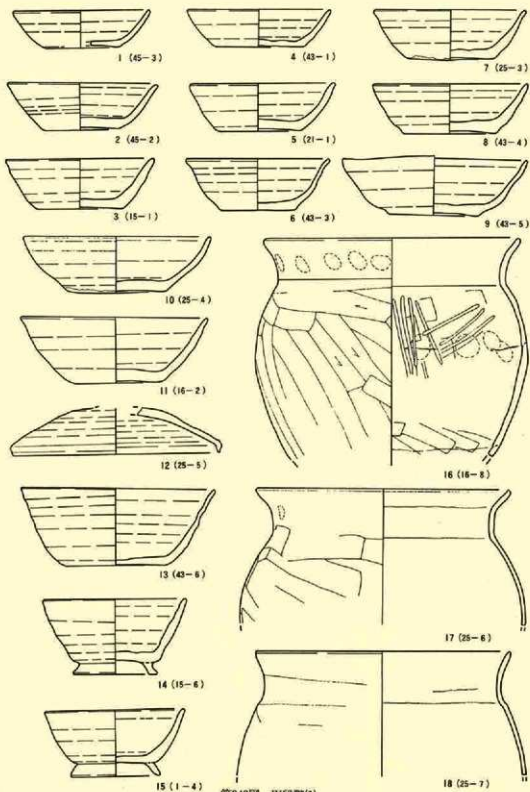
この段階に属する住居跡は、検出されなかった。

Ⅺ段階（第349図）

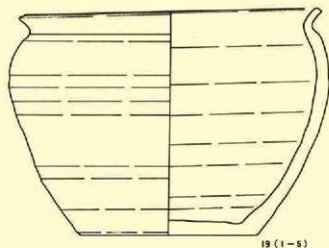
坏1点と羽釜の資料のみであるが、羽釜はⅨ段階のものと異なり、それまで比較的大胴でふくらみのあまりないものから器高が低く、鋳下から大きく張り出す形となり、全体に歪みが著しく雑な作りとなっている。この羽釜と類似するが、前段階に属すると考えられるもののが村主遺跡3・17号住居に見られ、坏・椀・黒色土器椀・灰釉陶器椀・皿などが共伴している。55号住居の坏と比べても、やや古い段階のものと思われる。この段階に属する住居跡は、55・96号住居の2軒である。



第341圖 III段階



第342图 IV段(1)



19 (1-5)



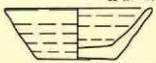
20 (21-5)



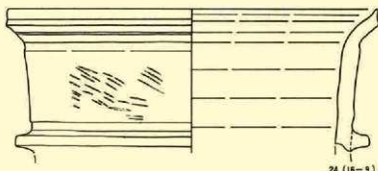
21 (21-2)



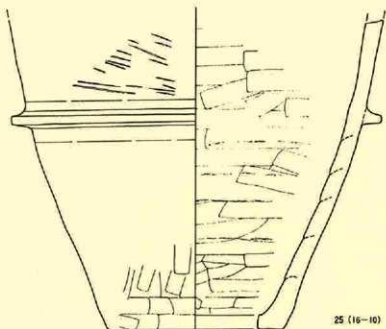
22 (21-4)



23 (15-2)

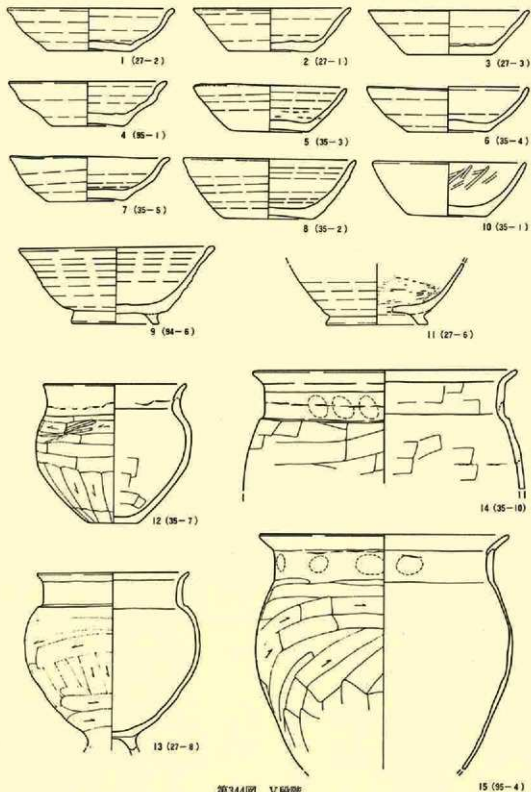


24 (16-9)

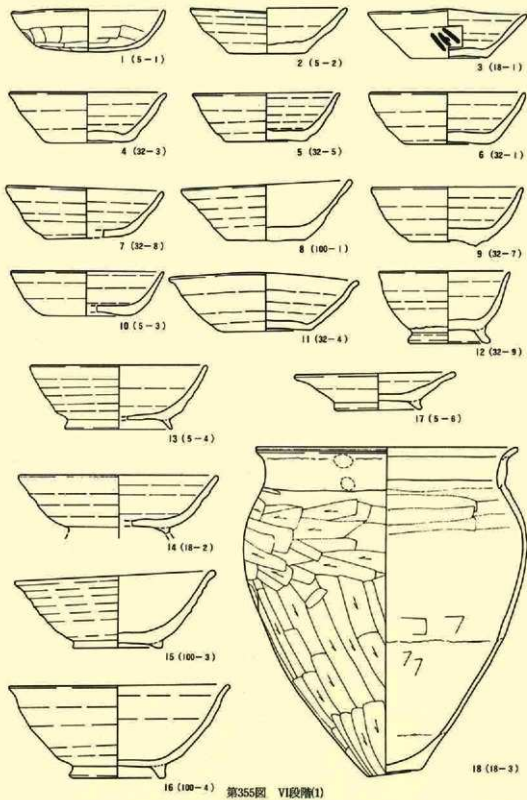


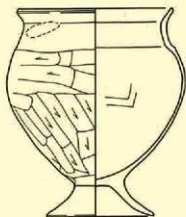
25 (16-10)

第343圖 IV段増(2)

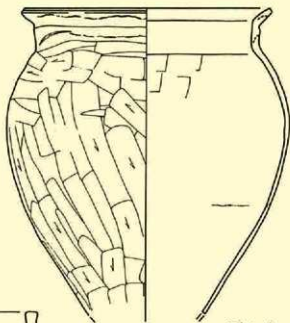


第344图 V段階

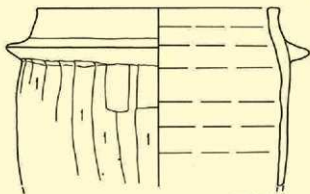




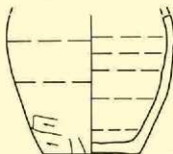
19 (18-5)



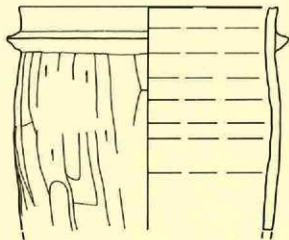
20 (18-4)



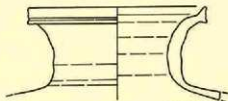
21 (100-7)



23 (100-5)

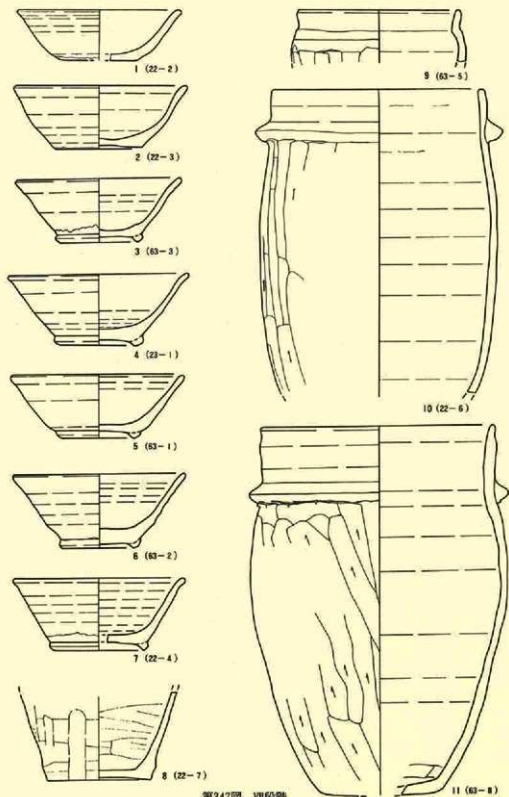


22 (100-6)

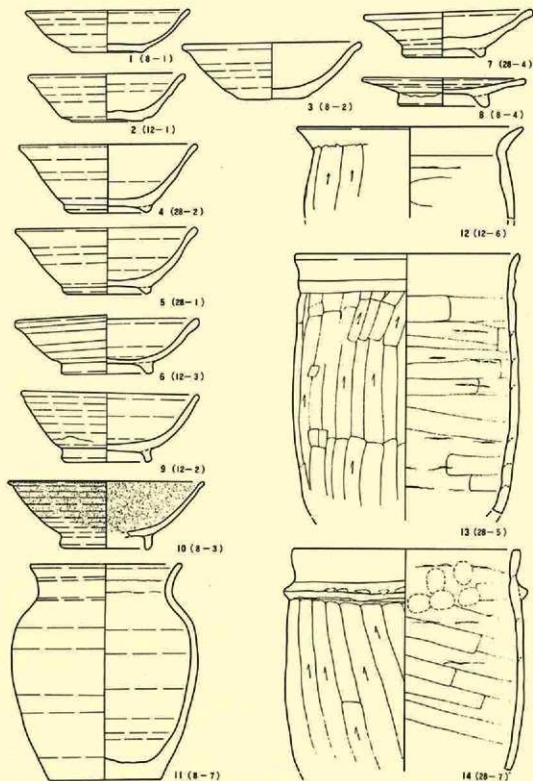


24 (5-8)

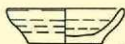
第346图 VI段(2)



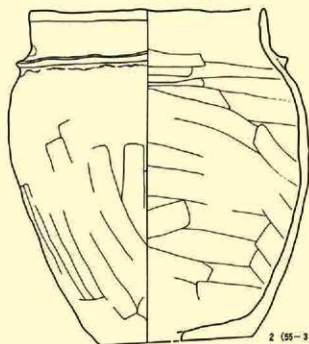
第347圖 VII段甗



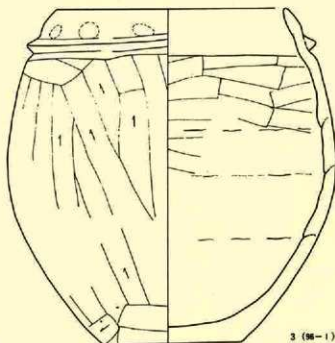
第348圖 VIII段階



1 (55-1)



2 (55-3)



3 (96-1)

第349図 IX段階

第4節 平安時代における遺構と集落の変遷

本節においては、戸神諏訪Ⅲ遺跡の平安時代の集落の変遷とそれに伴う個々の問題について考察してみたいと思う。隣接する戸神諏訪遺跡も、ここでは含めて考察を行っていききたい。また、以下の文章の中で戸神諏訪遺跡の報告内容と一部重複するところもあるがご容赦願いたい。

1. 編年基準の設定

まず、集落の変遷過程を明確にするにあたって、時期分類の基準となる土器編年について触れておかねばならない。

戸神諏訪遺跡においては、平安時代の土器群を9段階に分類し、編年を行っている。現在群馬県内において最も妥当な編年であると評価される坂口・三浦編年(註1)に則ったものであり、これを引き継ぐ形で、第3節において三浦が編年を行っている。

同編年は、中尾遺跡(註2)の出土資料を基準としたものであり、7世紀の第3四半世紀より11世紀後半までを15段階の時期に整理している。

本遺跡の編年は、坂口・三浦編年の第V期を本遺跡第I期とし、順次以下のような対応関係をなしている。これは、戸神諏訪遺跡の編年設定とも合致している。

坂口・三浦編年	本遺跡編年	実年代
第V期	第I期	8世紀第3四半世紀
第VI期	第II期	第4四半世紀
第VII期	第III期	9世紀第1四半世紀
第VIII期	第IV期	第2四半世紀
第IX期	第V期	第3四半世紀
第X期	第VI期	第4四半世紀
第XI期(前半)	第VII期	10世紀第1四半世紀
(後半)	第VIII期	第2四半世紀
第XII期(前半)	第IX期	第3四半世紀
(後半)	第X期	第4四半世紀
第XIII期	第XI期	11世紀前半

2. 各期の変遷

第I期(8世紀第3四半世紀)(第350図)

本時期に所属する遺構は、戸神諏訪遺跡第135号住居のみである。戸神諏訪遺跡のほぼ中央に位置し、単独ないし単独に近い状態で出現したものと見られ、ノーマルな集落を形成していないも

のと考えられる。

第Ⅱ期（8世紀第4四半世紀）（第350図）

本時期に所属する遺構は、戸神諏訪遺跡5・6・123号住居である。同遺跡の中で123号住居のみが東側に単独に存在し、5・6号住居は、西側に南北に連なって存在している。両者は、やはり違うグループに属すると判断され、特に西側の2軒の住居は、この2軒のみで構成されたと考えられ、第Ⅰ期と同じく、ノーマルな集落でない事が注意される。

墨書土器では、戸神諏訪遺跡5号住居より「宮井」がある。

第Ⅲ期（9世紀第1四半世紀）（第351図）

本時期に所属する遺構は、ようやく多くなる。戸神諏訪遺跡では、10・18・23・112・121・131・132・141号住居址である。戸神諏訪Ⅲ遺跡では、31・37・47・60・76・83・92号住居が該当する。全体的な景観では、両遺跡全体の西側半分に分布し、大きく直線状をなしている傾向が指摘され得る。

墨書土器では、戸神諏訪遺跡10号住居より「名」、131号住居より「福」がある。

第Ⅳ期（9世紀第2四半世紀）（第351図）

本時期に所属する遺構は、戸神諏訪遺跡44・51・53・62・67・86・92・93・110・118・119・126・127号住居である。戸神諏訪Ⅲ遺跡では、1・2・11・15・16・19・21・25・32・40・43・45・54・61・71・74・82・88・93号住居が該当する。この段階では、両遺跡全体に拡散するという印象を受ける。

住居の分布より見て、戸神諏訪Ⅲ遺跡40・43・54・61・71・88号住居の6軒が、単位集団となる可能性があると思われる。

墨書土器では、戸神諏訪62号住居より「管」、86号住居より「野井」、118号住居より「十」、127号住居より「有」、戸神諏訪Ⅲ遺跡では11号住居より「仁」、16号住居より「乙」が出土している。

第Ⅴ期（9世紀第3四半世紀）（第352図）

本時期に所属する遺構は、戸神諏訪遺跡7・58・63・69・80・114・117・130・133・136・138号住居である。戸神諏訪Ⅲ遺跡では、3・17・27・33・35・49・86・94・95号住居である。本期も前期と同じく、両遺跡全体に認められる。

住居の分布より見て、戸神諏訪遺跡138・136・133・130号住居の4軒が、単位集団となる可能性があると思われる。

墨書土器では、戸神諏訪63号住居より「永」、114号住居より「午」「寺」「造佛」、戸神諏訪Ⅲ遺跡では27号住居より「伍」「個」、35号住居より「木」、95号住居より「上」等が出土している。

この期より初めて寺院址関係の墨書土器が出土しており、寺院の建立がこの時期に行われたことを示している。

第Ⅵ期（9世紀第4四半世紀）（第352図）

本時期に所属する遺構は、戸神諏訪遺跡47・98号住居址である。戸神諏訪Ⅲ遺跡では、5・18・24・38・41・100号住居址である。全体に住居址数の減少が観察される。

墨書土器では、戸神諏訪47号住居の「宮田寺」、94号住居の「吉」「侶」「午」、戸神諏訪Ⅲ遺跡では18号住居より「三」、100号住居より「住」等が出土している。「宮田寺」は、この寺院の名称と考えられる。「侶」は、寺院の僧侶に関したものであろうか。

第Ⅶ期（10世紀第1四半世紀）（第353図）

本時期に所属する遺構は、戸神諏訪遺跡17・46・81・95・96・98・101・102・109・124・125・137・155号住居である。戸神諏訪Ⅲ遺跡では、22・23・63号住居が該当する。住居数は全体に少なく、立地は両遺跡の東側に多くみられる傾向を指摘できる。

墨書土器では、戸神諏訪17号住居の「直」、81号住居の「嵩」等がある。

第Ⅷ期（10世紀第2四半世紀）（第353図）

本時期に所属する遺構は、戸神諏訪遺跡2・4・9・20・28・29・45・48・55・56・57・59・60・65・66・68・70・71・79・82・83・84・91・97・115・128・129号住居が該当する。戸神諏訪Ⅲ遺跡では、4・6・7・8・10・12・14・28・56・59・97号住居が該当する。本時期は平安時代を通じ最も住居数が多い時期を形成している。

住居の分布より見て、戸神諏訪遺跡97・48・45・59号住居の4軒と戸神諏訪Ⅲ遺跡4・6・7・8・10・12・14号住居の7軒が、それぞれ単位集団となる可能性があるとと思われる。

墨書土器では、戸神諏訪9号住居の「福」、54号住居の「有 午」、79号住居の「全」、91号住居の「直」等がみられる。戸神諏訪Ⅲ遺跡では、8号住居の「南院」などの東側の寺院に関連するとみられる墨書土器がみられる。珍しい例として刻書土器があり、戸神諏訪128号住居の羽釜より「神人子真丘 神人」がある。

第Ⅸ期（10世紀第3四半世紀）（第354図）

本時期に所属する遺構は、戸神諏訪遺跡8・49・50・64・99・111・163号住居である。戸神諏訪Ⅲ遺跡には、認められない。全体的に散漫と拡散している。墨書土器では、戸神諏訪49号住居の「直」「吉」、111号住居の「吉」「在」等がみられる。この期を最後として墨書土器はみられなくなる。

第X期（10世紀第4 四半世紀）

本時期に所属する遺構は、両遺跡とも認められない。

第XI期（11世紀前半）（第354図）

本時期に所属する遺構は、戸神諏訪Ⅲ遺跡55・96号住居である。遺跡の南西側に単独に2軒存在している。本住居を最後として、当台地上には住居は見られなくなる。

3. 総 括

本遺跡において、最も古い集落は、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけてのものであるが、それに続く和泉期・鬼高期には、まったく遺構が存在していない。再びこの地に集落が営まれるようになるのは、奈良時代の後半になってからである。まず最初に出現した住居は、戸神諏訪遺跡135号住居である。8世紀第3 四半世紀に属する住居は、この1軒のみしか検出されていない。このことからして、135号住居を築造した人々は、集落として移転してきたのではなく、ごく小規模な人数によって開拓を始めたものと推察される。

135号住居で注意される事は、住居内の柱穴がすでに不明確となっており、鬼高期以来の4本柱穴の伝統がすでに失われている事である。また本住居より、遺存状態の良好な鉄鎌が検出されており、この住居の性格が、確実に農業と密接な関連を持っている事が看取される。

集落の出現する時期が、奈良時代の後半であるというこの現象は非常に興味深い。これは周知のごとく、奈良時代中葉に発令された三世一身法や聖田永世私財法に關係するものと推定される。

ただ、開拓に関して注意しなければならないことは、誰でもが山の中に入って、勝手に思うままに開拓ができたと考えやすいことである。当時においては、土地は大まかに3つの形態に分かれていた。1つは、園地（畑）・宅地という、「私有」が認められていた土地である。2つは、口分田に代表される公田であり、これは国家が管理するものであって、農民はこれを一定期間「占有」する事が許された。口分田の売買は禁止されているから、園地・宅地のように「私有」は許されない。3つは、山川藪沢であり、農民が薪を取ったり、動物を狩猟したりする共同用益地であり、個人の「私有」も「占有」も許されない土地である。共同用益地の管理は、実際には近在に存在した複数の「郷」にあったと思われる。つまり、この戸神諏訪遺跡135号住居の住人は、おそらくは近在の郷の管理であった共同用益地に、郷の許可に基づいて、開拓の手を入れたものと考えられるべきであろう。

沼田盆地付近は当時利根郡と呼ばれ、その中に4郷が存在していた。渭田（ぬまた）、男信（なましな）、笠科（かさしな）、具桃（なぐるみ）である。このうち渭田は現在の沼田市付近、男信は川場村生品付近、笠科は片品村及び片品川流域地方、具桃は月夜野町名胡桃付近に比定される。地名より考えておそらく本遺跡及び本遺跡の開拓は、最も近い渭田郷と関係が深かったものと考えられる。

以前、山梨県北部の八ヶ岳南麓地方の平安集落の出現に関して考察をしたことがある(註3)。八ヶ岳南麓地方の場合、9世紀の後半代より集落が一斉に出現し、開墾が開始されたという現象が指摘でき、これは親王賜田の設置を契機としたものであるとした。しかしこの山梨の現象とは異なり、当地方においては、8世紀後半代からの小規模な開発が出发点であると考えられ、これはやはり近在の郷からの開拓と考えた方が合理的であると思う。

本台地上の集落の動向を概観してみると、開拓当初である第Ⅰ期には住居1軒であったが、第Ⅱ期には3軒、第Ⅲ期には15軒と順調に集落が伸展している。

次の第Ⅳ期(9世紀第2四半世紀)には、住居数32軒となり、本台地上における平安期前半のピークを迎える。そこから徐々に減り始め、第Ⅴ期20軒、第Ⅵ期8軒と第Ⅶ期(9世紀第4四半世紀)に最も住居数減る時期を迎えるが、そこからまた徐々に増え始め、第Ⅷ期16軒、第Ⅷ期38軒で、第Ⅸ期(10世紀第2四半世紀)に平安時代後半のピークを迎える。そこからまた減り始め、第Ⅹ期7軒、第Ⅺ期0軒、第Ⅻ期2軒となり、本台地上からは集落が消失する。坂口・三浦編年が正確であるとするならば、本遺跡の集落2つの盛衰を体験したことになる。

第Ⅰ期から第Ⅳ期までの期間は、開拓集落の伸展現象と捉えてまちがいないと思われる。ここから第Ⅵ期までの減少現象の解釈は、さらなる分付による減少か、逃散によるものか、いくつかの可能性が考えられるが、決め手に欠く。

9世紀後半以降の集落の動向に関しては、戸神諏訪遺跡東端より検出されている寺院址が関係してくる。本台地上の集落の減少現象の過程の中で寺院が登場したことは興味深い、その意義は明かでない。同遺跡より検出されている墨書土器から当寺院址は「宮田寺」と呼ばれていたらしいことが判明している。この「宮田寺」に関しては、次節において三浦が詳細に論じているので、ここでは詳しい説明は省略することとするが、この9世紀後半に登場し、少なくとも10世紀前半までは存続したと思われる「宮田寺」なる地方寺院址と9世紀後半以降の本遺跡の集落は、各住居より出土する墨書土器からしても、非常に密接な関係を持ったものである。従って本遺跡の9世紀以降の動向は、この寺院址の成立背景や性格と合わせて考えていく必要がある。

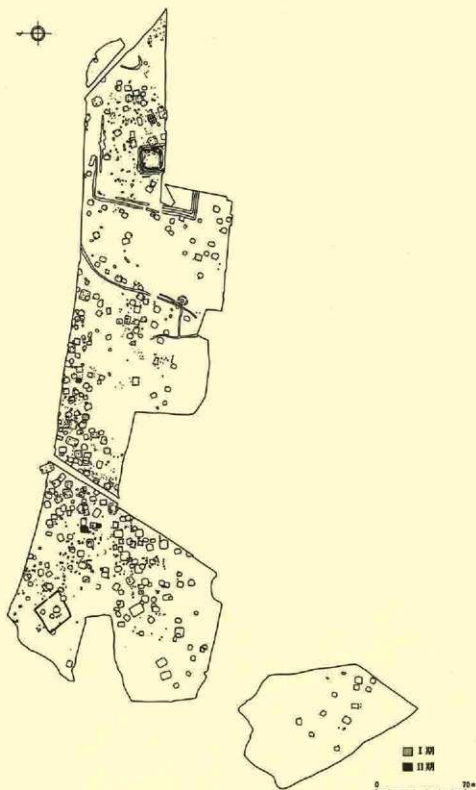
当寺院址はこれのみを持って完結しているのではなく、本遺跡の北側のどこかに「本院」を有しているとする三浦の考えは、おそらく当を得たものと考えられるところから、本遺跡における9世紀後半以降の動向に関しては、今後の本遺跡北側一帯の発掘調査を待って論じられるべきであろうと考える。

註

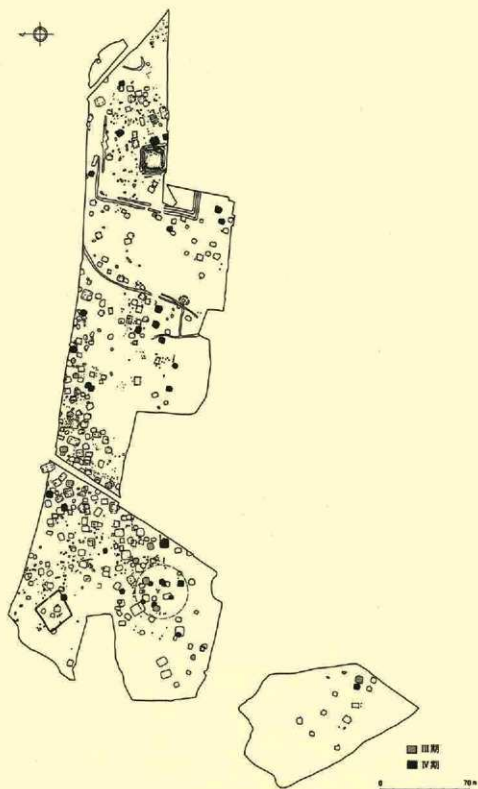
註1 1986 坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究 第24号』

註2 1983・1984 坂口 一・三浦京子『中尾遺跡』(遺構編・遺物編) 群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

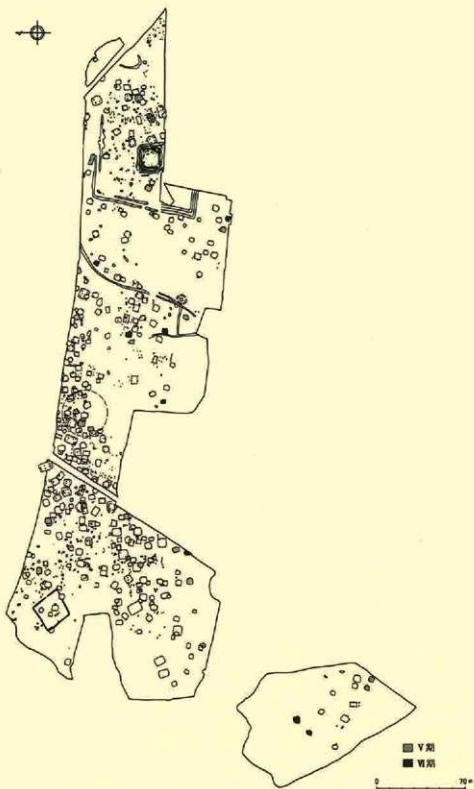
註3 1990 岡本範之「平安期における甲斐国巨磨郡の動向」『山梨県考古学協会誌3号』



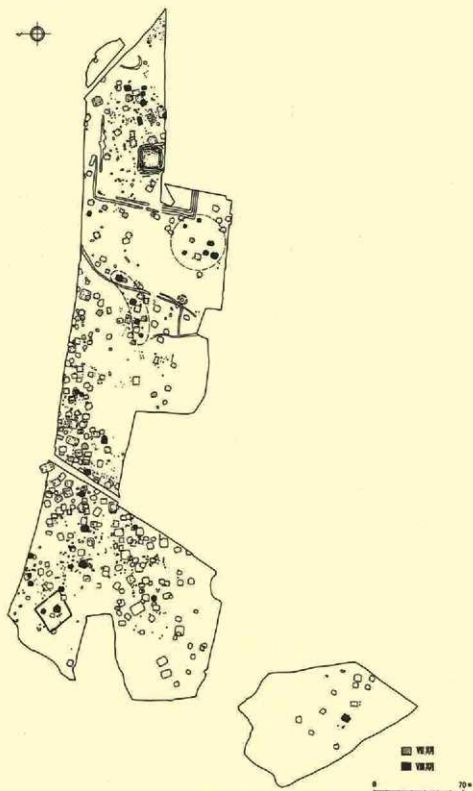
第350図 平安時代I、II期住居分布図（戸神課訪遺跡含む）



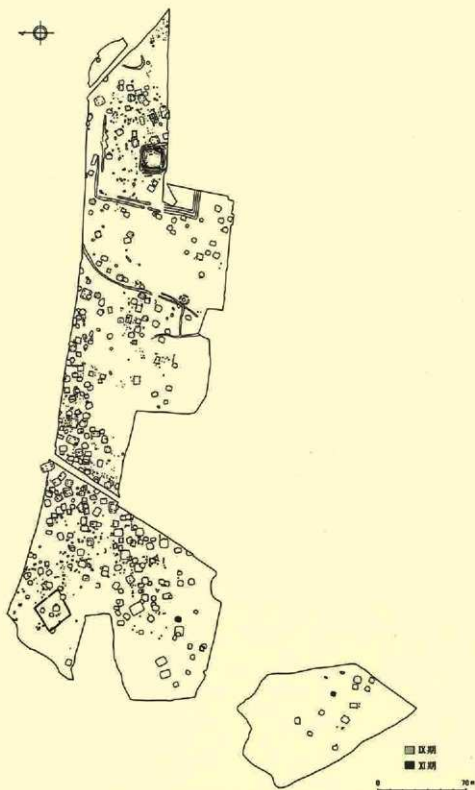
第351図 平安時代Ⅲ、Ⅳ期住居分布図（戸神課訪遺跡含む）



第352図 平安時代V、VI期住居分布図（戸神原跡遺跡含む）



第353図 平安時代Ⅷ、Ⅸ期住居分布図（戸神原跡遺跡含む）



第354図 平安時代Ⅸ、Ⅹ期住居分布図（戸神原跡遺跡含む）

第5節 「宮田寺」について

はじめに

7・8世紀の寺院については、古くからの地名や文献の研究、遺跡の調査例も多く、その成立の背景・意義についても論じられてきている。しかし、平安時代の地方寺院については、記録に少なく、まして村落に営まれた小規模な寺院は、特別な信仰を得て後世にまで伝えられたものでもなければ、時代と共に埋没してしまうものがほとんどである。この「宮田寺」(註1)も現在の地名にすらも痕跡を残さず消えてしまった寺院の一つである。ここでは、当時の宗教的な状況を見ながら、このような寺院が時代の中で果たした役割の一端、活動の可能性を考えてみたい。

1. 奈良時代の仏教

6世紀に伝来した仏教は、天武・持統天皇の時には国家仏教としての体裁を整えられ、地方にも浸透していった。仏教に対する理解は、輸入された經典によって進められ、難解な教理を中心とした学派仏教として三論宗・法相宗・俱舍宗・成実宗などが天武天皇の時代までには渡ってきていた。しかし、初期の時代から仏教は、用明天皇二年(587)天皇の病を折り、天武四年(675)に祈雨が行われたように呪術的・現世利益的な要素の強い信仰であり、「倭婆塞賈連解」や『日本霊異記』に見られる官僧志望の僧侶の修行内容には、孔雀の呪法・千手経等の密経の經典が含まれており、現世利益の追求能力を望まれてもいた。(註2)それには、律令政府が教理や信仰と言った思想的内容よりも、国家の鎮護・繁栄のための呪力に期待する面の方が強かったためである。地方に於いての仏教の受容も政治的な様相が強く、律令政府との関係の強化という方針の上にあった。有力な豪族層によって盛んに寺院が造営されるが、これも僧侶の能力の高さに着目し、これを国家体制に下級官人として組み込むための教育養成機関としての役割が期待されたためでもある。また、信仰としての仏教受容の様相は、上野国の「金井沢碑」「山ノ上碑」に見られるように、教理的な理解よりも、俗縁的な関係の強化のための入信や、従来の民間信仰である祖先信仰と結び付け適善供養として受け入れられていった。

律令政府は仏教を推進していったが、権力の正当化・装飾化することのみに利用しようとしていたことから、本来の仏教の目的の一つである民衆の救済に対しては否定的であり、僧尼令によって僧尼の主体的活動を処罰によって制限し、僧尼と民衆が結び付くことを厳しく制限していた。しかし、大乗の諸経においては衆生を教化・済度すべきことが説かれており、經典に忠実であろうとすれば律令政府の方針とは真っ向から対立し民衆に接近して行くことは必然であった。この反律令的仏教という側面を代表するのが奈良時代前半に活躍した行基の活動である。行基は架橋や池沼の開発、布施屋を設けるなど、衆生利益のための菩薩行を実践したが、これらを行うには莫大な資材と労働力を必要とした。これを提供したのは、行基のカリスマ性にひかれた財を持たない民衆の労働力の喜捨であり、行基の土木事業の展開とが開墾という面で合致した有力豪族層

である。有力豪族層は、一面では国分寺造営や東大寺大仏建立という国家的事業の担い手であったが、もう一方ではその私的な開墾に対する欲求の正当性を行基によって保証された形で、その活動に参加していった。このように奈良時代の仏教は、国家が国家的呪術のための宗教として僧尼集団を多くの制限条項を定め制度化し掌握していたのである。しかし、その国家仏教の担い手である僧尼は中央や地方の中小豪族の出身のものが多く、当初からその律令的身分秩序と矛盾する面を内包していた。こういった面や、また行基等の布教活動など相互の対応関係を通じて、国家仏教は漸次変容され、平安革新仏教がもたらされたとされている。(註3)

2. 平安時代の仏教

奈良時代にも顕著になっていた密教的な信仰は、すでにもたらされていた雑部密教経典の中から適当に選び出され信仰されていた。これらの雑然とした信仰に教理的背景を与え、完成された体系的な密教を確立したのが空海である。平安時代の仏教は、奈良時代の国家仏教と対立した、全く新しいところから開かれたわけではなく、基本的には鎮護国家としての仏教という面をもっていた。しかし、仏教の本質である、特定の階級のためではなくより広範な民衆の救済、現実の権力に左右されない普遍的な仏教を確立するためには、国家の支配・管理からの独立が実現されなければならなかった。最澄・空海ともその方法においては異なるが、得度・受戒を教団の手に取り戻し、教団仏教を成立させたのである。天台・真言宗の成立は、仏教を国家の管理から解放したかったが、きらびやかな密教法具を使用した密教の深遠な教理も厳肅な儀式もやはり天皇・貴族等のものであり、一般民衆の理解の範囲外にあり、民衆にとっては密教もまだ呪術的・現世利己的信仰からでるものではなかった。

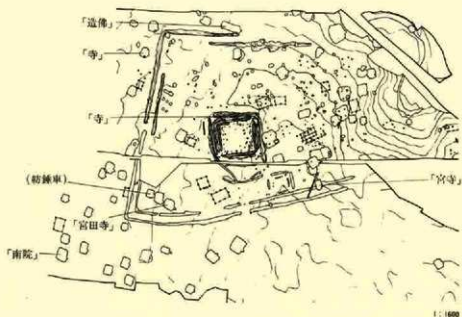
真に民衆に仏教が深く根付くものとなったのは、阿彌陀信仰の浄土教である。9世紀中ごろ天台宗の円仁が唐の五台山で行われていた「法照流五会念仏」と呼ばれる法を持ち帰り、比叡山において常行三昧の念仏と称して始められるが、これによって阿彌陀仏に対する信仰が、次第に広まっていった。そして、10世紀の中ごろ市の聖と呼ばれる空也が、京の市中で念仏の功德を説いてまわったが、阿彌陀の名を唱えることによって、厭離穢土である現世を逃れ、浄土に生まれることが可能だと説く簡易な空也の思想は民衆に受け入れられ易く、急速に人々の間に広まった。また、「往生要集」を著した恵信僧都源信によって理論化もなされ、浄土教は大きく発展し、仏教を民衆のものとした鎌倉仏教へと展開していくのである。

上野国に於ける宗教的状況は、かなり進んだ面を持っていたようである。平安時代の初期にはすでに、緑野寺には一切経が存在し、中央からも写経のテキストとして注目されていた。緑野寺は鑑真的弟子である道忠によって開かれた寺であり、上野国における布教の拠点であった。その道忠は東国化主と称され、広範な宗教活動と供に多くの弟子を養成していた。そして、道忠教団は進んだ斬新な気風に満ちており、最新の密教を導入し、最澄・空海ともつながりを持ち、最澄の東国伝道を実現させている。最澄は緑野寺塔下において毎日、法華経・金光明経・仁王経等の

大乘経典を長講し、多くの民衆を教化し、その数9万とも言われている。また、8世紀後半の国分寺修繕に使われた文字瓦は個人的な知識として施入したと見られ、民間への仏教の浸透が窺える。その知識の所在は県南西部の郡のものが多く、古くは「金井沢碑」や「山ノ上碑」なども存在するように、この地域が宗教的に活発であったことが考えられる。こういった状況が他の地域でも同様であったとすぐには言えるわけではないが、道忠やその弟子また最澄などの布教活動によって宗教的地位はかなり進んでいたのではないだろうか。

3. 「宮田寺」について

1982・83年に調査された戸神課訪遺跡で「宮田寺」の主要な部分はずでに検出されており、今回の調査で南東部の状況も明らかとなった。(註4) 寺は調査地域の東端に造られ、寺域は幅91～144cm・深さ21～45cmの溝で囲まれている。北側は約65m、西側約80mの直線の溝だが、南側の溝は東の谷に向かってややカーブを描き約100mを測る。東側は谷を境界としており溝は作られていない。この中で寺の中心となる建物は中央やや西寄りに位置するもので、約24.7m×20.1mの方形を呈する数条の溝によってなる遺構である。この溝は全周するものではなく、不規則に途切れており、溝幅・深さも一定ではなく、幅50～220cm・深さは17.0～60.0cmを測る。内部には建物の支柱穴となる様なものは検出されず、縁や庇あるいは建造時の足場跡と思われるような小ピット列が見られる程度である。建物自体は溝や周辺からも瓦の出土が見られないため、葺瓦・板瓦等の簡素なものが想定される。また寺域の中には、寺が機能していたと同時期に竪穴住居が営まれており、寺の管理や運営に当たっていたものであろうか。奈良時代の律令政府によって進められ造立



第355図 「宮田寺」全体図

された寺院のように寺域内に常に清浄に保ち、仏の住むにふさわしく装飾され、綺麗に飾られたものではなく、もっと生活に密着したものであったと思われる。こういった状況から見ると、まさに共同体と共にあった寺という感じがするが、具体的に集落と共に検出された例は少なく、その意味でも注目すべき遺構と思われる。

さて、「宮田寺」を現出させたこの集落は、8世紀後半になって新たに営まれるようになったものである。まず調査区域の西側を中心に1～3軒の住居が現れ、9世紀には全域にわたって検出されるようになる。竪穴住居の軒数から見る限りでは、若干の増減はあるものの順調な発展ぶりが窺える。「宮田寺」は調査地域の南端に位置するが、ここには前代に51・109号住居（戸神諏訪遺跡）などの大型住居が営まれており、この地が集落の中では寺地にふさわしい優位な場所であったと言えるのかもしれない。そして、10世紀前半までほとんど減少することなく集落の規模は維持されている。その中で「宮田寺」が造立されたのは9世紀後半のことであり、114号住居（戸神諏訪遺跡）出土の「造仏」の墨書によって知られる。廃絶の時期は定かではないが10世紀前半に「寺」の墨書土器が出土していることから、この頃までは存続していた可能性が高い。そして、10世紀後半以降には激減し集落としては機能しなくなったものと思われる。

この集落が営まれた8世紀後半から10世紀後半は、いわゆる律令制の崩壊期であり、あいつぐ農民の兆散逃亡により律令的秩序の破綻を来し、個別人身支配による調庸収奪は不可能となっていく時代である。そのような中で収奪のためのシステムは土地に対する掌握へと向かって行く。律令制的な土地公有制は崩れ、私的な土地所有が展開していき、大寺社・権門による大土地私有が見られ、初期荘園が成立するものもこの時期である。上野国では初期荘園は史料的には知られていないが、「殷富の百姓」「富豪の輩」と称されるような有力農民の開発による私有地の拡大と言うような、該期の土地所有のあり方から無縁ではあり得ず、この地域にも当然土地の私有化は進んでいたと思われる。この集落の開始が開発に係わるものとして、可耕地は台地北側の低地に求められるであろうか。しかし、出土した墨書土器の中に「南院」（戸神諏訪III遺跡8号住居-2・4）と書かれた土器があることから、この「宮田寺」を含む集落の背景にはかなり広がりを持って考えられる。院とは主に公共的な一構えの建物を表しており、南院とあるからには何か主になる建物があり、それに対する南の院であることになる。このことからすれば「宮田寺」はもっと別に中心たるべき堂宇（以下「本院」と仮定する）が存在し、そこから新たに南に造られた寺院なのではという想像も可能なのである。また、寺域内にある47号住居（戸神諏訪II遺跡）から出土した紡錘車には、仏堂建物と思われる線刻画があるが、これには甍の表現があることから「宮田寺」とは考えられず、その「本院」を写した可能性が高い。集落の開始が8世紀後半にあり、「宮田寺」の成立が9世紀後半であることは、寺院の造られる以前と以後の集落の関係が問われるところであろう。前述のように、北側の低地などのように開発に適した可耕地は既に本院に関係した勢力によって開発されており、8世紀後半に出現したこの集落は、内陸部の開発がこの時期の開発の特色とされているように、（註5）さらに南側内陸部への開発を目指したという想定も可

能であろうか。このように「本院」とは別個に開発された私領が、「本院」の私領の中に取り込まれていき、集落の管理・運営の拠点として寺が造立されたものというように、寺院を媒介として形成されていく私領の展開も考えられるのではないだろうか。

このような集落内に造られた9世紀代の堂を、村落内寺院としてその概念を提出した須田努氏によれば、集落の出現と寺院の造営は期を一にしたものであり、開発のための人的掌握のイデオロギーとしての役割を果たしていると考えられている。(註6) 集落に営まれる、精神的拠点としての施設、村落祭祀などを司るための宗教的施設は、古くは神社などに求められた。祭祀は個人の日常生活をも規定し、社会生活全般にわたる規範となっていたように、その農耕共同体を支配するための原理でもあった。共同体を支配し得るという幻想は、宗教を媒介として可能となったのである。政治的支配の権力は宗教的権威に由来するものであり、田租の起源が共同体の農耕祭祀において神に奉られた初穂に求められるように、(註7) 経済的収奪を可能にしたのもしかりである。

このように共同体を支配するために村落祭祀は重要な役割を果たしていたわけであるが、律令的秩序の崩壊はこの村落祭祀においても、当然その変質を迫るものであった。日本の神祇信仰は稲作儀礼を基盤に成立しており、基本的生産集団である農耕共同体の祭祀から国家的な祭祀に至るまでの基礎をなしている。社会の大きな変動は、従来在地の支配者である郡司の精神的支配権をも揺るがせていき、郡司が精神的影響力の回復のため、神仏習合を押し進めていく状況も見られる。(註8) 新たに人身を掌握する支配原理として、神祇信仰に仏教などの新しい要素が加わって成立していくのであるが、具体的な変容の過程は明らかにされていない。

4. まとめ

平安時代の仏教の担い手は、天皇・貴族や有力豪族層が主体であった。民衆の仏教の受け取り方は呪術的・現世利益的な段階にあり、宗教的な自覚を持って自らの寺院を建立するなどの宗教活動を行うには、まだまだ多くの時を要したのである。共同体の解体に伴い新たな支配原理に仏教などを導入し、民衆を動員し開発に着手したのは「殷富の百姓」「富豪の輩」と呼ばれる有力農民、有力豪族層であった。では、従来の神社や、新たな堂などで行われていた村落祭祀、またその共同体の必要としていた機能とはどのようなものがあったのであろうか。(註9) 人の生死や病あるいは祝い事などに係わる様々な場面で、時代的変遷を含めて宗教的施設がどの様にその機能を果たしていたのか、考古学的成果だけではなかなか明らかにし難いが、文献や民俗学などの成果も応用し、より具体的な豊かな村落景観を再現することが必要とされている。

註

- 註1 方形の溝に区画された遺構とともに、「宮田寺・寺・遺仏」などの墨書土器が出土している。
1990年『戸神諏訪遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 註2 1988年 吉田晴雄『日本古代の菩薩と民衆』吉川弘文館
- 註3 1985年 舟ヶ崎正孝『国家仏教変容過程の研究』雄山閣
- 註4 1992年『沼田北部地区遺跡群Ⅰ（戸神諏訪Ⅱ遺跡）』沼田市教育委員会『戸神諏訪Ⅱ遺跡』本報告書
- 註5 1972年 亀田隆之「古代における山林原野の問題—伐木の問題との関連で—」『続日本古代史論集』下巻
坂本太郎博士古希記念会編
- 註6 1985年 須田 勉「平安初期における村落内寺院の存在形態」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学考古学会創立35
周年記念考古学論集 早稲田大学出版部
- 註7 1921年 内田銀蔵「本邦租税の沿革」『日本経済史の研究』上 同文館
- 註8 註2に同じ
- 註9 1989年 宮瀧文二「古代村落の「堂」—『日本霊異記』に見る「堂」の再検討—」（本郷高等学校紀要『塔
影』第22集）村落内の堂の機能として旅人の宿泊、共同利用飲食器の保管、病者の居住などを指摘してい
る。

第6節 遺跡を中心とした地理学・地質学的考察

1. はじめに

戸神諏訪山遺跡は、沼田盆地北部に位置している。この沼田盆地は東西方向に底辺をもつ逆三角形をしている。沼田盆地の内部には河岸段丘が良く発達しており、大学生を対象とした地形学の巡検も多く行われているほどである。ここでは、これまでの研究成果に野外調査の成果を合わせ、この沼田盆地の地形と地質の概要を述べることにする。

2. 沼田盆地の地形と地質

(1) 沼田盆地を取り囲む山々

沼田盆地の周辺には、3つの第四紀火山が分布している。沼田盆地の南部には赤城火山(1827.6m)が位置している。赤城火山の形成史については、守屋(1968, 1983)の詳細な研究がある。その後、竹本(1984, 1985)は赤城火山北部のテフラ(火山砕屑物)の層序を明らかにした。また鈴木(1990)は赤城火山起源のテフラについて研究を行い、活動史を明らかにしている。

その形成史についてこれまでの研究成果をまとめると次のように考えられる。約40~50万年前に開始された赤城火山の活動の初期(~20万年前?)には、スコリア(色の黒っぽい軽石)や粘性の比較的小さい溶岩の流出が繰り返され、標高2500mを超えるような大規模な円錐形の山体が形成されたい(第356図-1~3)。その後大規模な山体崩壊が発生し、南東麓や南西麓に岩屑なだれ(高速の地すべり)が堆積した(第356図-4)。活動はさらに続き、比較粘性の大きな溶岩流が山頂の凹地を埋め、さらに鐘状の山体が形成された(第356図-5)。その後活動の休止期があり、山体の開析が進んだ(第356図-6)。約20?~4.5万年前には、比較的大量の軽石が噴出し、山頂部に成層火山が形成された(第356図-7)。この時期には糸井火砕流(10数万年前)や棚下火砕流(9~10万年前)と呼ばれる火砕流などが西方や沼田盆地の方向に流下した(竹本, 1985)。この時期の最後、約4.5万年前に発生した活動では、湯ノ口軽石(Ag-UP, 新井, 1962)の噴出に続いて、ガラ石質火砕流が発生した。この時期に山頂部にカルデラと呼ばれる凹地が形成された(第356図-8)。この凹地の内部には、現在の大沼が位置している。

約3.1~3.2万年前には大規模なテフラの噴出が行われ、鹿沼軽石(Ag-KP, 新井, 1962)が噴出した。この軽石は「鹿沼土」として、園芸に用いられている。その後カルデラの内部に粘性の大きな溶岩が噴出し、地蔵岳(標高1673.9m)や長七郎山(標高1578.9m)などの溶岩円頂丘群が形成された(第356図-9)。約2.5万年前に長七郎山の山頂部で小規模な噴火が行われ、小沼火口が形成された。この時に放出されたテフラは、小沼ラピリ(Ag-KLP, 守屋, 1968)と呼ばれている。

その後の噴火活動で噴出したテフラは、これまでのところ検出されていない。吾妻鏡の1251(建長3)年に「四月一九日上野国赤木嶽焼」という記録がある(村山, 1979)が、火山活動を示す

ものかどうかまだ明らかにされていない。

沼田盆地の西部に位置する子持火山や北西部に位置する武尊火山は、赤城火山に比較すると若干古い火山である。子持火山の活動史の中で比較の後期に噴出した火砕流堆積物を覆うローム層の中からは、約30-35万年前に北アルプスの火山から噴出した大町Aテフラ(APm, 中谷, 1972, 鈴木・早川, 1990)が認められる。このことから、子持火山の活動の主な時期は中期更新世と考えられる。武尊火山については現在までのところ年代学的な資料は得られていないが、溶岩の一部が沼田湖成層の下位に認められていること(竹本, 1985)や山体の開析の度合などから、おそらく子持火山同様に中期更新世以前に活動したものと推定される。

沼田盆地の北部には、おもに第三紀層から構成される山地が広がっている。第三紀層のうち大部分は、いわゆるグリンタフと呼ばれる水中に堆積した凝灰岩質堆積岩からなる。北部の山地の中で、大峰山(1254.8m)と三峰山(1122.5m)はテーブル状を呈し他の山とは異なる山容をもつ。これは、高温で厚い火砕流堆積物が固く溶結してできた溶結凝灰岩から構成されるために侵食作用から免れ、堆積面に近い地形を残しているためと考えられる。三峰山を構成する利根溶結凝灰岩からは、カリウム・アルゴン法により 5.0 ± 0.2 百万年前、 5.3 ± 0.3 百万年前(山口, 1987)、フィッシュ・トラック法により 6.9 ± 0.4 百万年前(槽谷・高橋, 1988)の値が得られている。これらの山体は、溶結凝灰岩から構成される急斜面とその下方の若干緩い斜面から構成されている。緩い斜面のうち、谷筋には岩塊流と呼ばれる堆積地形が認められる(鈴木, 1983)。なお沼田盆地の西方には、花こう岩類の分布も認められる。田代山(1351.1m)一帯がその地域である。

(2) 沼田盆地

沼田盆地の河岸段丘の形成史については、古くより調べられてきた(西村, 1940, 新井, 1962, 久保, 1968など)。最近では竹本(1985)により詳細な火山灰編年学的手法を用いた研究が行われた。それによれば沼田盆地の内部に発達する河岸段丘は、高位より沼田面、追貝原面、伊閑面、平出面、貝野瀬Ⅰ面、貝野瀬Ⅱ面、完新世段丘面群に区分される(第357図)。

沼田面は沼田盆地内で最も広い面積を占める段丘面で、沼田市市街地中心部はこの面の上に広がっている。この段丘を構成する砂礫層の厚さは10~100m(新井, 1986)で、堆積段丘である。その離水年代は地点によって異なるが、約11~8万年前頃と推定されている。伊閑面も堆積段丘で、約5万数千年前に離水している。平出面は約4万数千年前に離水した侵食段丘面である。貝野瀬Ⅰ面は約2万数千年前に離水した堆積段丘で、貝野瀬Ⅱ面は約1万数千年前までに貝野瀬Ⅰ面が侵食されてできた堆積侵食段丘である。完新世段丘面群についての詳細な研究はこれまで行われていない。

3. 戸神諏訪Ⅲ遺跡の地形とその周辺のテフラ

戸神諏訪Ⅲ遺跡は、竹本(1984, 1985)が伊閑面と呼んだ段丘面上に位置している(新井, 1986)。この段丘は前述の通り、約5万数千年前に離水した段丘面である。沼田盆地とその周辺に分

布する後期更新世以降のテフラの代表的な露頭のテフラ柱状図を、第358図に示した。なお竹本(1985)は関越自動車道上越線の建設工事の際に多数のテフラについての詳細な記載を行ったが、現在ではそれらの露頭は露出してない。従って多くのテフラについての再記載は難しい状況にある。ここでは、検出が比較的容易であったテフラについて、下位より記述する。

御岳第1軽石(Pm-1)：約7～9万年前に中部地方の御岳火山から噴出したテフラ(小林ほか, 1967, 町田・鈴木, 1976)。中部地方から北関東地方、さらに東北地方南部に分布する重要な広域テフラである。沼田盆地周辺では、層厚数cmの黄色細粒火山灰層として認められる。

赤城-追貝軽石(Ag-OP)：赤城火山から噴出した軽石。片品村追貝原では、層厚33cmの黄色軽石層として認められる。

中之条ラピリ(JL)：約5万年前に堆積した青灰色の発泡のよい岩片からなるテフラ(新井, 1962, 早田, 1990)。片品村追貝原での層厚は10cm。詳細について不明な点が多いが、浅間火山が給源である可能性が大きい。

北橋スコリア(HkS)：約5万年前に堆積した赤褐色のスコリア層(早田, 1990)。赤城村寺後での層厚は、8cm。本テフラの詳細については不明な点が多いが、浅間火山が給源である可能性が大きい。

榛名-八崎軽石層(Hr-HP)：約4.1-4.4万年前に榛名火山から噴出した黄色軽石層。赤城村寺後での層厚は、27cm。新里村入ノ沢遺跡では本テフラの直上および直下から石器が検出されている(関矢, 1988)。

榛名-八崎火山灰(Hr-HA)：約3万年前に榛名火山から噴出したテフラ。赤城村寺後では、下部の黄白色細粒火山灰層(層厚3cm)と上部の白色軽石層(層厚8cm)から構成される。

始良Tn火山灰(AT)：約2.1～2.2万年前に南九州の始良カルデラから噴出した広域テフラ。沼田盆地周辺では、いわゆる暗色帯の直上に層厚数cmの黄褐色細粒火山灰層として認められる。

浅間-板鼻褐色軽石群(As-BP Group)：約1.6～2.1万年前に浅間火山から噴出したテフラ群(新井, 1962, 町田ほか, 1984)。赤城村寺後では間にローム層を挟んで少なくとも3層のテフラが認められる。いずれも橙色軽石や黒色岩片に富むテフラである。沼田盆地以北では、これらのうちの1層が広く分布している。沼田北部工業団地遺跡に近い沼田市横塚町では、層厚21mの橙色軽石に富むテフラとして認められる。

浅間-白糸軽石(As-SP)：約1.5万年前に浅間火山から噴出したテフラ(町田ほか, 1984)。片品村追貝原では層厚4cmの黄色軽石層として認められる。以前は約1.3-1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間-板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田ほか, 1984)と混同されていたが、As-YPの軽石と比較すると珪晶に乏しく、また軽石の角が取れている特徴がある。

浅間-草津黄色軽石(As-YPk)：約1.1～1.2万年前に浅間火山から噴出したテフラ(新井, 1962, 町田ほか, 1984)。大峰山麓の新治村大峰では、黒ボク土直下、ローム層の最上部に層厚6cmの黄色

軽石層として認められる。

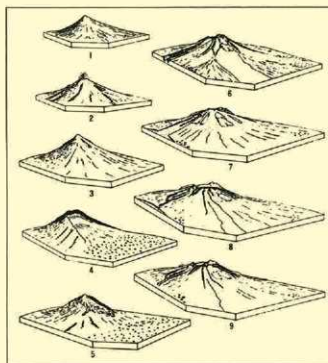
榛名ー二ツ岳降下火山灰層 (Hr-FA) : 6世紀初頭に榛名火山から噴出した降下テフラ (新井, 1979, 坂口, 1986)。赤城村寺後では後述する榛名ー二ツ岳降下軽石層の直下に層厚 3 cm の黄灰色細粒火山灰層として認められる。

榛名ー二ツ岳降下軽石層 (Hr-FP) : 6世紀中葉に榛名火山から噴出した降下軽石層 (新井, 1962, 坂口, 1986)。川場村中野では層厚 33 cm の白色軽石層として認められる。また白沢村岩室では、良好な Hr-FP が観察できる (第 359 図)。ここで観察される Hr-FP は 8 層に区分することができる。最下位の地層は層厚 4 cm の灰色軽石層である。その上位には成層した比較的細粒の白色軽石層 (層厚 38 cm)、粒径の大きい成層した白色軽石層 (層厚 22 cm)、成層した比較的細粒の白色軽石層 (層厚 30 cm)、赤褐色岩片に富む軽石層 (層厚 1 cm)、成層した比較的細粒の白色軽石層 (層厚 14 cm)、赤褐色岩片をわずかに含む軽石層 (層厚 1 cm)、比較的細粒の白色軽石層 (層厚 4 cm) の連続が認められる。

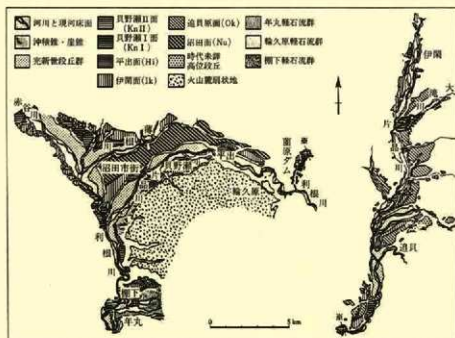
これらのテフラのほかにも、1108 (天仁元) 年に浅間火山から噴出した浅間 B テフラ (As-B, 新井, 1979) や、1783 (天明 3) 年に浅間火山から噴出した浅間 A 軽石 (As-A) をはじめとする多くのテフラが分布しており、今後の発掘調査の際に検出される可能性がある。

4. ま と め

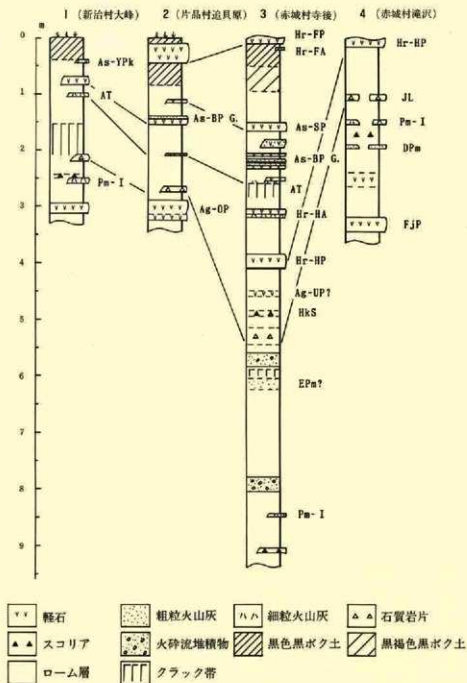
沼田盆地には顕著な河岸段丘の地形が発達している。この沼田盆地とその周辺には後期更新世に噴出した多くの示標テフラが分布している。これらの示標テフラを利用することにより、今後考古学の分野において詳細な編年学的研究を展開できる可能性が秘められている。



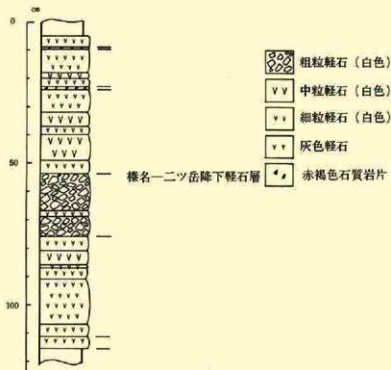
第356図 赤城火山の形成史(守屋, 1983)



第357図 沼田盆地の地形面区分図(新井, 1986)



第358図 沼田盆地周辺の後期更新世のテフラ柱状図



第359図 白沢村岩室の標名一二ツ岳降下軽石層の層序

文献

- 1962 新井房夫「関東盆地北西部地域の第四紀編年」群馬大学紀要自然科学編10, p.1-79.
- 1979 新井房夫「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ」考古学ジャーナル, No157, p.41-52.
- 1986 新井房夫「沼田盆地」日本の地質「関東地方」編集委員会編「関東地方」p.179-180.
- 1968 久保誠二「群馬県沼田盆地に分布する礫層及び湖成層とその堆積構造」地質学雑誌74, p.499-509.
- 1988 樽谷正雄・高橋聖紀「群馬県北部月夜野町地域, 中新世凝灰岩の放射年代」地質学雑誌94, p.129-132.
- 1967 小林国夫・清水英樹・北沢和夫・小林武彦「御岳火山第一浮石層」地質学雑誌73, p.291-308.
- 1972 中谷 進「大町テフラとテフロクロロジー」第四紀研究11, p.305-317.
- 1976 町田 洋・新井房夫「広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-」科学46, p.339-347.
- 1971 町田 洋・鈴木正男「火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年-フィッション・トラック法による試み」科学41, p.263-270.
- 1984 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫「テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ-」古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 1968 守屋以智雄「赤城火山の地形及び地質」前橋営林局, 65p.

- 1983 守屋以智雄「日本の火山地形」東大出版会、135p.
- 1979 村山 磐「日本の火山II」古今書院、276p.
- 1940 西村嘉助「利根川上流の河岸段丘」地理学評論16, p.283-290.
- 1986 坂口 一「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」群馬県教育委員会編『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』, p.103-119.
- 1988 関矢 晃「群馬県勢多郡新里村入ノ沢遺跡出土の前期旧石器」考古学雑誌74, p.99-104
- 1983 鈴木郁夫「群馬県大峰山の岩塊流」日本地理学会予稿集, No23, p.60-61.
- 1990 鈴木毅彦「テフロクロノジーからみた赤城火山最近20万年間の噴火史」地学雑誌99, p.182-197.
- 1990 鈴木毅彦・早川由紀夫「中期更新世に噴出したAPmテフラ群の層位と年代」第四紀研究29, p.105-120.
- 1990 早田 勉「群馬県の自然と風土」群馬県史, 通史編1 p.35-129.
早田 勉「浅間火山の生い立ち」佐久考古通信 No53, p.2-7.
- 1991 竹本弘幸(1984)「片品川流域の河岸段丘」日本地理学会予稿集25, p.64-65.
- 1985 竹本弘幸「立地」群馬県昭和村教育委員会編『中棚遺跡・長井坂遺跡』 p.8-13.
- 1987 山口 靖「鬼怒川流紋岩類の分布と時代」日本地質学会第94回学術大会講演要旨 p.430.

発掘報告書抄録

フリガナ	トカミスワサンイセキ
書名	戸神諏訪III遺跡
副書名	沼田北部工業団地埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	岡本範之他
編集機関	群馬県沼田市教育委員会
編集機関所在地	〒378 群馬県沼田市西倉内町780
発行年月日	1993年3月26日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
トカミスワサンイセキ 戸神諏訪III	沼田市町田町 字土塔原	10206		36°39'54"	139°3'12"	1989年 5月1日 ～ 1989年 12月4日	26,000㎡	沼田北部 工業団地

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
戸神諏訪III	集落跡	縄文	土坑	9軒	縄文土器 石器	磨製石鏃 黒書土器「南院」 帯金具
			竪穴住居跡	28軒	弥生土器・土師器	
			円形周溝墓	1基		
	平安	平安	土坑	3基		
			方形周溝溝	1基		
			竪穴住居跡	72軒	土師器・須恵器	
			掘建柱建物跡	13棟	灰釉陶器	
			櫓列	5基		
			溝	3条		
			土坑	6基		

写 真 图 版

5号土坑



12号土坑



13号土坑



14号土坑



17号土坑



18号土坑



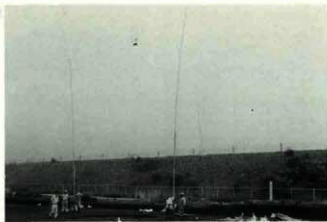
19号土坑



20号土坑



空中写真撮影風景



26号住居



南から

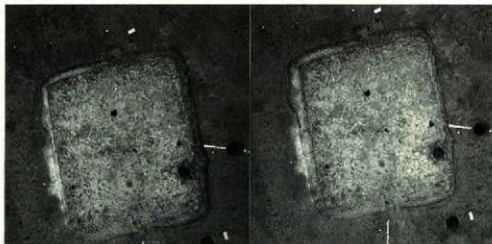


遺物出土状態



北から

34号住居



34号住居



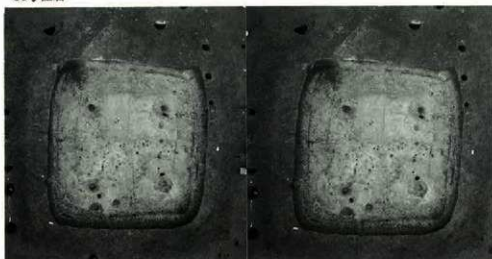
遺物出土状態

36号住居



遺物出土状態

36号住居



48号住居

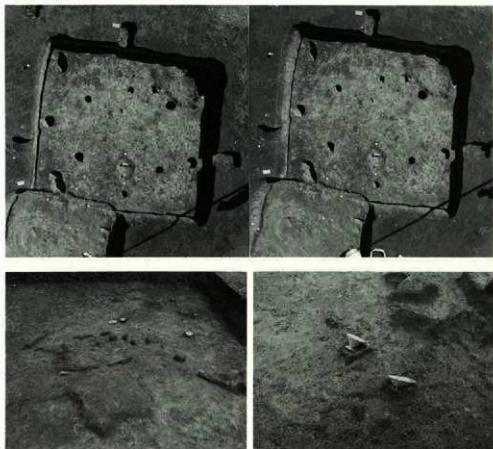


炉（南から）



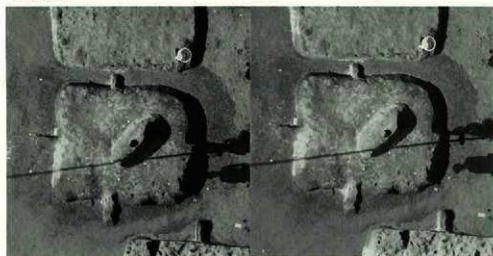
遺物出土状態

51号住居



遺物出土状態

52号住居



53号住居



遺物出土状態

57号住居



57号住居



遺物出土状態

58号住居



炉 (No. 3)

遺物出土状態

62号住居



梁



炭化材出土状態

64号住居



64号住居



遺物出土状態

65号住居



炭化材及び遺物出土状態

66号住居

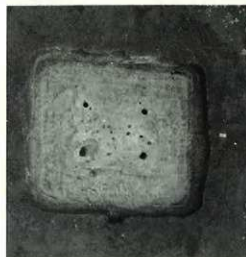


北から



遺物出土状態

67号住居

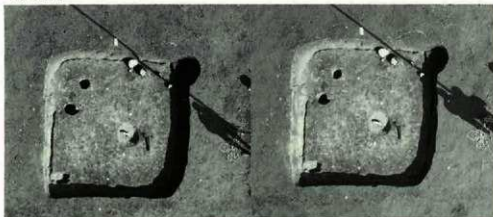


67号住居



遺物出土状態

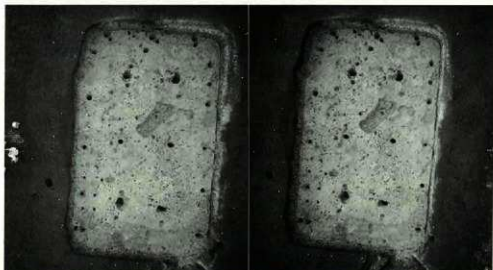
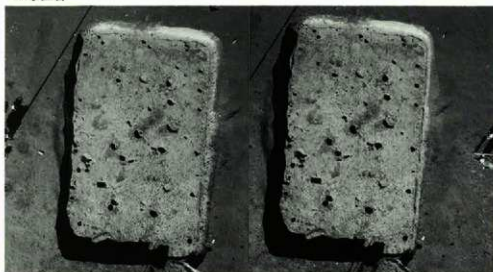
68号住居



69号住居



69号住居



卵



遺物出土状態

72号住居

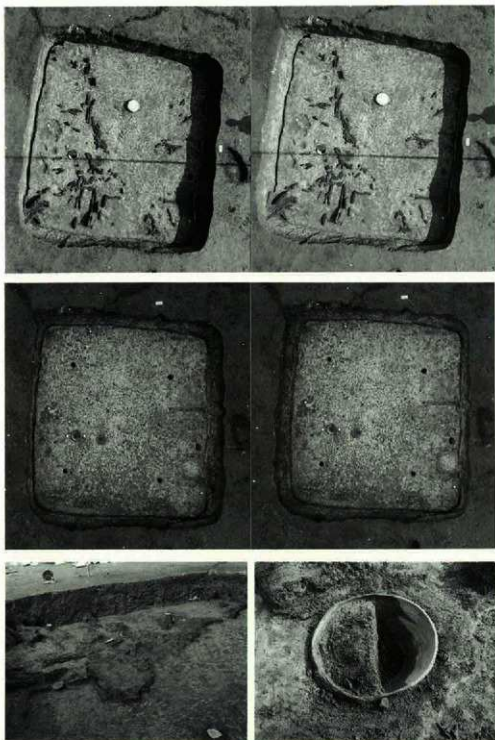


遺物出土状態

73号住居

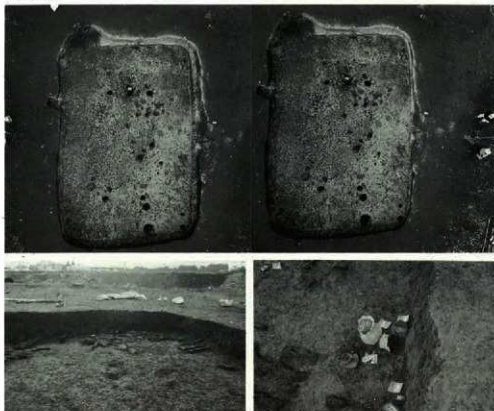


73号住居



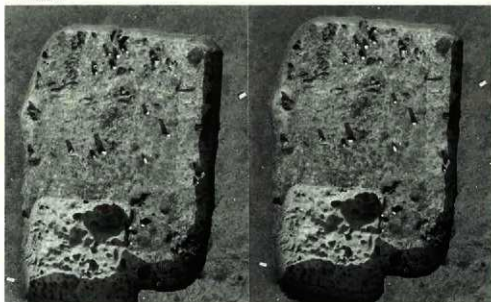
遺物出土状態

78号住居



遺物出土状態

79号住居



79号住居



炉



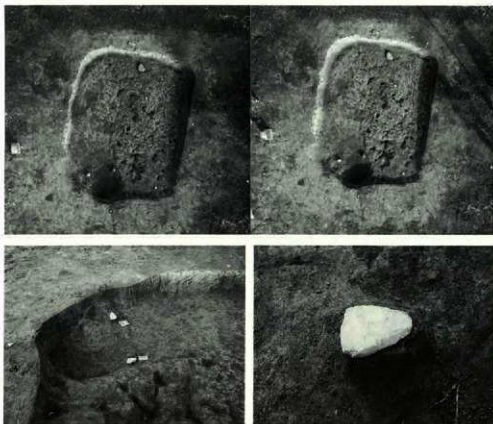
遺物出土状態

81号住居



遺物出土状態

84号住居



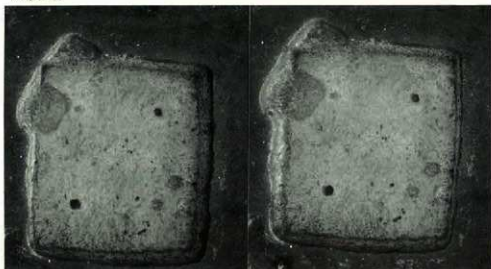
遺物出土状態

85号住居



北から

90号住居



灯

遺物出土状態

91号住居



91号住居

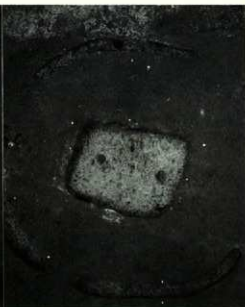
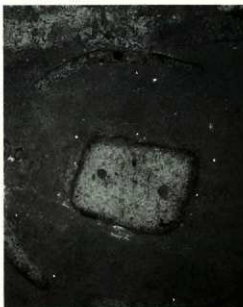


西から



伊

1号円形周溝墓

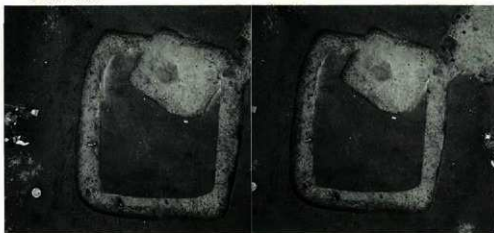


西から



遺物出土状態

1号方形周溝墓

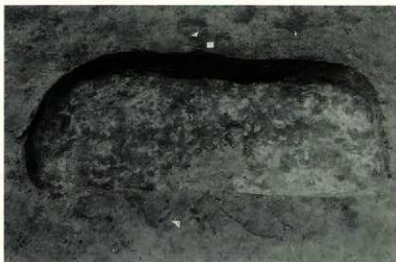


遺物出土状態



土層状態（南から）

A-1号土坑



A-2号土坑



遺物出土状態

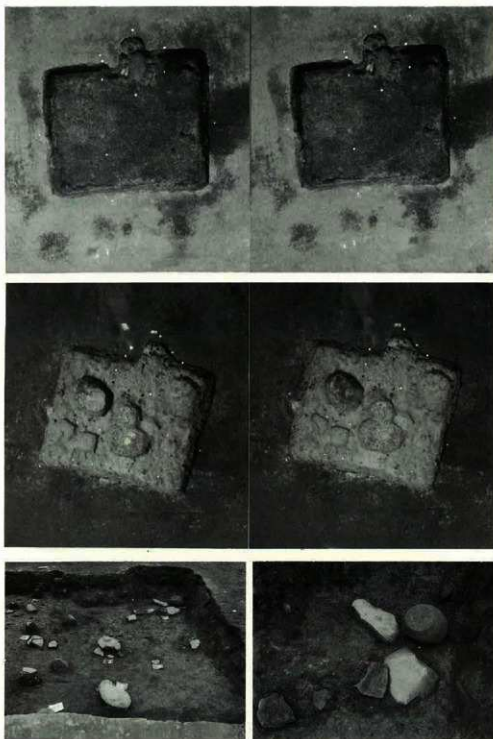


土層状態（東から）

C-15号土坑

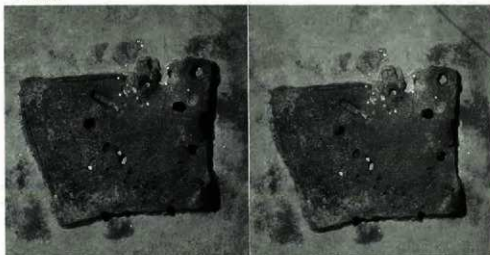


1号住居



遺物出土状態

2号住居

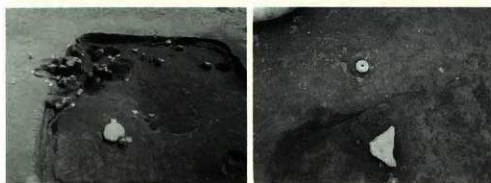


遺物出土状態

3号住居

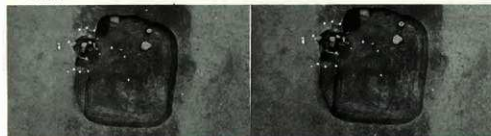


3号住居



遺物出土状態

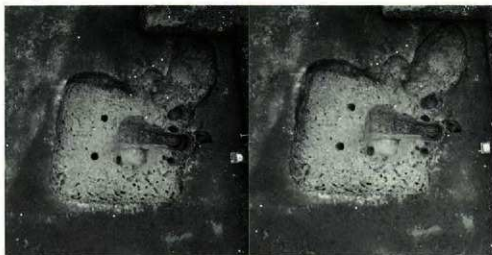
4号住居



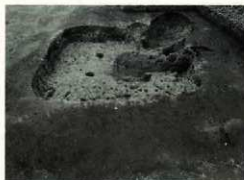
カマド

遺物出土状態

5号住居

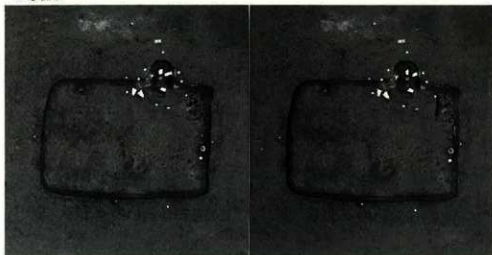


遺物出土状態

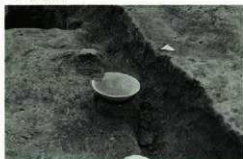


掘方及び6号土坑

6号住居



6号住居



遺物出土状態



掘方（西から）

7号住居



西から

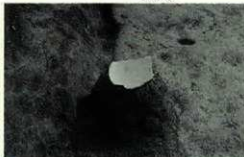
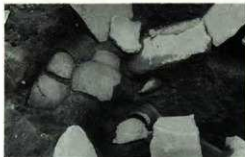


遺物出土状態

8号住居

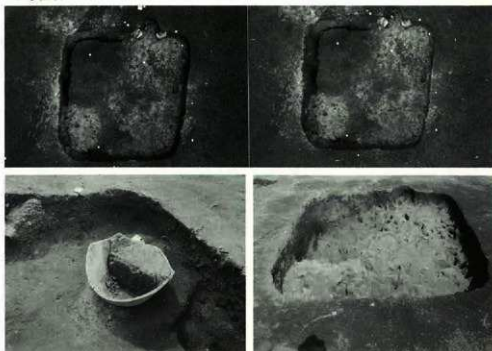


西から



遺物出土状態

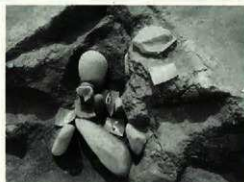
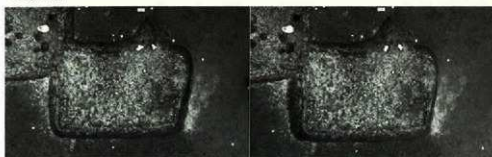
9号住居



遺物出土状態

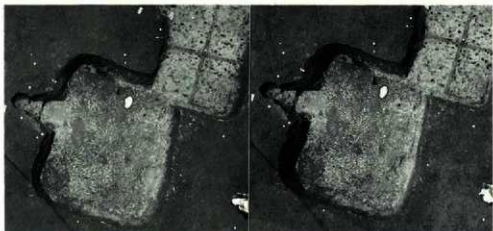
掘方

10号住居



カマド内遺物出土状態

11号住居



カマド



遺物出土状態

12号住居



西から

12号住居



遺物出土状態

13号住居



西から



遺物出土状態

14号住居



西から



遺物出土状態

15号住居



西から

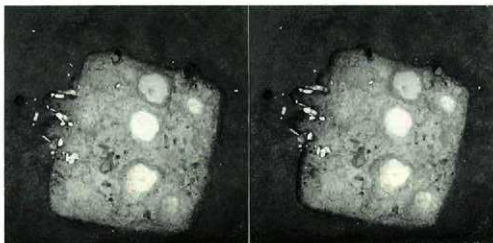


遺物出土状態

16号住居

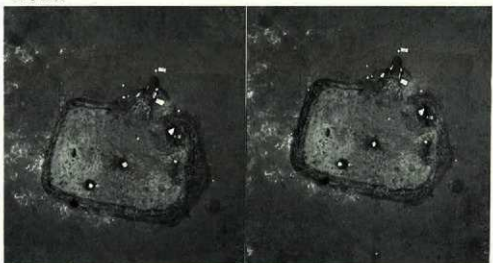


16号住居



遺物出土状態

17号住居



17号住居



カマド



遺物出土状態

18号住居



遺物出土状態

19号住居



カマド



遺物出土状態

19号住居



西から

20号住居



西から

21号住居



カマド

21号住居



西から

22号住居



西から

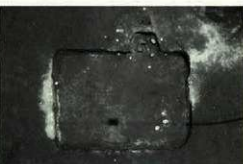


カマド



遺物出土状態

23号住居



カマド



遺物出土状態

24号住居



西から



カマド



遺物出土状態

25号住居



北から

遺物出土状態



27号住居



カマド



遺物出土状態

28号住居



29号住居



西から

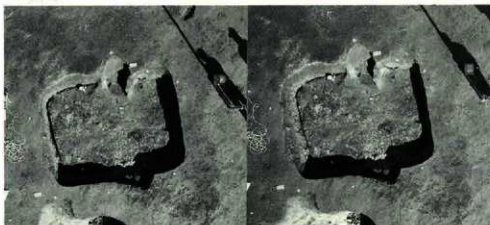


カマド

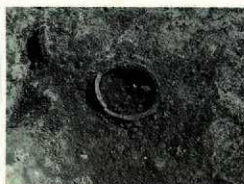


土層状態

30号住居



カマド



遺物出土状態

31号住居



31号住居



カマド

遺物出土状態

32号住居



西から

カマド

33号住居



33号住居



カマド

遺物出土状態

35号住居



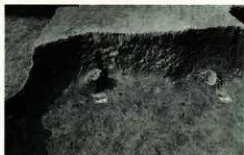
35号住居



カマド

掘方（西から）

37号住居



カマド

遺物出土状態

38号住居



38号住居



カマド



遺物出土状態

39号住居

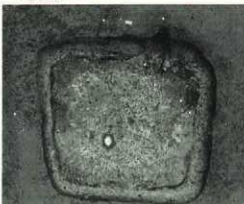


カマド

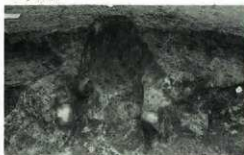


遺物出土状態

40号住居



40号住居



カマド



遺物出土状態

41号住居



カマド



遺物出土状態



カマド



遺物出土状態

43号住居



西から



遺物出土状態

45号住居



空中写真



遺物出土状態

47号住居



47号住居



カマド



遺物出土状態

49号住居



カマド



遺物出土状態

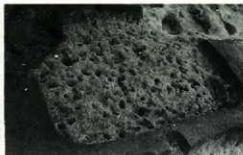
50号住居



50号住居



カマド



竈方 (西から)

54号住居



カマド



遺物出土状態



55号住居

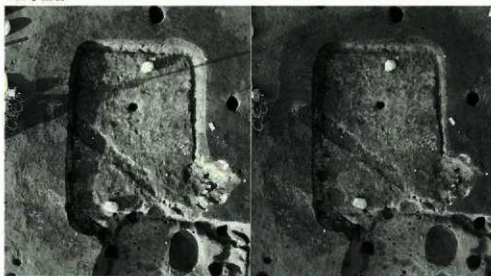


西から



カマド

56号住居

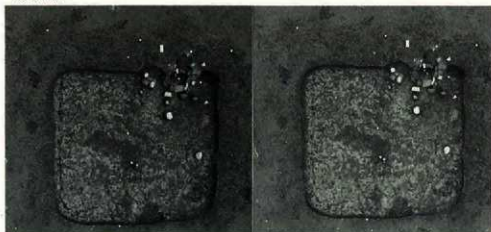


西から



东から

59号住居



59号住居



カマド

掘方（北から）

60号住居



60号住居



カマド



遺物出土状態

61号住居



カマド



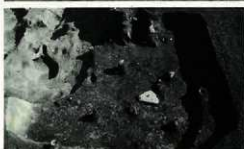
遺物出土状態

63号住居



西から

71号住居



西から



カマド

74号住居



西から



カマド

75号住居



西から



遺物出土状態

76号住居

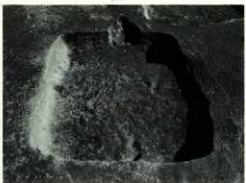


カマド

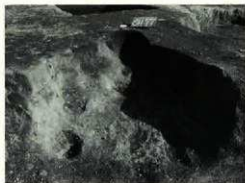


遺物出土状態

77号住居

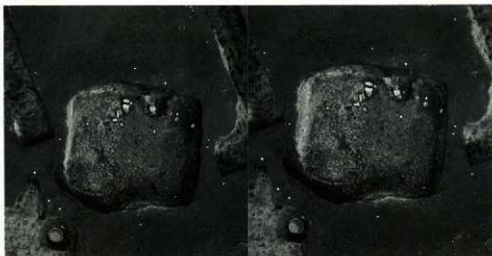


西から



カマド

82号住居



カマド



西から

83号住居



83号住居



86号住居

カマド

遺物出土状態



87号住居

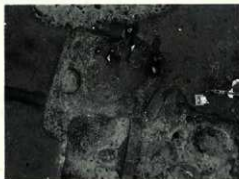
西から



西から

カマド

88号住居



88号住居



カマド



遺物出土状態

89号住居



西から



カマド

92号住居



カマド

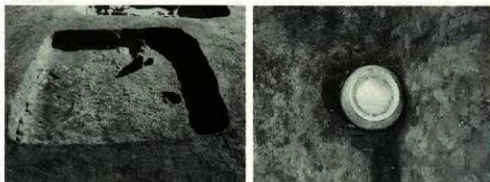


遺物出土状態

92号住居



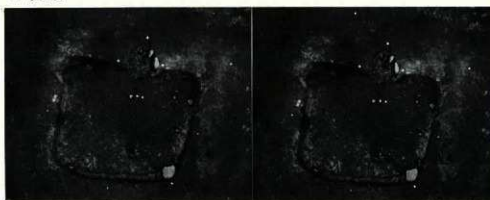
93号住居



西から

遺物出土状態

94号住居



94号住居



カマド

遺物出土状態

95号住居



カマド

遺物出土状態

96号住居



96号住居



カマド



西から

97号住居



カマド



遺物出土状態

98号住居



西から



カマド

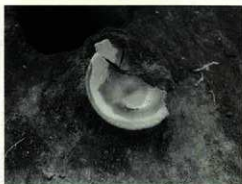
99号住居



100号住居



カマド



遺物出土状態

1号掘立



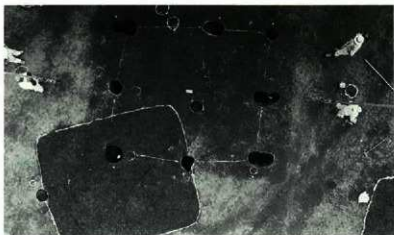
2号掘立



3号掘立



4号掘立



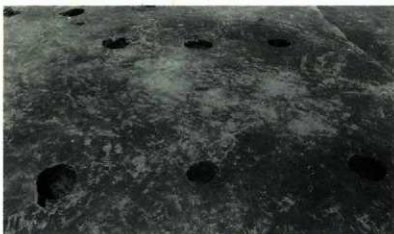
5号掘立



6号掘立



7号掘立



8号掘立



9号掘立



10号掘立



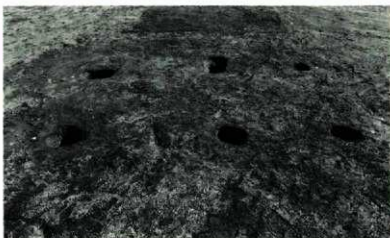
11号掘立



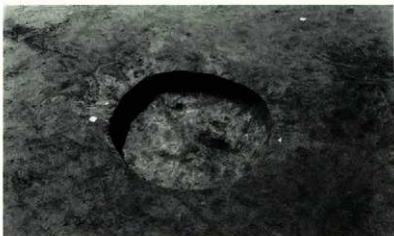
12号掘立



13号掘立



A-3 号土坑



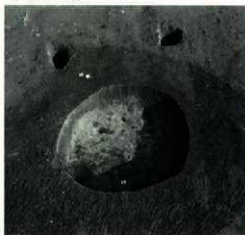
A-7 号土坑



A-8 号土坑



C-10号土坑



C-9 号土坑



C-16号土坑



2号溝(上が北)1号溝



2号溝(上が北)



(上が西)



溝 遺物出土状態



1号溝



2号溝



2号溝



3号溝

櫛列



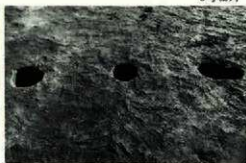
2号櫛列



3号櫛列



4号櫛列



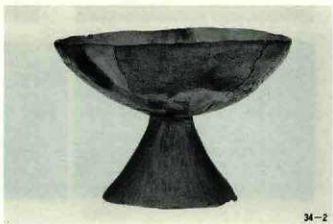
5号櫛列

PL.68

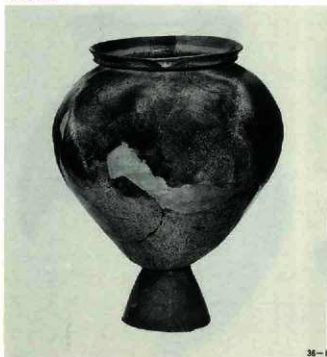
26号住居



34号住居



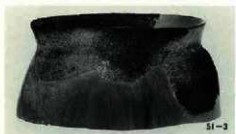
36号住居



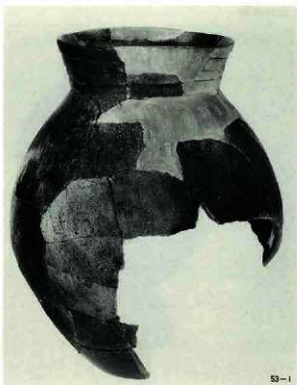
51号住居



48号住居

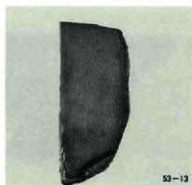


53号住居





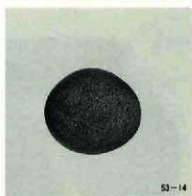
53-3



53-13



53-10

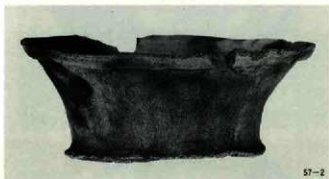


53-14

57号住居



57-1



57-2



57-3



57-8



57-7

58号住居



57-10



57-11



58-1



57-12



58-2



58-3



58-4

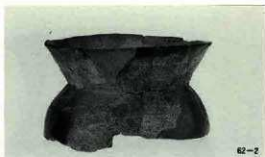


58-5



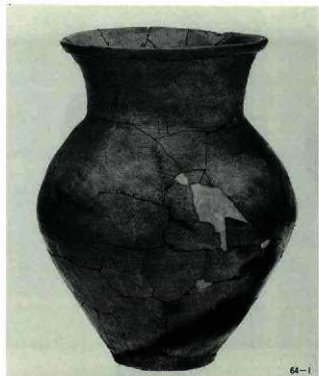
58-6

62号住居

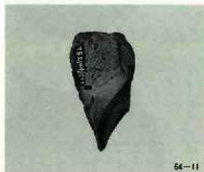


64号住居





65号住居



66号住居



66号住居





65-4



66-7

67号住居



67-8



67-9



67-1



67-6



67-7



67-2



67-3

68号住居



69号住居





69-2



69-9

72号住居



72-4



72-5



69-12



72-3

73号住居



72-1



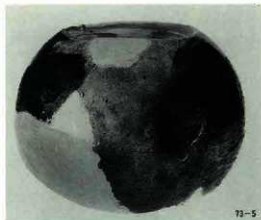
73-1



73-3



73-6



73-5



73-7



73-4



73-2



73-10



73-11



73-12

78号住居



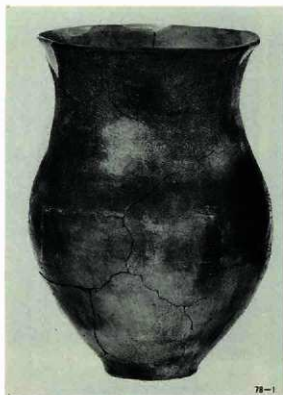
78-5



78-3



78-4



79号住居





79-4



79-11



79-7

81号住居

80号住居



80-1



81-1



81-2

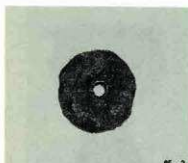
84号住居



84-1



84-2



85-2

85号住居



85-1



85-3



90-5

90号住居



90-1



90-6



90-3



90-4



90-2

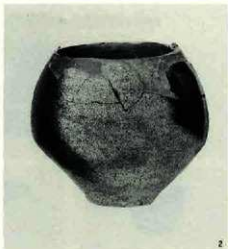
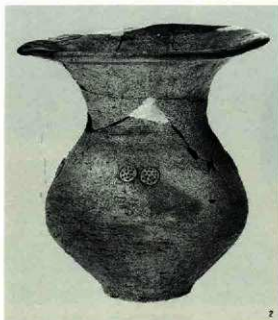
1号円形周溝墓



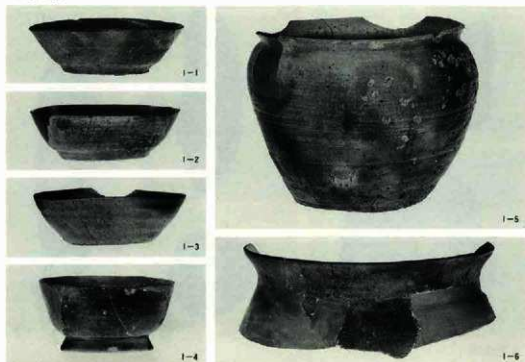
1号方形周溝墓



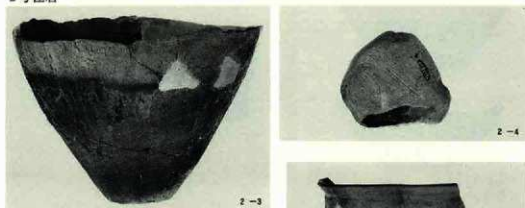
2号土坑



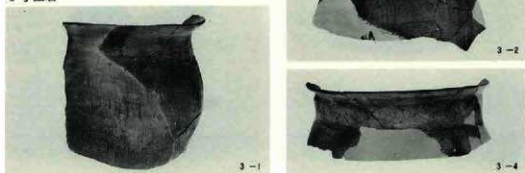
1号住居



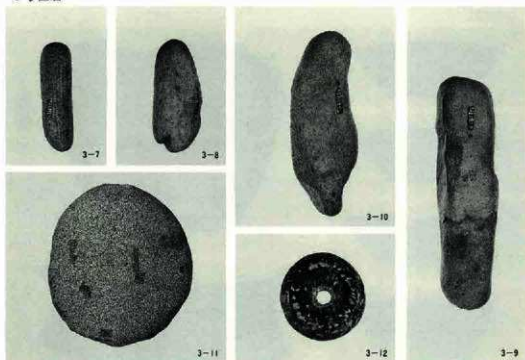
2号住居



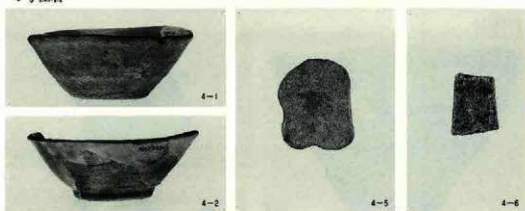
3号住居



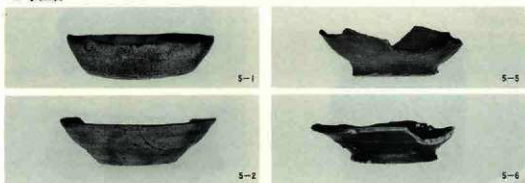
3号住居



4号住居



5号住居





5-8



5-11



5-10

6号住居



6-1



5-9



6-3



6-2

7号住居



7-1



7-3



7-2



7-4

8号住居



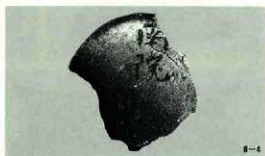
8-1



8-2



8-3



8-4



8-5



8-6



8-7



8-8

9号住居



9-1



9-2



9-3



9-4



9-5

10号住居

11号住居



10-2



11-1



11-1



11-8



11-5



11-6



11-10

12号住居



12-1



12-3



12-2



12-3



12-4

13号住居



13-1



13-2

14号住居



14-1



14-3

15号住居



15-1



15-2



15-3



15-4



15-5



15-6



15-7



15-11



15-9



15-12

16号住居



16-1



16-4



16-5



16-7



16-8



16-13



16-14



16-15



16-11



16-12

17号住居



17-4



18-5

18号住居



18-3



18-4



19号住居

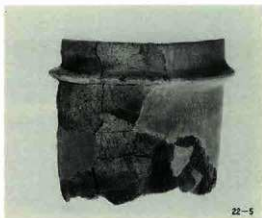


21号住居



22号住居





22-5

23号住居



23-1



23-3

24号住居



24-1



24-2



22-6



23-6



23-7

25号住居



25-1



25-2



25-3



25-4



25-5



25-6

27号住居



27-1



27-6



27-7



25-11



25-12

28号住居



28-1



28-2



30号住居

31号住居





31-10



31-13



31-11



31-14



31-12



31-17

32号住居



32-1



32-3



32-5



32-4



32-7



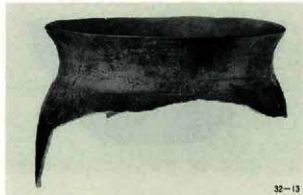
32-9



32-10



32-14



32-13

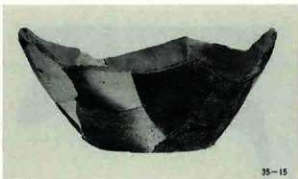
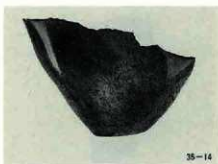


32-15

33号住居



35号住居



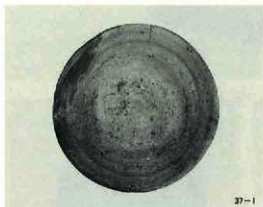
37号住居



37-1



37-2



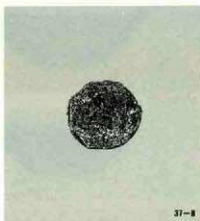
37-1



37-3

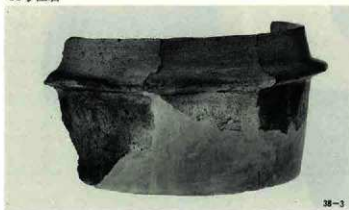


37-7



37-8

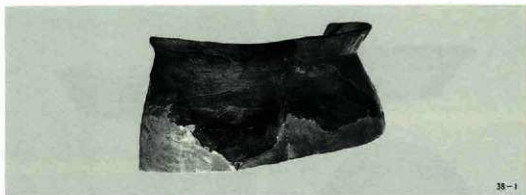
38号住居



38-3



38-5



38-1

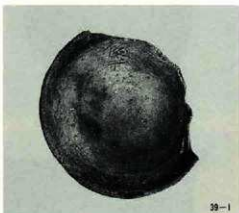
39号住居



39-1



39-2



39-1

40号住居



40-1



40-2



40-3



40-7

41号住居



41-1



41-6

43号住居



43-1



43-2



43-5



43-3



43-6



43-8

45号住居



45-1



45-6



45-2



45-7



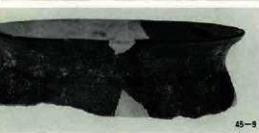
45-3



45-8



45-5



45-9



47-1



47-2



47-4



47-5



47-6



47-19



47-14



45-10



47-7



47-8



47-9



47-15



47-17



47-21



47-18



47-16



47-23

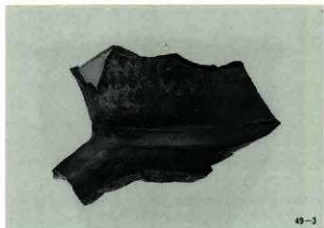
49号住居



49-1



47-24



49-3



49-4

54号住居

50号住居



54-1



54-2



54-3



54-4



54-5

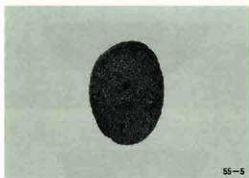


50-2

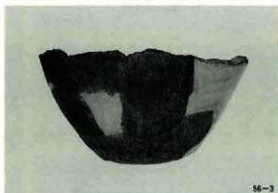


54-6

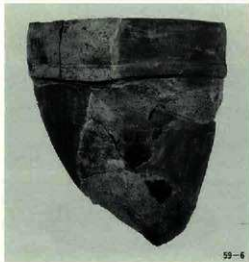
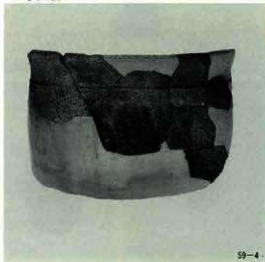
55号住居



56号住居



59号住居





60-2



60-7



60-3



60-8



60-6



60-12



60-13



60-20



60-15



60-21



60-16



60-22



60-23



60-17

61号住居



63号住居



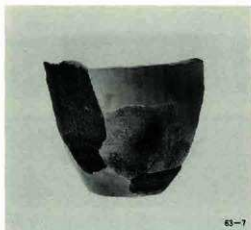
71号住居



71-2



71-3



63-7



71-4



71-5



71-6



71-7



71-8



71-12



71-10

74号住居



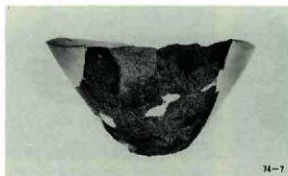
74-1



74-2



74-4



74-7

76号住居



76-1



76-2



76-3



76-4



76-5



76-6

82号住居



82-1



82-2



82-3



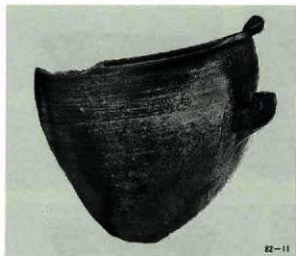
82-7



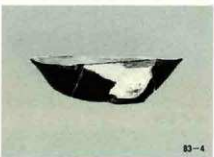
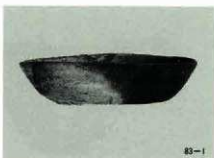
82-8



82-10



83号住居





83-9

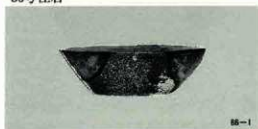


83-10



83-11

86号住居

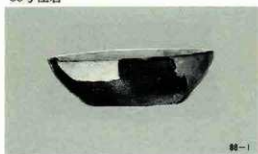


86-1



86-2

88号住居



88-1



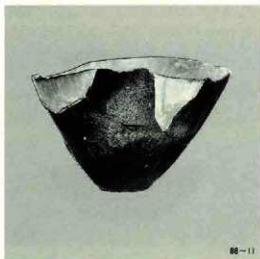
88-4



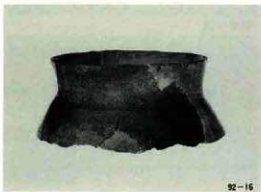
88-3



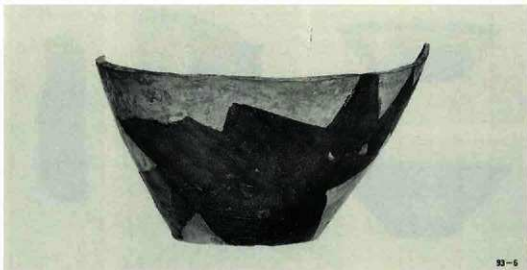
88-7



88-11



93号住居



94号住居



94-2



94-6

96号住居



96-1

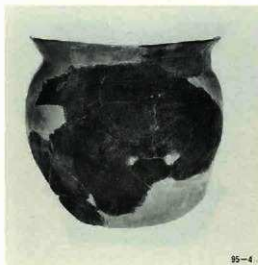
95号住居



95-1



95-2



95-4

97号住居



97-1



97-2



97-6



97-7



97-4

100号住居



97-5



100-2



100-6



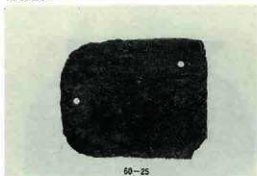
100-3



100-7



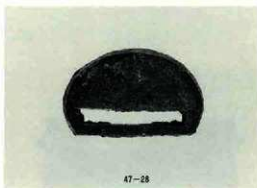
100-4



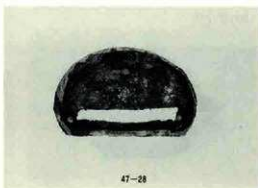
60-25



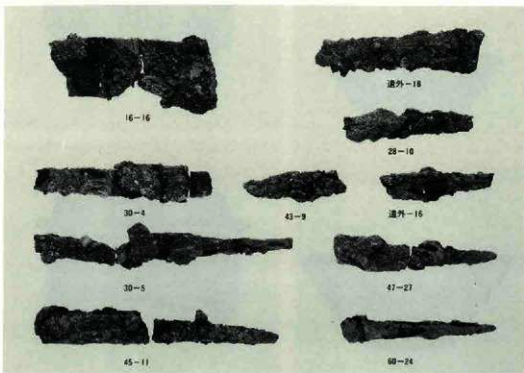
60-25



47-28



47-28



16-16

道外-18

28-10

30-4

43-9

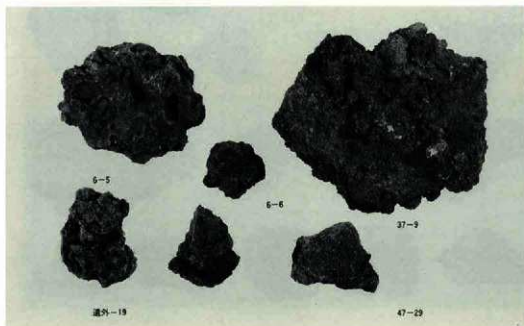
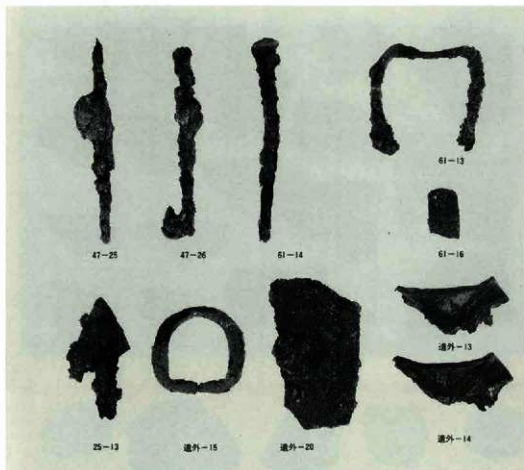
道外-15

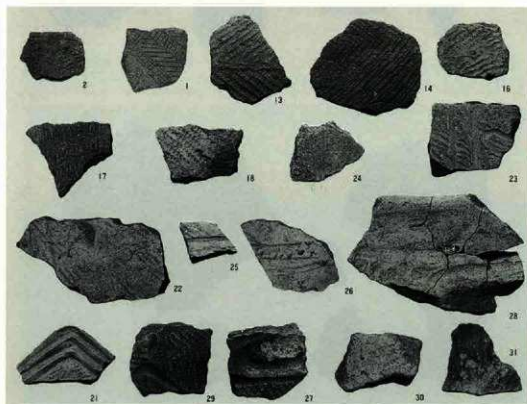
30-5

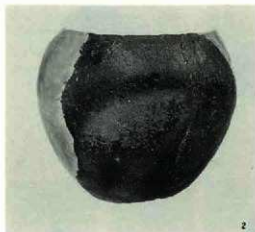
47-27

45-11

60-24









戸神諏訪Ⅲ遺跡

印刷 平成5年3月22日

発行 平成5年3月26日

編集・発行 沼田市教育委員会

沼田市西倉内町780

☎ (0278) 23-2111

印刷 朝日印刷工業株式会社

前橋市元総社町67

☎ (0272) 51-1212





